

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第175集

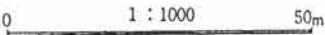
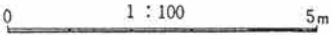
小島田八日市遺跡

主要地方道藤岡大胡線道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

1994

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

『小島田八日市遺跡』正誤表

頁	行	誤	正
例言14		関口博之	関口博幸
15	第9図		

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

資	No. 97-2612	平成9年12月17日	化財	01-353
			保管	627
				(5)

KO JIMA DA YOU KA ICHI
小島田八日市遺跡

主要地方道藤岡大胡線道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

1994

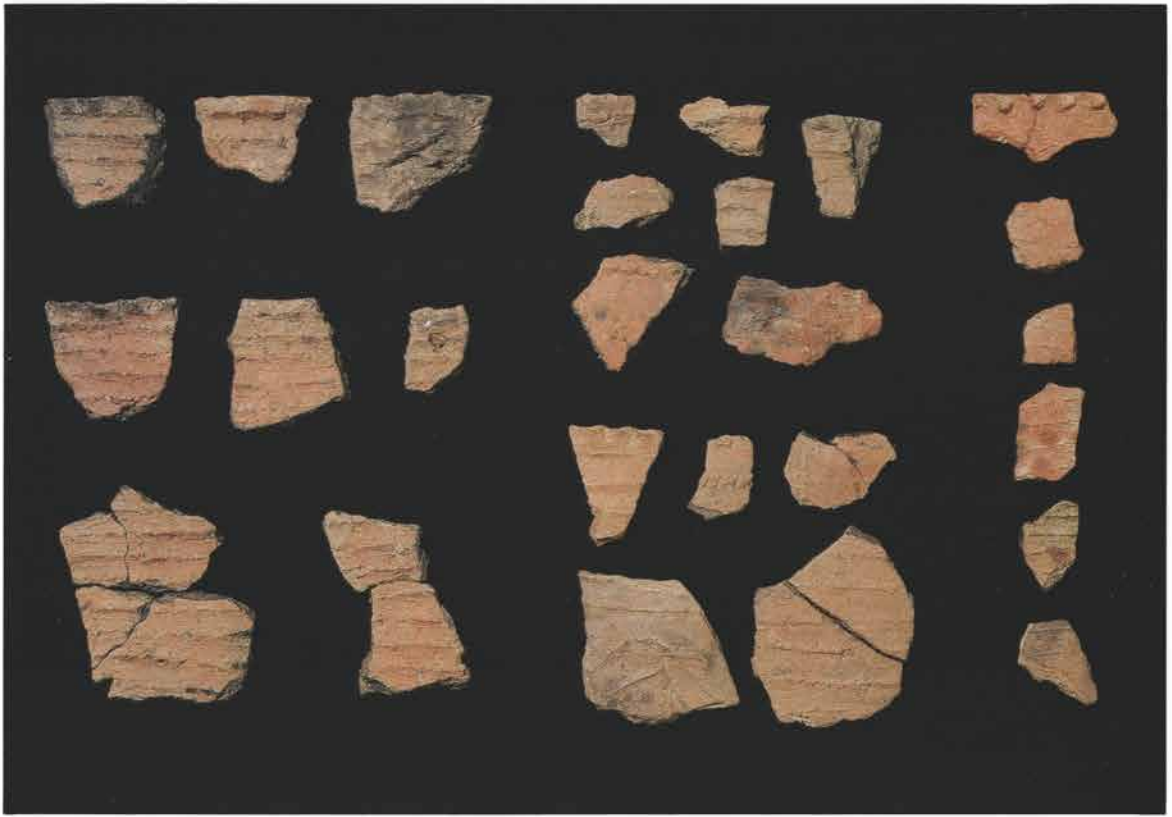
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡地遠景（南より）



遺跡地遠景（真上より）



隆起線文土器群



草創期石器群

序

一般国道50号線と主要地方道藤岡・大胡線が交差する前橋市小島田地区は、交通渋滞が激しく、それを解消するために関係機関により道路拡幅工事が行われました。

主要地方道藤岡・大胡線拡幅工事の対象となった地域は、赤城山から続く台地末端の地であり、付近に県内では最も古い板碑の一つである仁治元(1240)年の板碑があり、この時期の埋蔵文化財またその他の時代の埋蔵文化財包蔵地もあります。そこで拡幅工事に伴い、埋蔵文化財発掘調査が群馬県土木部より当事業団に委託され、平成4年度に調査を行いました。

調査した成果は、今年度、調査報告書を刊行するための整理作業を行い、これが終了しましたので、ここに「小島田八日市遺跡」の発掘調査報告書を上梓することにしました。本報告書には、県内でも確認されている遺構が希な縄文時代草創期の土壌と微隆起線文土器、石器等が多数報告されています。また、中世関係の遺構・遺物も報告されています。

発掘調査から調査報告書刊行まで、群馬県土木部道路建設課、前橋土木事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者にはご協力を賜りました。これら関係者の皆様には衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が、我が国縄文時代草創期の研究並びに地域の歴史解明に十分活用されることを願い序とします。

平成6年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は、主要地方道藤岡・大胡線道路改良事業に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺跡は前橋市小島田町八日市526-1他、筑井町八日市に位置する。
3. 遺跡名称は遺跡所在地の大字名・小字名を併記する仕方である。本遺跡は一部筑井町にも入るが、そのほとんどは小島田町分であり、かつ小字は八日市であるため、「小島田八日市遺跡」と呼称した。
4. 事業主体 群馬県
5. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 平成4年6月15日～平成4年12月1日
平成5年11月17日～平成5年12月7日
7. 調査組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
事務局 平成4年度 邊見長雄 近藤 功 佐藤 勉 神保侑史 巾 隆之 岩丸大作
国定 均 須田朋子 笠原秀樹 吉田有光 柳岡良宏 船津 茂
高橋定義 松下 登 今井もと子 角田みずほ 松井美智代
塩浦ひろみ
平成5年度 中村英一 近藤 功 佐藤 勉 神保侑史 巾 隆之 齊藤俊一
国定 均 須田朋子 笠原秀樹 柳岡良宏 船津 茂 高橋定義
松下 登 今井もと子 角田みずほ 松井美智代 塩浦ひろみ
調査担当 平成4年度 石塚久則・菊池 実・杉山秀宏
平成5年度 大西雅広・金井 武・齊藤英敏
8. 発掘調査における作業員は以下の通りである。(順不同地域別)
井野米子・岡好江・久保田とよ・久保田ひろみ・小鮎きみ江・近藤ハルイ・福田たみ子・原鳥のぶ子・関根久江
関根すみ・岡葉子・石川芳江・浦野裕次・下境秀雄・福田春江・後藤初治・浅野増男・角橋君江・下境喜久野・久
保田房代・関根時太・岡ひろよ・田中幹子・井野ふみ・春日哲男・内田新作・大山貞一・水科瀬太郎・宮本サトノ・
小暮巻太・伊田ラク・中村みどり・細谷友江・浦井ひとみ (平成4年度)
駒木アイコ・湯浅紀子・奈良芳子・倉賀野美智子・小屋玉喜・石井文子・齊藤敏子・石田和恵・春山梅子・小林千
代・小山ツル・荻野操・横沢早苗・鈴木日出子・久保学・羽鳥辰夫・原田房子・関根美江・小川美佐子
(平成5年度)
9. 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
10. 整理期間 平成5年4月1日～平成6年3月31日
11. 整理組織 事務局 平成5年度調査組織の事務局に同じ
整理担当 杉山秀宏
本文執筆 巾 隆之 第1章第1節、第4章第1節2-a
中東耕志 第4章第1節3-a
菊池 実 第4章第1節2-b～f
桜井美枝 第4章第1節3-b・c
新倉明彦 第4章第4節2-d7・8、2-g
他は杉山が担当した。

遺物観察表 縄文時代草創期土器 中東耕志、早期～無文土器 菊池 実
縄文時代石器 桜井美枝、中近世近代土器 大西雅広
中近世粉挽臼・茶臼・板碑・五輪塔 新倉明彦
他は杉山が担当した。

レイアウト 杉山秀宏・鹿沼敏子

遺物実測 鹿沼敏子・大友幸江・蜂巢綾子・狩野芳子・本多琴恵・金子恵子・小淵トモ子
中野秀子・霜田恵子・関正江・田中精子・小林恵美子・高柳哲子・金子加代

トレース 鹿沼敏子・大友幸江・蜂巢綾子・狩野芳子・本多琴恵・金子恵子・小淵トモ子




遺構写真 調査担当者

遺物写真 佐藤元彦

保存処理 関 邦一

12. 石材の鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会）に依頼した。
13. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より特に御指導を賜った。（敬称略）
岡本東三（千葉大学教授）小杉康（明治大学助手）
14. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略ア
イウエオ順）
飯田陽一、小島純一、小菅将夫、小林達雄、坂爪久純、坂本彰、鈴木正博、関口博之、芹澤清八、細野高
伯、前原豊、松田真一、宮田毅、山下歳信
15. 出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は磁北である。
2. 本書における遺構番号は調査時におけるもので、特に土壌については性格上柱穴やピットと考えられるものに関してもすべて土壌番号を振ったためかなりの番号数になったが、報告でもこの番号を採用した。その後の検討で欠番にする遺構が多くかなりの欠番がある。
3. 基本的に出土した遺物にはすべて時代別に分けて番号を付し、資料化を図った。遺跡全体での遺物の総量からみた各時代の生活度を統計的に出すためである。
4. 本書中の遺構実測図の縮尺は以下を基本とした。
 竪穴式住居－40分の1、土壌－40分の1、井戸－40分の1、溝－50分の1、道－50分の1、
 古墳－100分の1
5. 本書中の遺物実測図の縮尺は以下を基本とした。
 縄文草創期土器－3分の2、縄文草創期以外－3分の1、有舌尖頭器・石鏃・抉状耳飾り－1分の1、
 局部磨製石斧・ポイント・スクレーパー・ドリル・ピエスエスキュー・ノッチ・剝片・礫器・石核－3
 分の2、打製石斧・磨石3分の1
 古墳時代 埴輪・土師器・須恵器－3分の1
 古代 土師器・須恵器－3分の1
 中近世 土器－3分の1、内耳鍋・播鉢－4分の1
 石製品 粉挽臼・茶臼・石播鉢・板碑・五輪塔・未製品－6分の1
 窪み石・磨き石・砥石－3分の1
 木製品 曲物・桶－6分の1、その他－3分の1
 鉄製品 2分の1
 古 銭 1分の1
6. 遺物観察表中の「色調」は、「新版標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本
 色彩研究所色票監修 1990年版 に基づいている。
7. 第1図-1は建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（前橋・大胡）を、半分の縮率で使用、第2図
 は同じく建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（前橋・大胡）をそのまま使用した。
 第1図-2は「群馬県史通史篇」1巻原始古代 「群馬県内主要地域の地形分類図」をトレースしたもので
 ある。
 付図2は前橋市都市計画図2千5百分の1 No12を使用した。
 付図3は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図（前橋・高崎・桐生及び足利・深谷）を使用した。
8. 遺物実測図中におけるスクリーントーンは以下のことを表す。
 ① 土器  施釉  摩耗
 ② 石器  研磨
9. 遺物観察表において、() は復元計測値、< > は残存計測値を示す。

目 次

序		1 遺 構	
例言		a 北西区	
凡例		b 北東区	
目次		c 南西区	
第1章 調査経過		d 南東区	
第1節 調査に至る経過	1	2 遺 物	
第2節 調査経過	2	a 中世土器	
第2章 遺跡の立地と環境		b 近世土器	
第1節 立 地	3	c 近代土器	
第2節 歴史的環境	4	d 中近世石製品	
第3章 調査方法・層序		1 粉挽臼・石臼未製品	
第1節 グリッド設定・調査方法	7	2 茶 臼	
第2節 基本層序	9	3 石播鉢	
第4章 調査遺構・遺物		4 窪み石	
第1節 縄文時代	12	5 磨き石	
1 遺 構		6 砥 石	
2 出土土器		7 板 碑	
a 草創期		8 五輪塔	
b 早期（撚糸文）（野島式）（条痕文）		9 不明未製石製品	
c 前期（黒浜式）（諸磯式）		e 木製品	
d 中期前半・後半		f 鉄製品	
e 後期		g 古 銭	
f 無文土器群		第5章 付 編	
3 出土石器		第1節 筑井八日市出土縄文土器について	197
a 局部磨製石斧		第2節 木瀬古墳群について	199
b 有舌尖頭器・ポイント		第3節 筑井出土の土師器について	205
c その他の石器群		第6章 自然科学的分析	
第2節 古墳時代	55	第1節 地質・火山灰同定	206
1 遺 構		第2節 植物珪酸体分析	210
2 出土遺物		第3節 花粉分析	216
a 埴輪		第4節 樹種同定	220
b 土師器		第7章 調査成果	226
c 須恵器		遺物観察表	227
第3節 古 代	65	報告書抄録	264
1 出土遺物		写真図版	
第4節 中近世	66	付 図	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図・地形分類図	3	第41図	無文土器群遺物分布図	33
第2図	周辺の遺跡分布図	5-6	第42図	局部磨製石斧実測図	35
第3図	グリッド設定図	8	第43図	有舌尖頭器・ポイント分布図	36
第4図	発掘地区図	9	第44図	有舌尖頭器・ポイント実測図	37
第5図	北東・北西区土層断面図	11	第45図	石器群遺物分布図	38
第6図	南東区土層断面図	11	第46図	石鏃・スクレイパー実測図	39
第7図	縄文時代遺構配置図	12	第47図	スクレイパー実測図	40
第8図	縄文時代土壌平面・断面図	13	第48図	スクレイパー・ピエスエスキュードリル実測図	41
第9図	縄文草創期土器出土分布図	15-16	第49図	ノッチ・二次加工剥片実測図	42
第10図	縄文草創期土器実測図(1)	18	第50図	二次加工剥片実測図	43
第11図	縄文草創期土器実測図(2)	19	第51図	二次加工剥片実測図	44
第12図	縄文草創期土器実測図(3)	20	第52図	二次加工剥片実測図	45
第13図	縄文草創期土器実測図(4)	21	第53図	二次加工・微細調整剥片実測図	46
第14図	縄文草創期土器実測図(5)	22	第54図	二次加工・微細調整剥片実測図	47
第15図	縄文草創期土器実測図(6)	23	第55図	微細調整剥片実測図	48
第16図	早期(撚糸文土器)遺物分布図	24	第56図	打製石斧実測図	49
第17図	早期(撚糸文土器)遺物実測図	24	第57図	打製石斧・礫器実測図	50
第18図	早期(撚糸文土器)遺物分布図	24	第58図	礫器・石核実測図	51
第19図	早期(野島式土器)遺物分布図	25	第59図	石核実測図	52
第20図	早期(野島式土器)遺物実測図	25	第60図	石核実測図	53
第21図	早期(野島式土器)遺物分布図	25	第61図	敲石・磨石・抉状耳飾り実測図	54
第22図	早期(条痕文土器)遺物分布図	26	第62図	古墳時代遺構図	56
第23図	早期(条痕文土器)遺物実測図	26	第63図	埴輪出土分布図	57
第24図	早期(条痕文土器)遺物分布図	26	第64図	埴輪実測図(1)	58
第25図	前期(黒浜式土器)遺物分布図	27	第65図	埴輪実測図(2)	59
第26図	前期(黒浜式土器)遺物実測図	27	第66図	埴輪実測図(3)	60
第27図	前期(黒浜式土器)遺物分布図	27	第67図	埴輪実測図(4)	61
第28図	前期(諸磯式土器)遺物分布図	28	第68図	土師器出土分布図	62
第29図	前期(諸磯式土器)遺物実測図	28	第69図	須恵器出土分布図	63
第30図	前期(諸磯式土器)遺物分布図	29	第70図	土師器・須恵器実測図	64
第31図	中期前半遺物分布図	30	第71図	古代遺物分布図	65
第32図	中期前半遺物実測図	30	第72図	古代遺物実測図	65
第33図	中期前半遺物分布図	30	第73図	北西区遺構図	67
第34図	中期後半遺物分布図	31	第74図	北西区土壌集合分布図(1)・断面図(1)	68
第35図	中期後半遺物実測図	31	第75図	北西区土壌集合断面図(2)	69
第36図	中期後半遺物分布図	31	第76図	北西区土壌集合分布図(2)・断面図(3)	70
第37図	後期遺物分布図	32	第77図	北西区土壌集合断面図(4)	71
第38図	後期遺物分布図	32	第78図	北西区土壌集合分布図(3)・断面図(5)	72
第39図	無文土器群遺物分布図	33	第79図	北西区土壌集合断面図(6)	73
第40図	無文土器群遺物実測図	33	第80図	北西区土壌平面・断面図(1)	74

第 81 図	北西区土壙平面・断面図 (2)	75	第124 図	南東区土壙平面・断面図 (2)	125
第 82 図	北西区土壙平面・断面図 (3)	76	第125 図	南東区土壙平面・断面図 (3)	126
第 83 図	北西区土壙平面・断面図 (4)	77	第126 図	南東区土壙平面・断面図 (4)	127
第 84 図	北西区土壙平面・断面図 (5)	78	第127 図	南東区土壙平面・断面図 (5)	128
第 85 図	北西区土壙平面・断面図 (6)	79	第128 図	南東区土壙平面・断面図 (6)	129
第 86 図	北西区井戸平面・断面図 (1)	85	第129 図	南東区土壙平面・断面図 (7)	130
第 87 図	北西区井戸平面・断面図 (2)	86	第130 図	南東区井戸平面・断面図 (1)	134
第 88 図	北西区井戸平面・断面図 (3)	87	第131 図	南東区井戸平面・断面図 (2)	135
第 89 図	北西区溝平面・断面図 (1)	88	第132 図	南東区井戸平面・断面図 (3)	136
第 90 図	北西区溝平面・断面図 (2)	89	第133 図	南東区溝平面・断面図 (1)	138
第 91 図	北西区溝平面・断面図 (3)	90	第134 図	南東区溝平面・断面図 (2)	139
第 92 図	北西区溝平面図 (4)	91	第135 図	南東区溝平面・断面図 (3)	140
第 93 図	北西区溝断面図 (4)	92	第136 図	南東区溝平面図 (4)	141
第 94 図	北西区溝平面・断面図 (5)	92	第137 図	南東区溝断面図 (4)	142
第 95 図	北東区遺構図	93	第138 図	中世土器分布図	143
第 96 図	北東区土壙平面図 (1)	94	第139 図	中世土器実測図 (1)	144
第 97 図	北東区土壙断面図 (1)	95-96	第140 図	中世土器実測図 (2)	145
第 98 図	北東区土壙平面・断面図 (2)	97	第141 図	中世土器実測図 (3)	146
第 99 図	北東区土壙平面・断面図 (3)	98	第142 図	中世土器実測図 (4)	147
第100 図	北東区土壙平面・断面図 (4)	99	第143 図	近世土器分布図	148
第101 図	北東区井戸平面・断面図 (1)	105	第144 図	近世土器実測図 (1)	149
第102 図	北東区井戸平面・断面図 (2)	106	第145 図	近世土器実測図 (2)	150
第103 図	北東区道平面・断面図	108	第146 図	近世土器実測図 (3)	151
第104 図	北東区溝平面・断面図 (1)	108	第147 図	近世土器実測図 (4)	152
第105 図	北東区溝平面・断面図 (2)	109	第148 図	近代土器分布図	152
第106 図	北東区溝平面・断面図 (3)	110	第149 図	近代土器実測図	153
第107 図	北東区溝平面・断面図 (4)	111	第150 図	中近世石器分布図	154
第108 図	北東区溝平面・断面図 (5)	112	第151 図	粉挽臼分布図	155
第109 図	南西区遺構図	113	第152 図	粉挽臼実測図 (1)	156
第110 図	南西区土壙平面・断面図 (1)	113	第153 図	粉挽臼実測図 (2)	157
第111 図	南西区土壙平面・断面図 (2)	114	第154 図	粉挽臼実測図 (3)	158
第112 図	南西区 1 号墓壙平面・断面図	114	第155 図	粉挽臼実測図 (4)	159
第113 図	南西区井戸平面・断面図	115	第156 図	石臼未製品実測図	160
第114 図	南西区溝平面図 (1)	116	第157 図	茶臼分布図	164
第115 図	南西区溝平面図 (2)	117	第158 図	茶臼実測図 (1)	162
第116 図	南西区溝平面図 (3)	117	第159 図	茶臼実測図 (2)	163
第117 図	南東区遺構図	118	第160 図	石搗鉢出土分布図	164
第118 図	1 号竪穴式住居平面・断面図	119	第161 図	石搗鉢実測図	165
第119 図	2 号竪穴式住居平面・断面図	120	第162 図	窪み石出土分布図	166
第120 図	1 号竪穴状遺構平面・断面図	121	第163 図	窪み石実測図 (1)	167
第121 図	南東区土壙集合分布図	122	第164 図	窪み石実測図 (2)	168
第122 図	南東区土壙集合断面図	123	第165 図	窪み石実測図 (3)	169
第123 図	南東区土壙平面・断面図 (1)	124	第166 図	窪み石実測図 (4)	170

第167図	窪み石実測図（5）	171	第186図	不明未製石製品出土分布図	189
第168図	磨き石出土分布図	172	第187図	不明未製石製品実測図（1）	189
第169図	磨き石実測図（1）	173	第188図	不明未製石製品実測図（2）	190
第170図	磨き石実測図（2）	174	第189図	木製品出土分布図	191
第171図	磨き石実測図（3）	175	第190図	木製品実測図（1）	191
第172図	砥石出土分布図	176	第191図	木製品実測図（2）	192
第173図	砥石実測図（1）	177	第192図	鉄製品出土分布図	193
第174図	砥石実測図（2）	178	第193図	鉄製品実測図	194
第175図	板碑出土分布図	179	第194図	古銭出土分布図	195
第176図	板碑実測図（1）	179	第195図	古銭拓本	196
第177図	板碑実測図（2）	180	第196図	筑井出土の縄文土器実測図（1）	197
第178図	板碑実測図（3）	181	第197図	筑井出土の縄文土器実測図（2）	198
第179図	五輪塔出土分布図	182	第198図	女屋3号墳出土の埴輪実測図（1）	200
第180図	五輪塔実測図（1）	183	第199図	女屋3号墳出土の埴輪実測図（2）	201
第181図	五輪塔実測図（2）	184	第200図	女屋3号墳出土の埴輪実測図（3）	202
第182図	五輪塔実測図（3）	185	第201図	女屋3号墳出土の埴輪実測図（4）	203
第183図	五輪塔実測図（4）	186	第202図	女屋出土の埴輪・土器実測図（5）	204
第184図	五輪塔実測図（5）	187	第203図	木瀬出土の埴輪・土器実測図	204
第185図	五輪塔実測図（6）	188	第204図	筑井出土の土師器実測図	201

写真図版目次

- PL 1 1. 調査区全景 (北西より)
2. 調査区全景 (南西より)
- PL 2 1. 拡張区東壁セクション 2. 深掘第1
地点セクション 3. 深掘第2地点セク
ション 4. 拡張区南壁セクション 5.
北西区風倒木完掘 6. 北西区風倒木セク
ション 7. 北西区風倒木セクション
- PL 3 1. 北東区縄文期包含層 (南より)
2. 北東区縄文草創期遺物出土状況 (南よ
り)
- PL 4 北東区縄文草創期遺物出土状況 (1)
1. 北東区本線部縄文草創期遺物出土状況
(南より)
2. 北東区拡張区縄文草創期遺物出土状況
(南より)
3. 北東区本線部縄文草創期遺物出土状況
(南より)
- PL 5 北東区縄文草創期遺物出土状況 (2)
1. 83G 遺物出土状況 (南より)
2. 84G 遺物出土状況 (南より)
3. 84G 草創期土器出土状況 (南東より)
4. 102G 遺物出土状況 (南より)
5. 103G 遺物出土状況 (南より)
6. 103G 遺物出土状況 (南より)
7. 104G 遺物出土状況 (南より)
8. 102・122G 遺物出土状況 (南より)
- PL 6 北東区縄文草創期遺物出土状況 (3)
1. 122G 石器出土状況 (東より)
2. 122G 遺物出土状況中景 (南より)
3. 122G 石核 (105) 出土状況 (東より)
4. 123G 遺物出土状況 (南より)
5. 122G ポイント (7) 出土状況 (東よ
り)
6. 123G 草創期土器出土状況 (南より)
7. 123G 草創期土器出土状況
- PL 7 北東区縄文草創期遺物出土状況 (3)
1. 123G ポイント (6) 出土状況 (北よ
り)
2. 123G ポイント (9) 出土状況 (東よ
り)
3. 123G ポイント (8) 出土状況 (東よ
り)
4. 123G 有舌尖頭器 (1) 出土状況 (東よ
り)
5. 123G 草創期土器出土状況 (東より)
6. 123G 草創期土器出土状況 (東より)
7. 123G 草創期土器出土状況 (東より)
8. 123G 草創期土器出土状況 (東より)
- PL 8 北東区縄文草創期遺物出土状況 (4)
1. 123G 草創期土器出土状況 (東より)
2. 123G 草創期土器出土状況 (東より)
3. 123G 草創期土器出土状況 (東より)
4. 124G 草創期土器出土状況 (南より)
5. 123・124G 遺物出土状況 (南より)
6. 123・124G 遺物出土状況 (東より)
7. 124G 遺物出土状況 (南より)
8. 124G 遺物出土状況 (南より)
- PL 9 北東区・北西区縄文期包含層出土状況
1. 124G 石器集中出土状況 (南より)
2. 124G 石器集中出土状況 (南より)
3. 125G 遺物出土状況 (南より)
4. 125G 有舌尖頭器 (2) 出土状況 (南よ
り)
5. 125G 遺物出土状況 (東より)
6. 163G スクレイパー (17) 出土状況
7. 北西区縄文包含層調査 (南より)
8. 北東区北端縄文包含層調査 (南より)
- PL10 北東区縄文草創期土壙群完掘状況
1. 682号土壙完掘状況 (東より)
2. 683号土壙完掘状況 (東より)
3. 684号土壙遺物出土状況 (東より)
4. 684号土壙完掘状況 (東より)
5. 685号土壙完掘状況 (東より)
6. 686号土壙完掘状況 (南より)
7. 687号土壙完掘状況 (南より)
8. 688号土壙完掘状況 (北より)
- PL11 古墳時代遺構検出状況
1. 1号墳礎出土状況 (南より)
2. 1号墳主体部盗掘壙東西セクション
(南より)
3. 1号墳主体部盗掘壙南北セクション
(東より)

4. 5号溝完掘状況(南より)
5. 5号溝セクション(西より)
- PL12 北西区中近世遺構検出状況(1)
1. 北西区北端部遺構完掘状況
2. 272G周辺完掘状況(西より)
3. 292・293G完掘状況(西より)
4. 313G完掘状況(北より)
5. 312・333G完掘状況(北より)
- PL13 北西区中近世遺構検出状況(2)
1. 332・333・352・353G完掘状況(西より)
2. 333・334・353・354G完掘状況(北より)
3. 50号土壙完掘状況(南西より)
4. 75号土壙完掘状況(北より)
5. 76号土壙セクション(東より)
6. A3-26G78・79・85・86号土壙(北より)
7. 48号土壙遺物出土状況(北より)
8. 48号土壙完掘状況(南西より)
- PL14 北西区中近世遺構検出状況(3)
1. 81・82号土壙完掘状況(南より)
2. 83号土壙完掘状況(北より)
3. 88・89・90・96号土壙完掘状況(北より)
4. 47号土壙完掘状況(南西より)
5. 47・97-103号土壙完掘状況(南より)
6. 106-114号土壙完掘状況(東より)
7. 104・105・107・108・114-117号土壙完掘状況(南より)
8. 43-45号土壙完掘状況(南西より)
- PL15 北西区中近世遺構検出状況(4)
1. 43-45・118-120号土壙完掘状況(東より)
2. 44・45・123・124号土壙完掘状況(東より)
3. 126号土壙セクション(北より)
4. 233・234号土壙完掘状況(北より)
5. 232号土壙完掘状況(北より)
6. 142・253号土壙完掘状況(北より)
7. 65・66号土壙、6・7号井戸完掘状況(北西より)
- PL16 北西区中近世遺構検出状況(5)
1. 376号土壙完掘状況(南から)
2. 67号土壙完掘状況(北東から)
3. 131・132・225-227・8号井戸完掘状況(北から)
4. 61・62・132・229・228号土壙、8号井戸完掘状況(東から)
5. 374号土壙完掘状況(東から)
6. 375号土壙完掘状況(東から)
7. 132・190・193-196・220-224号土壙、9号井戸完掘状況(北から)
8. 168-173・175-180・181・182・192号土壙、10号井戸、29溝完掘状況(北から)
- PL17 北西区中近世遺構検出状況(6)
1. 173・179-182・184・186-189・192号土壙、10号井戸、29溝完掘状況
2. 344号土壙完掘状況(南から)
3. 1号井戸セクション(南から)
4. 1号井戸完掘状況(西から)
5. 1・2号井戸完掘状況(西から)
6. 2号井戸セクション(西から)
7. 2号井戸完掘状況(西から)
8. 2・3号井戸完掘状況(西から)
- PL18 北西区中近世遺構検出状況(7)
1. 3号井戸完掘状況(東から)
2. 4号井戸セクション(南から)
3. 4号井戸完掘状況(東から)
4. 5号井戸完掘状況(南から)
5. 6・7号井戸完掘状況(東から)
6. 8号井戸完掘状況(北から)
7. 9号井戸遺物出土状況(西から)
8. 11号井戸完掘状況(北から)
- PL19 北西区中近世遺構検出状況(8)
1. 18・19・20・22・23・31溝完掘状況(北より)
2. 2号溝完掘状況(北より)
3. 2号溝セクション(東より)
4. 2号溝セクション(西より)
5. 24号溝完掘状況(南より)
6. 24-26号溝、344-346号土壙完掘状況(南より)
7. 1号溝セクション(南より)
8. 31号溝完掘状況(北より)

- PL20 北東区中近世遺構検出状況 (1)
 1. 北東区中央部完掘状況 (4・6・13・14号溝) (北より)
 2. 北東区中央部完掘状況 (3・4・6・13・14・32・33号溝) (南より)
 3. 北東区中央部完掘状況 (3・32・33号溝) (南より)
- PL21 北東区中近世遺構検出状況 (2)
 1. 北東区南部完掘状況 (32・34-37・39・45・46号溝) (北より)
 2. 北東区南部完掘状況 (32・34-46号溝) (南より)
 3. 北東区南部完掘状況 (38-41号溝) (北より)
- PL22 北東区中近世遺構検出状況 (3)
 1. 北東区南端部完掘状況 (42-44号溝) (南より)
 2. 北東区南端東張り出し部完掘状況 (北西より)
 3. 北東区南端東張り出し部完掘状況 (北西より)
- PL23 北東区中近世遺構検出状況 (4)
 1. 13号土壌完掘状況 (西より)
 2. 15号井戸完掘状況 (西より)
 3. 13号井戸完掘状況 (東より)
 4. 13号井戸セクション (西より)
 5. 14号井戸完掘状況 (西より)
 6. 14号井戸セクション (東より)
 7. 17号井戸セクション (南より)
 8. 18号井戸完掘状況 (南より)
- PL24 北東区中近世遺構検出状況 (5)
 1. 22号井戸完掘状況 (東より)
 2. 11号土壌・23号井戸完掘状況 (北西より)
 3. 1号道セクション (東より)
 4. 24号井戸完掘状況 (西より)
 5. 1号道完掘状況 (東より)
 6. 13号溝セクション (南より)
 7. 6・13・14号溝完掘状況 (北より)
- PL25 北東区中近世遺構検出状況 (6)
 1. 3・32・33号溝完掘状況 (南より)
 2. 3・32・33号溝セクション (南より)
 3. 32・34-37・39・45・46号溝完掘状況 (南東より)
- PL26 南西区中近世遺構検出状況 (1)
 1. 南西区北端西張り出し部完掘状況 (西より)
 2. 南西区南部完掘状況 (南より)
- PL27 南西区中近世遺構検出状況 (2)
 1. 南西区中央部完掘状況 (北より)
 2. 南西区中央部完掘状況 (北より)
- PL28 南西区中近世遺構検出状況 (3)
 1. 18・19号土壌完掘状況 (東より)
 2. 20号土壌完掘状況 (北より)
 3. 23号土壌完掘状況 (南東より)
 4. 24号土壌完掘状況 (南より)
 5. 32号井戸完掘状況 (北より)
 6. 33号井戸完掘状況 (東より)
 7. 34号井戸完掘状況 (北より)
 8. 35号井戸完掘状況 (北より)
- PL29 南東区中近世遺構検出状況 (1)
 1. 南東区北部完掘状況 (北より)
 2. 南東区北部完掘状況 (南より)
- PL30 南東区中近世遺構検出状況 (2)
 1. 南東区南部完掘状況 (南より)
 2. 南東区南部完掘状況 (南東より)
 3. 南東区南部完掘状況 (北西より)
- PL31 南東区中近世遺構検出状況 (3)
 1. 1号住居完掘状況 (南より)
 2. 1号住居柱復元状況 (南西より)
 3. 1号住居7号ピット遺物出土状況
 4. 2号住居完掘状況 (北より)
- PL32 南東区中近世遺構検出状況 (4)
 1. 2号土壌完掘状況 (北東より)
 2. 4号土壌完掘状況 (南東より)
 3. 56号土壌完掘状況 (東より)
 4. 91号土壌遺物出土状況 (南東より)
 5. A1-059・060G完掘状況 (東より)
 6. A1-039・059G完掘状況 (東より)
 7. 637号土壌他完掘状況 (東より)
 8. 27号井戸完掘状況 (南より)
- PL33 南東区中近世遺構検出状況 (5)
 1. 28号井戸完掘状況 (南より)
 2. 29号井戸完掘状況 (南より)
 3. 30号井戸完掘状況 (西より)

	4. 42号井戸完掘状況 (南西より)	PL46	縄文石器 (2)
	5. 43号井戸完掘状況 (西より)	PL47	縄文石器 (3)
	6. 43号井戸完掘状況 (南西より)	PL48	縄文石器 (4)
	7. 44号井戸完掘状況 (西より)	PL49	縄文石器 (5)
	8. 45号井戸他完掘状況 (南より)	PL50	縄文石器 (6)
PL34	南東区中近世遺構検出状況 (6)	PL51	縄文石器 (7)
	1. 15号溝石製品石垣状遺構検出状況(北より)	PL52	縄文石器 (8)
	2. 15号溝石製品石垣状遺構検出状況 (北東より)	PL53	縄文石器 (9)
	3. 15号溝石製品石垣状遺構検出状況 (北西より)		古墳時代土師器
	4. 15号溝セクション (南より)	PL54	古墳時代須恵器
PL35	南東区中近世遺構検出状況 (7)		古代土師器・須恵器
	1. 49-54号溝完掘状況 (南西より)		古墳時代埴輪 (1)
	2. 51・52・54号溝、630号土壙他完掘状況 (南西より)	PL55	古墳時代埴輪 (2)
		PL56	中近世土器
		PL57	近世・近代土器
		PL58	粉挽臼 (1)
		PL59	粉挽臼 (2)
PL36	南東区中近世遺構検出状況 (8)	PL60	茶臼
	1. 51・52号溝、627・630号土壙他完掘状況 (東より)	PL61	石播鉢
	2. 47・48号溝完掘状況 (南より)		窪み石 (1)
	3. 49・50・54号溝、43号井戸完掘状況 (南西より)	PL62	窪み石 (2)
			磨き石 (1)
		PL63	磨き石 (2)
			砥石
PL37	南東区中近世遺構検出状況 (9)	PL64	板碑
	1. 36号井戸完掘状況	PL65	五輪塔 (1)
	2. 37号井戸完掘状況	PL66	五輪塔 (2)
	3. 38号井戸完掘状況	PL67	木器
	4. 41号井戸完掘状況	PL68	古銭
PL38	縄文草創期土器 (1)		鉄器
PL39	縄文草創期土器 (2)	PL69	笄井出土縄文土器 (1)
PL40	縄文草創期土器 (3)	PL70	笄井出土縄文土器 (2)
PL41	縄文草創期土器 (4)	PL71	女屋出土埴輪 (1)
PL42	縄文草創期土器 (5)		木瀬埴輪
PL43	縄文前・中期土器	PL72	女屋出土埴輪 (2)
	縄文草創期石器	PL73	笄井出土土師器
PL44	局部磨製石斧		
PL45	縄文石器 (1)		

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

群馬県内の道路網の整備が急速に進められている。高速道路関係では、関越自動車道新潟線と上信越自動車道が開通し一段落を迎えたが、新たに北関東自動車道の計画が浮上してきている。また国道関係では、17号線バイパス（上武道路）が前橋市内まで完成したのを受け、50号線も拡幅工事が行われた。このような状況の中で、県内の主要地方道や県道でも各地で整備事業が行われるようになった。主要地方道藤岡大胡線もそのような路線の一つである。本路線は、藤岡市と大胡町を結ぶ幹線道路で、関越自動車道の高崎インターチェンジと接しているため使用度が増したため、高崎市と前橋市駒形町間で拡幅工事が行われている。更に大胡町方面に進むと県道前橋古河線及び駒形バイパスを横切り、小島田十字路で国道50号線と交差する。この50号線も17号バイパスの開通に伴い交通量が増すとともに、本路線を使って高崎方面に流れる車両も多くなってきている。このため、県土木部道路建設課では、小島田交差点の北から駒形バイパス間の拡幅工事を計画し、50号線との関連から平成5・6年度で北側の道路拡幅工事を実施することになった。

小島田の交差点付近の地形をみると、赤城山から続く山麓地形が旧利根川によって終焉する部分にあたり、崖線を形成している。この崖線の上には古くから縄文時代の遺跡地であることで知られている。また本路線と直交する50号線の拡幅工事に対しても、数年前から本事業団によって発掘調査が行われている。これらの状況を踏まえ、道路建設課では平成3年に県教育委員会文化財保護課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、文化財保護課によって試掘調査を実施し、遺跡の存在について確認を行うことになった。試掘調査は平成3年に実施したが、中世と考えられる遺構群が発見され、本調査を行う必要があると判断された。文化財保護課では、再度道路建設課と協議を行い、本調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託することを決定した。

遺跡対象地は前橋市小島田町字八日市から筑井町字八日市に所在する。遺跡のかかる割合の関係から遺跡名を『小島田八日市遺跡』と命名した。発掘調査は平成5年6月から開始された。順次調査が続けられたが、試掘調査で想定されたように中世館跡に伴う井戸・土壙等が大量に検出された。なお、一部の土地については家屋と共に未買収地として存在することが判明した。このため、その扱いについて前橋土木事務所及び道路建設課と協議を行ったところ、買収が平成6年度であることから発掘調査については翌年度で実施することとした。また、館跡の井戸から縄文草創期に属する局部磨製石斧が出土し、注目されることとなったが、北側の一部からも縄文前期の遺物に混じって同時期の隆起線文系土器群が出土した。調査の結果、この草創期の遺物群が隣地までのびていくことが判明した。この土地の所有者の言によると、道路が完成するのに合わせて舗装をかけ駐車場として利用するとのことであったため、貴重な遺跡が壊滅することが考えられた。このため、県文化財保護課と協議を行い、隣地に対する発掘調査を本事業と並行して文化財サイドで実施することとなった。

平成5年度は小島田交差点の南側で、桃の木川右岸にある筑井中屋敷遺跡を中心として実施されたが、この段階で前年度の小島田八日市遺跡の残地部分も合わせて調査を行った。

報告書の刊行は2遺跡を対象としているため2分冊とし、平成5年度は小島田八日市遺跡を整理し、第1分冊として刊行することとした。第2分冊は筑井中屋敷遺跡の発掘調査が終了してから整理事業を実施し刊行する予定である。

第2節 調査経過

調査は1992年6月15日より開始した。測量杭の設置を測量業者が行い、調査事務所の設営・物品の搬入を開始した。重機による表土掘削は6月22日より開始する。調査地区を北西・北東・南西・南東の4地域に区分し、まず、南西・北西地区より表土掘削を中心に作業を行う。南西地区は水が大量に湧出し滞水したため一旦作業を中止し、北西区・北東区の調査を中心にする。

7月に入り溝の検出が相次ぎ、これら溝の検出作業・調査が中心となる。また、南西区の調査も開始されやはり溝の調査を中心に進む。南西区攪乱激しく、遺構の残り特に中央区を中心として良い状況ではない。7月31日古環境研究所早田氏来跡、調査。

8月3日南西区埋め戻し開始、8月5日南東区精査開始する。8月は北西区・南東区を中心に発掘作業が行われ、土壌・井戸が多数検出されその調査に追われる。また、微隆起線文土器・種子柴形石斧の出土が確認され、縄文時代草創期の良好な資料としてこの遺跡が重要であることが明らかになった。ただし、石斧は中近世の井戸から出土し、微隆起線文土器は鋤簾がけ作業時の表採遺物のため厳密な出土地点が分からず今後の精査に期待する。

9月4日北東区にて微隆起線文土器の原位置での出土が認められ、さらなる土器の出土が見込まれる。また、微隆起線文土器出土地点に近い北東区北部より石器剥片もかなりの量が検出され始めた。

9月7日当埋蔵文化財事業団は当遺跡が縄文草創期の良好な遺跡として重要であり、かつ本線部分においてより、東側に延びる地点に遺跡の中心があるものと判断し、一部本線部分より東側を拡張して調査を事業団独自の発掘調査事業として行うことにする。次々に草創期の土器・石器類が出土するも、前期黒浜・諸磯期の資料も出土例多く一部混在している状況が窺える。9月11日前橋市教委前原豊氏来跡。北西区では縄文前期の包含層調査を開始する。9月14日群馬大学梅沢重昭教授来跡。9月16日古環境研究所早田氏土壌サンプリング、茨城県鹿島町教委田口勉・本田崇氏来跡。9月は主に縄文時代前期と草創期の調査を中心として進められた。9月21日境町教委坂爪久純氏、奈良県立橿原考古学研究所職員5名来跡。9月26日太田市教委宮田毅氏、利根川同人鈴木正博・鈴木加津子・坂本彰氏案内。栃木県埋蔵文化財センター小森紀男・芹澤清八氏9月来跡。

10月1日同志社大学松藤先生来跡。10月8日古環境早田氏調査、群馬地質研究会飯島静男氏石材鑑定（10月13・22・23・30・11月4・5・6日）。10月20日千葉大学岡本東三先生来跡現地指導。県及び市町村文化財担当者9名参加。NHK他新聞社4社取材。10月21日群馬テレビ取材。10月はマスコミの対応や来客が多く、調査は草創期を中心に北東区・南東区の中近世の調査を継続して行う。

11月は調査も終盤にかかり縄文草創期の包含層調査を中心として行い、南東区の未調査分も精査を継続する。11月5日大胡町教委山下歳信氏宮城村教委細野高伯氏来跡。11月6日榛名町教委飯島克己氏来跡。11月13日國學院大学小林達雄先生来跡。子持村教委石井克己氏案内。11月16日前橋市教委前原豊氏来跡。11月17日現場調査が終了する。翌日より撤収準備に入り、現地の埋め戻し、遺物・器財の搬出、調査事務所の撤収作業に入る。

12月1日、すべての作業が終了。一部宅地の引っ越しが遅れ未調査区あり。

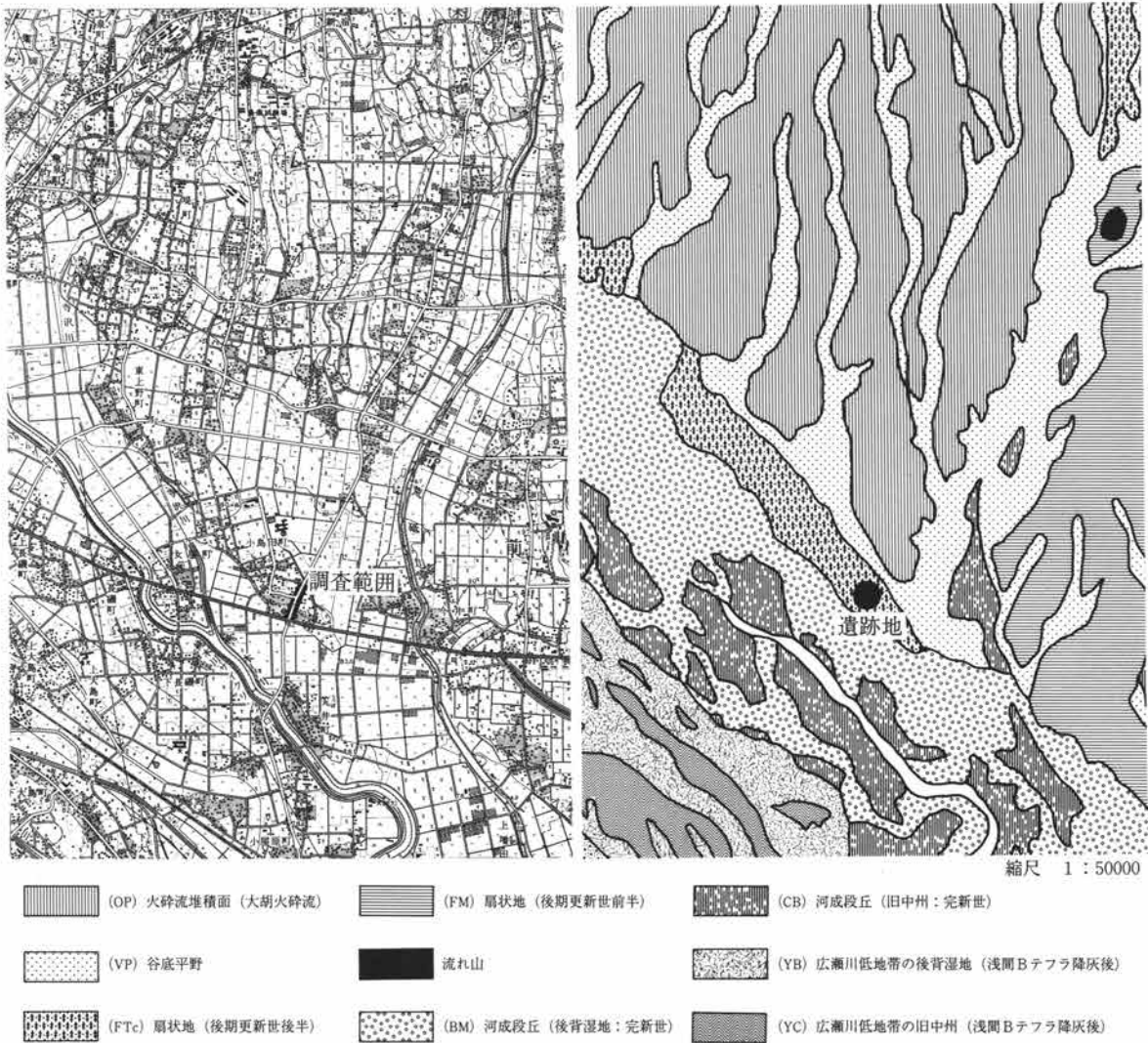
1993年11月17日より前年度未調査区の調査に入る。中近世の遺構のみで、土壌・井戸・溝が検出された。

12月7日、現場作業終了。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 立地

小島田八日市遺跡は前橋市街地の東方約3 km、前橋市東南部の小島田町（一部箕井町分も入る）にある遺跡で、利根川の旧流路にあたる広瀬川低地帯から旧利根川の河川侵食から逃れた赤城山の南麓端部の前橋台地上へ移行した地点で、北側は小河川により侵食されて残った東南方向に長くのびる低台地上に位置する。この低台地は旧利根川と小河川により南北両方を侵食されて、東南方向に1.5 kmにわたり細長く延びるもので、現状で広瀬川低地帯からは3 m、北側的小河川からは1 mの比高差を有している。遺跡地の地形はちょうど県道藤岡・大胡線に沿って低くなり南側に向けて開くような形で広がるもので、河川の氾濫によりこの部分が多少抉られた可能性がある。あるいは、中近世の時期に生活地として土地を整形したとも考えられる。標高は85－86 mの間に位置する。この低台地の旧利根川に望む台地縁辺には古墳が連続して築かれているが、台地上における生活跡についてはあまり認められなかった。



第1図 遺跡位置図・地形分類図

第2節 歴史的環境

小島田八日市遺跡の付近で、1925年、柴田常恵・谷川磐雄により縄文時代の敷石住居が調査され、当時としては珍しく注目された遺跡であった。その後はほとんど調査がなされず、国道50号線の拡幅工事に伴う調査により今井道上・今井白山・箕井八日市遺跡など旧利根川・荒砥川・宮川により侵食された低台地上に位置する。このように遺跡が明らかにされるにつれ、従来あまり遺跡が認められなかった地域における遺跡の存在が確認され始めた所である。

以下、時代別に小島田八日市遺跡を中心にやや広い範囲で赤城南麓から広瀬川低地帯に至る地域での遺跡の状況を述べる。

旧石器時代 赤城南麓の開発の進行に伴い該期の遺跡も増え、付近では荒口町荒砥北三木堂遺跡、今井町今井道上・今井道下遺跡がある。

縄文時代 柴田常恵等により調査された敷石住居は箕井八日市遺跡の南側に位置するもので、箕井八日市遺跡では、中期後半から後期前半にかけての土壌2基が検出されている。後述するように、箕井八日市遺跡の周辺では縄文の特に中期から後期にかけての資料が表採や個人所蔵の遺物として認められ、該期に比定される遺跡の存在が想定される。これ以外に、今井白山遺跡から中期の遺物集中出土が認められ、今井道上遺跡より陥し穴が1基検出されている。

弥生時代 遺跡地の周辺には弥生時代に比定される遺構・遺物の検出がほとんど認められず、やや離れた荒砥島原・前原遺跡、荒口前原遺跡などで中期後半の住居が微高地や低台地縁辺部に認められる。後期に入ると遺跡がほとんど確認されておらず、同様の立地を有しているものと思われるが、今後の調査での確認に期待したい。

古墳時代 古墳時代になると遺跡数・遺構数ともに急激に増加する。前期には、低湿地を望む台地の縁辺に、各流域ごとに集落が出現し、集落の近辺に方形周溝墓群などの墓域が確認される場合が多く、生活域・墓域・生産跡が一つの構成体となって確認されるのが特徴である。中後期に入り、さらに集落の拡大が認められ台地の内部に向けて集落が進出していく状況が認められると共に、少し位置的には離れるが、環濠により囲まれた居宅跡が確認されており、階層性をもった集落構造の復元が行える。古墳の状況であるが、前期においては、首長クラス古墳は、前方後方形周溝墓が確認されるのみで、この地域を統轄する首長の存在が認められない。旧利根川右岸の大型前方後円墳前橋天神山古墳が広域の首長としてこの地域をも支配していたと想定される。中期に入り、この地域で初めての全長71mを有する大型前方後円墳の今井神社古墳が築造された。内部構造は、変形竪穴式石室で、規模や内部構造からみてもこの地域を支配した首長として考えられる古墳である。後期に入るとまた様相が変化して、前方後円墳は各地域ごとで築造される。この地域では小形の前方後円墳が2基築造された。旧木瀬村1号墳（推定復元長60m）と旧木瀬村10号墳（復元長後円部のみ21m+）である。円墳群と小首長クラスの前方後円墳という組み合わせが基本的な形態と考えられ、円墳群のみの群集墳とは異なった階層構造を有する古墳群として理解することができる。

古代 台地奥部に遺跡はさらに進出し、開発行為はさらに拡大し、広範囲に水田が造成された。女堀が12世紀に淵名荘の再開発の為に掘削されたが、事実上失敗に終わり使用されずに放棄されてしまった。

中世以降 近世の遺構として二之宮宮東遺跡があり、屋敷や池が検出されている。この他にも数多くの遺跡で井戸・溝が確認されている。また、中世城郭として今井城があり、多数の墓が北山遺跡・荒砥北三木堂遺跡などで確認されている。この地域はあずまみちという陸上交通の幹線道路と、さらに旧利根川の水上交通を利



● ○ 古墳・古墳群 ■ 集落 ▲ 城郭

0 1:25,000 1,500 m

第2図 周辺の遺跡分布図

用する地点として、当時の交通の要所として捉えられ、中近世を通じて重要な地域であったことがうかがえる。

第3章 調査方法・層序

第1節 グリッド設定・調査方法

試掘調査においては、中近世の溝・井戸・土壌が確認されたが、遺構の密度は低く、調査も短時間で終了すると見込まれた。調査は重機により表土掘削した後、遺構確認の為に精査を行い、その段階で縄文草創期の神子柴形石斧・微隆起線文土器が出土し、当初の予想を超えて重要な遺跡であることが確認され、調査方法・期間共に見直しが図られた。以下、今回の調査方法に関して記述する。

今回の県道藤岡・大胡線の調査は初年度の調査であり、今後調査が継続することを考慮し、国道50号線小島田交差点を境にして、国家座標軸に沿って、100m四方の大グリッドを設定した。北東隅を起点にするグリッドであるが、この大グリッドは小島田交差点より西に向かい100mごとにアルファベットを用い、A B C Dーとし、北に向かい100mごとに算用数字を振り1 2 3 4ーと命名した。各大グリッドは東西のアルファベットと南北の算用数字を組み合わせてA 1区のように表現し、今回の調査区においては、A 1ーA 3区、B 1ーB 3区までが調査範囲に入っている。各大グリッドは100m四方であるが、これら大グリッドの中を5m四方の小グリッドに区分し、計400の小グリッドに区分される。各小グリッドは北東隅を001Gとし東西方向20G、南北方向20Gに区分され、南西隅が最終グリッドの400Gとなる。001Gから西に向かい、002、003ー020Gと20Gに区分され、東に移り021Gとなり、また20Gに区分され040Gとなり、また東に移動する。調査の単位はこの5m四方の小グリッドとする。

このグリッドと別に便宜的に5つの区に区分した調査区を設けた。調査区中央を南北に縦断する県道藤岡・大胡線の本線道路とやはり中央付近を東西方向に分断する小道を境界にしてそれぞれ北西区・北東区・南西区・南東区の4つに大区分した。また本線部の調査とは別に縄文草創期の遺物集中地区に関しては当埋蔵文化財調査事業団の独自の調査ということで、調査区を北東区から分離して拡張区とした。(第4図) この区分は調査の経過において、作業工程上の単位になると共に、遺跡の性格・遺構の分布、集中度に関しても一定のまとまりを有しており、報告する際にも有意義な地区として採用することにした。

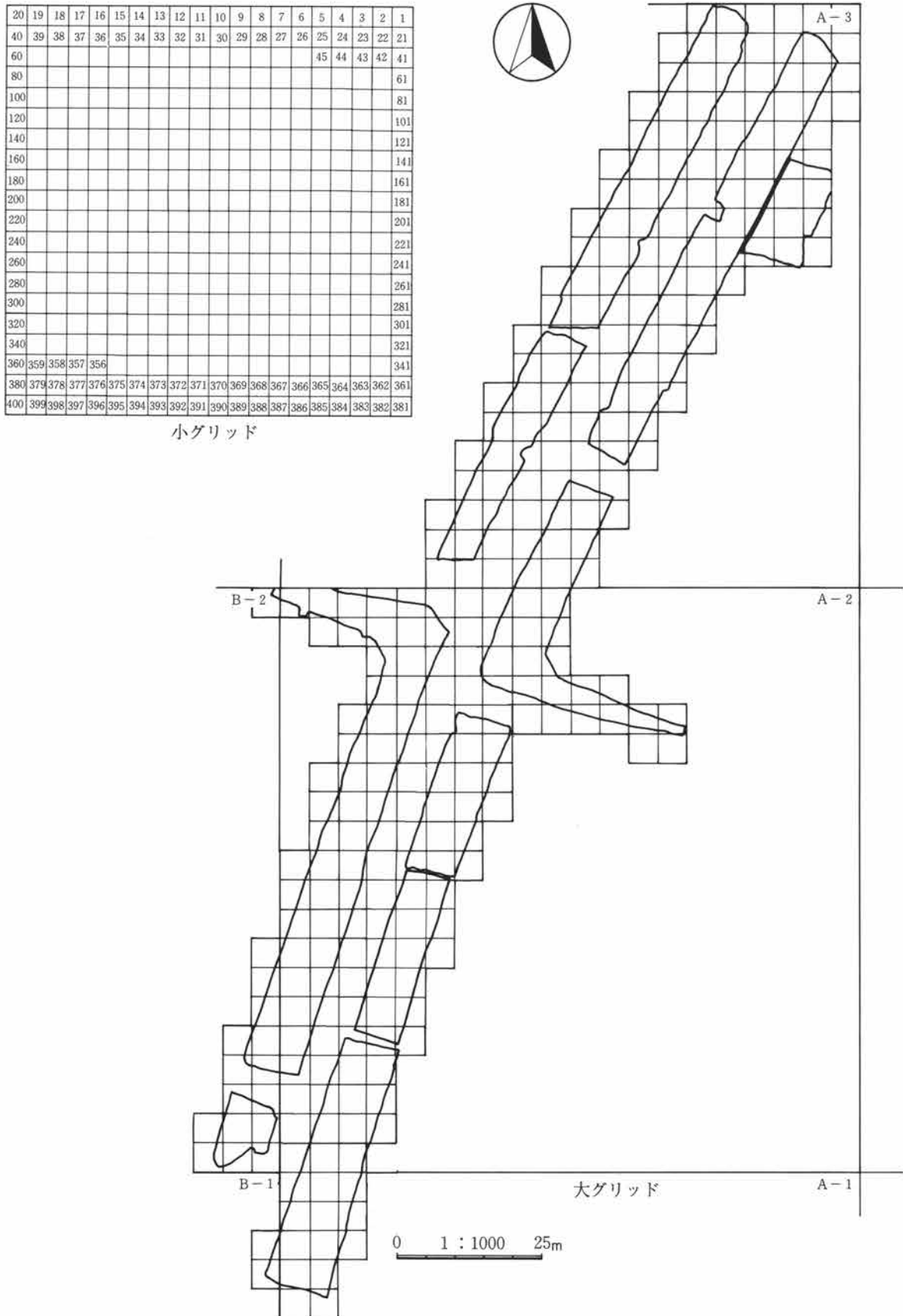
調査は遺構内出土のものはその所属にしたが、基本的には5m四方の小グリッドを基準として遺物の帰属を明らかにした。出土全遺物の分布を調べる基本データをとる為である。

小グリッド内の調査では、特に縄文期の遺物包含層が確認された本線部北東部・拡張区に関しては、遺物は全点ドットで取り上げることにし、層位と原位置について慎重を期した。

測量は平面図は全て20分の1の平面図を作製し、等高線は10cmごとにした。遺構に関しては井戸においては湧水により発掘したそばから崩壊する為、断面図の作製は途中でとどめるか断念するものが多かった。土壌・溝に関しては、代表的なもののみ断面図を作製した。地山が砂質土のため、遺構を掘りあげるとすぐに肩の部分が崩れ始めるので、平面図の作製は掘りあげ後なるべく早い段階に行った。平面図・遺物出土状況図共に平板測量で行った。

写真は35mmモノクロ・スライド・6×7判モノクロで撮影し、一部、6×7判のスライドで撮影した。

第3章 調査方法・層序



第3図 グリッド設定図

第2節 基本層序

小島田八日市遺跡は赤城山南麓の台地上、旧利根川の左岸、小河川の右岸に挟まれた微高地に位置している。今回の調査では上層より中近世、古墳、縄文時代の包含層が確認された。遺跡地内で、古墳・縄文時代の包含層が確認されたのは北東区の極一部分のみで、それ以外の地域は中近世の遺構のみで、他の時代は遺物は少量出土するものの、包含層を確認できなかった。以下、基本土層として北東区の深掘りを行った地点での土層断面図（図6）から説明する。

1層（耕作土層）

層厚5～20cm。締まり弱くバサバサしている。攪乱により埴輪片、縄文土器片出土する。

2層（10YR3/1.5）

層厚5～15cm。耕作により一部攪乱を受けている層。締まり弱い。攪乱から中近世土器片・埴輪片・縄文土器片が出土する。

3層（10YR4/3.5、10YR5/4.5）

層厚10～20cm。縄文時代早期～後期中心の層。砂質土層。一部縄文草創期を含む。締まり2層よりあるが、やや弱い。肉眼での観察はできなかったが、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）のテフラがテフラ同定によりこの3層中より確認されている。

4層（10YR6/4.5）

層厚10～30cm。縄文草創期包含層。締まり良い。砂質土層。微隆起線文土器・石器、剥片類出土。

5層（10YR6/4.5、2.5Y6/4.5）

無遺物層。砂礫質土層。締まり非常に良い。円礫φ0.5～50cm混じる。場所により締まり・色調・円礫の混じり具合共にやや変化する。深さ2.7m程で、同じくテフラ同定により浅間一板鼻黄色軽石（AS-YP）が確認されている。

以上が、北東区を中心にした層序であるが、他の地区では、上述の3・4層が一部認められるも、遺物の包含がなされておらず、5層に掘り込む形で中近世の遺構が検出される場合が多い。中近世の遺構の確認面が浅い為、2層において耕作による攪乱が入る場合が多いが、基本的には中近世の包含層として2層を捉えることができる。

北西区は第5図-1にあるように、南部は耕作による攪乱が激しく、ほとんどが1層で、そのすぐ下より中近世の土壌・溝群がある。中央部2号溝近辺では北東部でいうところの3層に対応する層が一部認められるが縄文土器の出土は全く無い。北部になると3層がかなりの範囲で認められ、それに対応するように縄文土器の出土も早期から後期までかなりの量が認められる。現在のところ古墳時代の遺物はほとんど認められず、中近世の時期になり再びこの地区に生活面が認められる。

北東区は第5図-2にあるように、北部から中央部にかけて2層から4層がかなりの範囲で存在し、特に北部においてはそれぞれに中近世から古墳時代、縄文時代と遺物の出土が認められる。標高で言ってもこの地区は最も高く2～4層の層厚も最も厚い。特に3層からは縄文時代前期から後期にかけての一群の土器が出土し、4層からは縄文草創期の土器の一群と石器製作に伴う剥片群が多数出土する。4層自身は遺物集中出土地区の南側にも延長して存在するが遺物の出土は認められなくなり、遺物の包含地は標高の高い限られた地点のみ認められる事が明らかになった。第5図-3にみられるように中央部から南部になると耕作と攪乱が激しくほとんど1層の下は2・3層が一部残るも地山土が露出する部分が多く遺構も中近世の溝を中心とする遺構

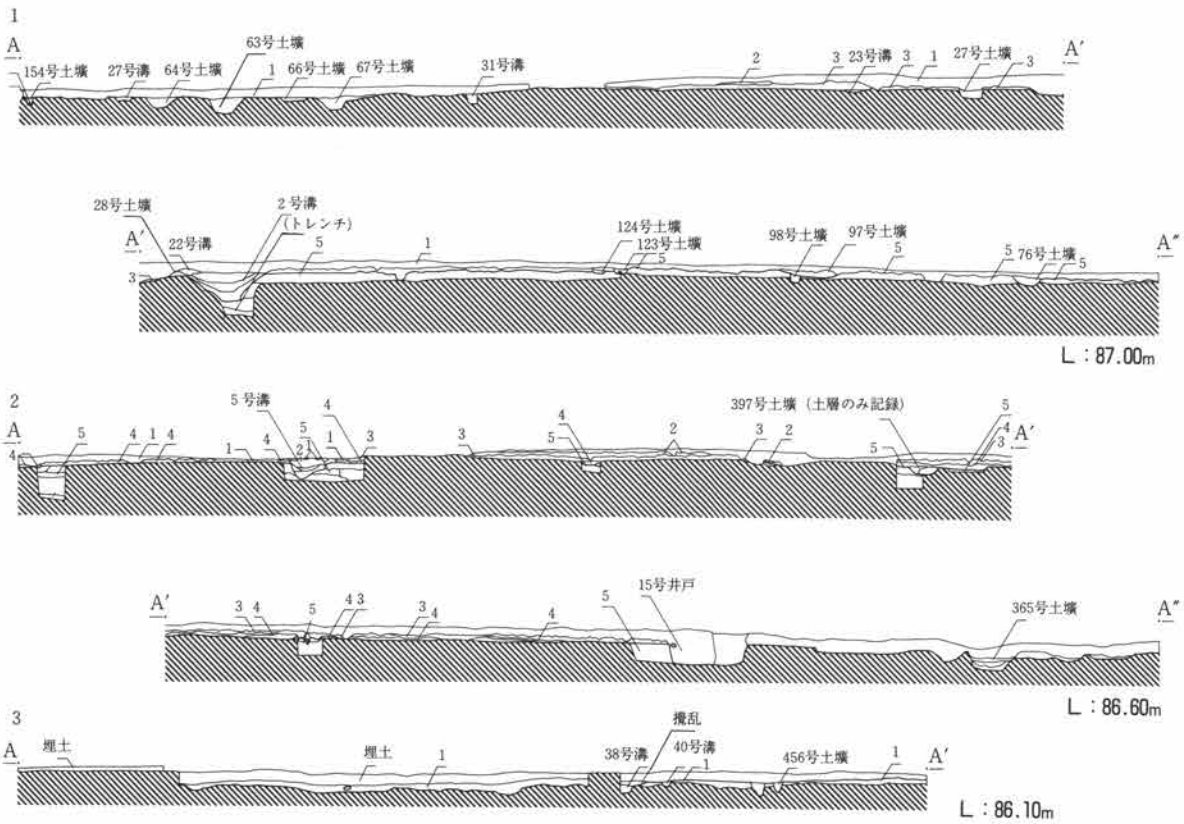


第4図 発掘地区図

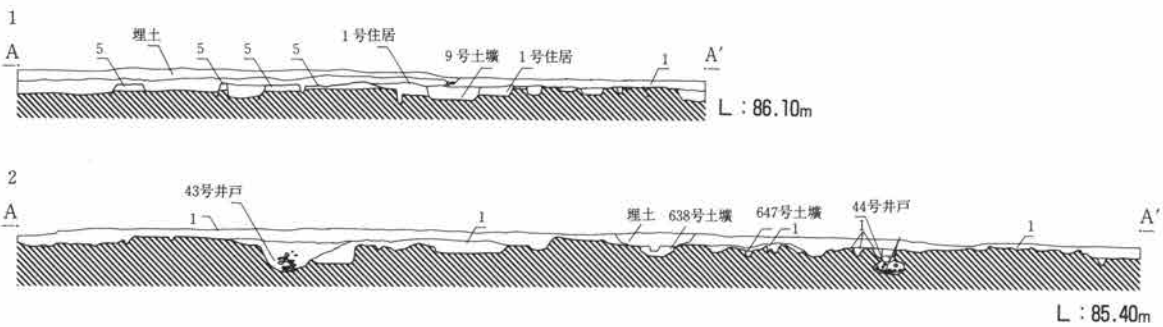
のみである。

南西区は断面図は載せなかったが攪乱が激しく北端部西部を除き、北部から中央部にかけてはほとんど遺構の検出さえ認められず、当然ながら土層においても攪乱土と耕作土層である1層土がほとんど全地区にわたり、古墳時代・縄文時代の遺物の出土は全く認められない。

南東区は第6図-1にあるように攪乱土が北部の東端において入り込み、西側で15号溝が検出されたもののほとんど東側では遺構の検出も認められない。中央部から南部にかけて2層や一部4層対応の土層が認められ中近世の時期の遺構が堅穴式住居も含めて柱穴と思われる土層群が多数検出されている。第6図-2は南東区最南端の土層断面であるが、5層に対応する層が認められるが中近世の遺構が多く縄文期に比定される遺物の出土は認められない。主な遺構は中近世の遺構で5層を切る形で形成されている。なお埴輪がかなりの量出土するも対応する古墳の遺構は確認できず、包含層としても古墳時代に対応するような層位は認められない。



第5図 北東・北西区土層断面図



第6図 南東区土層断面図

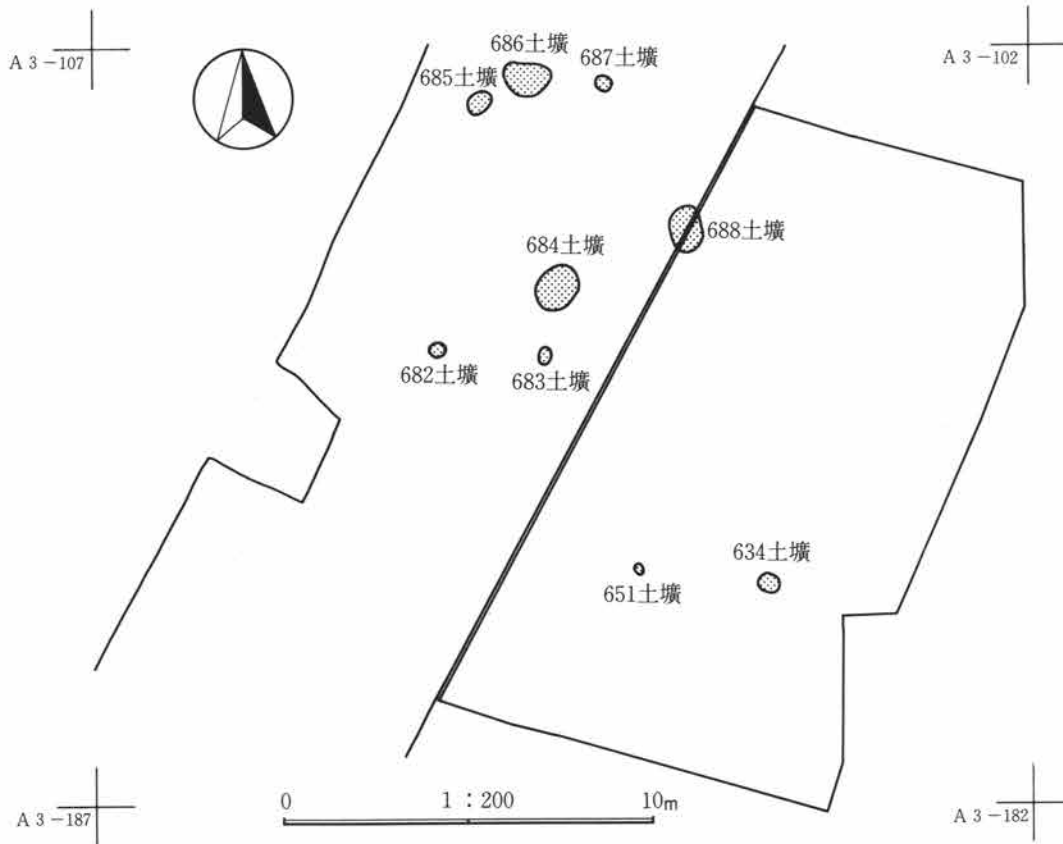
第4章 調査遺構・遺物

第1節 縄文時代

今回の調査では、縄文時代の草創期から後期に至る遺物の出土を見た。その内、特に注目すべきは草創期に関わる神子柴形石斧と微隆起線文土器である。ただし、残念ながら神子柴形石斧は中近世の井戸から出土したもので、場所も離れており、層位及び時期の比定についても微隆起線文土器との時間的な新古関係は確認出来ない。遺物の集中出土地区は神子柴形石斧を除いては、北西・北東区の北部微高地の最高部から集中出土している。遺物量としては、草創期が土器・石器共に圧倒的に多く、次に前期諸磯期の土器が多い。その他の時期のものも極く少量ずつ出土しているが、それらに伴う遺構は確認できなかった。いずれにしても縄文時代は後期に至るまで、この地点に生活の痕跡がある。

1. 遺構

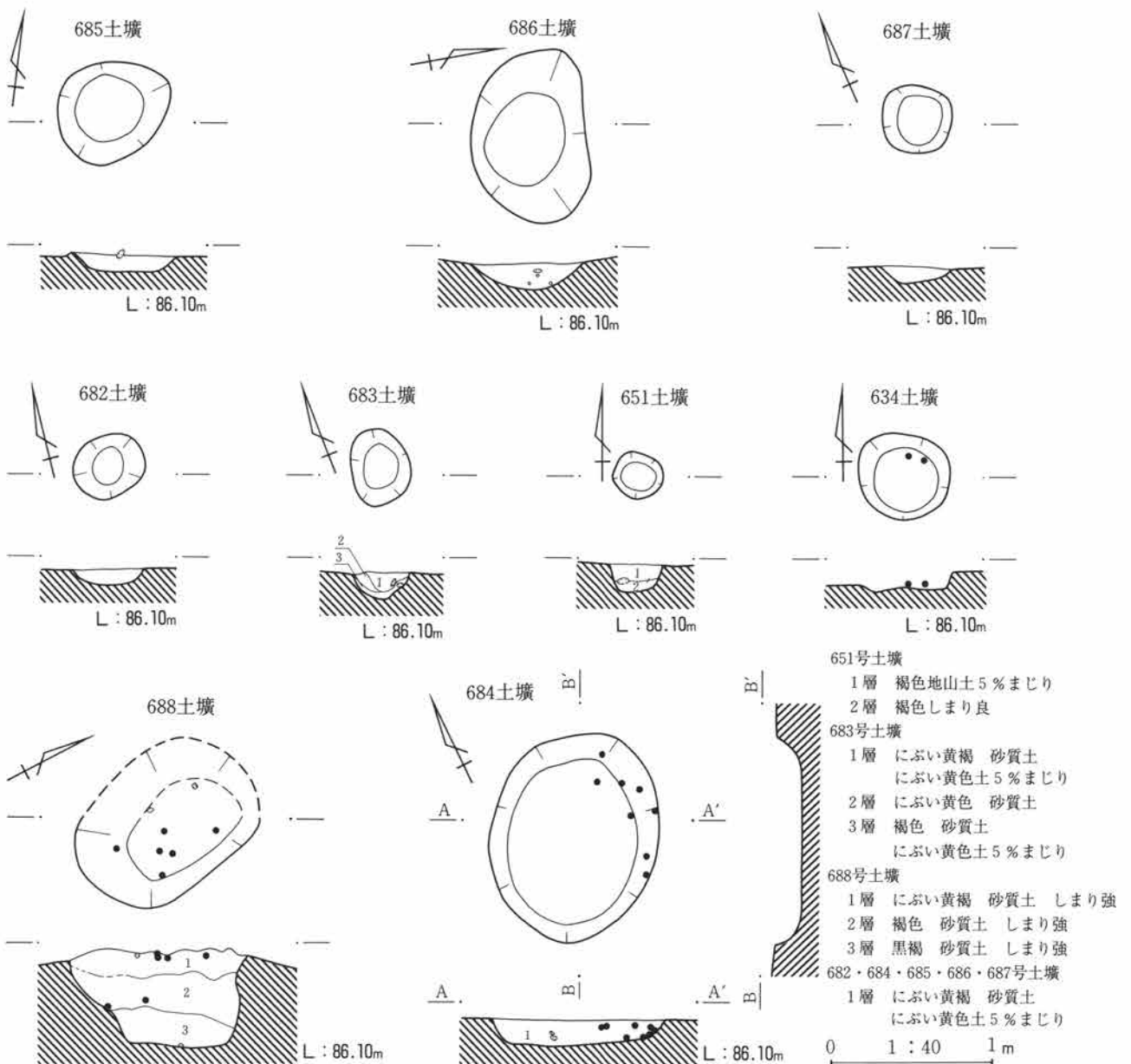
縄文時代の遺構は北東区にのみ認められた。出土遺物から草創期に関する遺構がほとんどを占めるものと



第7図 縄文時代遺構配置図

思われるが、どのような性格の遺構として捉えられるかは不明である。北東区それも遺物の集中出土地点と重なって遺構が検出されている。土器の出土状況から見ても分かるように、早期から後期にまで亘っており、遺物の出土を見ず、遺構の確認面から判断した遺構に関しては時期比定は困難であり、一括して記載することにしたものである。

634・651・682・683・684・685・686・687・688号土壙があり、688号土壙を除き、共に浅い掘り込みで、遺構の確認自体も困難を極めた。明瞭に遺物の出土を見たのは、634・684・688号土壙のみである。634号土壙より、微隆起線文土器片107・108が出土しており、草創期の遺構として考えて良い。684号土壙よりは、8点に及ぶ剥片が出土している。688号土壙は、剥片2点とスクレイパー1点(158)が出土している。遺物からみる限り、すべて草創期に比定されるものと考えて良い。その他の遺構に関しては、覆土の状況及び遺構の確認面から判断して縄文期に比定したもので、現状では草創期に比定される可能性が極めて高い。



第8図 縄文時代土壙平面・断面図

2. 出土土器

a. 草創期

草創期の土器は北東区ほぼ中央にまとまって出土した。そのうち拓本で表現が可能なものすべてを掲載した。点数は114点で、掲載できなかったのはわずかな細片である。拓本だけでは表現しにくい部分があるので、図版は左から表面拓本・表面実測・断面・裏面実測・裏面拓本の順で並べ、必要のない部分は省くようにした。

土器群は、すべて縄文草創期の隆起線文系土器群の中の微隆起線文土器に属するものである。土器の胎土や隆線の太さ及び若干の差があるものの、格別大きな変化はない。従ってここでは、全体を通じての色調・胎土の観察を述べ、その後土器の部位別に説明を加えることとする。

色調は、口縁部破片と胴部破片によって色調に差がある。口縁部は黒褐色を中心とするものがほとんどであるが、56だけは褐色を呈している。口縁部形態に違いがある事から、明らかに別個体として認識できる。胴部は褐色を呈するものが主体を占めている。土器の胎土をみると、基本的に全ての土器片に長石や小砂礫粒が含まれており、統一性がとれているように見受けられる。しかし、詳細に観察すると小砂礫の含有度合いに違いがあったり、雲母や軽石の含まれた破片があり、個体差があることがわかる。

以上の状況からこれらの土器群は、同一個体ではなく数個体が存在したものと考えられる。これは、以下の各部位の観察でも追認されるところである。

以下各部位による観察を記すこととするが、詳細は遺物の観察表を参照されたい。

第1群 口縁部 (1～6・17～19・36・56)

口縁部破片は11点が出土している。1点を除き、口縁部の下に数条の隆線を配している。また第1類を除き、口唇部に装飾としての加工を加えている。

第1類(2) 口唇部に対する装飾がないもので、表面に7mm間隔で隆線をめぐらしている。

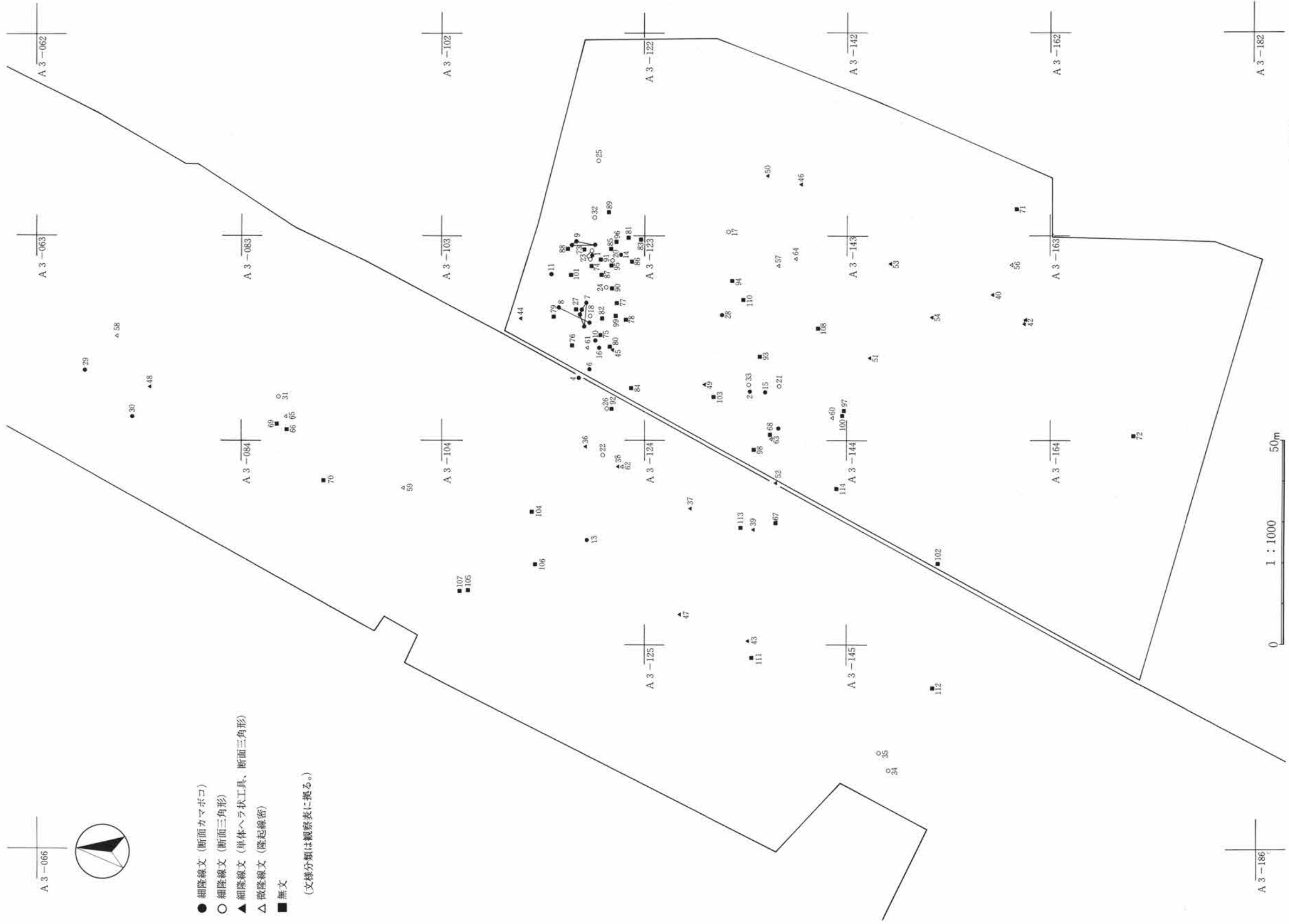
第2類(17・19・36・56) 口唇部の表面のみに加工を施すものを一括した。直接表面に加工するもの(17・36)と、隆線を貼りつけるもの(19・56)がある。17は篋状工具による刺突、36は斜位方向から押圧し口端部に爪形状の刺突、19は粘土紐を貼り付けその上から削りと横方向から押圧、56は粘土紐を貼り付け斜位から押圧を施すなど、各々仕上がりに状態で波頭状に仕上げている。口縁部の下に7～9mm間隔の隆線が数条にわたり施されているが、56だけは隆線がなく異質の存在となっている。色調・胎土とも他の口縁部破片とは大きく異なっている。なお17の内面には炭化物の付着が認められる。

第3類(1・3・4・5) 表裏面とも口唇部が波頭状口縁を呈するもので、表・裏面に粘土を貼り付けるもの(5)表面のみに粘土を貼り付けるもの(1)がある。口唇部に対する加工は個体によって様々であり、押圧・削りのほか、篋状工具・棒状工具を単独あるいは重複して使用して作り出している。また裏面の状態を見ると、口唇部の下に意識的に1条単位で、文様を施すものがある(3・4)。3は口唇部に押圧を施し、その直下に丸棒状工具で間隔をあけず削り取り、円形と円形の間に爪形状の刺突を挿入している。4は表裏面とも削りによる波頭状口縁を作り出し、特に裏面には削りの下に丸棒状工具による円形の刺突を施して波状効果を高めている。なお4の内面から表面の一部に炭化物の付着が認められる。

第2群 胴部 (7～16・20～35・37～55・57～114)

胴部は隆線がある上半部と無い下半部に分けることができる。上半部は口縁部同様黒褐色を呈するものがほとんどであるが、下半部は褐色を呈している。隆線の状態によって以下の4類に細分できる。

第1類(7～16・20～35・40～55・57～65) 土器に対し隆線がほぼ直線的に胴体を一周する。隆線の間隔は



0 1 : 1000 50m

L = 87.00m



- 細隆線文 (断面カメラゴコ)
- 細隆線文 (断面三角形)
- ▲ 細隆線文 (単体ヘラ状工具、断面三角形)
- △ 微隆線文 (隆起線密)
- 無文

(文様分類は観察表に拠る。)

第9図 縄文草創期土器出土分布図

最大で10mm、最小で3mmを測る。5mmから7mm間隔に集中している例が多い。隆線の数が多いもので8本を数える。また、下部が無文になるものがある(23・38・32・52)。無文部分は第3類になるものであり、隆線が口縁部の下から上部に限定してつけられたものであることがわかる。また、隆線はやや太めのものと、細めのものの2種類が観察できる。31・38・44・62には炭化物が付着している。

第2類(38・39) 隆線が直線ではなく、曲線あるいは縦に施文されるものである。38は横方向の隆線の下に縦方向に走る隆線が観察でき、39は横方向の隆線の下に2条の隆線が山形に配されている。いずれも破片のため文様の全体像は不明といわざるを得ない。

第3類(37) 隆線が2条観察できるが、下部の隆線に篋状工具による斜位の刺突が施されている。胴部破片で隆線に刺突を施しているものはこの1点のみである。

第4類(66~114) 隆線は見あたらず、無文のみの胴部破片を一括した。底部は出土していない。なお、108は底部付近の破片であるが、熱糸文系土器群の可能性があり、当該時期のものとは断定できない。73・103・104・107・111・113に炭化物が付着している。

縄文草創期の隆起線文系土器群についてはいくつかの編年案がある(注1)。しかし大筋では隆帯文→隆起線文→微隆起線文の順に推移したことについては共通しているといえる。本遺跡の土器群の特徴を記すと、基本は口縁部から胴部上半部にかけて細い隆線を施す。個体によって隆線が曲線を描いたり垂下するものがある。また口縁部に対する装飾が盛んに行われる。隆線の数に完形土器がないため不明であるが、口縁部破片の最大が4条、胴部破片で8条が観察される。どうやら10条を超えると考えられる。大塚氏のいう一帯多条型に属するものである(注2)。隆線の作出方法は、口縁部で粘土貼り付けるものは例外として、胴部破片でみると篋状工具を器表面に左右に押し引いて微隆起を作り出している(注3)。破片の断面等を観察しても粘土を貼り付けた形跡は見あたらない。微隆起間には左右に引かれた篋状工具の調整痕が観察できる。

群馬県内における隆起線文系土器群の出土は、利根郡水上町の乾田Ⅱ遺跡(注4)、佐波郡境町の小角田前遺跡(注5)、桐生市不動穴(注6)の3遺跡が知られているにすぎず、出土点数は乾田遺跡の32点を除くと1~数点と少ない。ところが、本遺跡と同時期に発掘調査を行っていた北群馬郡子持村の白井北中道遺跡(国道17号線鯉沢バイパス)において大量の隆起線文系土器群と神子柴形石斧が出土した(注7)。現在整理途上であるため詳細は不明であるが、隆線を観察すると本遺跡より太い状態にあり、隆起線文土器に近いものと理解できる。

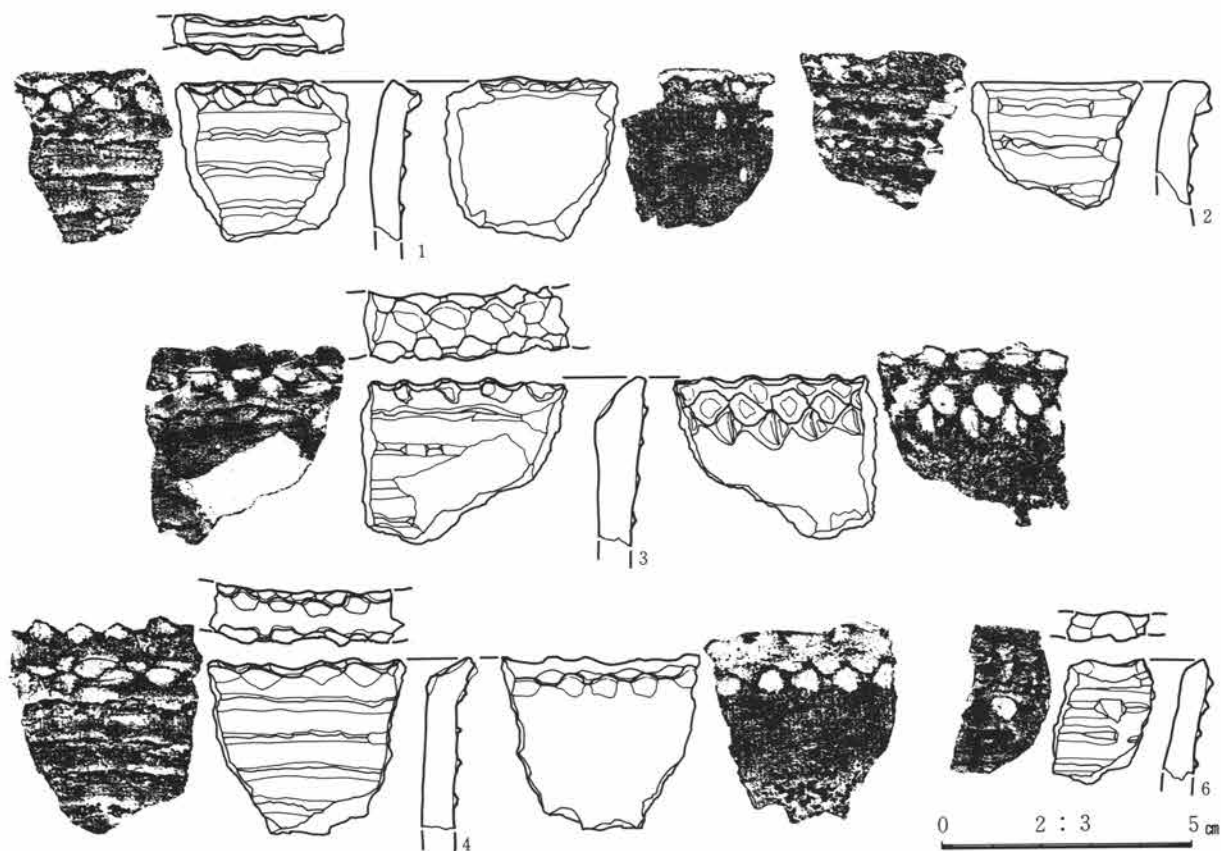
以上の遺跡のうち本遺跡と類似する様相を示すのは乾田Ⅱ遺跡である。微隆起線の観察および表出方法は本遺跡例と同様であり、口縁部を波状に仕上げる状態および一部に縦方向および曲線を描く破片の存在など類似する内容といえる。しかし、口縁部に施される装飾は単純である。

全国各地から出土している微隆起線文土器を概観すると、隆線を胴体に一定の間隔で施す単純なものであり、差があるとすれば隆線が口縁部からどの位置まで施されて、何本つけられているのか、隆線が横方向だけでなく縦方向あるいは装飾的な曲線を施しているか、隆線の上に装飾が施されているか、隆線間がどれほどの間隔であるのかといった程度である。大きく異なるのが口縁部の作りと装飾的な施文であろう。本遺跡からは11点の口縁部破片が出土しているが、ほとんど直立ないしは若干の外反を示す。中には56のようにやや内湾気味のものとさえ存在する。他遺跡の例を見ると、山形県の日向第1洞窟(注8)で見られるような極端な外反を示すものは例外で、本遺跡同様直立かやや外反する形態が通常である。また1点を除きさまざまな法を駆使して口縁部に装飾を施している。第1群第2類のように口縁部表面だけに加工を施すものと、第1群第3類のように表裏両面に装飾を施すものとに分けられる。装飾は粘土紐を貼り付け口縁部および口唇部に指頭による押圧や篋状工具による押しつぶし等を加え、ジグザグの波頭状の隆線に仕上げるもので、石小屋洞穴(注9)・荷取

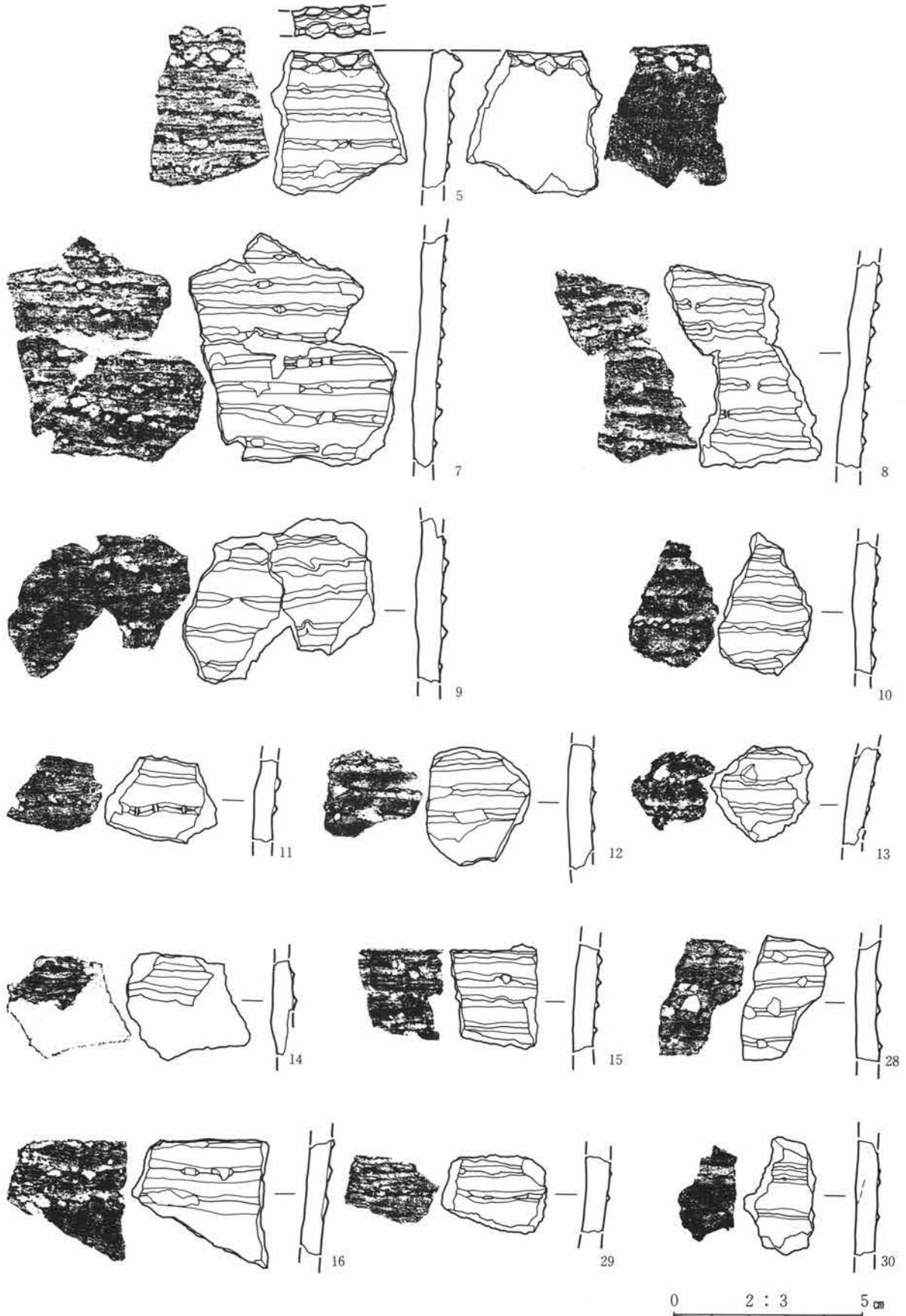
第4章 調査遺構・遺物

洞窟(注10)・壬遺跡(注11)・花見山遺跡(注12)等、多くの遺跡で見られる。しかし、第1群第3類の中に見られる、内面に装飾が施される例(3・4)は未だ未検出の遺物である。今後この土器をどう解釈するのが問題となろう。

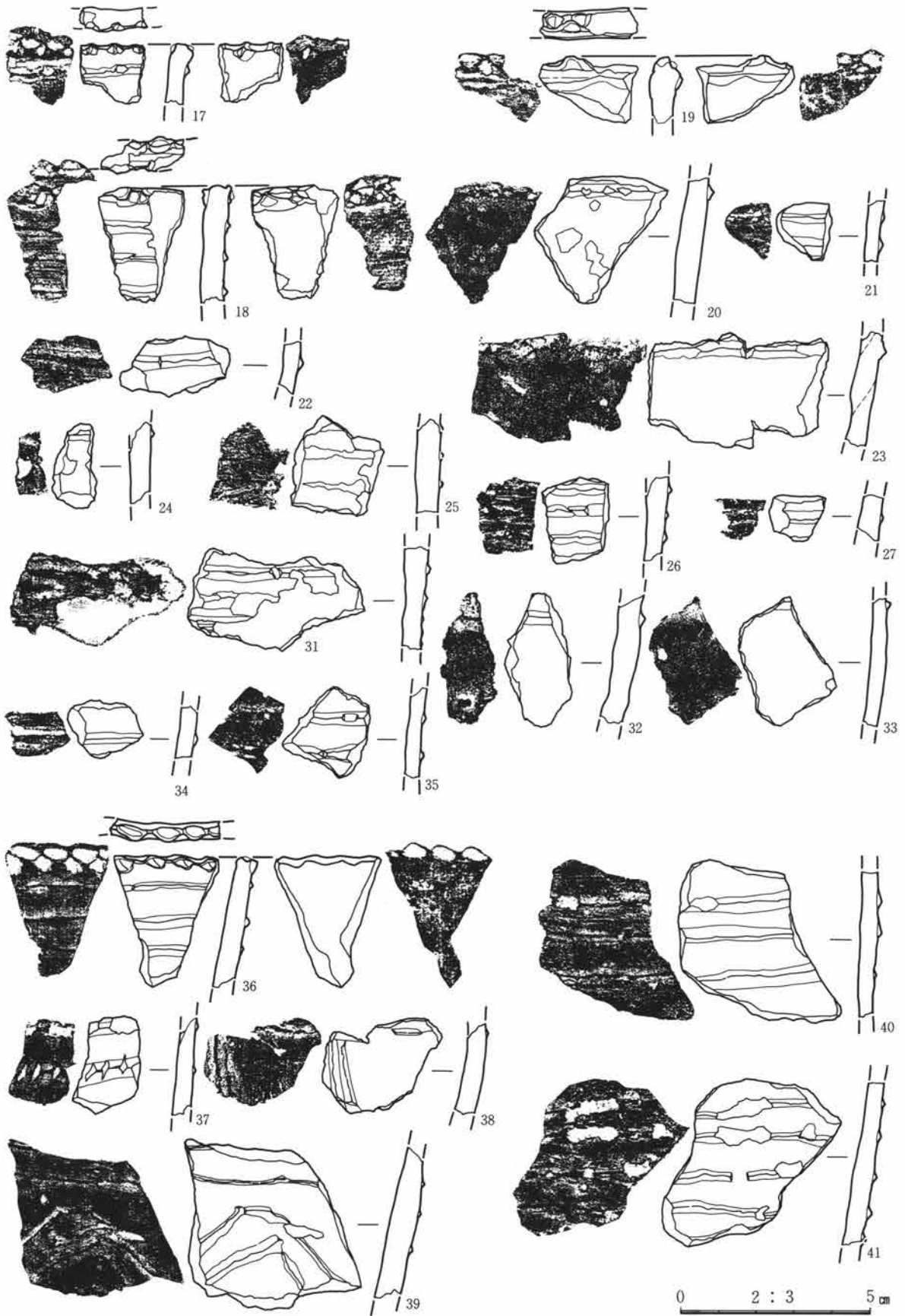
- (1) 代表的なものをあげると次のような文献がある。
 鈴木保彦「縄文草創期の土器群とその編年」史叢第12・13合併号 1969
 大塚達郎「隆起線土器瞥見—関東地方出土当該土器の型式学的的位置」東京大学文学部考古学研究紀要第1号 1979
 栗島義明「草創期土器型式変遷における一考察—隆起線文から爪形文へ」信濃第37巻第4号
- (2) 注1 大塚論文
- (3) 佐々木洋治「山形県における縄文草創期の研究」山形県県立博物館研究報告1 1973
- (4) 水田稔「群馬県利根郡水上町乾田遺跡Ⅱ遺跡発掘調査報告書」水上町郷土資料館研究報告第1集水上町教育委員会 1978
- (5) 『小角田前遺跡一般国道17号(上武国道)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (6) 不動穴洞穴調査団「不動穴洞穴第一次調査概要」 1974
- (7) 「白井北中道遺跡」年報12財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (8) 佐々木洋治「高島町史別巻」考古資料編高島町 1971
- (9) 永峰光一「石小屋洞穴発見の微隆起線土器」古代文化20-8 1968
 同「長野県石小屋洞穴」日本の洞窟遺跡平凡社 1967
- (10) 小林達雄「長野県荷取洞窟出土の微隆起線土器」石器時代第6号 1963
- (11) 國學院大学考古学研究室「壬遺跡1980」「同1981」「同1982」「同1983」國學院大学考古学研究室1980・1981・1982・1983
- (12) 坂本彰「花見山遺跡の隆起線土器」港北のむかし71 1977
 坂本彰他「神奈川県花見山遺跡」日本考古学年報30 1979
 鈴木重信他「横浜市花見山遺跡の調査」第2回神奈川県遺跡調査・研究発表要旨 1978



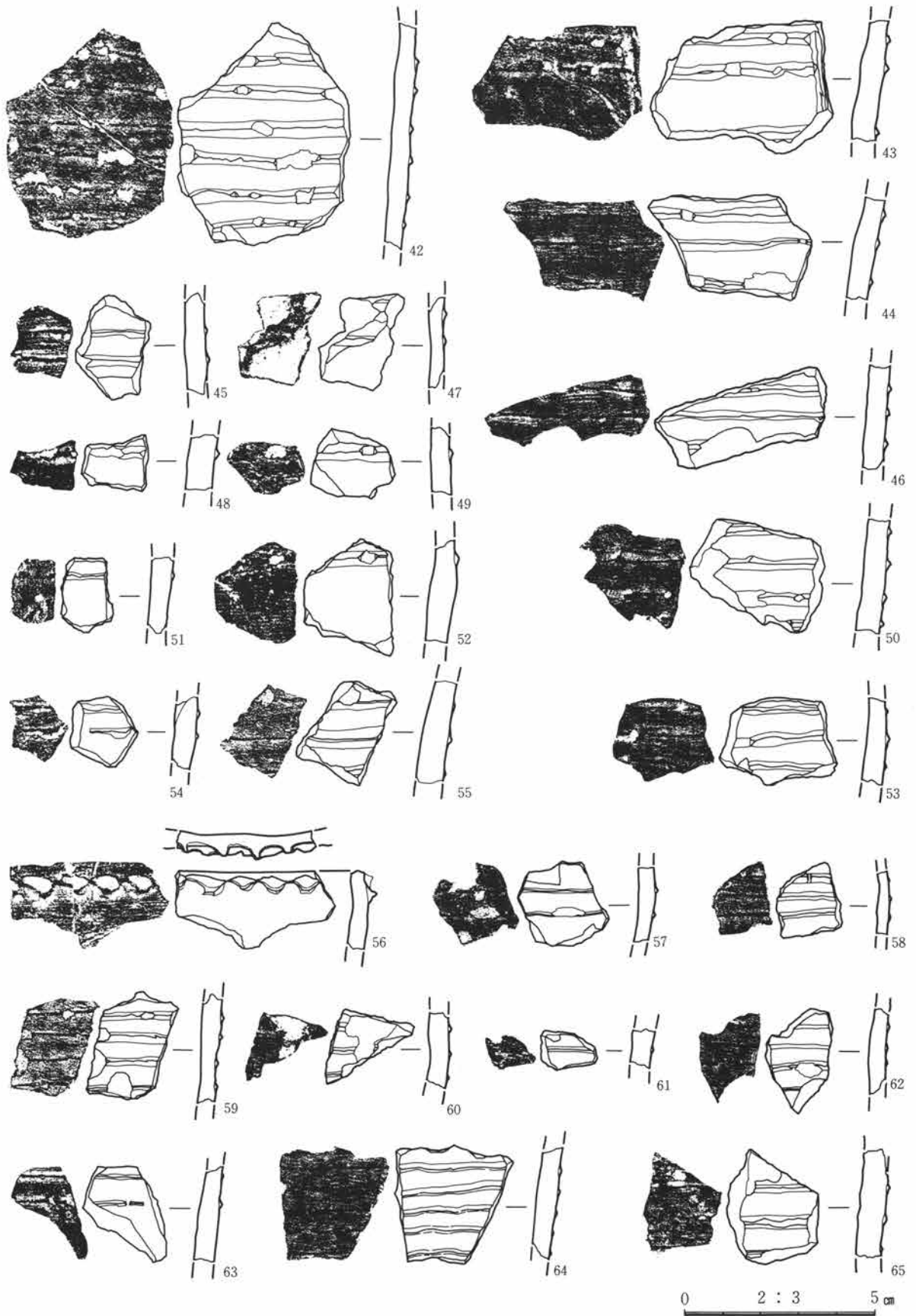
第10図 縄文草創期土器実測図(1)



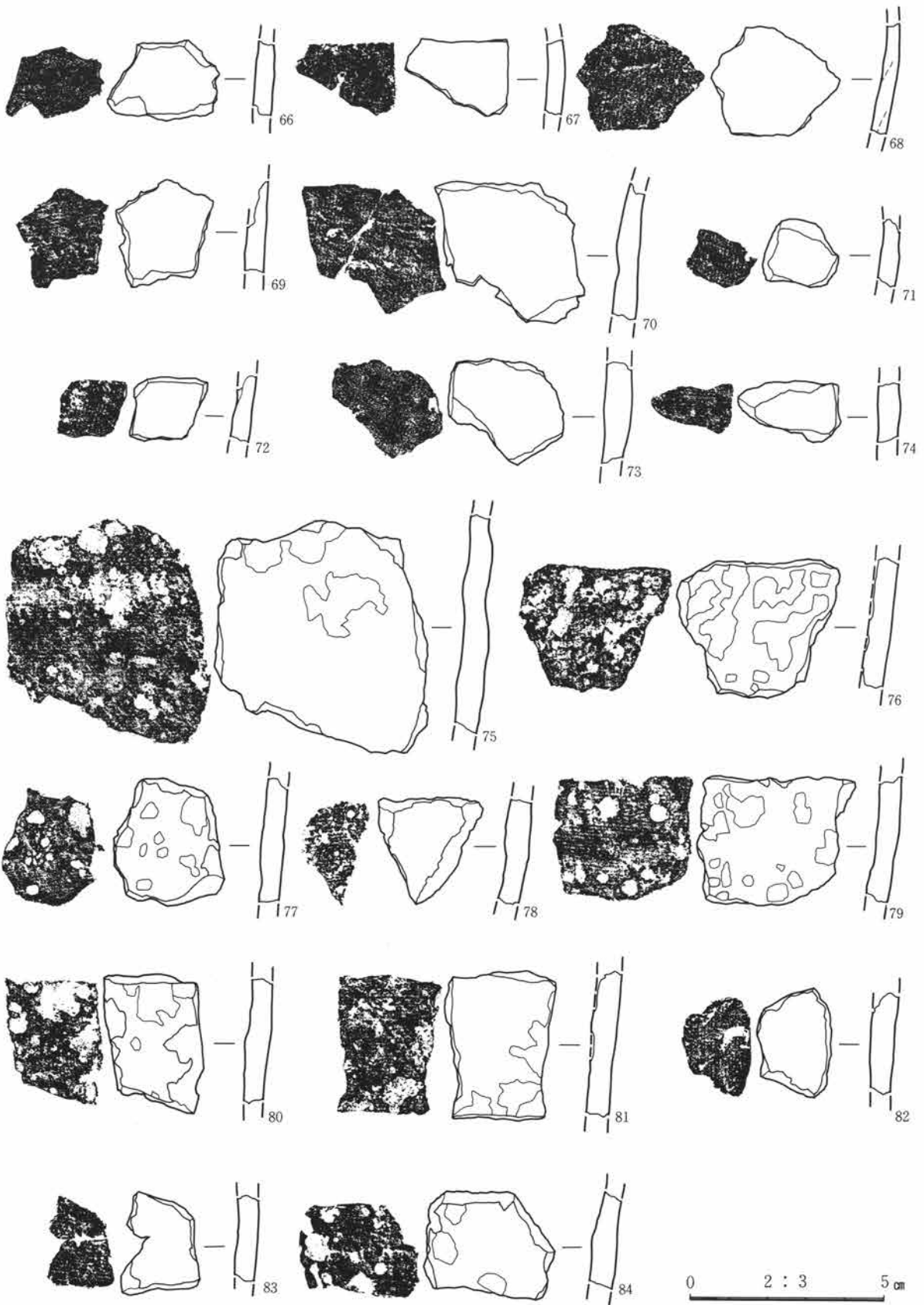
第11図 縄文草創期土器実測図(2)



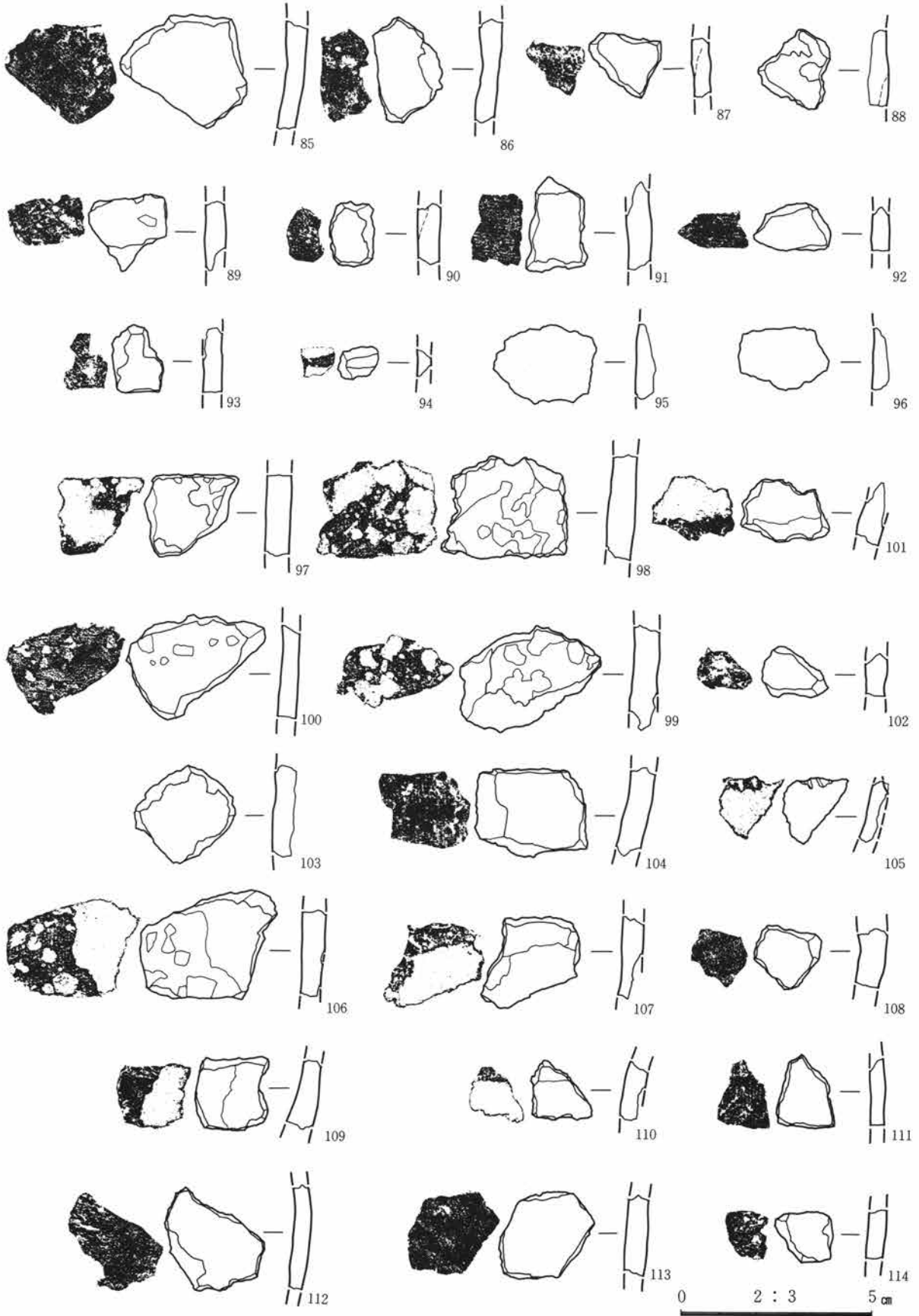
第12図 縄文草創期土器実測図(3)



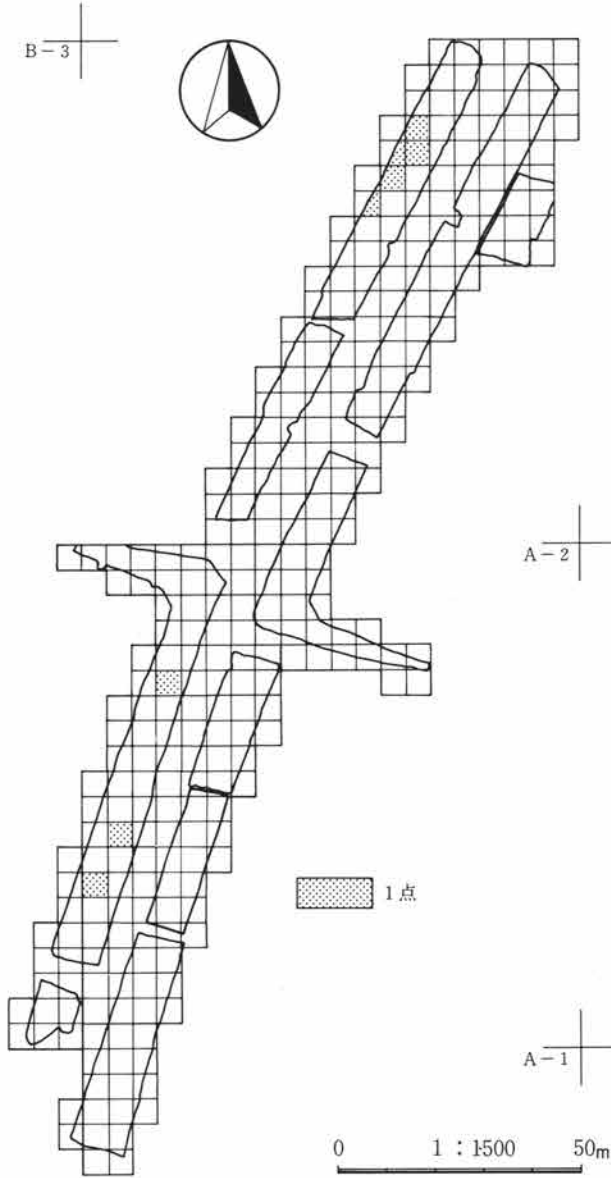
第13図 縄文草創期土器実測図(4)



第14図 縄文草創期土器実測図(5)



第15図 縄文草創期土器実測図(6)

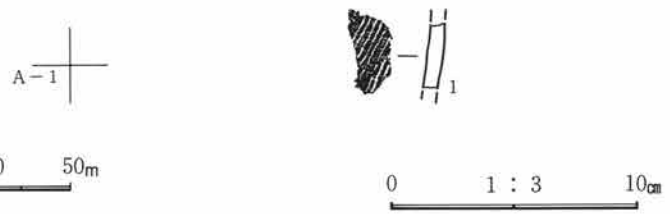


第16図 早期（燃糸文土器）遺物分布図

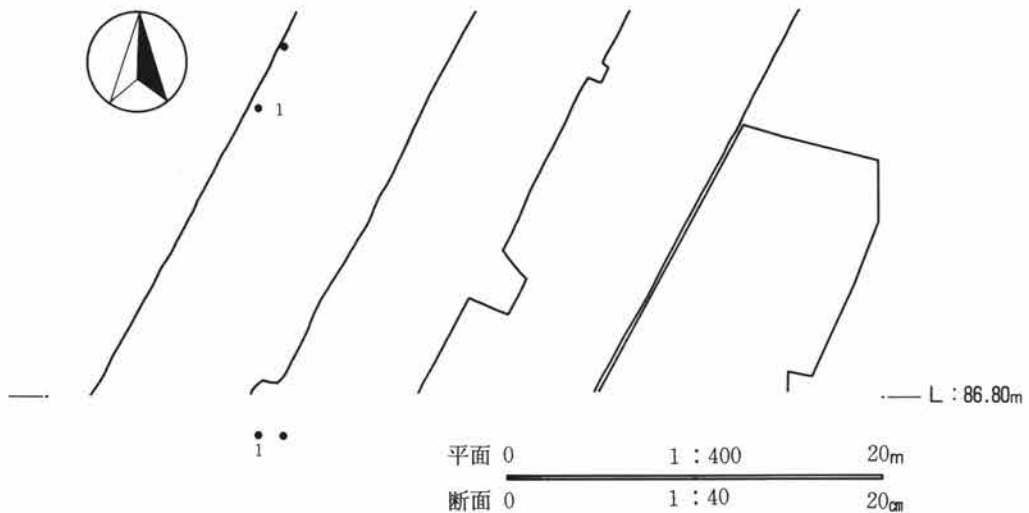
b. 早期（燃糸文土器）

早期に属する燃糸文土器が図化できるのは1点のみだが、他にも数点、北西区と南西区より出土している。特に注目されるのは、北西区のA-3-67・87・88・108・129グリッドにこの土器が集中して出土していることで、出土層位は3層である。標高は約86.60mである。この地区は北東区を中心とする草創期の出土はほとんど認められず、早期に入ってから、この地区に生活域が広がったことが想定される。さらに西側にその分布域は拡大しているものと考えられる。

なお、南西区の出土グリッドはA-2-117・239・280の各グリッドである。



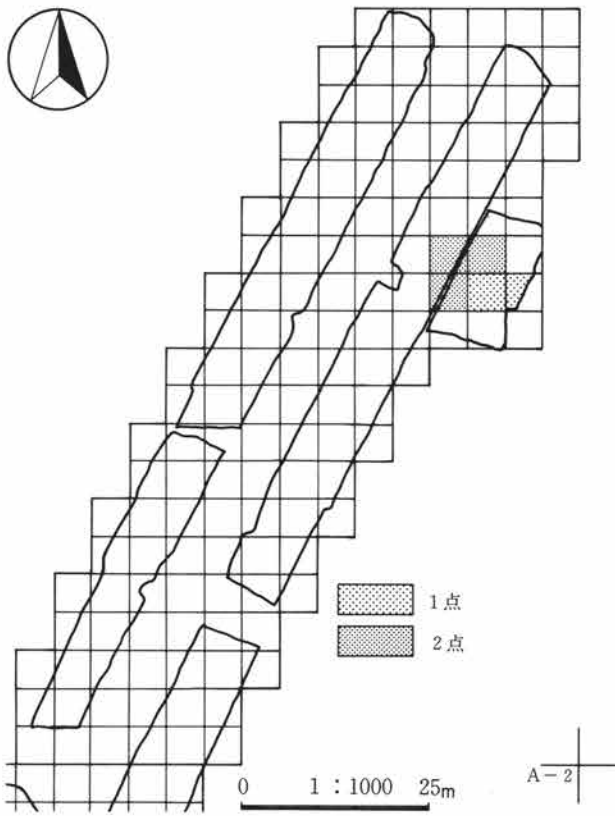
第17図 早期（燃糸文土器）遺物実測図



第18図 早期（燃糸文土器）遺物分布図

b. 早期（野島式土器）

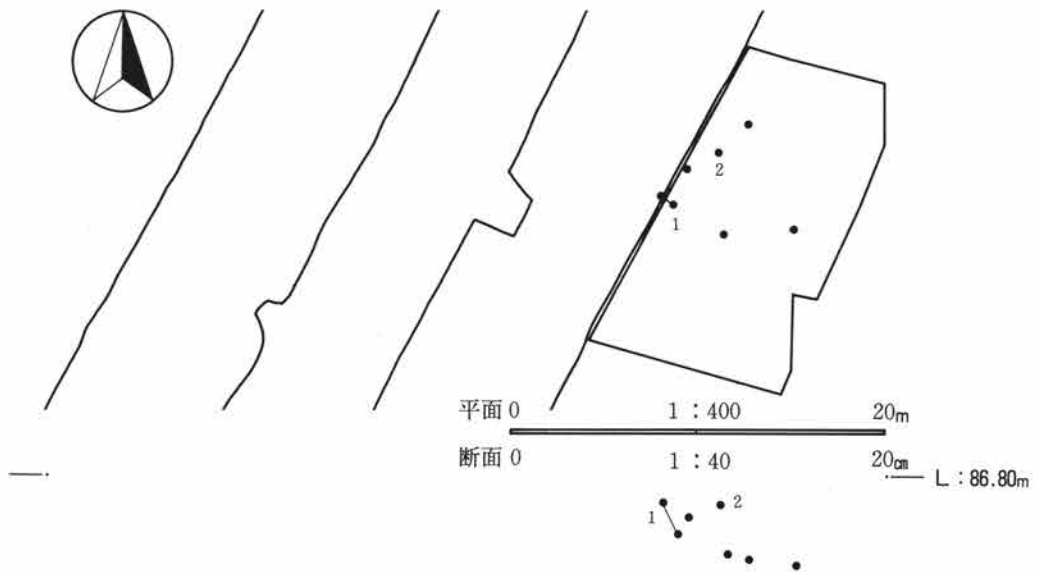
総数8点が北西区草創期土器群集中出土地区のみから出土している。土器片はA-3-123・124・144グリッドから各2点ずつ、A-3-142・143グリッドから各1点である。3層でも下層よりの出土が多い。標高は約86.34mから86.68mである。燃糸文土器の分布域とは異なっている。



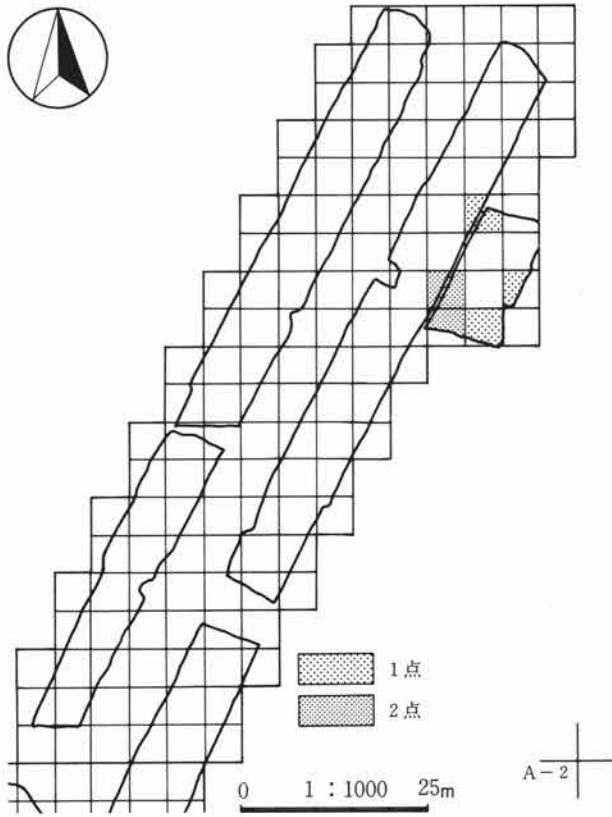
第19図 早期（野島式土器）遺物分布図



第20図 早期（野島式土器）遺物実測図



第21図 早期（野島式土器）遺物分布図



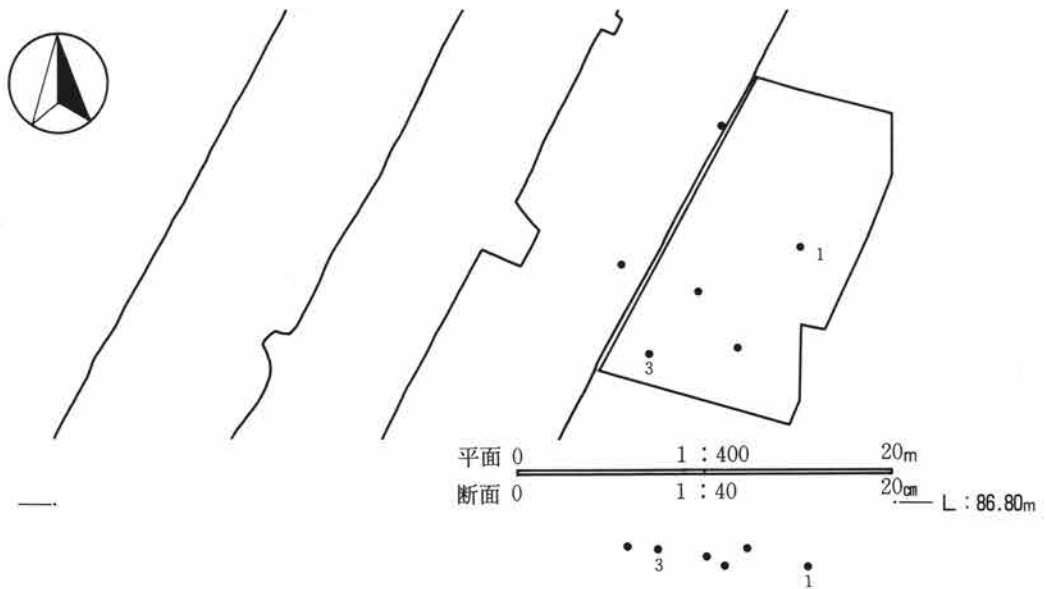
第22図 早期（条痕文土器）遺物分布図

b. 早期（条痕文土器）

総数7点が北西区草創期土器群集中出土地区から出土している。土器片はA-3-144・164グリッドから各2点、A-3-103・142・163グリッドから各1点である。野島式土器と同じく3層でも下層から出土している。標高は約86.45mから86.56mである。



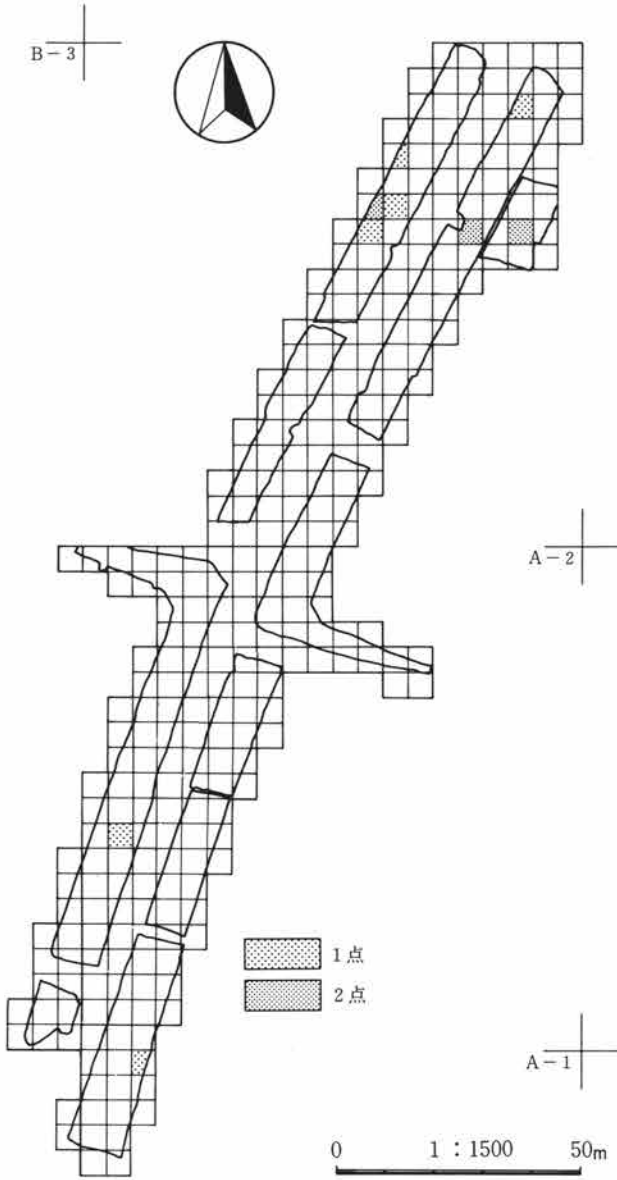
第23図 早期（条痕文土器）遺物実測図



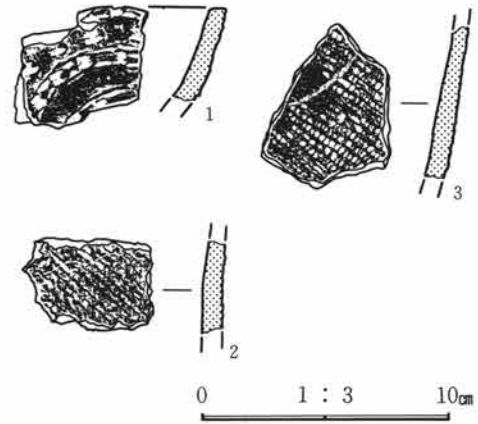
第24図 早期（条痕文土器）遺物分布図

c. 前期 (黒浜式土器)

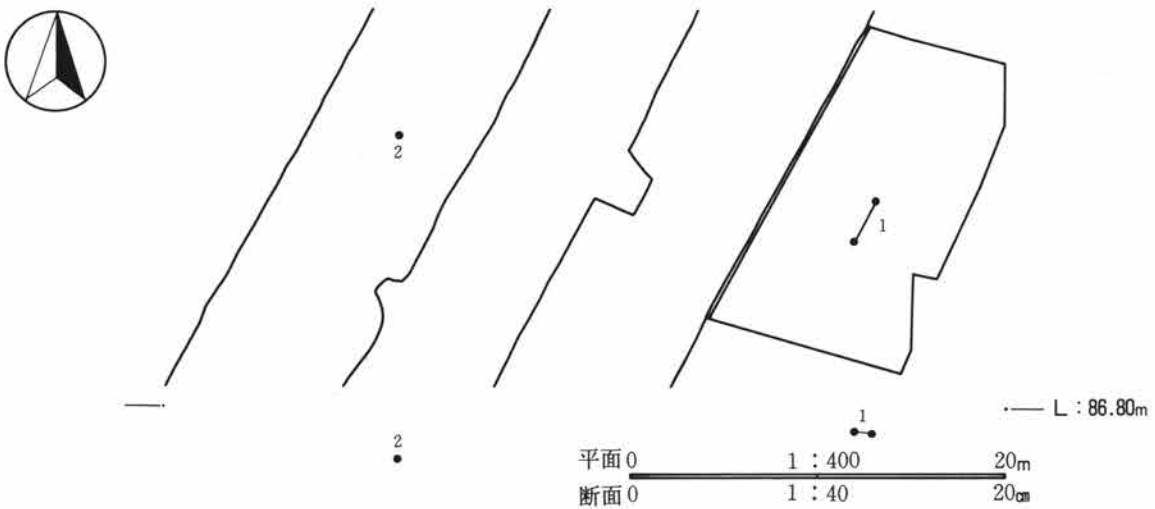
総数12点が北東・北西・南東・南西の4地区から出土している。土器片ではA-3-43・88・128・149、A-2-239、A-1-38グリッドから各1点、A-3-129・143・145グリッドから各2点である。うち、量的に多いのは北東・北西両地区で、3層の上層から出土している。標高は約86.54mから86.68mである。早期段階にくらべ、その分布域は広がっているといえよう。



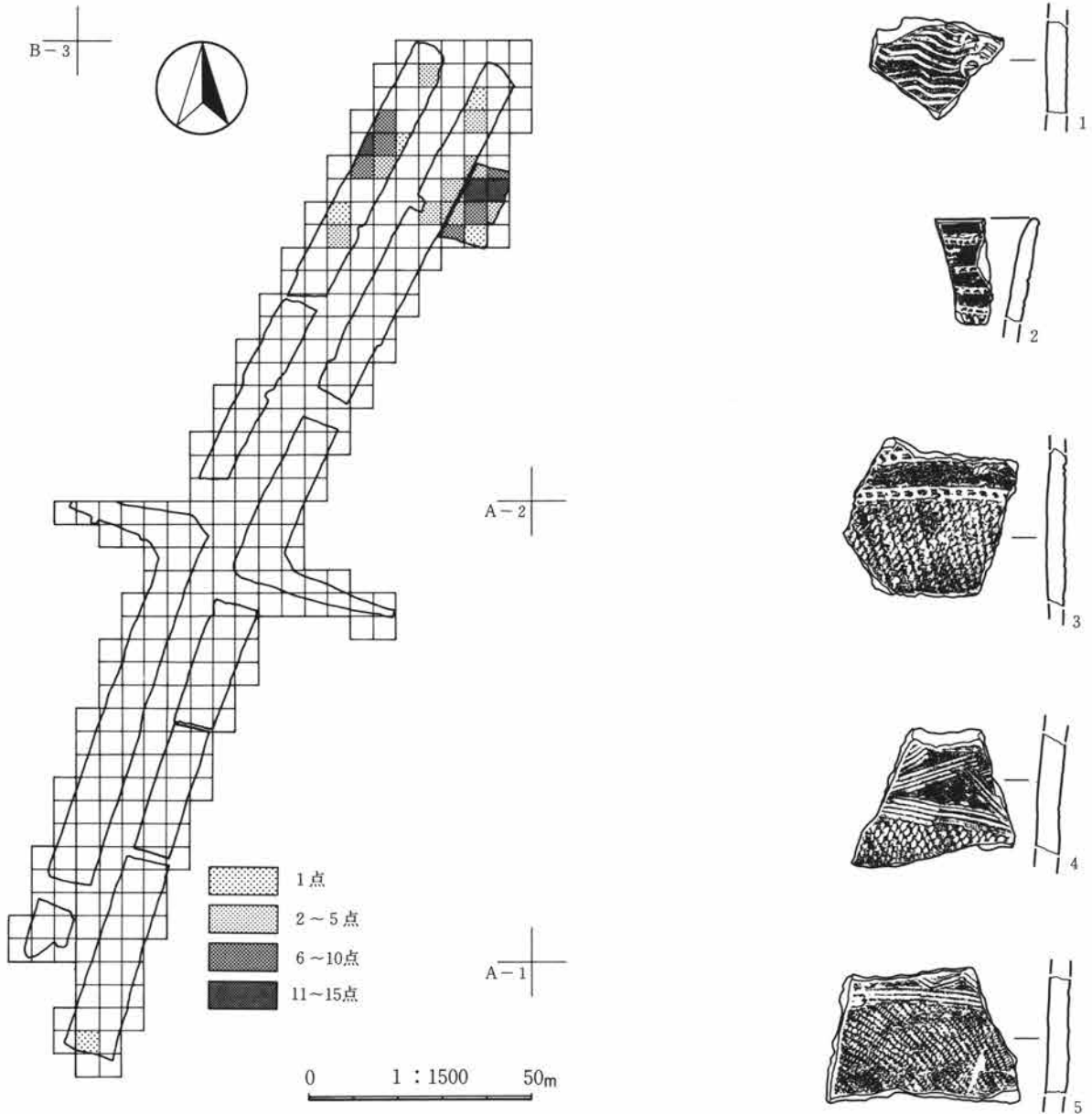
第25図 前期 (黒浜式土器) 遺物分布図



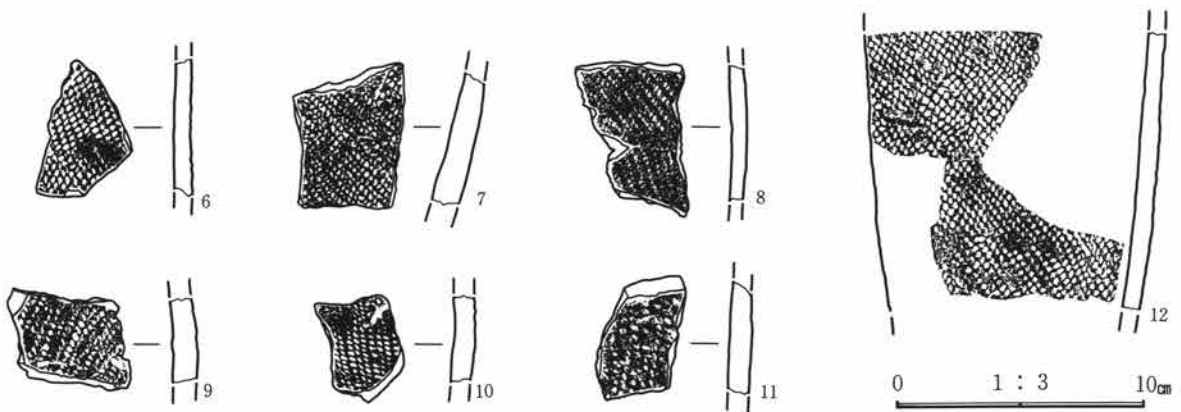
第26図 前期 (黒浜式土器) 遺物実測図



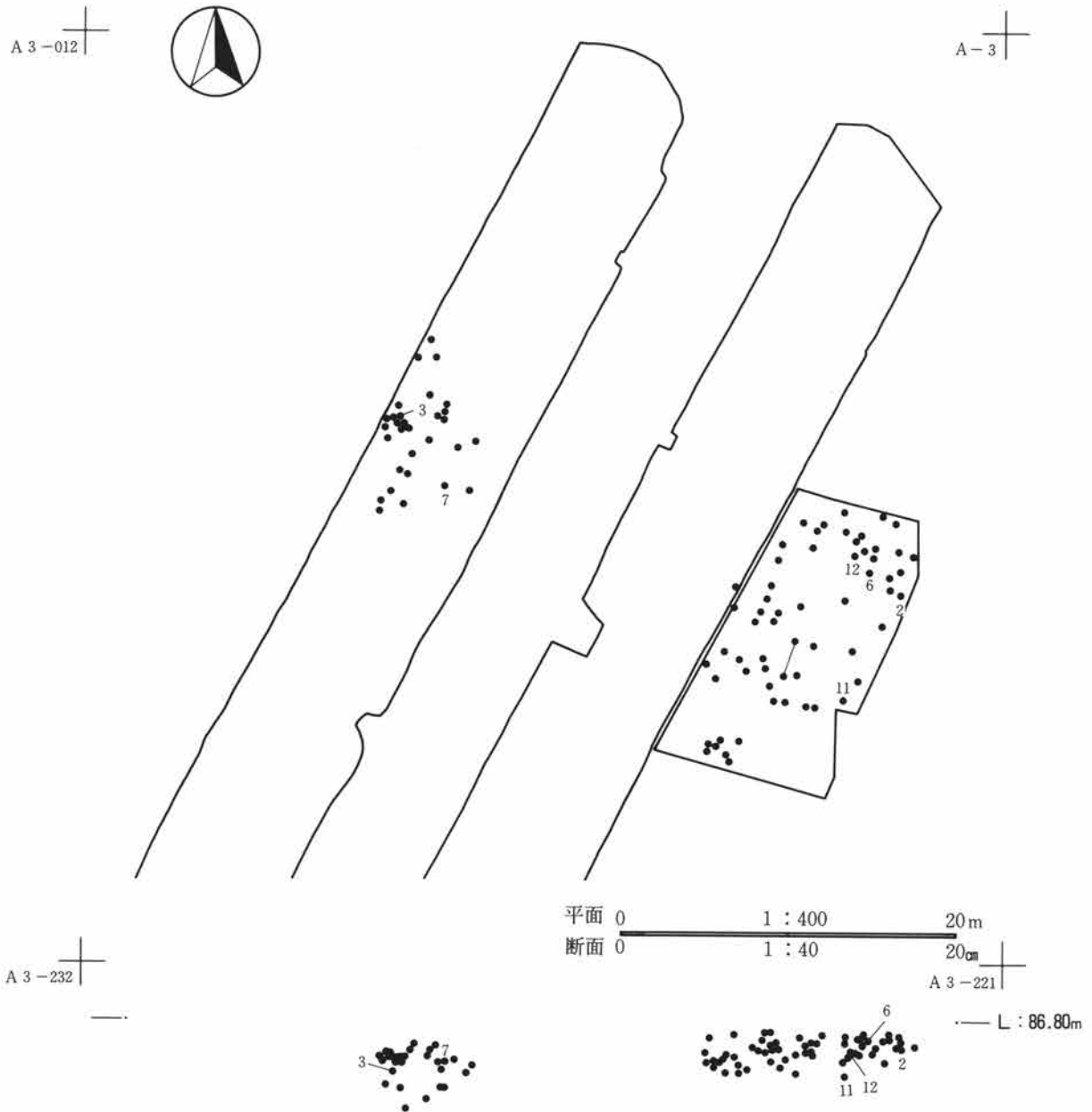
第27図 前期 (黒浜式土器) 遺物分布図



第28図 前期（諸磯式土器）遺物分布図



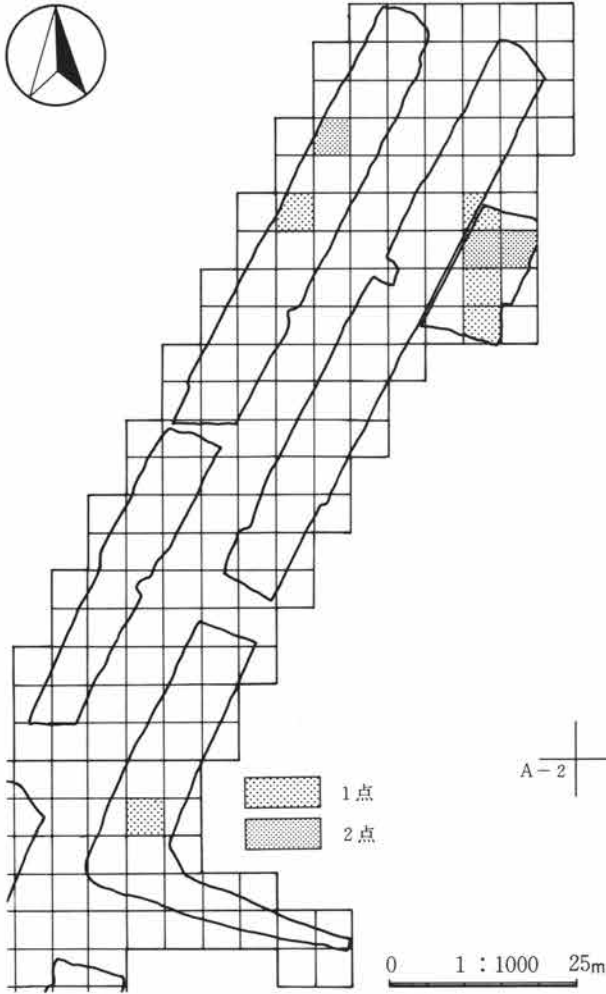
第29図 前期（諸磯式土器）遺物実測図



第30図 前期（諸磯式土器）遺物分布図

c. 前期（諸磯式土器）

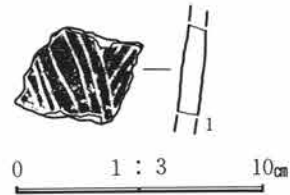
総数100点近くが北西部・北東部に集中して出土している。特に北東部では、まとまりを持って出土しており、10点以上出土しているグリッドは、A-3-87（10点）、88（11点）、122（14点）、123（12点）、143（10点）である。出土層位は3層中で、これ以前の早期土器と出土層位では区分できない。標高は約86.27mから86.74mである。いずれにせよ北東区には前期諸磯式土器の時期に明瞭な生活域があったことを示す。また黒浜式土器とその分布域を同じくしている。



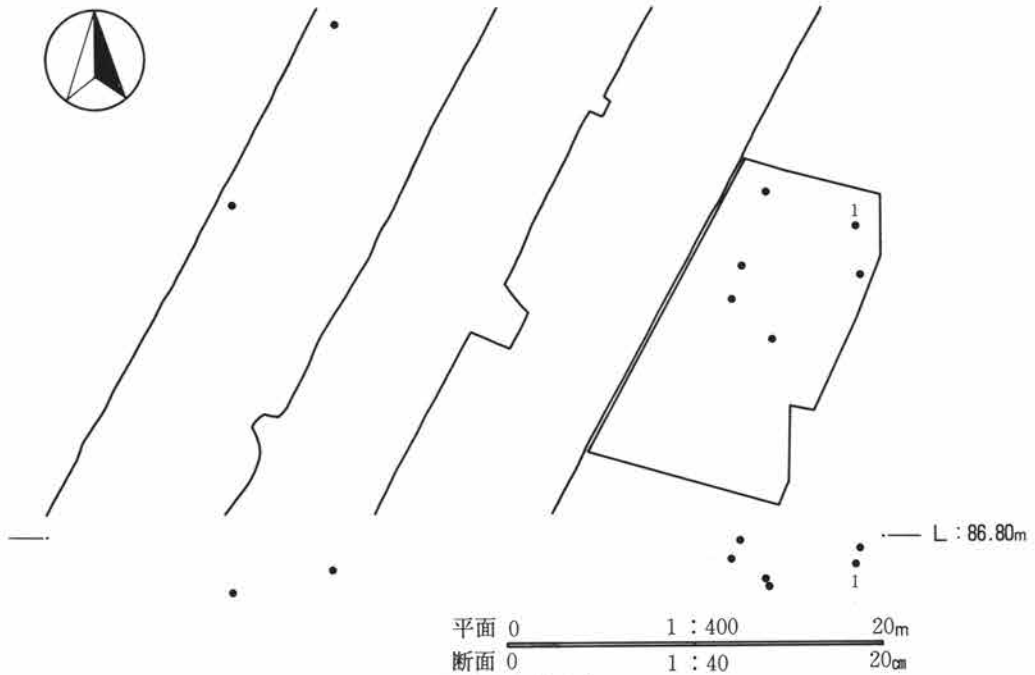
第31図 中期前半遺物分布図

d. 中期前半

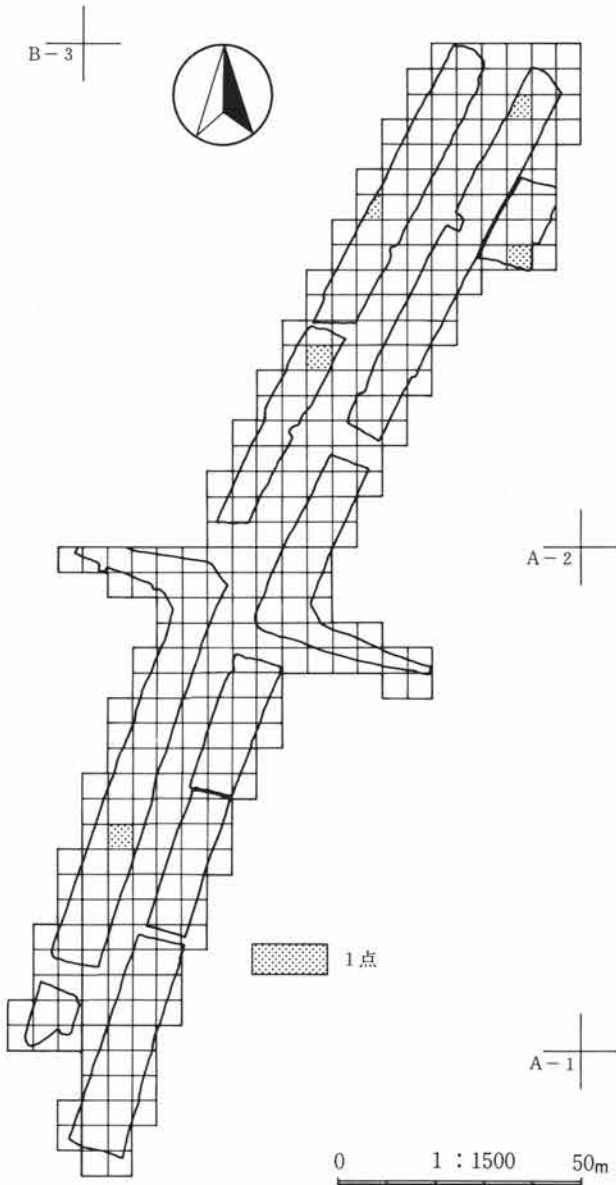
総数11点が北東部・北西部を中心に出土している。土器片はA-3-67・122・123グリッドから各2点、A-3-103・108・143・163グリッドから各1点である。図化したものは五領ヶ台式土器である。出土層位は3層中で、標高は約86.50mから86.80mである。先行する早・前期の土器群との分離は認められない。



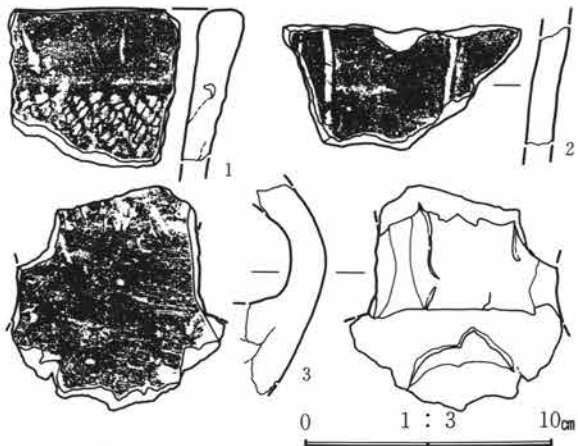
第32図 中期前半遺物実測図



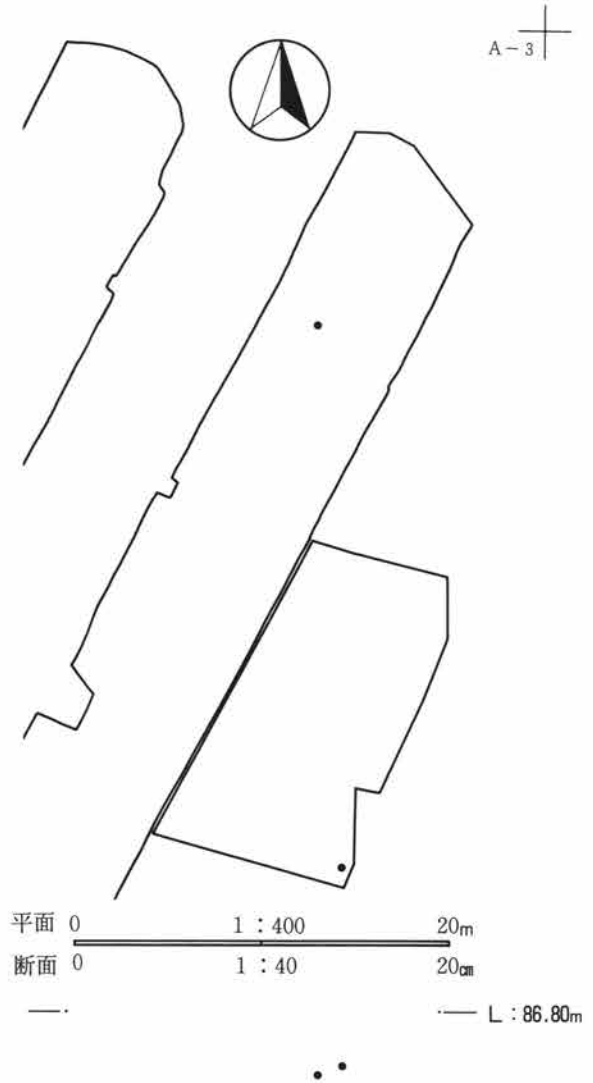
第33図 中期前半遺物分布図



第34図 中期後半遺物分布図



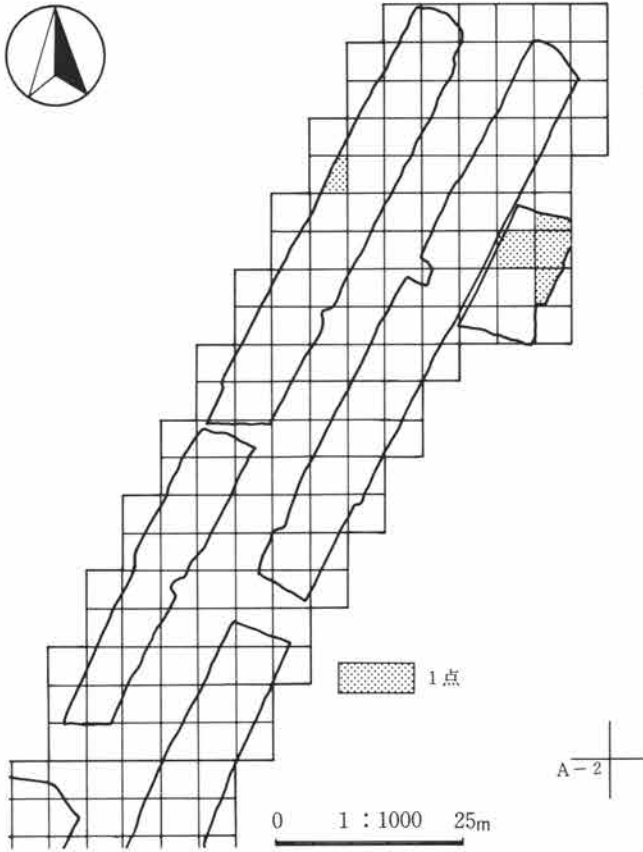
第35図 中期後半遺物実測図



第36図 中期後半遺物分布図

d. 中期後半

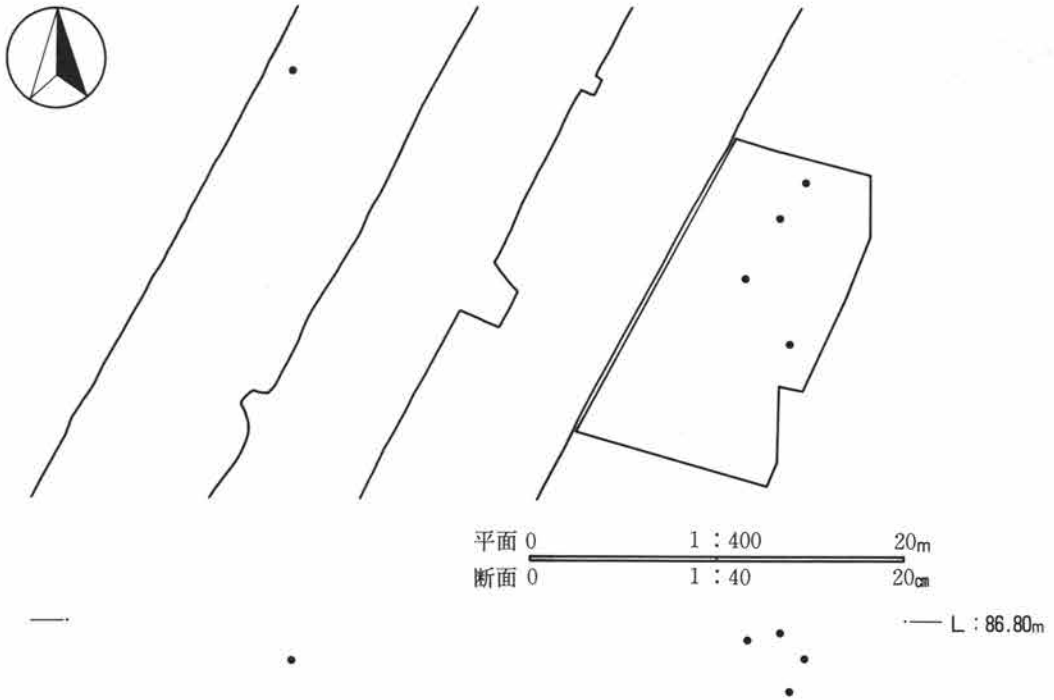
総数5点が北東部・北西部を中心に出土している。土器片はA-3-43・129・163・251、A-2-239グリッドから各1点である。図化したものは加曾利E4式土器である。出土層位は3層中である。標高は約86.46mから86.52mである。



第37図 後期遺物分布図

e. 後期

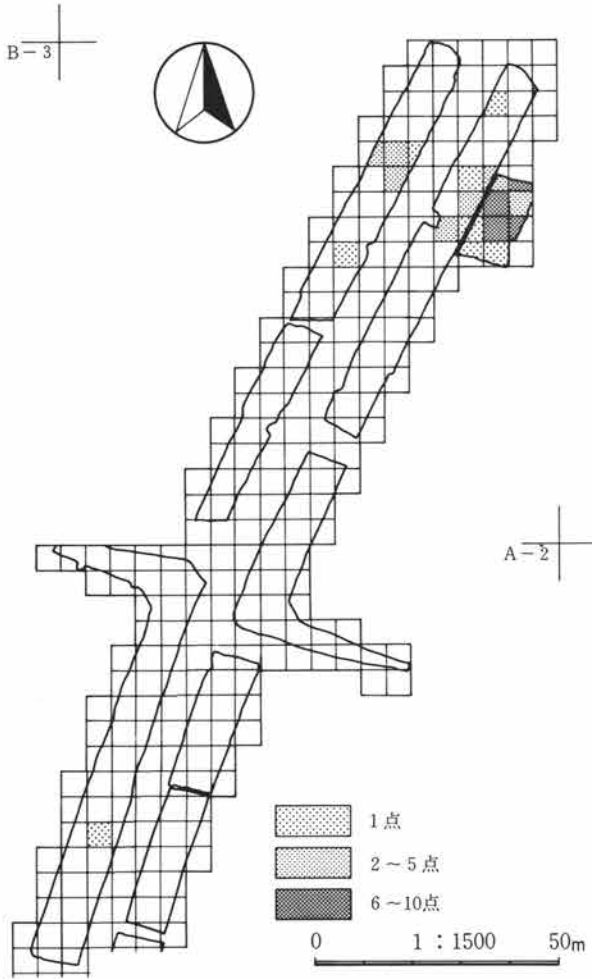
後期は出土点数も5点と少なく図化できるものが無かった。北西区を中心に、北東区からも出土し、土器片はA-3-88・102・122・123・142グリッドから各1点出土している。3層中でも上層よりの出土が多い。標高は約86.42mから86.72mである。前期以降、中期から後期にかけて出土量は減少する傾向が認められる。



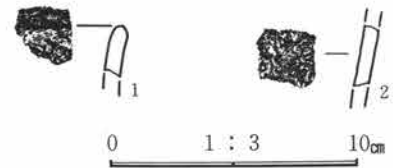
第38図 後期遺物分布図

f. 無文土器群

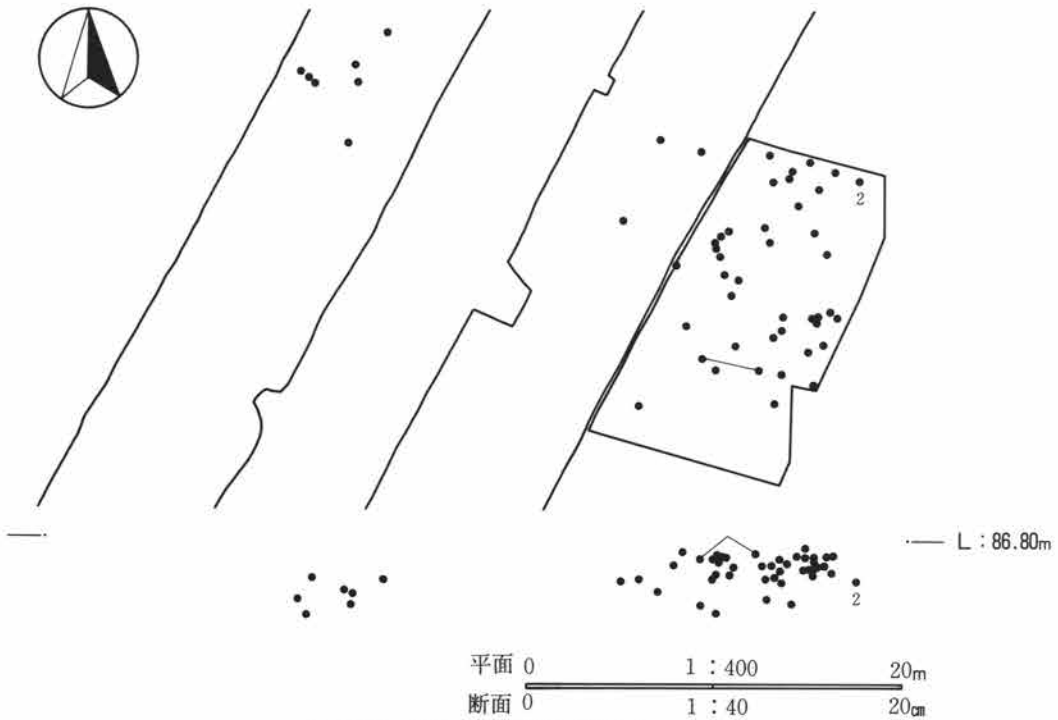
総数50点近くが北半部の特に北西部において集中して出土している。6点以上出土しているグリッドは、A-3-102 (6点)、123 (10点)、142 (9点)、143 (8点) である。2点以上5点まで出土しているグリッドは、A-3-87 (3点)、88 (3点)、103 (3点)、107 (2点)、122 (3点)、124 (3点)、145 (3点) である。1点出土しているグリッドは、A-3-21・41・43・44・86・104・144・163・164・169である。出土層位は3層の上半部を中心に出土している。標高は約86.40mから86.76mである。いずれの土器片も細片であるために時期判定は明確ではないが、その多くは早期に属するものと考えられる。



第39図 無文土器群遺物分布図



第40図 無文土器群遺物実測図



第41図 無文土器群遺物分布図

3. 出土石器

a. 局部磨製石斧 (PL44)

石材は灰褐色を呈した黒色頁岩を使用した、局部磨製石斧である。器長は170mm、最大幅81mm、器厚47mmである。重量は720gである。両側縁はほぼ並行するが、刃部に最大幅をとる。正面形態は刃部寄りで幅広となる撥形を呈している。全面に剝離が及んでいるので明確には把握できないが、大形の河原石を素材にし、打ち割った剝片を素材にしているものと思われる。

器体中央部で最も厚く、基部及び刃部側が薄く山形となる。裏面は両側縁からの細かな調整剝離が施され、僅かに湾曲しているが、偏平な作りになっている。横断面は山形状となる。また、刃線は鴨の嘴状を呈し、湾曲している。

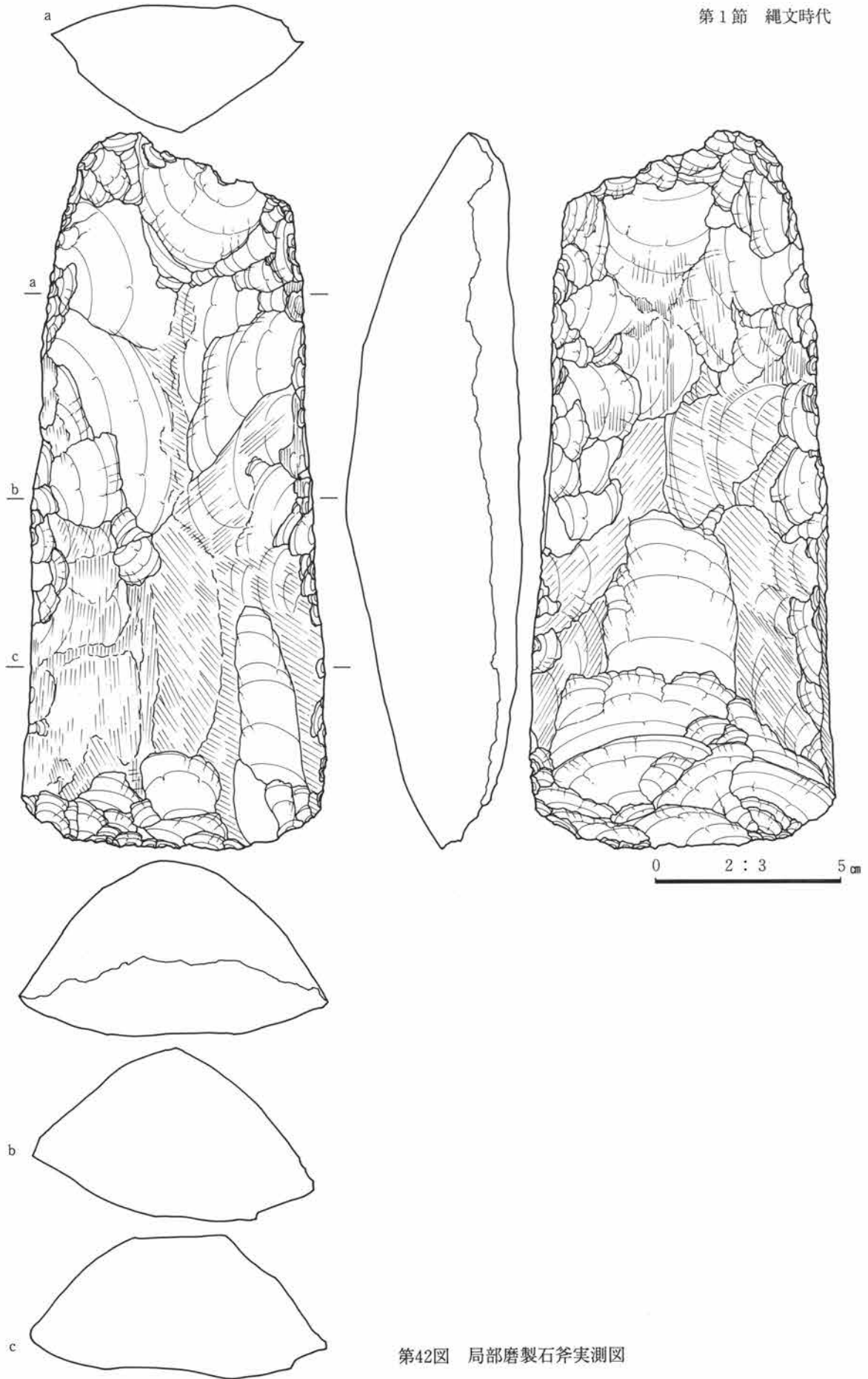
研磨痕は正面の器体中央部より刃部側には、明瞭に認められる。また、裏面では刃部右側にも顕著な研磨痕が認められる。一方、刃部よりの両側縁も研磨されている。

正面刃部には、研磨した後の剝離痕が認められる。これは、使用時の破損と考えられる。また、裏面には正面側から刃部に対して、直角方向より剝離が施されている。これは、刃部再生のための剝離痕であろう。特に、裏面基部よりでは、摩耗痕が顕著に認められる。正面基部右側には、使用のためと思われる破損が認められる。製作時の平面形態は、ほぼ隅丸方形を呈していたであろう。部分的に摩耗している。

以上のことより、本資料は長者久保・神子柴文化の局部磨製円鑿に類似する。次に、石斧形態の計測比較を行ってみる。全長に対する最大幅の比率は、約2.1である。全長に対する刃部研磨痕の比率は、約1.9である。長者久保遺跡の円鑿は、3.0と2.6である。長者久保例に類似するが、器長に対して器幅が狭長な新潟県辻ノ内遺跡のものは、4.4と4.5である。小島田八日市の石斧は、辻ノ内例よりも長者久保遺跡の円鑿に近い形態を呈している。ただし、裏面刃部右側にも研磨痕が認められ、長者久保例とは異なる。愛知県酒呑ジュリンナ遺跡の出土例は片刃形態であるが、刃部先端のみ両面が研磨され両刃状になる製作方法との類似もうかがわれる。刃部再生加工が施される以前の形態については、神子柴遺跡の石斧のように刃線は平鑿形を呈していたのであろう。これより、土器出現期における局部磨製石斧の中でも、長者久保遺跡の円鑿に類似する古い様相を具備した資料と解釈されよう。長者久保と辻ノ内例の間に位置付けられ、酒呑ジュリンナ例よりも古い段階の石斧であろう。

また、長者久保・神子柴文化の石斧は、群馬県内で発掘および表採資料を合わせ、11例あまり確認されている。月夜野町洞遺跡では、長野県宮ノ入遺跡の両側縁が平行し、刃部先端のみ両刃状になるものが出土している。同町の石倉では埼玉県西谷遺跡例に類似した資料が出土している。宮ノ入例に類似する資料は、大泉町御正作遺跡や藤岡市田島遺跡でも出土している。田島遺跡資料はやや古い可能性があるかも知れない。その他、境町神谷遺跡では山形県日向遺跡や新潟県壬遺跡に類似する、両刃でかなりの部分研磨された資料が出土している。これより、本遺跡で出土している石斧は、現在県内で発見されている資料の中では、最も古く位置付けられるものであろう。なお、別地点から隆起線文土器が出土している。これらの隆起線文土器は、細隆線文土器の新しい段階から、微隆線文土器段階に至る資料である。よって、石斧と土器とは別時期の所産と解釈されよう。

なお、この石斧は27号井戸（中近世）よりの出土で、層位・出土状況とも明瞭でない。

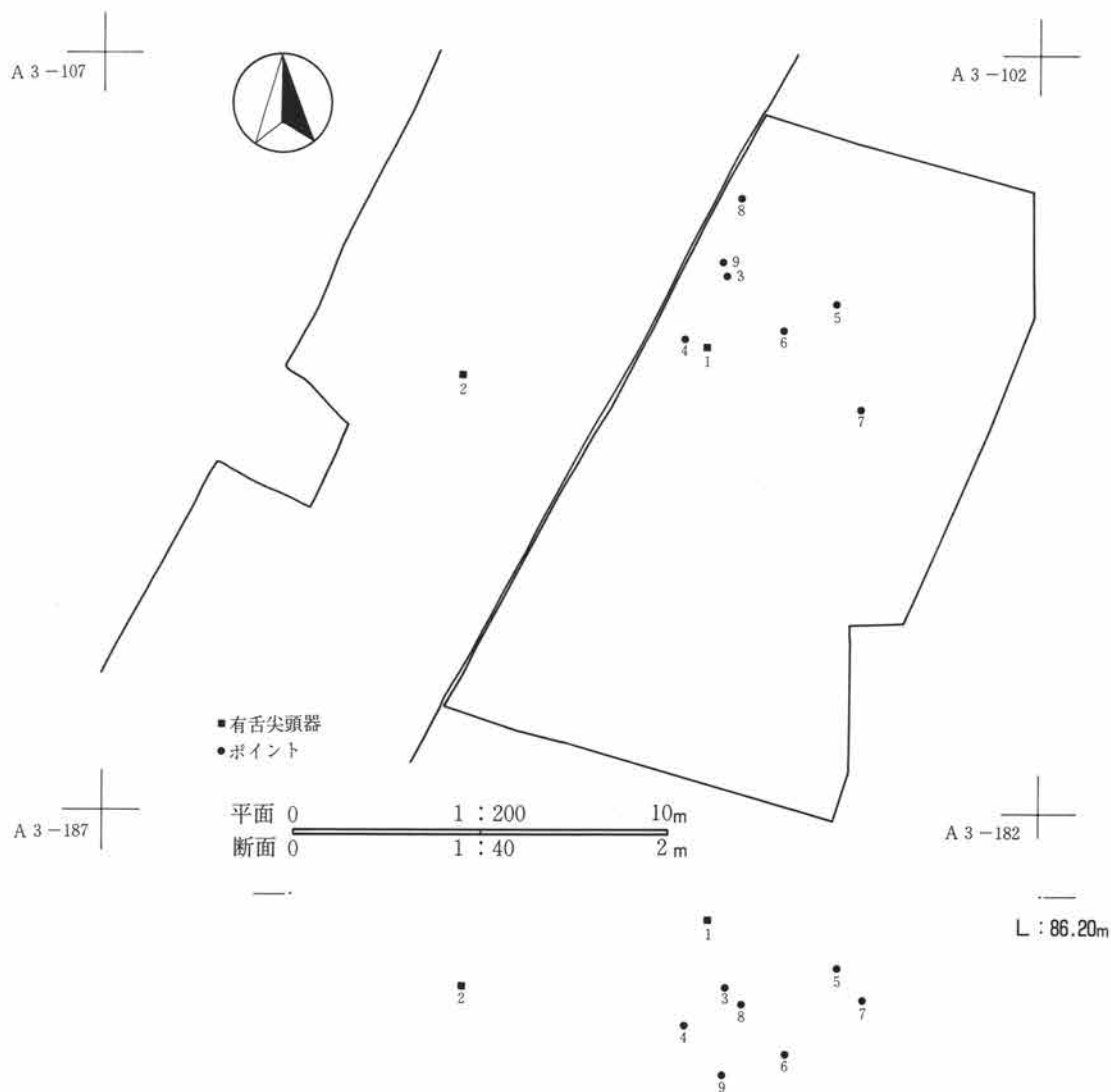


第42図 局部磨製石斧実測図

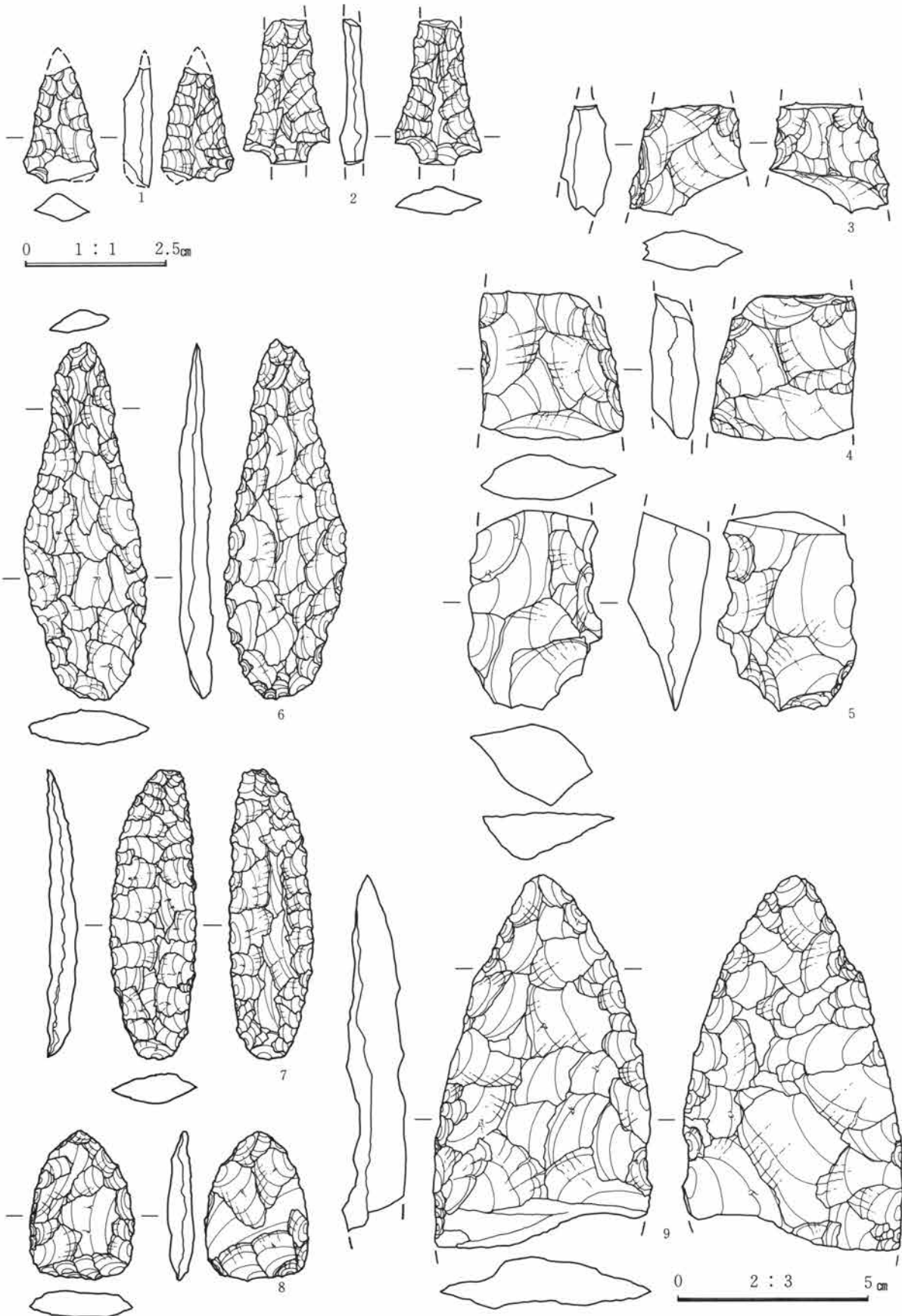
b. 有舌尖頭器・ポイント

2点の有舌尖頭器および7点の尖頭器が出土している。分布は調査区の北東よりややまとまるが、他の石器類の分布と区別することはできない。垂直分布も同様である。土器の分布と比較しても、他の石器類とほぼ同様な分布を示すので、特に相関関係は見いだせない。

有舌尖頭器は比較的小型で、両側がやや内側に湾曲し、短いかえしと細く作りだした基部を持つ。剥片を素材とし、細かな押圧剥離によって調整されている。いずれの資料も基部が欠損しているため全体の形状は明確ではないが、基部が長めで先端が尖る形態のものと考えられる。尖頭器は、大きさ・形態ともに様々である。比較的粗い調整で整形された大形でやや厚めのもの、押圧剥離によって丁寧に調整された薄手で細身のもの、剥片の周辺にのみ調整を加えた小型のものが見られる。大形のものには全て破損しているが、木葉形を呈するものと考えられる。細身のもの、基部が丸まり器体の下半に最大幅がくるものと（第44図-6）平面形が半月形を呈するものがある。（第44図-7）



第43図 有舌尖頭器・ポイント分布図



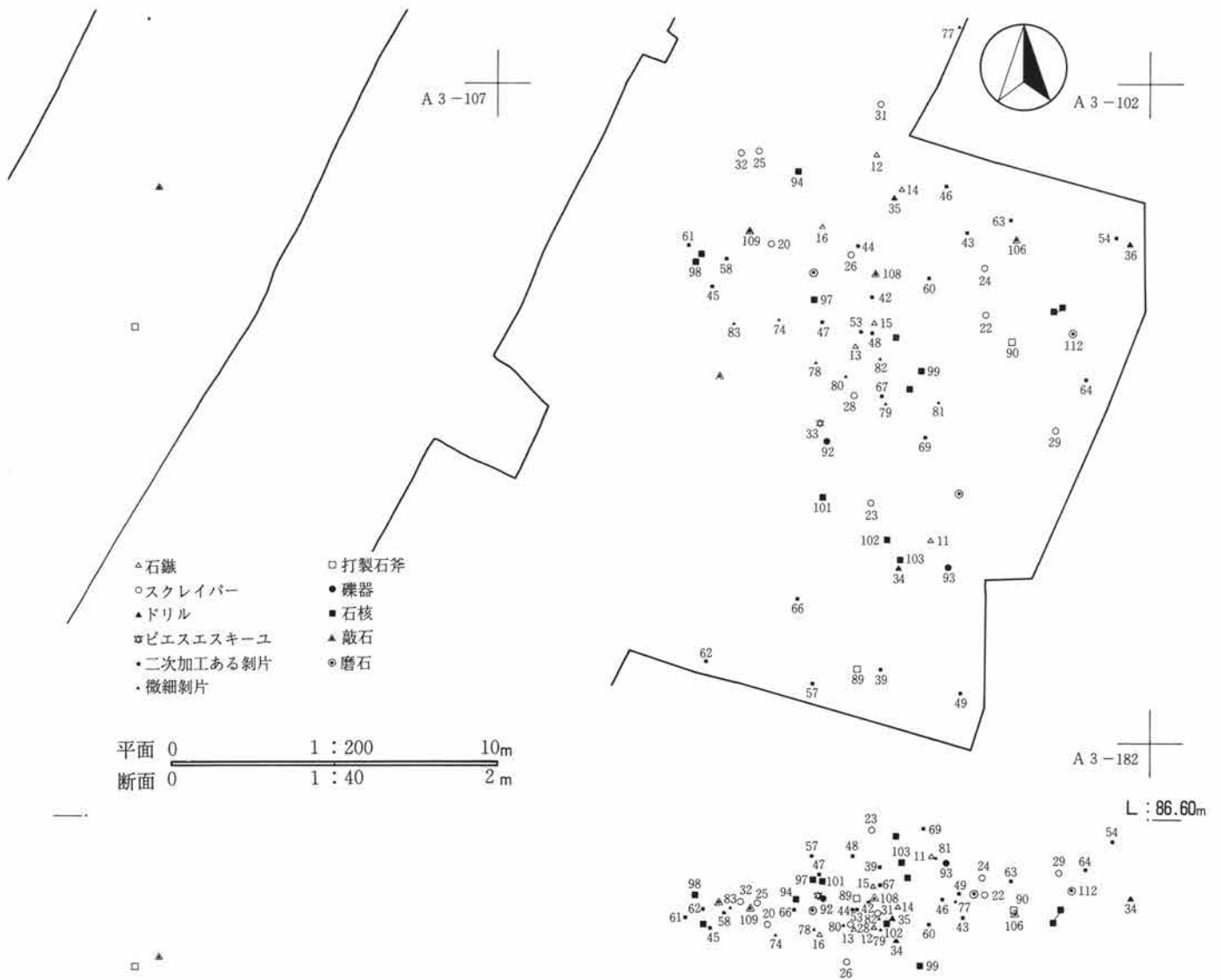
第44図 有舌尖頭器・ポイント実測図

c. その他の石器群

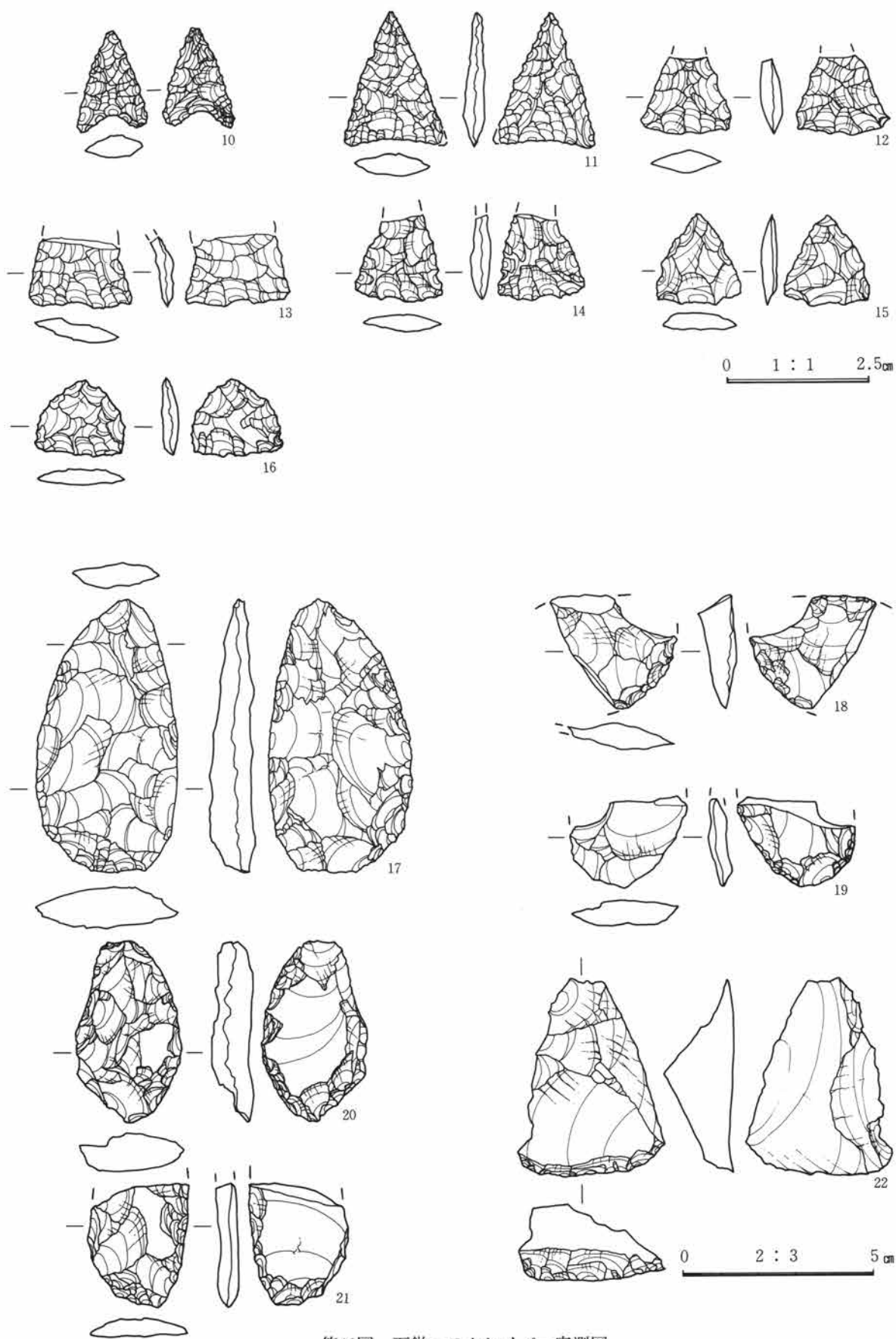
石器類の分布は、調査区の北東よりに片寄り、南西では分布が途切れる。ただし、南側には数点分布し、南側調査区外に広がる可能性はある。器種ごとの差は、平面・垂直分布ともに見られない。

石器は、石鏃、スクレイパー、ドリル、ピエスエスキュー、ノッチ、打製石斧、礫器、磨石、敲石などの他に、二次加工・微細剥離痕ある剥片、石核、抉状耳飾り、剥片類など総数800点あまりである。石鏃・打製石斧を除けば、定形的なものはみられないが、中では両面全面を調整し、やや幅広で厚みのある下端を片刃の篋状に仕上げたスクレイパーが注目される。

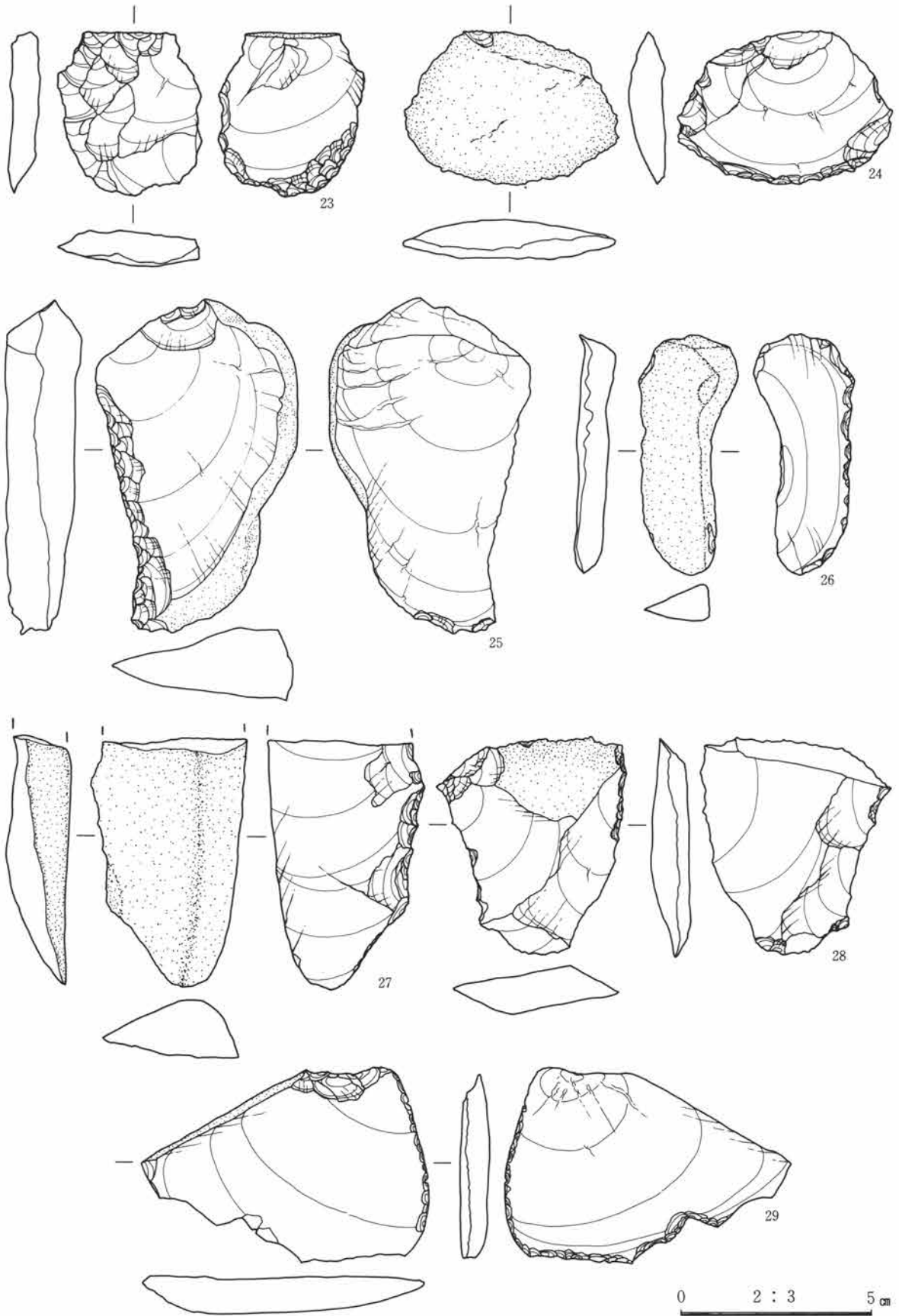
母岩数はかなり多く、同一の母岩別資料としてまとまるものはほとんど無い。接合するものもごく稀れである。従って、遺跡内で剥片剥離などを含む石器製作が行われた可能性は低い。また同一の石材であっても風化の度合いがかなり異なり、先の母岩別資料・接合資料の在り方とも併せて、各種雑多な時期の石器が混在しているものと推測される。



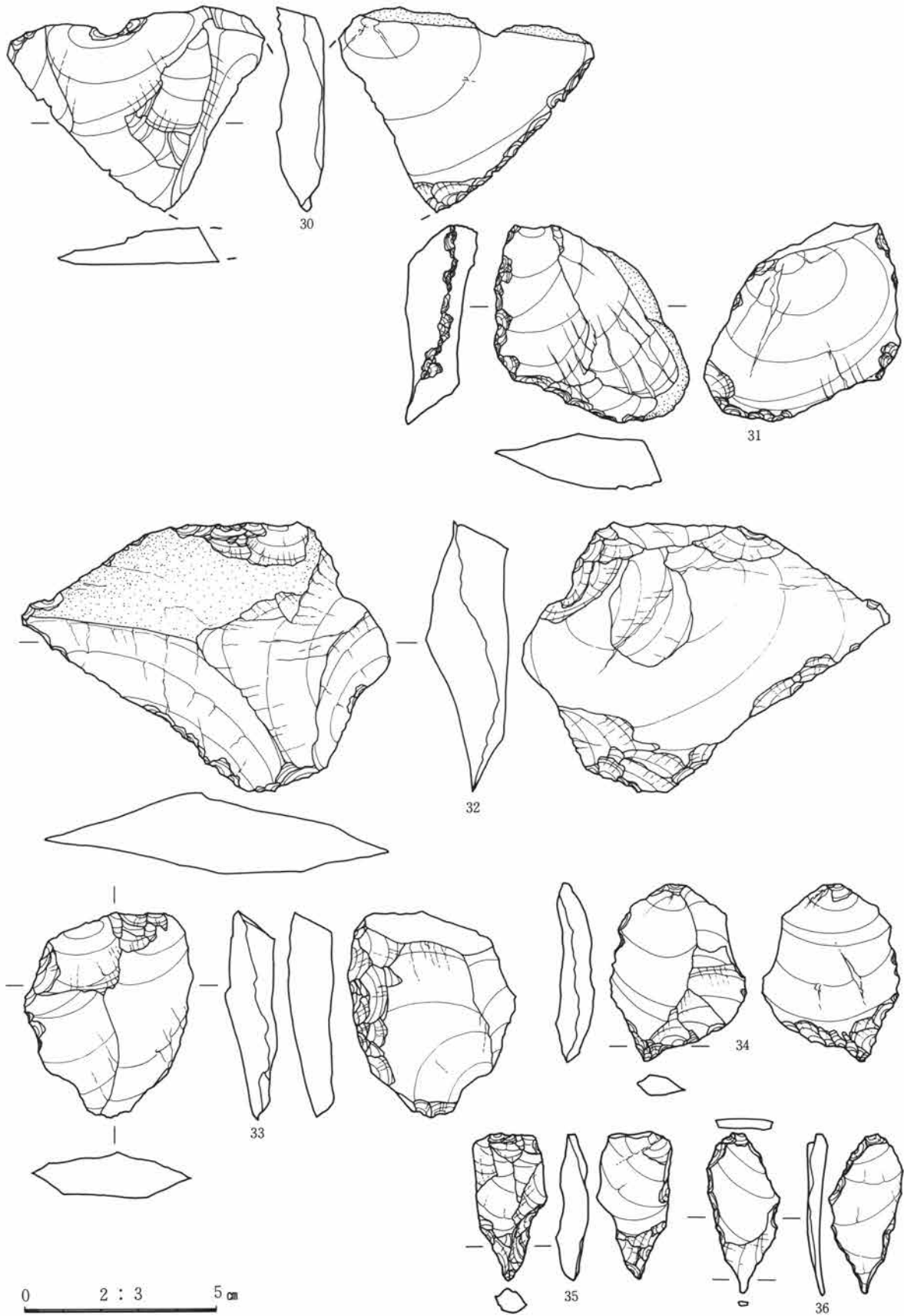
第45図 石器群遺物分布図



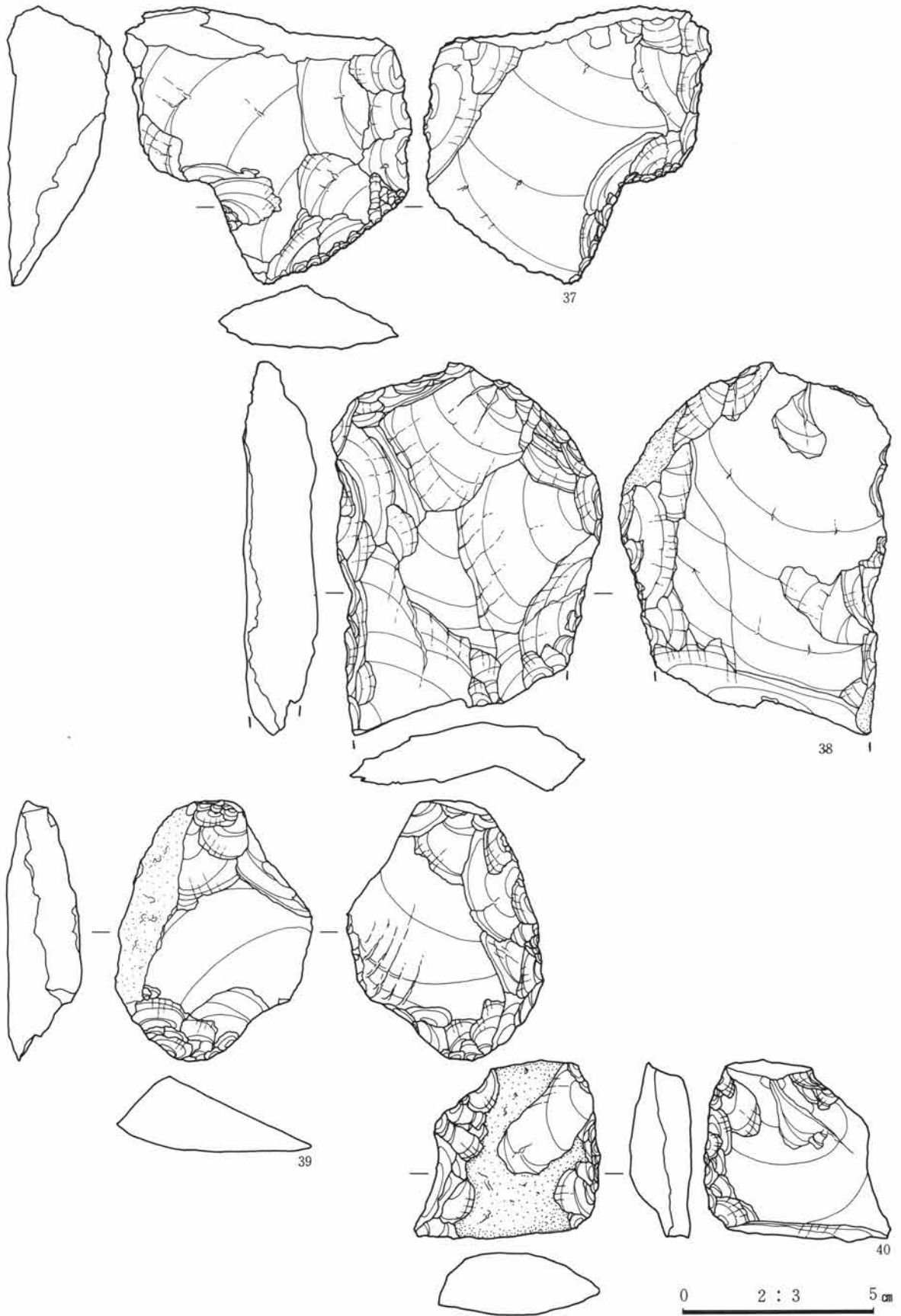
第46図 石鏃・スクレイパー実測図



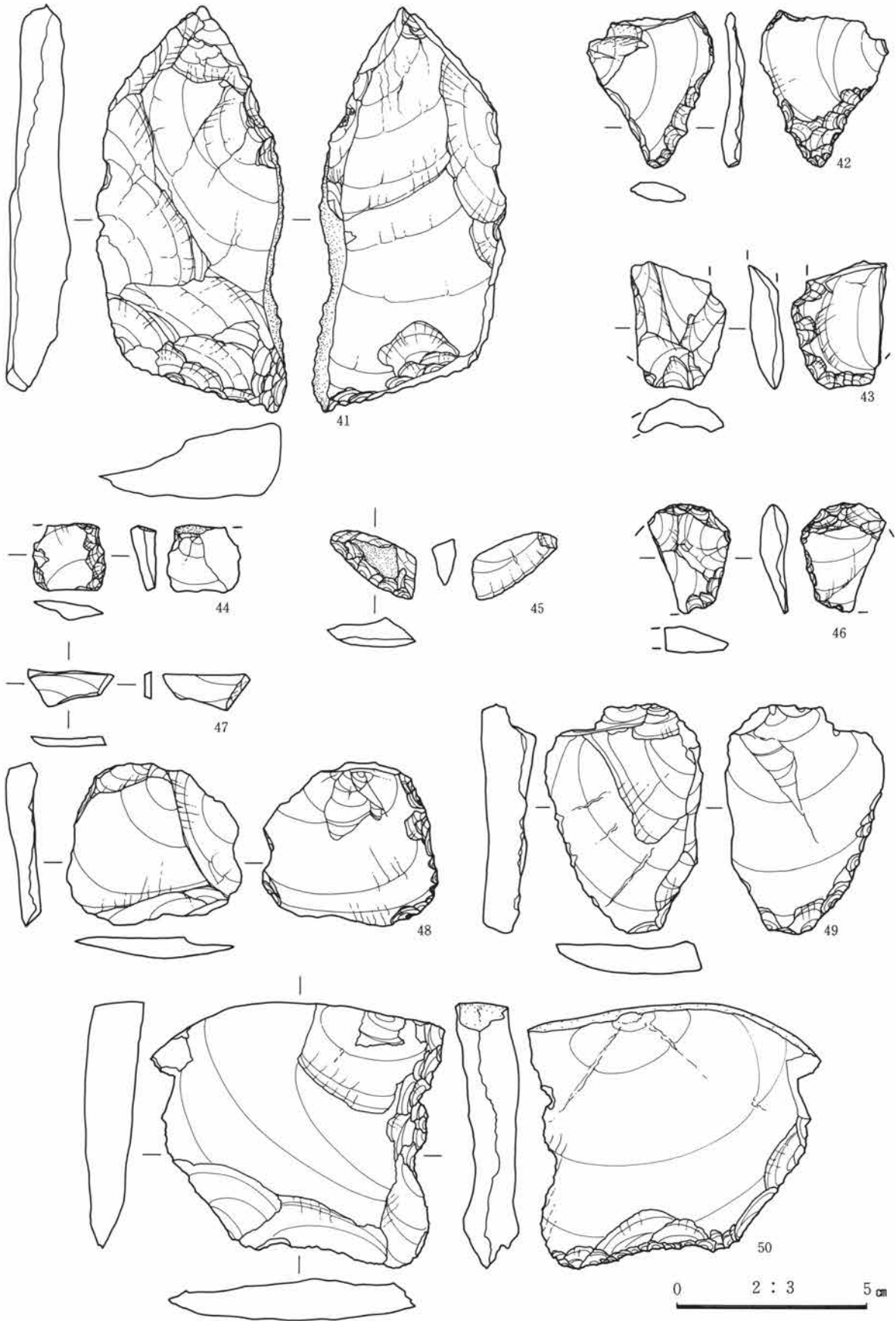
第47図 スクレイパー実測図



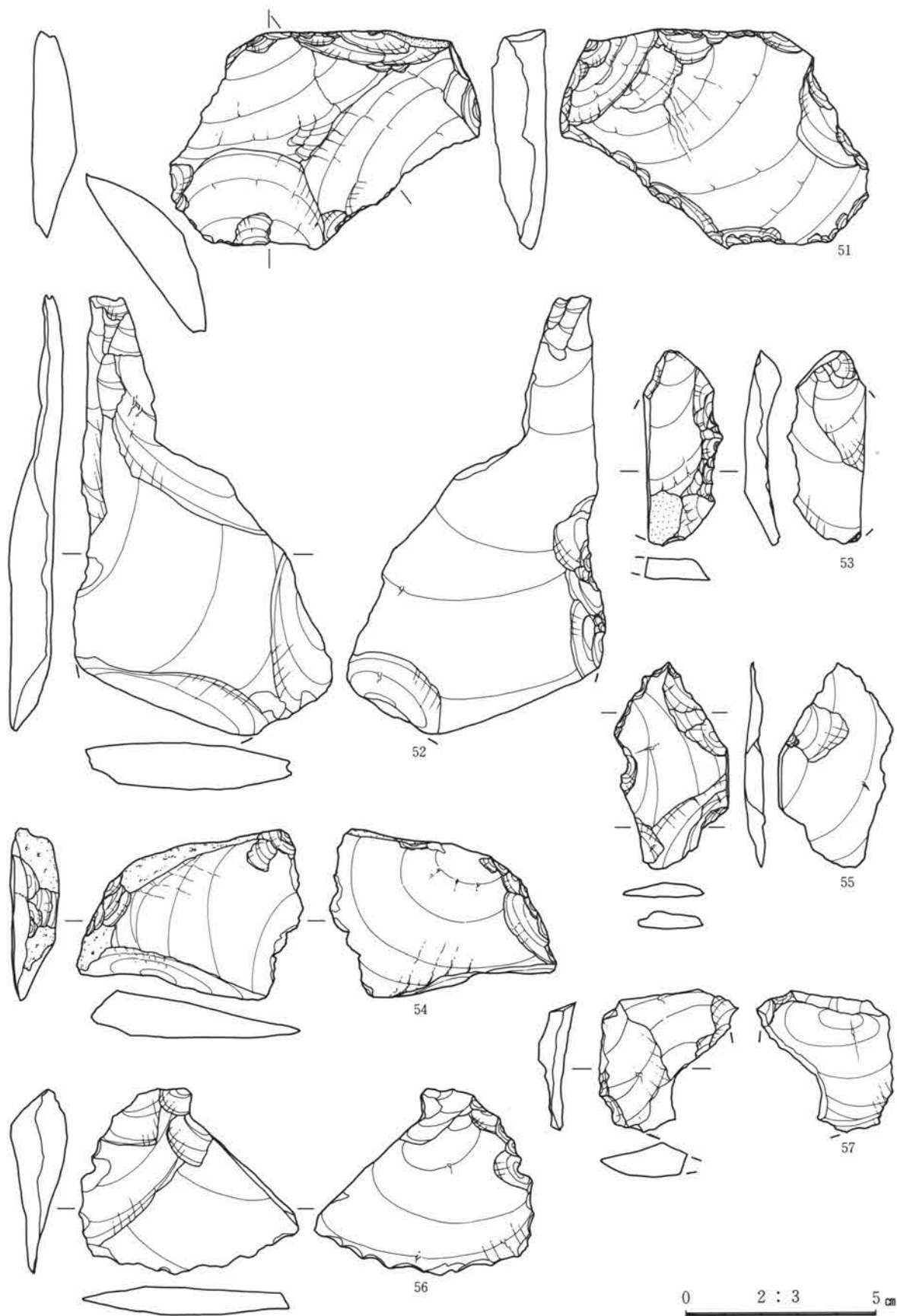
第48図 スクレイパー・ピエスエスキーユ・ドリル実測図



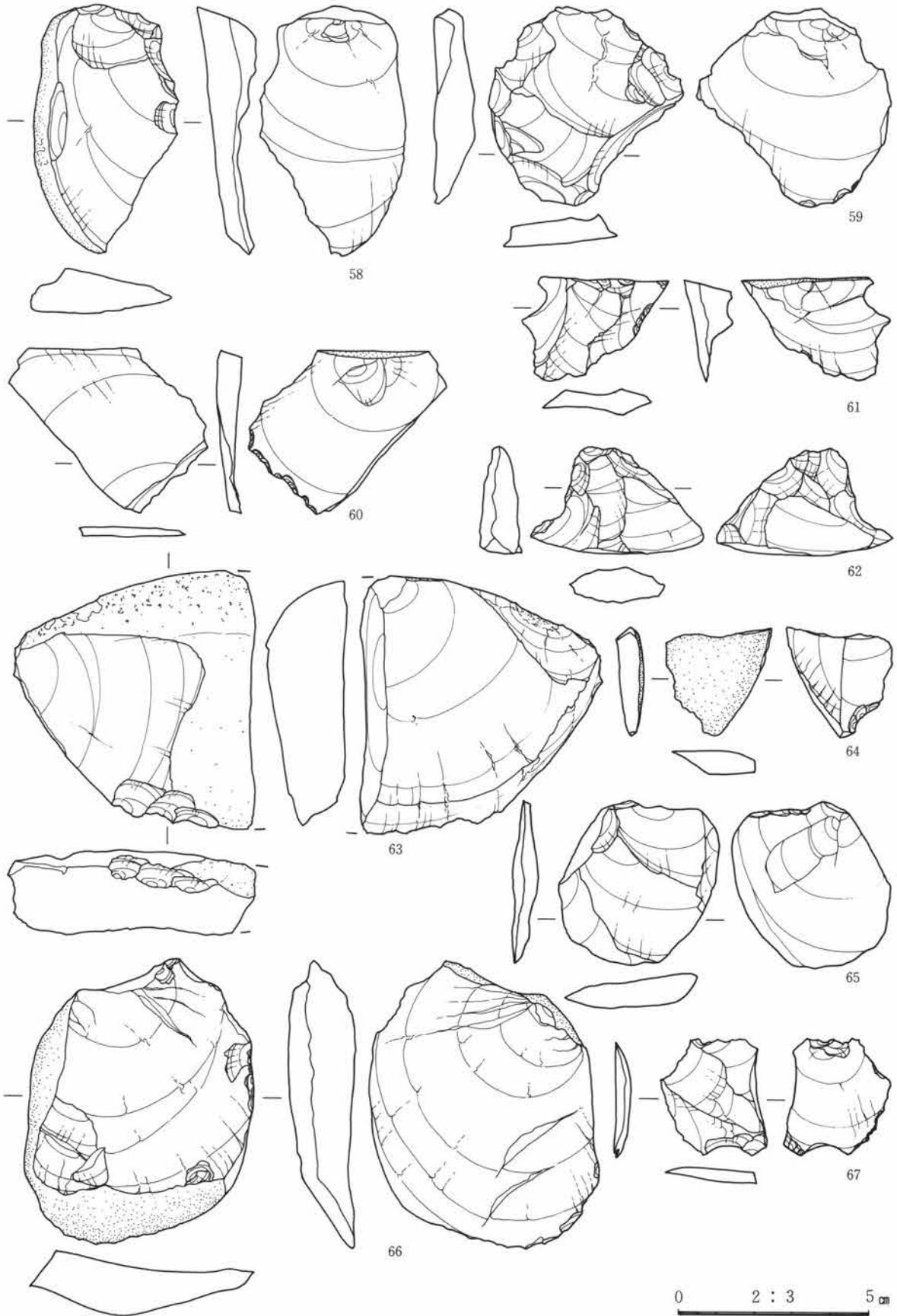
第49図 ノッチ・二次加工剥片実測図



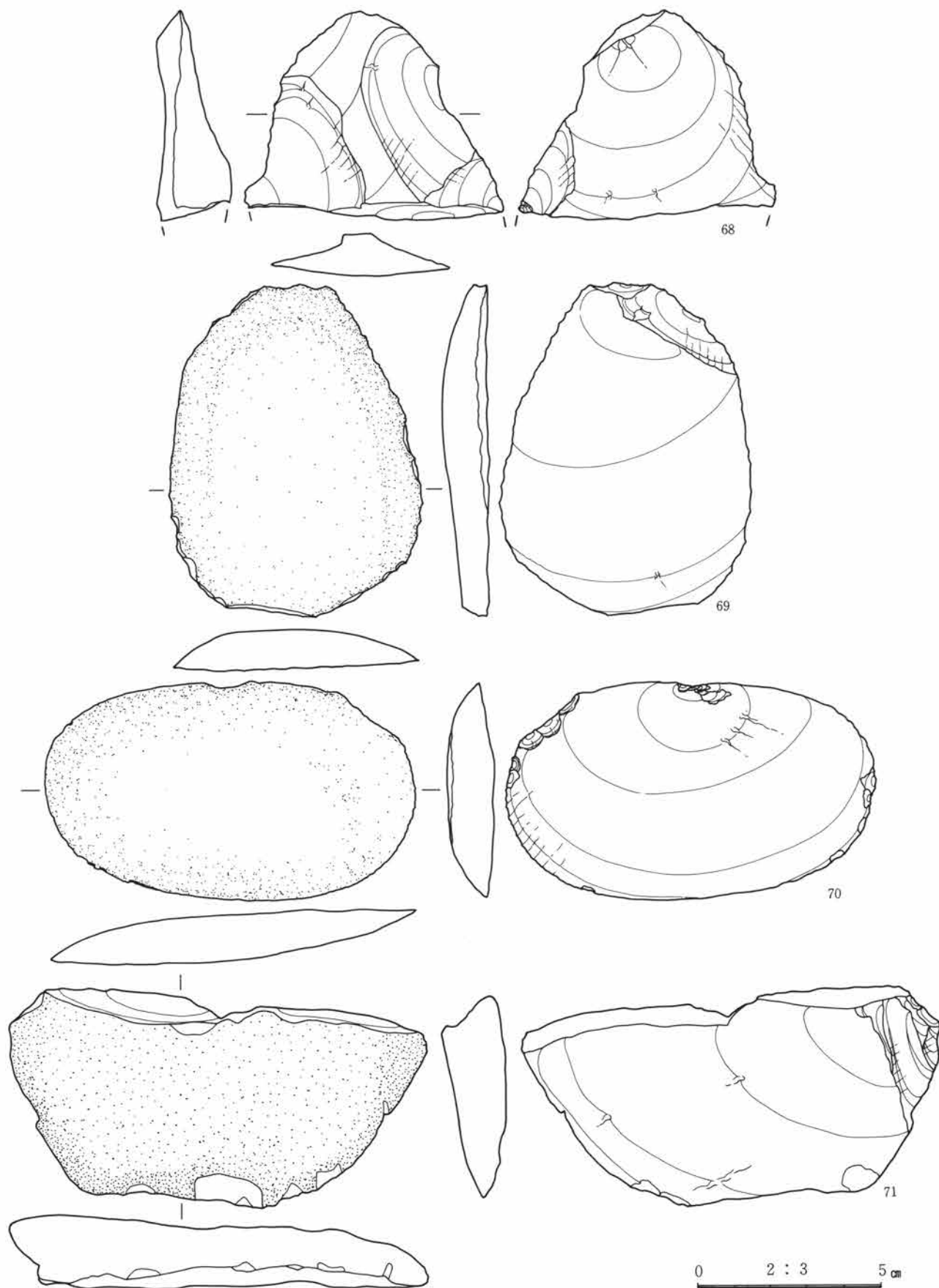
第50図 二次加工剥片実測図



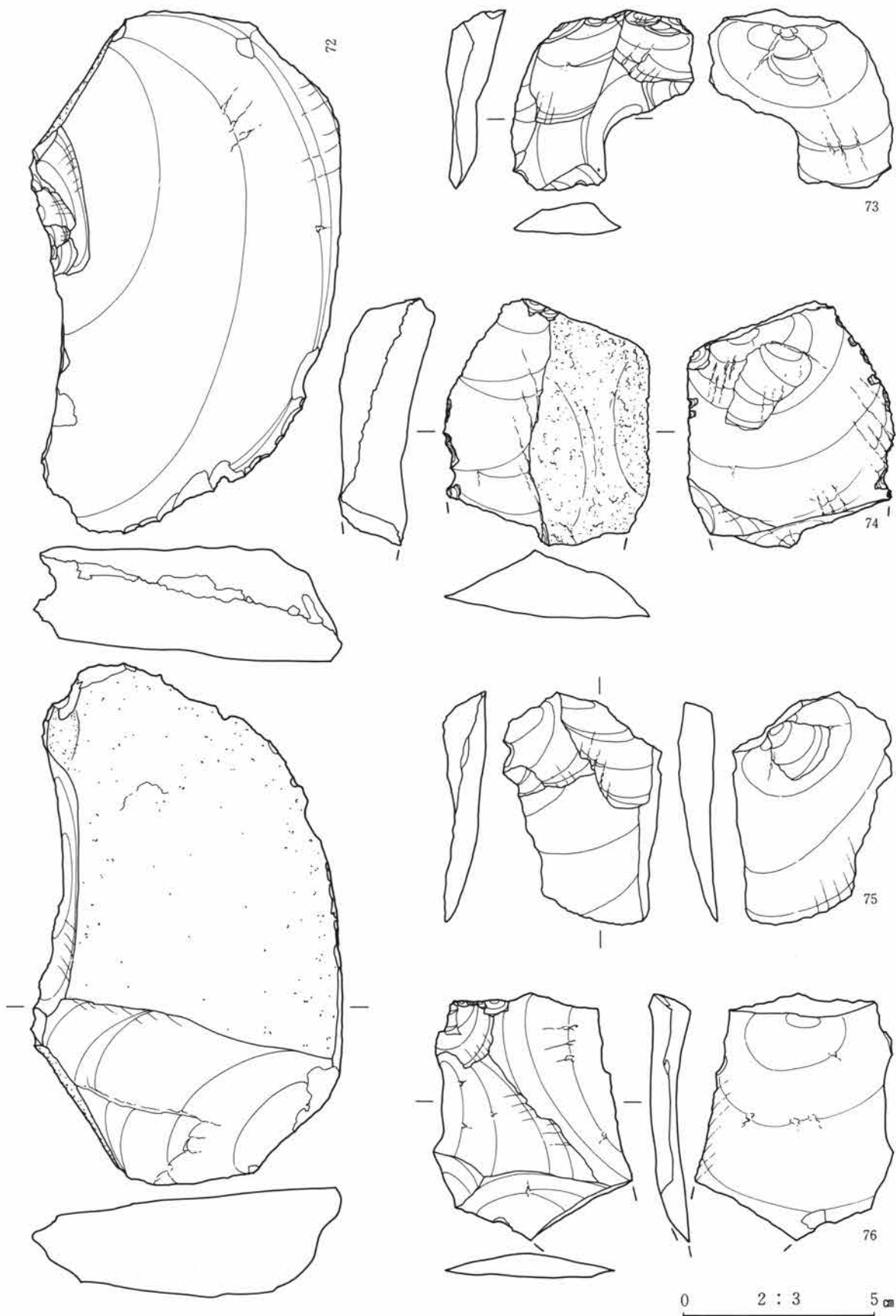
第51図 二次加工剥片実測図



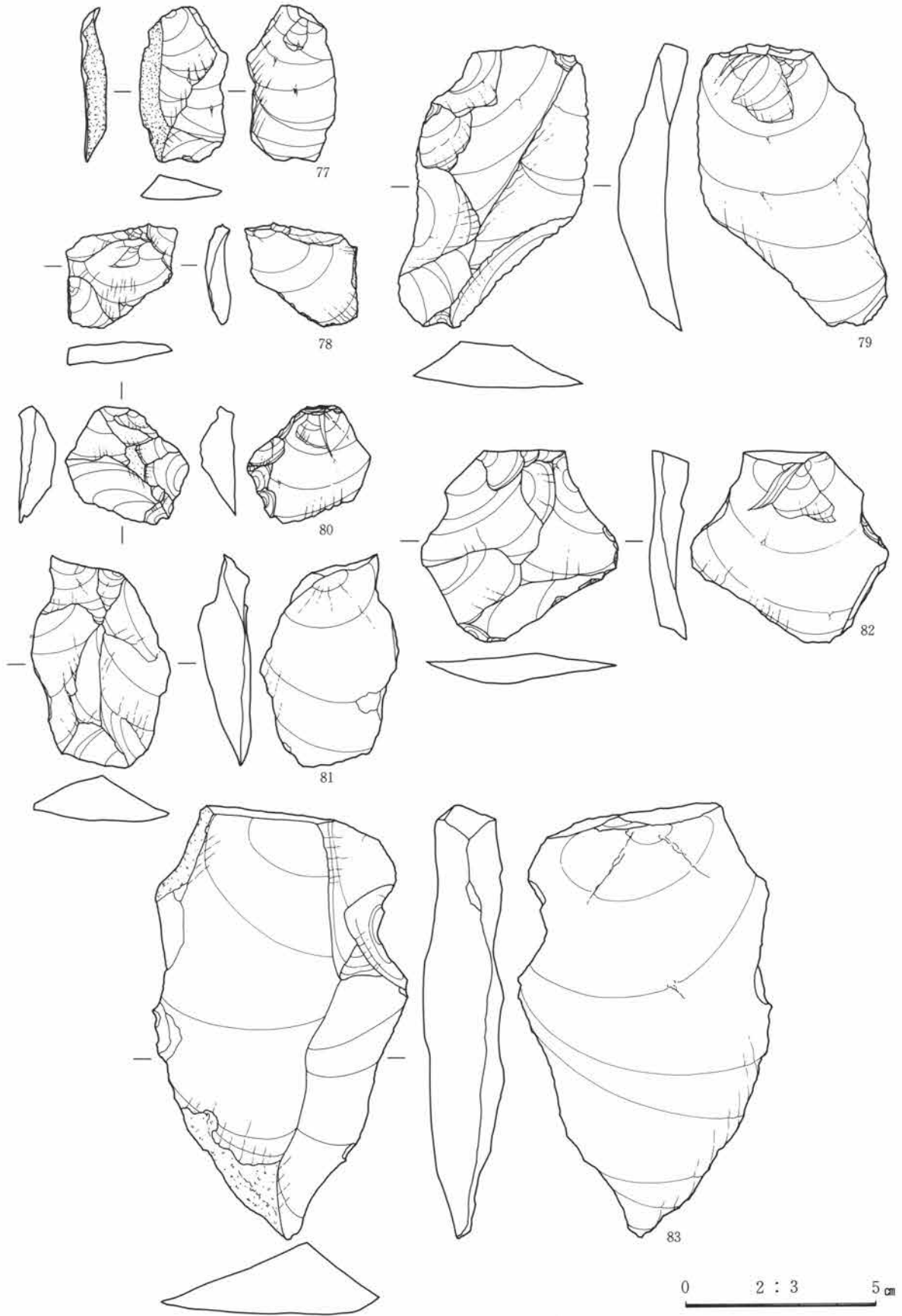
第52図 二次加工剥片実測図



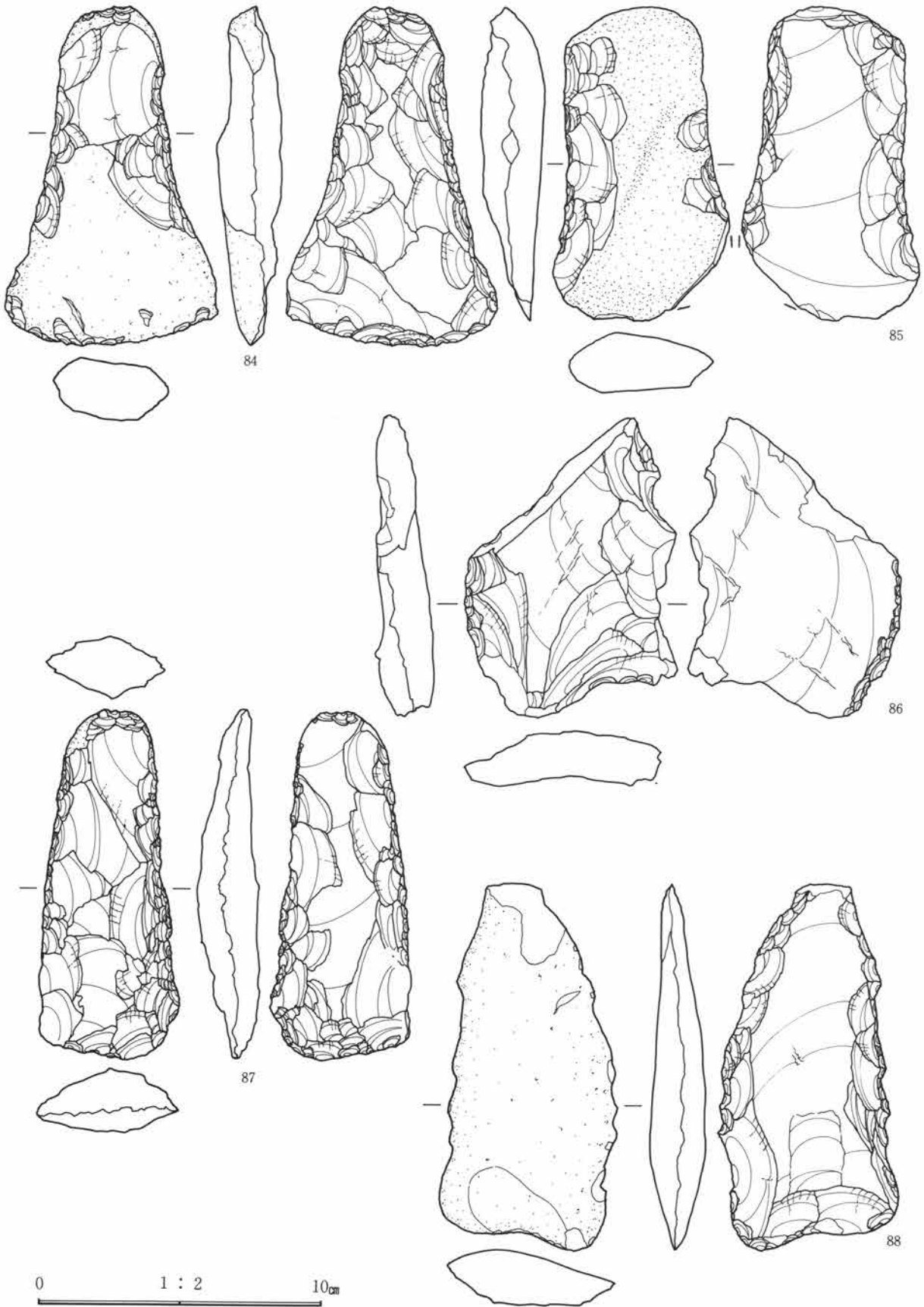
第53図 二次加工・微細調整剥片実測図



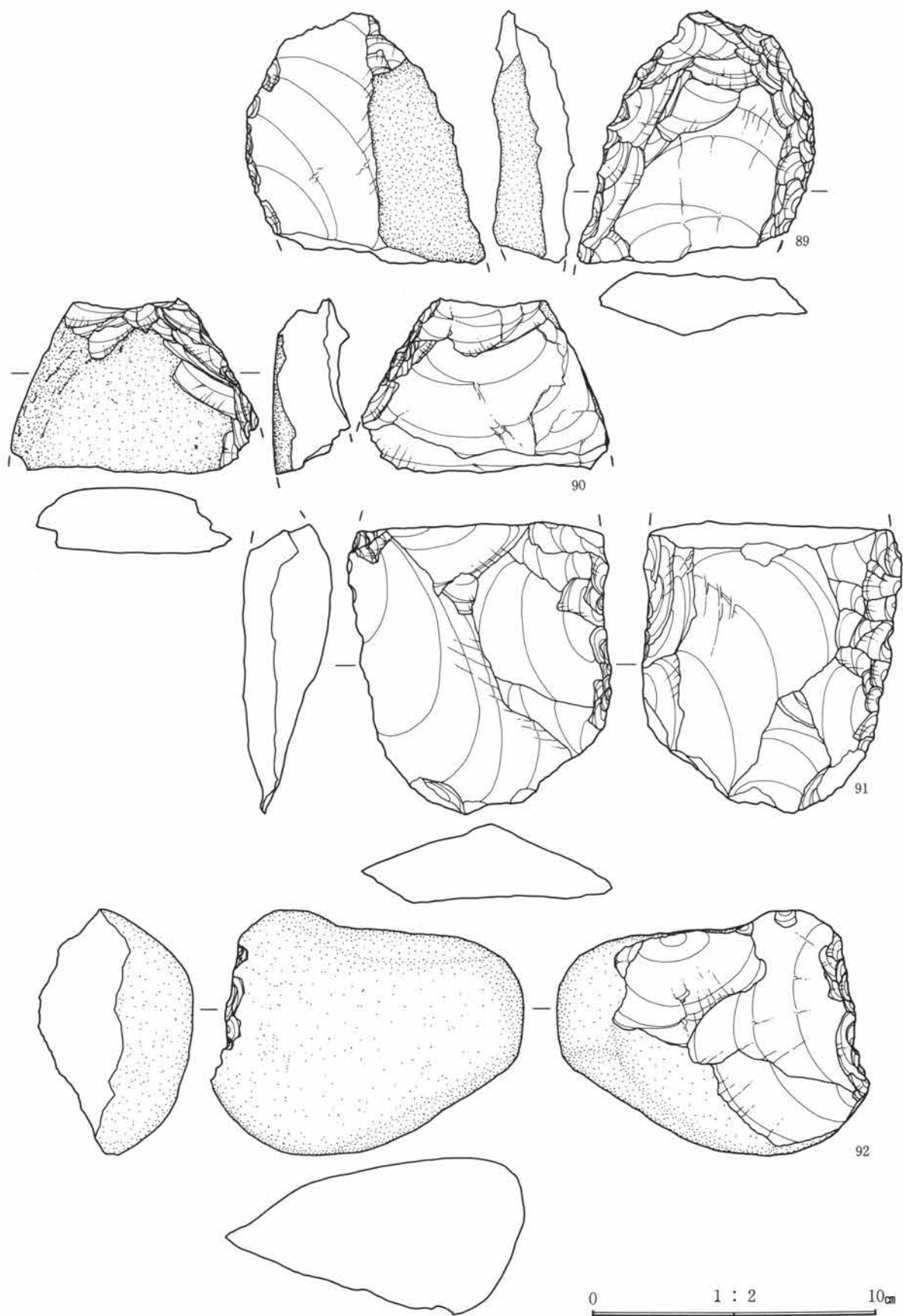
第54図 二次加工・微細調整剥片実測図



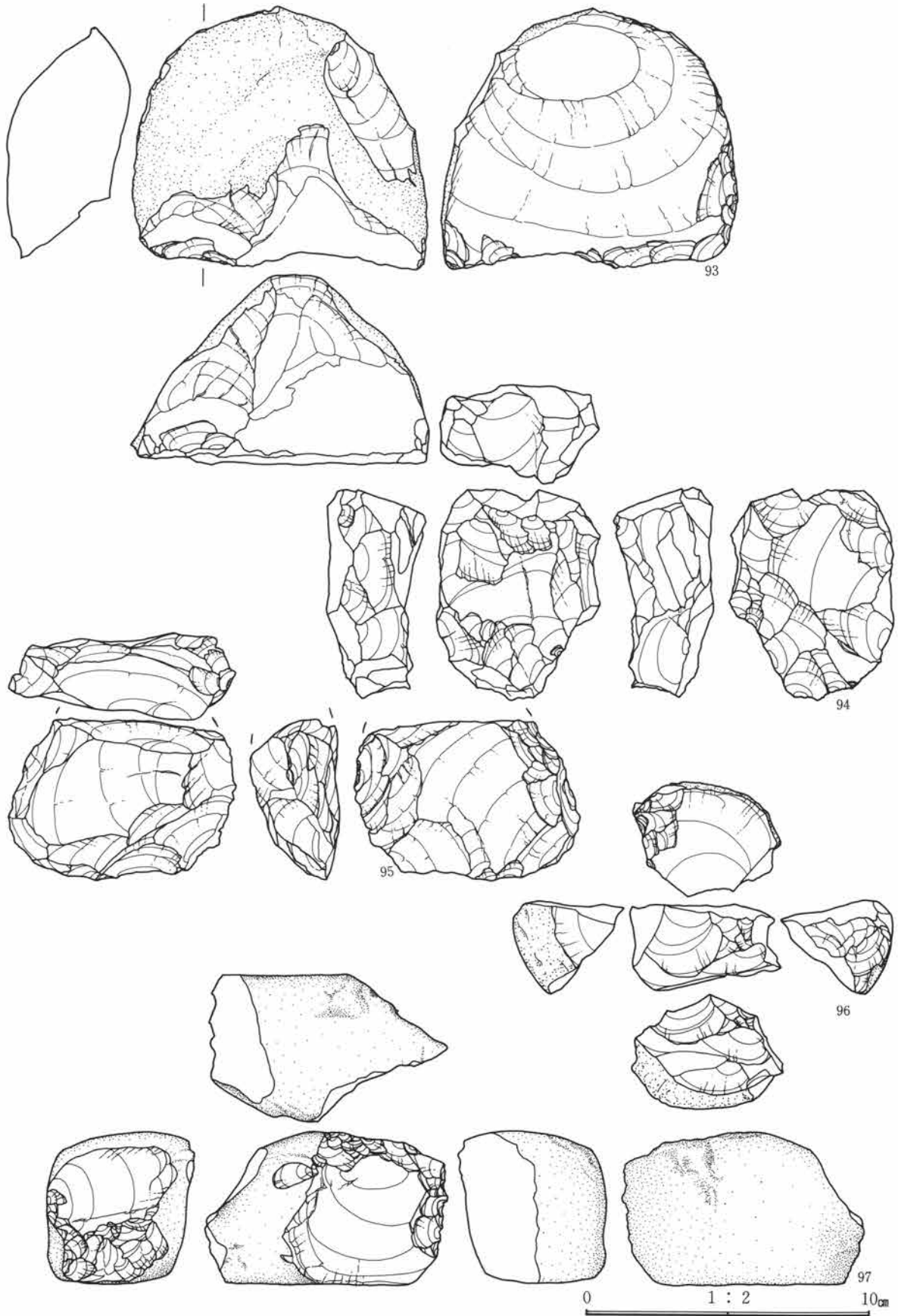
第55図 微細調整剥片実測図



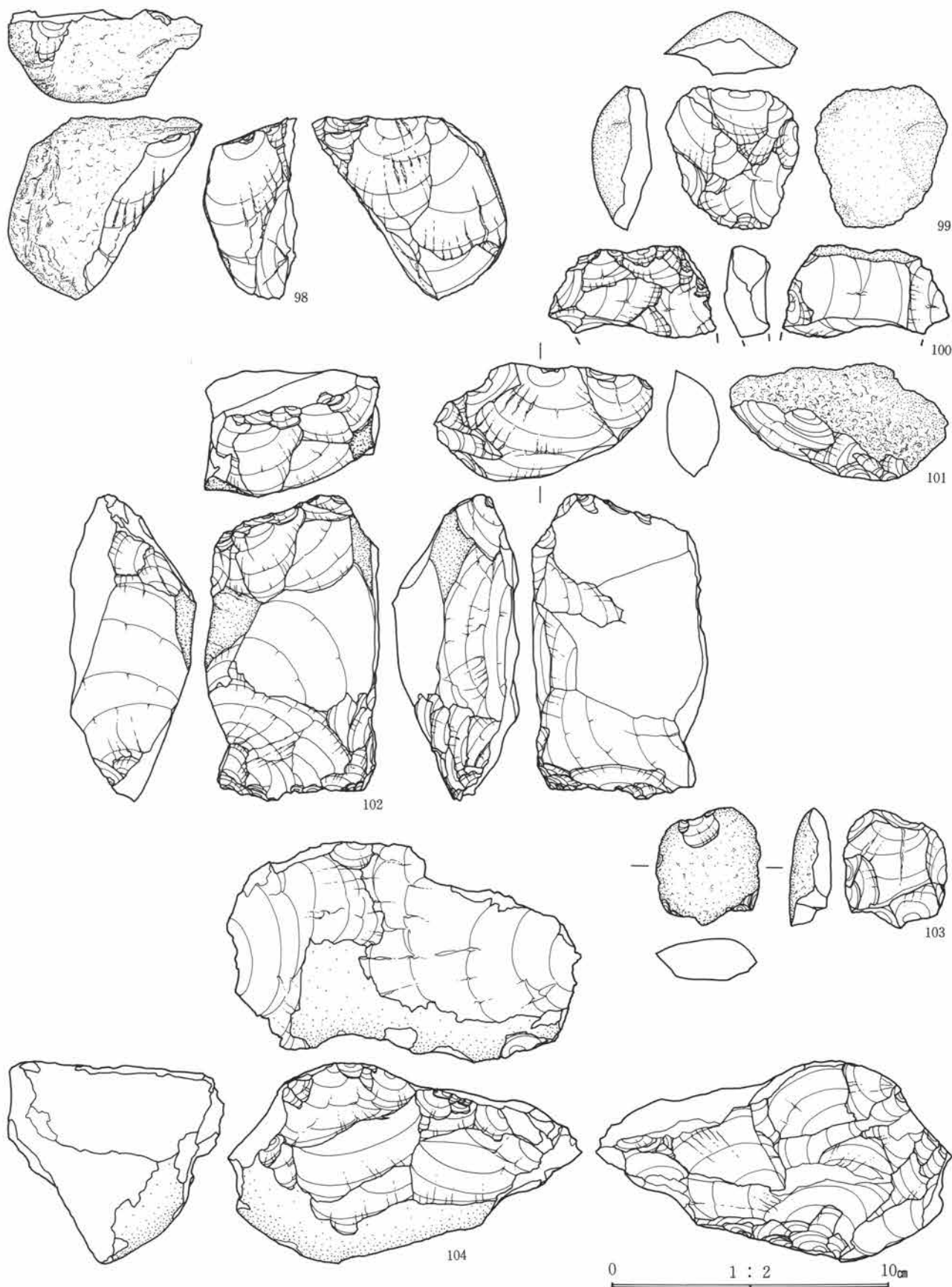
第56図 打製石斧実測図



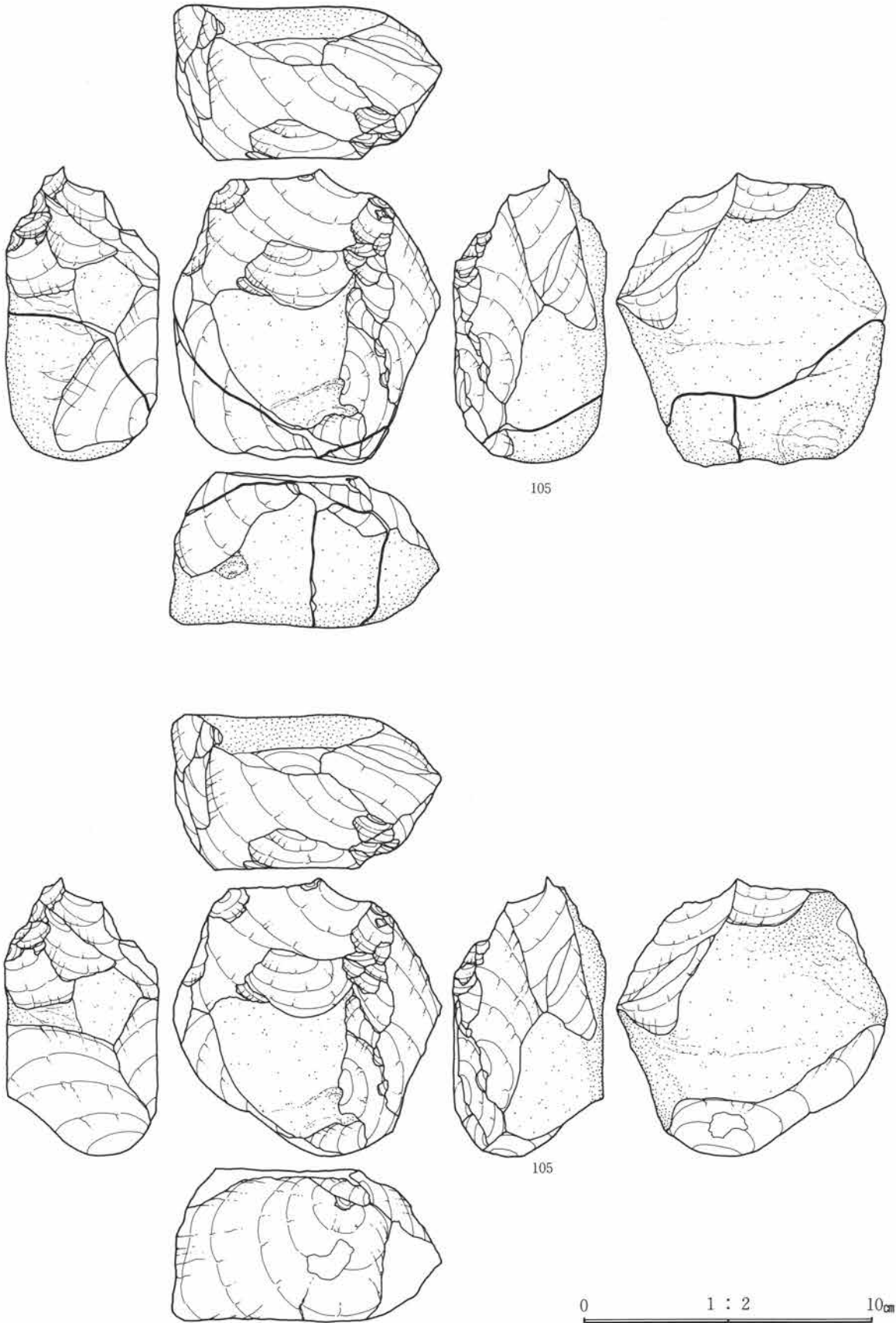
第57図 打製石斧・礫器実測図



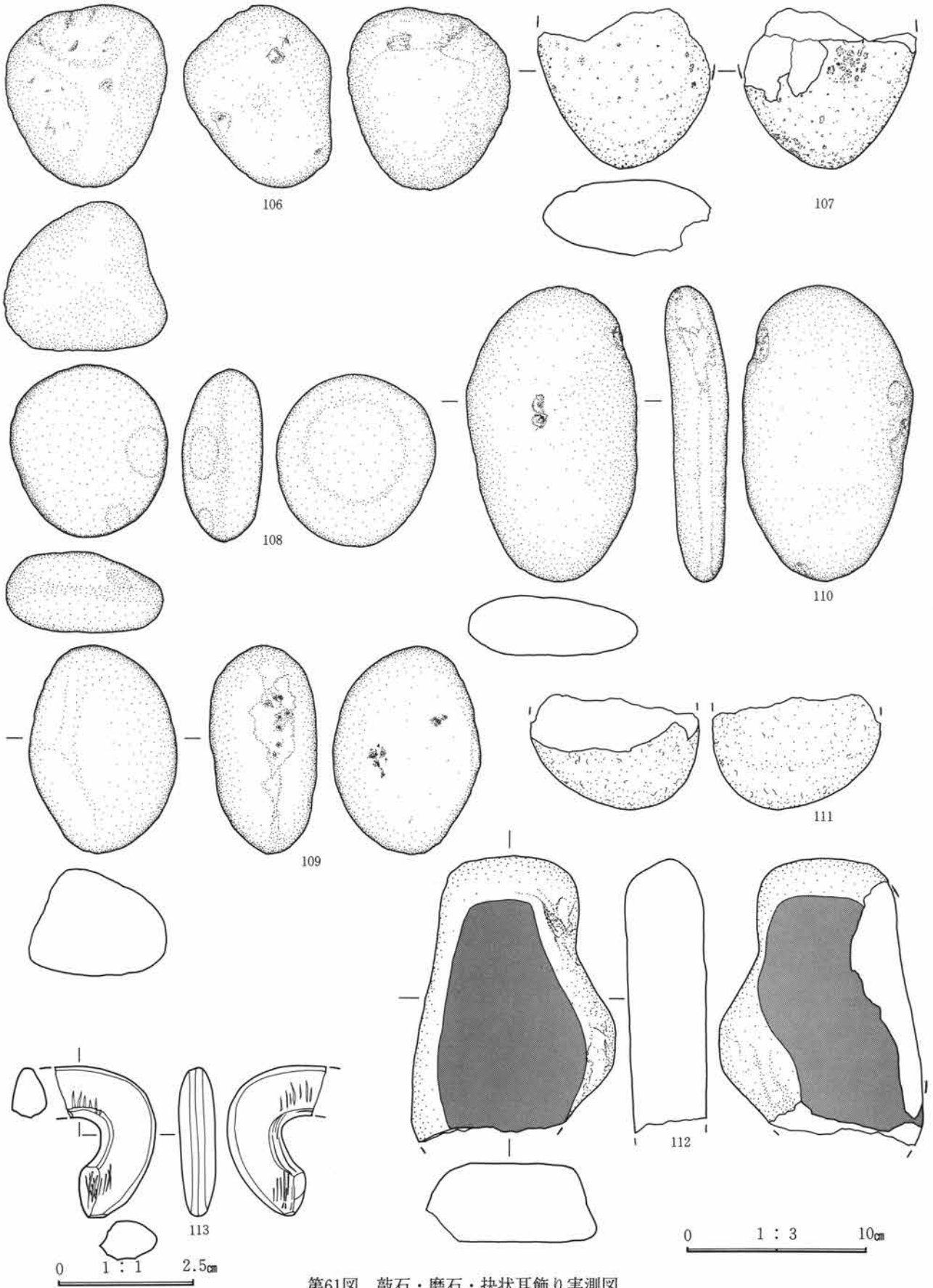
第58図 礫器・石核実測図



第59図 石核実測図



第60図 石核実測図



第61図 敲石・磨石・扶状耳飾り実測図

第2節 古墳時代

弥生時代の遺物が全く無く、古墳時代に入って遺物が特に埴輪を中心として出土した。生活跡としての住居や生産跡は全く検出できず、古墳跡と考えられる遺構及び溝が検出できたのみである。遺物の集中出土地区は北東区北部と南東区南部の2箇所にある。いずれも埴輪が中心でこの地域が墓域として古墳群の築造がなされたことを物語るものである。遺物は古墳時代前期に遡る刷毛甕と赤色塗彩の壺破片かと思われる土器が見つかり、この時期にすでにこの地域に生活が営まれたことが知られる。また、後期の土師器・須恵器片が出土しており、古墳築造期に近い時期に生活跡が付近にあったことを推定させる資料である。埴輪は一部横刷毛の埴輪も混じり、中期後半段階から後期前半の古墳が特に南東区の南部にあったことを示している。この埴輪を大量出土した637号土壙は古墳に関わる遺構ではなく、恐らく後世に古墳を破壊してその時点で出土した埴輪を投棄した土壙と考えられる。

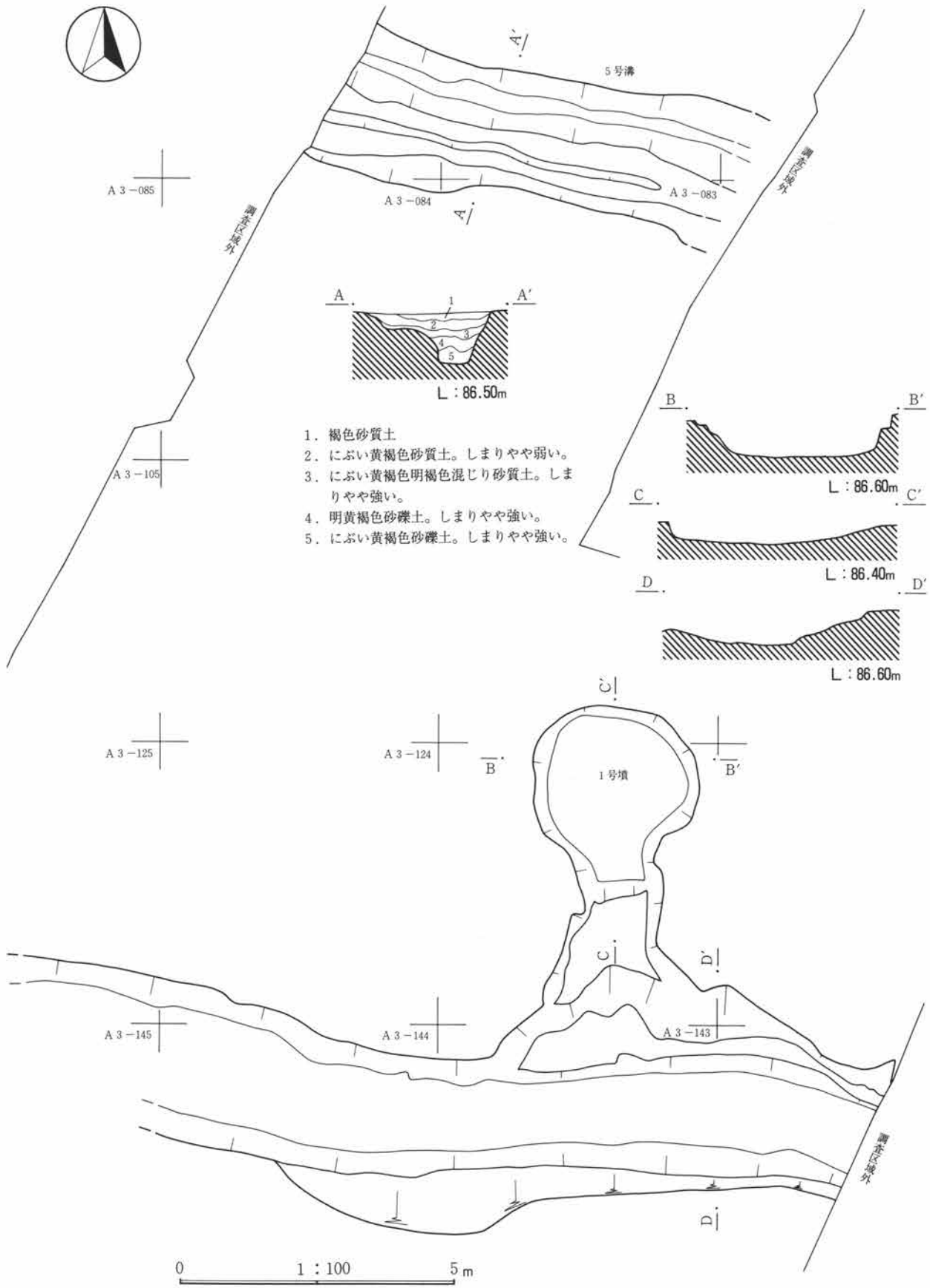
1 遺構

古墳跡及び周溝と溝がそれぞれ1つずつ確認された。

5号溝は東西方向に延びる幅2.1~2.5m、深さ0.8~0.9mで底部の傾斜が5cm程東方向に傾いている。北側は急傾斜で底部に至る。南側は緩やかな傾斜で段状部に至るもので段状部の平坦面は幅0.8mで急傾斜を有して底部に至る。底部幅は0.1~0.3mと幅狭である。当初、南にある古墳跡に伴う北側を巡る周溝かとも考えたが、円墳とすれば弧状を呈しておらず、周溝としては変則的であるが、古墳墓域跡の南側の周溝との対応関係で考えれば、周溝として考えるのが妥当であろうか？埴輪は5号溝よりは、27片出土しており、内第67図71・72を測図した。その他須恵甕片が1点出土している。時期的には6世紀後半に比定できるものである。

古墳跡が北東部北5号溝の南8mの地点から主体部を完全に盗掘された状況で検出された。長さ3.4m幅3m深さ0.7mの不整円形の墓域盗掘跡がある。南には周溝跡に向けて台形状に広がる掘り方が認められ、この掘り方も盗掘時のものと考えられる。墓域盗掘跡には多量の石材が投棄されており、石材は、82片の粗粒安山岩と31片の変質安山岩・26片のひん岩・1片のかんらん岩・3片の閃緑岩・1片の細粒安山岩・5片の輝緑岩・6片の頁岩・1片の変成玄武岩・1片の緑色片岩・14片の石英閃緑岩・4片の変質玄武岩・9片の二つ岳軽石・4片の珪質変質岩・9片の砂岩・4片の流紋岩・26片の溶結凝灰岩・18片の珪質頁岩・1片のチャートといった組成で石材が投棄され、その中の一部は古墳の主体部の構築石材と考えられる。また、埴輪片が21片（第64図1・2・3）・須恵器平瓶1点・土師器4片が出土した。埴輪は形象埴輪が2片で、2は太刀形埴輪の柄部と考えられ、平瓶（第70図26）はカキ目を施し、7世紀代に比定されるものである。

古墳の周溝と考えられる溝は幅2.3~3.0m、深さはこの溝に沿って1号道が敷設されている為、上部はかなりの攪乱を受け明瞭ではなく、本来の深さは不明である。溝は、墓道前の部分はやや直線状を呈するも、それ以外の部分では円弧状を呈している。埴輪の出土はこの溝の周辺が最も多く、128片を数える。全埴輪片中、形象埴輪は11片（第64図9・10・11・12・13・18・19・20・22、第65図24・29）あり、太刀形埴輪の柄部の破片（11・13・19・29）、家形埴輪壁破片（12）等があり、その他の形象埴輪に関してはその器種・部位共に不明である。



第62図 古墳時代遺構図

2 出土遺物

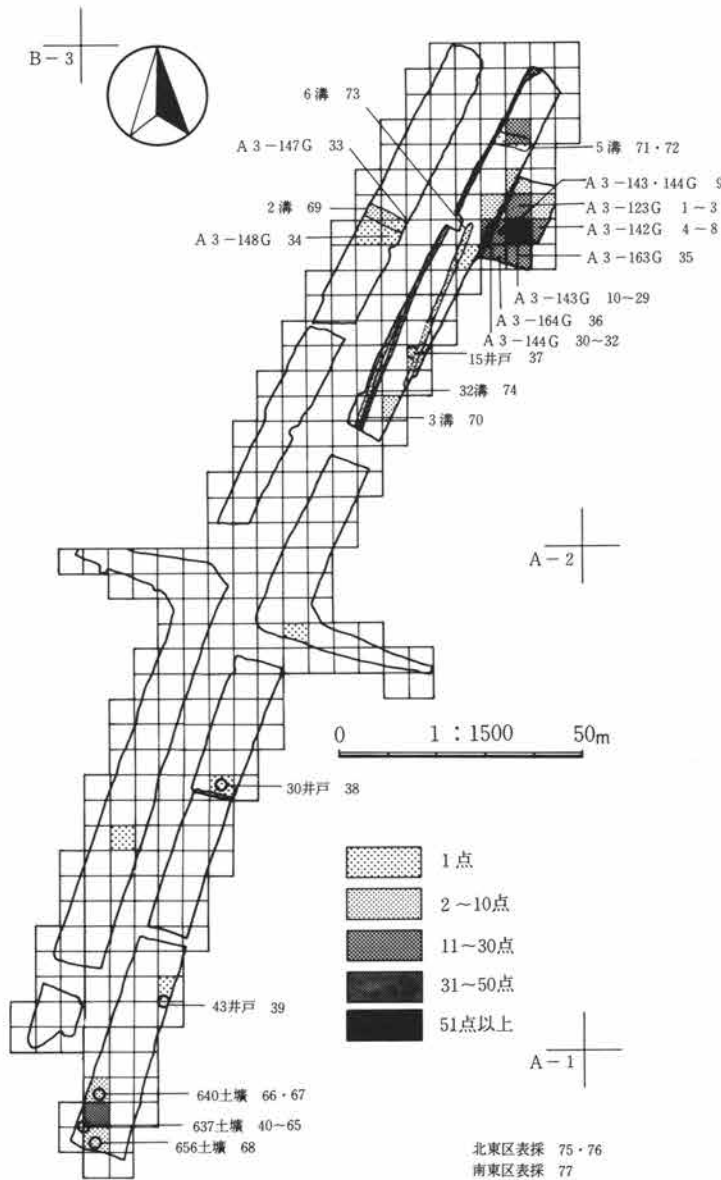
a. 埴輪 (第64-67図)

前述した5号溝・1号古墳墓壙跡・周溝跡以外に主に集中出土する北西部北東地区から継続して25片の埴輪の集中が認められ、1片(35)の不明形象埴輪を除き、すべて円筒埴輪(36)である。2号溝より2片(69)が出土し、形象の破片であるが、器種不明である。その他、北東部においては、15号井戸(37)、3号溝14片(56)、14号溝10片(73)が出土した。いずれも円筒埴輪片で焼成・胎土共に1号古墳跡出土の埴輪と近似する。恐らく1基の古墳の埴輪の資料であると考えられる。他に32号溝より2片(74)は形象埴輪片で器種不明である。

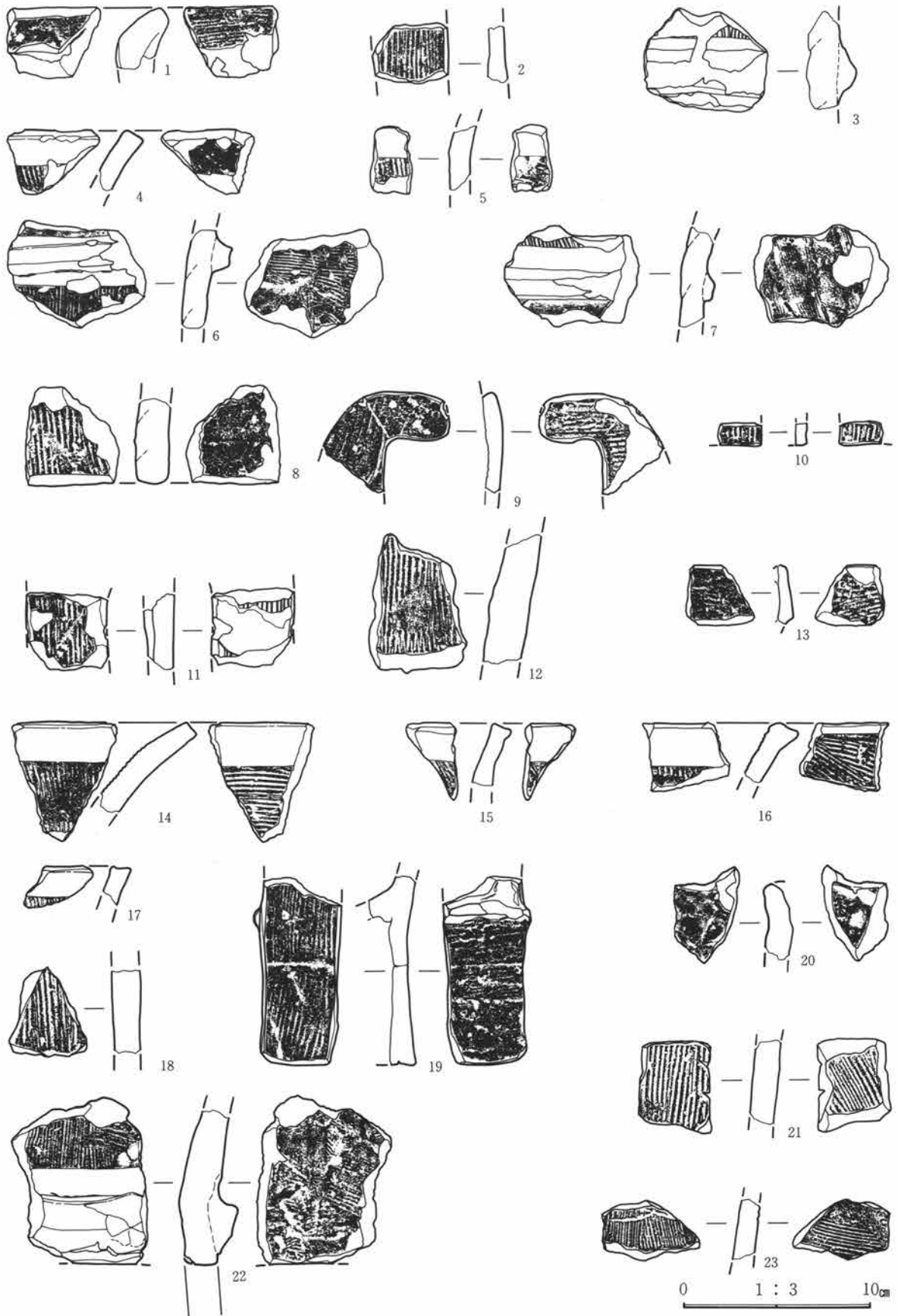
南東区南端においても一つの埴輪の集中箇所を認めることができる。特に637号土壙においては、32片の出土を認め(41-65)、焼成・胎土より大きく3種類に区分でき、薄手明褐色でタガの突出が大きく刷毛調整

の細かいもの(45-47・61・56・57・60)、灰白褐色でヨコ刷毛調整を施すもの(50)があり、共に5世紀後半に比定される。それら以外は厚手灰褐色でやや焼きが甘くタガもやや低い、刷毛調整粗めのものがある。時期的に先の2種類の埴輪に比べ、新しくなる可能性が高い。つまり2時期にわたる埴輪が同一土壙中から出土していることが想定されその点から見ても後世に埴輪を廃棄した土壙と考えられるものである。形象埴輪(65)が1点出土しているが、その器種は不明である。南東区で、640号土壙より3片(66・67)が出土した。67はヨコ刷毛調整のもので66とは時期的に前後関係にある。656号土壙より出土した3片(68)は灰白色を呈し焼成の良好なもので、調整の細かいものである。

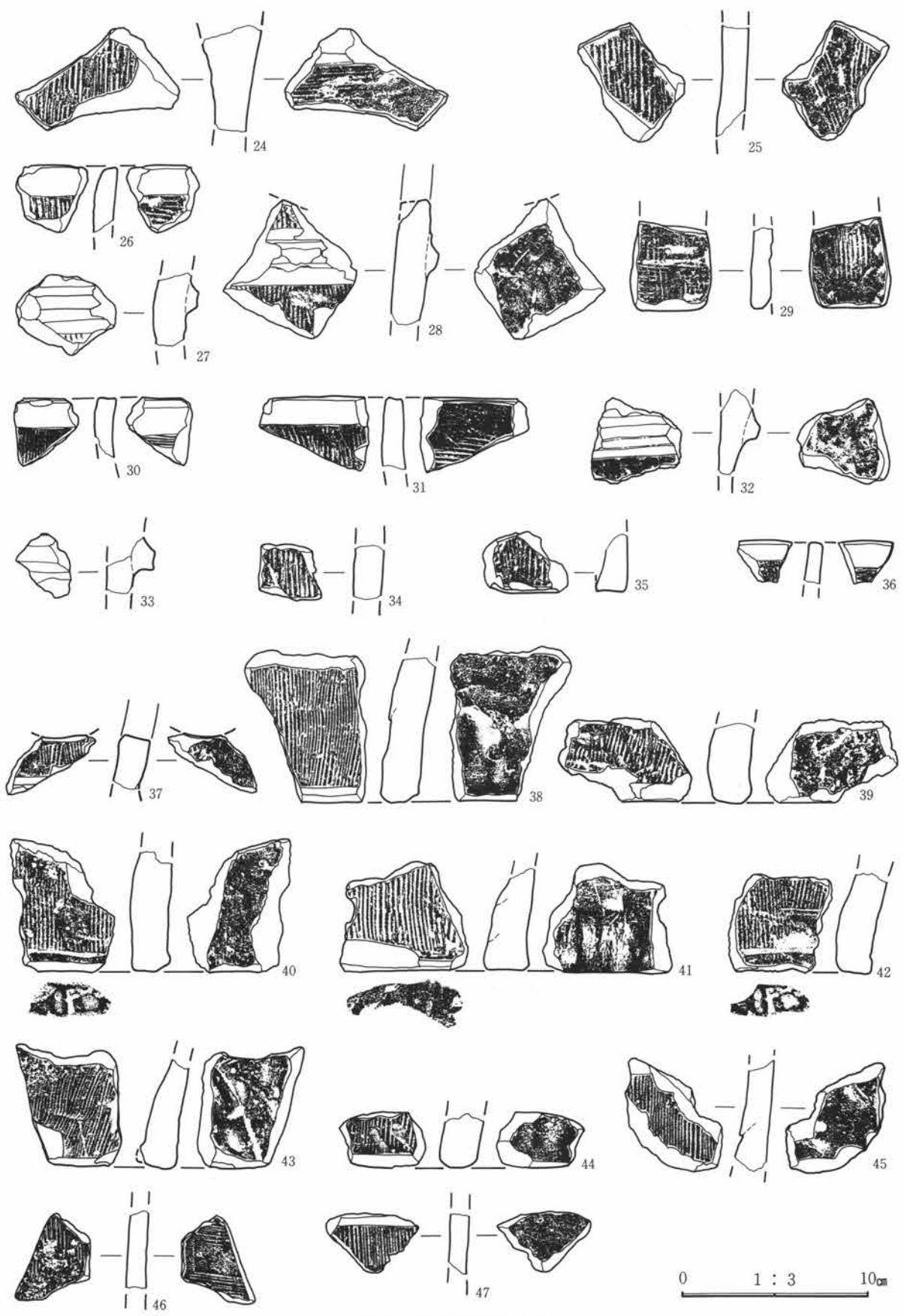
以上、北東区1号墳付近に出土する埴輪は恐らく1号墳出土のものと考えられる。時期的には6世紀後半に比定できるものである。また、南東区に出土する埴輪群を見ると刷毛調整の細かく焼成の良好な一群やヨコ刷毛調整の埴輪などが出土しており、5世紀後半に遡る可能性の高い埴輪群であり、古墳の築造期が推定される。



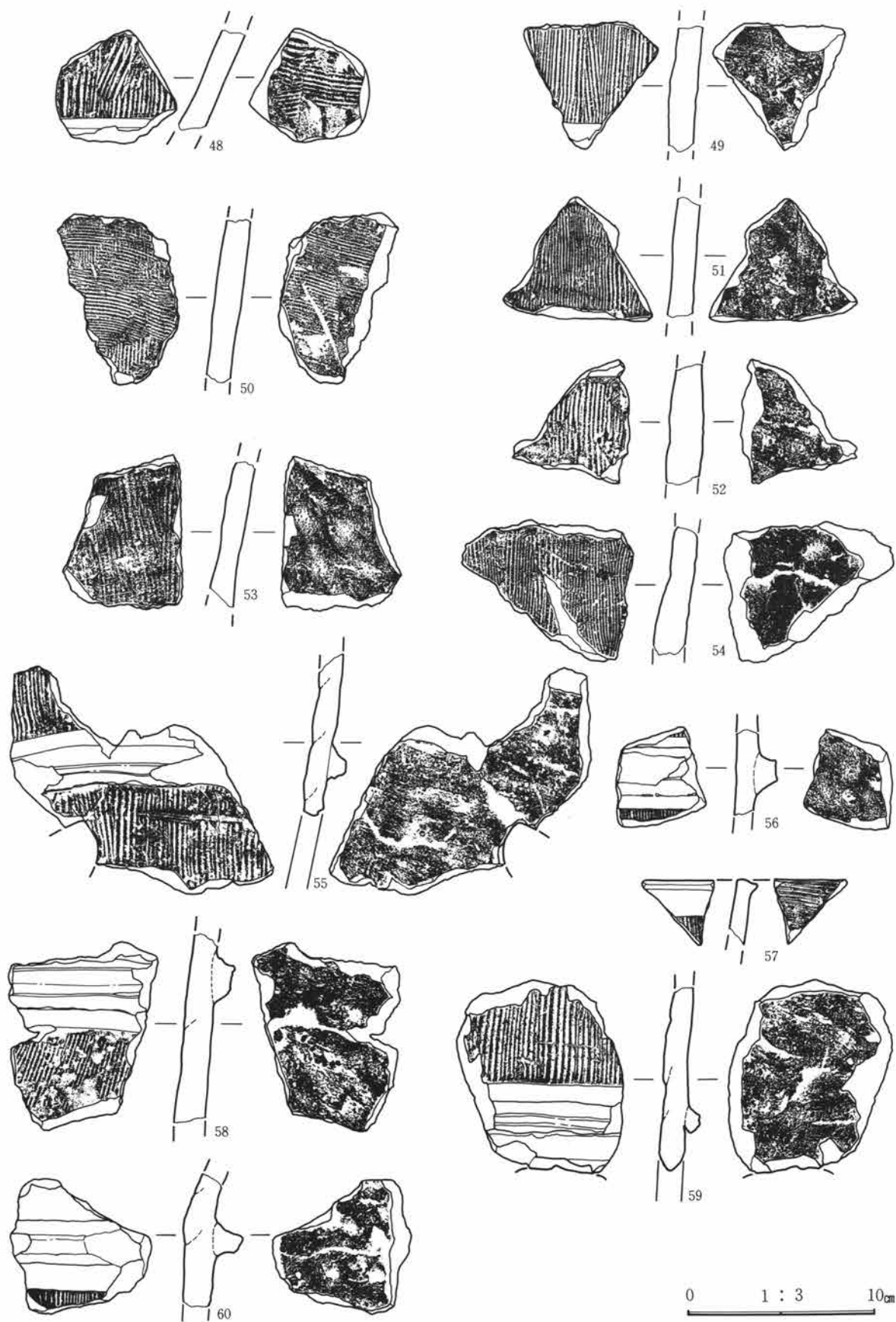
第63図 埴輪出土分布図



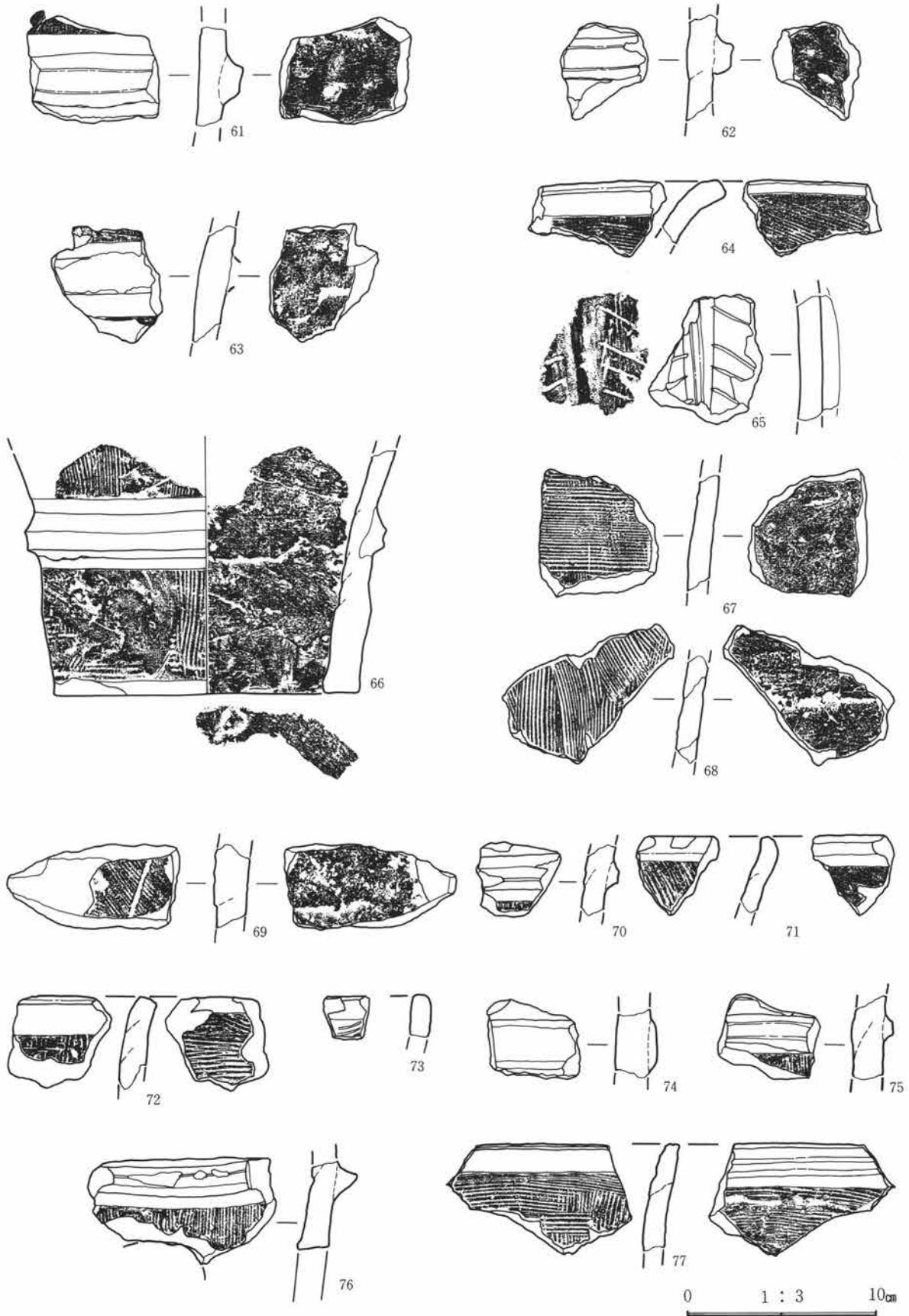
第64図 埴輪実測図(1)



第65図 埴輪実測図(2)



第66図 埴輪実測図(3)



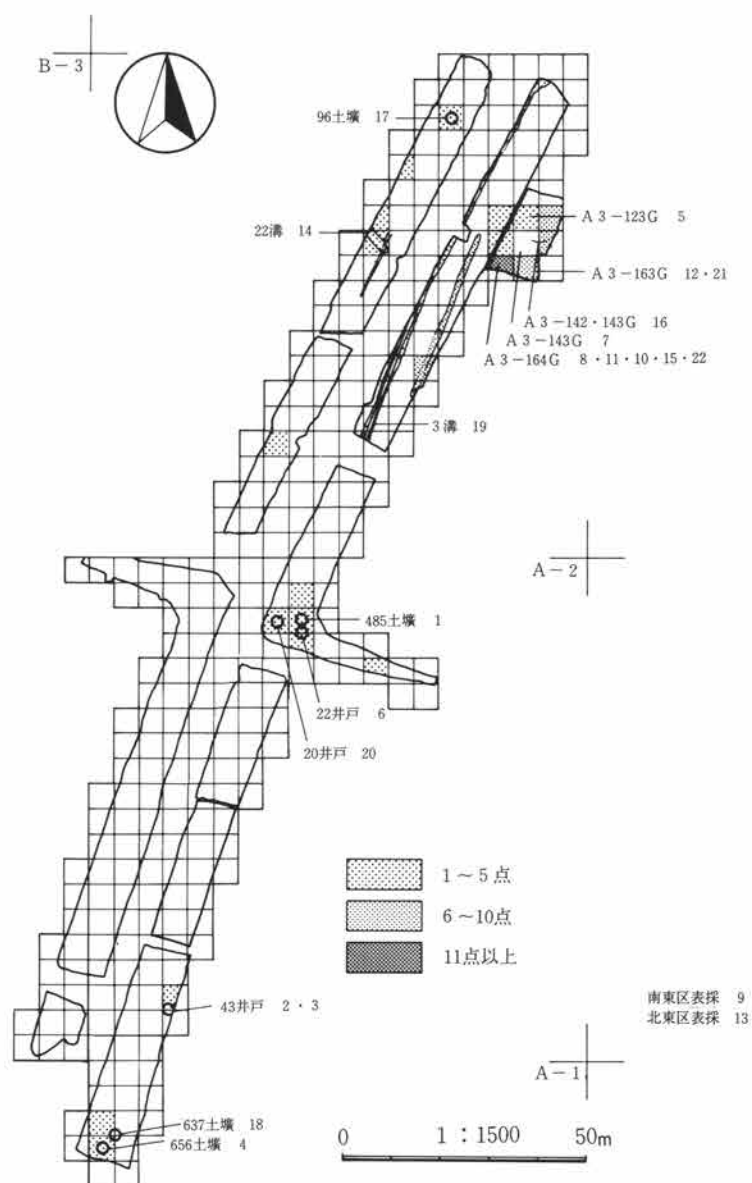
第67図 埴輪実測図(4)

b. 土師器 (第70図-1~22)

前述したように前期に比定される赤色塗彩壺片(1)と刷毛目甕片(2)が出土しており、それぞれ485号土壙・37号井戸出土であるが遺構の年代は中近世と考えられる。刷毛目甕はS字状口縁台付甕の胴部破片と考えられる。当地域に古墳時代の初頭から生活が営まれたことが分かる。

中・後期には遺物の出土は北東区1号墳跡周辺に集中し、また北東区南端部にもやや集中する所がある。

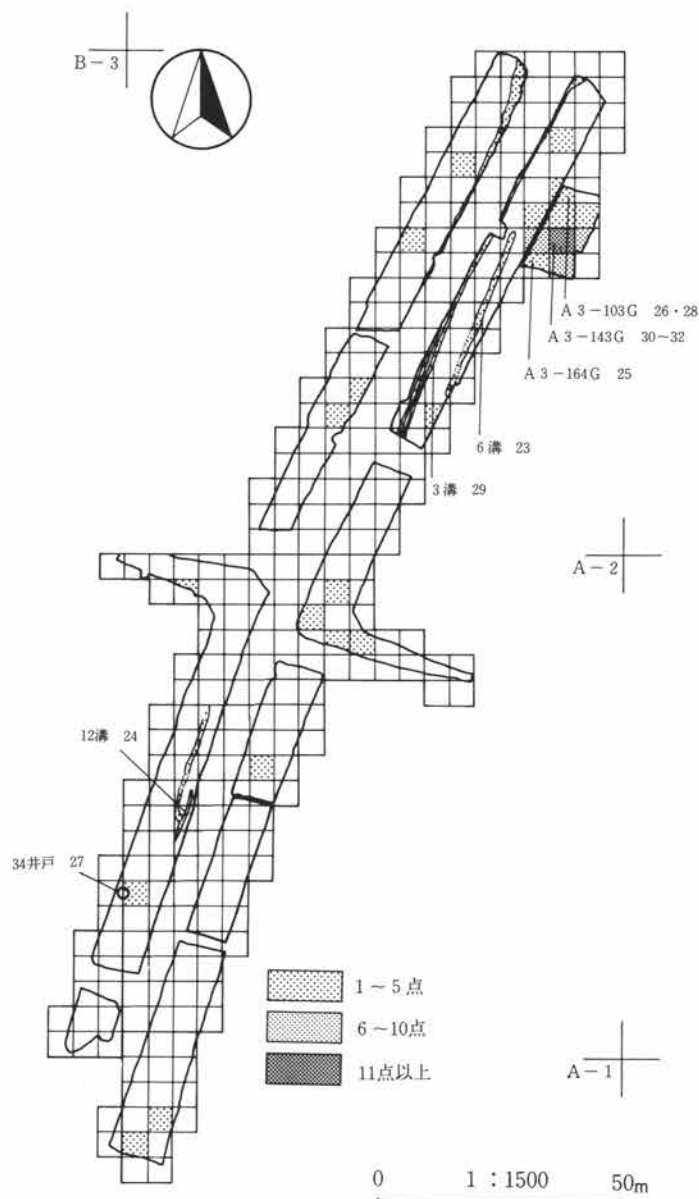
今の所、中期に遡る資料は高坏の坏部破片(20)であるが、破片のため詳しい年代については比定できない。坏部の破片はやはり小破片であるが、後期に入るものが主流を占める。近隣の地区では後期に比定される集落が多数検出されているが、当遺跡では集落としては捉えることができず、土師器の破片の存在から何らかの生活跡の存在だけは認められる。



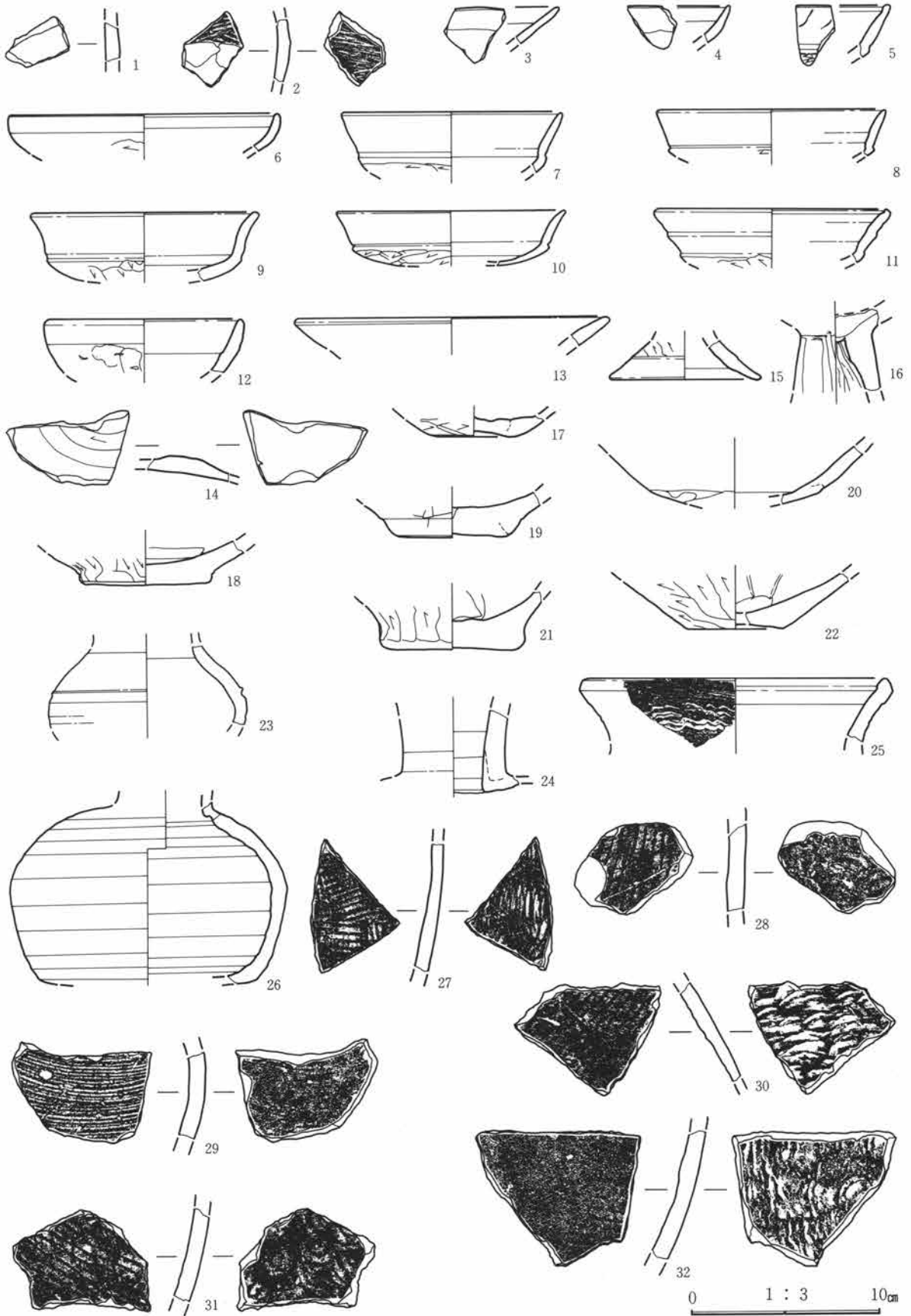
第68図 土師器出土分布図

c. 須恵器 (第70図-23~32)

須恵器の中では、甕が多く、それ以外で甕肩部 (23) 長頸壺頸部 (24) 小形壺口縁部 (25) 平瓶 (26) 等が出土しており、そのほとんどが北東区・北東区拡張区より出土している。時期的には6世紀後半から7世紀代に入るものがほとんどである。共伴する埴輪と比較してみると、時期的にはほぼ同時期及びそれより新しい時期に比定されるものが認められ、出土地点や出土状況・出土時期共に須恵器は古墳に伴うものとして考えた方が良いと思われる。器種から見ても普通の集落跡ではあまり出土を見ない器種が多く、その点でも古墳からの出土品という想定を裏付けることが可能である。

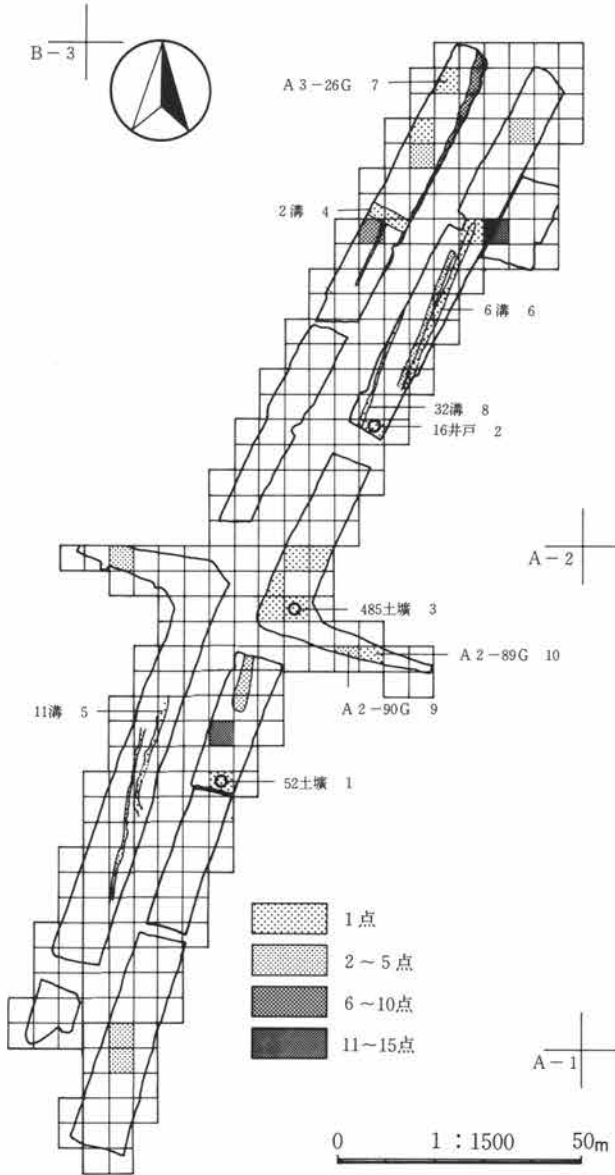


第69図 須恵器出土分布図



第70図 土師器・須恵器実測図

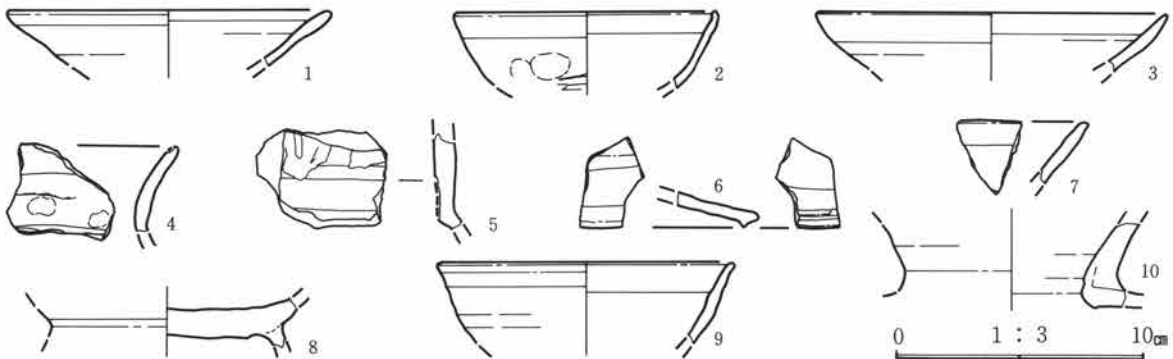
第3節 古代



第71図 古代遺物分布図

1. 出土遺物 (第72図)

古代の資料は破片資料のみで総数も120点ほどで極めて貧弱である。遺物は土師器・須恵器共に、北東部・北西部の北地区にある程度の集中があり、北東部南地区・南東部北地区にもう一つのまとまりがある。遺物の出土は土塚・溝・井戸からの出土も見られるが、各遺構とも、いずれも該期に比定できるほどの出土量がなく極わずかであり、現状では中近世の遺構と考えられる。遺物からみでの時期は9世紀から10世紀に比定されるものがほとんどであり、古墳時代から一定の期間を置きながらも古代においても引き続き生活が営まれていたことが分かる。しかし、遺物の量も少ないことから、極めて限定された生活空間であったと思われる。その後の特に14世紀以降の中世の遺物の量や遺構から比較して古代の時期に当該地点があまり人の生活が認められる地点ではなかったと考えられる。ただし、近隣の地区よりは平安期の水田が検出されており、この地域において古代に相当数の人々が住んでいたことは明らかなのでたまたまこの地点で明瞭な生活跡が確認されなかったということであろう。



第72図 古代遺物実測図

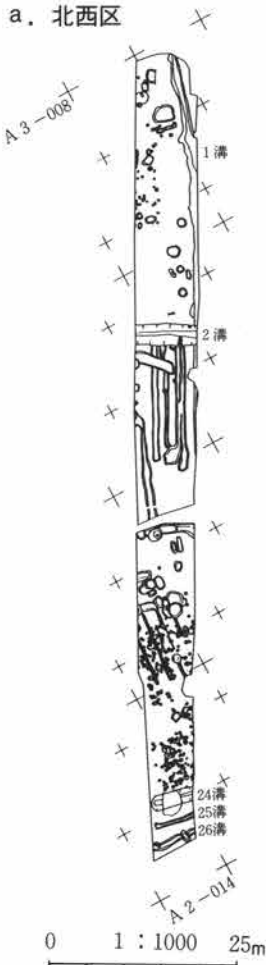
第4節 中近世

1. 遺構

当遺跡では多数の遺構が検出され、竪穴住居2軒、竪穴状遺構1、土壇588基、墓1基、井戸44基、溝57本が確認できた。この中で中世の時期の生活遺構と考えられるのが竪穴住居である。出土遺物がほとんど無いため細かな時期比定は困難だが、類例を考えればこの遺構の所属時期は中世であろう。時期が確実に比定できるのは生活遺構としては残念ながらこの住居のみで、他の遺構は中世・近世の土器が混じって出土していることから厳密な時期比定ができていないのが現状である。いずれにせよ、南東区北部に住居址が2軒あったことは確実であり、その周辺の小ピットも同時期に比定される可能性が高い。住居遺構としてはこれ以外だと残念ながら何回も検討してみたが、掘立柱建物遺構につながるような土壇群・ピット群は認められず建造物の復元は果たせなかった。ただし、ピット群の集中地域は、北西部北地区・南地区、北東部南地区、南東部北・南地区の5ヶ所に集中しており、ここに建物群が存在していた可能性は極めて高い。特に北西部南部と北東部南部はピット群の集中度が当遺跡では群を抜いて多く何らかの建物があったことは確実に想定できる。ただし、ピットは地山が砂質土なためすぐに崩壊してしまいなかなか原形を確認するのが困難なことで規則的な配列をとるものが極めて少なく現実に建物遺構として復元できたものは無かった。ただし、この北西部南部と北東部南部は共に道路を間に挟んで隣あい、しかもそれぞれの集中区の境には東西方向に走る溝が数本ある。これは居住区を区切る区画溝の可能性が高い。つまり当遺跡では遺跡全体の中でその中央部に当たる地域に居住区が展開されていたと見て良い。そしてその居住区は区画溝により区分されていたと考えられる。なお、前述したように南東区の竪穴住居の南部にあるピット群もかなり多くこのピット群の所属時期に関しては隣接した竪穴住居の時期と近い中世の時期が考えられる。ただし、ここも建物遺構としては復元できるようなピット群の配列が確認できない。

井戸が遺跡全体にかなり存在する。合計44基という大変な数である。井戸は大きく3タイプに分かれる。直径の狭い縦に細長いタイプをA型とする。直径が大きく幅広でしかも深さのあるタイプをB型とする。また、直径はやや広く深さのあまり無いタイプをC型とする。A型が22基、B型が9基、C型が12基あり、A型が最も多かった。井戸も地山が砂質土のため崩壊しているものが多く湧水ポイントもかなり上のものが多く調査中に崩壊していくものもあった。井戸のタイプと時期的な関連については確認できないが、竪穴住居の近辺から検出されたのはB型の井戸である。また出土遺物からしてもB型が中世の時期に比定される可能性が高い。また、A型は最も数多く検出されまた掘り方もしっかりしたものが多く、出土遺物からみても近世に比定される可能性が高い。井戸の検出が多い割にはその近辺からピットの検出が少ないものが多く、その原因については不明である。

溝は特に大きな溝が北部の北西区・北東区に南北方向に走る1・3溝が中央部にあり、区画溝として機能していたものと思われるが、あるいは道の側溝とも考えられる所である。道路部分が現在の道路によりちょうど覆われた場合にその可能性がある。その他の南北方向に走る小溝は島の畝跡の可能性が高いものが多い。また住居遺構の所で少し述べたが、東西方向に走る溝でピット群の集中区の境に走る溝は区画溝の可能性が高い。溝の中や深さに少し問題の残る所もあるが、最も妥当性のある案として考えて良いものと考えられる。



第73図 北西区遺構図

北西区は北部に土壌群が、中央部に溝が南北方向に数条走り、南部にまた土壌群が集中し、その南端には東西方向に数本の溝が走っている。つまり、土壌群と溝を中心とする一群が交互に集中するという傾向がある。遺跡地の北側から遺構群について概略を述べる。南北方向に走る南流する長い溝が確認できる範囲で53mにも及んでいる。幅は北端部で1.5mで、南部に関しては中央の道路の下になり確認ができないが、西部に認められる土壌・井戸群を区画する溝であることは間違いない。この溝に対応するのが、北東区の3号溝であり、走向の方向、南流すること、溝の幅などほぼ近似した溝の性格を有する。

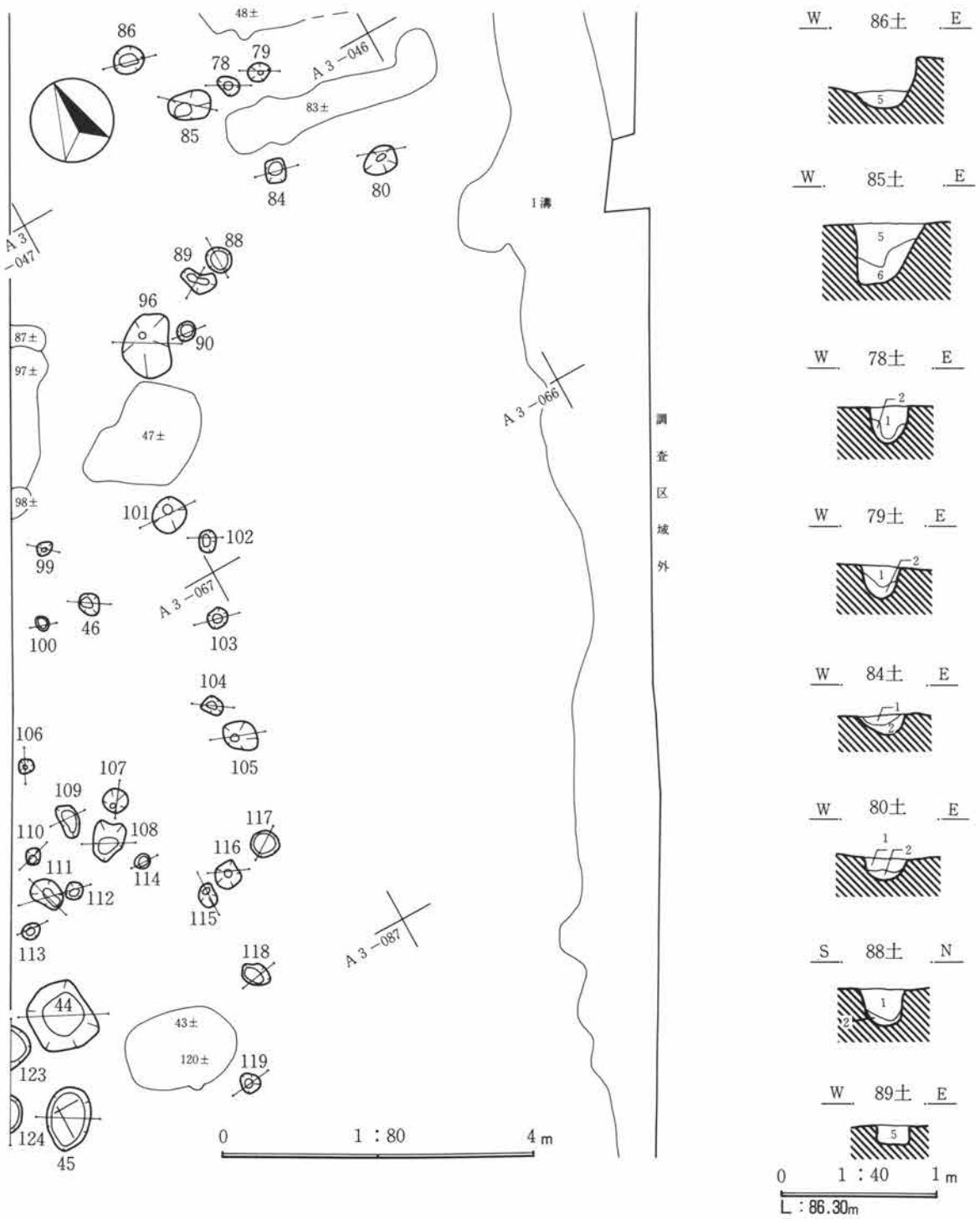
1号溝の西側に土壌群があり、これら土壌群はピット状のものと掘り込みの浅いやや大きめの土壌群からなる。比較的集中するものの建物は立たない。1号溝に接して4本の井戸が南北方向に縦列するように並んでいる。1-4号井戸である。井戸は直径の狭い縦に細長いタイプ（A型）と直径が大きく幅広でしかも深さのあるタイプ（B型）及び、直径はやや広く深さのあまり無いタイプ（C型）に区分できる。この地区での井戸のタイプはA型が主流で4基中、3基がA型である。遺物の出土がほとんど認められず、中世の甕が3号井戸より出土しているのみであり、これらの井戸が調査中も壁が崩壊しすぐに埋まった状況からみて極めて短期間の使用を示し、その結果として遺物量の少なさを示しているものと考えられる。

2号溝は1号溝に直交する東西方向に走る、東流する溝である。1号溝に切られており、北東区までは延びていないことがわかり道路下で恐らく南に屈曲するのではないだろうか。この溝を境に、南北方向に走る南流する溝が4本ほど走り、南側途中で切れる。これらの溝の性格は不明である。

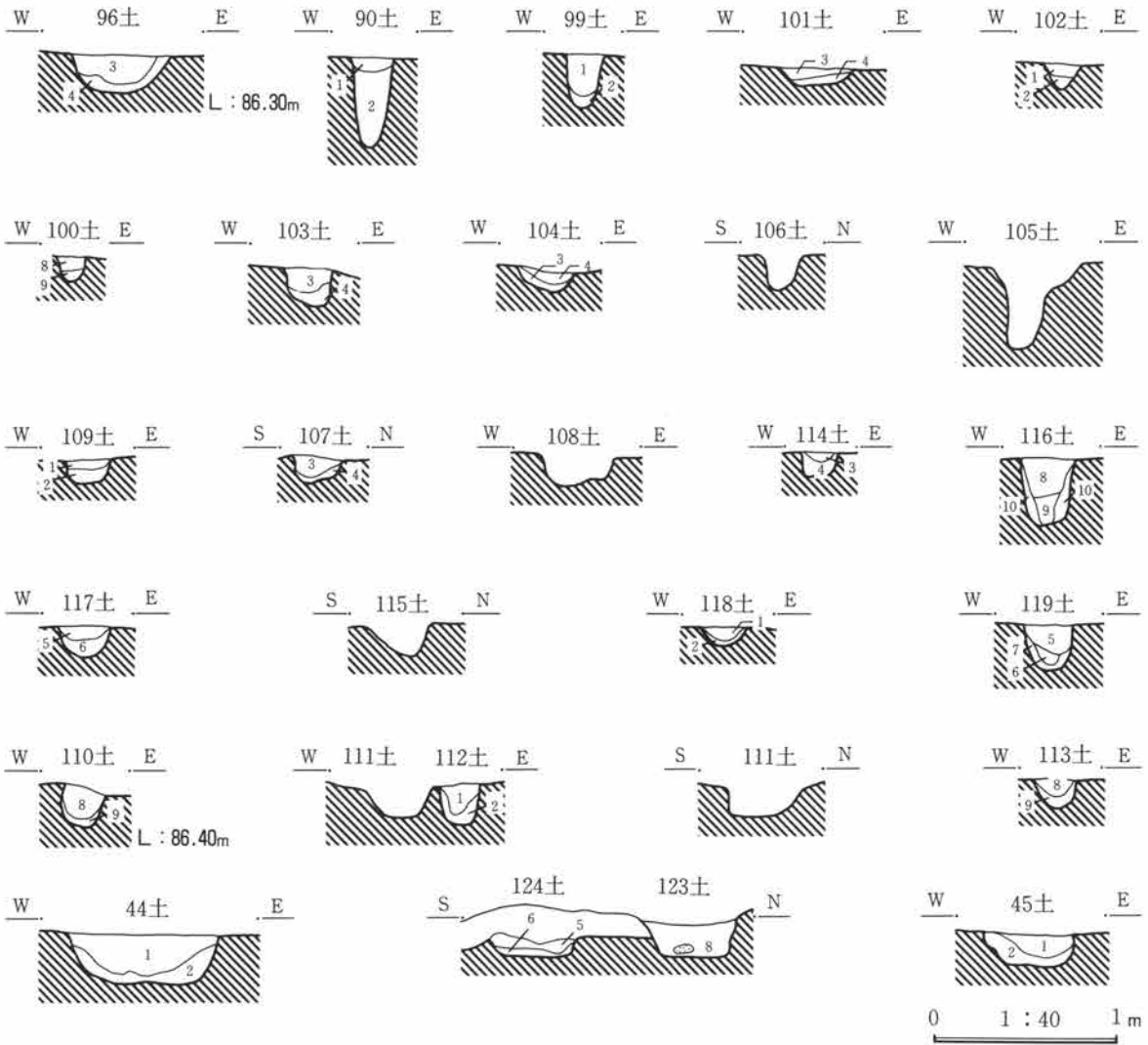
ピット状の土壌の集中区が大形の土壌群の南にある。大形の土壌群内には4基の井戸があり、5号井戸（A型）、7・8号井戸（B型）、6号井戸（C型）で、ピット状の土壌群集中区と少し離れて、井戸が集中する傾向が先の北の一群同様認められる。

ピット状の土壌群の集中地区には幅の細い溝が南北方向に数条走向し、土壌群にきられる。9号井戸（A型）、10・11・12号井戸（C型）は、これら土壌群の集中地区中にある。攪乱により一部隙間があくも基本的には南北45mにわたりピット状の土壌群が集中する。土壌群は何らかの建造物の柱穴になると思われるが、建物は現状で見た限り建たない。

これら土壌群の南に東西方向に走る3条の溝がある。24号溝は幅広の2m幅の溝である。25・26号溝はやや幅狭の溝で24号溝と並走している。26号溝はあるいは北東区の38号溝に連結する可能性がある。

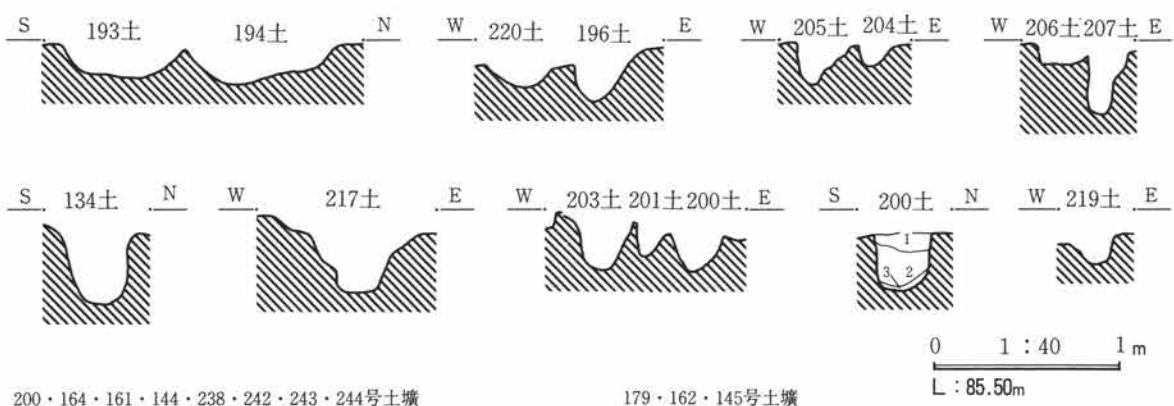
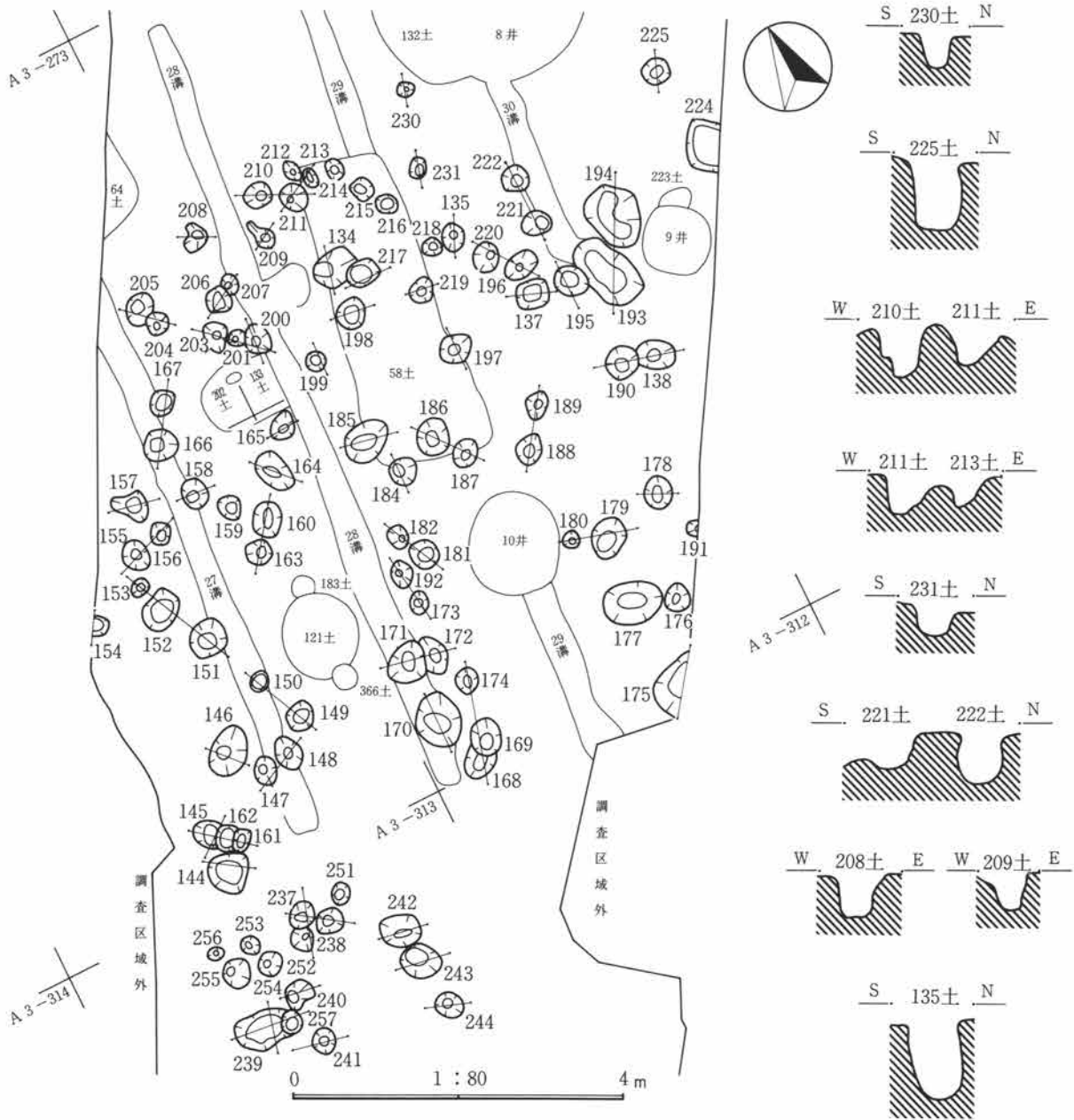


第74図 北西区土壌集合分布図(1)・断面図(1)



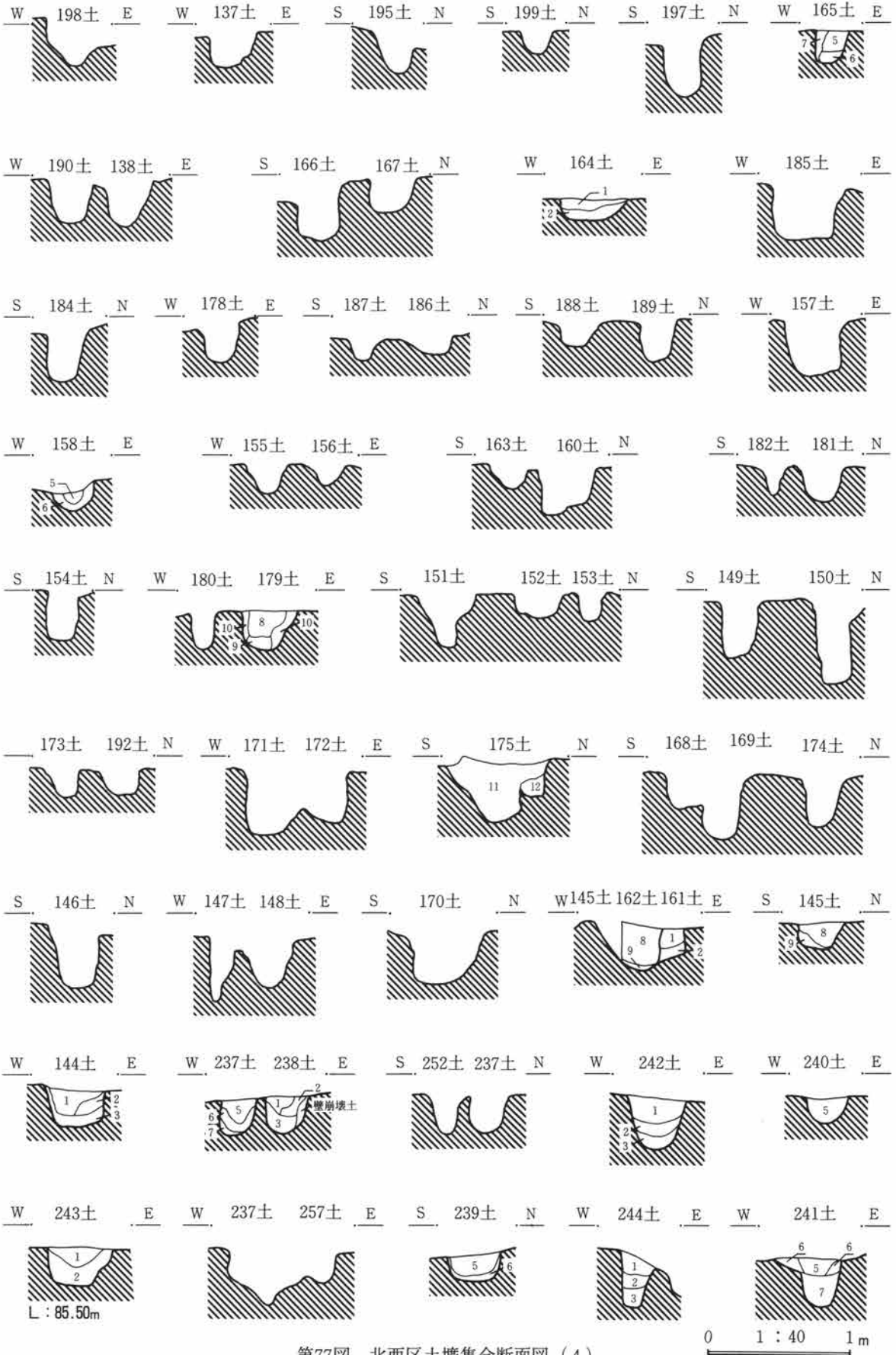
- 78・79・80・84・88・90・99・102・109・118・112・44・45号土壌
- 1層 におい黄褐色 砂質土 しまり弱
 - 2層 におい黄褐色・明黄褐色まじり 砂質土 しまり弱
- 96・101・103・104・107・114号土壌
- 3層 灰黄褐色 砂質土 しまり弱
 - 4層 灰黄褐色・明黄褐色まじり 砂質土 しまり弱
- 86・85・89・117・119・124号土壌
- 5層 暗褐色 砂質土 しまり良
 - 6層 暗褐色・明黄褐色まじり 砂質土 しまり良
 - 7層 明黄褐色・暗褐色まじり 砂質土 しまりやや弱
- 100・116・110・113・123号土壌
- 8層 黒褐色 砂質土 しまり良
 - 9層 黒褐色・明黄褐色まじり 砂質土 しまり良
 - 10層 明黄褐色・黒褐色まじり 砂質土 しまりやや弱

第75図 北西区土壌集合断面図(2)

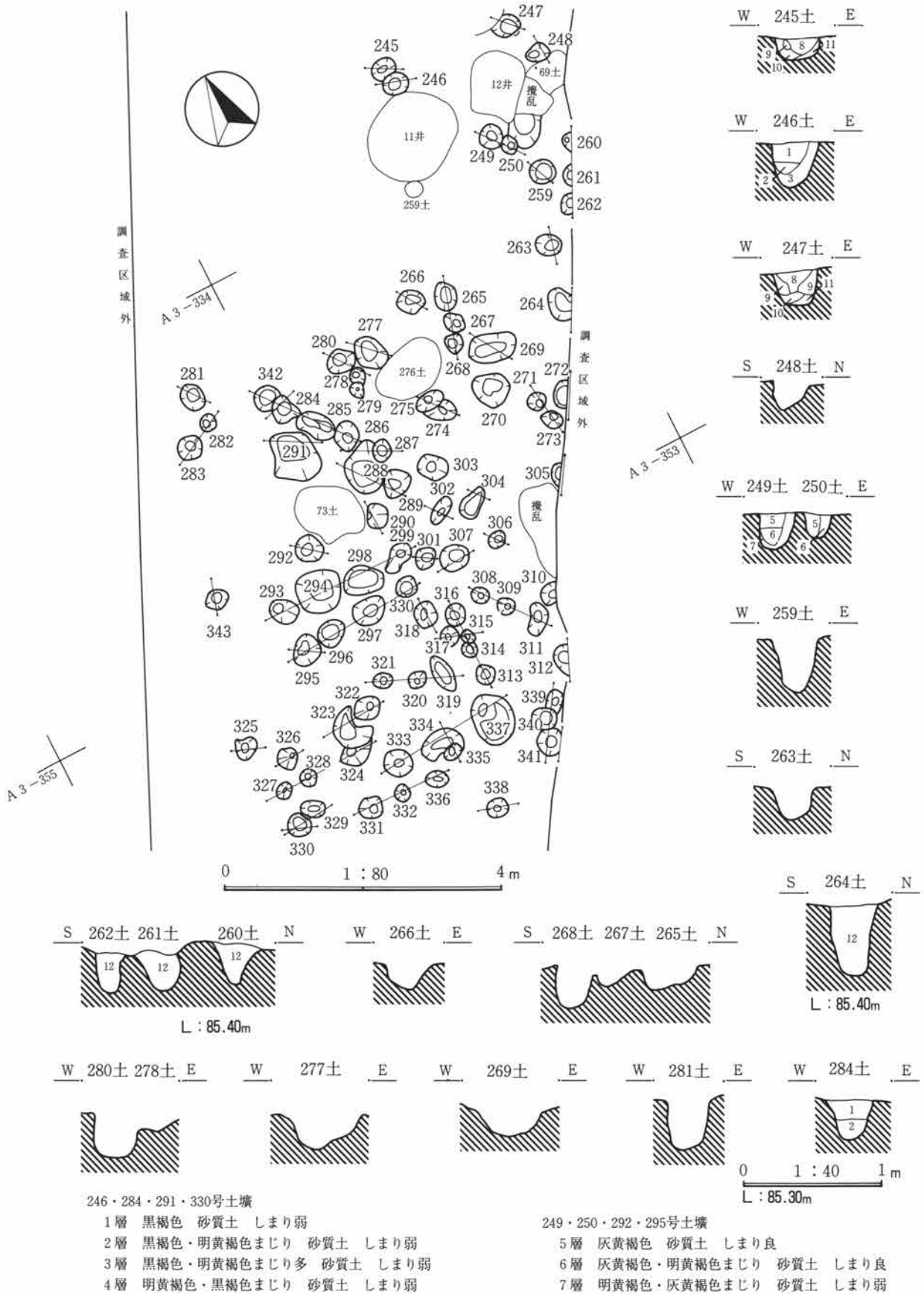


- | | |
|------------------------------------|--------------------------|
| 200・164・161・144・238・242・243・244号土壤 | 179・162・145号土壤 |
| 1層 におい黄褐色 砂質土 しまりやや弱 | 8層 暗褐色 砂質土 しまり弱 |
| 2層 におい黄褐色・明黄褐色混じり 砂質土 しまりやや弱 | 9層 暗褐色・明黄褐色まじり 砂質土 しまり弱 |
| 3層 明黄褐色・におい黄褐色まじり 砂質土 しまり弱 | 10層 明黄褐色・暗褐色まじり 砂質土 しまり弱 |
| 4層 明黄褐色 砂質土 しまり弱 | 175号土壤 |
| 165・158・237・240・239・241号土壤 | 11層 褐灰色 砂質土 しまり弱 |
| 5層 灰黄褐色 砂質土 しまり良 | 12層 褐灰色・明黄褐色まじり しまり弱 |
| 6層 灰黄褐色・明黄褐色まじり 砂質土 しまり良 | |
| 7層 明黄褐色・灰黄褐色まじり 砂質土 しまり弱 | |

第76図 北西区土壤集合分布図(2)・断面図(3)

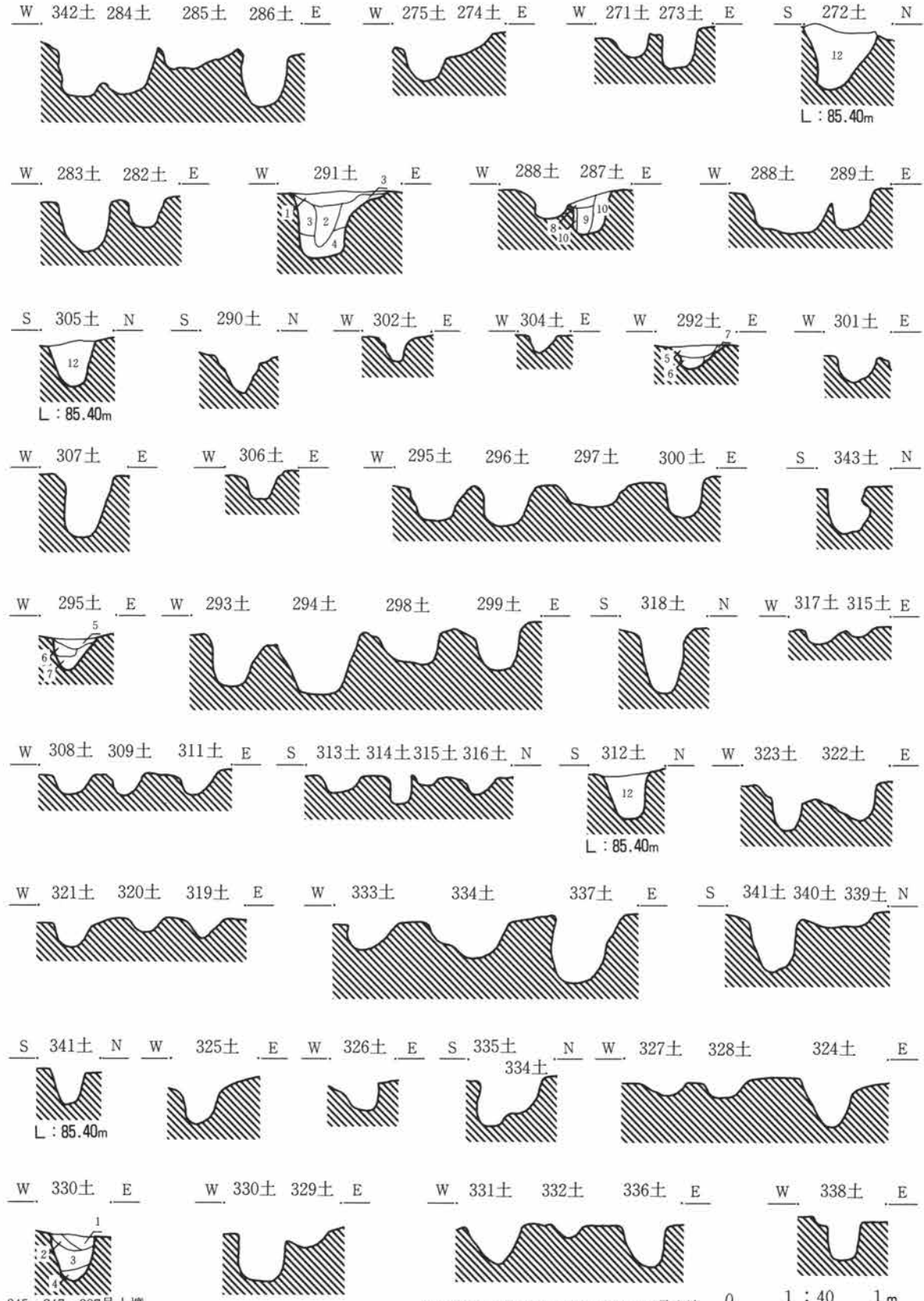


第77図 北西区土壙集合断面図(4)



第78図 北西区土壌集合分布図(3)・断面図(5)

第4節 中近世



245・247・287号土壌

- 8層 におい黄褐色 砂質土 しまり良
- 9層 におい黄褐色・明黄褐色まじり 砂質土 しまり良
- 10層 明黄褐色・におい黄褐色まじり 砂質土 しまり弱
- 11層 黄褐色 砂質土 しまり弱

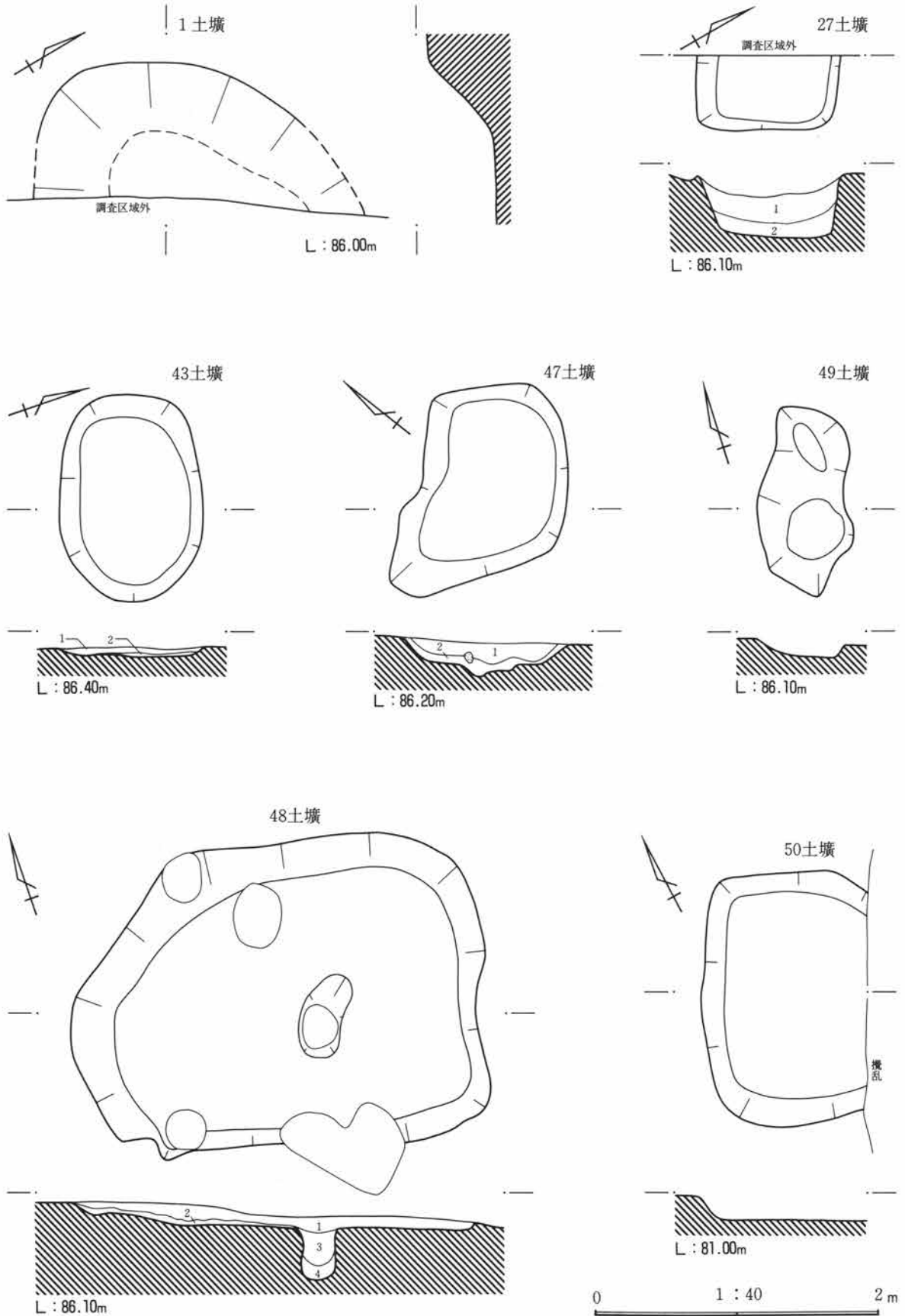
262・261・260・264・272・305・312号土壌

- 12層 褐灰色 砂質土 しまりやや弱

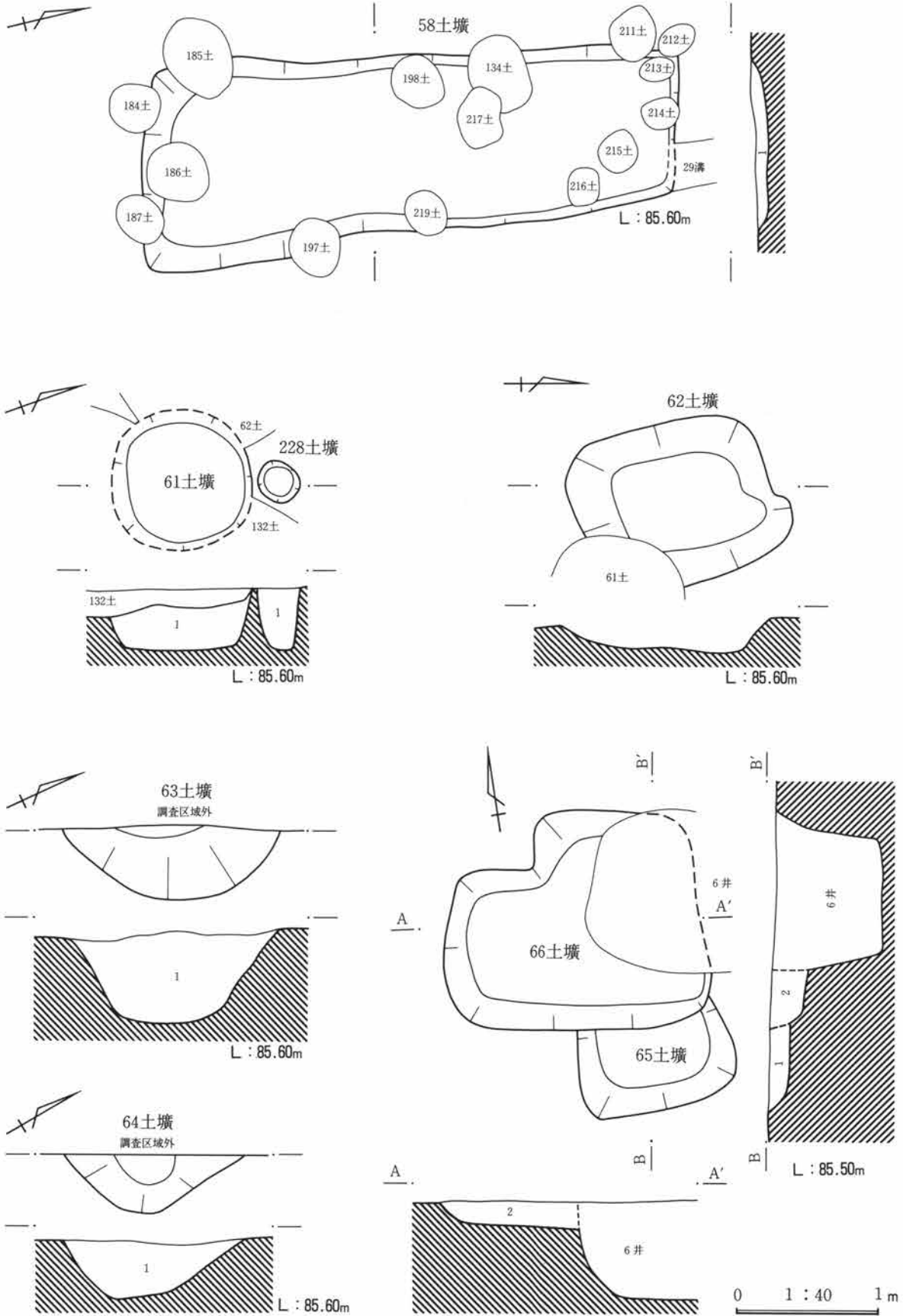
0 1 : 40 1 m
L : 85.30m

第79図 北西区土壌集合断面図 (6)

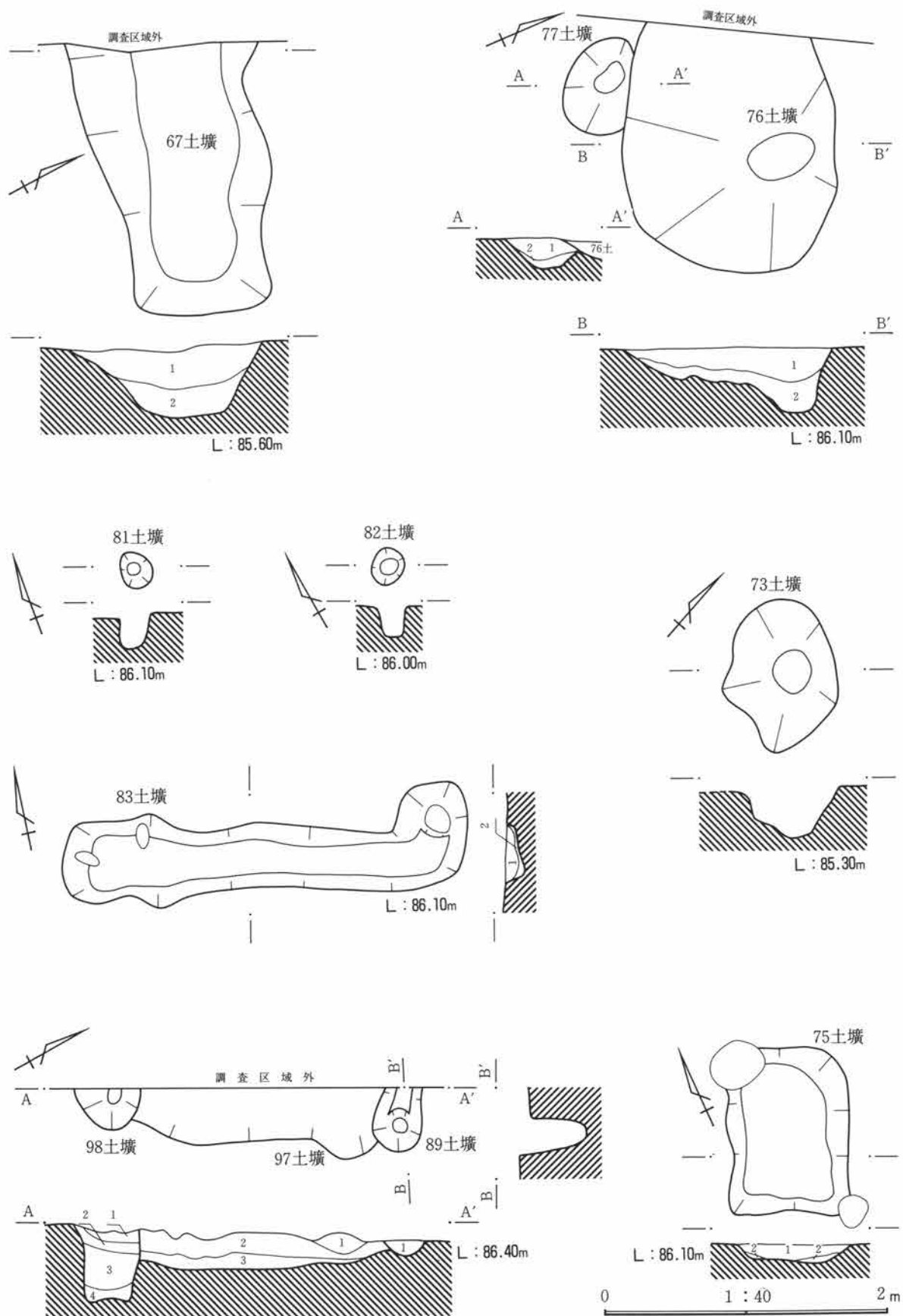
第4章 調査遺構・遺物



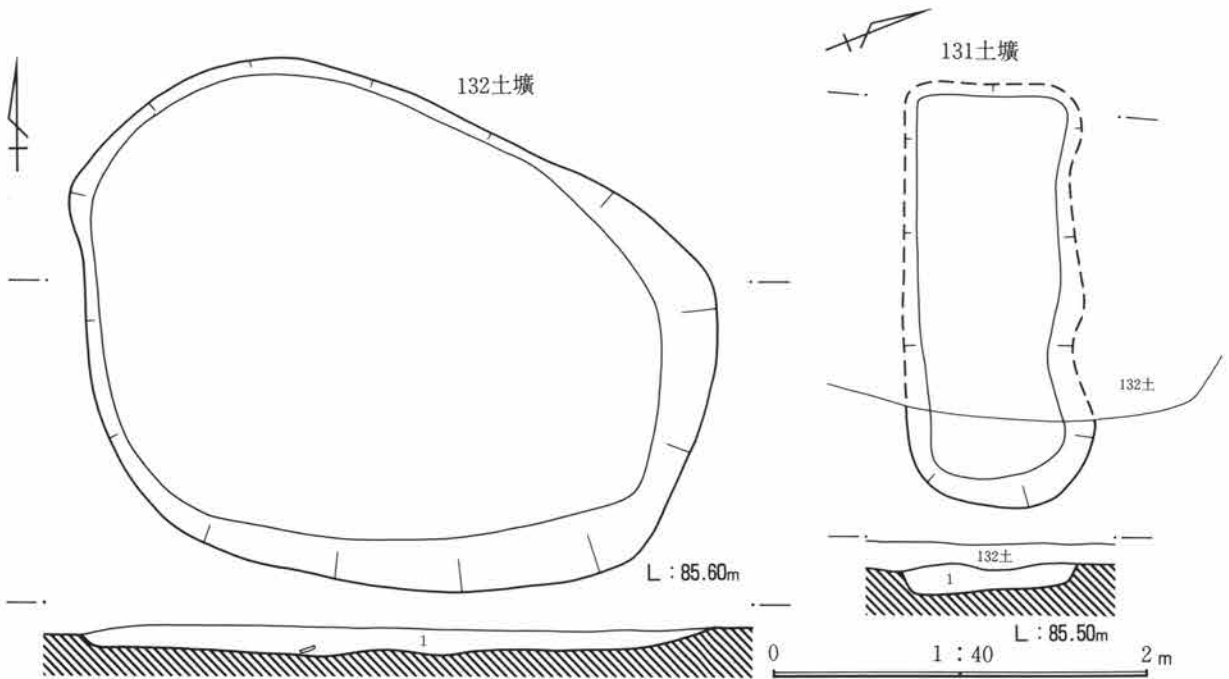
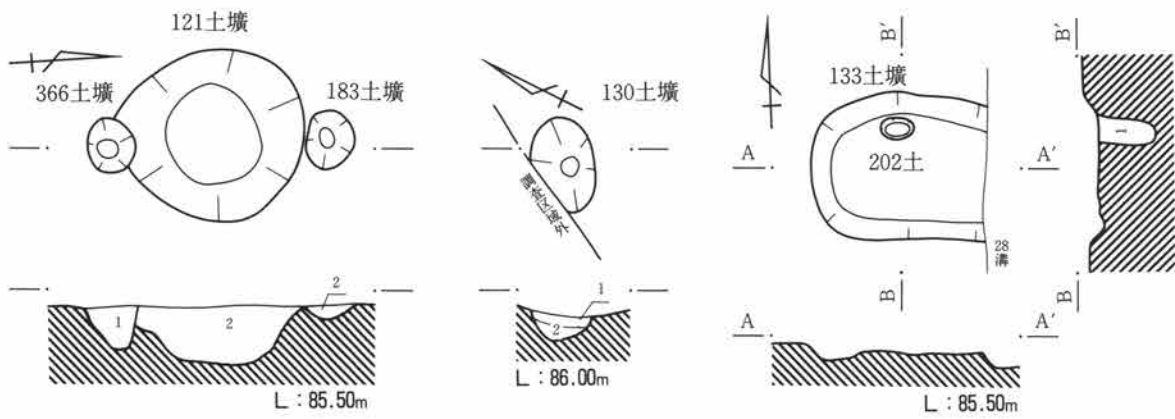
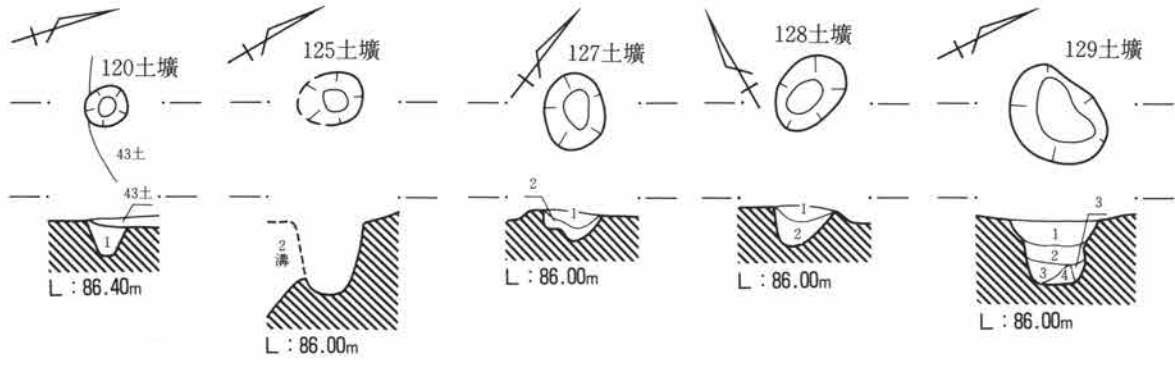
第80図 北西区土壙平面・断面図(1)



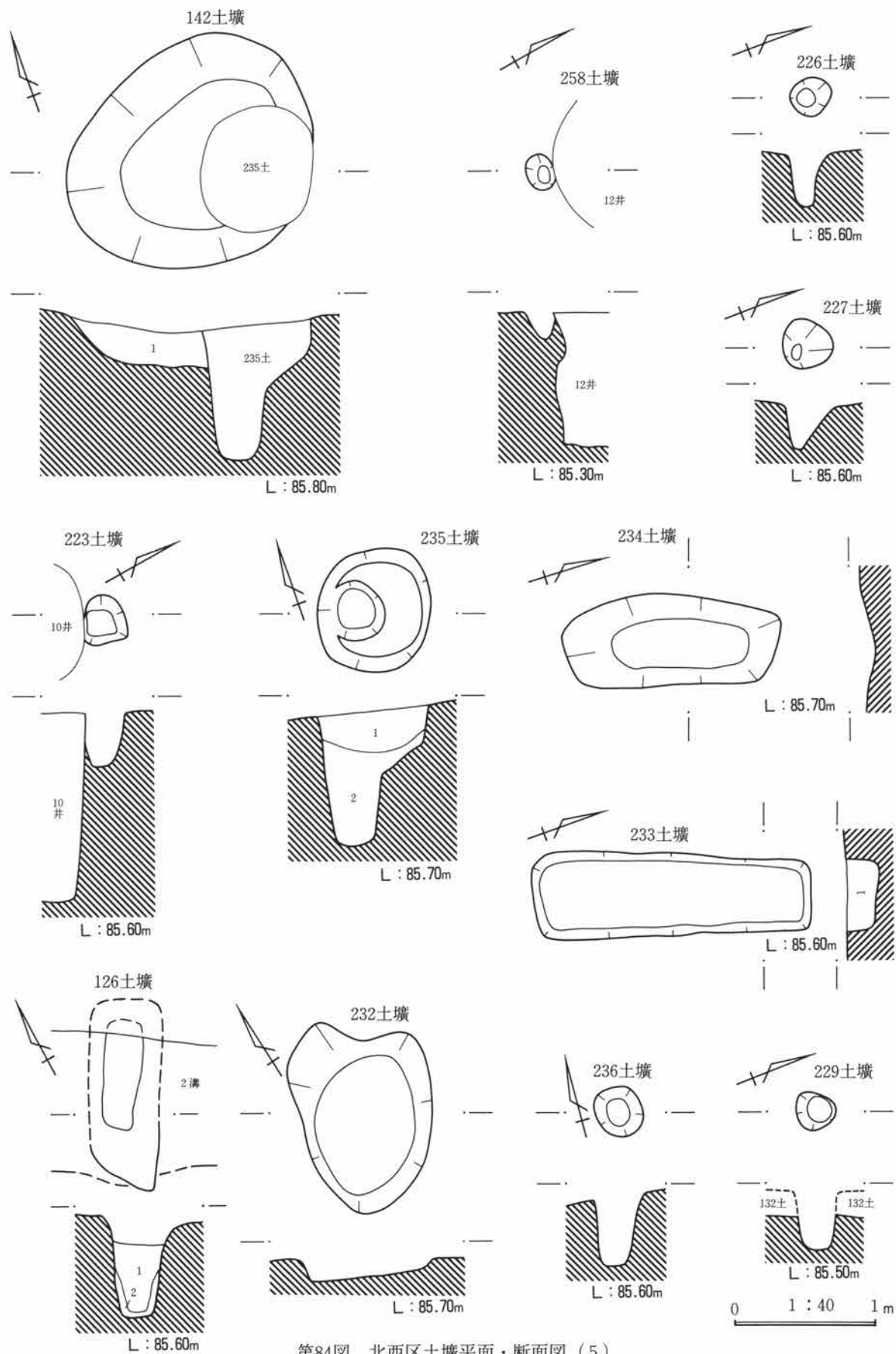
第81図 北西区土壙平面・断面図(2)



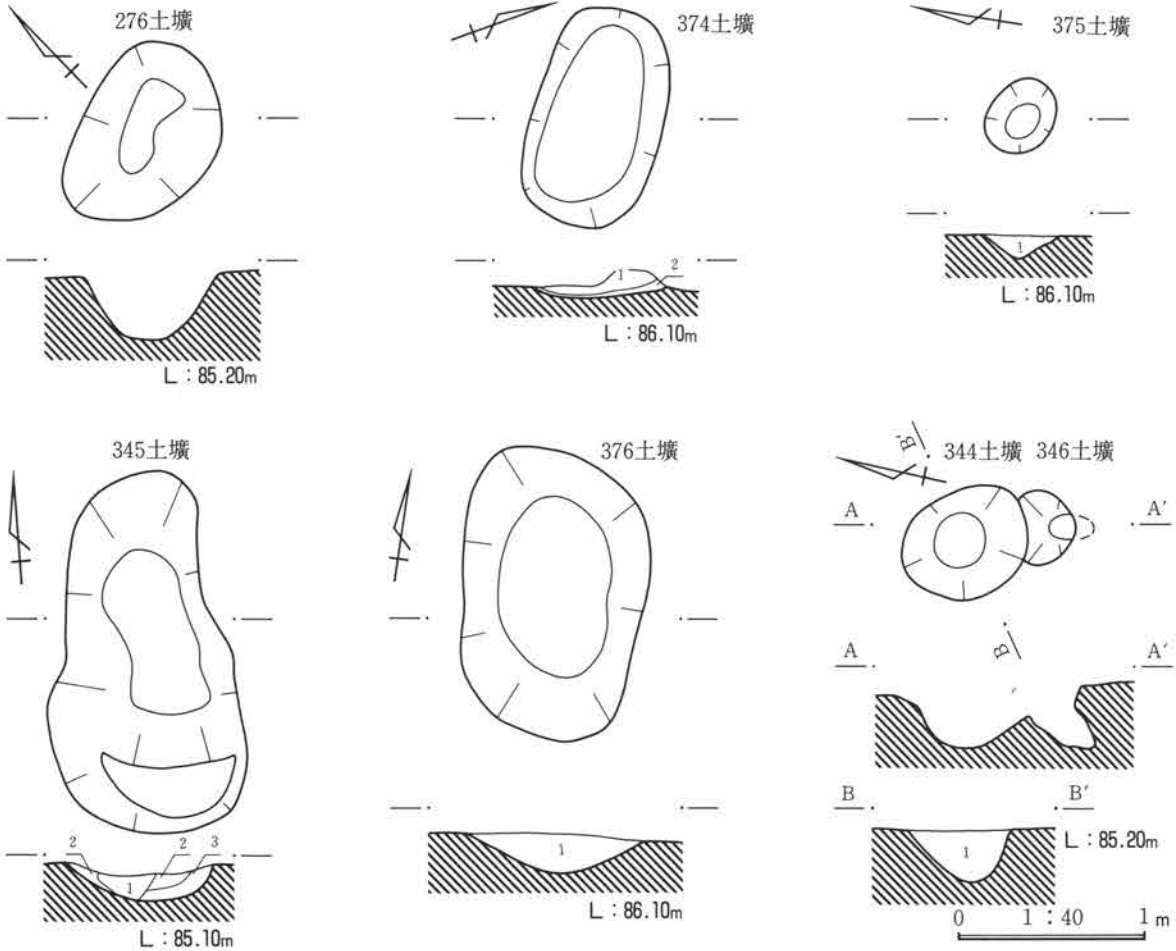
第82図 北西区土壙平面・断面図(3)



第83図 北西区土塙平面・断面図(4)



第84図 北西区土壙平面・断面図(5)



27号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱	75号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂礫土	しまり良	
	2層	暗褐色	砂質土	しまり弱		2層	にぶい黄褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり弱	
43号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良	120号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良	
	2層	にぶい黄褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり良	127号土壌	1層	黒褐色	砂質土	しまり良	
47号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良		2層	黒褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり弱	
	2層	にぶい黄褐色・黄褐色まじり	砂質土	しまり良	128号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱	
48号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良		2層	にぶい黄褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり弱	
	2層	にぶい黄褐色・黄褐色まじり	砂質土	しまり良	129号土壌	1層	にぶい黄褐色・黄褐色まじり	砂質土	しまり弱	
	3層	にぶい黄褐色	砂質土	しまりやや弱		2層	黄褐色	砂質土	しまり弱	
	4層	にぶい黄褐色・明黄褐色	砂質土	しまり良		3層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱	
58号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良		4層	黄褐色	砂質土	しまり弱	
61号土壌	1層	褐灰色	砂質土	しまり良	366・121・183号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱	
228号土壌	1層	褐灰色	砂質土	しまり弱		2層	灰黄褐色	砂質土	しまり弱	
63号土壌	1層	褐灰色	粘性ややあり	しまり弱	130号土壌	1層	黒褐色	砂質土	しまり弱	
64号土壌	1層	褐灰色	砂質土	しまり弱		2層	黒褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり弱	
65・66号土壌	1層	褐灰色	砂質土	しまり弱	202号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱	
	2層	褐灰色	やや粘質	しまり弱	132号土壌	1層	黄灰色	砂質土	しまり弱	
67号土壌	1層	褐灰色	砂質土	しまり良	131号土壌	1層	黄灰色	砂質土	しまり弱	
	2層	褐灰色・淡黄色	粘質土	しまりやや弱	142号土壌	1層	黒褐色	砂質土	しまり弱	
76号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良	235号土壌	1層	灰褐色	粘質土		
	2層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱		2層	褐灰色	粘質土		
77号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良	233号土壌	1層	褐灰色	砂質土	しまり弱	
	2層	にぶい黄褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり弱	126号土壌	1層	黒褐色	砂質土	しまり弱	
83号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱		2層	黒褐色・明黄褐色	砂質土	しまり弱	
	2層	にぶい黄褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり弱	374号土壌	1層	暗褐色	粘性ややあり	しまり良 炭化物極少量含む	
98号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良		2層	褐色	砂質土	しまり弱	
	2層	灰黄褐色	砂質土	しまり良	375号土壌	1層	暗褐色	粘性ややあり	しまり良	
	3層	黒褐色	砂質土	しまり良		345号土壌	1層	黒褐色	粘性少	しまり良
	4層	にぶい黄褐色・黄褐色まじり	砂質土	しまり良		2層	黒褐色	砂質土	しまり良	
97号土壌	1層	灰黄褐色	砂質土	しまり弱		3層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱	
	2層	黒褐色	砂質土	しまり良	376号土壌	1層	暗褐色	砂質土	しまり良	
	3層	黒褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり良	344号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱	
87号土壌	1層	黒褐色	砂質土	しまり弱						

第85図 北西区土壌平面・断面図 (6)

第4章 調査遺構・遺物

北西区土坑一覽表

No. 1

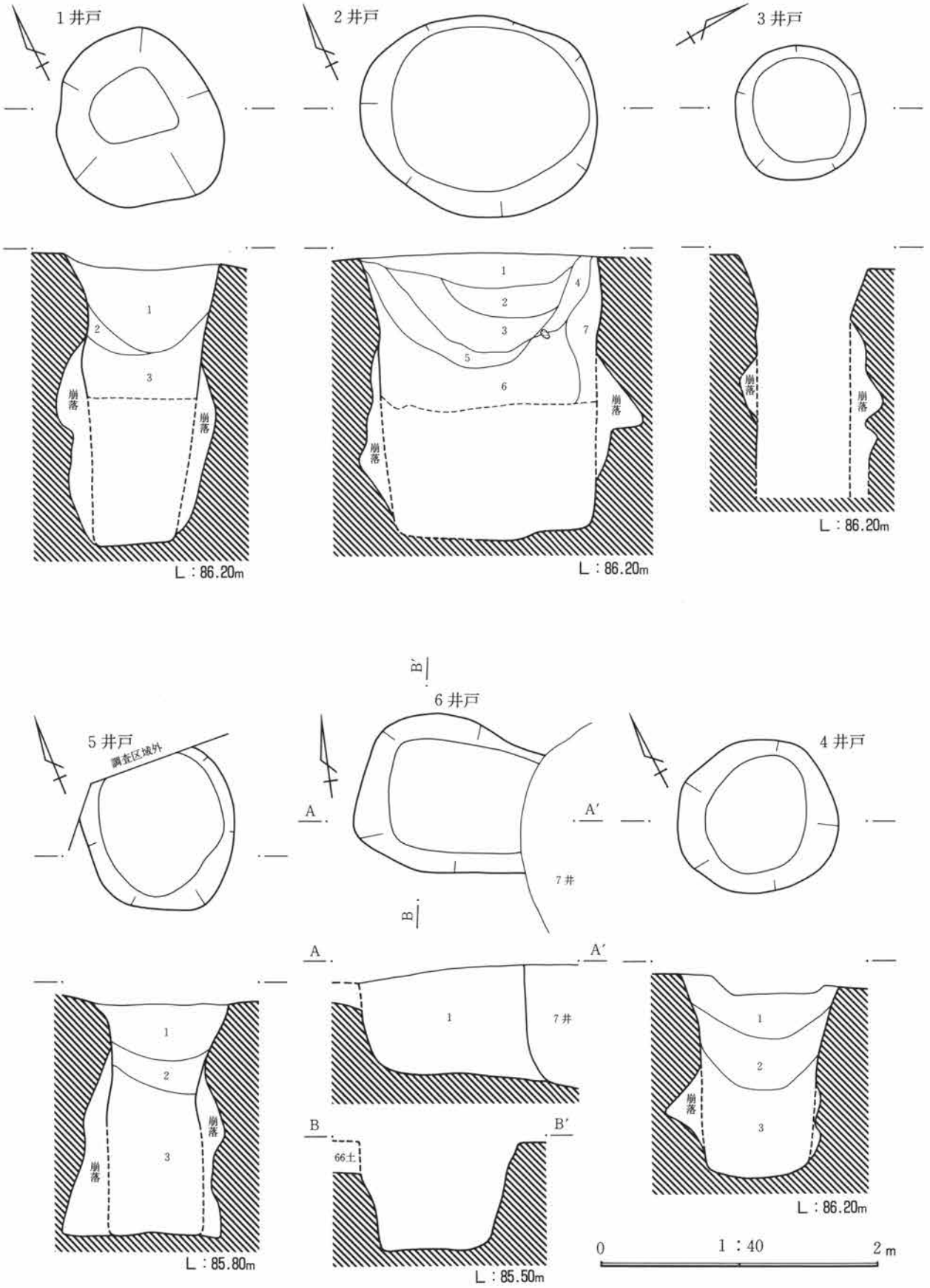
番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
1	A3-127G	楕円形	233	<93>	54	N-68°-E	
27	A3-150G	隅丸方形?	100	<52>	30		
43	A3-087G	楕円形	142	100	7	N-71°-W	
44	A3-067G	隅丸長方形	90	72	28	N-1°-W	
45	A3-087G	楕円形	80	54	19	N-31°-W	縄文深鉢 (29図-1)
46	A3-047G	円形	26	25	53		
47	A3-047G	隅丸方形	130	101	24	N-52°-E	
48	A3-026G	隅丸長方形	283	206	13	N-70°-W	縄文石器・二次加工剥片 (51図-56)
49	A3-107G	隅丸長方形	120	56	11	N-28°-E	
50	A3-005G	方形?	178	<117>	15		灰釉陶器皿 (139図-6)
58	A3-272G	隅丸長方形	378	120	8	N-8°-E	
61	A3-272G	円形	99	98	42		陶器・灰釉陶器・鉄製品
62	A3-272G	隅丸長方形	138	112	23	N-2°-E	
63	A3-252G	方形?	151	<52>	64		
64	A3-273G	方形?	124	<41>	37		
65	A3-252G	方形?	104	<58>	14		
66	A3-252G	不整形	186	152	21	N-87°-W	焼締陶器甕 (140図-24)
67	A3-252G	隅丸長方形	<188>	135	47	N-64°-W	
73	A3-334G	楕円形	95	74	35	N-34°-W	
75	A3-006G	隅丸長方形	113	81	12	N-26°-E	
76	A3-026G	楕円形	<167>	99	45	N-63°-E	
77	A3-026G	楕円形	70	<44>	22	N-31°-W	
78	A3-026G	円形	28	25	23		
79	A3-026G	円形	28	24	20		
80	A3-046G	楕円形	46	36	15	N-81°-W	
81	A3-006G	円形	26	21	22		
82	A3-006G	円形	25	21	19		
83	A3-046G	隅丸長方形	281	45	15	N-78°-W	
84	A3-046G	隅丸方形	30	26	19		
85	A3-026G	楕円形	55	24	45	N-74°-W	
86	A3-026G	円形	39	36	34		
87	A3-047G	円形	32	26	33		
88	A3-046G	円形	33	31	29		
89	A3-046G	楕円形	46	24	23	N-50°-W	
90	A3-046G	円形	21	20	43		
96	A3-046G	楕円形	79	59	30	N-27°-E	
97	A3-047G	不明	-	-	25		
98	A3-047G	楕円形?	<33>	<27>	39		
99	A3-047G	円形	19	17	29		
100	A3-047G	円形	19	15	13		
101	A3-047G	楕円形	54	45	12	N-68°-E	
102	A3-046G	円形	29	24	15		
103	A3-067G	円形	28	23	19		
104	A3-067G	楕円形	25	20	11	N-28°-W	
105	A3-067G	楕円形	50	35	42	N-35°-W	
106	A3-067G	円形	19	18	17		
107	A3-067G	円形	33	30	11		
108	A3-067G	不整形	50	40	15	N-49°-E	
109	A3-067G	楕円形	43	25	13	N-2°-E	
110	A3-067G	円形	20	19	18		
111	A3-067G	楕円形	43	31	17	N-26°-W	
112	A3-067G	円形	22	20	21		
113	A3-067G	円形	20	20	43		
114	A3-067G	円形	20	17	17		
115	A3-067G	楕円形	28	22	14	N-8°-E	
116	A3-067G	円形	37	34	44		
117	A3-067G	円形	37	34	16		
118	A3-067G	楕円形	40	26	11	N-40°-W	
119	A3-087G	円形	26	25	23		

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
120	A3-087G	円形	23	21	17		磨き石 (170図-17)
121	A3-293G	円形	102	93	31		
123	A3-068G	円形?	40	<23>	10		
124	A3-068G	円形	47	<19>	10		
125	A3-148G	楕円形	36	28	38	N-15°-E	
126	A3-148G	隅丸長方形	125	50	67	N-30°-E	
127	A3-148G	楕円形	40	33	15	N-50°-W	
128	A3-169G	楕円形	45	33	20	N-73°-E	
129	A3-169G	楕円形	58	45	33	N-72°-E	
130	A3-170G	楕円形	51	34	14	N-45°-E	
131	A3-271G	隅丸長方形	222	94	<24>	N-69°-W	
132	A3-271G	隅丸長方形	345	260	15	N-37°-E	
133	A3-272G	不明	<92>	<72>	7		
134	A3-272G	楕円形	52	40	44	N-80°-E	
135	A3-272G	楕円形	34	27	46	N-62°-E	
137	A3-292G	隅丸方形	39	34	22		
138	A3-292G	楕円形	47	36	31	N-75°-W	
142	A3-231G	楕円形	185	153	23	N-68°-E	
144	A3-293G	隅丸方形	51	48	31		
145	A3-293G	円形	41	<30>	20		
146	A3-293G	円形	59	54	47		
147	A3-293G	円形	32	26	48		
148	A3-293G	楕円形	43	32	33	N-10°-W	
149	A3-293G	円形	36	35	29		
150	A3-293G	円形	50	48	60		
151	A3-293G	円形	48	43	33		
152	A3-293G	円形	51	51	16		
153	A3-293G	円形	23	20	20		
154	A3-293G	円形?	34	<18>	30		
155	A3-293G	円形	39	34	20		
156	A3-293G	円形	27	24	11		
157	A3-293G	不整形	47	40	39	N-58°-W	
158	A3-293G	円形	35	30	29		
159	A3-293G	円形	30	29	21		
160	A3-293G	楕円形	45	35	35	N-37°-E	
161	A3-293G	楕円形	27	19	27	N-43°-E	
162	A3-293G	楕円形?	31	<21>	35	N-51°-E	
163	A3-293G	円形	30	29	16		
164	A3-293G	楕円形	52	33	17	N-17°-W	
165	A3-292G	楕円形	41	30	24	N-37°-E	
166	A3-273G	円形	41	40	45		
167	A3-273G	隅丸方形	30	27	24		
168	A3-292G	楕円形	36	<31>	28	N-48°-E	
169	A3-292G	楕円形	43	35	48	N-20°-E	
170	A3-292G	楕円形	65	56	41	N-17°-W	
171	A3-292G	円形	44	44	47		
172	A3-292G	円形	43	<34>	39		
173	A3-292G	円形	25	24	19		
174	A3-292G	楕円形	40	25	36	N-25°-E	
175	A3-312G	不明	82	<40>	39		
176	A3-292G	円形	31	31	20		
177	A3-292G	楕円形	70	50	12	N-65°-W	
178	A3-292G	楕円形	40	31	27	N-22°-E	
179	A3-292G	楕円形	50	42	28	N-72°-E	
180	A3-292G	円形	22	18	27		
181	A3-292G	円形	35	33	27		
182	A3-292G	円形	28	23	12		
183	A3-293G	円形	30	26	10		
184	A3-292G	円形	36	34	39		
185	A3-292G	楕円形	60	45	39	N-77°-E	

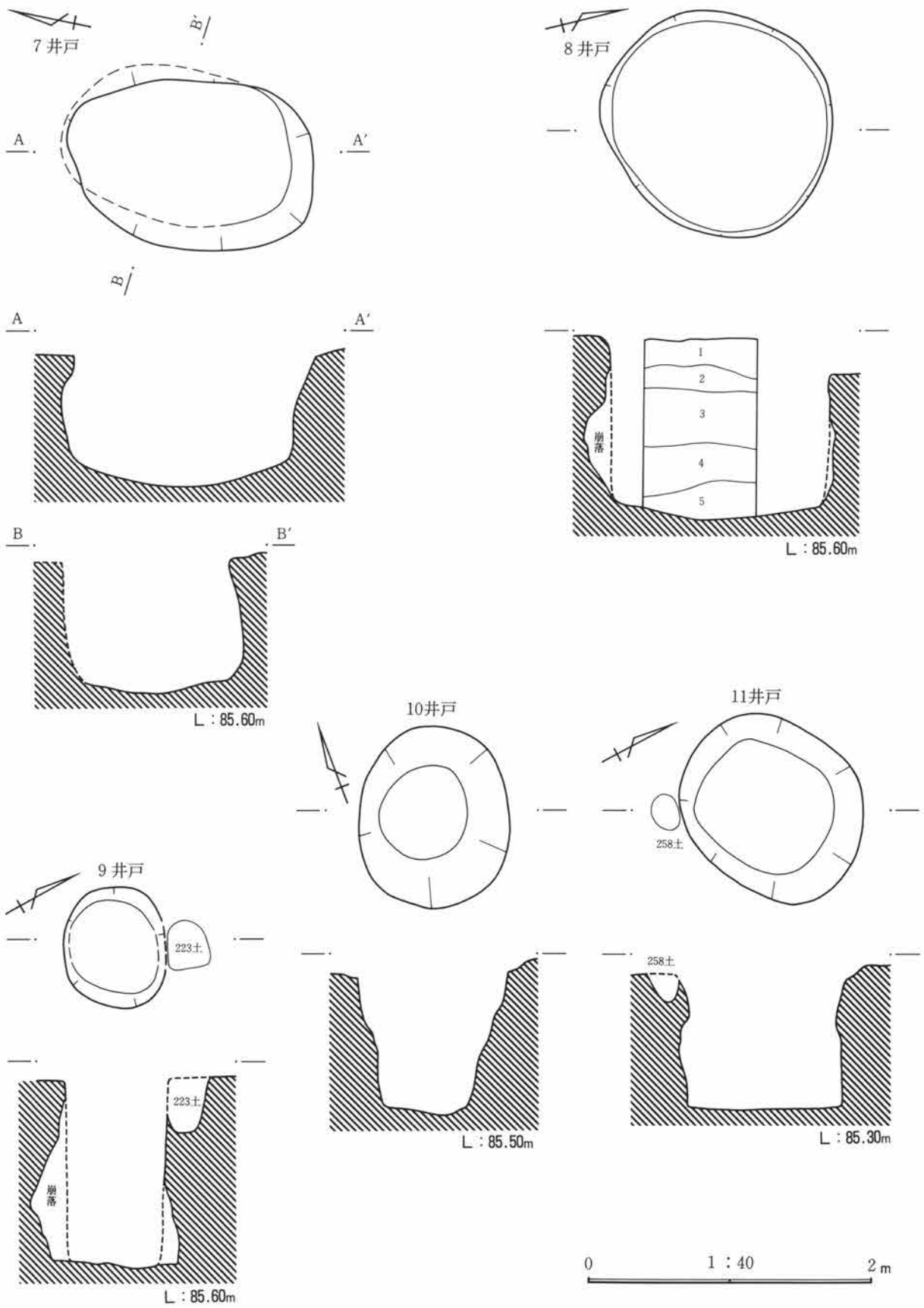
番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
186	A3-292G	隅丸方形	42	41	20		
187	A3-292G	楕円形	37	29	18	N-29°-E	
188	A3-292G	楕円形	40	32	11	N-51°-E	
189	A3-292G	楕円形	30	26	28	N-72°-E	
190	A3-292G	円形	48	38	22		
191	A3-292G	円形?	<23>	<16>	7		
192	A3-292G	楕円形	35	25	17	N-13°-E	
193	A3-292G	隅丸長方形	63	54	17	N-75°-W	
194	A3-272G	楕円形	80	66	19	N-2°-W	
195	A3-292G	円形	42	40	24		
196	A3-272G	楕円形	44	28	18	N-83°-E	
197	A3-292G	円形	38	36	40		
198	A3-272G	円形	39	35	12		
199	A3-272G	円形	24	22	15		
200	A3-272G	円形	35	30	32		
201	A3-272G	円形	20	15	22		
202	A3-273G	楕円形	17	10	29	N-84°-W	
203	A3-272G	楕円形	37	30	30	N	
204	A3-273G	円形	27	26	14		
205	A3-273G	円形	36	34	25		
206	A3-272G	円形	30	30	39		
207	A3-272G	円形	25	21	38		
208	A3-272G	不整形	31	30	26	N-65°-W	
209	A3-272G	楕円形	41	24	21	N-13°-W	
210	A3-272G	楕円形	36	29	34	N-86°-W	
211	A3-272G	円形	39	33	27		
212	A3-272G	楕円形	29	20	22	N-59°-W	
213	A3-272G	楕円形	24	16	23	N-8°-E	
214	A3-272G	円形	26	21	22		
215	A3-272G	楕円形	29	26	12	N-41°-W	
216	A3-272G	円形	25	22	11		
217	A3-272G	円形	38	30	23		
218	A3-272G	円形	23	20	17		
219	A3-272G	円形	29	27	17		
220	A3-272G	円形	35	30	14		
221	A3-272G	円形	54	44	16		
222	A3-272G	円形	35	32	28		
223	A3-291G	不整円形	34	30	37		
224	A3-271G	隅丸方形?	49	<39>	18		
225	A3-271G	円形	34	30	42		
226	A3-271G	円形	30	27	37		
227	A3-272G	円形	37	35	30		
228	A3-252G	円形	30	30	41		
229	A3-272G	円形	30	27	40		
230	A3-272G	円形	20	18	20		
231	A3-272G	楕円形	26	20	19	N-27°-E	
232	A3-251G	楕円形	132	90	15	N-48°-E	
233	A3-231G	隅丸長方形	196	59	20	N-19°-E	
234	A3-231G	隅丸長方形	151	64	10	N-17°-E	
235	A3-231G	円形	86	80	91		
236	A3-251G	隅丸方形	36	34	49		
237	A3-313G	円形	34	30	25		
238	A3-313G	円形	36	28	30		
239	A3-313G	楕円形	58	45	41	N-86°-W	
240	A3-313G	楕円形	44	30	22	N-79°-E	
241	A3-313G	円形	31	30	49		
242	A3-313G	楕円形	57	39	39	N-81°-W	
243	A3-313G	円形	51	42	40		
244	A3-313G	円形	34	30	-		

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
245	A3-313G	円形	35	28	23		
246	A3-313G	円形	35	<31>	34		
247	A3-312G	円形	34	33	34		
248	A3-312G	楕円形	<35>	20	13	N-61°-W	
249	A3-313G	円形	38	37	22		
250	A3-333G	円形	29	24	20		
251	A3-313G	円形	26	24	13		
252	A3-313G	円形	27	23	25		
253	A3-313G	円形	22	21	14		
254	A3-313G	円形	30	30	13		
255	A3-313G	円形	36	35	15		
256	A3-313G	楕円形	20	15	5	N-83°-E	
257	A3-313G	円形	38	26	24		
258	A3-333G	円形	29	<21>	20		
259	A3-332G	円形	38	33	29		
260	A3-332G	不明	—	—	9		
261	A3-332G	不明	—	—	17		
262	A3-332G	円形?	28	<15>	15		
263	A3-333G	楕円形	37	30	47	N-53°-W	
264	A3-333G	不整形	46	<34>	36	N-15°-E	
265	A3-333G	楕円形	37	31	20	N-19°-E	
266	A3-333G	楕円形	40	34	20	N-78°-W	
267	A3-333G	楕円形	34	25	17	N-34°-W	
268	A3-333G	不整形	29	26	36		
269	A3-333G	楕円形	68	42	26	N-73°-W	
270	A3-333G	不整形	52	49	11	N-41°-W	
271	A3-333G	円形	28	24	16		
272	A3-333G	楕円形?	39	<21>	46	N-38°-E	
273	A3-333G	楕円形	34	24	28	N-46°-W	
274	A3-333G	楕円形	40	34	18	N-47°-W	
275	A3-333G	楕円形	41	25	30	N-83°-E	
276	A3-333G	楕円形	104	71	34	N-80°-E	
277	A3-333G	楕円形	50	39	23	N-78°-E	
278	A3-333G	円形	23	20	19		
279	A3-333G	不整形	20	17	11		
280	A3-333G	楕円形	40	34	34	N-58°-W	
281	A3-334G	楕円形	49	33	38	N-3°-W	
282	A3-334G	円形	24	23	20		
283	A3-334G	円形	37	35	35		
284	A3-334G	不整形	40	34	36	N-38°-W	
285	A3-333G	楕円形	58	37	23	N-39°-W	
286	A3-333G	楕円形	45	37	45	N-11°-E	
287	A3-333G	円形	23	18	26		
288	A3-333G	不整形	76	60	29	N-33°-E	
289	A3-333G	不整形	42	37	27	N-43°-E	
290	A3-333G	円形	34	31	27		
291	A3-334G	不整形	69	65	50	N	
292	A3-334G	円形	40	36	21		
293	A3-334G	楕円形	42	35	39	N-48°-W	
294	A3-334G	隅丸方形	60	60	46		
295	A3-354G	楕円形	46	39	23	N-48°-E	
296	A3-354G	円形	39	35	24		
297	A3-354G	楕円形	51	37	15	N-81°-E	
298	A3-333G	隅丸長方形	58	39	24	N-68°-W	
299	A3-333G	不整形	48	30	28	N-52°-E	
300	A3-353G	円形	30	29	24		
301	A3-353G	楕円形	33	27	17	N-40°-E	
302	A3-333G	楕円形	43	24	15	N-62°-E	
303	A3-333G	楕円形	44	34	10	N-45°-W	
304	A3-333G	楕円形	49	28	13	N-57°-E	

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
305	A3-333G	不明	32	<13>	21	N-32°-E	
306	A3-353G	楕円形	26	20	17	N-84°-E	
307	A3-353G	円形	42	39	40		
308	A3-353G	円形	29	24	14		
309	A3-353G	円形	26	26	15		
310	A3-353G	円形?	29	<25>	9		
311	A3-353G	楕円形	46	30	18	N-65°-E	
312	A3-353G	不明	31	<15>	-		
313	A3-353G	円形	29	30	11		
314	A3-353G	円形	24	23	22		
315	A3-353G	楕円形	22	17	7	N-67°-W	
316	A3-353G	円形	30	29	11		
317	A3-353G	円形	28	27	10		
318	A3-353G	円形	35	33	47		
319	A3-353G	楕円形	55	29	17	N-2°-W	
320	A3-353G	円形	25	22	11		
321	A3-353G	円形	25	21	15		
322	A3-353G	隅丸方形	36	33	26		
323	A3-354G	不整形	60	57	22	N-59°-E	
324	A3-354G	不明	38	<25>	31		
325	A3-354G	不整形	32	31	22		
326	A3-354G	円形	30	29	20		
327	A3-354G	円形	26	22	8		焼締陶器甕 (140図-19)
328	A3-354G	円形	24	24	10		
329	A3-354G	楕円形	37	24	18	N-66°-W	
330	A3-354G	円形	37	37	25		
331	A3-354G	円形	33	30	25		
332	A3-354G	円形	27	25	7		
333	A3-354G	円形	42	38	17		
334	A3-354G	楕円形	53	35	23	N-87°-W	
335	A3-354G	円形	25	25	30		
336	A3-354G	楕円形	34	25	30	N-69°-W	
337	A3-353G	楕円形	74	57	43	N-2°-W	
338	A3-353G	円形	31	27	22		
339	A3-353G	楕円形?	28	22	17	N-62°-E	
340	A3-353G	円形	34	30	16		
341	A3-353G	円形?	37	<34>	36		
342	A3-334G	円形?	38	<28>	36		
343	A3-334G	円形	30	28	31		
344	A3-375G	楕円形	69	56	27	N-42°-W	
345	A3-374G	楕円形	192	90	14	N-5°-E	
346	A3-375G	不明	40	<27>	30		
366	A3-293G	円形	54	52	67		縄文石器・二次加工剥片 (53図-70)
374	A3-128G	隅丸長方形	117	69	14	N-55°-W	
375	A3-128G	円形	41	35	12		
376	A3-107G	隅丸長方形	149	98	21	N	

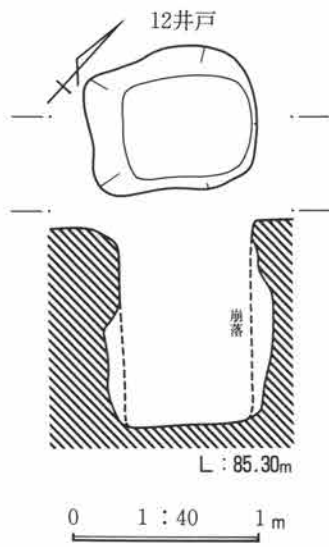


第86図 北西区井戸平面・断面図(1)



第87図 北西区井戸平面・断面図(2)

第4節 中近世

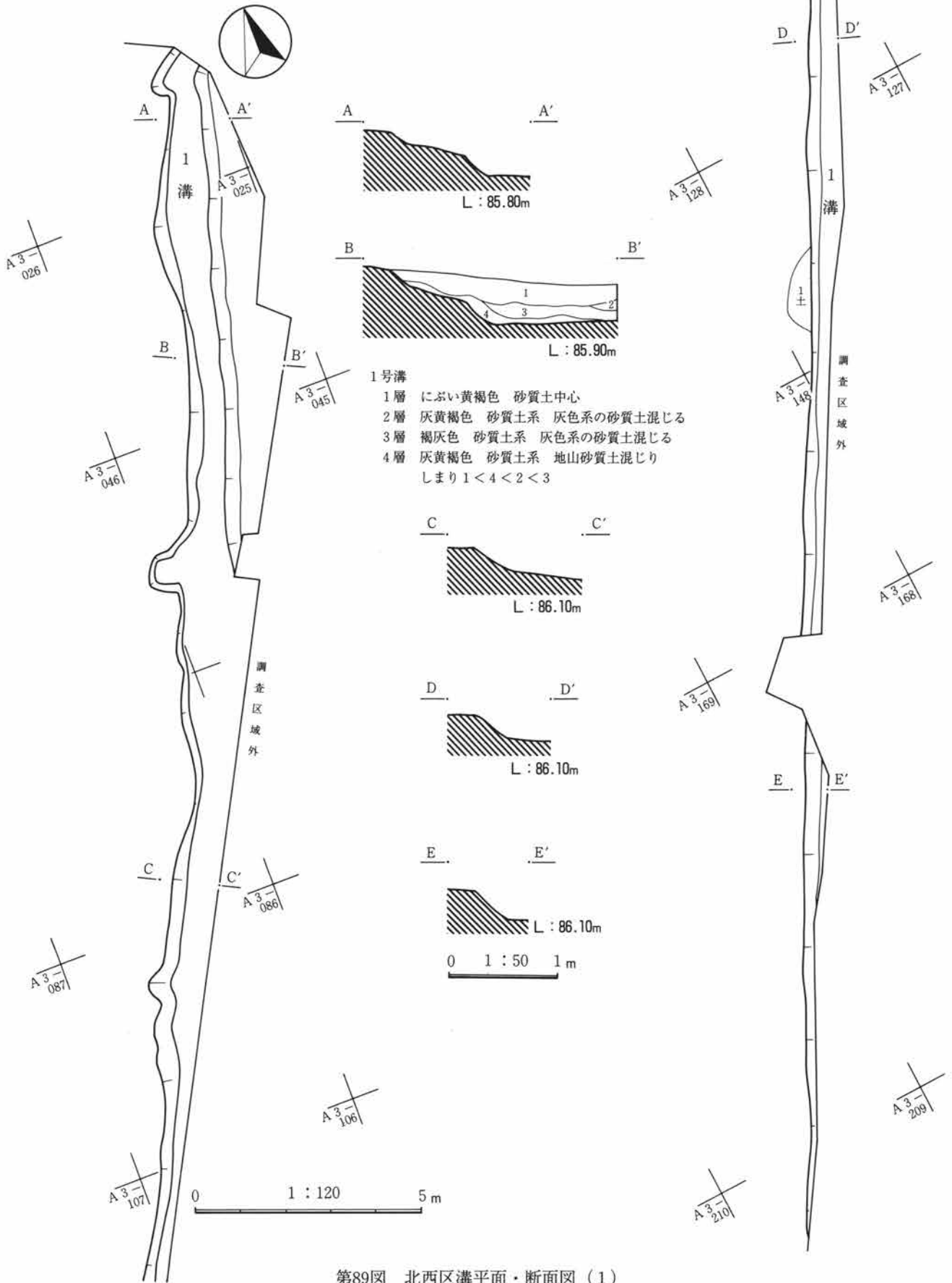


- 1号井戸 1層 にぶい黄褐色 砂質土混じり 軽石粒φ0.1-2.0cm 3%混じる
2層 灰黄褐色 砂質土混じり
3層 褐色土 砂質土混じり
1-3層 円礫φ0.2-1.0cm 5%混じり
- 2号井戸 1層 にぶい黄褐色 砂質土混じり
2層 暗褐色 砂質土混じり
3層 黒褐色土 砂質土系
4層 にぶい黄褐色 砂質土まじり多め 壁の崩壊土一部混じる
5層 黒褐色土 円礫φ0.2-1.0cm 10%混じり
6層 黒褐色土 砂質土混じり少
7層 暗黄褐色土 砂質土
1-4、6層 円礫φ0.5-1.5cm大混じる
- 4号井戸 1層 褐色 砂質土 しまりややあり
2層 灰褐色 砂質土まじり しまり弱
3層 褐色 粘質土(砂質土混じり) しまり弱
1-3層 円礫φ0.2-0.8cm大 3%混じる しまり3<2<1
- 5号井戸 1層 褐灰色 砂質土混じり少
2層 灰褐色 粘質土
3層 褐灰色 粘質土
- 6号井戸 1層 褐灰色 粘質土 しまり弱
- 8号井戸 1層 明黄褐色 粗砂土
2層 明黄褐色 円礫混じりφ0.2-0.7cm大
3層 黄褐色 粗砂土 円礫まじりφ0.2-2.0cm大
4層 浅黄色 砂質土 円礫まじりφ0.2-1.5cm大
5層 黄灰色 細砂土
1-5層 しまり良

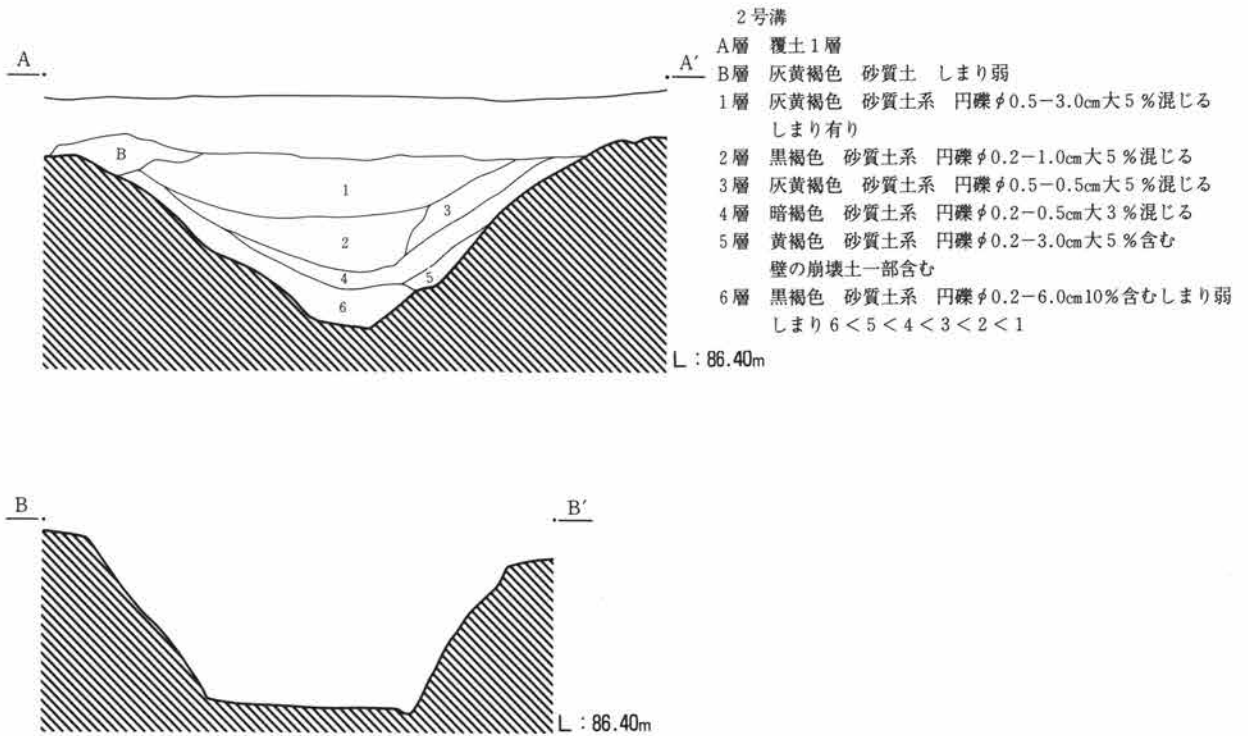
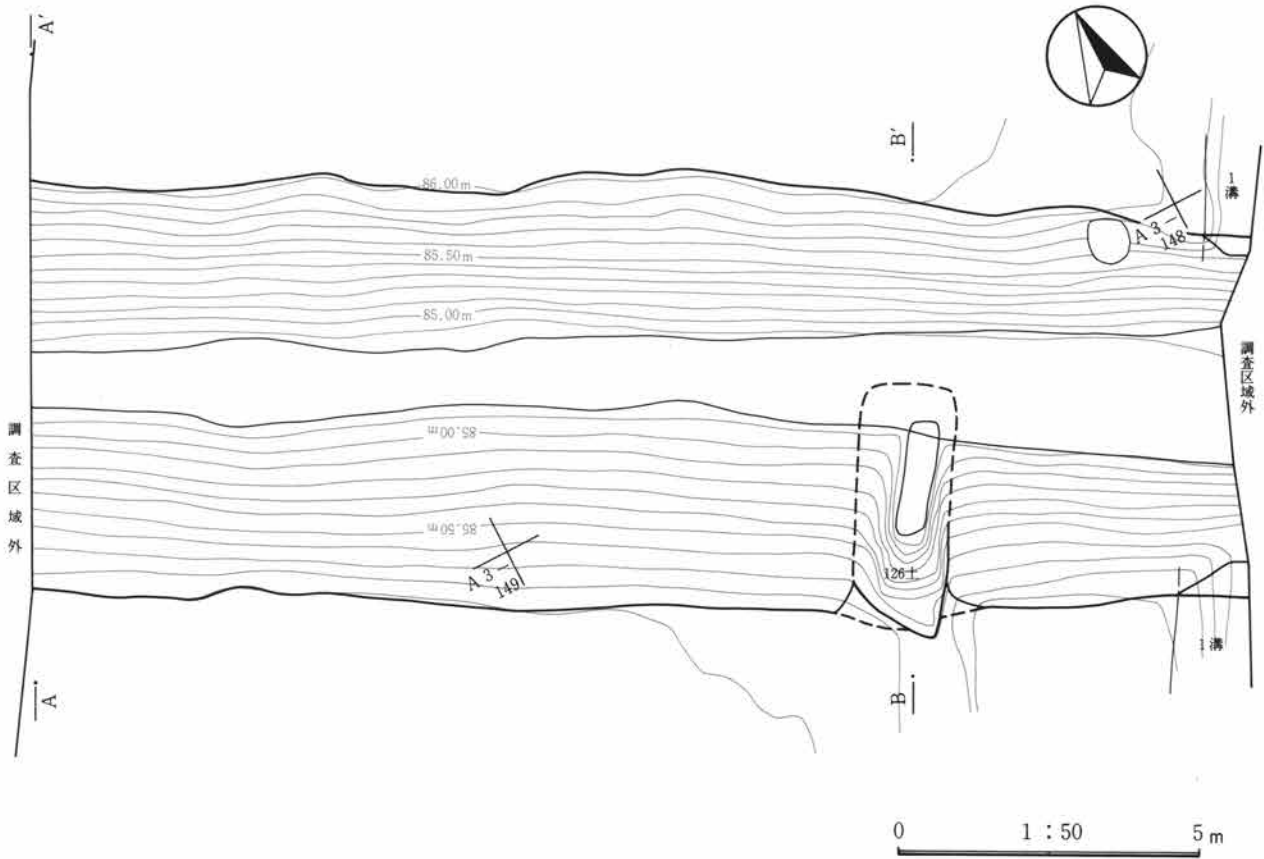
北西区井戸

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
1	A3-086G	円形	155	133	196		縄文前期諸磯式深鉢形土器 (29図-5)
2	A3-107G	楕円形	143	118	206	N-40°-W	
3	A3-107G	円形	96	93	<150>		
4	A3-127G	円形	115	111	131		
5	A3-231G	円形	(125)	111	164		板材 (190図-3)・曲物 (190図-5)
6	A3-252G	楕円形?	-	114	71		
7	A3-252G	楕円形	171	116	94	N-20°-E	縄文中期後半把手 (35図-3)
8	A3-271G	円形	164	156	126		
9	A3-291G	円形	85	73	130		砥石 (173図-4)
10	A3-292G	楕円形	127	106	97	N-23°-W	
11	A3-313G	楕円形	130	126	98	N-39°-W	
12	A3-313G	隅丸長方形	95	75	108	N-43°-E	

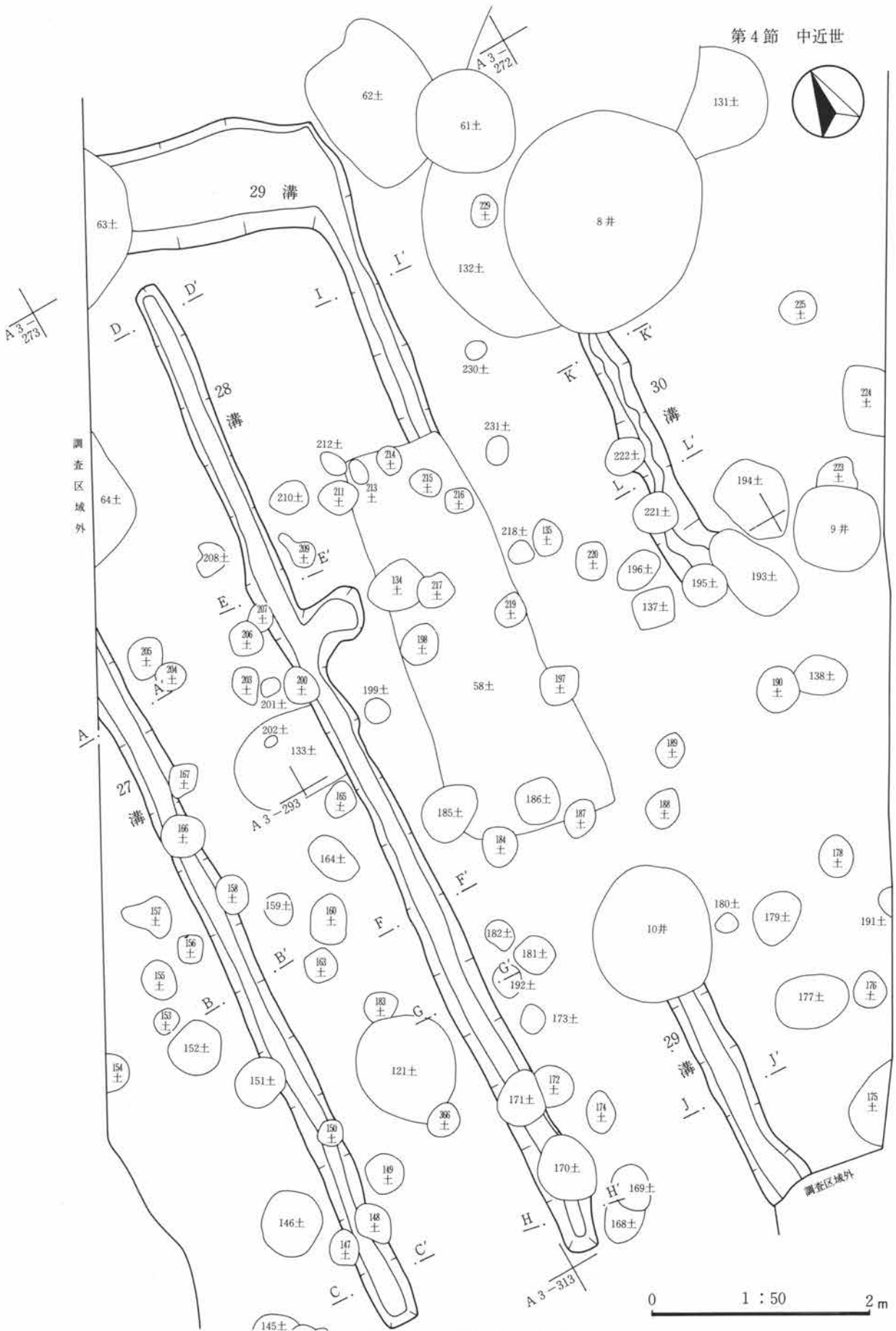
第88図 北西区井戸平面・断面図 (3)



第89図 北西区溝平面・断面図(1)

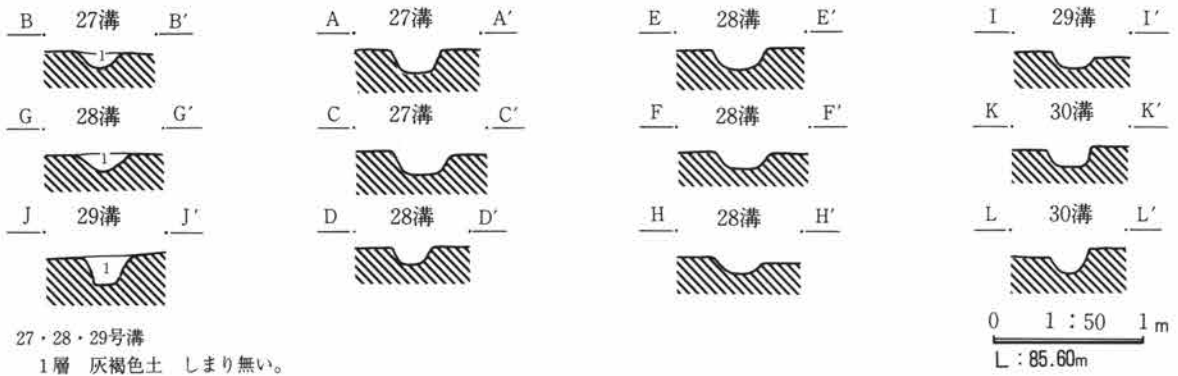


第90図 北西区溝平面・断面図(2)

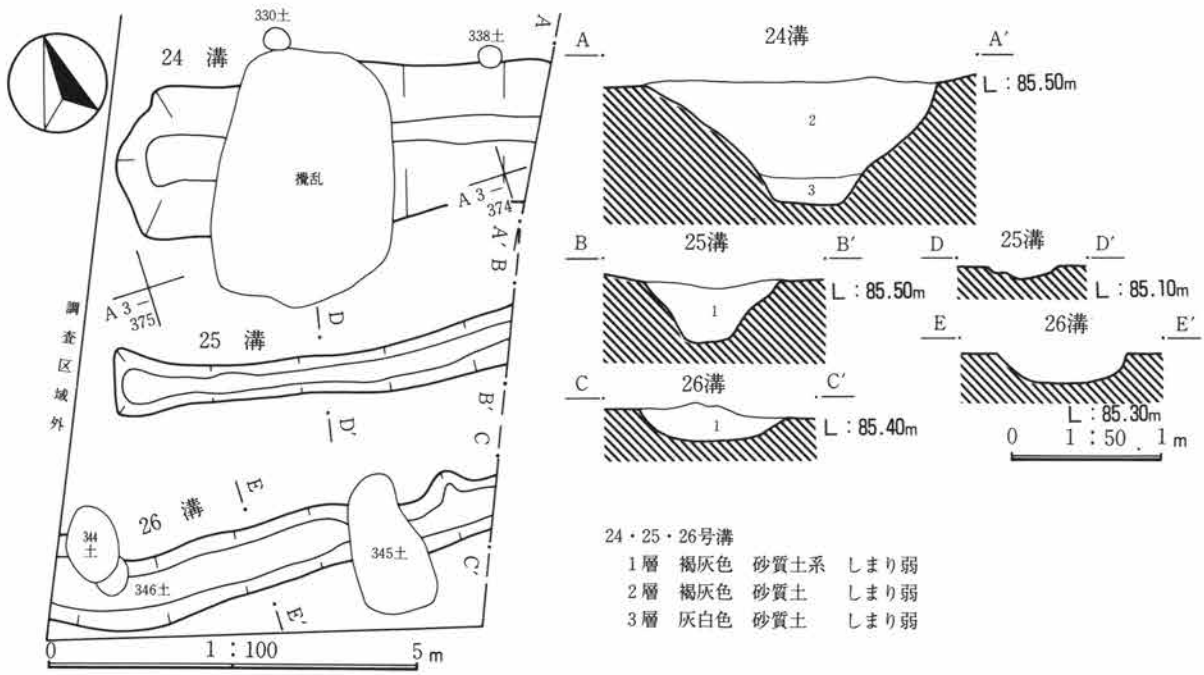


第92図 北西区溝平面図(4)

第4章 調査遺構・遺物



第93図 北西区溝断面図(4)

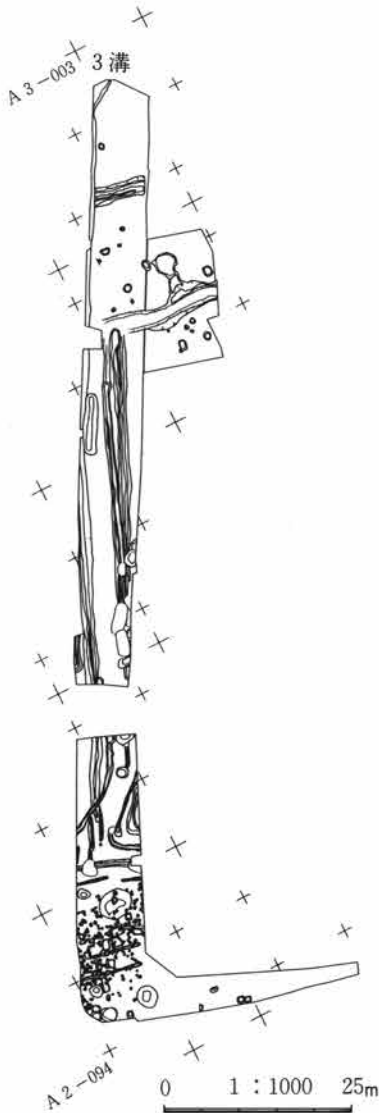


北西区溝

番号	長さm	巾cm	深度cm	主軸方位	出土遺物	番号	長さm	巾cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
1	(53.0)	150	47	N-17°-E	焼締陶器・縄文石器	25	(5.2)	70	16	N-82°-W	青磁香炉か?
2	(8.0)	287	125	N-60°-W	焼締陶器・軟質陶器	26	(5.8)	125	18	N-83°-W	
18	(16.7)	120	24	N-30°-E		27	(7.0)	40	17	N-1°-E	
19	(18.5)	54	15	N-27°-E		28	(9.5)	40	14	N-5°-E	
20	(15.5)	85	22	N-28°-E		29	(12.0)	38	19	N-5°-E	
22	(5.5)	165	19	N-45°-W	土師器・磁器	30	(2.0)	32	14	N-7°-E	
23	(15.5)	65	8	N-27°-E		31	(6.5)	125	34	N-80°-W	
24	(5.5)	200	76	N-76°-W							

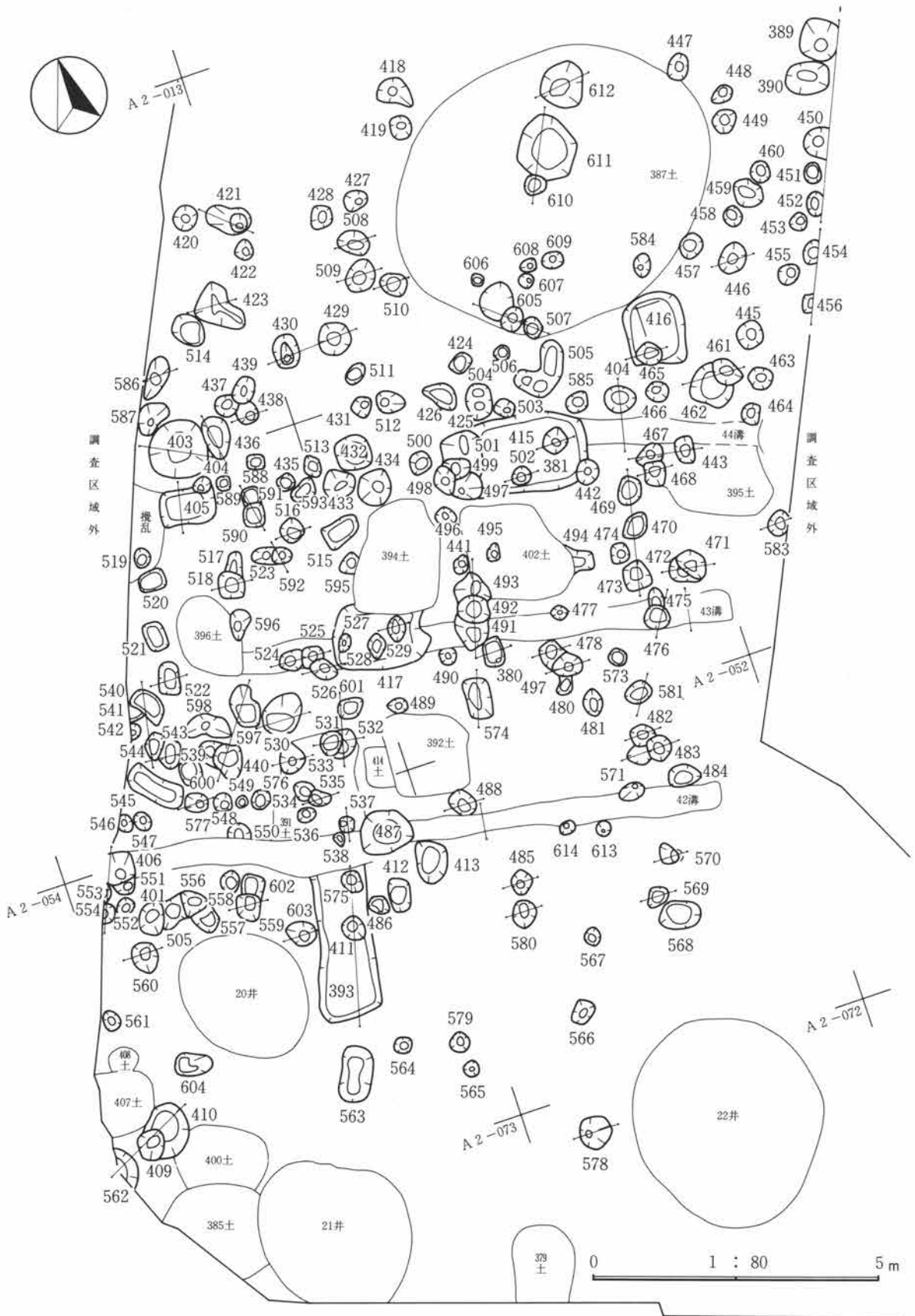
第94図 北西区溝平面・断面図(5)

b. 北東区

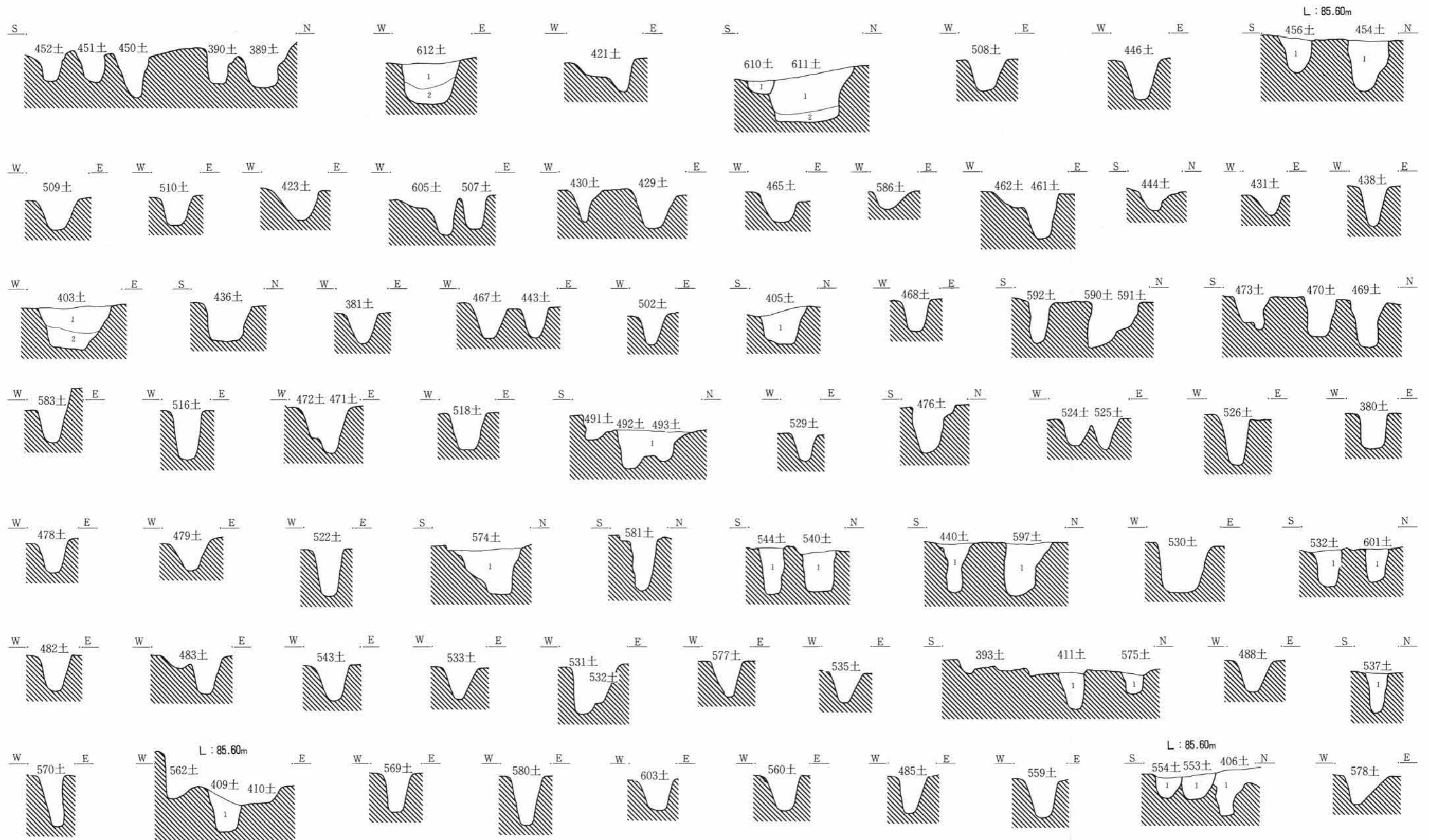


第95図 北東区遺構図

3号溝が南北方向に走り、隣の北西区の1号溝と対応するように南流する。確認できる限り80mの長さを有するものである。溝幅は中央部の道路及び32号溝により切られ確認できない。北西部の1号溝と対応関係にあることは言えるだろう。北部にはほとんど土壌井戸ともに認められず、わずかに13号井戸（A型）及び361号土壌が各1基あるのみである。中近世の段階では生活痕跡はあまり認められない。古墳時代の溝・縄文期の土壌の南側から13・14・6号溝が互いに重複して南北方向に南流した溝がある。14号溝は西側に段状部を有する幅2m、現状で36mを有している。6号溝は14号溝と共にその北限は分からないが、ほぼ同位置から確認され並走する。13号溝は14号溝の途中から掘り始められ、やや軸が東にぶれながらも並走する。南端は攪乱により確認できない。32号溝は3号溝をきる形で南北方向に南流している。33号溝は32号溝と並走するも途中で西方向に屈曲する。4号溝が3号溝をきって幅1.9m、長さ8mである。中央部に15号（B型）・16号井戸（C型）が出土している。やや間隔を開いて南部地区には細い溝が南北方向に南流しており、37・39号溝は直進し、34・36号溝はやや西に傾いて流れ、35・45号溝は南流した後、東に屈曲する。これら一連の南北方向に南流する一群の溝の南に、東西方向に流れる38・40・41号溝があり、この溝を境にピット状の土壌群が集中する。他の地区と同様建物は建たない。387号土壌は大形の土壌（長径4.5m）であるが、浅い（0.16m）。また、東西方向に細い溝が3条（42・43・44号溝）がある。長方形で深さのあまり無い一群の土壌がある。小土壌群集中地区から南に移ると、井戸が集中する。23・24号（A型）、19・20・21号（C型）井戸である。その他土壌もやや大形のものが認められる（13・399・400・407号土壌）。

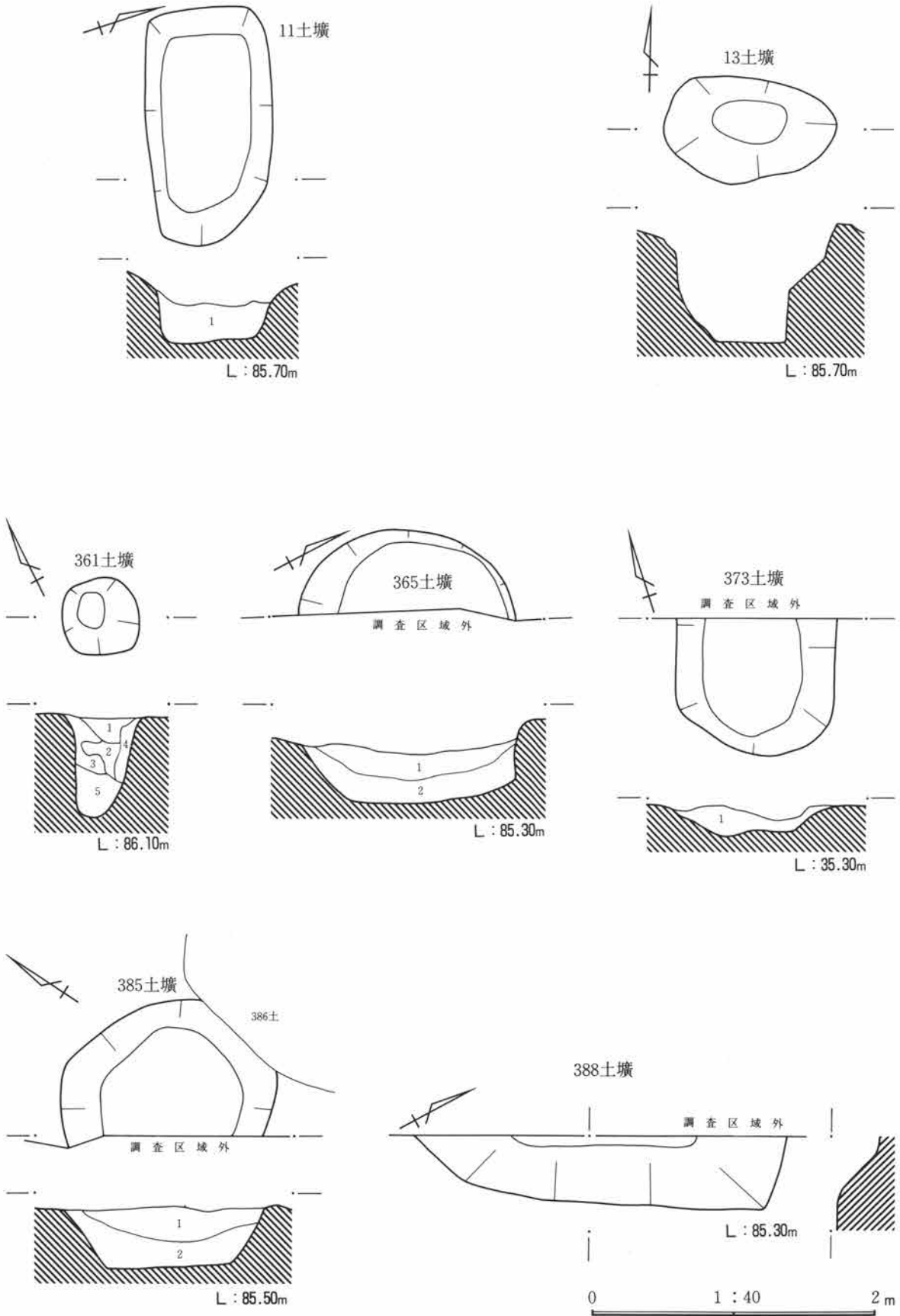


第96図 北東区土壌平面図(1)

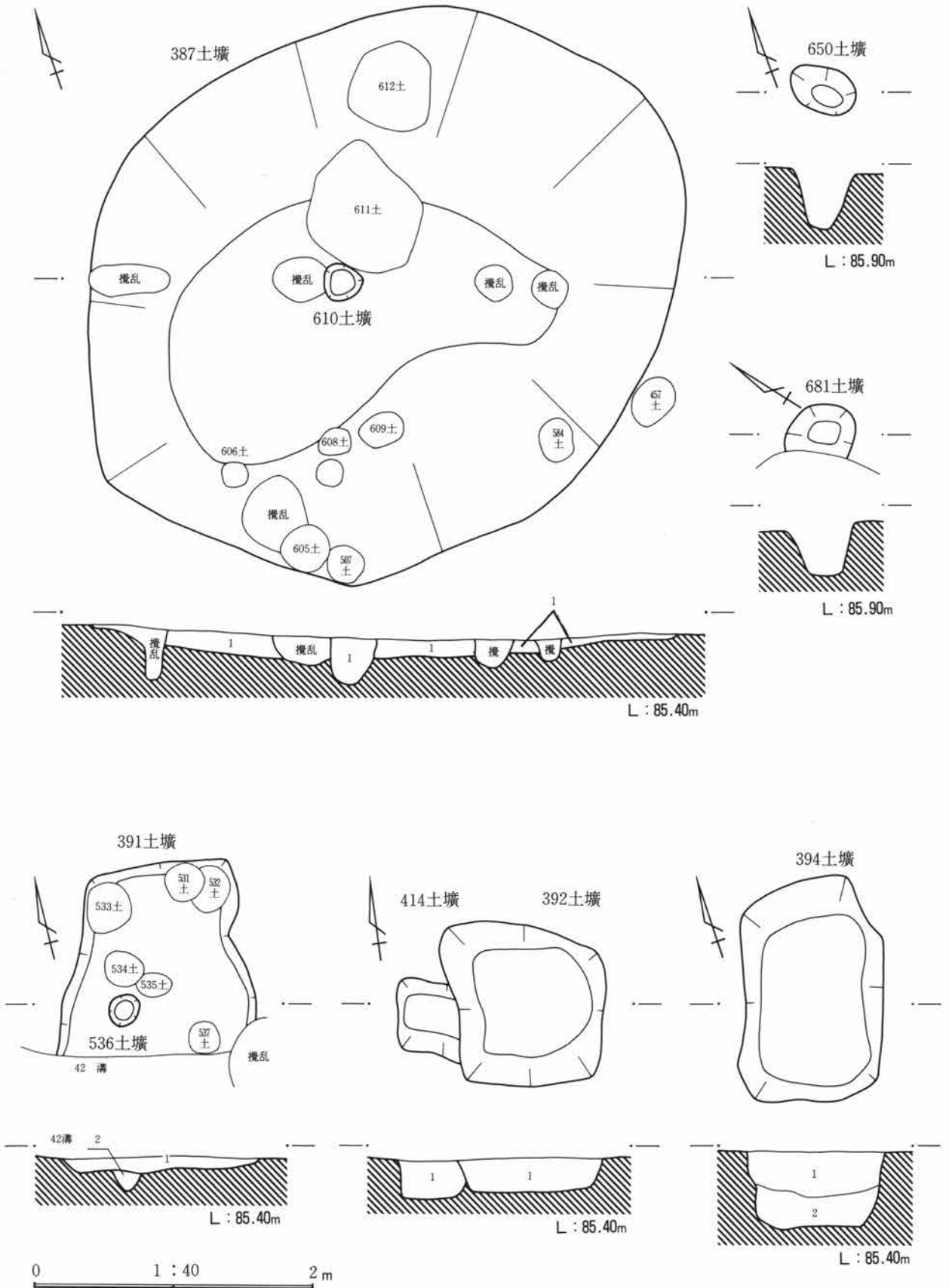


612・610・403・405・492・493・574・544・540・440・597・
 532・601・411・575・537・409・554・553・406号土壌
 1層 褐色 砂質土 しまり弱 2層 黒褐色 砂質土 しまり弱
 611・456・454号土壌
 1層 黄灰色 砂質土 2層 黄灰色 やや粘性有り

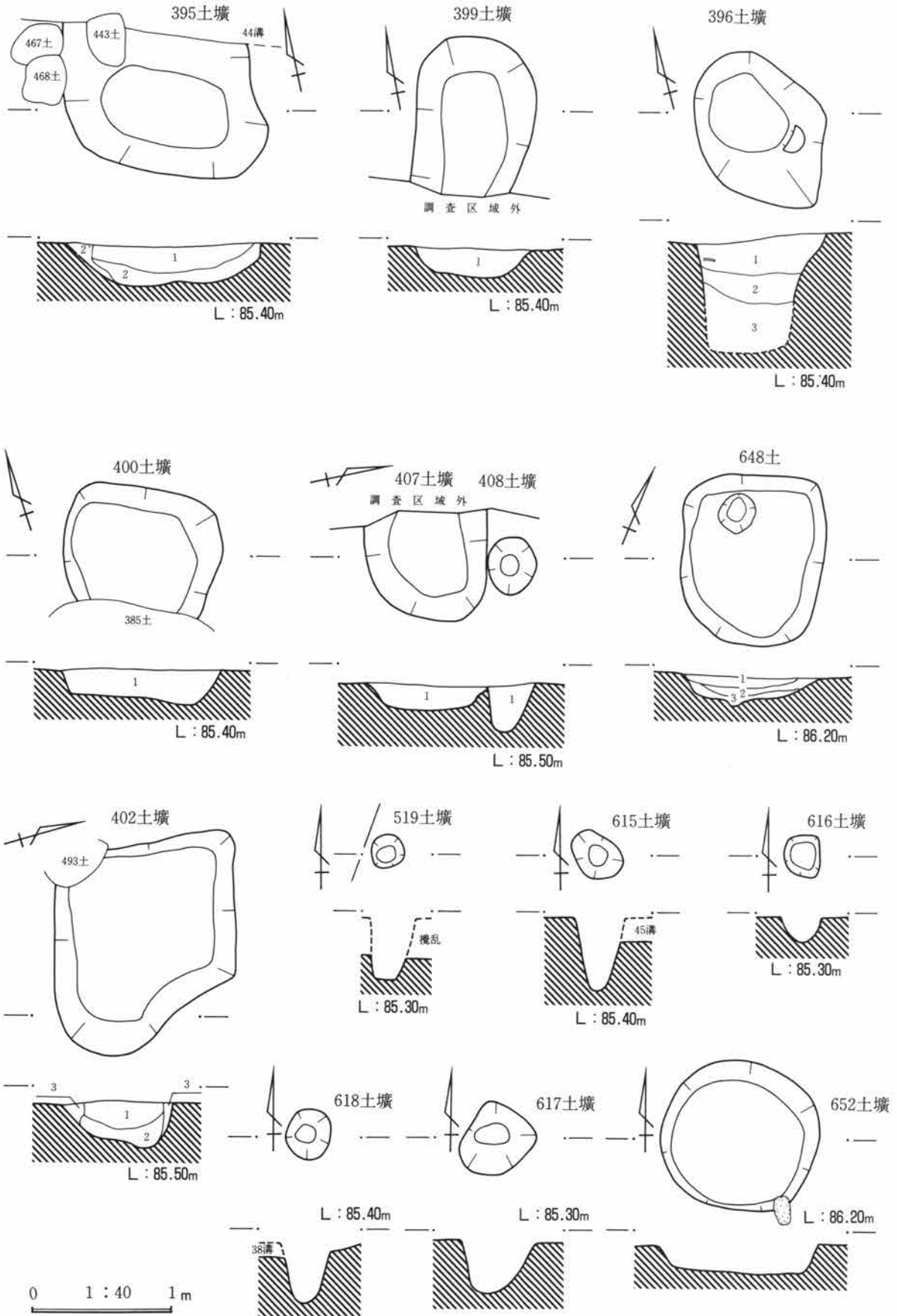
第97図 北東区土壌断面図(1)



第98図 北東区土壙平面・断面図 (2)



第99図 北東区土壙平面・断面図(3)



第100図 北東区土坑平面・断面図(4)

第4章 調査遺構・遺物

11号土壌	1層	暗灰黄色	砂質土	しまり弱	414号土壌	1層	灰黄褐色・明黄褐色	砂質土	やや粘性あり
361号土壌	1層	黒褐色	砂質土	しまり弱	394号土壌	1層	灰黄褐色	砂質土	
	2層	暗褐色	粘性あり	しまり良		2層	灰黄褐色・明黄褐色	砂質土	やや粘性あり
	3層	黒褐色	粘性ややあり	しまり良	395号土壌	1層	灰黄褐色	砂質土	
	4層	壁の崩壊土				2層	灰黄褐色・明黄褐色	砂質土	やや粘性あり
	5層	暗褐色	砂質土	しまり弱	399号土壌	1層	灰黄褐色	砂質土	
365号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良	396号土壌	1層	灰黄褐色・明黄褐色	砂質土	やや粘性あり
	2層	明灰黄色	砂質土	しまり良		2層	褐色	砂質土	
373号土壌	1層	褐色	粘質土			3層	褐色・明黄褐色まじり		やや粘性あり
385号土壌	1層	褐色	粘質土		400号土壌	1層	灰黄褐色	砂質土	
	2層	褐色・明黄褐色まじり	粘質土		407・408号土壌	1層	褐色	砂質土	
387号土壌	1層	暗灰黄色	砂質土		648号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱
610号土壌	1層	褐色	粘質土			2層	黒褐色	砂質土	しまり弱
391号土壌	1層	灰黄褐色	砂質土			3層	黒褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり弱
	2層	灰黄褐色・明黄褐色まじり		やや粘性あり	402号土壌	1層	灰黄褐色	砂質土	
392号土壌	1層	灰黄褐色	砂質土			2層	灰黄褐色	砂質土	炭化物・焼土混じり
						3層	灰黄褐色・明黄褐色まじり	砂質土	しまり弱

北東区土壌一覧表

No. 1

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
11	A2-090G	隅丸長方形	164	90	22	N-73°-W	
13	A2-070G	楕円形	121	72	76	N-89°-E	
361	A3-083G	隅丸方形	54	52	67		
365	A3-288G	不明	-	-	35		
373	A3-330G	不明	<111>	<95>	19		
380	A2-032G	隅丸長方形	48	28	34	N-6°-E	
381	A2-032G	円形	35	32	33		
385	A2-073G	不明	138	<95>	42		
387	A2-012G	楕円形	451	371	16	N-82°-E	白未製品 (161図-3)
388	A3-372G	不明	-	-	30		
389	A2-011G	隅丸方形	56	53	49		
390	A2-011G	楕円形	62	44	44	N-81°-W	
391	A2-033G	不明	<136>	136	11		
392	A2-032G	隅丸方形	113	103	23		
393	A2-053G	隅丸長方形	<208>	87	9	N-14°-E	
394	A2-032G	隅丸長方形	158	97	53	N-28°-E	
395	A2-031G	楕円形	140	<97>	27	N-66°-W	
396	A2-033G	楕円形	123	90	92	N-20°-W	須恵器皿・軟質陶器蓋・陶器甕
399	A2-073G	不明	<111>	80	20		
400	A2-052G	不明	113	<83>	20		
401	A2-053G	楕円形	44	32	25		
402	A2-032G	不整隅丸長方形	146	129	32	N-72°-W	
403	A2-013G	円形	82	80	45		
404	A2-033G	円形	26	22	-		
405	A2-033G	隅丸長方形?	<105>	47	43		
406	A2-053G	不明	<38>	40	39		
407	A2-054G	不明	90	<75>	18		
408	A2-054G	不明	41	36	32	N-78°-W	
409	A2-053G	円形	41	30	37		
410	A2-053G	不明	60	<53>	17		
411	A2-053G	円形	35	30	40		
412	A2-053G	楕円形	65	50	25	N-70°-E	
413	A2-053G	不整形	100	44	17	N-33°-E	
414	A2-032G	不明	<52>	<44>	26		
415	A2-032G	隅丸長方形	165	109	22	N-80°-W	
416	A2-034G	隅丸長方形	97	81	13	N-10°-E	
417	A2-032G	隅丸長方形	140	<78>	25	N-78°-W	
418	A2-012G	不整形	53	42	25	N-58°-W	
419	A2-012G	円形	31	30	19		
420	A2-012G	円形	33	31	30		
421	A2-012G	不整形	57	36	32	N-58°-W	
422	A2-012G	円形	27	26	21		
423	A2-013G	不整形	71	54	32	N-46°-W	

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
424	A2-012G	円形	28	24	36		
425	A2-032G	円形	36	33	27		
426	A2-032G	楕円形	45	34	16	N-61°-W	
427	A2-012G	楕円形	33	27	28	N-87°-E	
428	A2-012G	円形	32	30	27		
429	A2-012G	円形	45	45	39		
430	A2-012G	楕円形	46	38	32	N-6°-E	
431	A2-032G	円形	27	26	31		
432	A2-032G	隅丸方形	50	49	27		
433	A2-032G	円形	44	40	39		
434	A2-032G	円形	49	47	37		
435	A2-033G	隅丸方形	23	23	22		
436	A2-013G	楕円形	58	36	37	N	
437	A2-013G	円形?	34	30	16		
438	A2-013G	円形?	32	32	41		
439	A2-013G	楕円形	40	30	11	N-32°-E	
440	A2-033G	不整形	49	40	51	N-10°-E	砥石 (173図-9)
441	A2-032G	楕円形	25	21	19	N-19°-E	
442	A2-032G	円形	33	30	37		
443	A2-031G	楕円形	36	27	29	N	
444	A2-032G	円形	40	38	21		
445	A2-031G	円形	42	38	25		
446	A2-011G	楕円形	45	36	41	N-22°-E	
447	A2-011G	円形	35	30	19		
448	A2-011G	楕円形	32	22	20	N-66°-E	
449	A2-011G	円形	34	32	22		
450	A2-011G	円形?	43	<32>	44		
451	A2-011G	円形	30	25	28		
452	A2-011G	円形?	33	21	26		
453	A2-011G	円形	24	24	15		
454	A2-031G	楕円形?	36	24	24	N-59°-E	
455	A2-031G	円形	30	28	11		
456	A2-031G	不明	24	<13>	21		
457	A2-011G	円形	35	30	11		
458	A2-011G	円形	48	40	20		
459	A2-011G	円形	25	25	9		
460	A2-011G	円形	30	28	18		
461	A2-031G	楕円形	46	32	45	N-48°-W	
462	A2-031G	円形	59	58	32		
463	A2-031G	円形	33	30	29		
464	A2-031G	円形	30	23	23		
465	A2-031G	楕円形	36	30	27	N-80°-W	
466	A2-032G	円形	32	30	22		
467	A2-032G	楕円形?	38	29	37		
468	A2-032G	隅丸方形	33	29	32		
469	A2-032G	楕円形	38	31	47	N-20°-E	
470	A2-032G	楕円形	43	30	39	N-45°-E	
471	A2-032G	楕円形	49	30	48	N-42°-W	
472	A2-032G	不明	43	<20>	31		
473	A2-032G	隅丸方形	39	29	29		
474	A2-032G	円形	27	26	9		
475	A2-032G	楕円形	<24>	20	16	N-10°-E	
476	A2-032G	円形	36	36	49		
477	A2-032G	円形	19	19	18		
478	A2-032G	不明	33	<28>	29		
479	A2-032G	円形	42	35	32		
480	A2-032G	不明	24	19	21		
481	A2-032G	楕円形	45	26	23	N-14°-E	
482	A2-052G	円形	30	<28>	38		
483	A2-052G	円形	34	34	38		

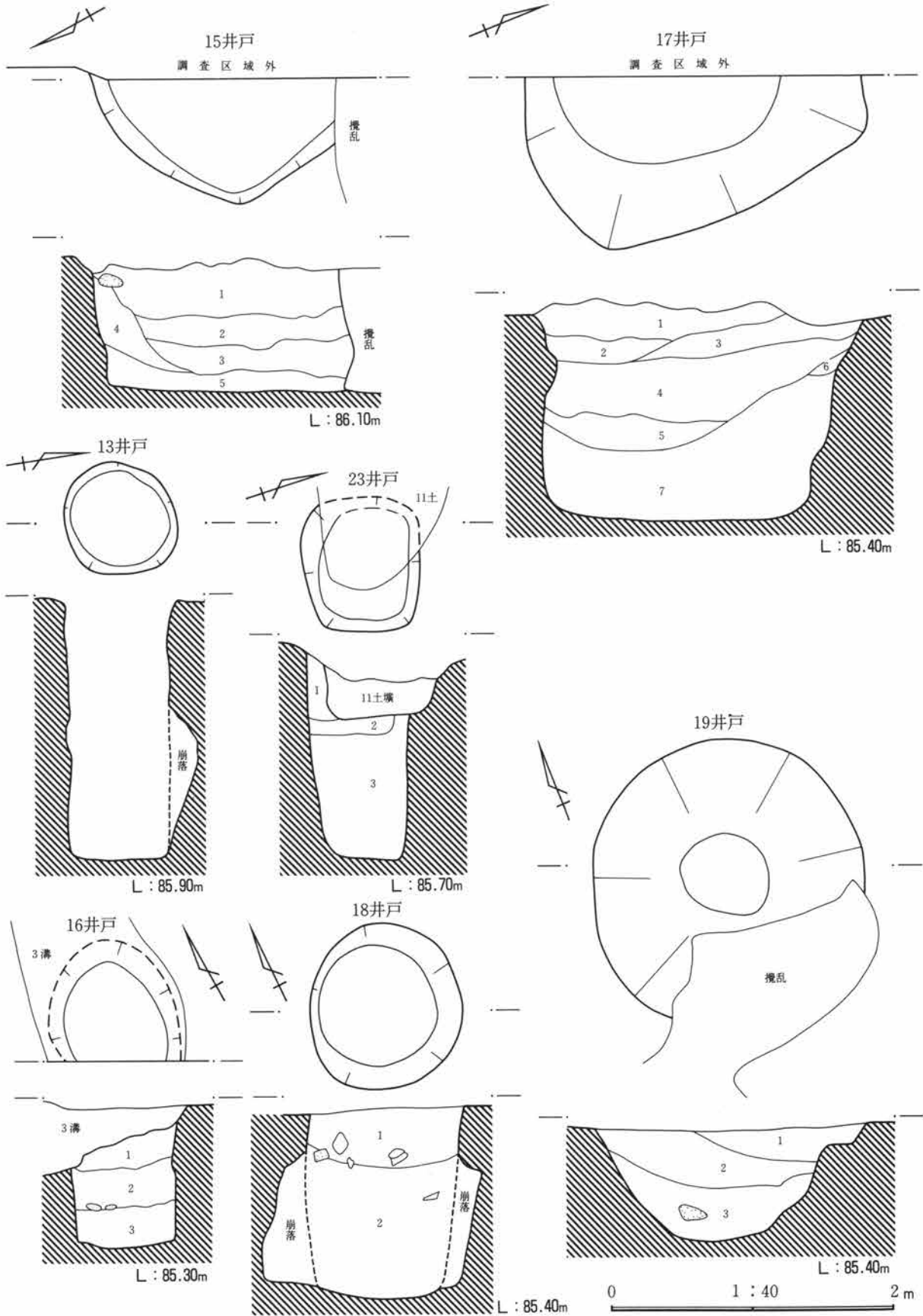
番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
484	A2-052G	楕円形	46	30	14	N-70°-W	土師器壺(70図-1)・土師器坏(72図-3)
485	A2-052G	円形	35	31	38		
486	A2-053G	円形	28	25	4		
487	A2-053G	楕円形	75	58	27	N-72°-W	
488	A2-052G	楕円形	38	31	32	N-33°-W	
489	A2-032G	楕円形	30	22	18	N-72°-W	
490	A2-032G	円形	25	23	19		
491	A2-032G	不明	<53>	42	27		
492	A2-032G	円形	45	38	56		
493	A2-032G	不明	50	<30>	50		
494	A2-032G	方形?	<27>	27	16		焼締陶器甕(140図-23)
495	A2-032G	円形	20	18	10		
496	A2-032G	円形	30	25	10		
497	A2-032G	楕円形?	<40>	26	20	-	
498	A2-032G	楕円形	40	30	19	N-4°-W	
499	A2-032G	楕円形?	<28>	30	39	-	
500	A2-032G	円形	32	29	20		
501	A2-032G	楕円形?	<58>	55	21	N-5°-E	
502	A2-032G	円形	30	26	32		
503	A2-032G	円形	27	25	13		
504	A2-032G	不明	35	<18>	18		
505	A2-032G	不整形	79	54	39	N-50°-E	
506	A2-012G	円形	22	20	15		
507	A2-012G	円形	27	26	35		
508	A2-012G	楕円形	46	31	32	N-60°-W	
509	A2-012G	楕円形	49	40	32	N-45°-E	
510	A2-012G	楕円形	39	30	34	N-57°-W	
511	A2-012G	楕円形	32	21	21	N-59°-E	
512	A2-032G	楕円形	39	32	20	N-66°-W	
513	A2-032G	楕円形	30	25	22	N-23°-W	
514	A2-013G	楕円形	51	38	14	N-39°-W	
515	A2-032G	隅丸長方形	52	35	25	N-73°-E	
516	A2-033G	隅丸方形	30	30	46		
517	A2-033G	楕円形?	<28>	20	17	N-23°-E	
518	A2-033G	隅丸方形	37	35	38		
519	A2-033G	隅丸方形	24	23	45		
520	A2-033G	隅丸長方形	37	28	9	N-85°-E	
521	A2-033G	隅丸長方形	41	30	28	N-5°-W	
522	A2-033G	隅丸長方形	45	32	46	N-15°-E	
523	A2-033G	楕円形?	<30>	24	34	N-73°-W	
524	A2-033G	円形	30	26	35		
525	A2-033G	円形	30	28	38		
526	A2-033G	楕円形	40	28	51	N-71°-W	
527	A2-033G	楕円形	21	17	32	N-26°-E	
528	A2-032G	楕円形	35	26	15	N-11°-E	
529	A2-032G	楕円形	36	26	28	N-15°-E	
530	A2-033G	楕円形	64	49	28	N-46°-E	
531	A2-033G	円形	35	26	51		
532	A2-033G	不明	40	<25>	42		
533	A2-033G	楕円形	40	35	38	N-7°-E	
534	A2-033G	円形	<26>	25	23		
535	A2-033G	楕円形	31	23	31	N-63°-W	
536	A2-033G	円形	21	21	23		
537	A2-053G	円形	22	22	40		
538	A2-053G	楕円形	20	13	19	N-4°-W	
539	A2-033G	不明	32	<30>	20		
540	A2-033G	楕円形	51	31	45	N-30°-W	
541	A2-033G	不明	-	-	10		
542	A2-033G	円形?	24	<14>	10		
543	A2-033G	楕円形	39	28	50	N-28°-E	

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
544	A2-033G	楕円形	37	24	38	N-36°-E	
545	A2-033G	隅丸長方形	86	35	29	N-43°-W	
546	A2-033G	円形?	23	<18>	15		
547	A2-033G	円形	27	24	31		
548	A2-033G	円形	26	24	12		
549	A2-033G	円形	17	16	25		
550	A2-053G	円形?	30	<20>	26		
551	A2-053G	円形	32	20	45		
552	A2-053G	円形	27	23	40		
553	A2-053G	不明	-	-	14		
554	A2-053G	不明	27	-	26		
555	A2-053G	不明	33	-	24		
556	A2-053G	不明	37	35	34		
557	A2-053G	不明	35	32	17		
558	A2-053G	円形	29	28	28		
559	A2-053G	隅丸長方形	37	33	38	N-69°-E	
560	A2-053G	楕円形	44	36	35	N-82°-W	
561	A2-053G	円形	26	24	-		
562	A2-054G	不明	-	-	13		
563	A2-053G	楕円形	76	45	17	N-25°-E	
564	A2-053G	円形	25	22	15		
565	A2-053G	円形	20	19	22		
566	A2-052G	楕円形	34	28	12	N-40°-E	
567	A2-052G	円形	24	23	25		
568	A2-052G	楕円形	61	38	14	N-78°-W	
569	A2-052G	円形	22	18	40		
570	A2-052G	不整形	27	27	51	N-65°-W	
571	A2-052G	楕円形	35	25	24	N-82°-E	
572	A2-052G	円形	20	16	-		
573	A2-032G	円形	35	33	31		
574	A2-032G	隅丸長方形	55	36	61	N-7°-E	
575	A2-053G	円形	33	26	24		
576	A2-033G	円形	29	25	15		
577	A2-033G	楕円形	34	25	37	N-67°-W	
578	A2-072G	円形	44	44	29		
579	A2-053G	円形	27	27	19		
580	A2-052G	円形	40	33	52		
581	A2-032G	楕円形	51	31	56	E	
583	A2-031G	円形	35	<30>	32		
584	A2-011G	円形	31	24	24		
585	A2-031G	円形	35	<30>	34		
586	A2-013G	楕円形	62	30	36	N-37°-E	
587	A2-013G	不整形	43	40	38	N-33°-E	
588	A2-033G	隅丸方形	25	20	31		
589	A2-033G	隅丸方形	20	19	21		
590	A2-033G	隅丸長方形	34	28	47	N-10°-E	
591	A2-033G	隅丸方形?	<25>	25	28		
592	A2-033G	円形	26	24	45		
593	A2-033G	隅丸長方形	37	25	14	N-72°-E	
595	A2-032G	円形	30	24	35		
596	A2-033G	楕円形	40	27	53	N-50°-E	
597	A2-033G	不整形	55	40	54	N-20°-E	
598	A2-033G	不整形	65	49	-	N-55°-W	
600	A2-033G	楕円形	35	31	30	N-3°-W	
601	A2-033G	楕円形	34	27	35	N-78°-W	
602	A2-053G	隅丸方形?	31	<26>	22		
603	A2-053G	楕円形	44	35	31	N-65°-W	
604	A2-053G	楕円形	51	31	24	N-72°-W	
605	A2-012G	円形	35	32	42		
606	A2-012G	円形	17	16	19		

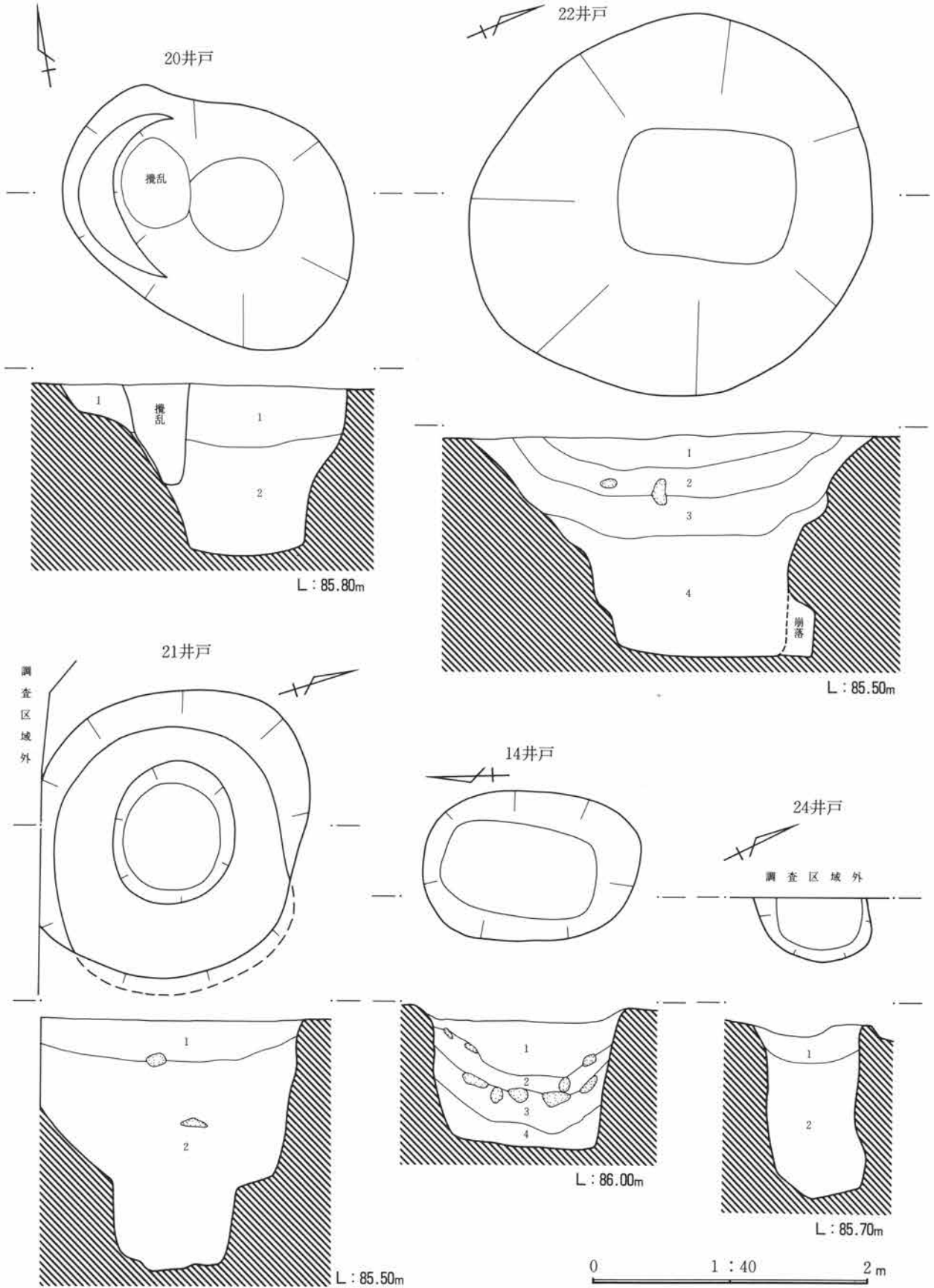
第4章 調査遺構・遺物

No. 5

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
607	A2-012G	円形	21	20	20		
608	A2-012G	楕円形	25	17	20	N-86°-W	
609	A2-012G	楕円形	31	22	39	N-86°-W	
610	A2-012G	不整円形	27	26	33		
611	A2-012G	不整形	93	82	55	N-10°-E	
612	A2-012G	不整形	62	60	55		
613	A2-052G	円形	24	20	25		
614	A2-052G	円形	22	18	26		
615	A3-390G	隅丸長方形?	38	29	51	N-43°-W	
616	A3-391G	隅丸方形	28	26	18		
617	A3-371G	不整楕円形	52	43	36	N-37°-E	
618	A3-392G	円形	35	31	35		
648	A3-122G	不整楕円形	119	102	22	N-22°-W	
650	A3-165G	楕円形	49	32	40	N-39°-W	
652	A3-163G	円形	112	106	20		
681	A3-164G	不明	47	<35>	34		



第101図 北東区井戸平面・断面図(1)



第102図 北東区井戸平面・断面図 (2)

第4節 中近世

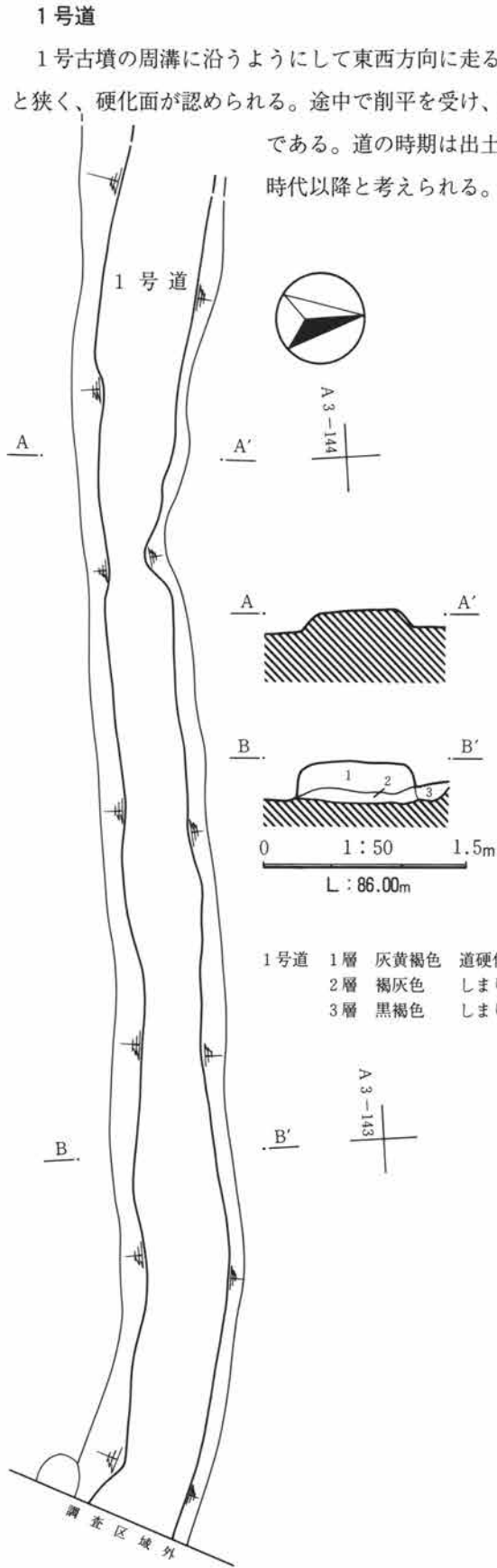
14号井戸	1層	暗褐色	粘性少	しまり良			
	2層	暗褐色・黄褐色まじり		地山の崩れまじる			
	3層	暗褐色	粘性少	しまり良	円礫混入多		
	4層	黒褐色	粘性少	しまり弱			
15号井戸	1層	灰黄褐色		砂質土			
	2層	褐灰色		砂質土			
	3層	黒褐色		砂質土			
	4層	黒褐色		砂質土			
	5層	黒褐色・暗褐色		砂質土			
16号井戸	1層	黒褐色		砂質土			
	2層	暗褐色		砂質土			
	3層	灰黄褐色		砂質土			
	しまり			3<2<1			
17号井戸	1層	灰褐色		砂質土	しまり弱		
	2層	灰褐色	明黄褐色5%含む		しまり弱		
	3層	灰褐色		砂質土	しまり良		
	4層	灰褐色		砂質土	しまりやや弱い		
	5層	灰褐色	明黄褐色ブロック含む		しまり弱		
	6層	灰褐色	明黄褐色5%含む		しまり弱		
	7層	灰褐色	明黄褐色10%含む		しまり弱		
18号井戸	1層	褐灰色		粘質土			
	2層	褐灰色		粘質土	明黄褐色5%含む		
19号井戸	1層	褐灰色		粘質土			
	2層	浅黄色		粘質土	円礫φ5-10cm大少量混じる		
	3層	褐灰色		粘質土	明黄褐色土20%まじり		
20号井戸	1層	暗灰黄色		粘質土	明黄褐色土5%混じる		
	2層	黄灰色		粘質土			
21号井戸	1層	褐灰色		粘質土			
	2層	褐灰色		粘質土	明黄褐色土5%混じる		
22号井戸	1層	黒褐色		粘質土	しまり良		
	2層	黒褐色		粘質土	円礫φ5-20cm大20%混じる		
	3層	黒褐色		粘質土	しまりやや良		
	4層	黒褐色		粘質土	しまり弱		
23号井戸	1層	褐灰色		粘質土	しまり良		
	2層	褐灰色		粘質土	明黄褐色土10%混じる		
	3層	褐灰色		粘質土	しまり弱		
24号井戸	1層	オリーブ黒色		粘質土	しまり良		
	2層	オリーブ黒色		粘質土	しまり弱		

北東区井戸

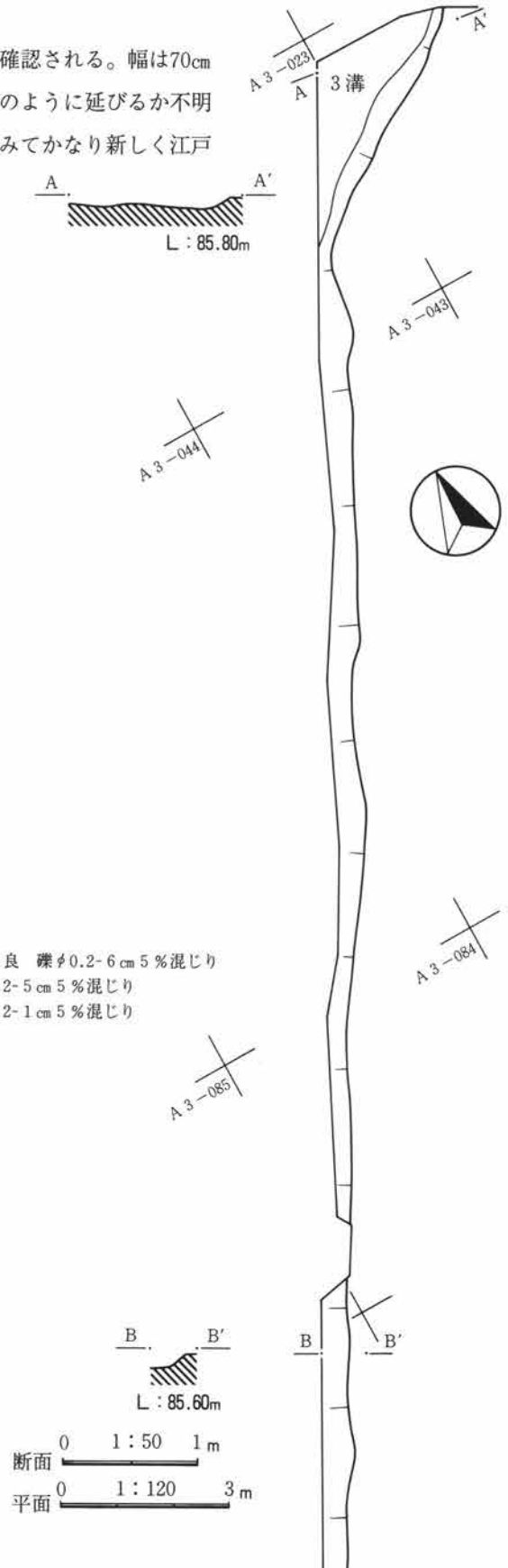
番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
13	A3-043G	円形	80	78	180		
14	A3-163G	楕円形	155	107	112	N-14°-W	陶器菊皿(145図24・25)
15	A3-247G	不明	(190)	-	93		円筒埴輪(65図-37)
16	A3-309G	不明	(100)	(92)	97		
17	A3-329G	不明	237	-	148		窪み石(165図-18)
18	A3-350G	楕円形	116	108	132	N-40°-W	
19	A2-012G	円形	200	190	76		粉挽白・上白・窪み石
20	A2-053G	楕円形?	220	158	121	N-49°-E	板碑
21	A2-073G	不整形	228	190	176	N-38°-W	窪み石・磨き石・砥石・板材・加工木
22	A2-072G	円形	290	268	180		土師器坏・窪み石・磨き石
23	A2-090G	隅丸方形	93	81	124	N-41°-W	白未製品(156図-23)
24	A2-091G	不明	82	-	115		

1号道

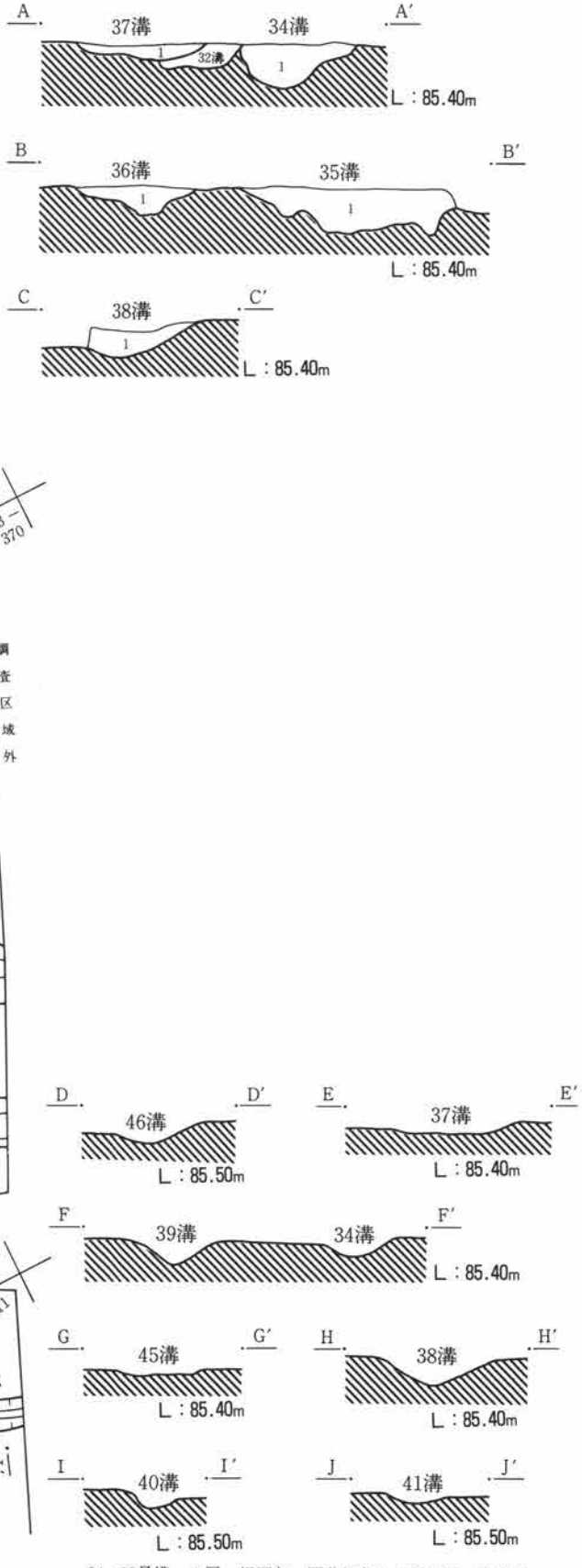
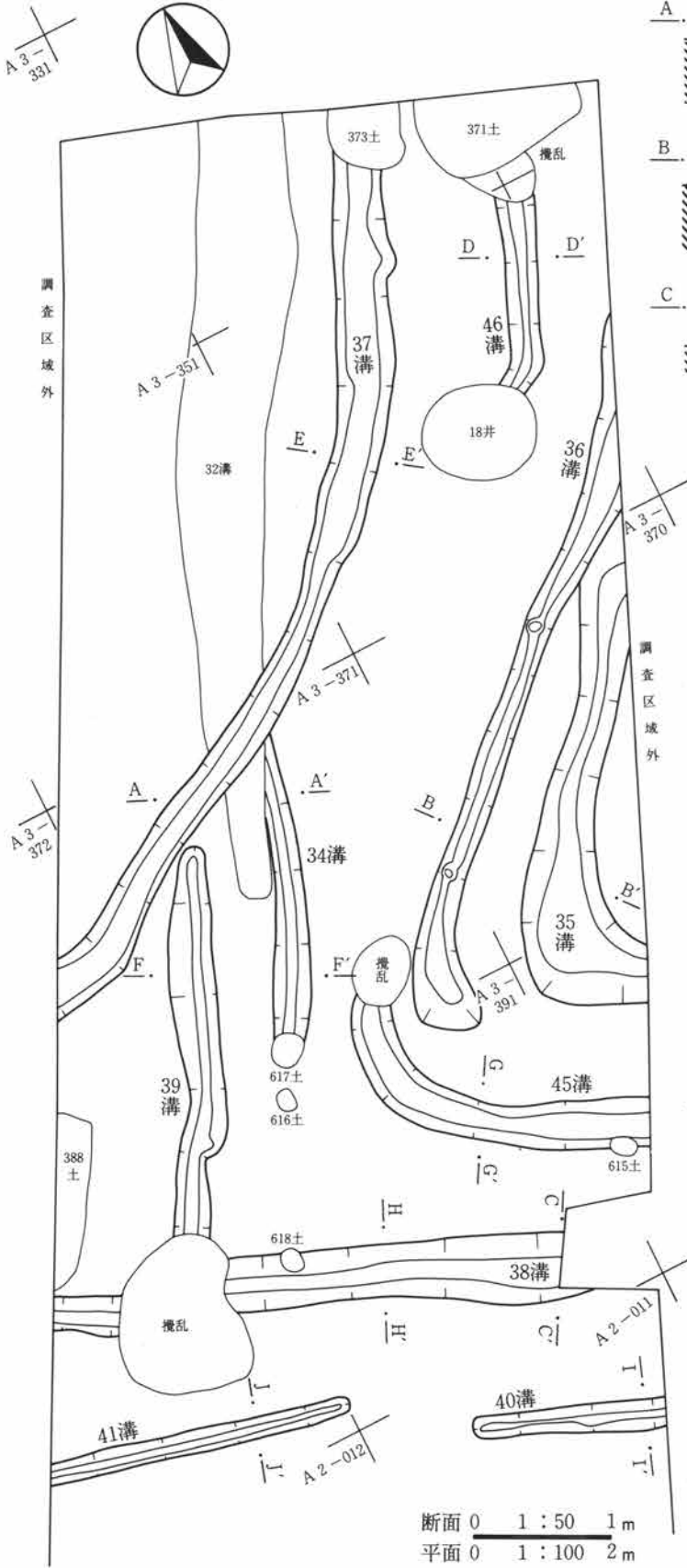
1号古墳の周溝に沿うようにして東西方向に走る1号道が確認される。幅は70cmと狭く、硬化面が認められる。途中で削平を受け、西側にどのように延びるか不明である。道の時期は出土遺物からみてかなり新しく江戸時代以降と考えられる。



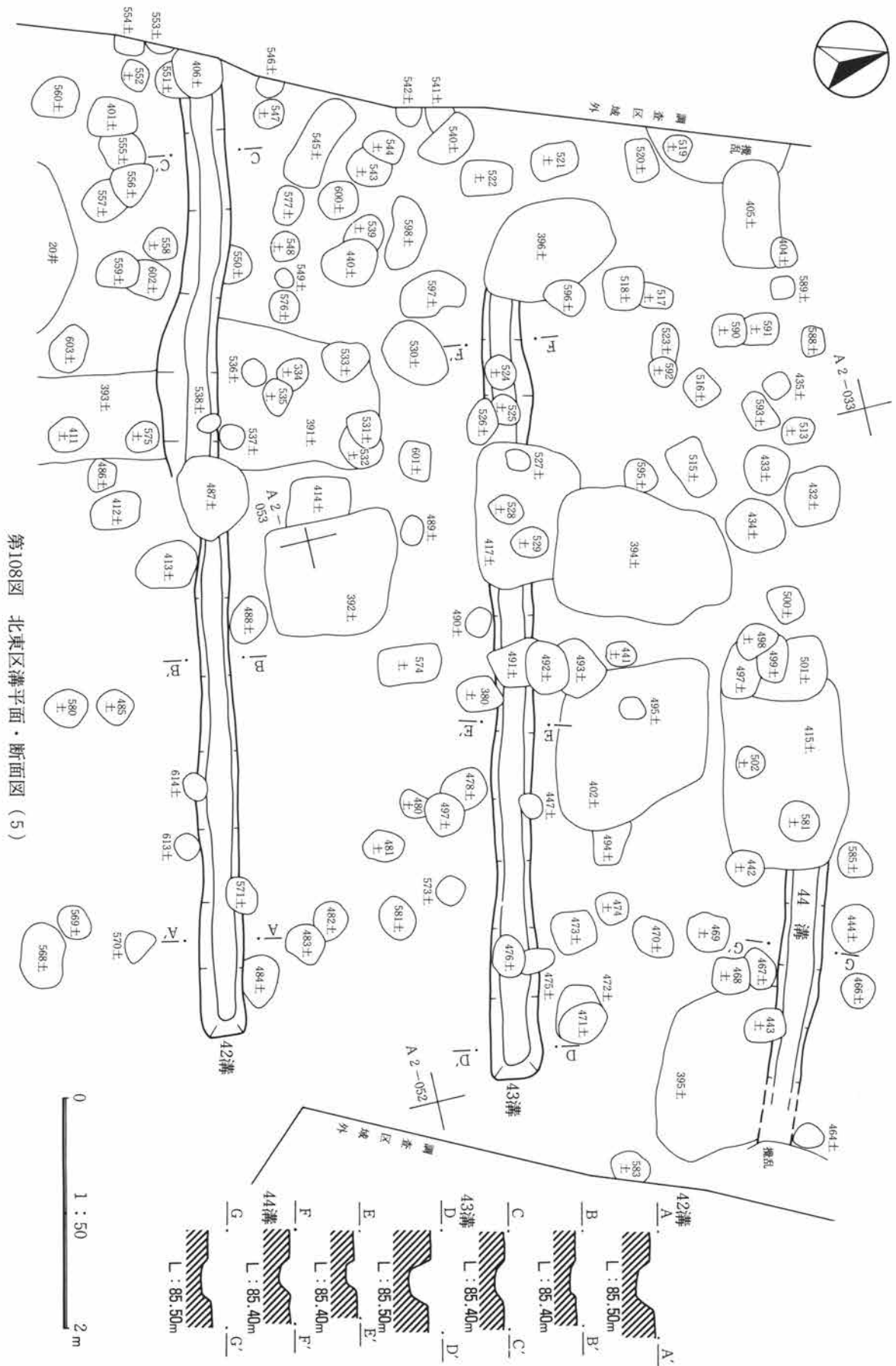
第103図 北東区道平面・断面図



第104図 北東区溝平面・断面図(1)

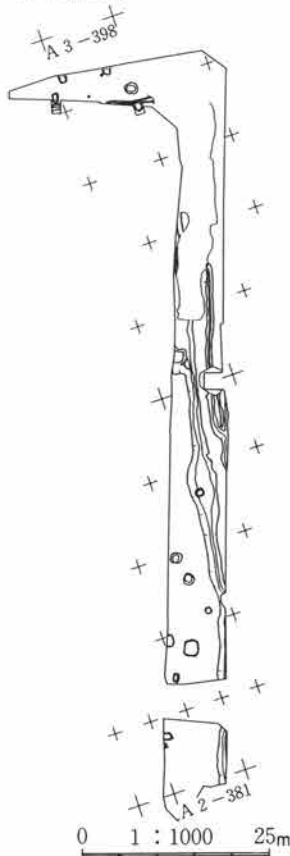


第107図 北東区溝平面・断面図(4)



第108図 北東区溝平面・断面図 (5)

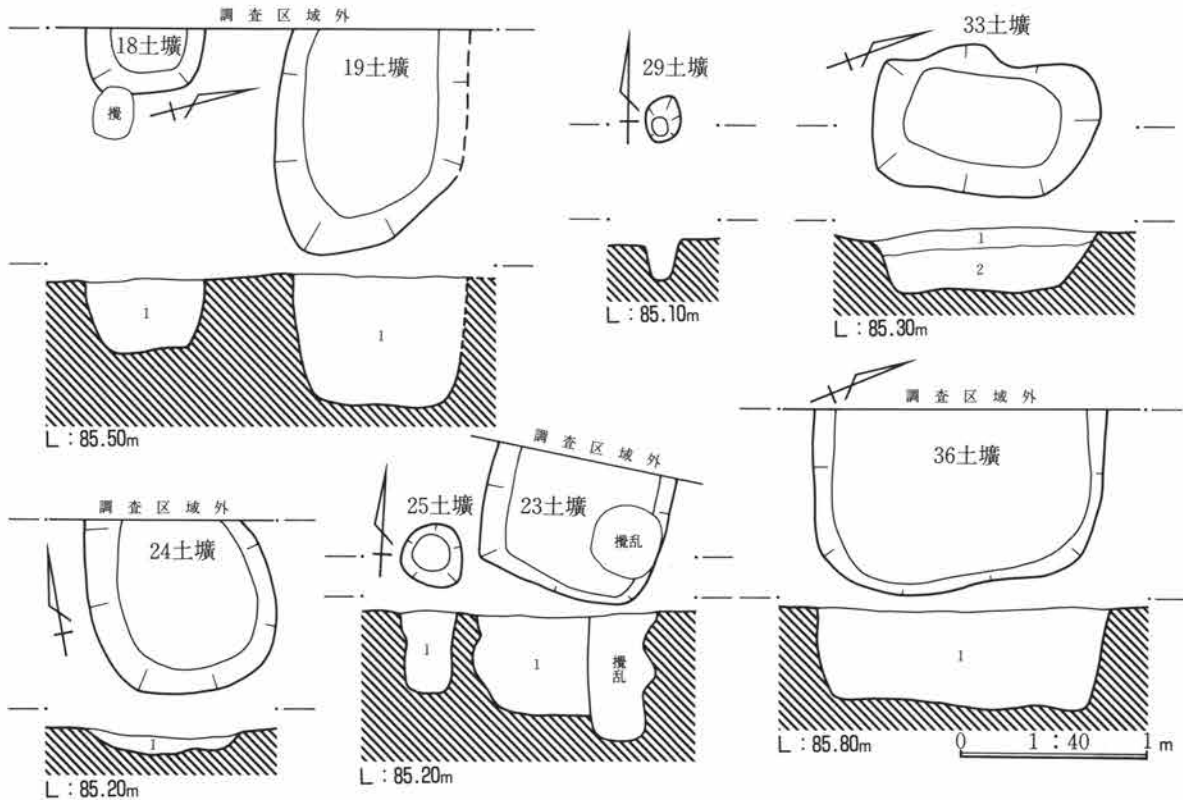
c. 南西区



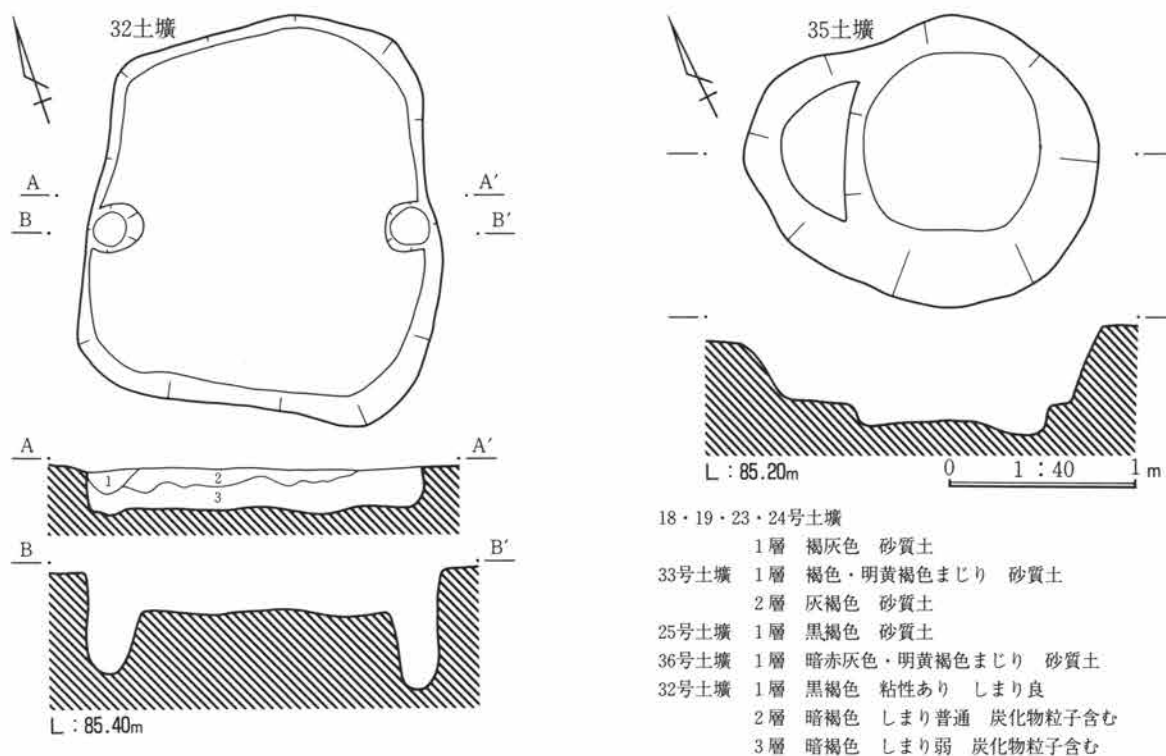
南西区は遺構の数が少なく特に中央南部は、ほとんど攪乱により遺構は確認できない。北端部西張り出し部には井戸が2基、31号（C型）と32号（A型）井戸があり、細い溝（6・21号溝）が東西方向に流れる。小形の墓が1基ある。

（1号墓墳）その他小形の土塋が数基検出されている。中央南部には、南北方向に走る5本の溝がある。10号溝は現状で長さ62mほど測り、乱流のせいで、蛇行し、やや変形している。11・12号溝は細い溝で南流し途中で合流する。井戸が南端の地区に集中し33・34・35号井戸（A型）が間隔を開けて並立する。長方形の浅めの土塋群があり（33・35・36号土塋）また、平面正方形（一辺2m・深さ0.1m）で一辺に相対するように2本のピットがあり、簡単な上屋構造を持つ施設であろう。

第109図 南西区遺構図



第110図 南西区土塋平面・断面図（1）

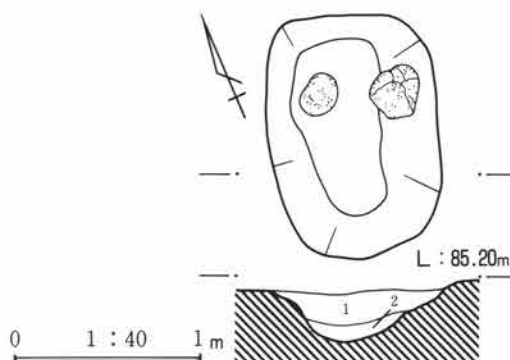


第111図 南西区土壌平面・断面図(2)

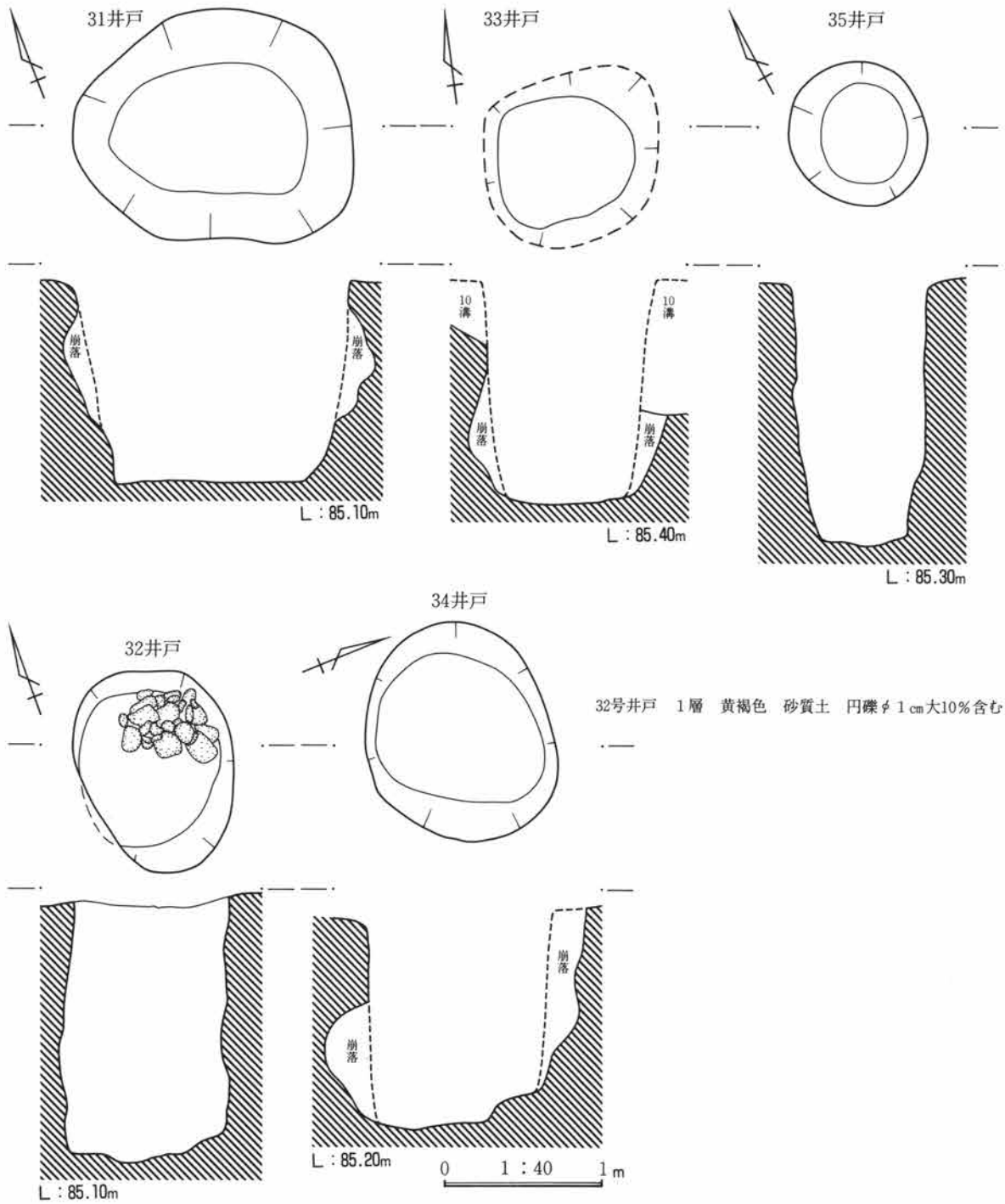
南西区土壌一覧表

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
18	B2-342G	不明	—	—	37	N-20°-E	焼締陶器甕(139図-8)
19	B2-342G	不明	<117>	<96>	67		
23	A2-018G	隅丸方形	98	<72>	52		
24	A2-019G	不明	98	<91>	9		
25	A2-018G	不整円形	33	33	44	N-19°-E N-27°-E N-65°-W	灰釉陶器壺(139図-4)
29	A2-019G	円形	25	19	20		
32	B2-301G	不整隅丸長方形	208	187	20		
33	B2-321G	隅丸長方形	118	71	34		
35	A2-280G	楕円形	190	151	45		
36	B2-301G	不明	57	<93>	50		

1号墓壇 1層 におい赤褐色 砂質土 円礫φ2cm大5%含む
 2層 灰色 炭化物層で少量の骨片を含む



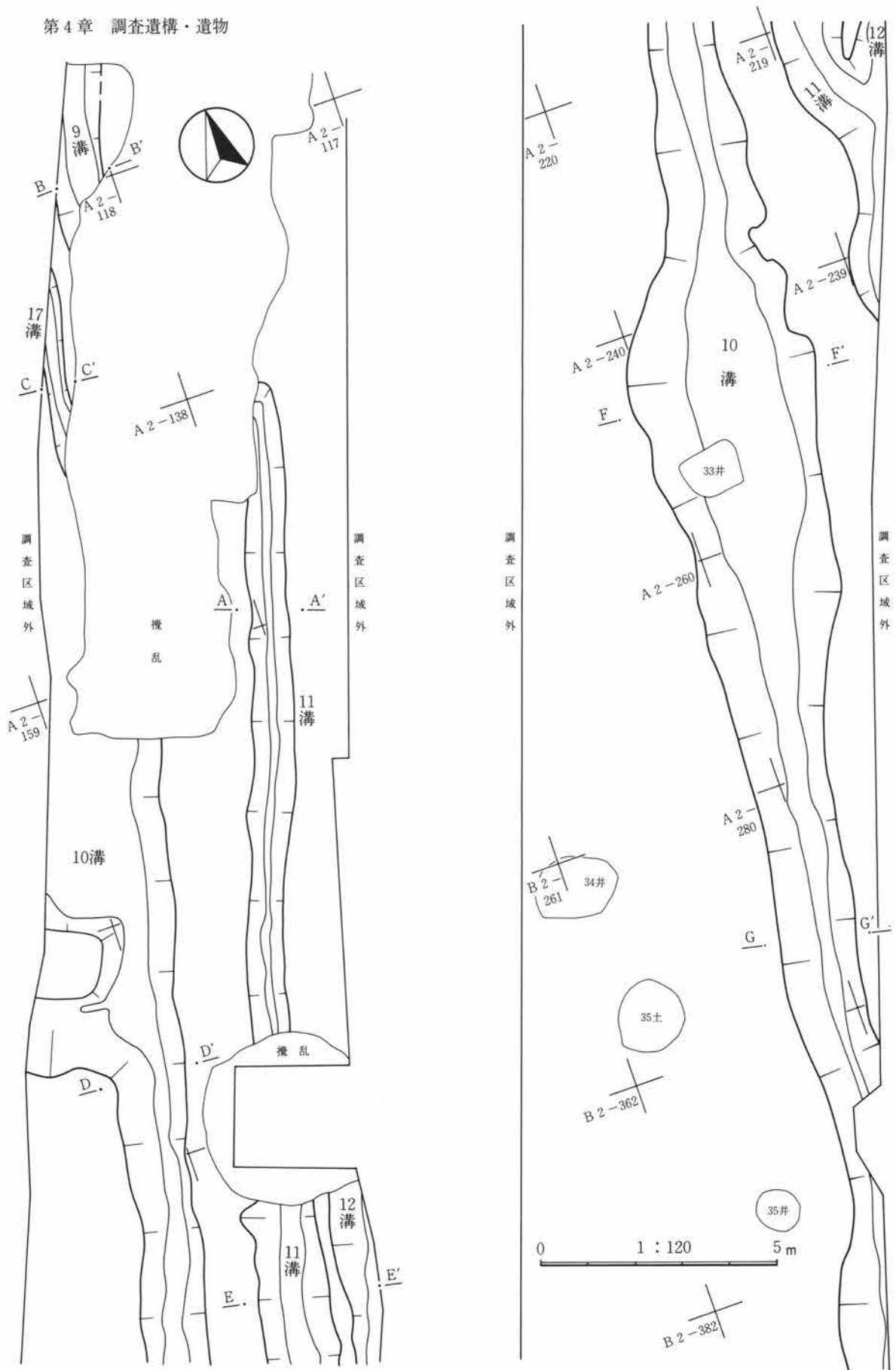
第112図 南西区1号墓壇平面・断面図



第113図 南西区井戸平面・断面図

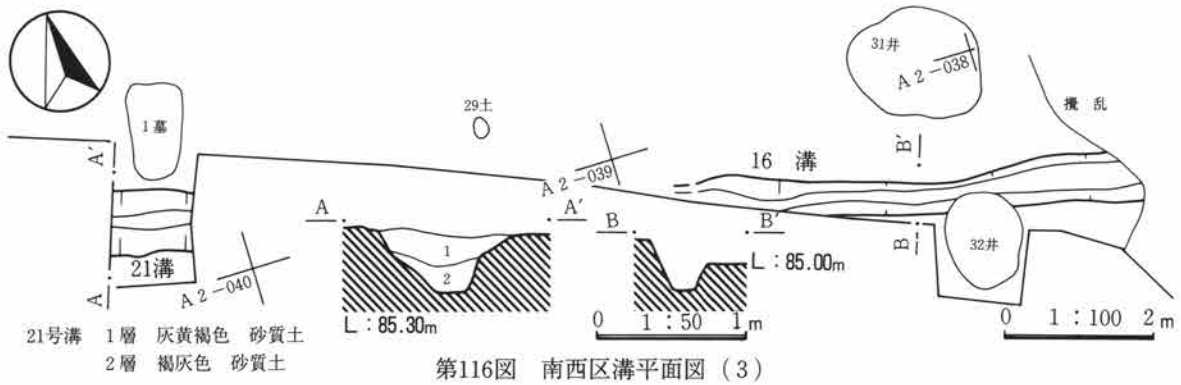
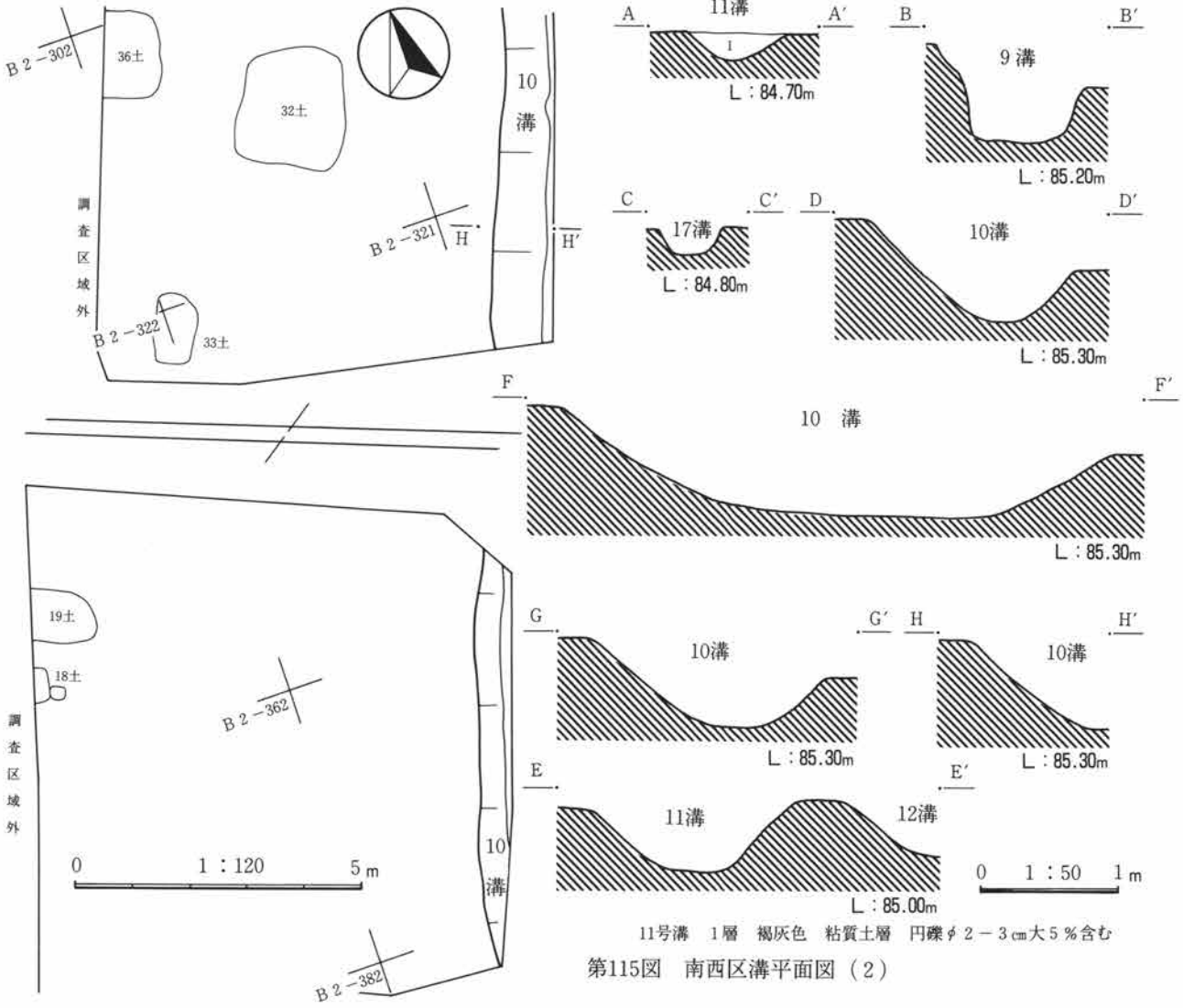
南西区井戸

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
31	A2-018G	不整形	175	142	124	N-34°-W	茶白・窪み石・磨き石・砥石・五輪塔空輪・焼締軟質陶器
32	A2-038G	楕円形	126	100	159	N-26°-W	窪み石・五輪塔水輪・軟質陶器・搗鉢
33	A2-239G	隅丸方形	(110)	(109)	140	N-27°-E	白未製品・窪み石・砥石・五輪塔水輪
34	A2-280G	不整形	134	120	128		須恵器甕・茶白・石搗鉢・窪み石・磨き石・砥石・曲物
35	A2-300G	円形	90	87	161		五輪塔空輪



第114図 南西区溝平面図 (1)

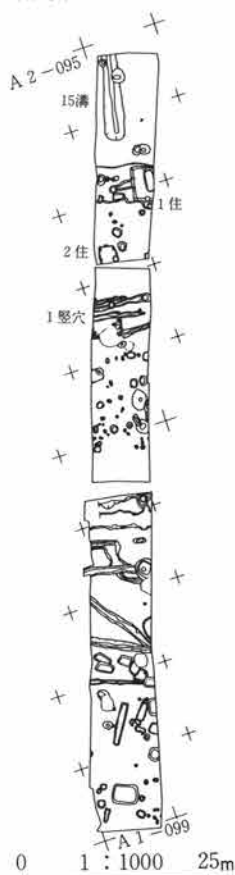
第4節 中近世



南西区溝

番号	長さm	巾cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
9	(3.0)	78	17	N-10°-E	
10	(61.0)	325	66	N-20°-E	軟質陶器内耳鍋・播鉢・粉挽き臼・窪み石・磨き石・五輪塔火輪
11	(23.0)	150	46	N-15°-E	須恵器甕(72図-5)・軟質陶器播鉢(142図-46)・白未製品
12	(10.5)	116	24	N-12°-E	須恵器長頸壺(70図-24)・陶器こね鉢(149図-7)
16	(7.0)	63	23	N-72°-W	
17	(3.0)	40	22	N-5°-E	
21	(1.0)	80	44	N-75°-W	埴輪(67図-69)

d. 南東区



第117図 南東区遺構図

北端部には南流する溝がある。その南にはピット状の小土壙群が集中している。その集中区に東西方向に走る溝が数本並走し、その南地区には大形の土壙・井戸群が集中する。

北端部には15号溝が南流し、その護岸には中近世の石製品の廃棄品が再利用されている。その法量は長9.1m、幅2.1m、深さ0.7mで、丁寧な造りを示している。56号土壙は15号溝をきっている。25号井戸は、B型で、15号溝によりきられている。その南側には竪穴住居が2軒ある。1号竪穴式住居は、半分のみ調査できた。一辺4.6mで、壁周溝が巡り、壁に沿って1.3-1.6m間隔で柱穴がある。床面は平坦であるが、しまりは良くない。2号竪穴式住居は、1号住居に比べてかなり小形で、一辺が2.2mで、やはり、壁周溝が巡り、1.1m間隔で柱穴が壁際にある。1号住居の横には、2基の井戸がある。27・28号井戸は共にA型井戸である。この住居の周辺にはピット状の小土壙と共に大形の土壙が数基ある。

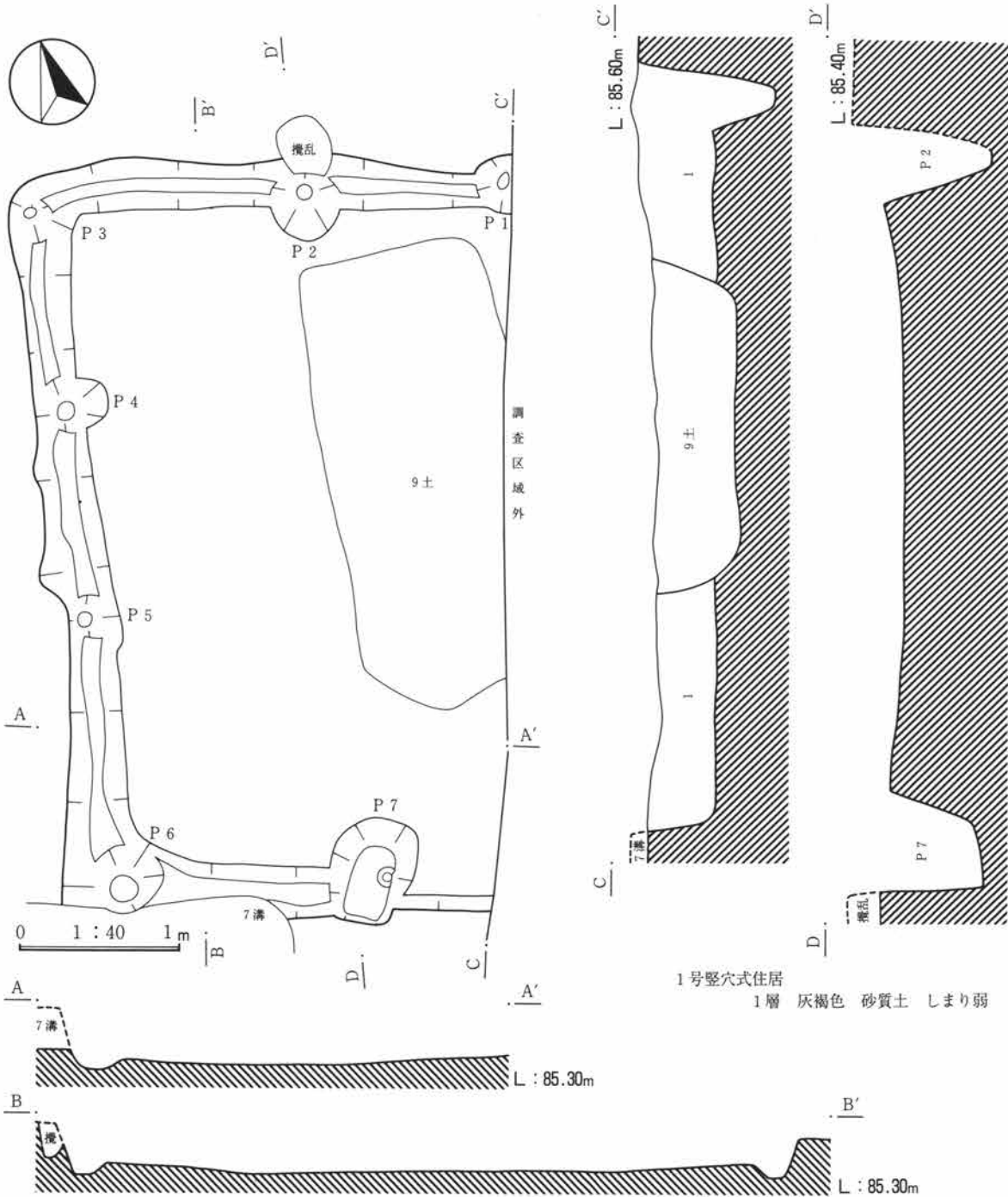
この南には細い東西方向に走る溝が4本あり、井戸(36・37号、A型)が2基、溝をきって並立する。また、竪穴状の遺構が溝に寸断されて検出されたが壁周溝及び、柱穴も確認できず、竪穴式住居である可能性は低い。

この溝の南部にピット状の小土壙群と大形の土壙及び、井戸が4基(38・40号A型、41号B型、39号B型変形)あり、内39・41号井戸はかなりの大形の井戸である。柱穴と思われるピット状の小土壙群から建物は建たない。

この井戸・土壙の集中区の南には東西方向に走る溝が7本あり、うち2本はやや東南に向けて走る溝(49・54号)である。井戸が2基、溝を切る形で検出され(42号A型・43号B型変形)、特に43号井戸は径2.6m、深さ1.9mに及ぶ大形井戸である。これら溝・井戸の集中区の南に平面長方形の土壙群が集中する。しかし、ピット状の小土壙群は少ない。最南端に井戸が2基検出(44号B型・45号C型)されている。

1号竪穴式住居

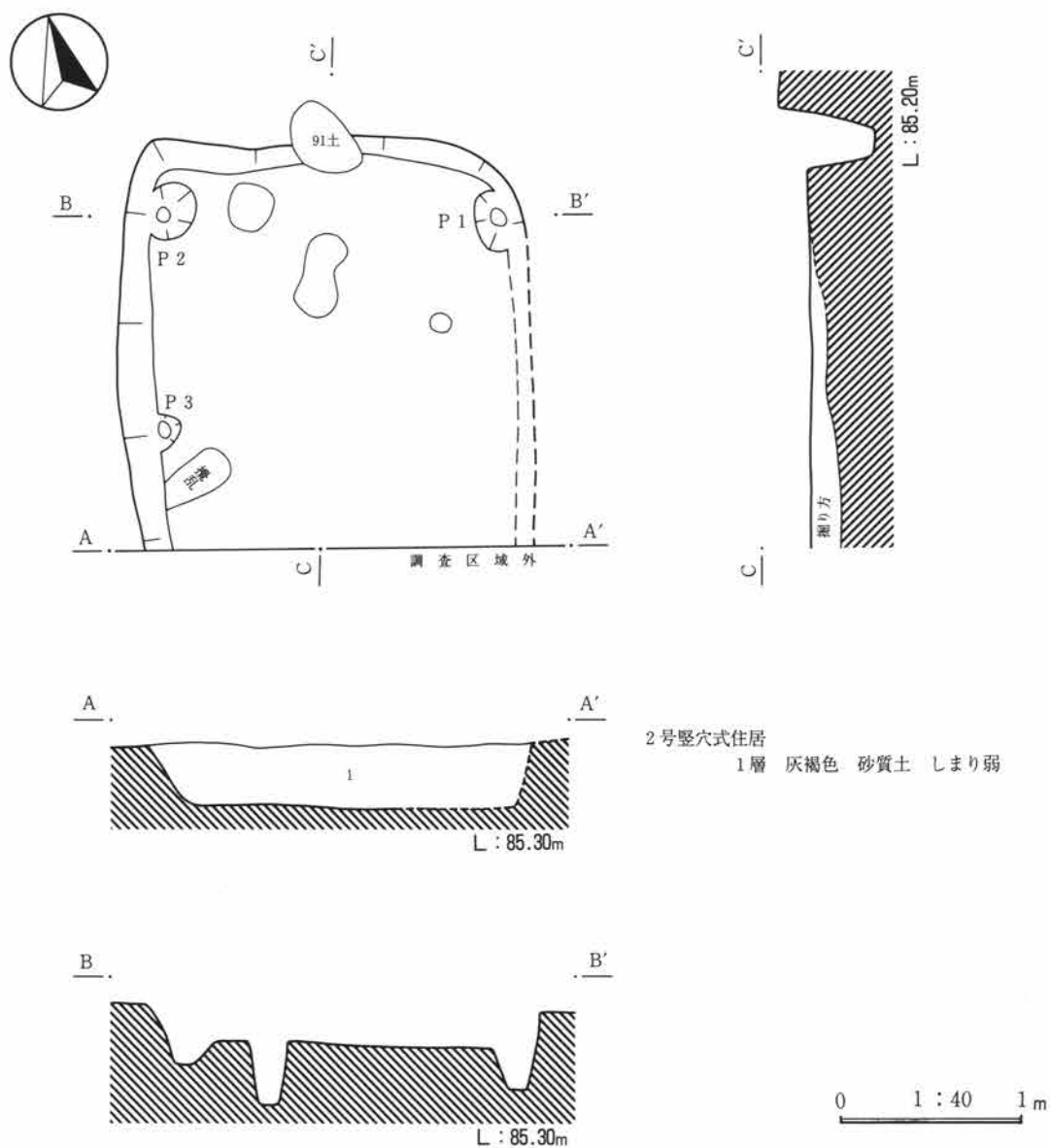
1号竪穴式住居は、東半分が調査区域外のため調査できず、西半分のみ調査できた。竪穴住居を切って9号土壌が中央部に掘削されており、今一つ床面の状況が明かでない。西側辺から判断して一辺4.6mを有するものと考えられる。壁周溝が一巡し、壁周溝内、壁に沿って1.3-1.6m間隔で柱穴がある。現状で7つのピットが確認されている。床面は平坦であるが、しまりは良くない。時期を想定できる遺物がほとんど出土していない為、その時期比定は困難であるが、中世に比定される。



第118図 1号竪穴式住居平面・断面図

2号竪穴式住居

2号竪穴式住居は、南端部が調査区域外で、一部未調査部がある。1号住居に比べてかなり小形で、北側辺からすると一辺が2.2mで、やはり、壁周溝が巡る。壁周溝内、壁に沿って1.1m間隔で柱穴がある。現状で3つのピットが確認されている。床面は一部掘り方をも掘ってしまいやや掘りすぎの部分があるが、本来的には平坦面を呈していたものと思われる。地山が砂質土のため、しまりはあまり良くない。ここからも遺物がほとんど出土せず、時期比定が困難であるが、中世に比定される。

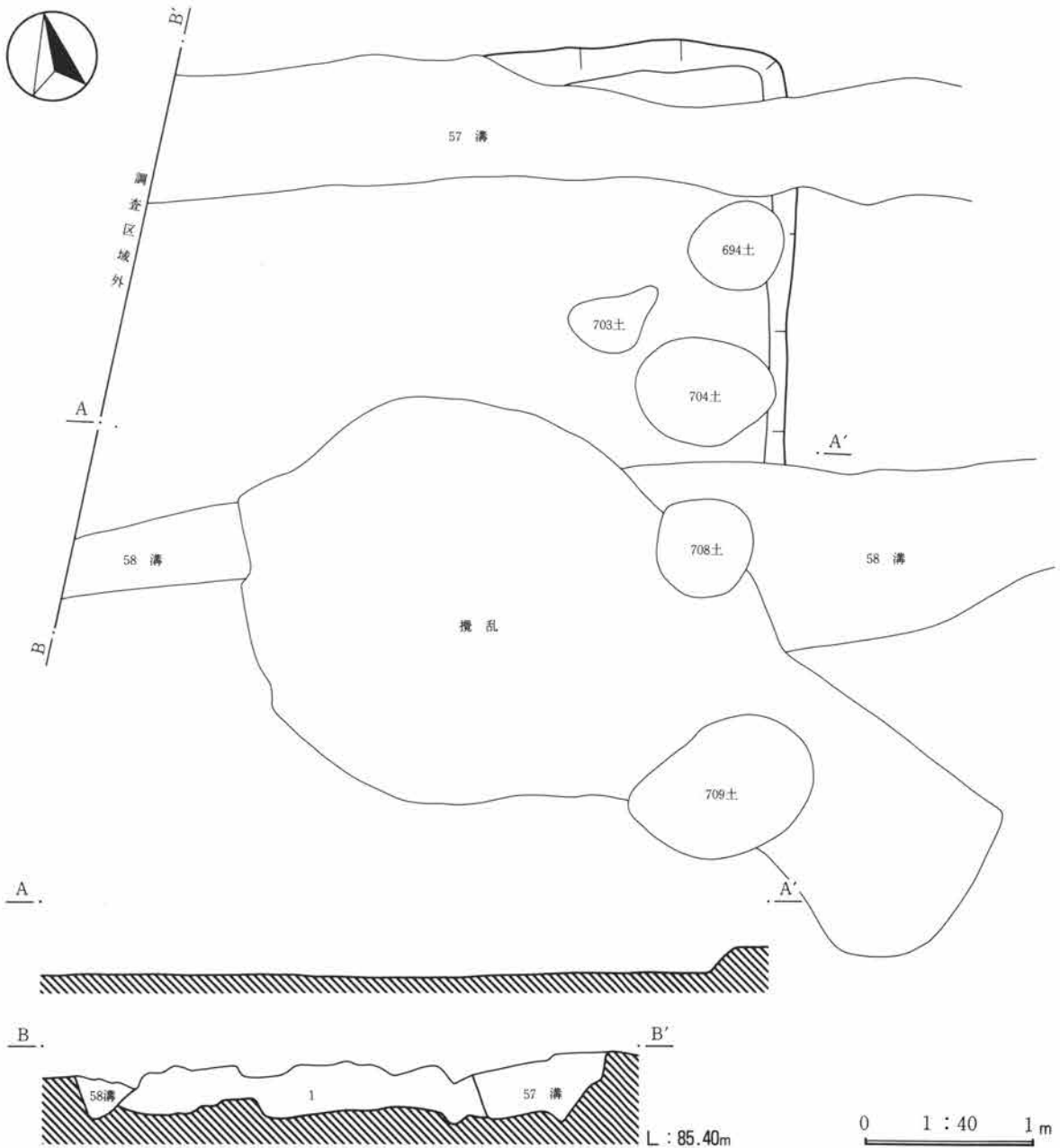


2号竪穴式住居
1層 灰褐色 砂質土 しまり弱

第119図 2号竪穴式住居平面・断面図

1号竖穴状遺構

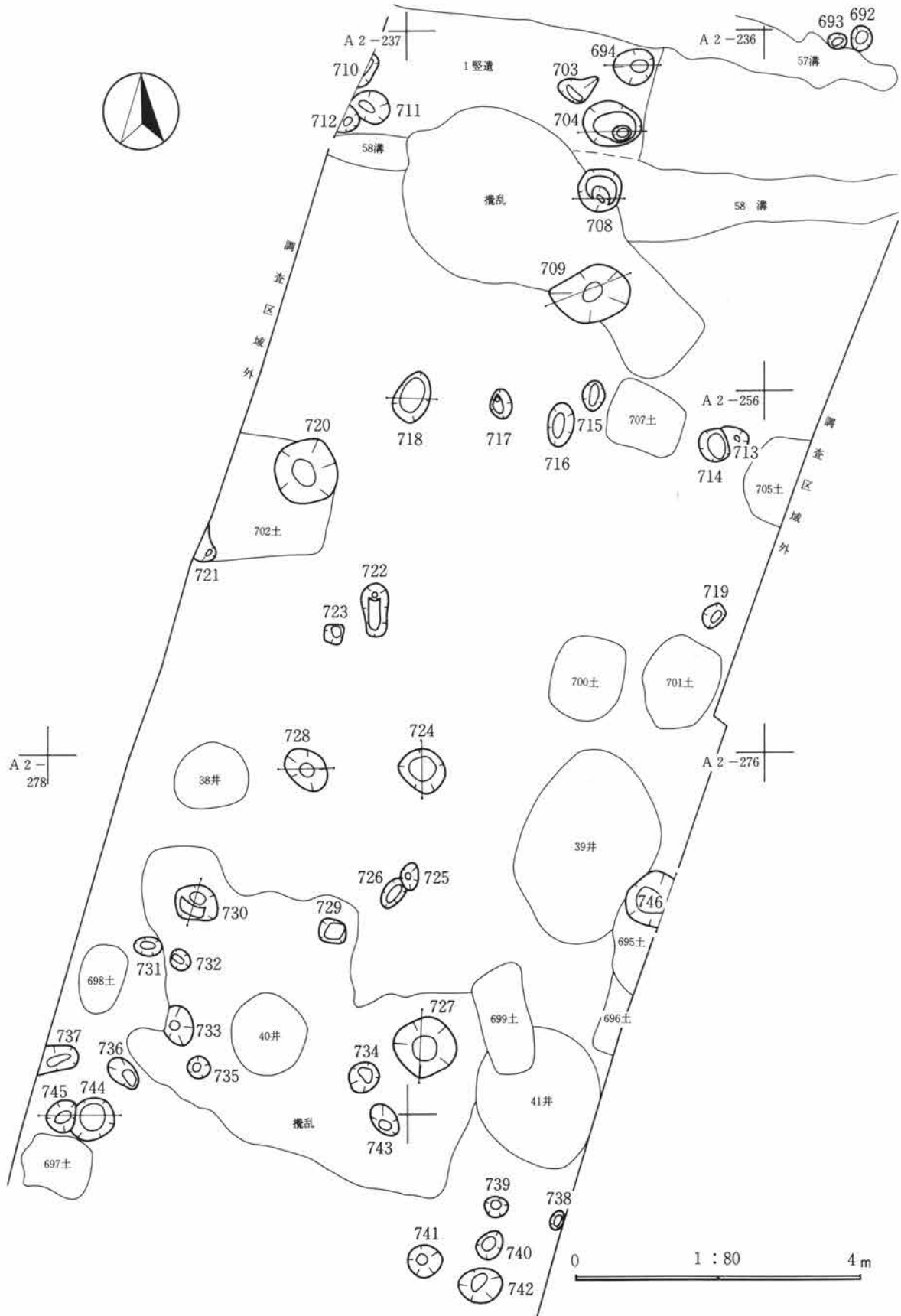
57・58号溝及び攪乱によりかなりの部分が削除され本来の状況を復元することが困難であり、竖穴状遺構として確認できるのは、北・東側辺の極く一部と北東コーナー部のみである。壁周溝及び柱穴共に確認できず、今一つ竖穴式住居として捉えるのには無理があるが、コーナー部及び側辺は明瞭に残るので竖穴状遺構として報告する。床面はかなり削平を受けており、特に西側断面付近は凹凸が激しいが、中央部は平坦面として全面にわたり分布する。



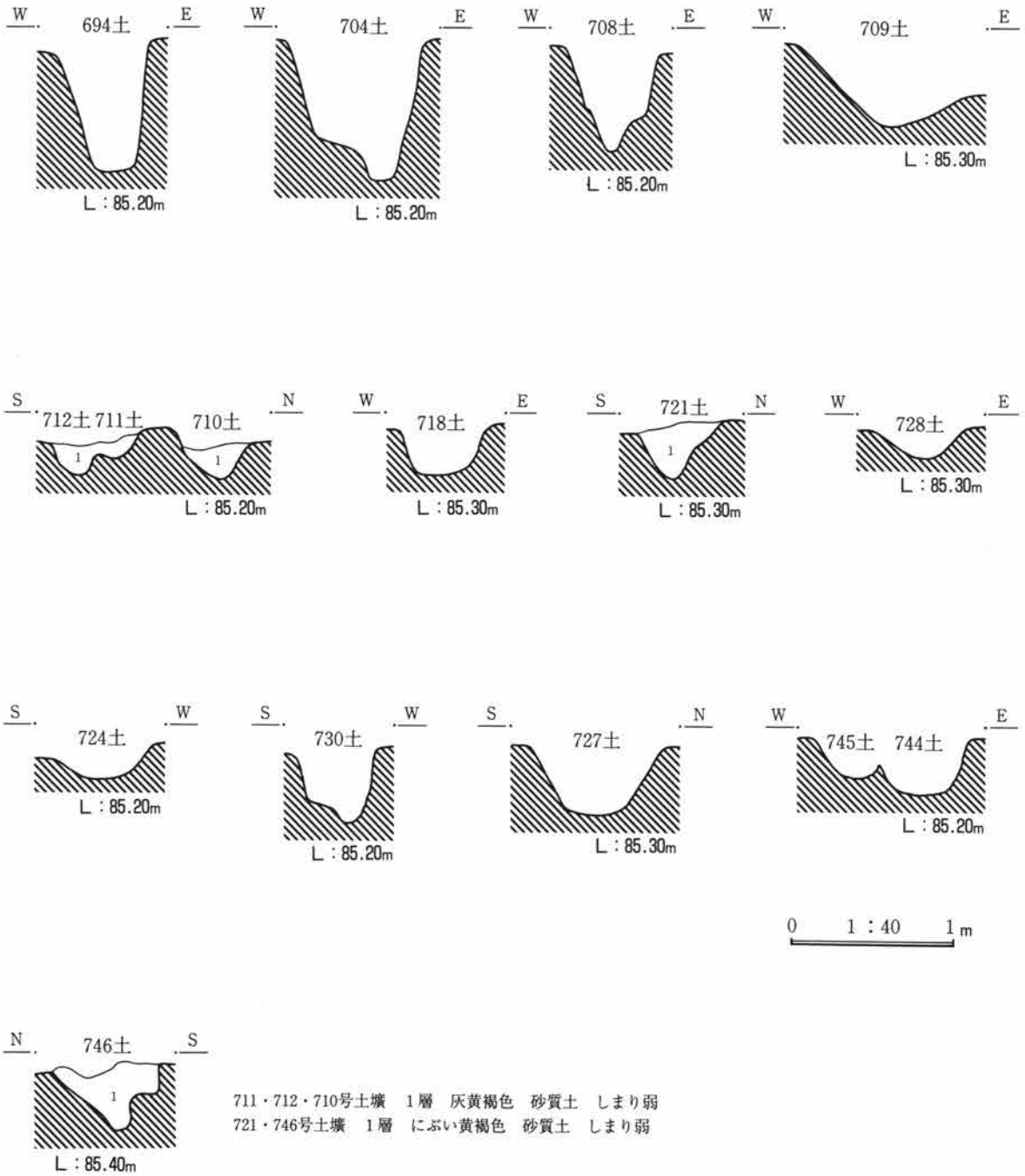
1号竖穴状遺構

1層 におい黄褐色 砂質土 しまり弱

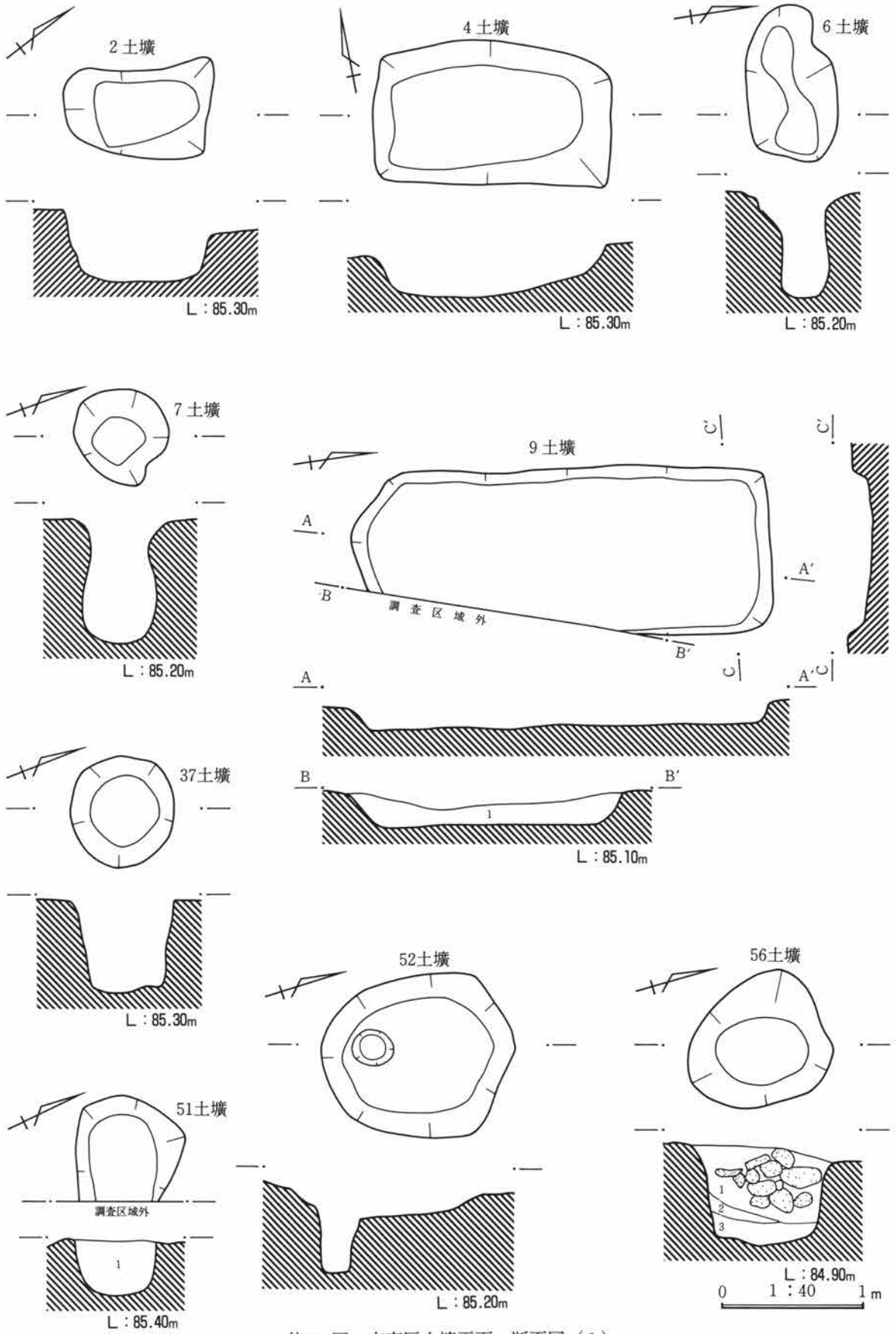
第120図 1号竖穴状遺構平面・断面図



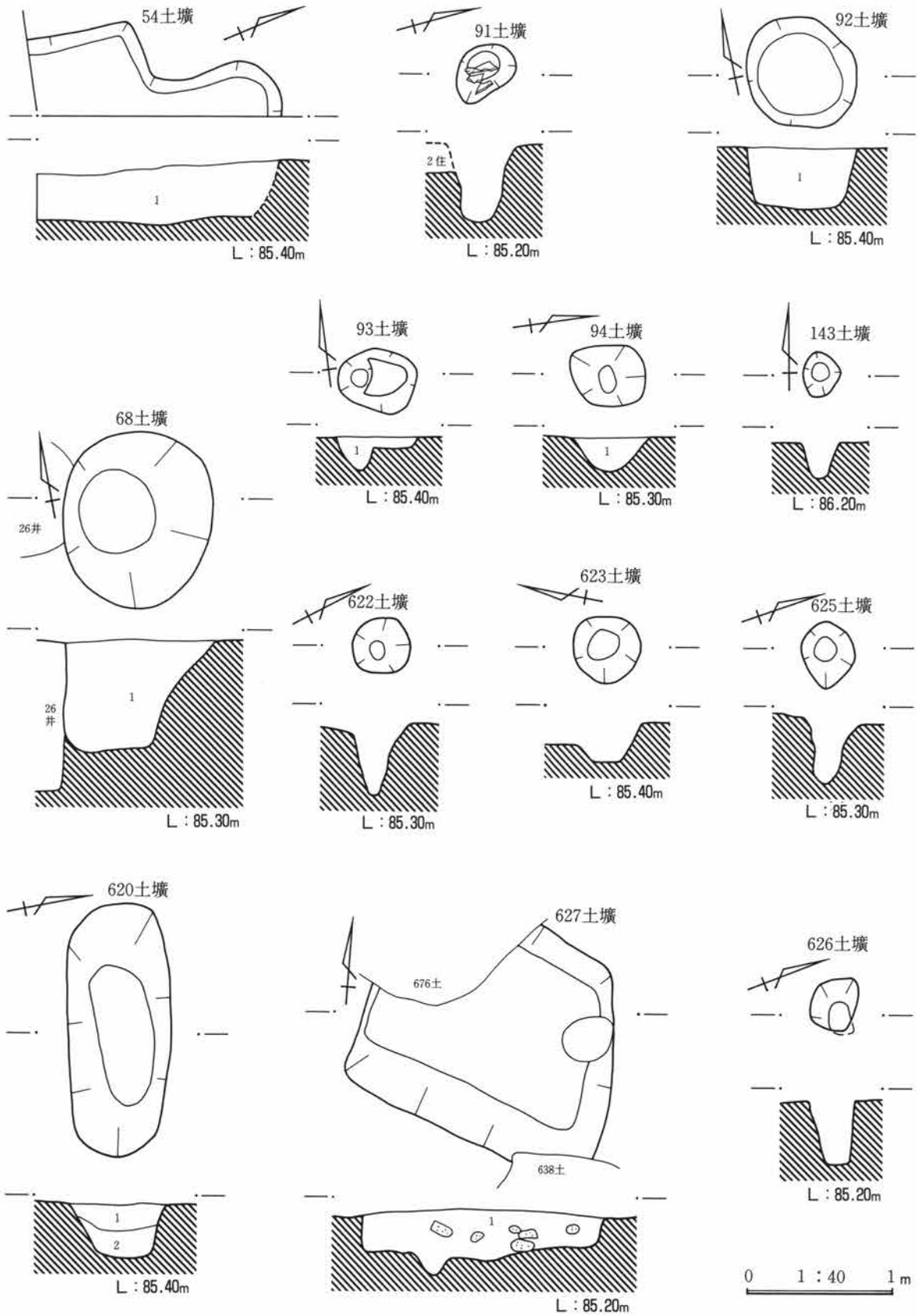
第121図 南東区土壌集合分布図



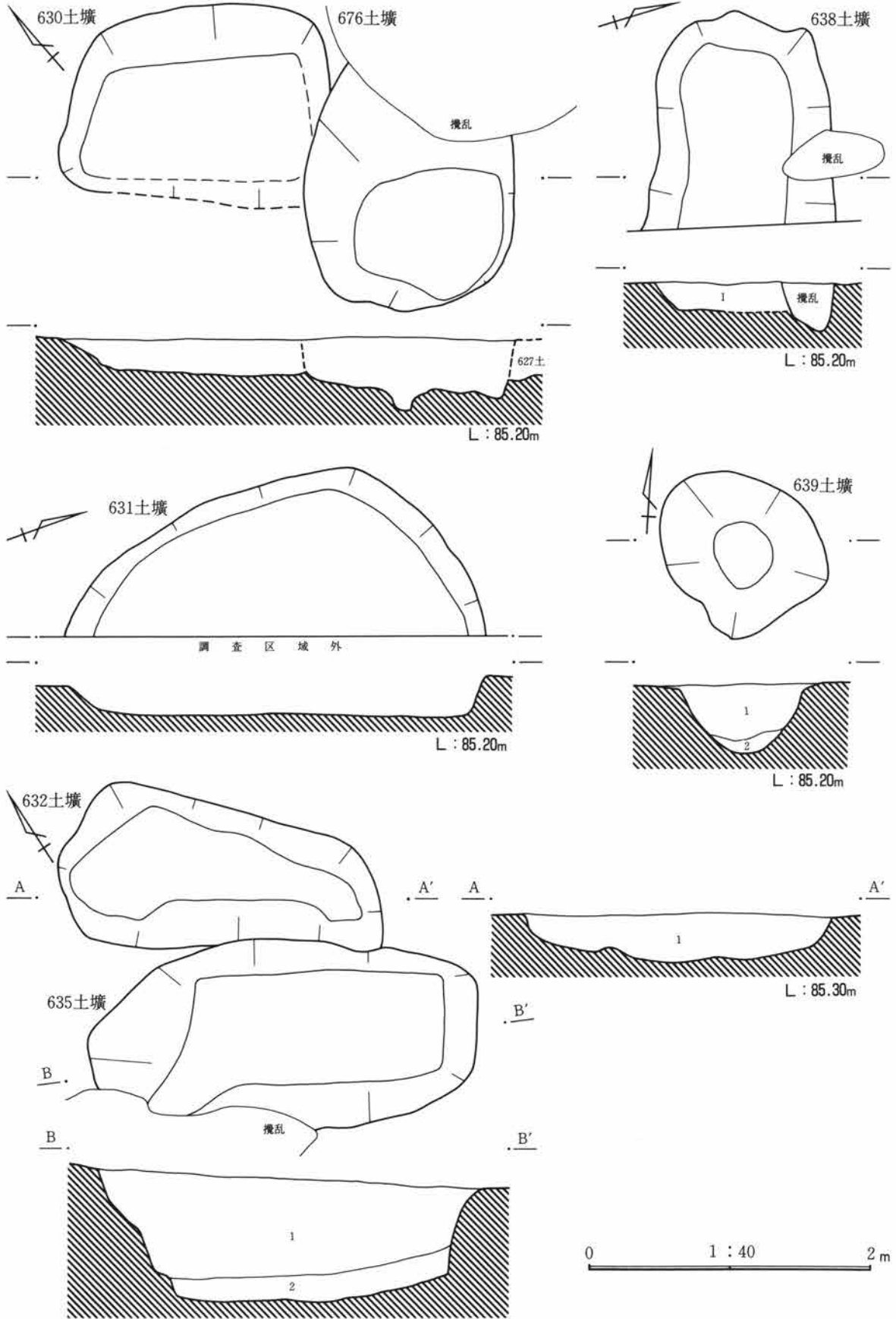
第122図 南東区土層集合断面図



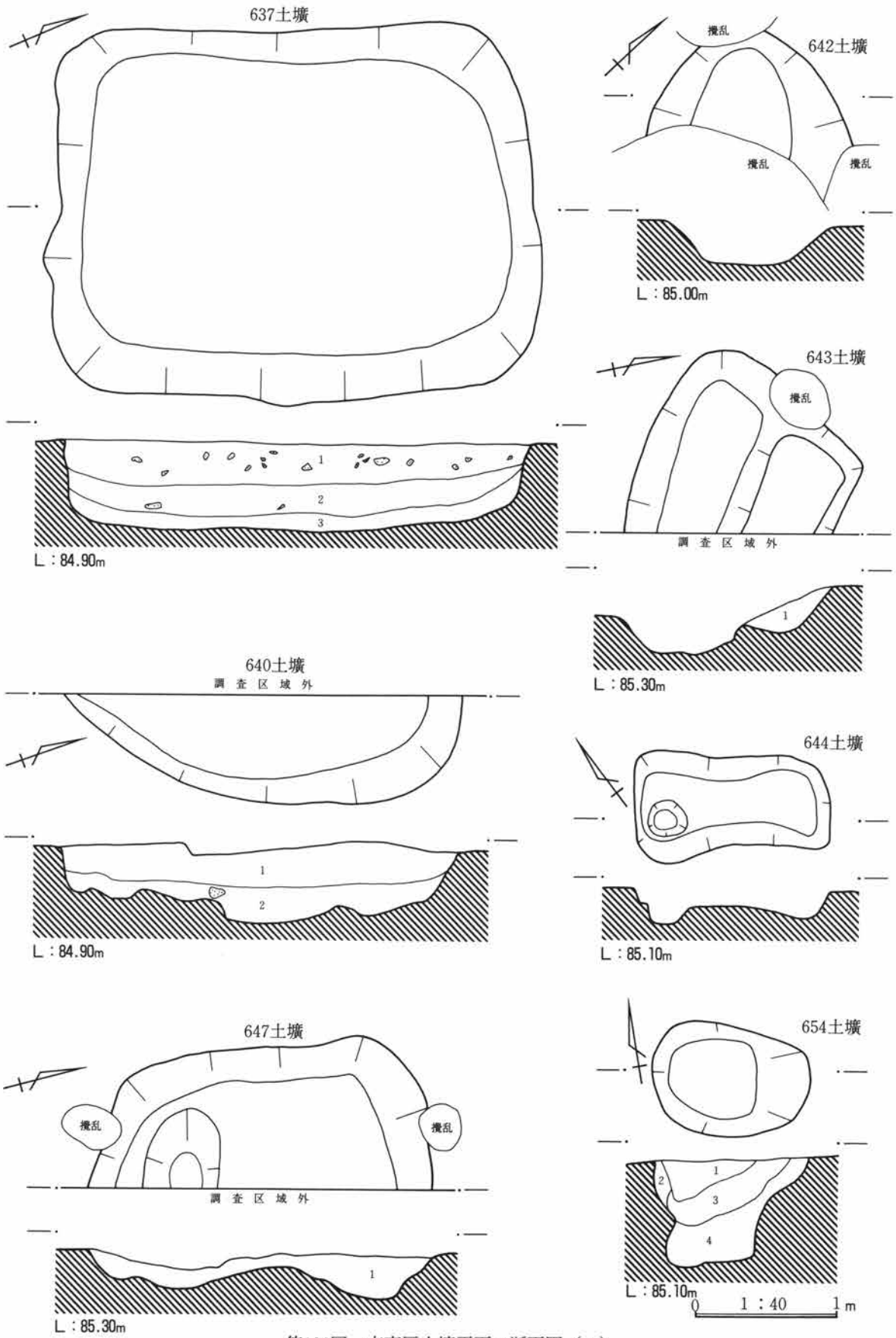
第123図 南東区土坑平面・断面図(1)



第124図 南東区土壙平面・断面図(2)

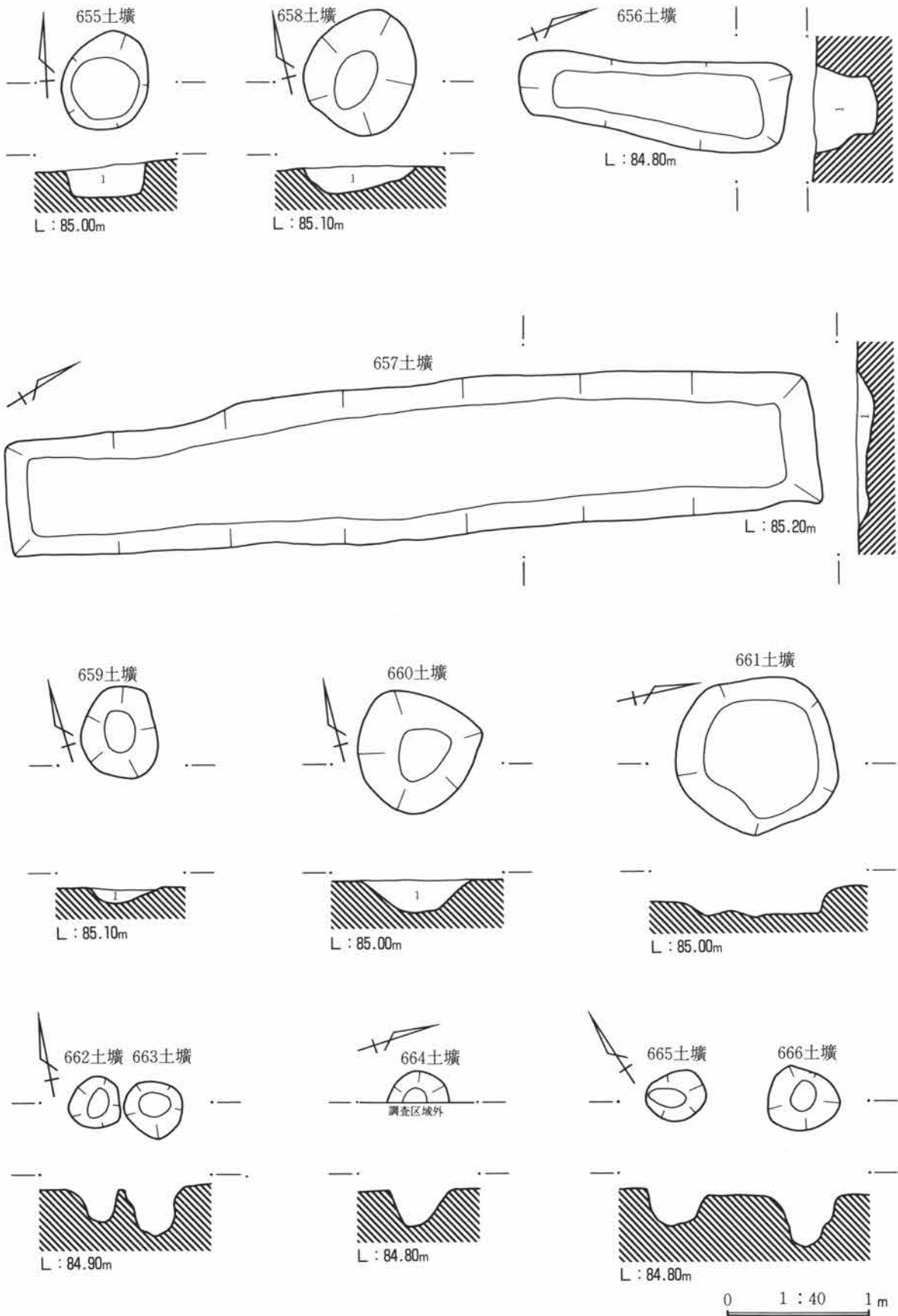


第125図 南東区土壙平面・断面図 (3)

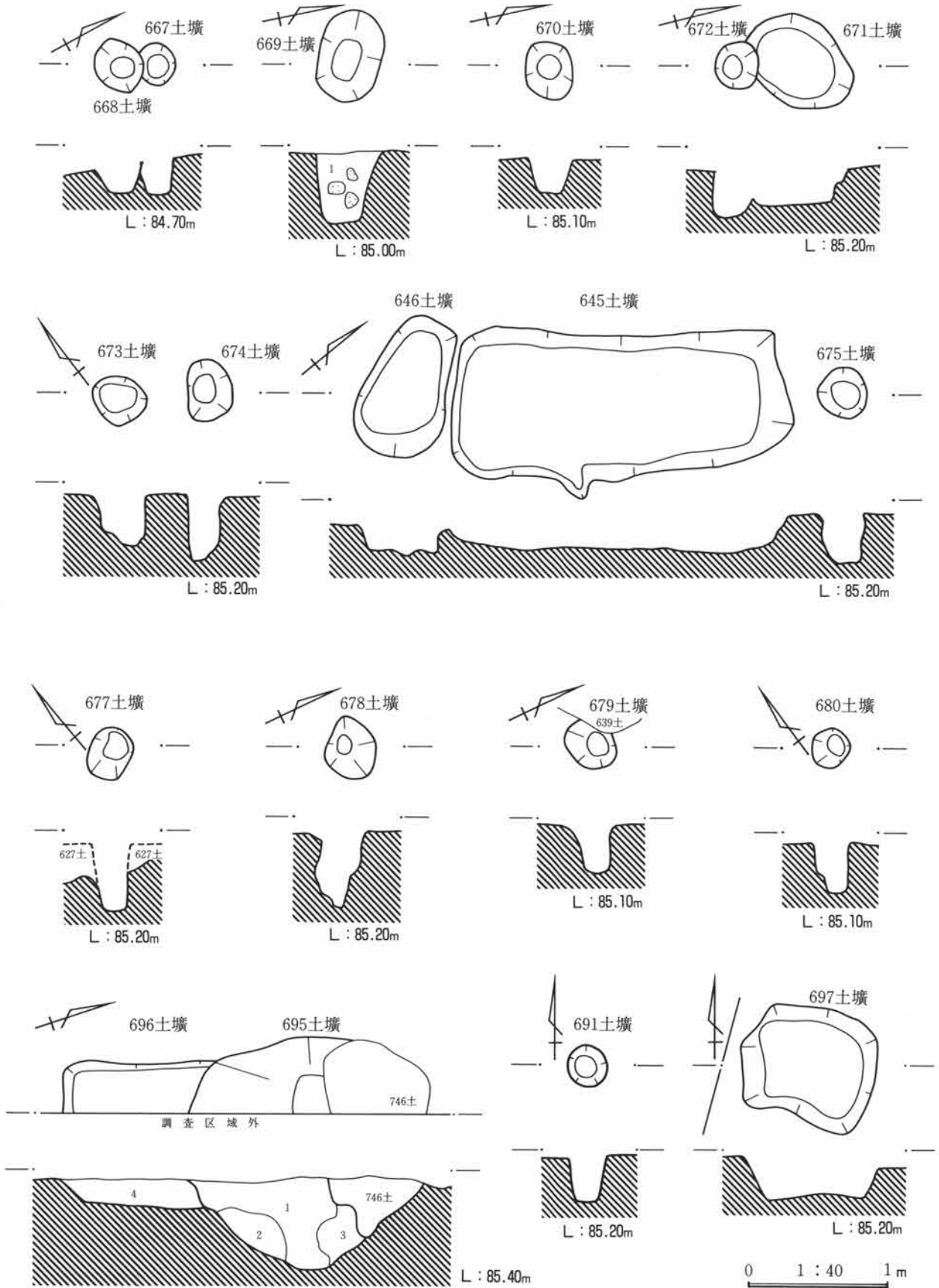


第126図 南東区土壙平面・断面図(4)

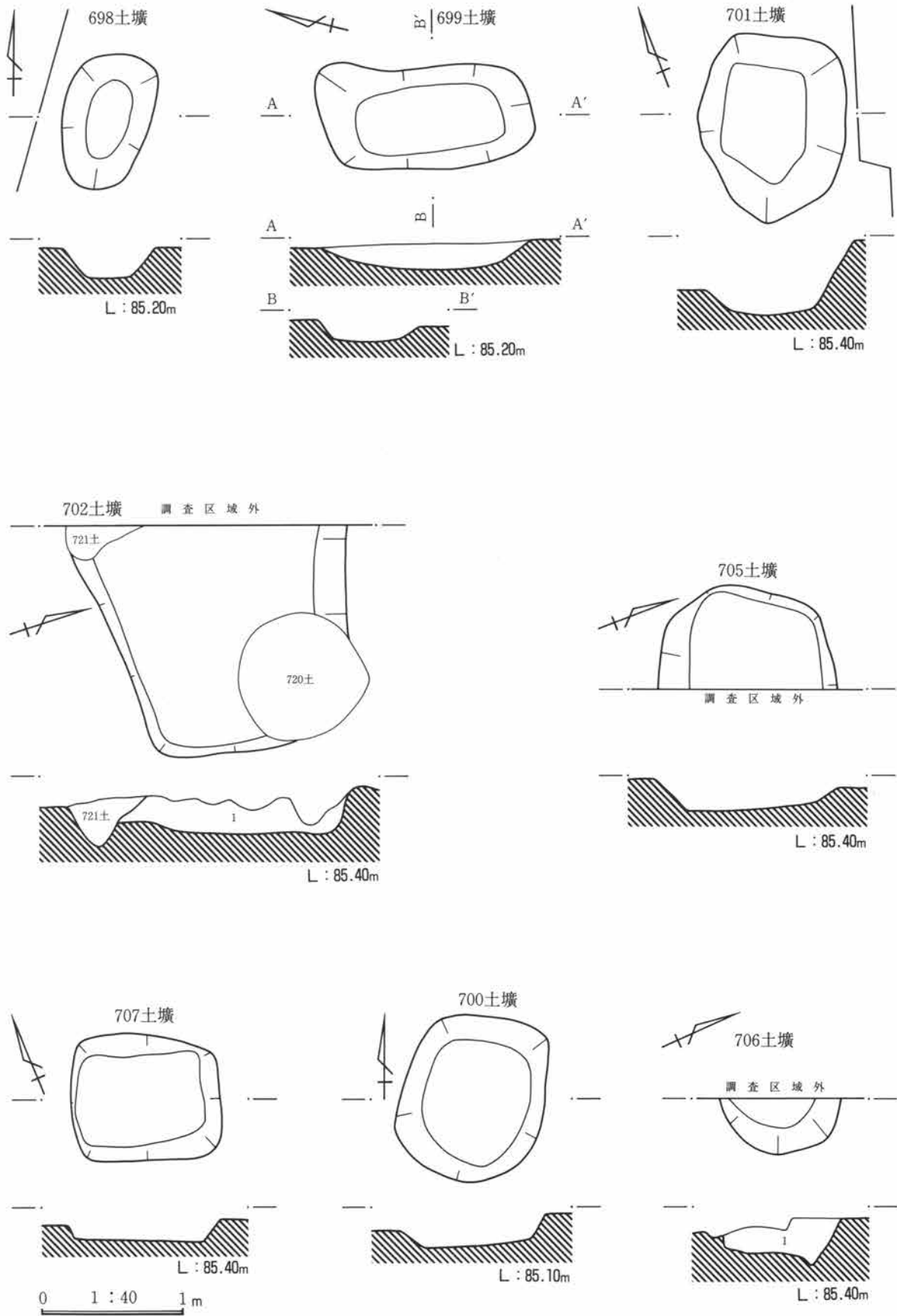
第4章 調査遺構・遺物



第127図 南東区土壙平面・断面図(5)



第128図 南東区土壙平面・断面図 (6)



第129図 南東区土壙平面・断面図(7)

第4節 中近世

9号土壌	1層	灰褐色	砂質土	しまり弱	炭化物含む
51号土壌	1層	灰褐色	砂質土	しまり弱	
54号土壌	1層	灰褐色	砂質土	しまり弱	
56号土壌	1層	暗赤灰色	粘質土		
	2層	灰黄褐色	砂質土		
	3層	暗赤灰色	粘質土		
68号土壌	1層	赤灰色	軟質土	しまり弱	
92号土壌	1層	灰褐色	砂質土	しまり弱	
93号土壌	1層	灰褐色	砂質土	しまり弱	
94号土壌	1層	灰褐色	砂質土	しまり弱	
620号土壌	1層	褐灰色・明黄褐色土まじり	砂質土		
	2層	褐灰色	やや粘性あり		
627号土壌	1層	黄灰色	砂質土	円礫φ2-15cm大混じり	
638号土壌	1層	褐灰色	砂質土		
639号土壌	1層	にぶい赤褐色	砂質土		
	2層	黒褐色	粘質土		
632号土壌	1層	褐灰色	砂質土		
635号土壌	1層	暗灰黄色	砂質土		
	2層	黄灰色	粘質土10%含む		
637号土壌	1層	黄灰色	砂質土		
	2層	黒褐色	砂質土		
	3層	明黄褐色・黄灰色まじり	30%混じる		
643号土壌	1層	褐灰色	砂質土		
640号土壌	1層	にぶい黄褐色	砂質土		
	2層	褐色	やや粘性あり		
647号土壌	1層	褐灰色	砂質土		
654号土壌	1層	褐灰色	砂質土		
	2層	褐灰色・明黄褐色土まじり	壁の崩壊土		
	3層	明黄褐色	砂質土		
	4層	褐灰色	やや粘性あり		
655号土壌	1層	にぶい赤褐色	砂質土	しまり弱	
658号土壌	1層	黄灰色	砂質土		
656号土壌	1層	にぶい赤褐色	砂質土	しまり弱	
657号土壌	1層	褐灰色	砂質土	しまり弱	
659号土壌	1層	黄灰色	砂質土		
660号土壌	1層	暗赤褐色	砂質土		
667号土壌・668号土壌	1層	黄褐色	砂質土	しまり弱	
	2層	褐灰色	砂質土	しまり弱	
669号土壌	1層	灰褐色	砂質土	円礫φ1-2cm大5%含む	
671号・672号土壌	1層	黄褐色	砂質土	しまり弱	
	2層	褐灰色	砂質土	しまり弱	
695・696号土壌	1層	暗褐色	砂質土		
	2層	褐色	砂質土		
	3層	暗黄褐色	シルト質土		
	4層	褐色	砂質土		
702号土壌	1層	褐色	砂質土	φ1cm大の円礫10%含む	
706号土壌	1層	褐色	砂質土	φ1cm大の円礫10%含む	

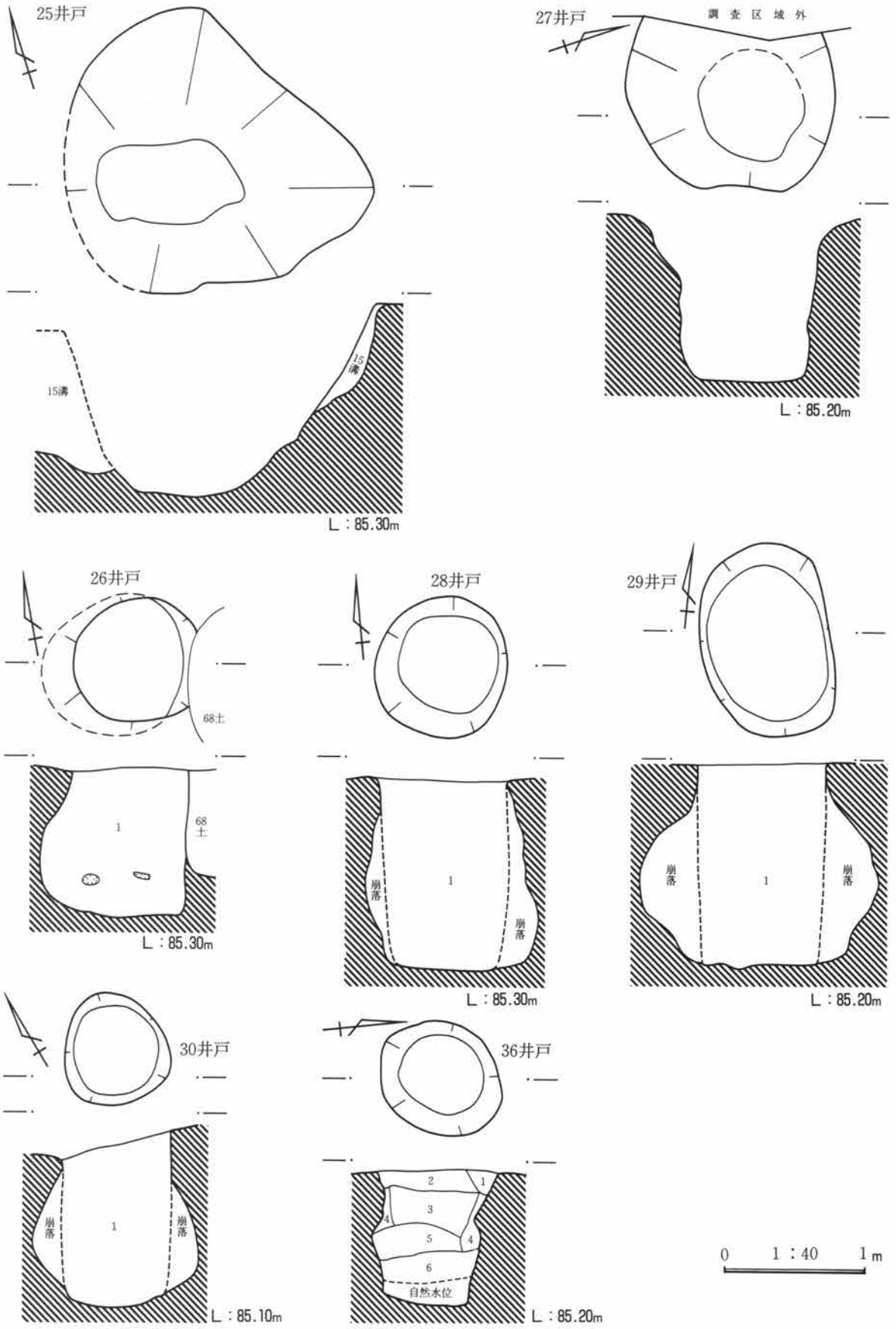
第4章 調査遺構・遺物

南東区土壌一覽表

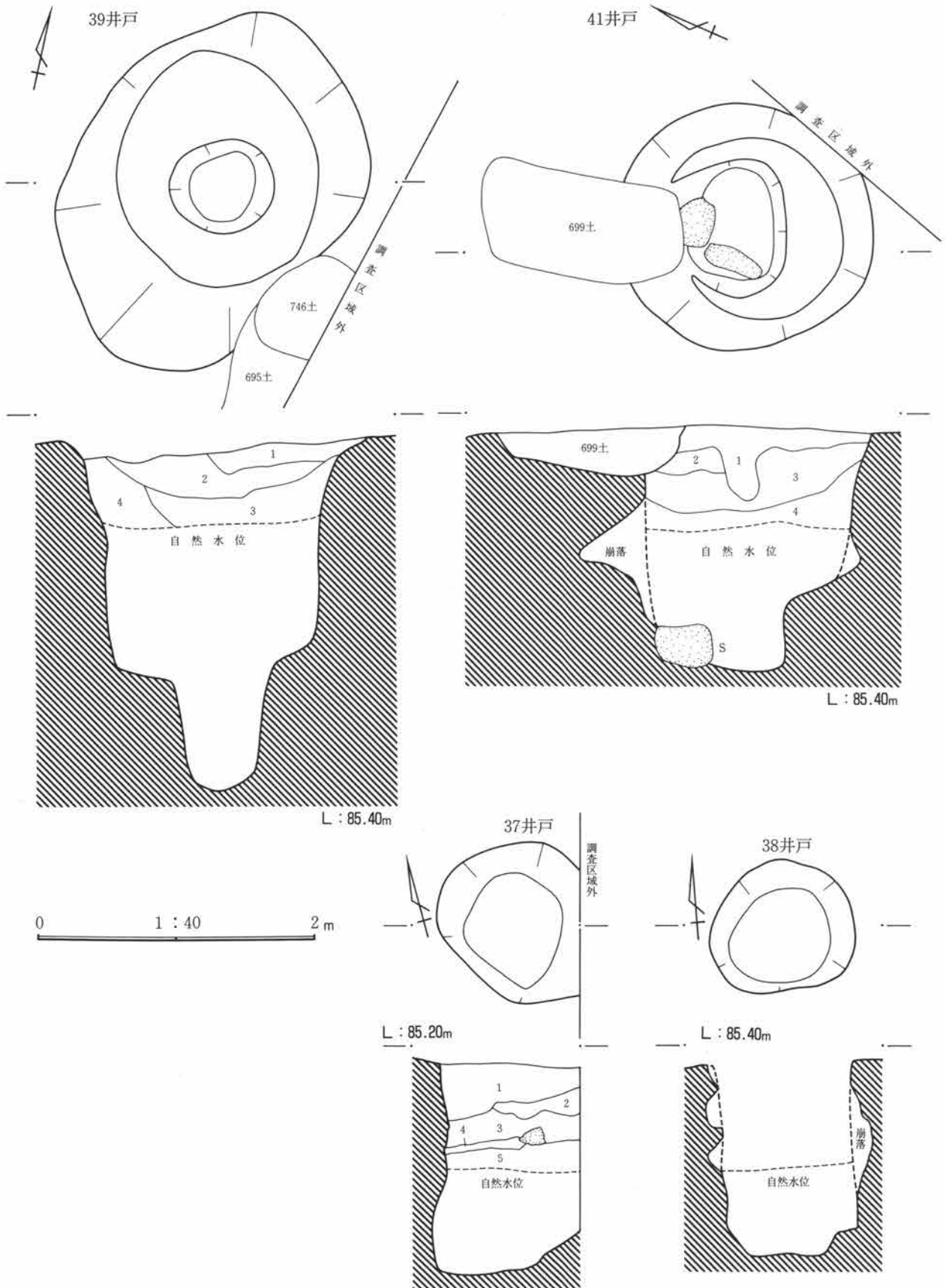
No. 1

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
2	A2-155G	隅丸長方形	103	60	41	N-39°-E	
4	A2-175G	隅丸長方形	168	100	31	N-78°-W	
6	A2-155G	不整楕円形	106	63	71	N-87°-W	
7	A2-155G	不整円形	65	62	86		
9	A2-154G	隅丸長方形?	294	<121>	14	N-9°-E	砥石 (173図-1)
37	A2-174G	円形	75	74	64		
51	A2-174G	不整楕円形	<73>	<56>	38	-	
52	A2-195G	不整楕円形	136	113	59	N-12°-E	土師器坏 (72図-1)
54	A2-195G	不明	<169>	<61>	37		
56	A2-094G	不整楕円形	101	85	69	N-10°-W	
68	A2-154G	楕円形	120	102	75	N-11°-E	
91	A2-196G	楕円形	46	34	53	N-43°-W	軟質陶器内耳鍋 (141図-40・41)
92	A2-175G	円形	75	74	43		
93	A2-175G	不整楕円形	53	41	22	N-73°-W	
94	A2-175G	隅丸方形	50	42	22		
143	A2-134G	楕円形	31	25	26	N	
620	A2-337G	楕円形	172	72	35	N-79°-W	
622	A2-337G	円形	40	38	45		
623	A2-337G	円形	47	45	20		
625	A2-338G	楕円形	45	36	43	N-72°-W	
626	A2-378G	隅丸方形	35	31	45		
627	A1-018G	隅丸方形	176	154	35		
630	A2-398G	隅丸長方形	<195>	139	23	N-47°-W	
631	A2-398G	不明	-	-	22		
632	A2-399G	不整隅丸方形	228	95	34	N-52°-W	石搦鉢 (161図-2)・磨き石 (171図-26・28・32)
635	A2-399G	不整隅丸長方形	272	131	86	N-59°-W	
637	A1-080G	隅丸長方形	331	260	60		焼締陶器・軟質陶器・磨き石・砥石・窪み石
638	A1-018G	不明	<150>	133	20		
639	A1-039G	不整楕円形	117	98	48	N-39°-W	土師器皿 (142図-59・60)
640	A1-040G	不明	280	<77>	52		埴輪 (67図-66・67)
642	A1-019G	不明	-	-	28		
643	A1-038G	隅丸方形?	144	<121>	32		
644	A1-039G	隅丸長方形	136	62	12	N-51°-W	
645	A1-039G	隅丸長方形	237	98	22	N-39°-E	
646	A1-039G	楕円形	102	54	24	N-28°-E	
647	A1-038G	隅丸方形?	241	<100>	29		
654	A1-080G	楕円形	110	78	20	N-74°-W	
655	A1-080G	楕円形	71	60	21	N-33°-E	
656	A1-080G	隅丸長方形	187	55	45	N-29°-E	陶器丸碗 (144図-20)・鉢 (145図-32)
657	A1-039G	隅丸長方形	568	180	10	N-32°-E	
658	A1-039G	不整楕円形	86	75	17	N-38°-E	
659	A1-059G	不整楕円形	63	52	25	N-19°-E	
660	A1-079G	不整円形	82	82	22		
661	A1-080G	不整隅丸方形	112	105	14		
662	A1-079G	不整円形	35	34	23		
663	A1-079G	不整円形	40	40	32		
664	A1-079G	不明	42	<22>	25		
665	A1-079G	楕円形	41	35	24	N-60°-W	
666	A1-079G	不整円形	45	43	35		
667	A1-079G	円形?	30	<22>	25		
668	A1-079G	楕円形	40	34	20	N-83°-W	
669	A1-059G	楕円形	65	45	50	N-66°-W	
670	A1-059G	楕円形	41	32	23	N-86°-E	
671	A1-039G	楕円形	80	49	23	N-54°-E	
672	A1-039G	円形	33	30	31		
673	A1-018G	不整方形	35	30	35		
674	A1-018G	隅丸長方形	41	31	45	N-31°-E	
675	A1-018G	円形	35	34	35		
676	A2-398G	隅丸方形?	<147>	<128>	50		

番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
677	A1-018G	楕円形	37	30	27	N-59°-E	陶器甕 (149図-5)
678	A1-019G	不整形	38	36	53		
679	A1-039G	円形?	37	< 32>	36		
680	A1-039G	不整形	28	26	36		
695	A2-276G	不明	—	—	66		
696	A2-276G	不明	—	—	19		
697	A2-297G	不明隅丸長方形	99	79	23	N-75°-W	
698	A2-277G	楕円形	96	62	20	N-12°-E	
699	A2-276G	隅丸長方形	149	70	18	N-19°-W	
700	A2-256G	隅丸方形	115	99	18		
701	A2-256G	不整楕円形	130	104	35	N-28°-E	
702	A2-257G	不明	170	<160>	25		
705	A2-255G	不明	125	< 71>	18		
706	A2-216G	不明	85	< 70>	28		
707	A2-256G	隅丸長方形	105	87	13	N-67°-W	
708	A2-236G	円形	60	60	71		
709	A2-236G	楕円形	113	79	42	N-27°-E	
710	A2-237G	不明	<52>	—	26		
711	A2-237G	楕円形	52	41	20	N-53°-W	
712	A2-237G	不明	—	< 41>	22	N-36°-E	
713	A2-256G	不明	35	< 30>	29	W	
714	A2-256G	楕円形	46	39	14	N-14°-W	
715	A2-256G	楕円形	40	30	23	N-12°-E	
716	A2-256G	楕円形	62	35	23	N-9°-E	
717	A2-256G	楕円形	40	30	32	N-7°-W	
718	A2-256G	楕円形	70	51	33	N-25°-E	
719	A2-256G	楕円形	32	27	43	N-58°-E	
720	A2-257G	円形	88	88	79		
721	A2-257G	不明	—	30	28		
722	A2-257G	楕円形	75	37	32	N	
723	A2-257G	隅丸方形	27	27	17		
724	A2-276G	不整円形	65	62	21		
725	A2-276G	楕円形	37	26	9	N	
726	A2-277G	楕円形	47	28	13	N-39°-E	
727	A2-276G	円形	84	82	53		
728	A2-277G	楕円形	66	50	19	N-40°-W	
729	A2-277G	隅丸方形	36	35	86		
730	A2-277G	隅丸長方形	60	48	47	W	
731	A2-277G	楕円形	40	25	23	W	
732	A2-277G	円形	28	28	37		
733	A2-277G	楕円形	55	43	42	N-28°-W	
734	A2-277G	円形	41	41	28		
735	A2-277G	円形	33	30	30		
736	A2-277G	楕円形	51	32	16	N-50°-W	
737	A2-277G	不明	—	35	12		
738	A2-296G	楕円形	27	18	18	N-21°-E	
739	A2-296G	円形	33	30	21		
740	A2-296G	楕円形	40	33	17	N-35°-E	
741	A2-296G	円形	48	45	30		
742	A2-296G	楕円形	60	50	52	N-72°-W	
743	A2-297G	楕円形	50	33	45	N-41°-W	
744	A2-297G	円形	59	< 57>	35		
745	A2-297G	不整楕円形	48	39	24	N-41°-W	
746	A2-276G	不整形	—	76	53		

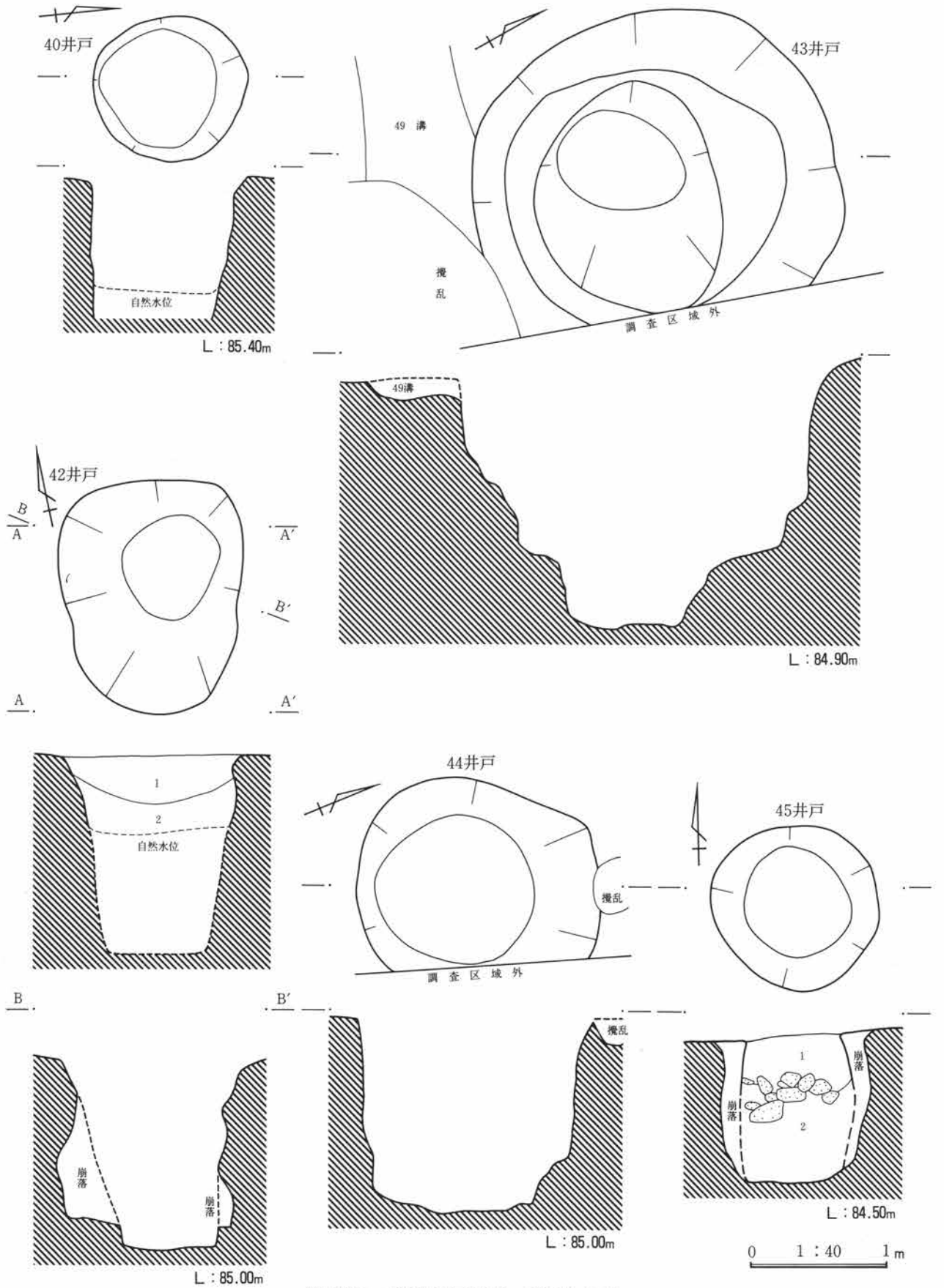


第130図 南東区井戸平面・断面図 (1)



第131図 南東区井戸平面・断面図 (2)

第4章 調査遺構・遺物

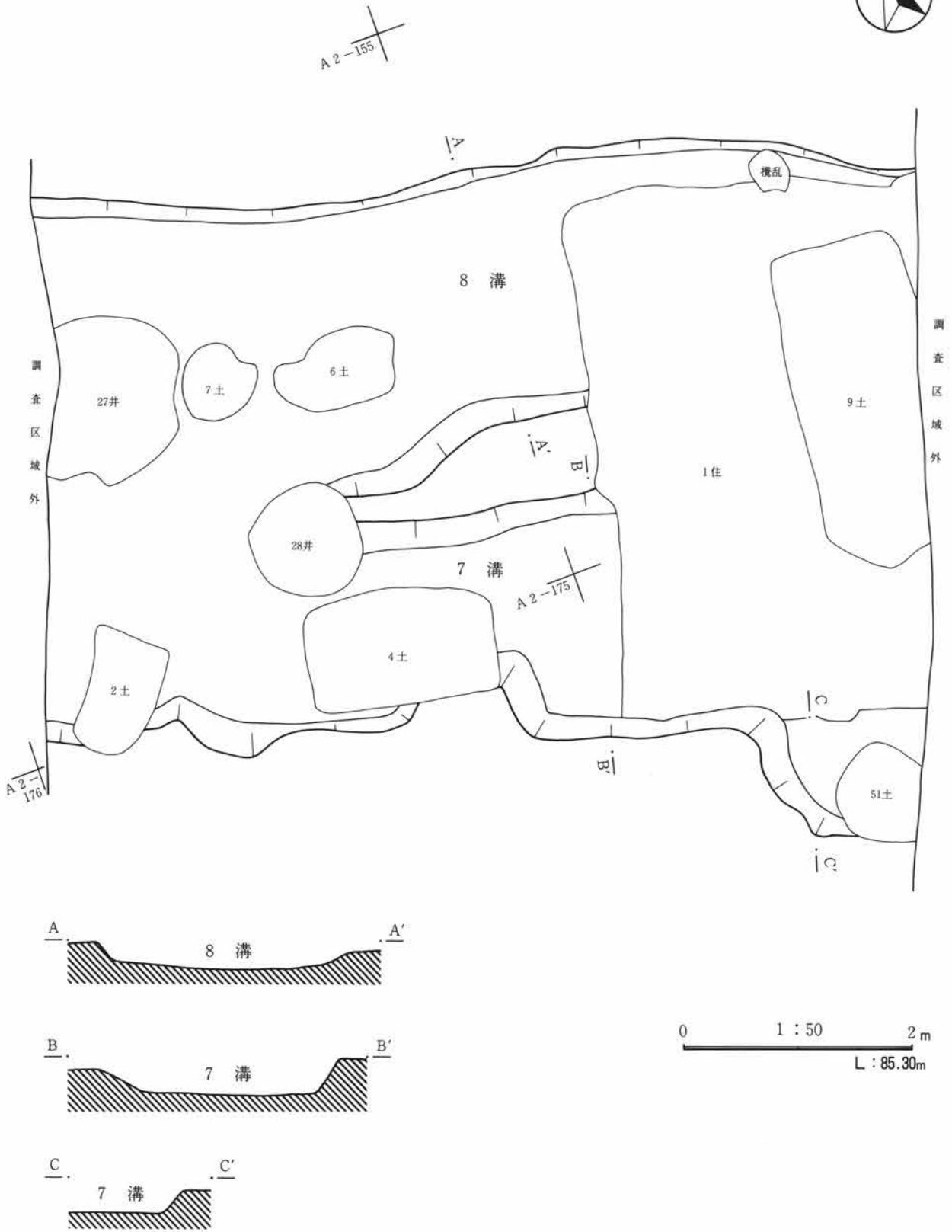


第132図 南東区井戸平面・断面図 (3)

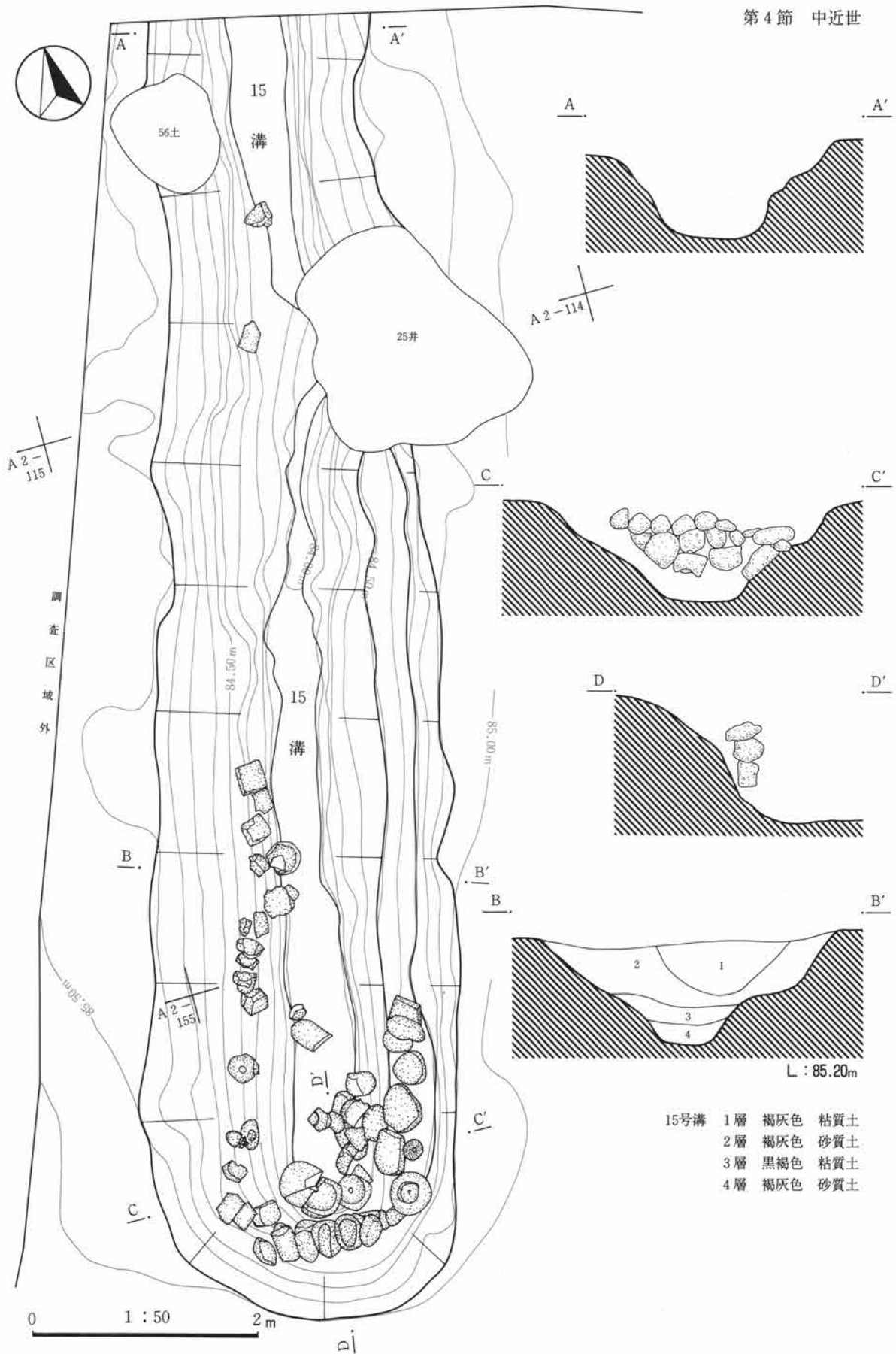
- 26号井戸 1層
- 28号井戸 1層 黒褐色 砂質土
- 29号井戸 1層 暗褐色 砂質土
- 30号井戸 1層 黒褐色 砂質土
- 36号井戸 1層 黒褐色 砂質土
- 2層 暗褐色 砂質土
- 3層 灰オリーブ色・明黄褐色10%含む 砂質土
- 4層 灰オリーブ色 砂質土
- 5層 灰オリーブ色・明黄褐色20% 砂質土
- 6層 明黄褐色 砂質土
- 37号井戸 1層 暗褐色 砂質土 円礫5%含む
- 2層 明黄褐色 砂質土
- 3層 暗褐色 砂質土
- 4層 明赤褐色 砂質土
- 5層 暗褐色 砂質土・灰・炭化物を少量含む
- 39号井戸 1層 暗褐色 砂質土
- 2層 暗褐色・明黄褐色土40%含む
- 3層 オリーブ灰色・明黄褐色土30%含む
- 4層 黒褐色 砂質土
- 41号井戸 1層 暗褐色 砂質土
- 2層 褐色 砂質土
- 3層 暗褐色・明黄褐色土50%含む
- 4層 暗褐色・明黄褐色30%含む
- 42号井戸 1層 黒褐色 粘質土
- 2層 灰黄褐色 粘質土
- 45号井戸 1層 黒褐色 粘質土
- 2層 褐色 粘質土

南東区井戸

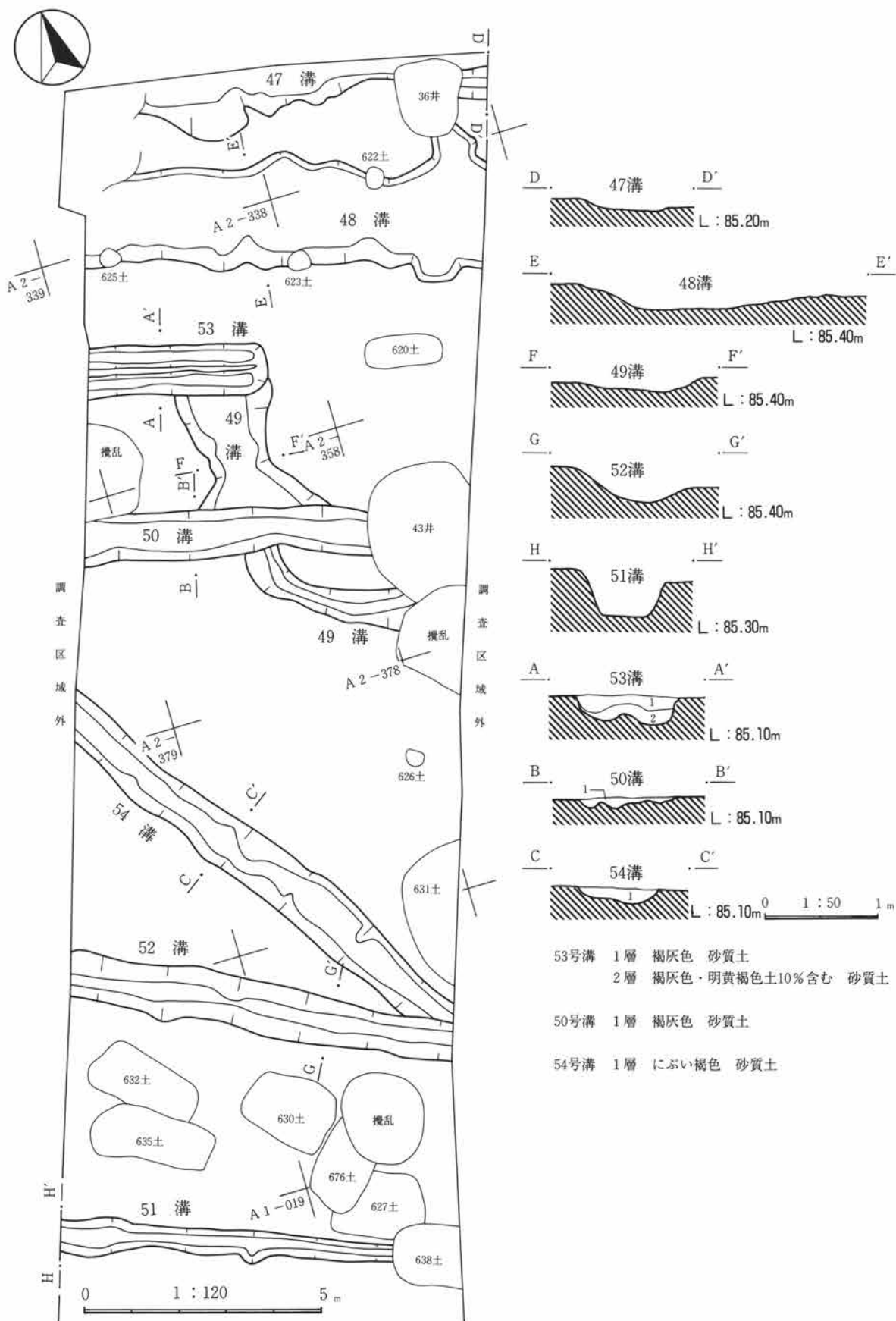
番号	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
25	A2-114G	不整形	(220)	197	124	N-23°-W	
26	A2-154G	円形	(91)	87	105		
27	A2-155G	不明	149	-	113		
28	A2-155G	円形	98	94	132		
29	A2-175G	楕円形	135	93	140	N-13°-W	粉挽白・窪み石・磨き石
30	A2-195G	円形	79	66	114		円筒埴輪 (65図-38)
36	A2-216G	楕円形	95	77	94	N-32°-E	
37	A2-215G	不整形	114	(102)	149		
38	A2-277G	不整形	104	93	136		窪み石 (165図-19)
39	A2-276G	不整形	268	145	236	N-25°-E	軟質・焼締陶器・磁器・粉挽白・砥石・五輪塔・窪み石
40	A2-277G	円形	115	104	100		
41	A2-276G	円形	198	-	170		粉挽白上白 (153図-7)・(154図-10)
42	A2-317G	不整形	169	135	133	N-17°-W	磨き石 (170図-23)・板材 (190図-4)
43	A2-357G	円形?	262	(243)	182		土師器・埴輪・粉挽白・窪み石・磨き石
44	A1-059G	楕円形?	180	-	140	N-27°-W	
45	A1-079G	円形	120	98	107		



第133図 南東区溝平面・断面図(1)

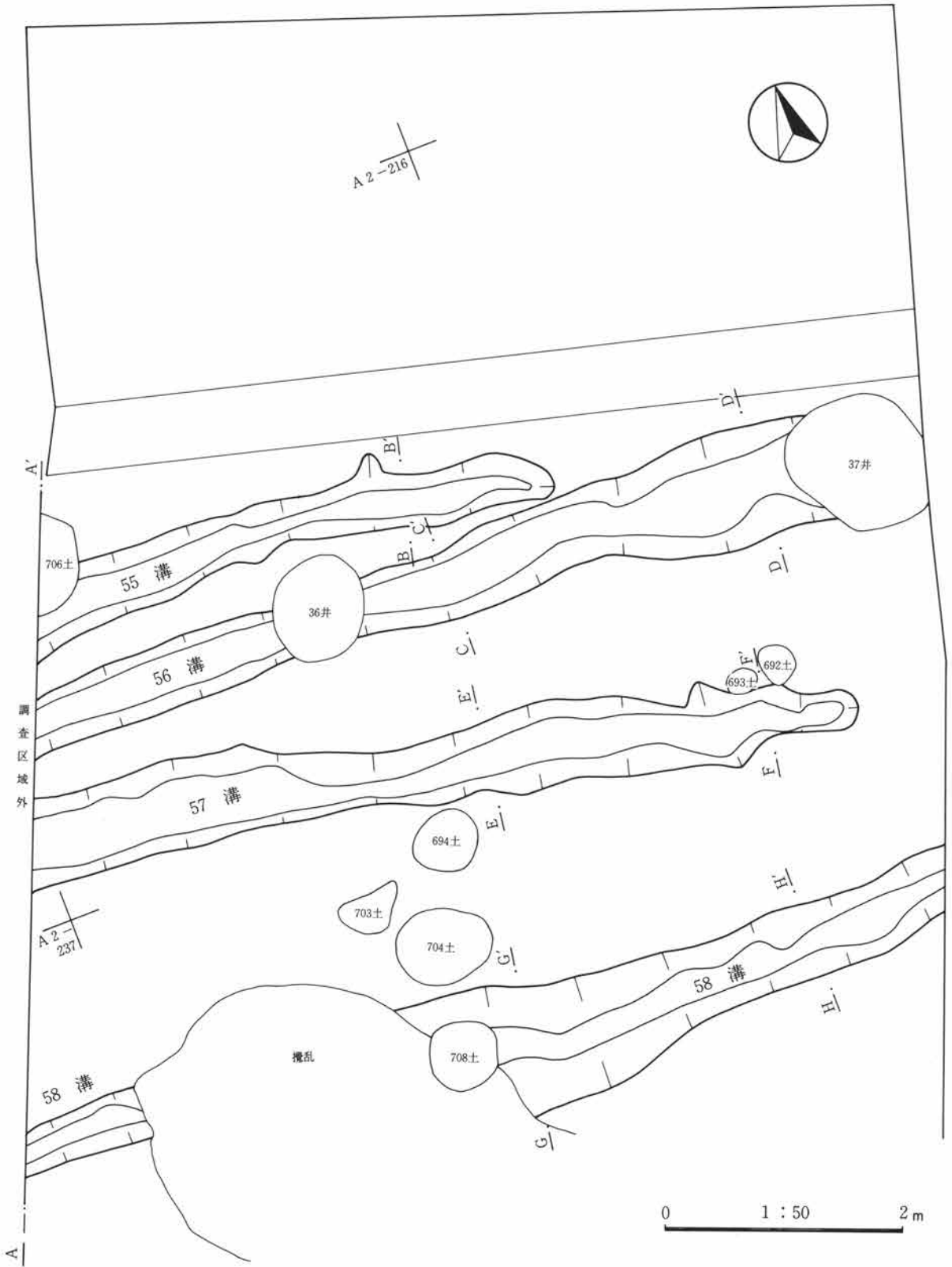


第134図 南東区溝平面・断面図(2)



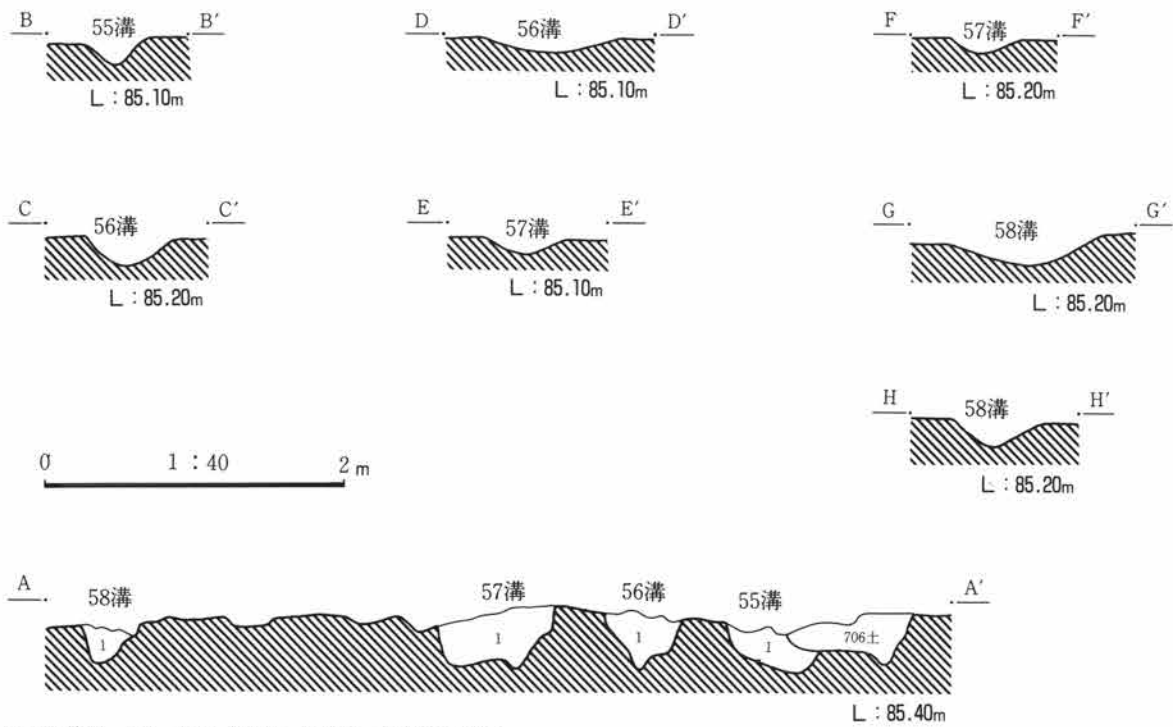
第135図 南東区溝平面・断面図(3)

A 2-215



第136図 南東区溝平面図(4)

第4章 調査遺構・遺物



55・58号溝 1層 褐色 砂質土 円礫3cm大の礫10%含む
 56・57号溝 1層 暗褐色 砂質土 円礫1cm大の礫10%含む

第137図 南東区溝断面図(4)

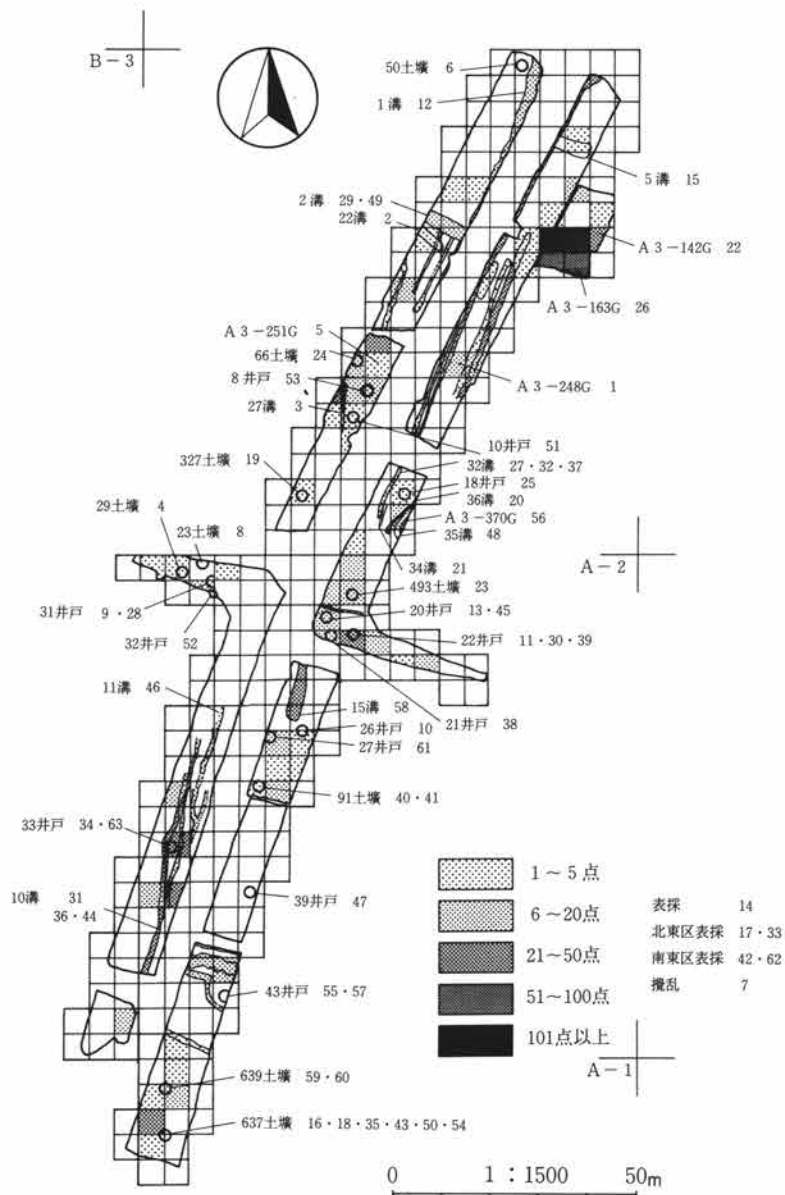
南東区溝

番号	長さm	巾cm	深度cm	主軸方位	出土遺物
7	(5.0)	210	20	N-74°-W	粉挽白・茶白・石搗鉢・窪み石・磨き石・五輪塔空輪 磁器染付皿(144図-2)・磨き石(171図-30)・砥石(174図-14) 磁器染付皿(144図-6)
8	(7.5)	256	17	N-75°-W	
15	(11.3)	280	101	N-13°-E	
47	(7.5)	(145)	28	N-81°-W	
48	(8.3)	220	15	N-71°-W	
49	(10.5)	209	27	N-5°-E	
50	(6.0)	108	9	N-75°-W	
51	(7.0)	55	26	N-71°-W	
52	(8.0)	102	45	N-65°-W	
53	(3.7)	87	24	N-76°-W	
54	(10.0)	93	15	N-34°-W	
55	(4.7)	53	22	N-83°-W	
56	(6.6)	100	17	N-85°-W	
57	(7.0)	72	10	N-79°-W	
58	(8.0)	100	30	N-88°-W	

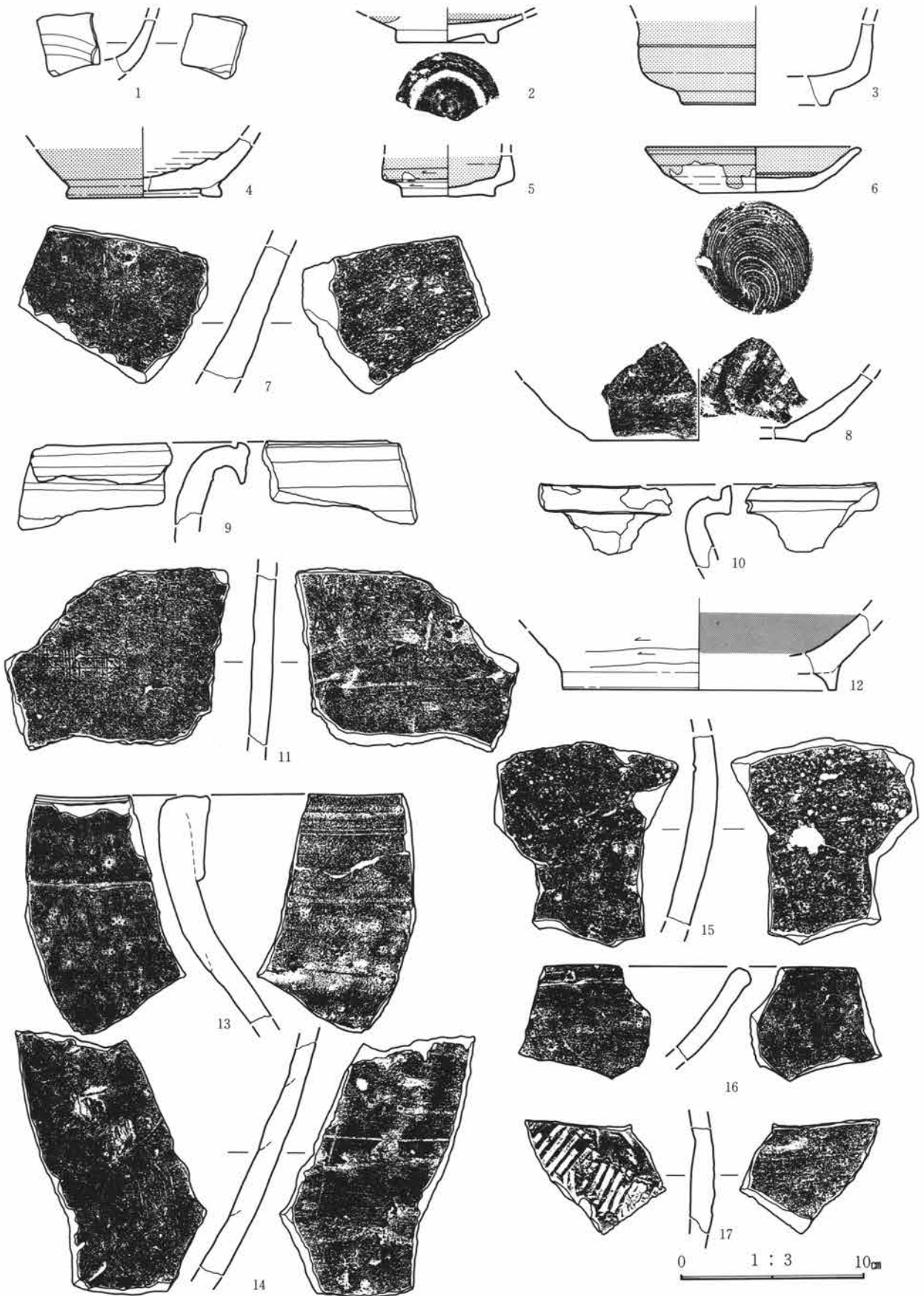
2. 遺物

a. 中世土器 (第139図～第142図)

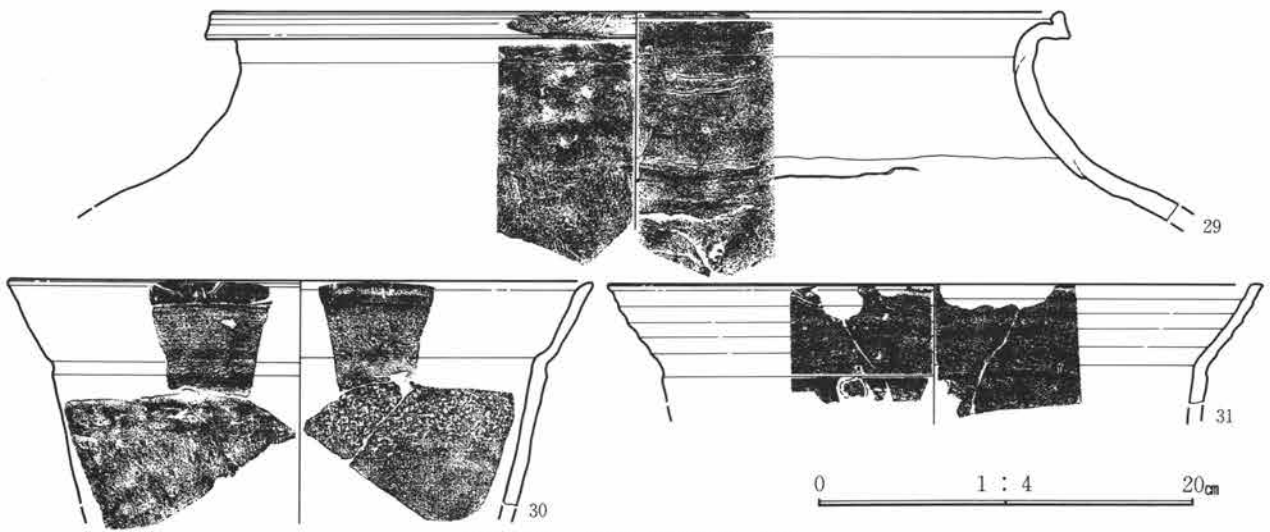
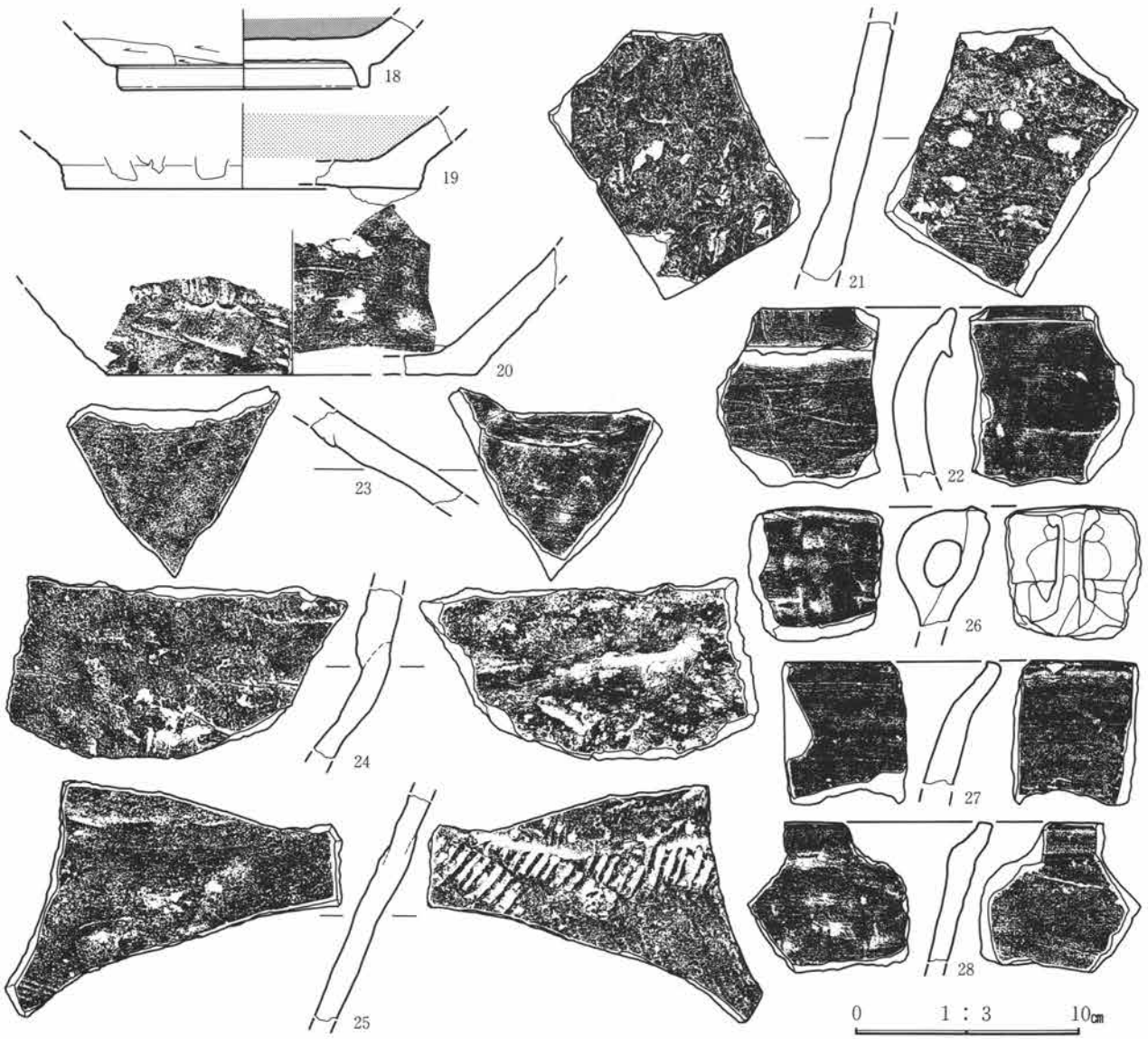
中国からの舶載品は竜泉窯系の青磁碗破片 (139図-1) が1点、白磁碗片 (139図-2) と青磁香炉片 (139図-3) が1点ずつの計3点がいずれも遺跡地の北部から出土している。外来の陶磁器類は美濃窯系・常滑系・知多窯系のものが数点出土している。在地窯のものは灰釉陶器・焼締陶器・軟質陶器が出土している。遺物の分布は遺跡全体にわたり認められるという、他の遺物に比べ特異な状況を示している。ただ、その集中出土箇所は北東部の拡張区を中心に出土した。この地点は草創期土器・埴輪等古墳時代遺物の集中出土箇所、中世においても遺物の出土点数は400点を超え、他を圧した出土量を誇るが、遺構としては殆ど確認できず、すでに畠による耕作で攪乱されてしまった可能性が高い。



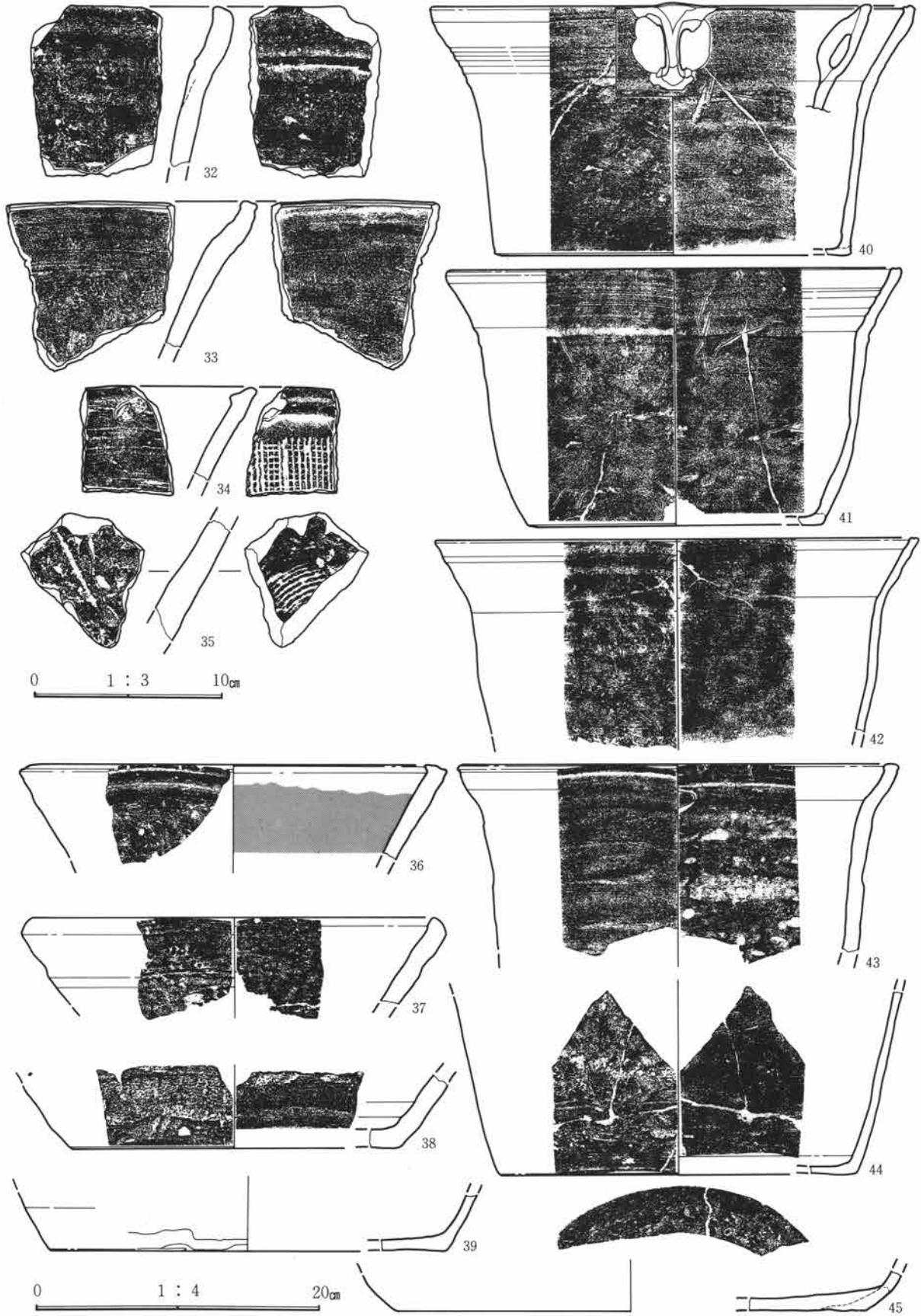
第138図 中世土器分布図



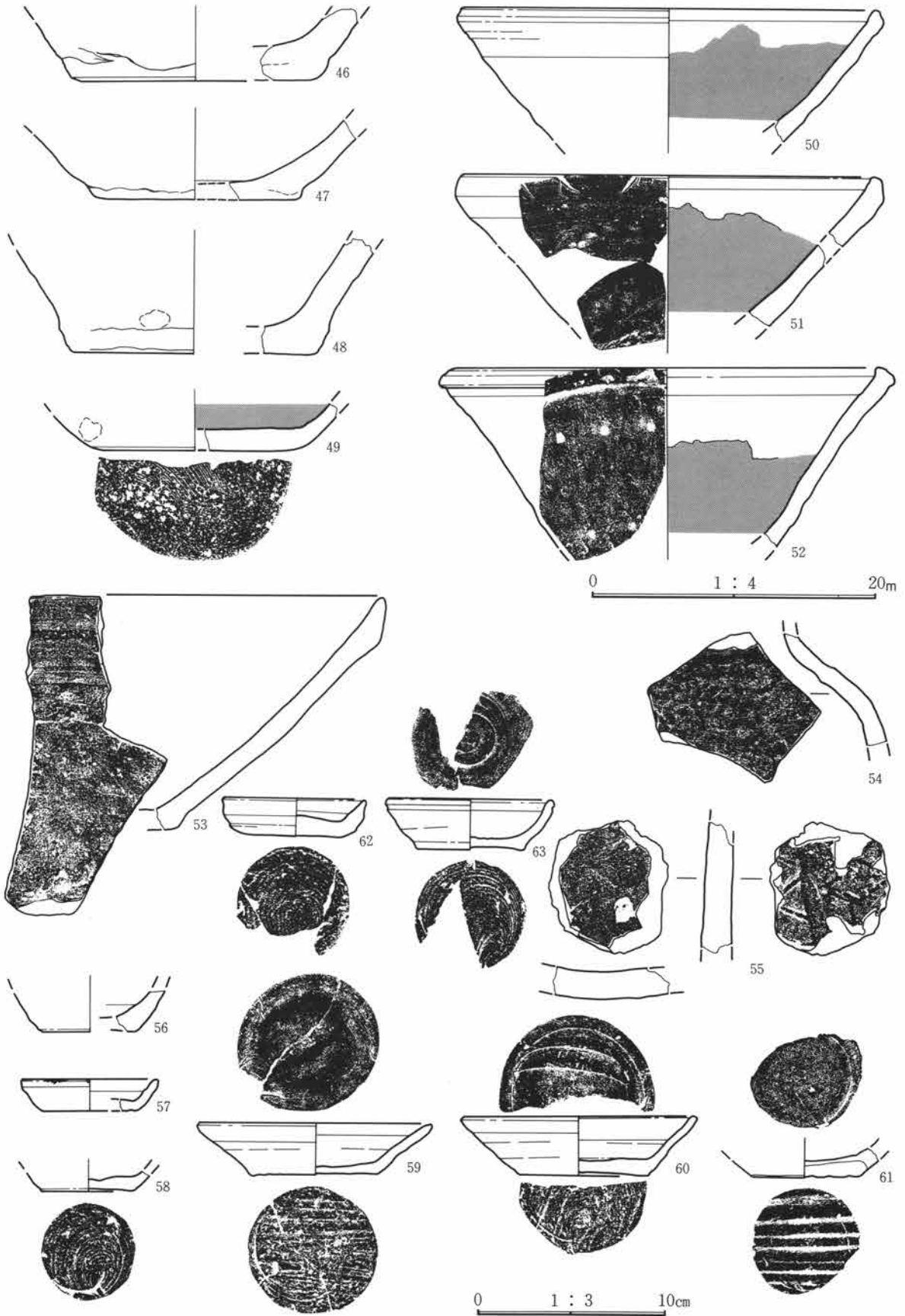
第139図 中世土器実測図(1)



第140図 中世土器実測図(2)



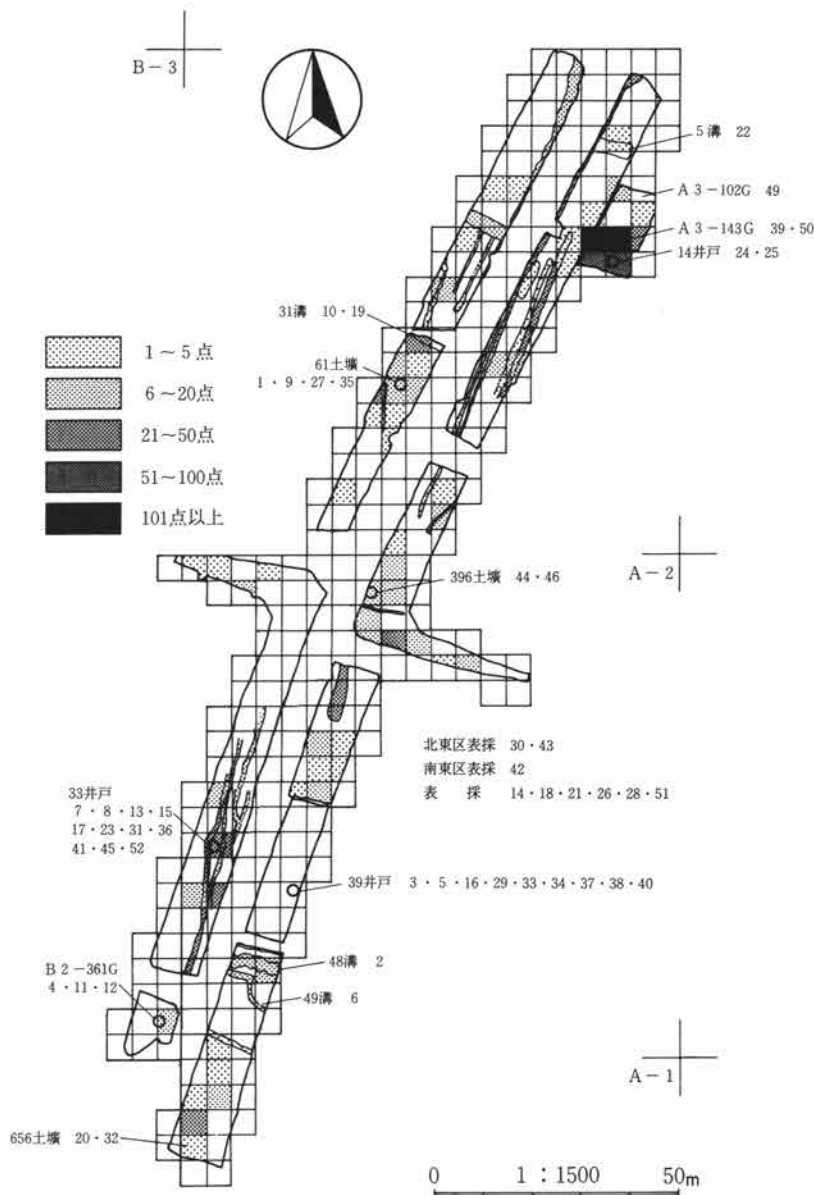
第141図 中世土器実測図(3)



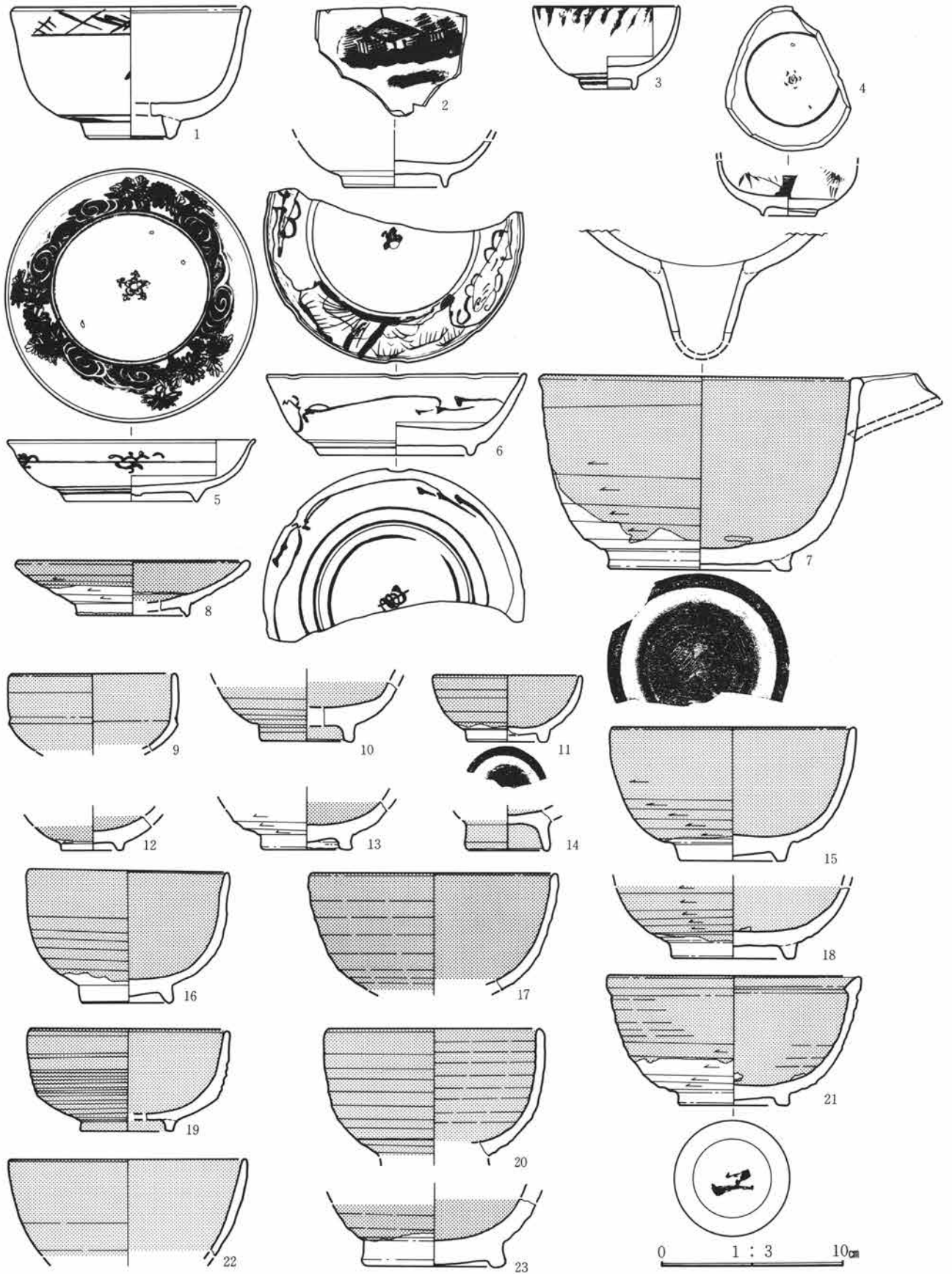
第142図 中世土器実測図(4)

b. 近世土器 (第144図～第147図)

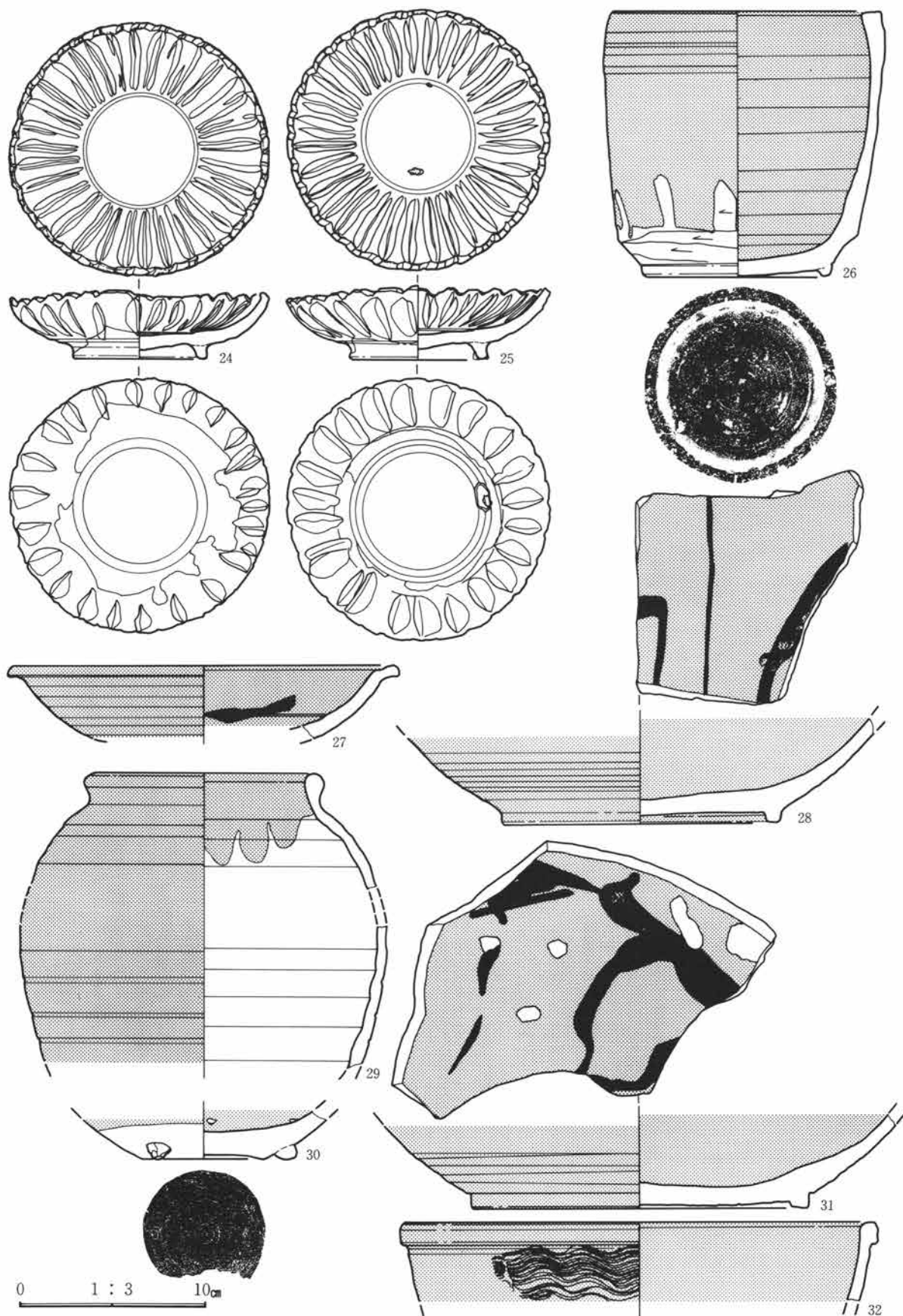
近世の陶磁器は大きく外来系は肥前窯系と瀬戸・美濃窯系に分かれて出土しており、一部信楽系の焼締陶器が入っている。中世土器と同じように遺跡地全体から万遍なく出土している。その中で遺物集中出土地区はやはり、縄文草創期・古墳時代土器・埴輪、中世土器が集中出土した北東部の拡張区である。併せて400点以上の遺物が出土している。しかし、中世と同じように遺構は殆ど確認できず、畠の耕作により攪乱されてしまったものと考えられる。在地製の土器は軟質陶器を中心に出土している。



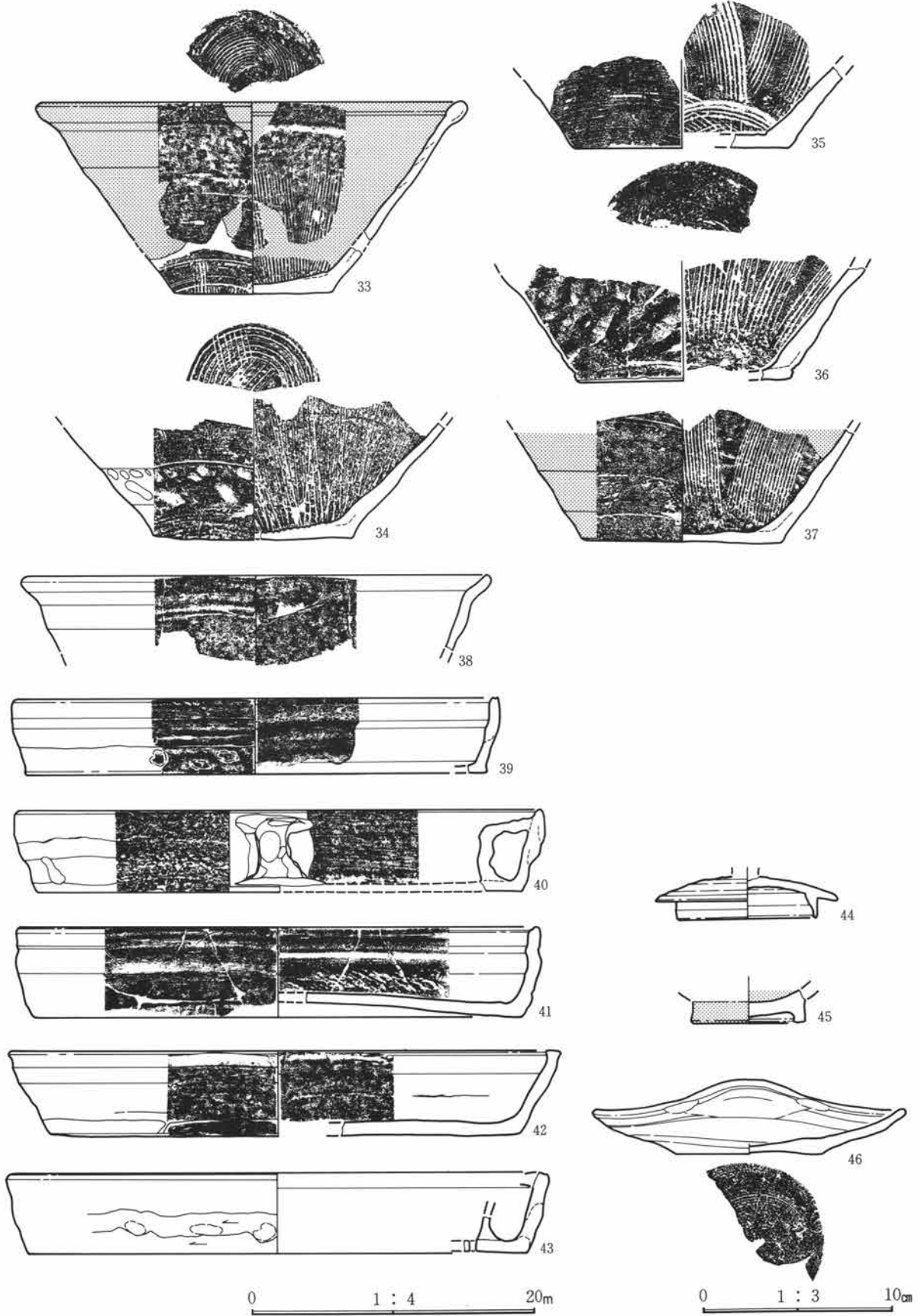
第143図 近世土器分布図



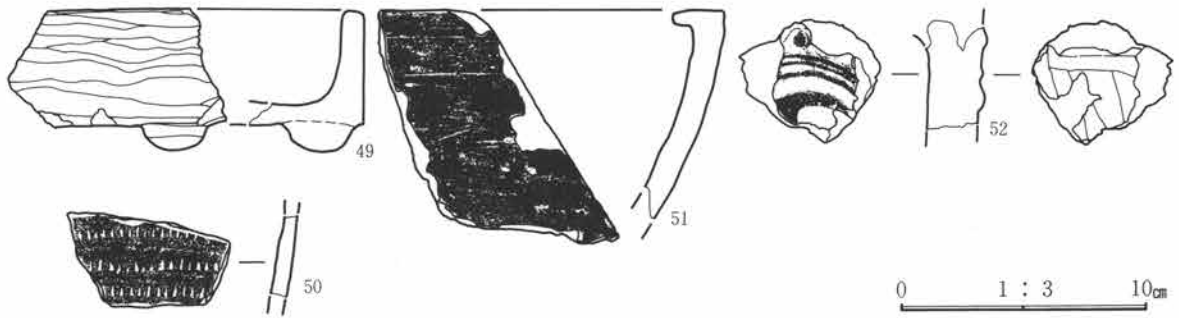
第144図 近世土器実測図(1)



第145図 近世土器実測図(2)

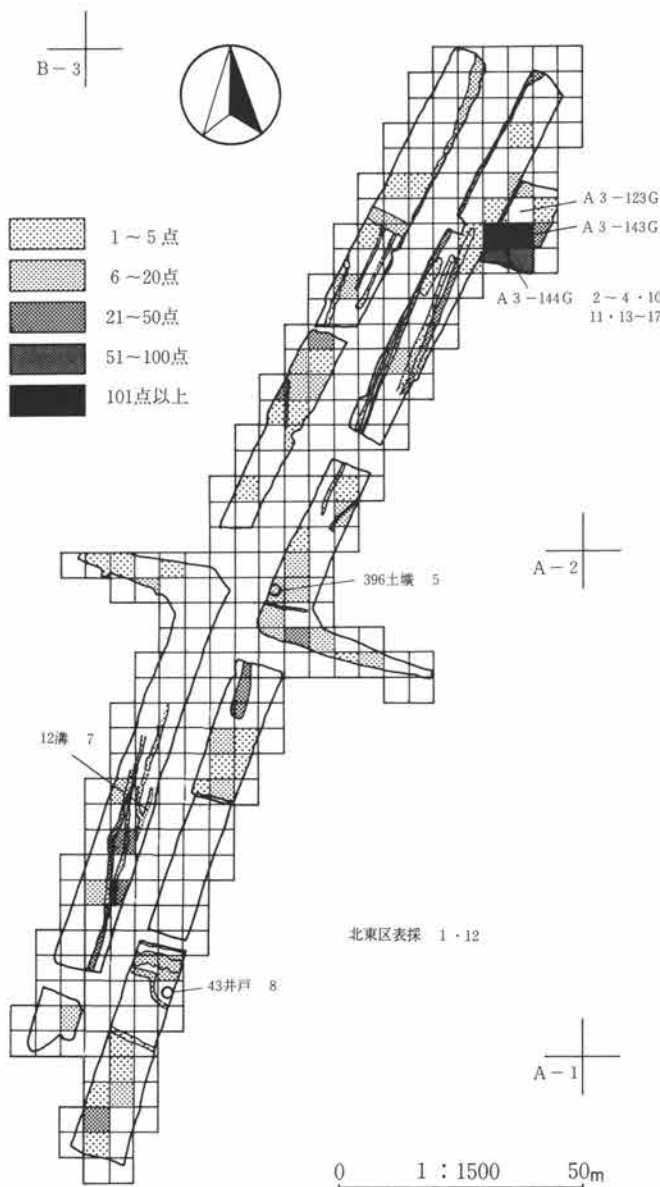


第146図 近世土器実測図(3)



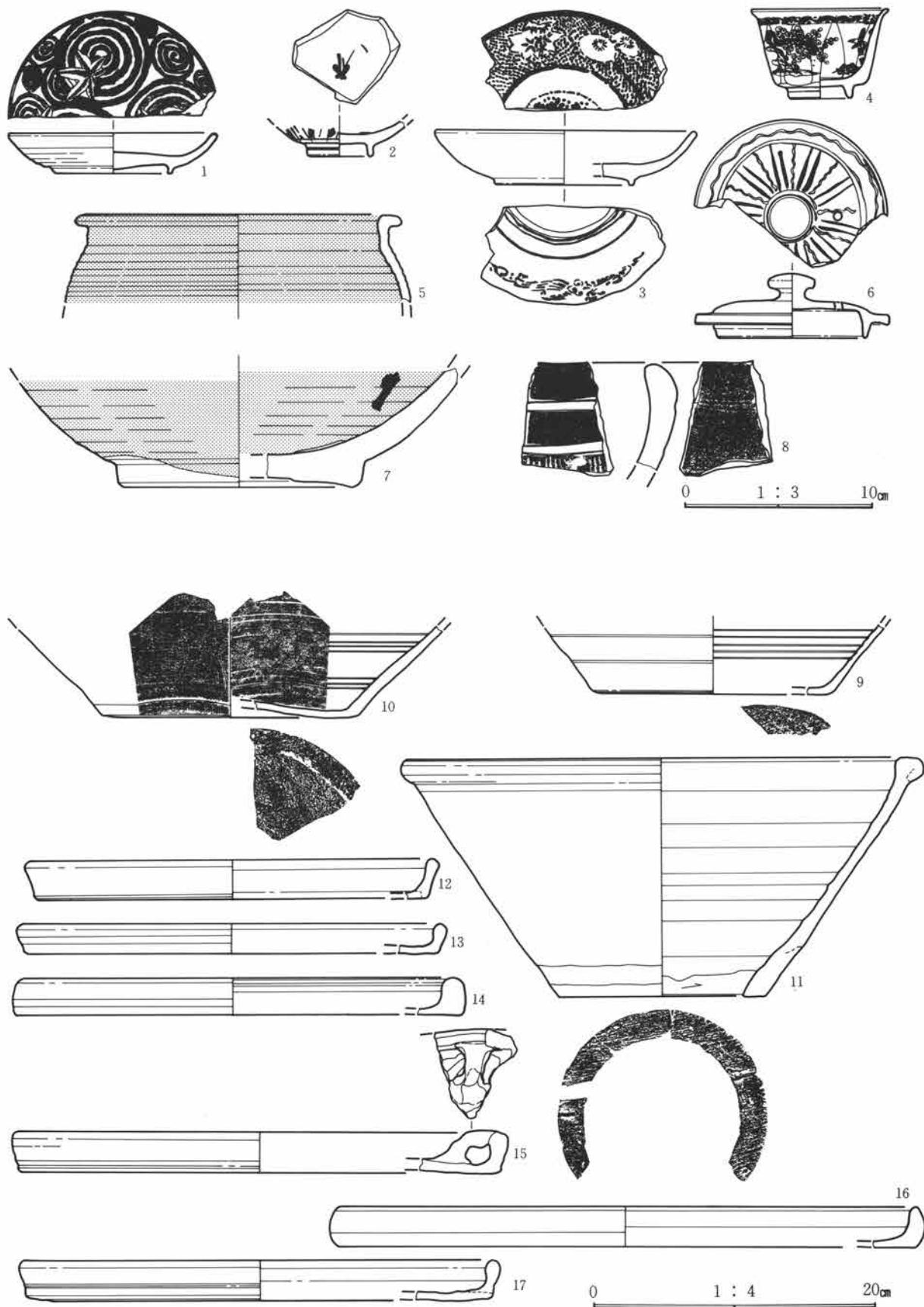
第147図 近世土器実測図(4)

c. 近代土器 (第149図)



近代土器もやはり出土は遺跡地全体から認められている。しかし集中出土地区は中・近世土器と同じように北東区の拡張区にあり、やはり300点以上の出土をみた。外来系の磁器は瀬戸・美濃系に限定されている。また在地産の陶器・軟質陶器は主に鍋や焙烙が中心に出土している。遺物の分布からすれば近代以降の遺構は遺跡地全般にわたったものと考えて良いだろう。

第148図 近代土器分布図



第149図 近代土器実測図

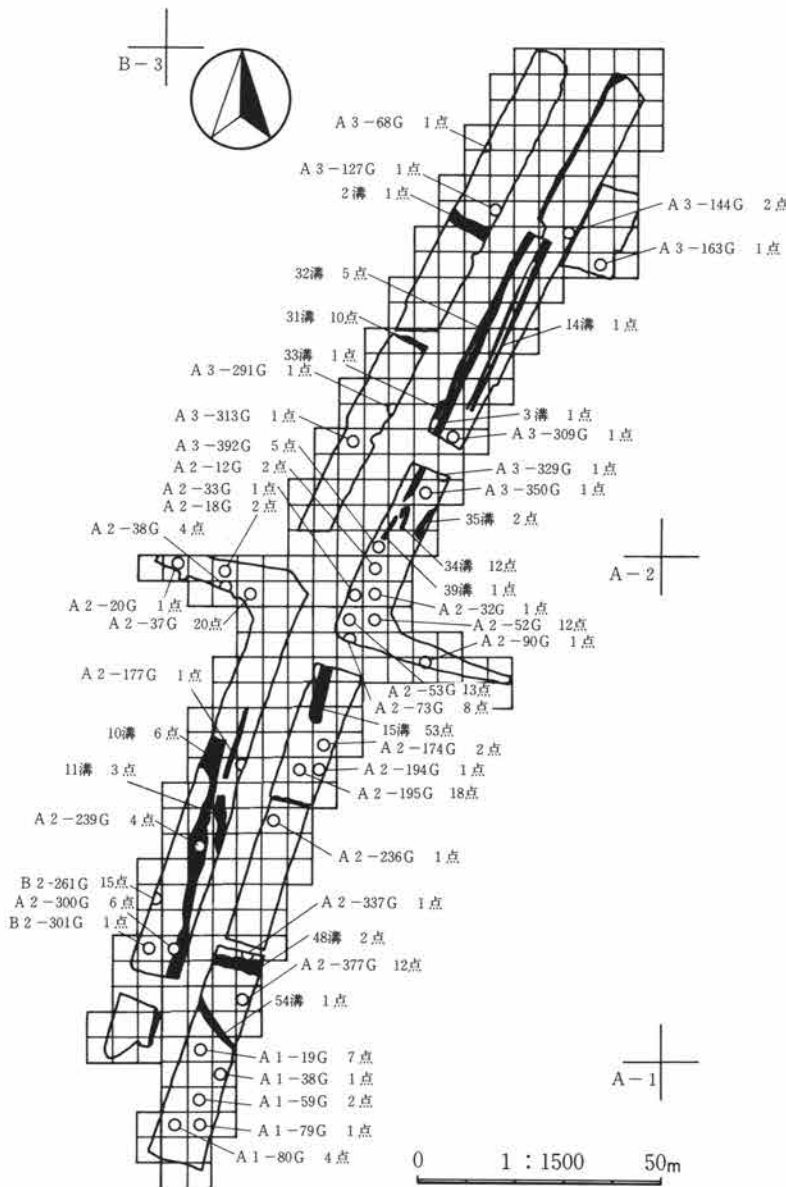
d. 中近世の石製品

石製品は大量の出土が認められ、中でも未製品の量がかなりの部分を占め、ここで石製品の製作を行っていた可能性が高い。生産用具・宗教遺物共に製作されていたと考えられる。当遺跡での石製品の出土比率を見ると、最も多いのは、五輪塔類である。ただし、五輪塔に関しては、複数の部分による構造物の為、相対的に出土量は増えると考えられ、粉挽臼・窪み石・磨き石がかなりの出土量を占め、それに続き石播鉢・砥石が出土する。茶臼は他の遺跡同様少ないが、それでも他の石製品との比率で見ると、他遺跡に比べ出土率は高い。

石製品はその出土地区は、全体に遺跡の南側に集中しており、特に多いのは、北東区南部から南東区にかけてである。また南西部にもある程度の集中が認められる。出土遺構として最も多いのは、井戸からの出土である。南部地区の主要な井戸にはこれら石製品がほとんど出土している。次に溝からの出土例が多く、特に南西区第15号溝からは大量の石製品が出土した。この溝に関しては、南西区の項で詳述するが、五輪塔・粉挽臼・

茶臼・磨き石が特に多く出土し、大形品は溝の壁を護岸するように積み上げているなど特殊な状況を示している。

石製品は完形品はほとんど出土せず、製作の途中での欠損・失敗に伴う、破片がその殆どであり、使い込んだ痕跡のある物も欠損し、破片となっている。その中でも特に注意すべきは、宗教遺物である五輪塔の未製品類と、生活用具としての粉挽臼・茶臼・石播鉢・凹石・砥石の未製品が混じりあった状況で出土していることである。つまり、機能の異なる石製品が極めて近い関係にある工人集団により製作された可能性が高いことが想定されるのである。また、石製品の製作に使用したと考えられる、磨き石・砥石類、特に磨き石の大量出土が認められ、このことも当遺跡が石製品の製作を行った遺跡であることを示す可能性が高いのである。

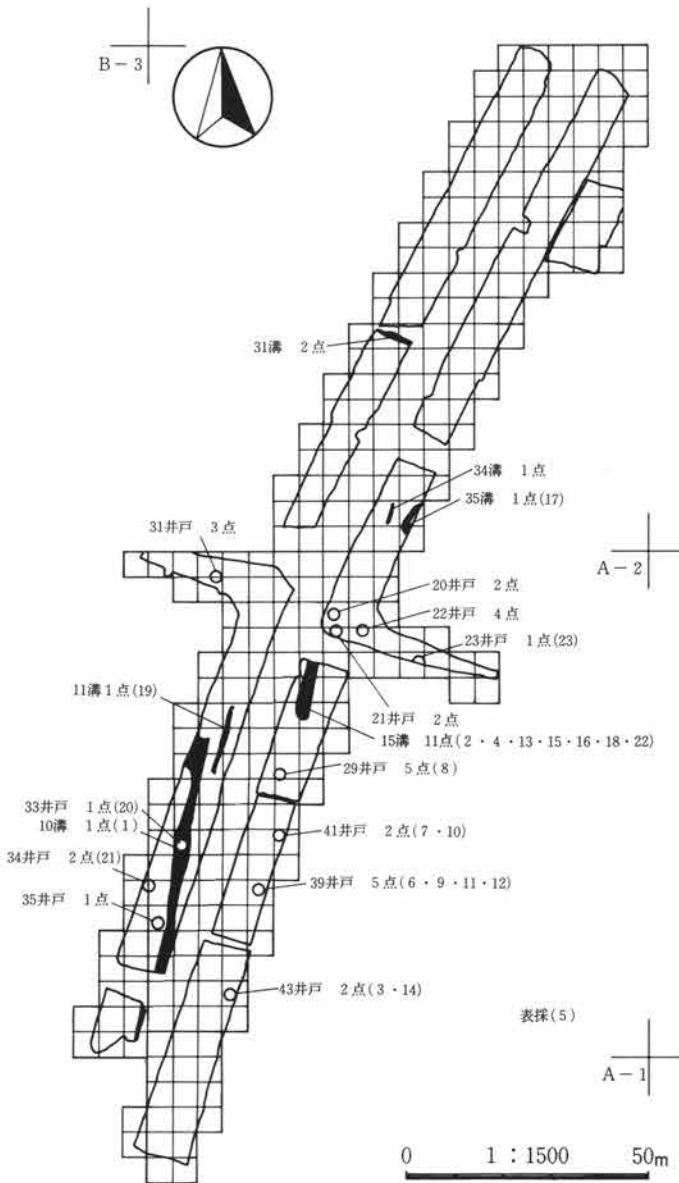


第150図 中近世石器分布図

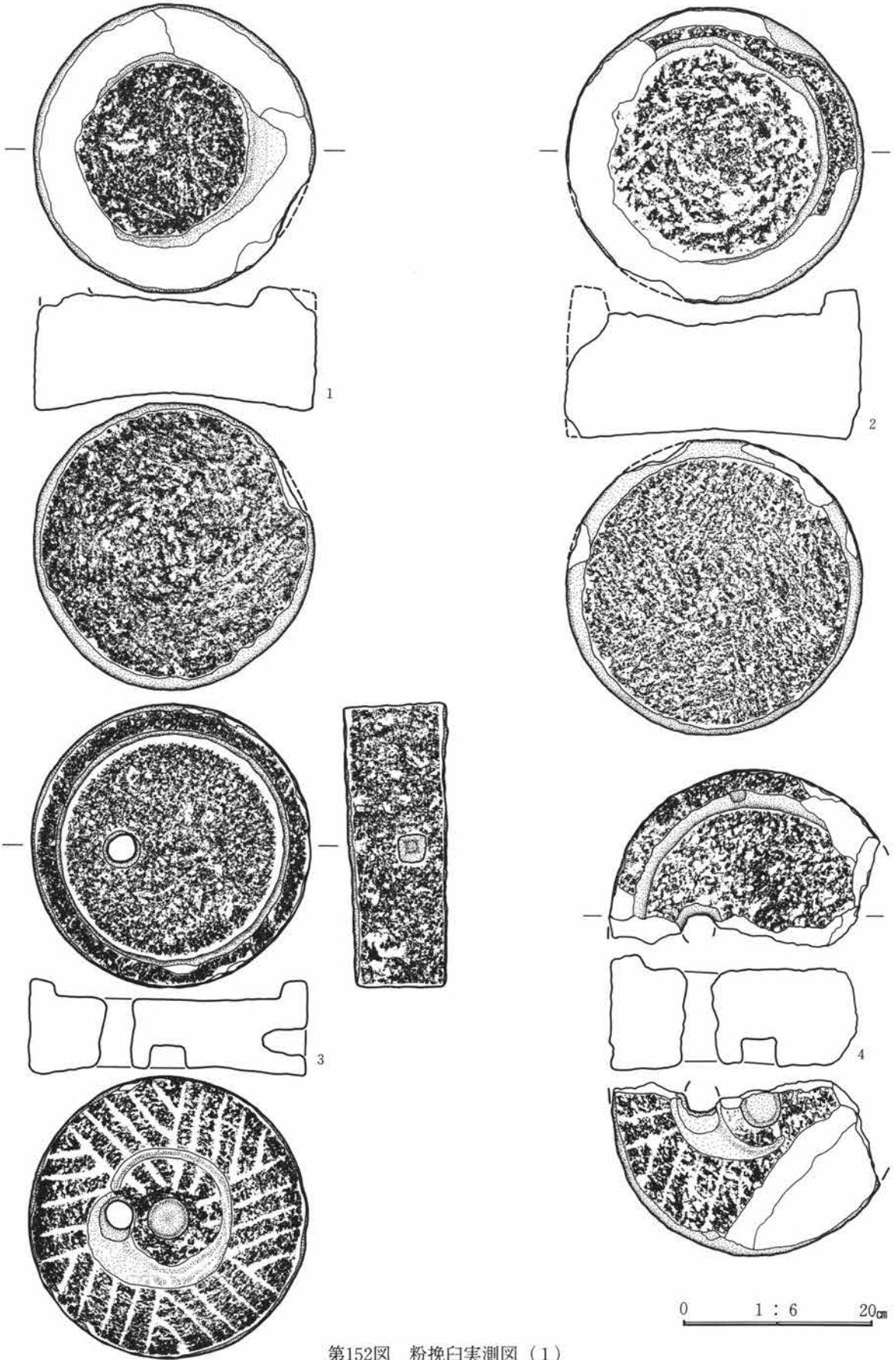
1. 粉挽臼・石臼未製品 (第152図～第156図)

粉挽臼と臼の種別のはっきりしない未製品群をまとめた。粉挽臼に関しては上臼と下臼がそれぞれ出土し、製作途上の未製品(1・2)も一部出土している。図面には載せていないが、小片には未製品類の破片がかなり認められる。粉挽臼の場合、製品として使用后、破損して投棄された状況のものが目の摩耗度から見ても多く認められる。未製品に関しては、茶臼か粉挽臼かその区別のつかないものも一応含めている。直径によりかなり幅があり、大きさにおいて多様性を示す。石臼の未製品と共に、再加工品として他の用途に利用するものとの2者がある。

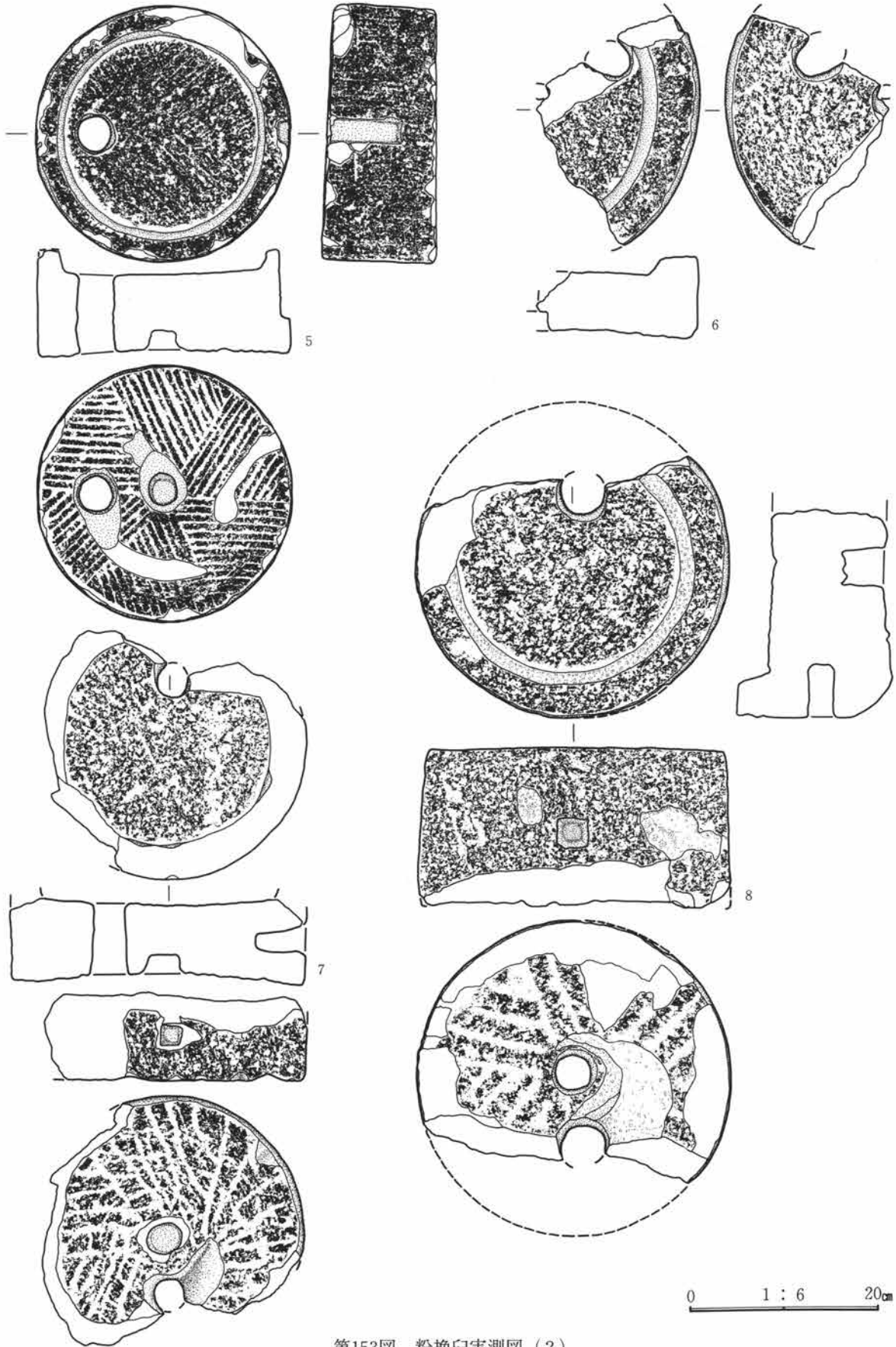
出土位置に関しても、南東部の特に井戸からの出土例が多く、溝からの出土がその次に位置する。集中して出土したのは、29・39号井戸(5点)、22号井戸(4点)と15号溝(11点)が特に集中して出土している。粉挽臼は6分割の例が圧倒的に多く、それ以外としては大形品として8分割のものが1例あるのみである。その点でこの製作地では粉挽臼に関しては6分割のものを集中して製作していた可能性が高い。



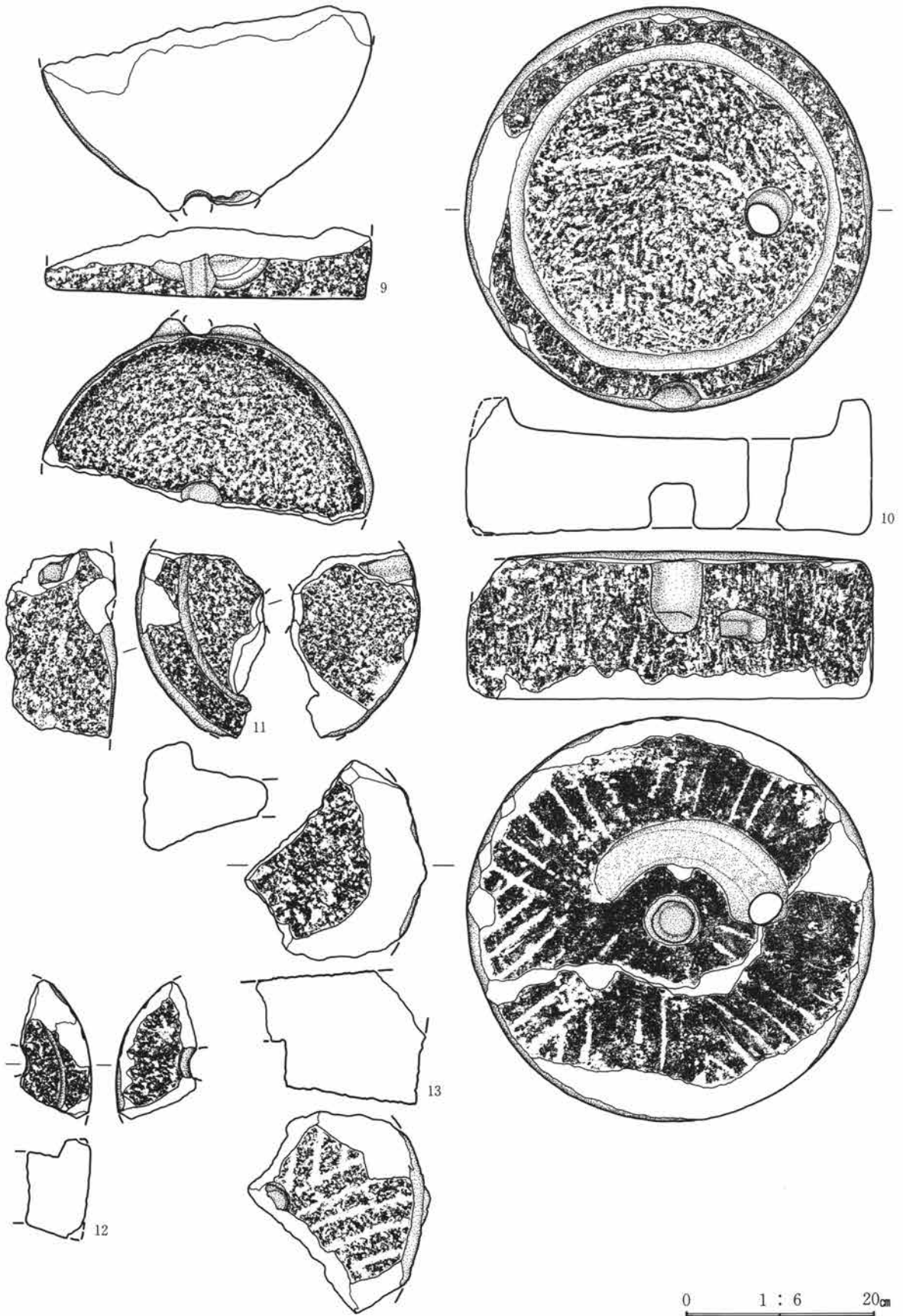
第151図 粉挽臼分布図



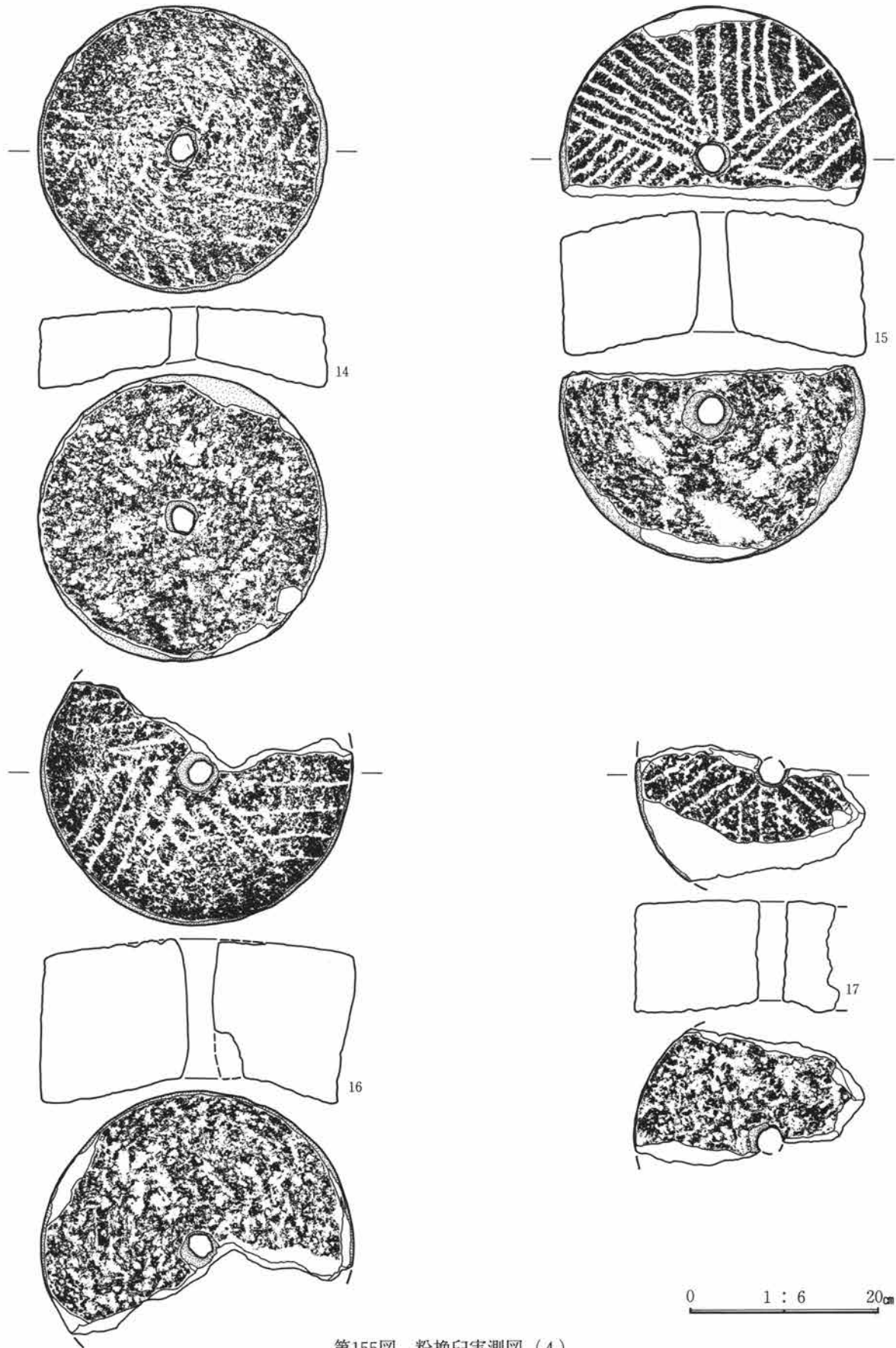
第152図 粉挽白実測図(1)



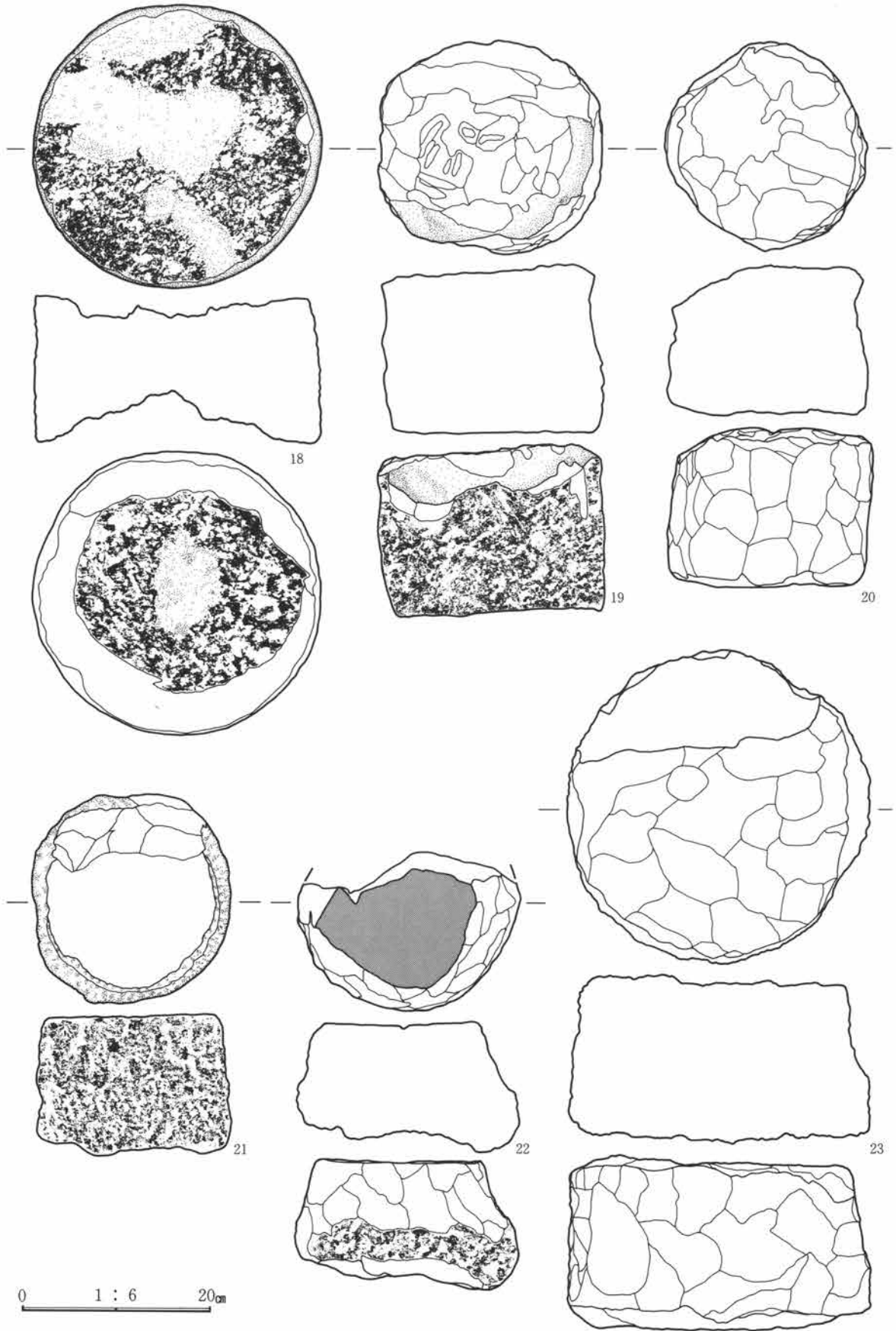
第153図 粉挽白実測図(2)



第154図 粉挽白実測図(3)



第155図 粉挽白実測図(4)



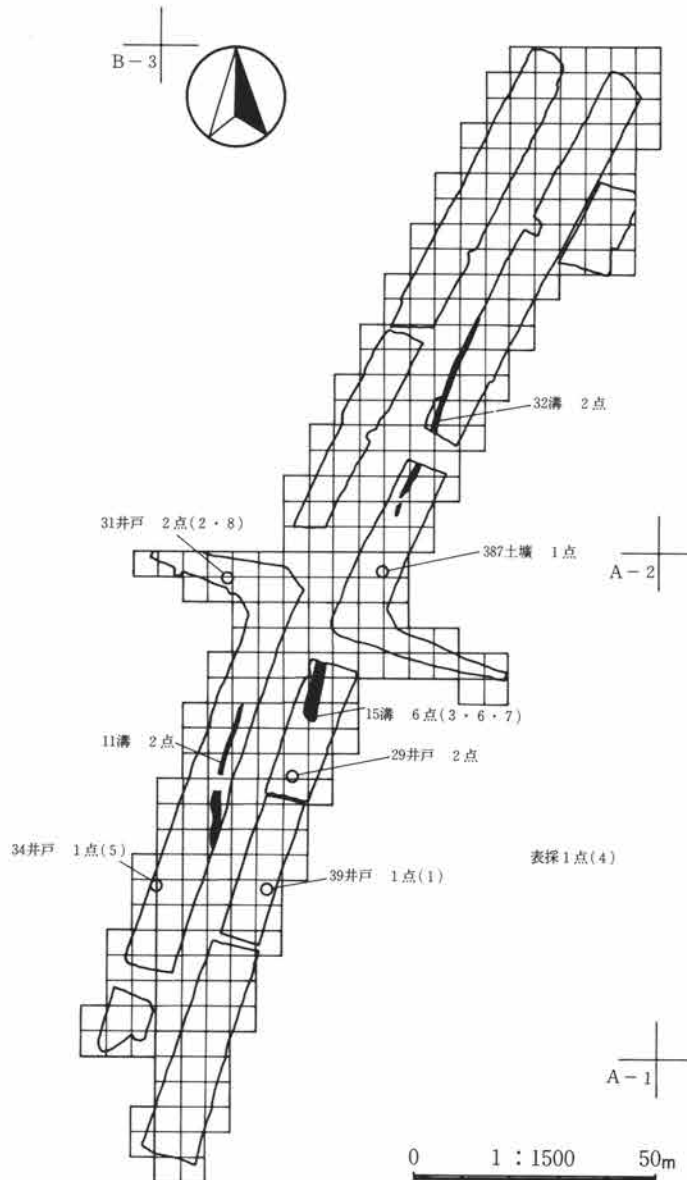
第156図 石臼未製品実測図

2. 茶 臼 (第158・159図)

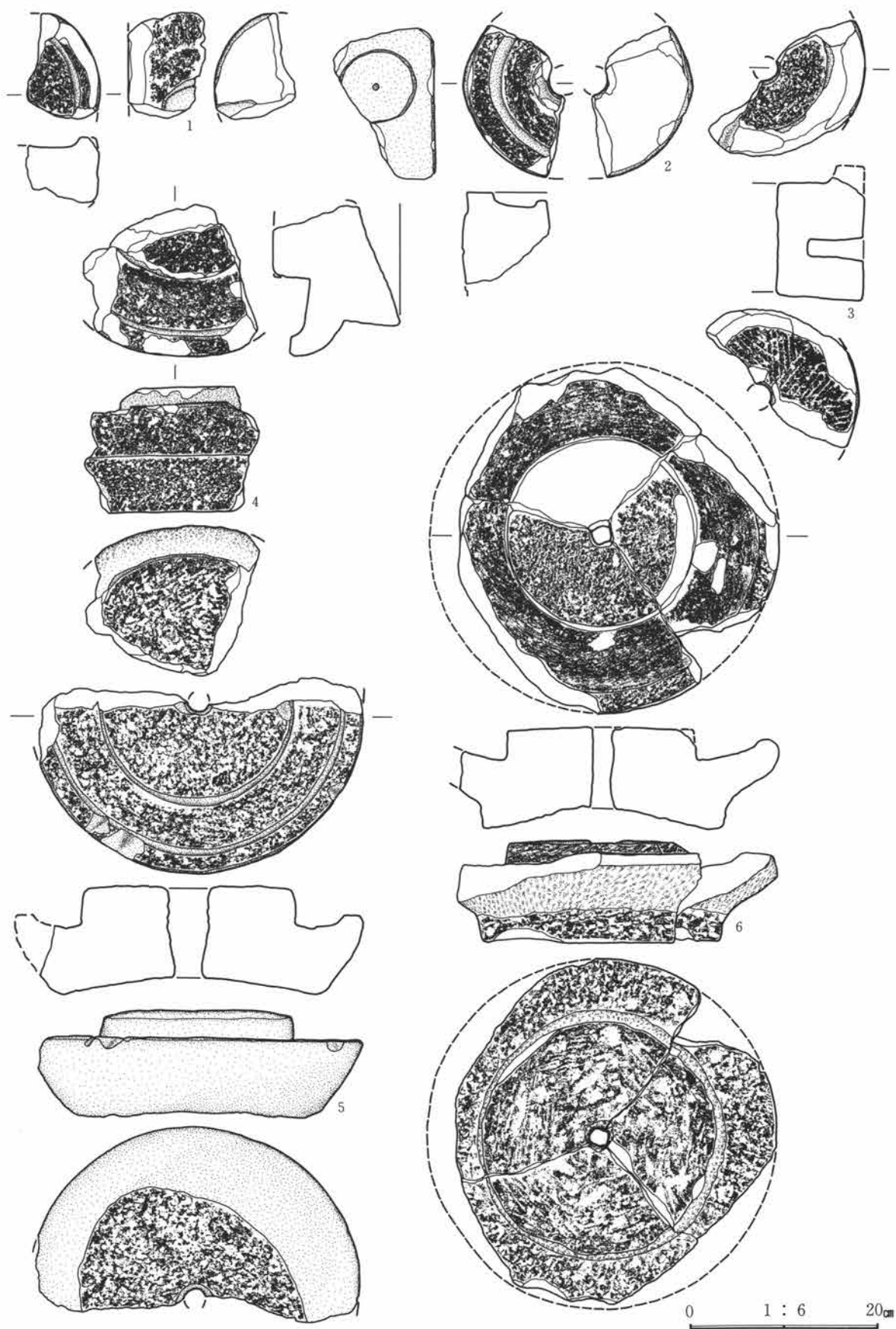
茶臼は上臼・下臼共に出土しており、下臼の未製品が2点、大小2種類のもの(7・8)が認められる。それ以外にも、かなり加工した段階での未製品が1点(6)ある。また加工は比較的丁寧であるも、茶臼として実用されたかどうか不明のもの(1)もある。明らかに使用の痕跡があり、それらが、欠損してのものもあり、粉挽臼と同様の状況を示す。

出土位置はやはり遺跡の南部に集中しており、井戸からの出土が多いが特定の井戸に集中して出土するということはない。しかし、15号溝では、粉挽臼の場合と同じく6個という多数の茶臼が出土している。この溝の特殊性が伺える。

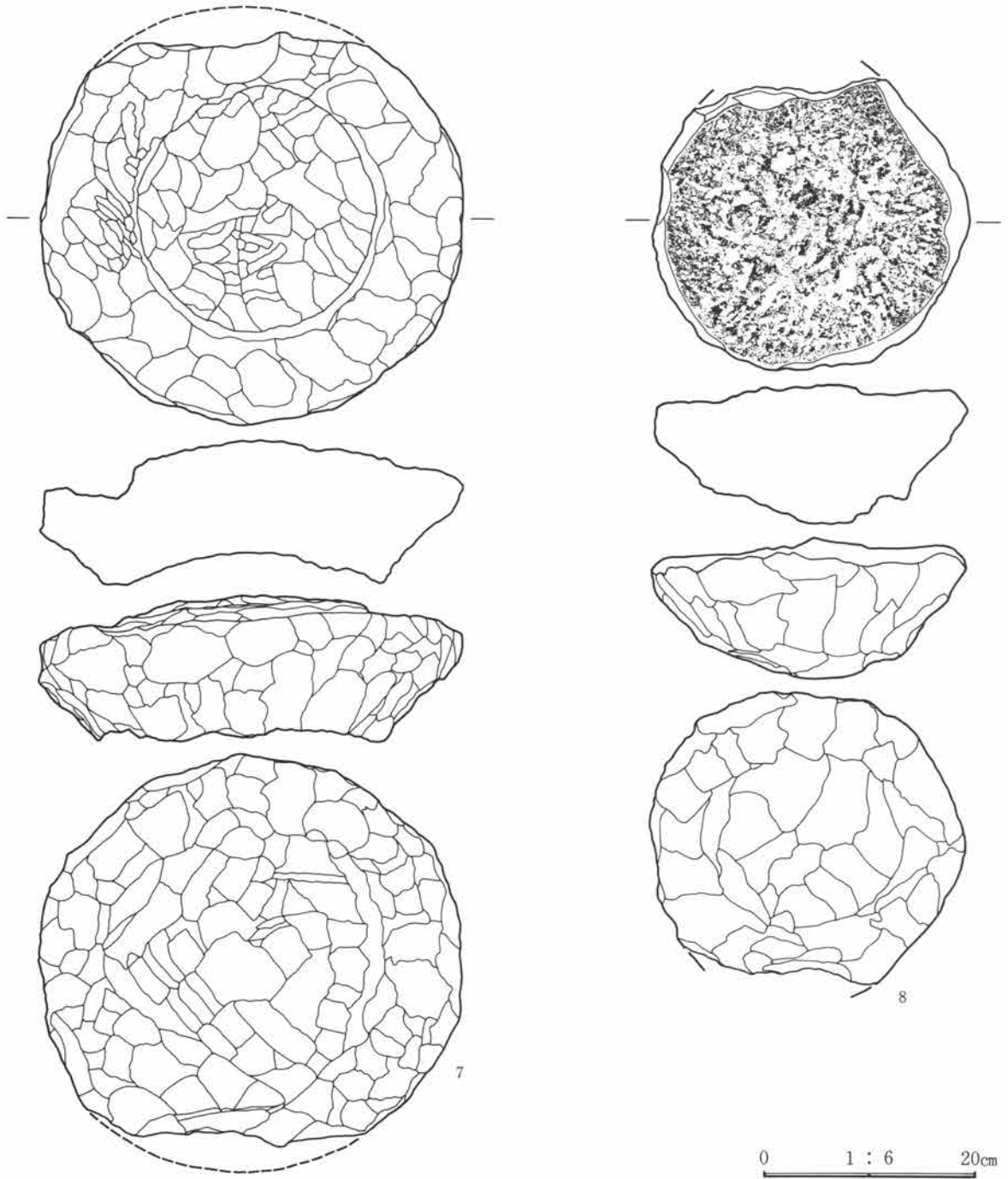
いずれにせよ、使用品の欠損品と未製品の破損及び製作途中での放棄が認められ、製作地・補修地としての在り方を示す可能性が高いものと言えよう。



第157図 茶臼分布図



第158図 茶白実測図(1)



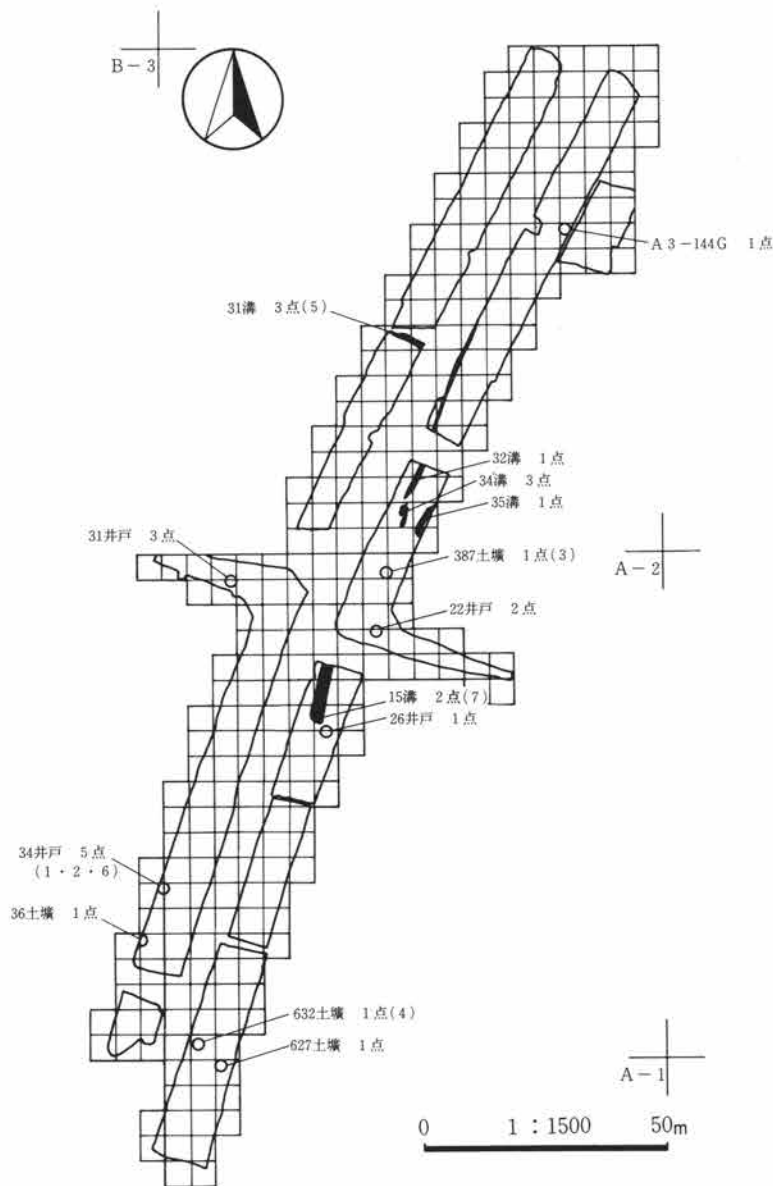
第159図 茶白実測図(2)

3. 石搗鉢（第161図）

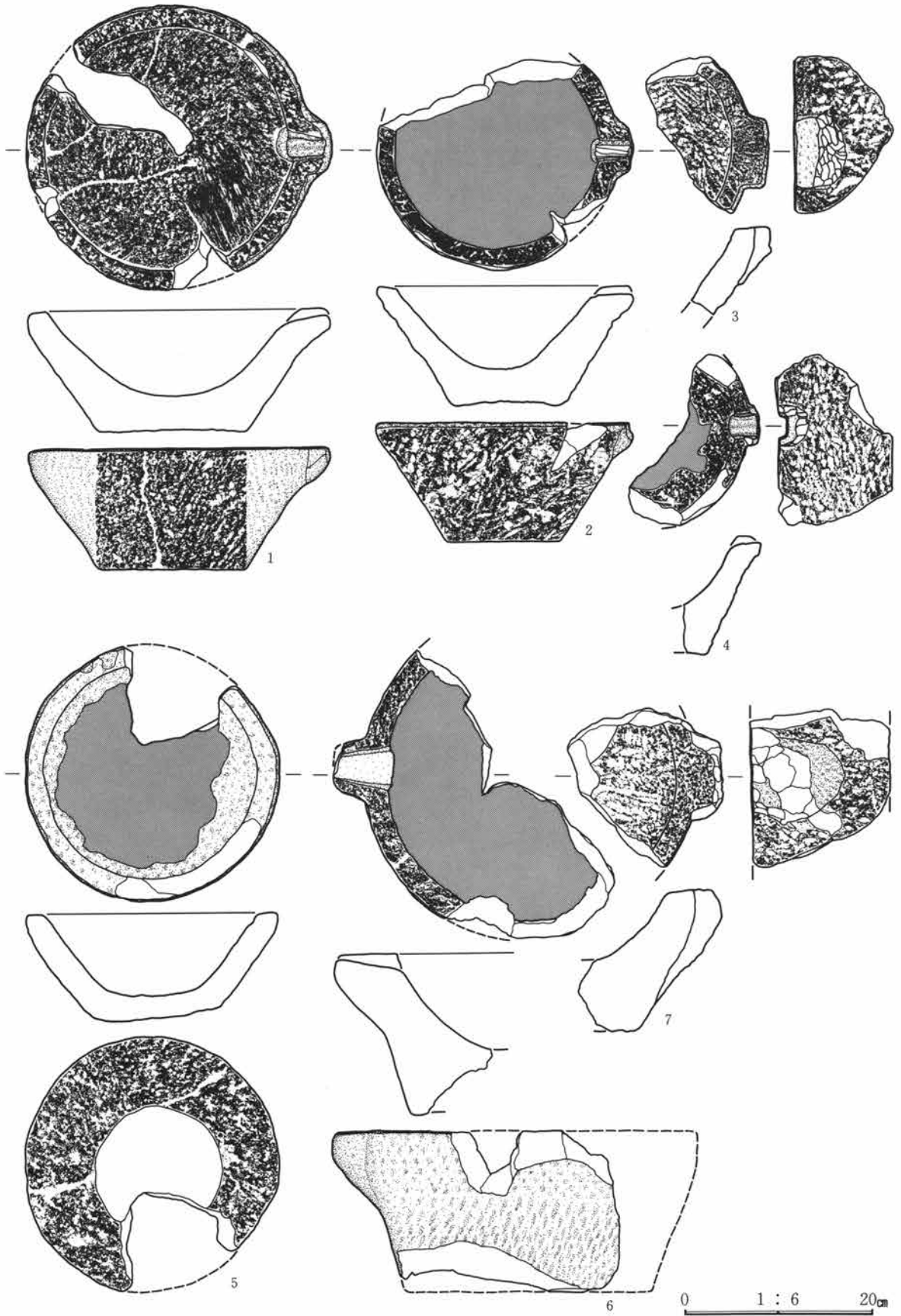
未製品で、一部欠損して破棄したもの（1・3・7）があり、その中でも3・7は片口部の流し部が作出されていない未製品でも製作の初期段階のものである。1は最終段階での破損と思われる。それら以外は明らかな使用痕跡が認められるものであるが、スリ面が一部のみで全体にわたらず、使用頻度の低いもの（4・5）とスリ面が全面にわたり、使用頻度の高いもの（2・6）がある。

出土地点はやはり遺跡の南部が多く、集中して出土しており、井戸・土壙よりの出土が多い。溝からもある程度出土が認められるが、白類と異なり、特定の遺構に集中して出土することはない。

石搗鉢の形態としては、片口を有するものがほとんどで1点、5においては、欠損のため片口部の存在が確定できないものがある。形態としては県内の他遺跡のものと比較して片口部の存在が特に目立ち、ある程度の規格性を有しており、当遺跡で製作した可能性が認められる。



第160図 石搗鉢出土分布図



第161図 石搗鉢実測図

4. 窪み石（第163図～第167図）

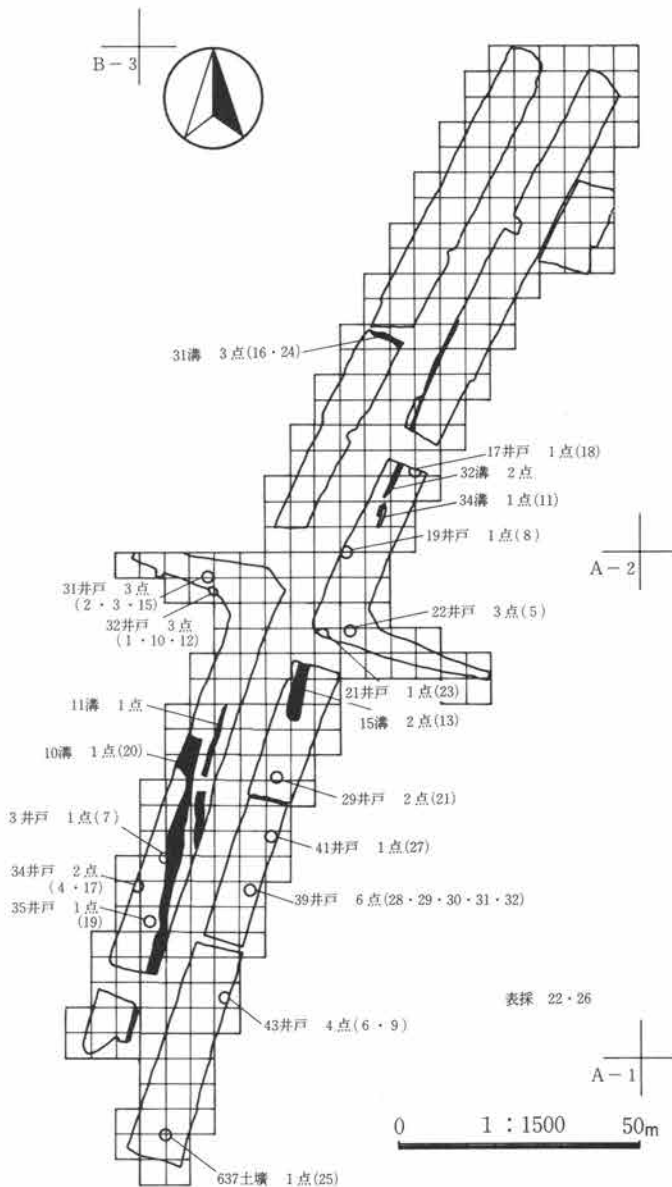
当遺跡では窪み石の出土例が多く認められ、合計31個出土している。窪み石の法量は大小様々であるが、10～15cmの間にはほぼ集中し、一部大形のものが認められ20cmを超えたもの（31・32）がある。窪み石は、ほとんどが完形品で一部にのみ欠損したものが認められる。窪み石は基本的に礫の片面中央部に窪み部を有するものが中心をしめるが、表裏両面にあるものや、敲打痕を側面や窪み部周辺に持つものなどもあり、多様性がある。また、敲打の後、窪み部全体あるいはその一部にのみ、擦痕を有するものがあり、このスレの有無及びその範囲により使用頻度や使用法の相違を示している可能性が高い。基本的に小ぶりのものが多く、石質も粗粒安山岩質のやや硬質のものがほとんどで、極く一部のみ軽石製品のもの（22）がある。座りは必ずしも安定し

ているものばかりでなく、使用する際の設置の仕方と関係があるのだろう。

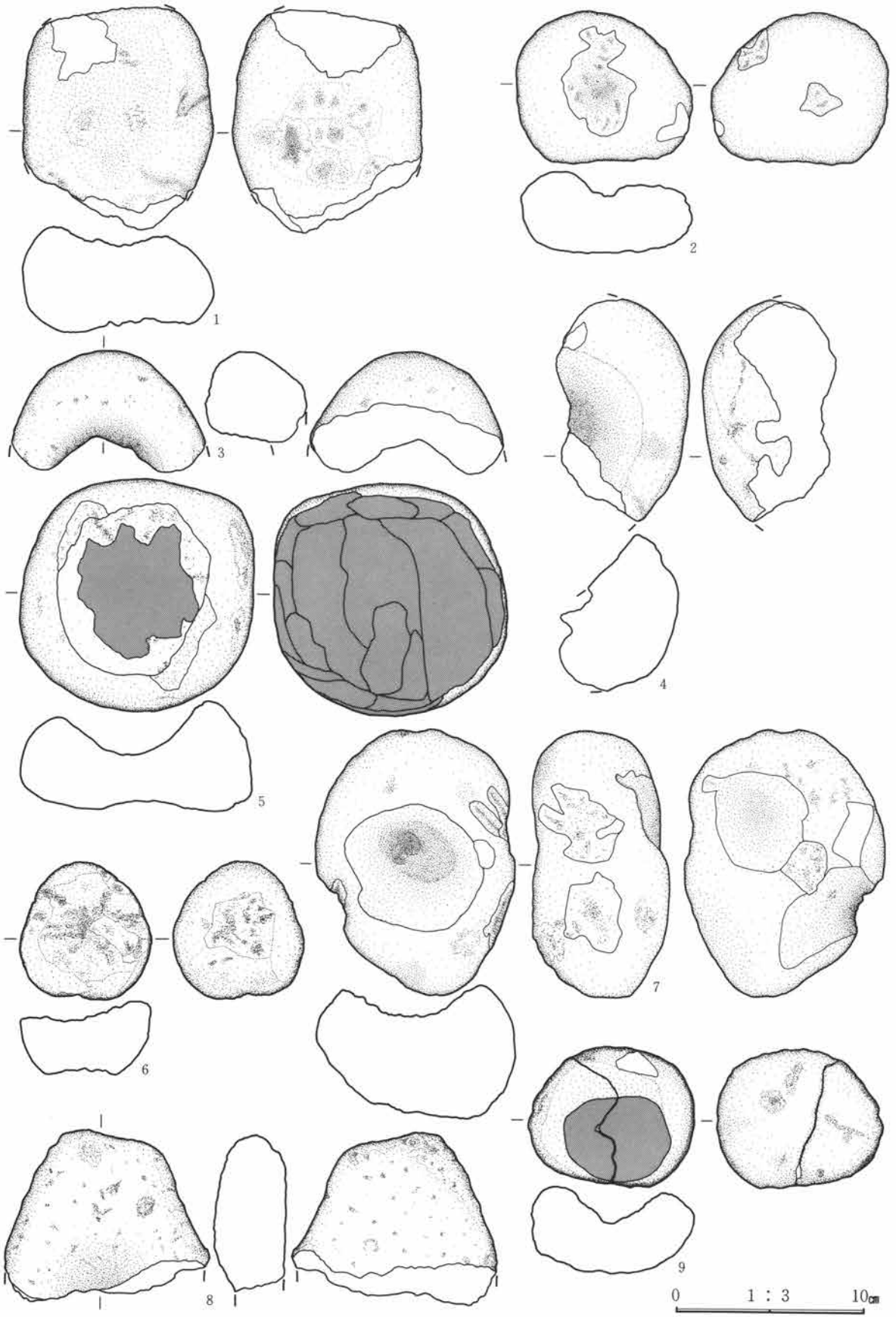
窪み石の出土は他の石製品同様南地区に多く、遺構の種類としては井戸がやはり多く、他に土塋・溝において少量出土する。39・43号井戸よりそれぞれ6点・4点出土し、22・31号井戸よりは3点ずつ出土した。

窪み石の具体的な用途であるが、全体に小ぶりのものが多く、窪み部があまり小さくなく、一定の範囲内に納まる。それほど使用頻度が高いと思われるものが無く、表裏両面やその周辺部にまで敲打痕が認められるものがあることなどから、随時、使用する際に適当な石を選び、敲打により窪み部をつくり、その窪み部に何らかの物質を細かく破碎する作業を行うものと考えられる。その結果として使用頻度の高いものには擦痕が残り、スレ面が認められるものと思われる。他に、磨きの結果としてのスレ面を窪み部以外の裏面や側面に持つものがあり、これに関しては後述の磨き石としての再利用品とも考えられる。

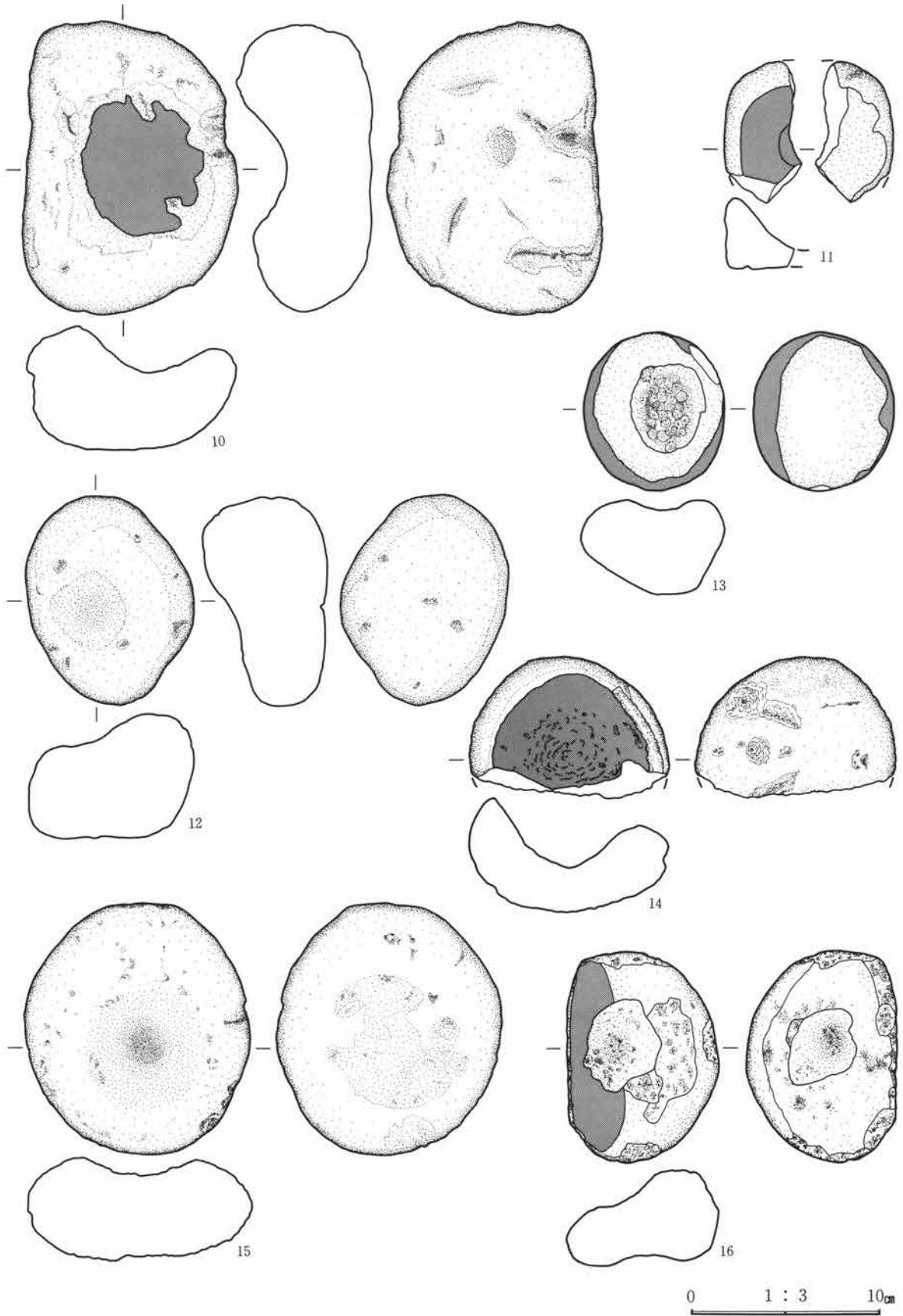
いずれにせよ、白や石播鉢に似た用途を持つものとして考えられるものであるが、石製品製作に関して利用した可能性もある。



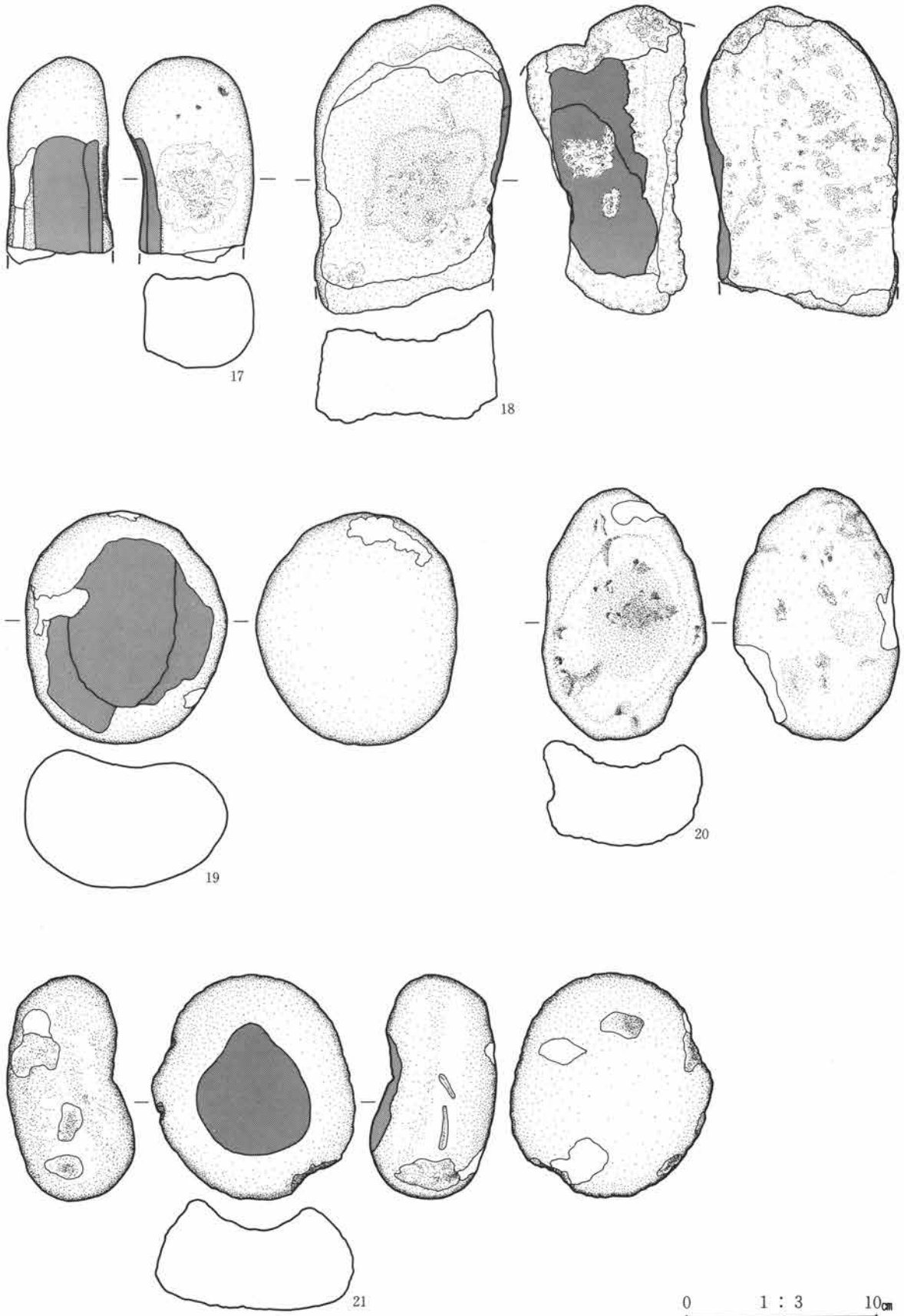
第162図 窪み石出土分布図



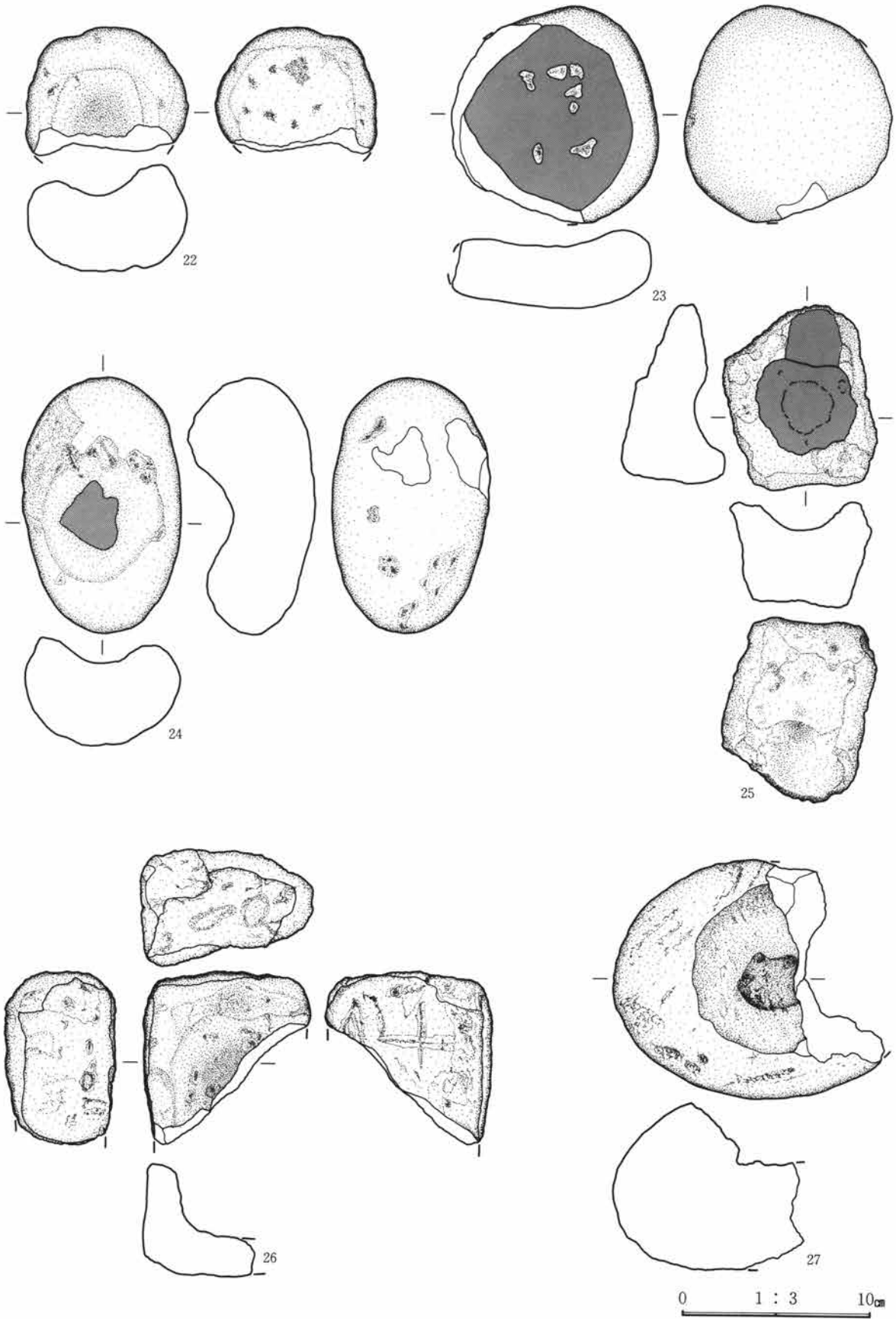
第163図 窪み石実測図(1)



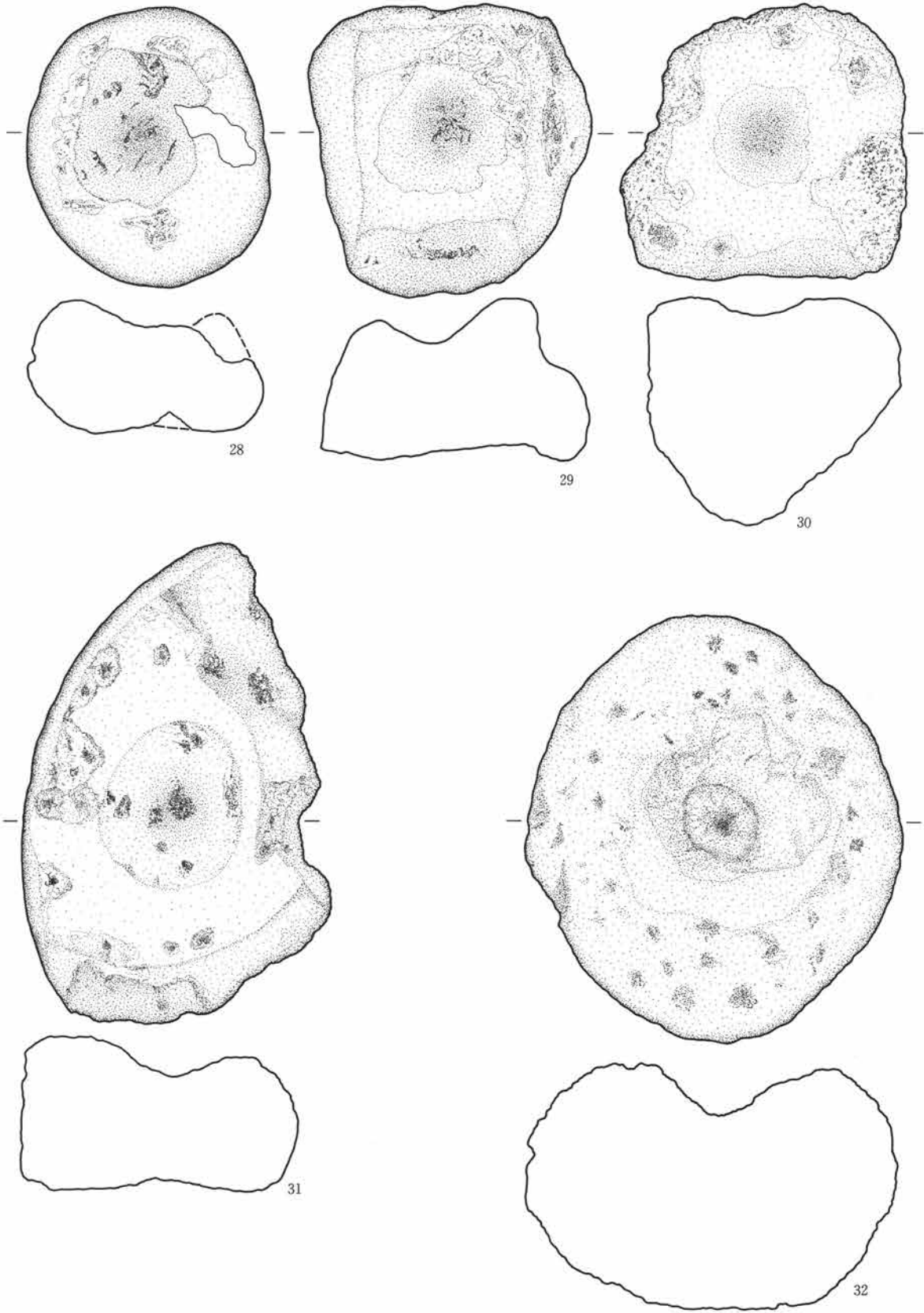
第164図 窪み石実測図(2)



第165図 窪み石実測図(3)



第166図 窪み石実測図(4)



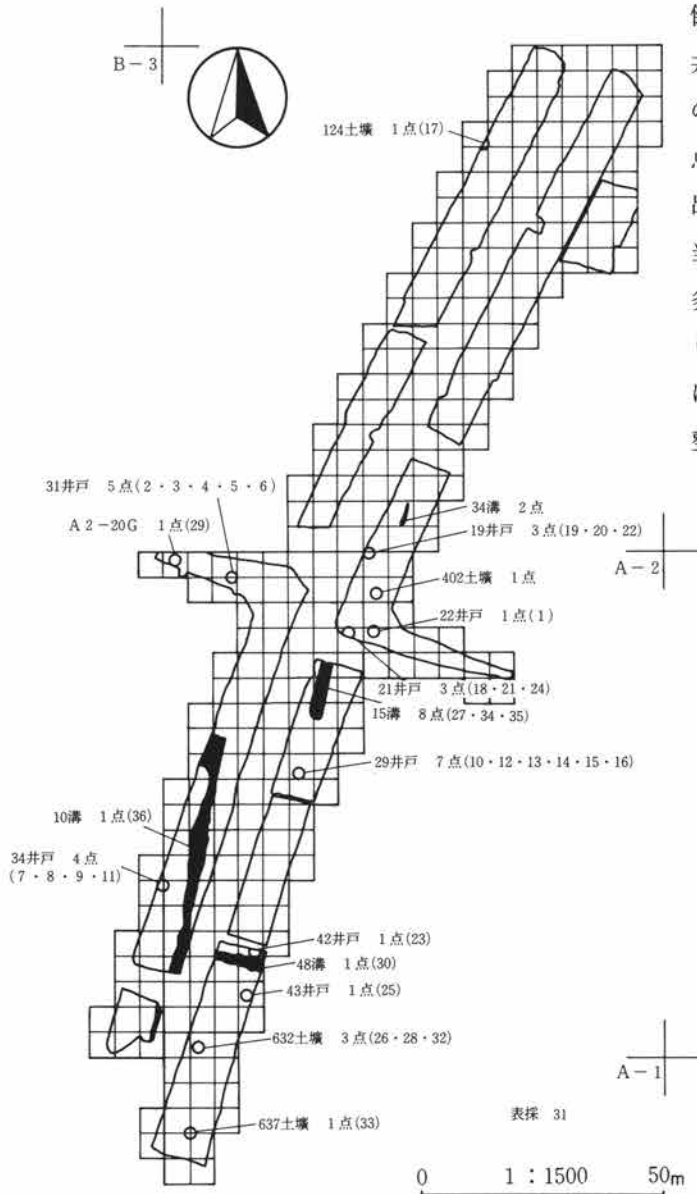
第167図 窪み石実測図(5)

5. 磨き石 (第169図～第171図)

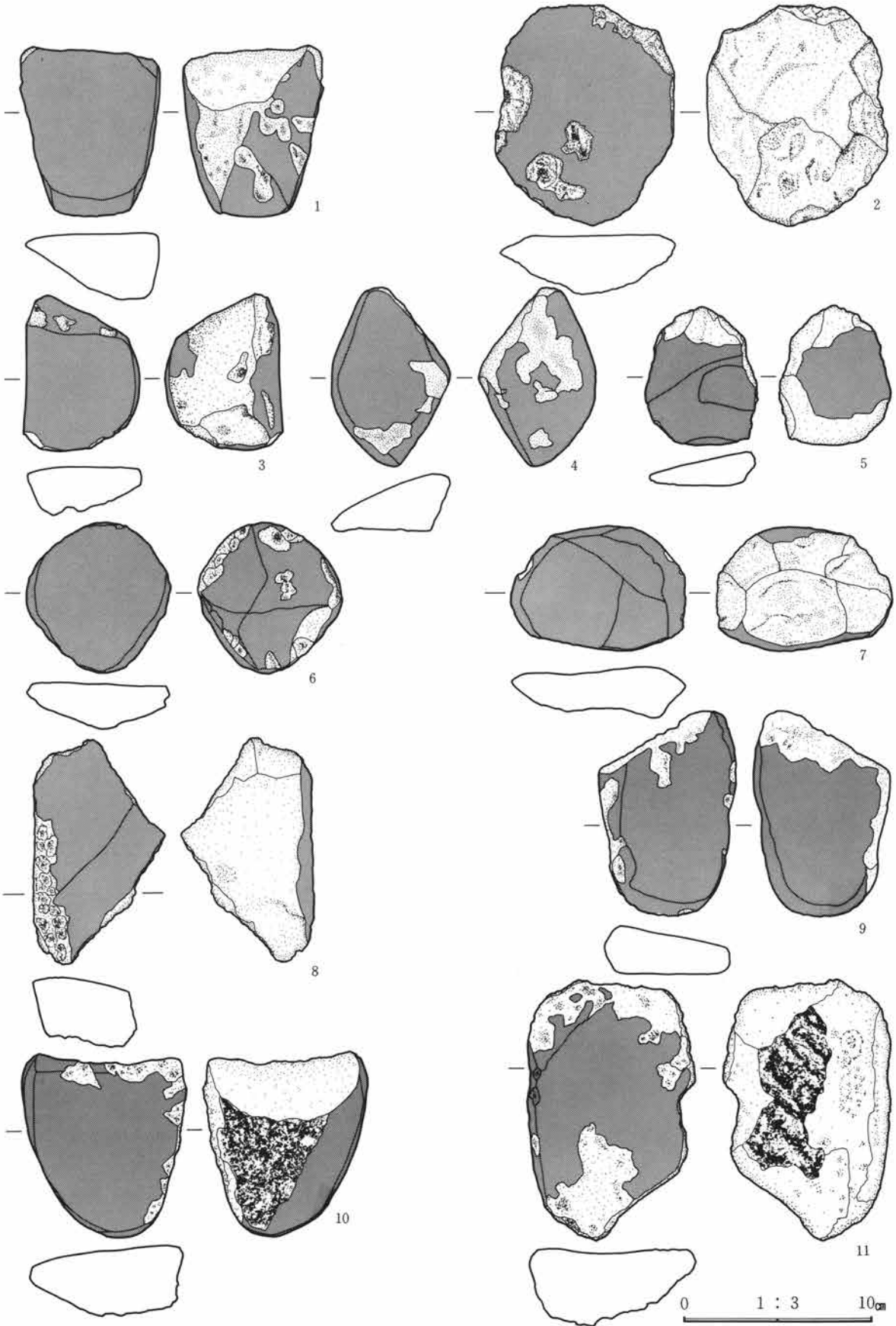
当遺跡では38個と最も多数出土するもので、磨きの面においては、一面に磨き面を有するもの他、両面や、側面などに磨き面を有するものなど、多面的に磨きを行っているものが多い。その磨きの面は平滑な面を有するものがほとんどである。多面的な磨きの面を有するもので、特に側面部に磨きの面を有するものに関しては、その磨き面の幅は極めて小さいものであるがその面も使用している。石質は粗粒安山岩がほとんどであり、一部軽石が混じる。これらの石器の機能として可能性が高いのは、石製品製作の際に調整具として石表面を磨くことに使用されたということである。これら磨き石は石器製作の際に石割りの際の剥片・失敗品の一部を利用したことが多い。そのことは、剝離痕がかなり多く残っている事や転用前のハツリ痕・加工痕などが残っていることなどから想定されるものである。

出土地点はそれ以外の石製品と同じく遺跡の南部に集中しており、井戸からの出土が圧倒的に多い。特に集中出土するのは29・31号井戸がそれぞれ7点・5点出土している。その他に19・21・34号井戸、632号土壌から3点ずつ出土している。また15号溝からは8点出土する。

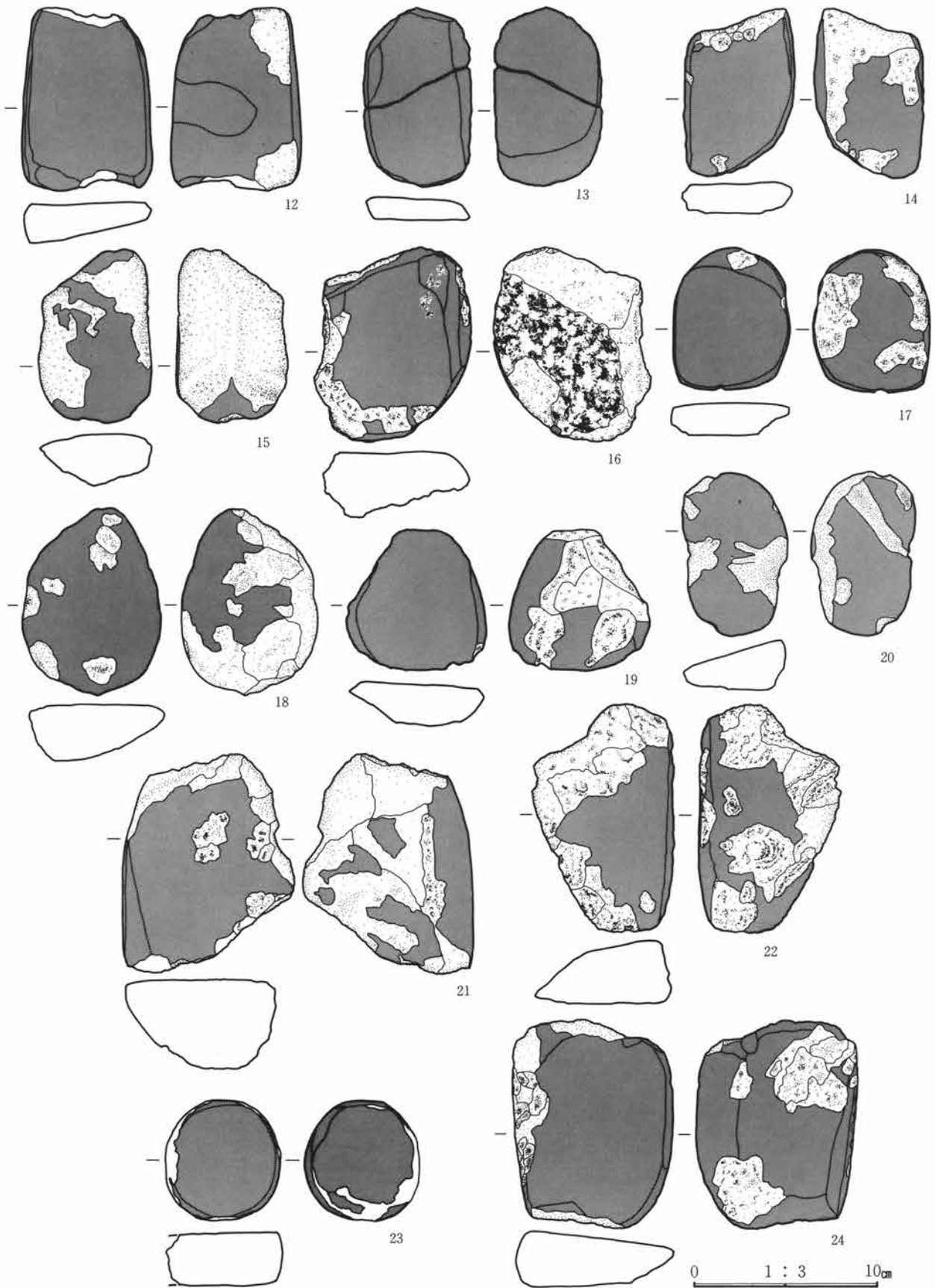
当遺跡が未製品の出土量の多さ、剥片の量の多さから見て、その性格が石製品製作に関わりのある遺跡と考えられ、その点で、磨き石は現在の所、石製品製作の際に使用された調整具として考えることが最も妥当である。



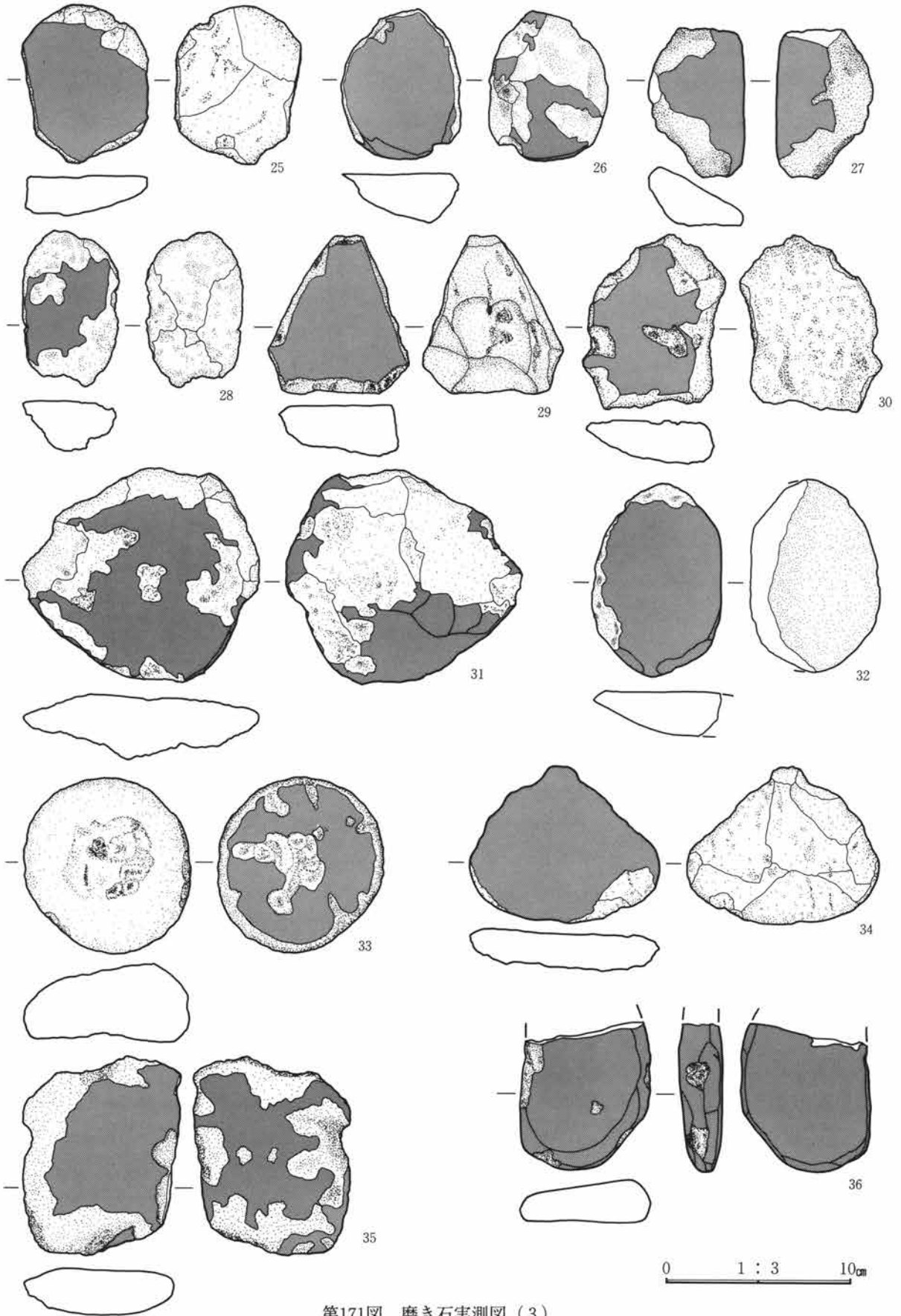
第168図 磨き石出土分布図



第169図 磨き石実測図 (1)



第170図 磨き石実測図(2)



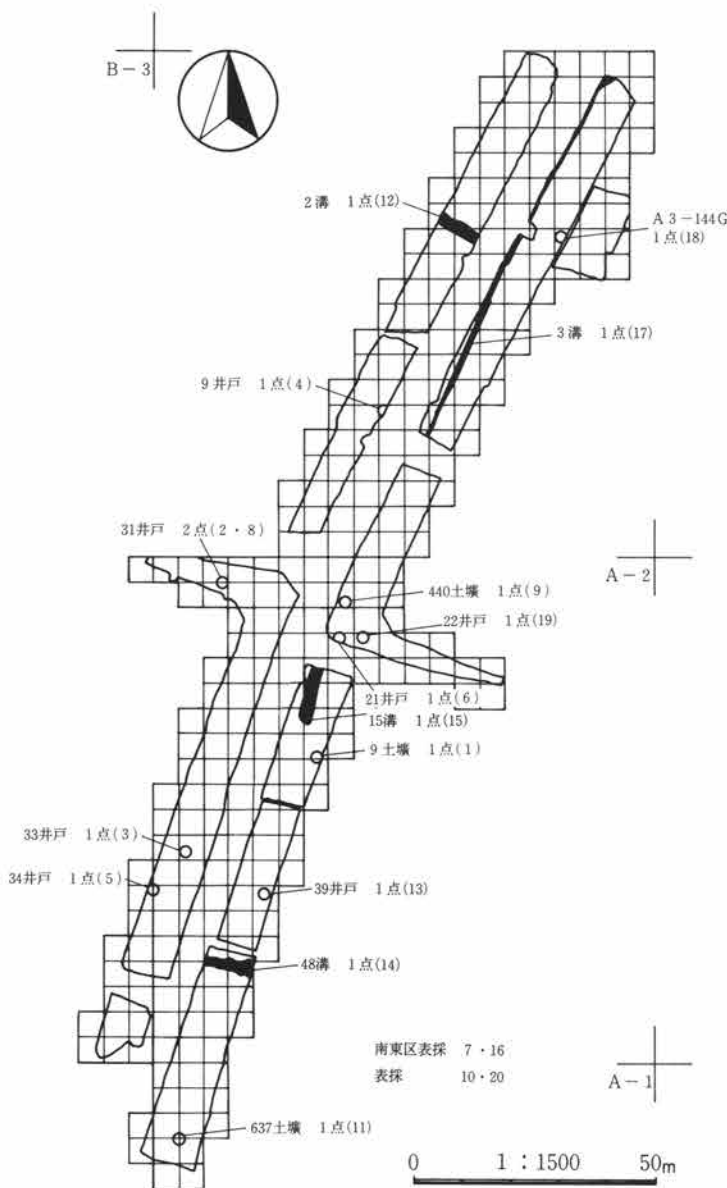
第171図 磨き石実測図(3)

6. 砥石 (第173図・第174図)

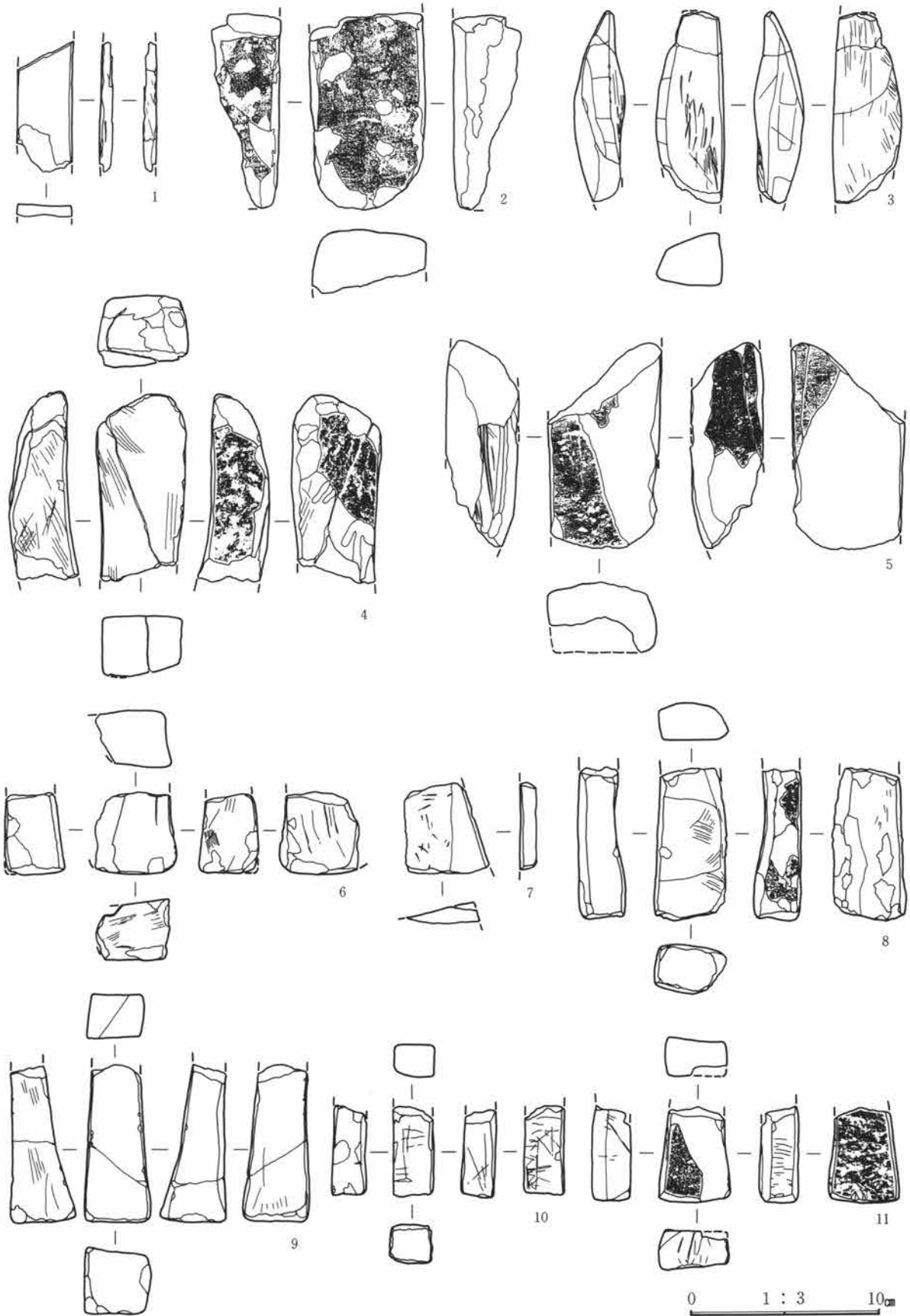
合計20個の砥石が出土した。変形砥石は4・3・17・18・16であり、他に欠損品を抜けば残りは定形砥である。変形砥は最大で203gであり100g前後が中心である。手持ち砥として用いられたものと考えられる。定形砥は、最大で639gあるが、平均して100-150g前後である。最大の例は他と比べて大きさ・重さともに際だっており特殊な用途が想定される。石質は砥沢石が中心で、一部、粗粒安山岩(5)・頁岩(2)・ホルンフェルス(1)・流紋岩(1)が使用された。石材の多様性が認められ、研磨対象・用途に応じた砥石の形・材質が選定されたのであろう。特に粗粒安山岩製のものなどは、鉄製品の研磨というより、磨き石と類似した用途を考えても良いと思われる。

出土地点はやはり遺跡の南部地区に多く、他の石製品との共通性が窺える。井戸からの出土が最も多い。特定の井戸に複数出土することは稀れで31号井戸にて2点の出土があるのみである。

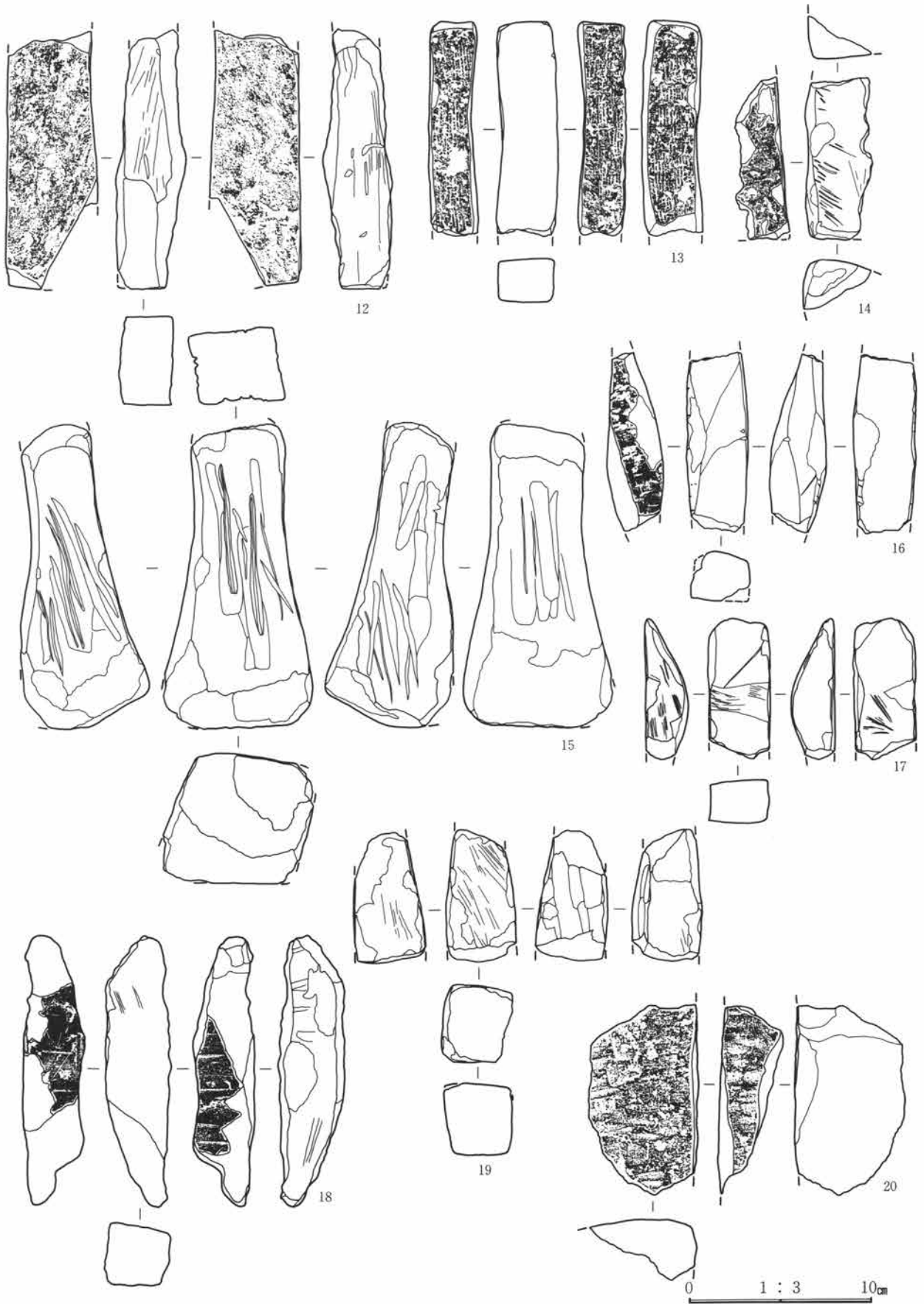
砥石の出土数としては発掘面積及び住居址が殆ど検出されていないということを考えてかなりの密度で検出されていると考えられる。このことは、磨き石の多量出土、白・五輪塔の未製品の多さとも考え合わせれば石製品製作に関する遺物ということで理解できよう。石は非常に使い込まれたものが多く、その種類も様々あり、様々な用途に対応して砥石を揃えていた事を暗示するものと考えられる。



第172図 砥石出土分布図

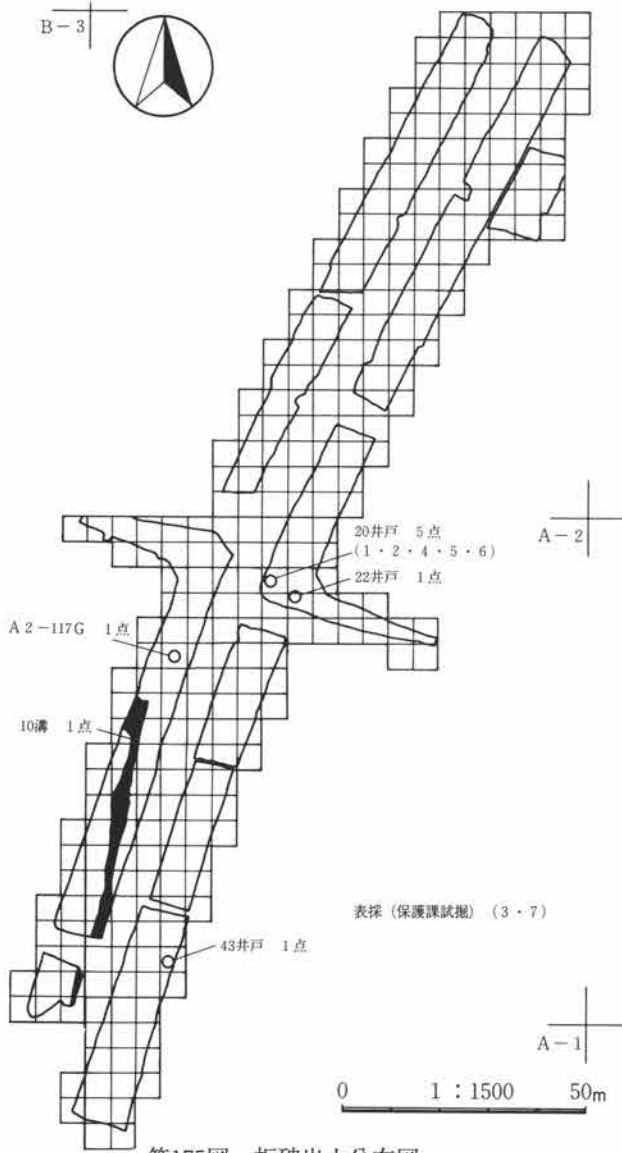


第173図 砥石実測図 (1)



第174図 砥石実測図(2)

7. 板 碑 (第176図～第178図)



第175図 板碑出土分布図

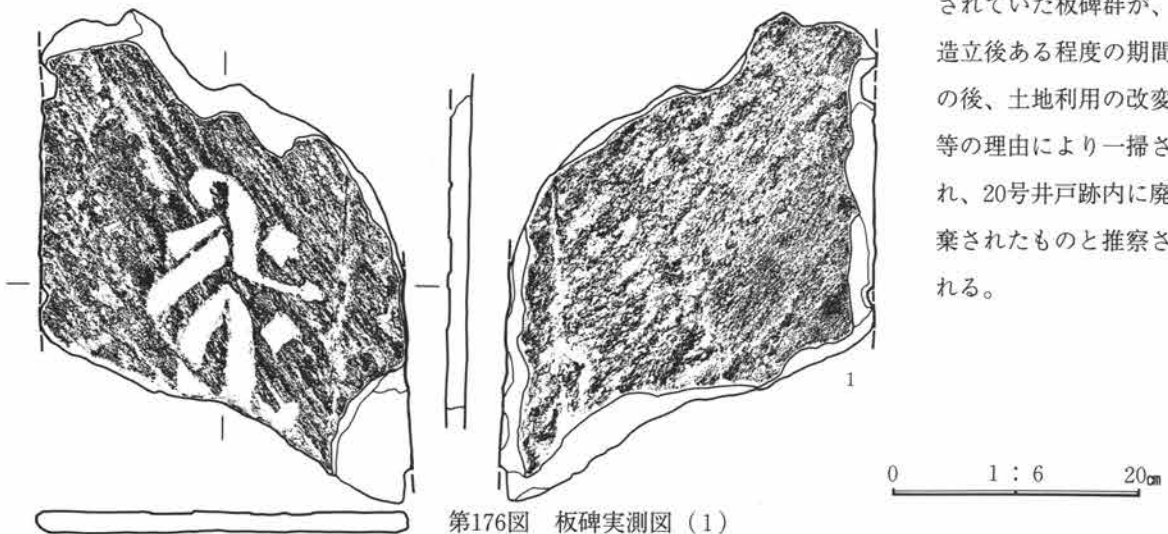
本遺跡出土の板碑には、大型の板碑は含まれず、1および2の板碑が推定全高1m前後、7が推定全高80cm前後を測る中型板碑の破片であり、他の4基はいずれも推定全高が50～60cm程の比較的小型の板碑である。

主尊が確認できる板碑は1・2・5・6・7の5基で、2・7は共に阿弥陀三尊種子板碑であり、キリークのみが蓮座を持つ。1は欠損のため一尊か三尊かは不明、5・6は共に阿弥陀一尊種子板碑である。1・2は浅い葉研彫りではあるが、他に比較してしっかりとした彫りである。

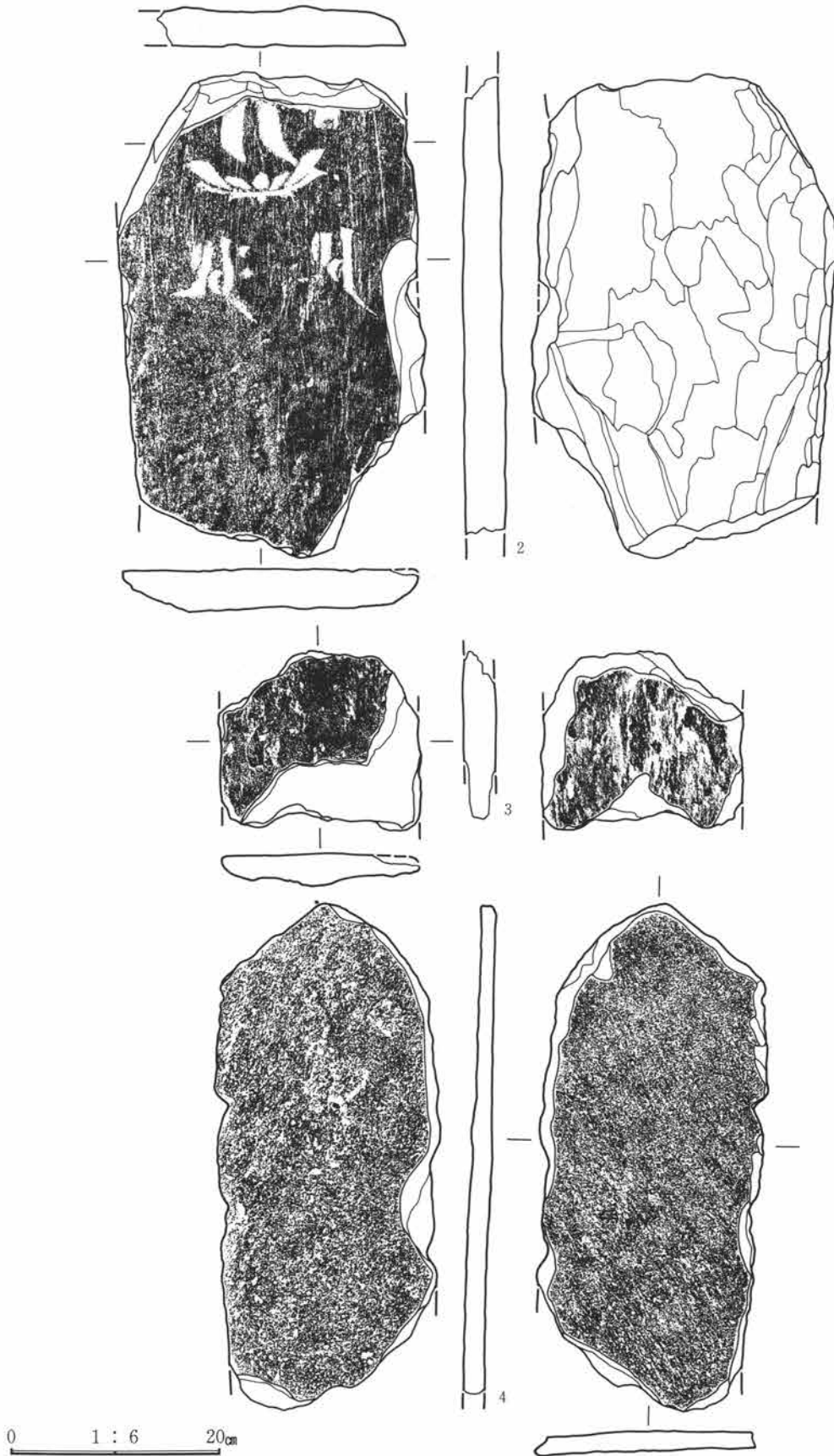
出土板碑の造立の年代については、紀年銘の残存するものが5の1基のみで、摩滅のため僅かに「貞(治か)三」(1364年)と判読できるのみである。他の板碑の造立年代は、大きさ、二条線の有無、主尊・蓮座形態から14世紀中頃から15世紀末の造立と考えられる。特に1と2の板碑は大きさ並びに主尊の形態が類似していることから、両者は年代的にも近いものと推察される。

本遺跡出土の板碑7基中5基は、共に20号井戸跡よりの出土である。年代的に近いものも含まれるが、全体的には14世紀中頃から15世紀末と約1世紀半ほどの年代巾があり、また、風雨による自然的な摩滅が著しいことから、本遺跡出土の板碑は、中世において遺跡内の20号井戸跡付近に造立

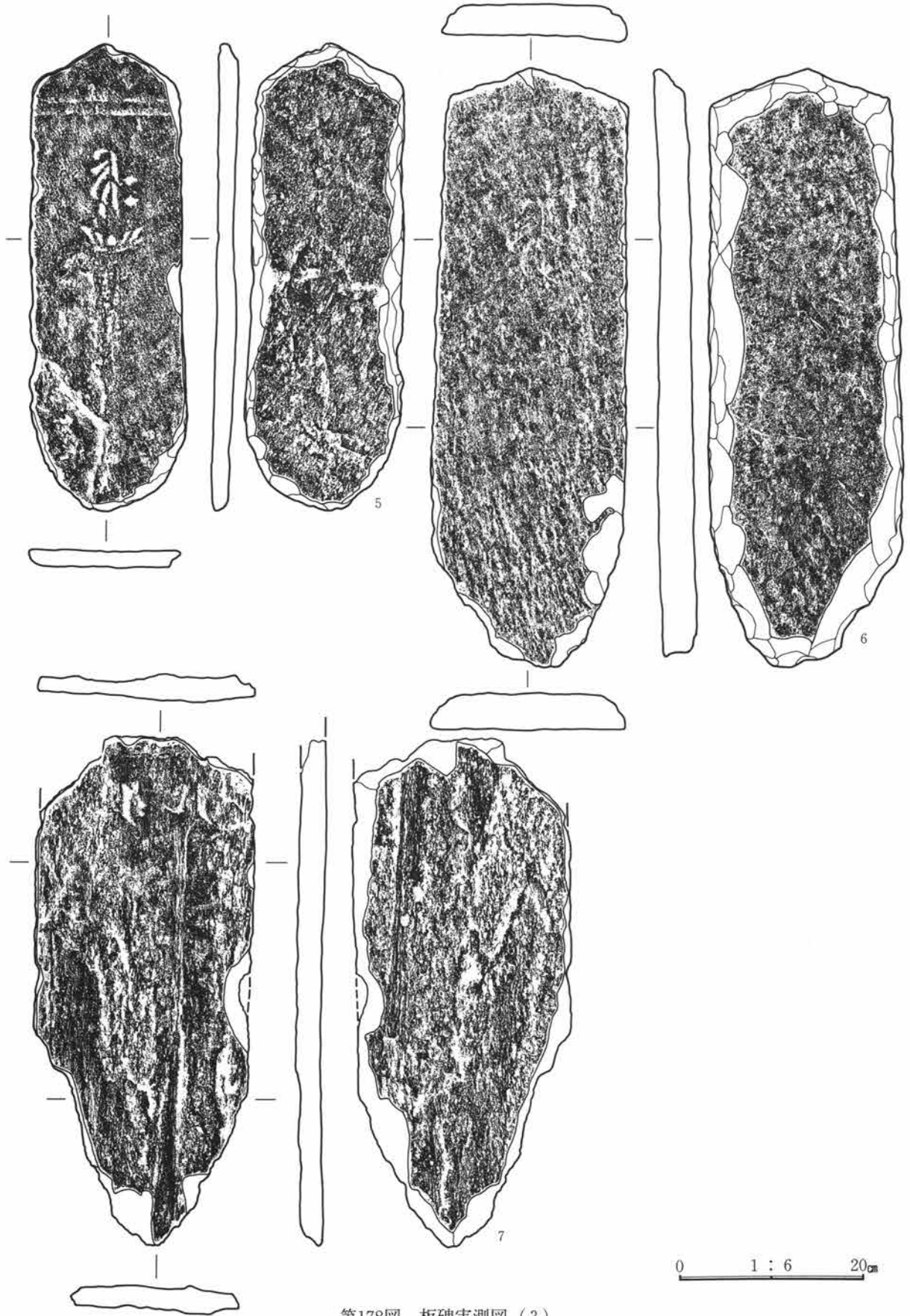
されていた板碑群が、造立後ある程度の期間の後、土地利用の改変等の理由により一掃され、20号井戸跡内に廃棄されたものと推察される。



第176図 板碑実測図(1)



第177図 板碑実測図(2)



第178図 板碑実測図 (3)

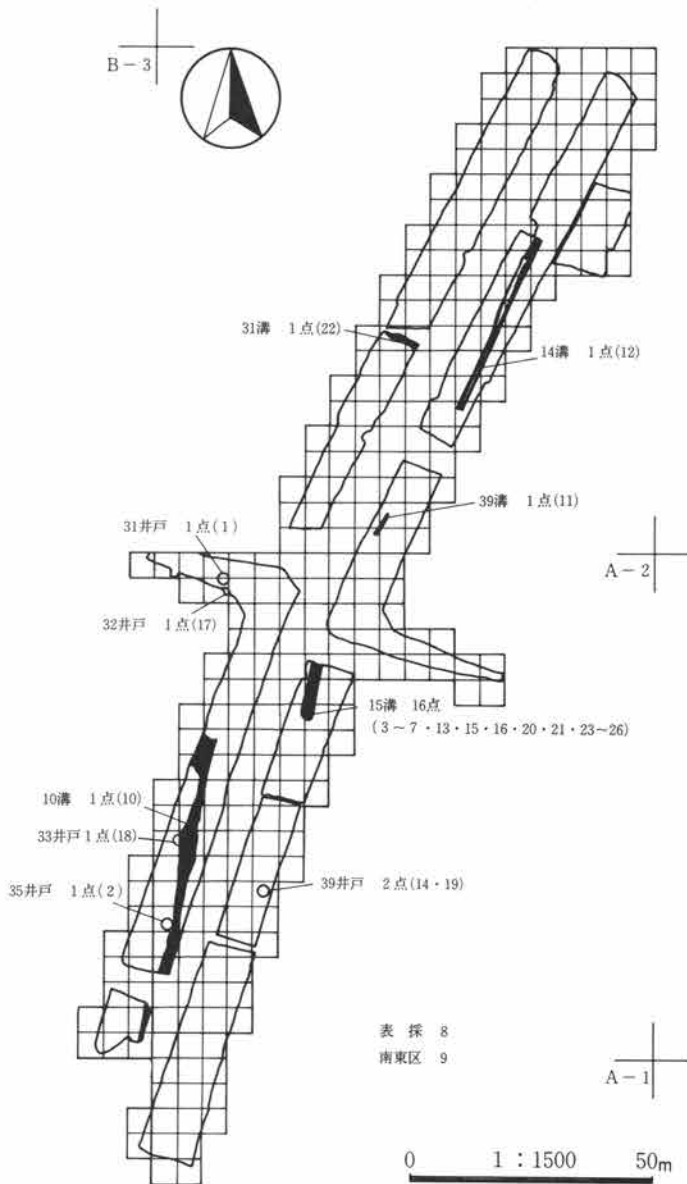
8. 五輪塔（第180図～第185図）

本遺跡出土の五輪塔は、空風輪 8 個体、火輪 5 個体、水輪 5 個体、地輪 7 個体の計 25 個体を数える。このうち、空風輪 6 個体、火輪 3 個体、水輪 2 個体、地輪 5 個体の計 16 個体が未製品である。未製品を観察すると、いくつかの製作工程段階がみられる。工程は大きく三段階に分かれ、まず第一段階は原石を荒くはつり、形状に近く成形するが、一部に自然面を残す。第二段階はやや細かくはつり、面を造り出す。第三段階は荒削りを一部残しつつ、面の整形や細部の造り出しを行う。といった段階がみられる。しかし、これらの製作工程は必ずしも第一から第三の三工程を踏んで製品化するものではなく、石材としての原石の形状によって加工を必要としない部分は原石の自然面に直接細部の造り出しを行っているものもみられる。

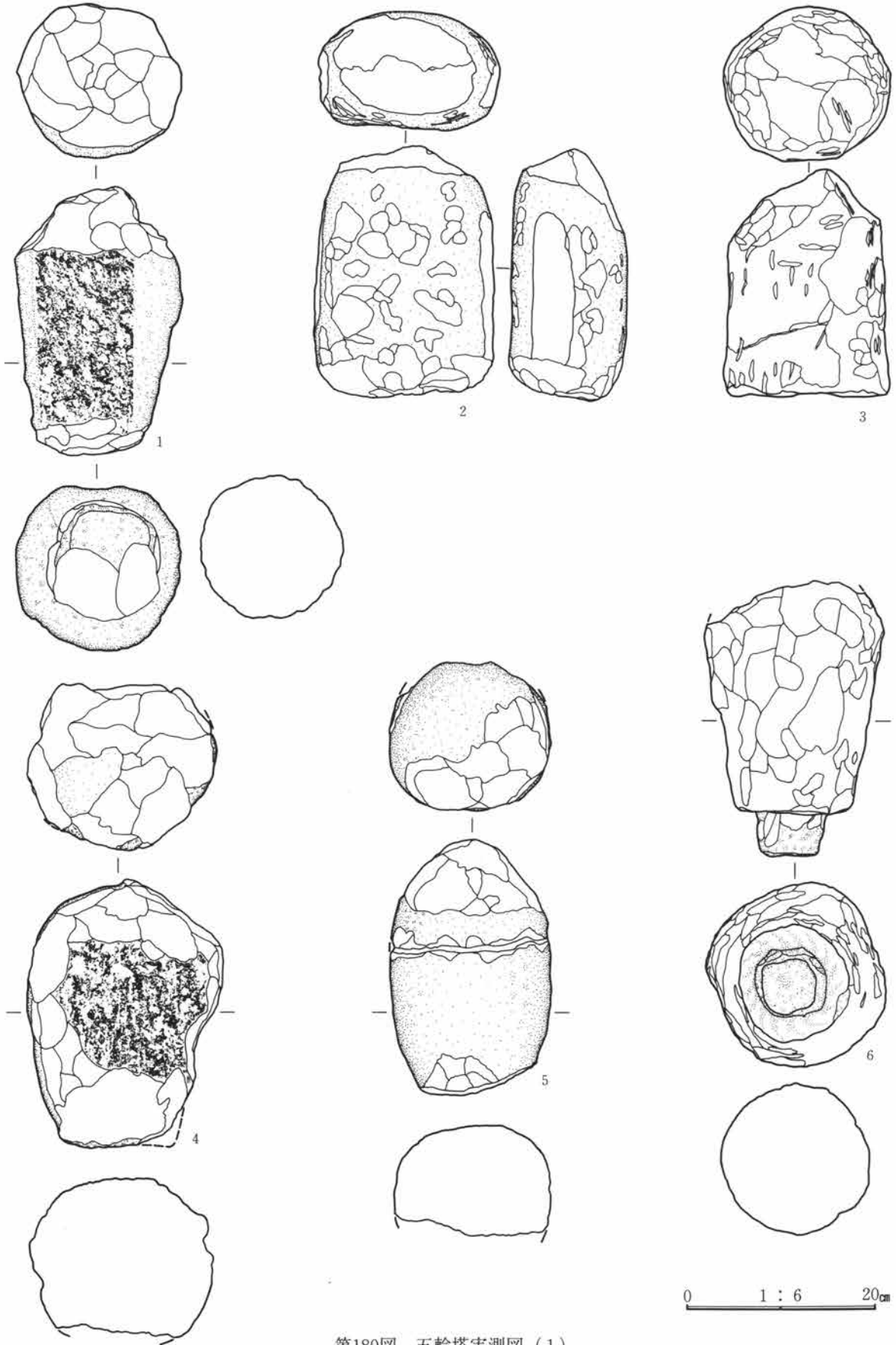
次に未製品の製作状況を段階別に細述する。まず、第一段階としての空風輪の 4・5 がある。共に荒くはつられるが自然面を多く残す。空風の境のくびれや下部の突起の成形には至っていない。5 にみられる横線はくびれを造り出すけがき線（基準線）であろう。火輪の未製品 3 点（10・11・12）はいずれも第一段階で、10・

11は空風輪差し込み穴を穿っておらず、12は穴を穿るものの成形が不備である。水輪の16・17も荒削りで側面に自然面を残す。地輪の25・26も全面荒削りのままで、細部の整形に至っていない。第二段階として空風輪の2・3は、共に上部に荒削りを残し、側面部に細い工具による細かい調整がみられるものの、空風の境のくびれや下部の突起の成形には至っていない。水輪の15は上下面のみ細かな面の調整が済み、側面は荒削りのままである。地輪の20・21・23・24は上面は荒削りのままであるが、側面のみ細かな面の調整済みである。第三段階として、空風輪1・6は共に荒削りを一部に残し、空風の境のくびれの成形には至っていないものの、下部の突起の造り出しがなされている。（1は突起は欠損するが痕跡残る。）

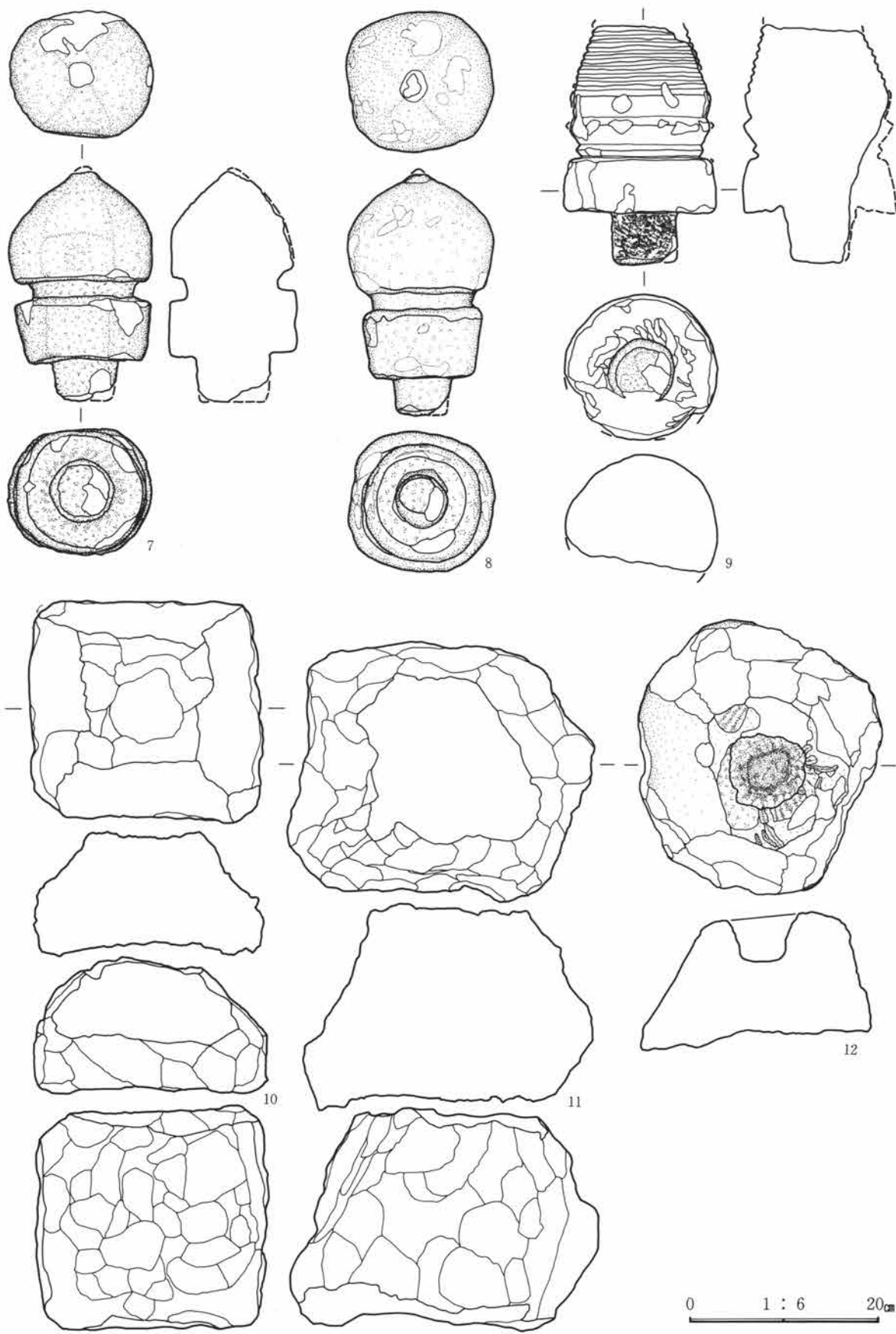
以上、製作工程の三段階の未製品を細述したが、16個体にもおよぶ五輪塔未製品の出土と、水輪の18のようにほぼ完成品の出土と、底部の凹みや全体の形状から五輪塔水輪の転用（石鉢か）であろう遺物も出土していることから、本遺跡内において明らかに五輪塔を含む石製品の製作址の存在が想定される。



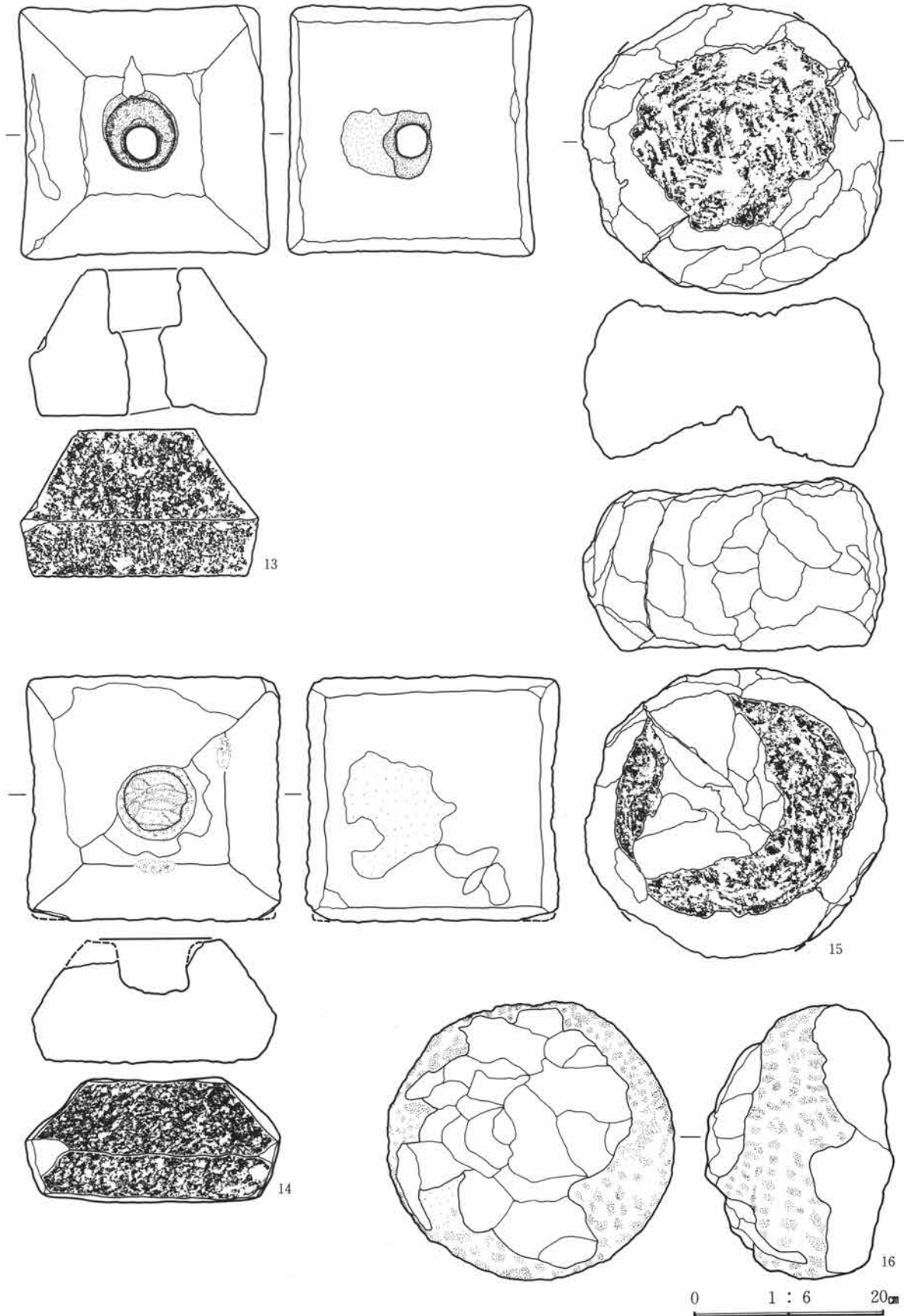
第179図 五輪塔出土分布図



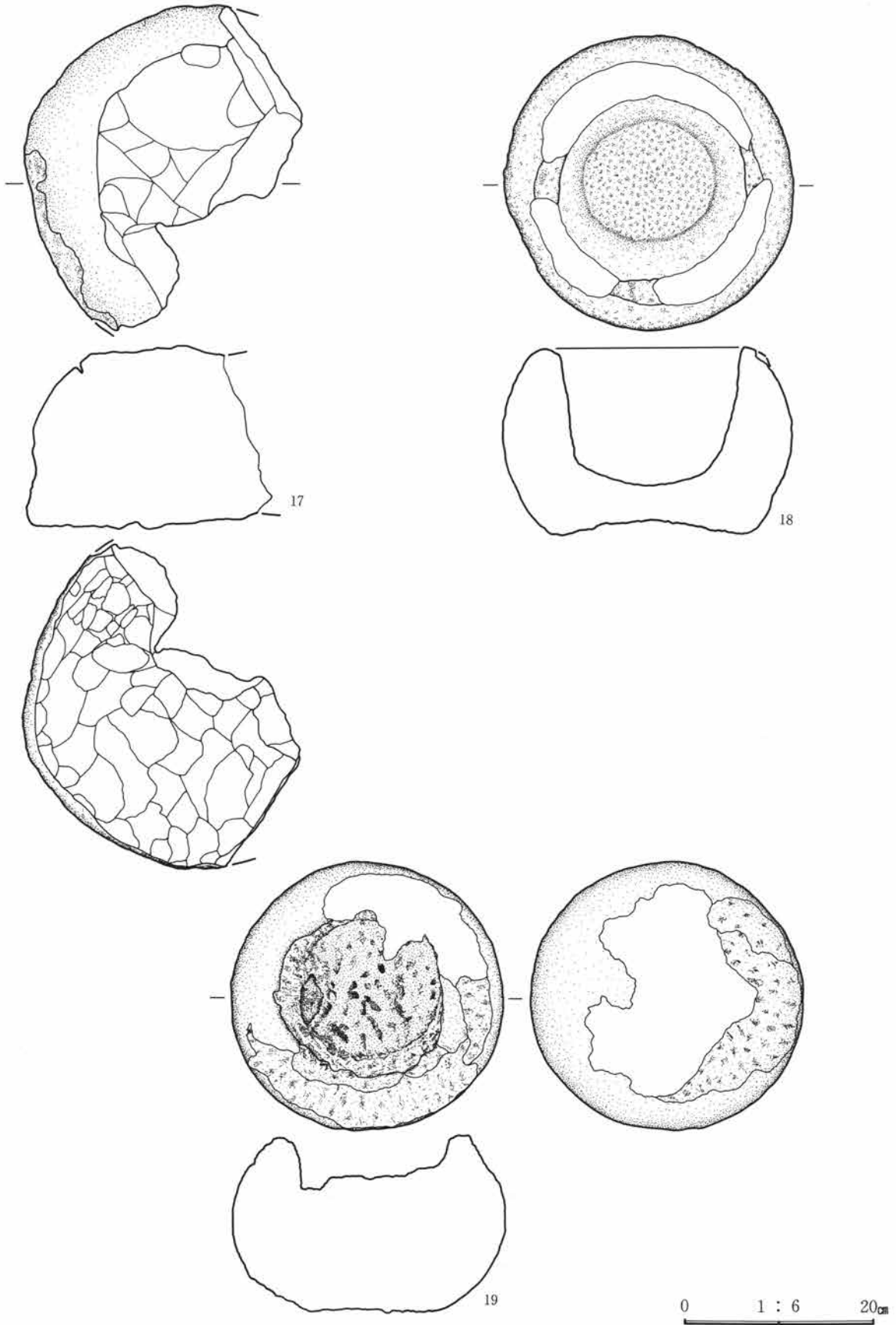
第180図 五輪塔実測図(1)



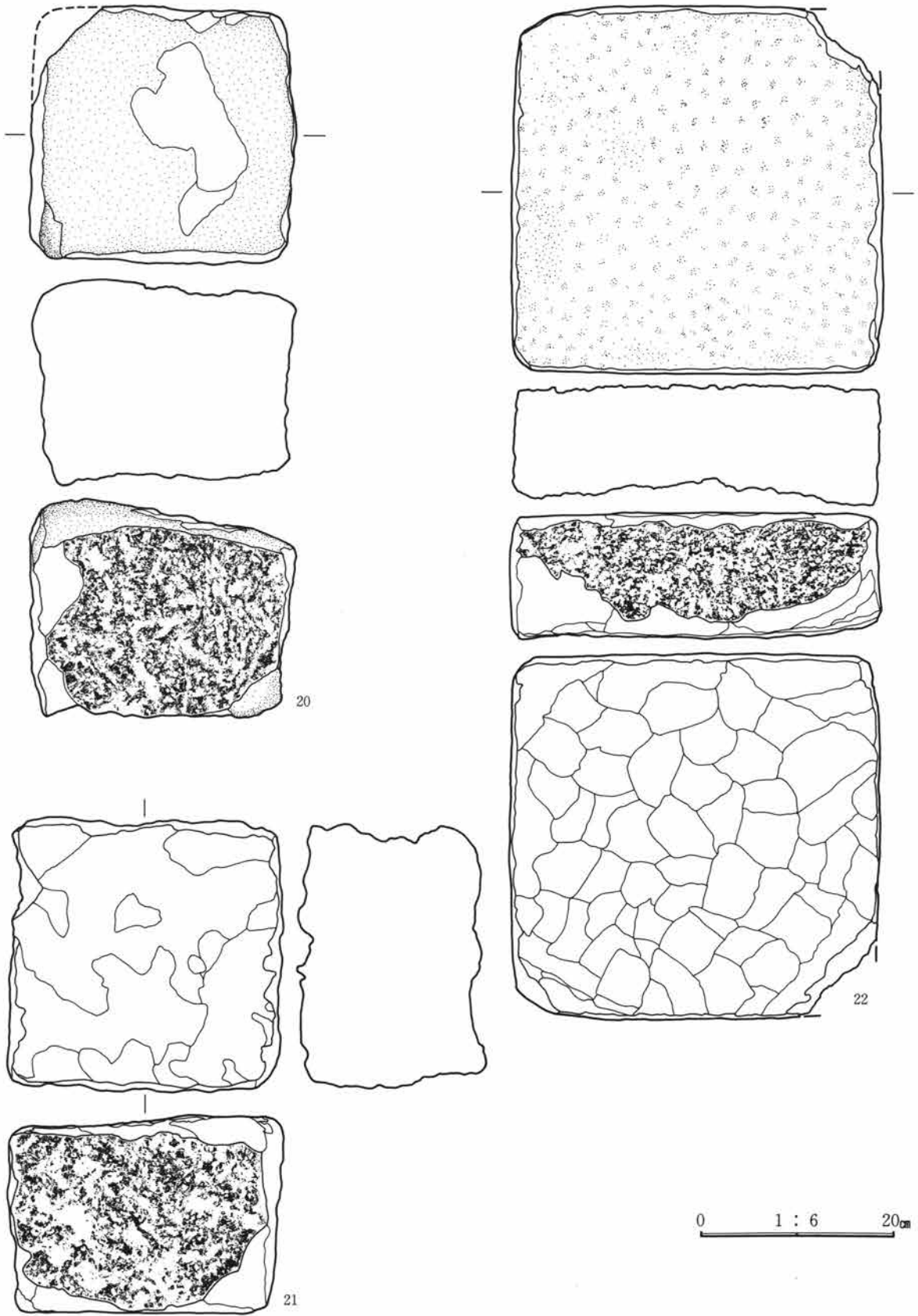
第181図 五輪塔実測図(2)



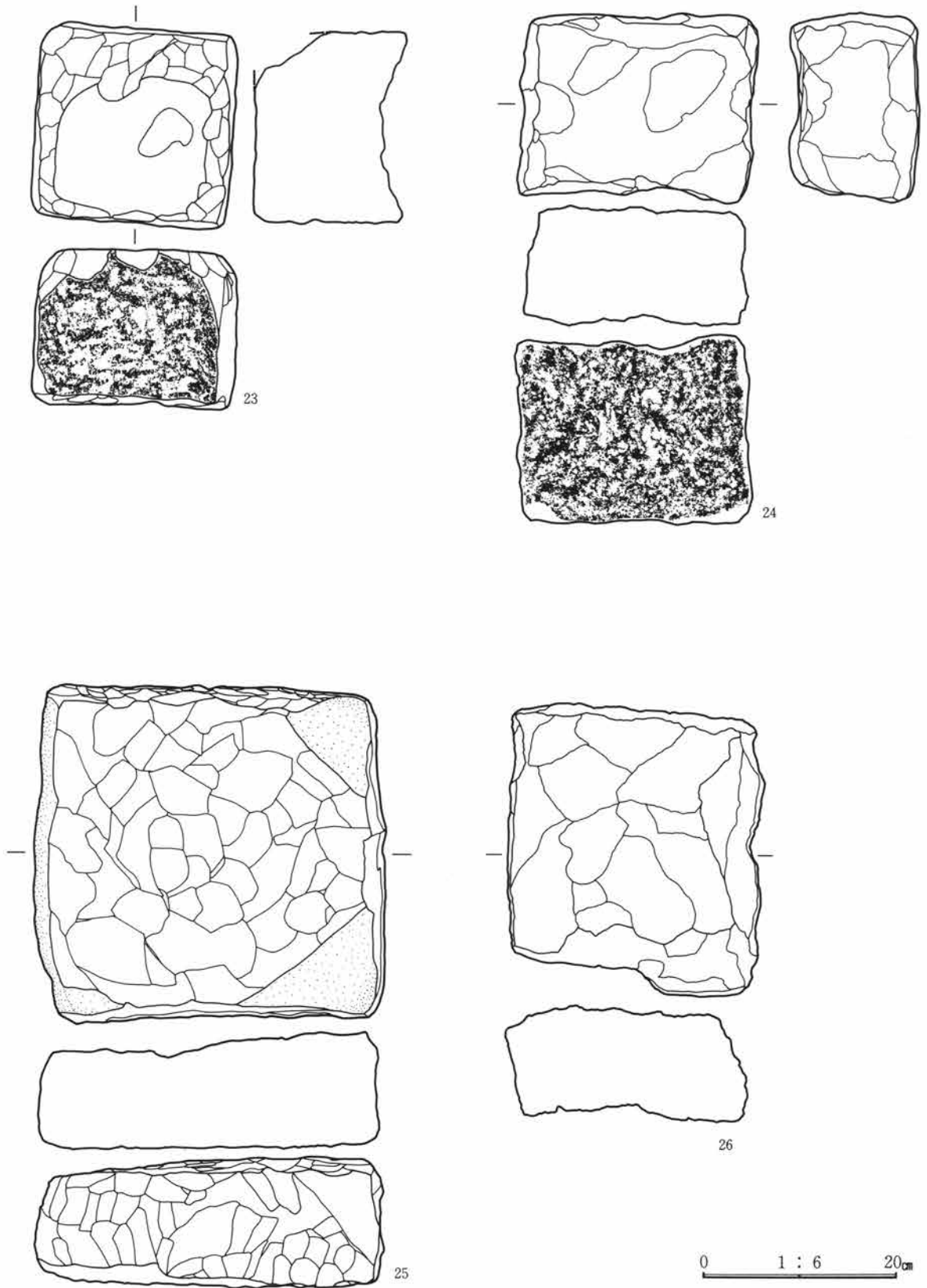
第182図 五輪塔実測図(3)



第183図 五輪塔実測図(4)

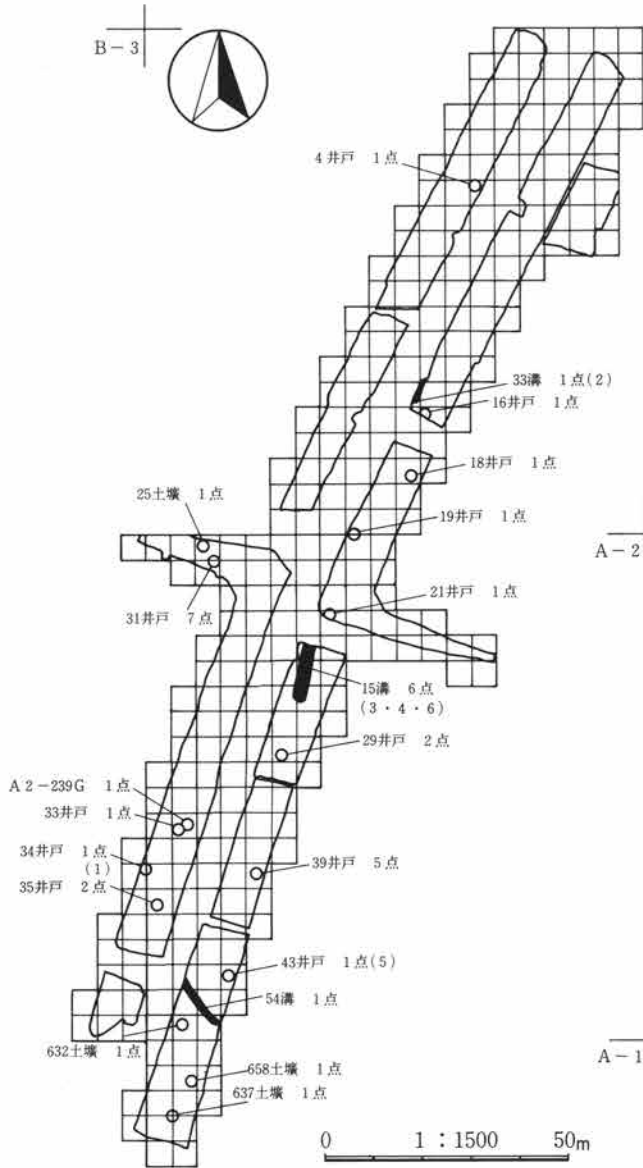


第184図 五輪塔実測図(5)



第185図 五輪塔実測図(6)

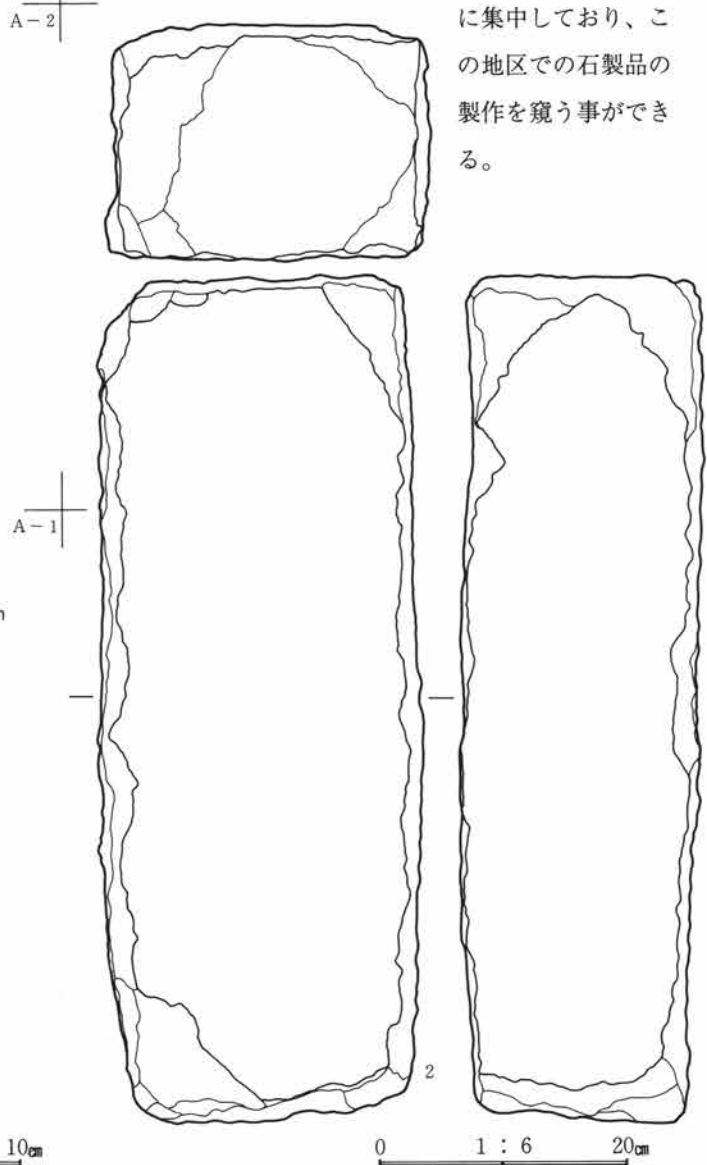
9. 不明未製石製品 (第187図・188図)



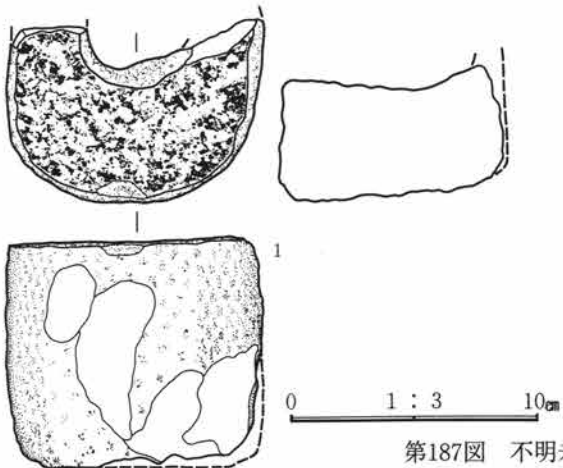
第186図 不明未製石製品出土分布図

総数23点あり、内、図示したものは6点である。種別不明の未製品群である。1・3は内側を弧状に加工し、底部は欠損しているが、石臼の把手になる可能性のあるものである。2は方柱状を呈し、各面に不定方向の荒削り痕を有し、墓標の石材かとも思われるもので、重量は58.5kgに達する。4・5共に、上下面に研磨面を有し、上面が皿状の窪みを有するものである。6は円盤状を呈し、剝離して板状になったもの。上下面に研磨面を残す。いずれも用途不明の未製品群であるが、この他にも剥片類がかなりの量出土し、製品の加工場としての状況を示している。未製品の出土地区も同様遺跡の南部地区

に集中しており、この地区での石製品の製作を窺う事ができる。



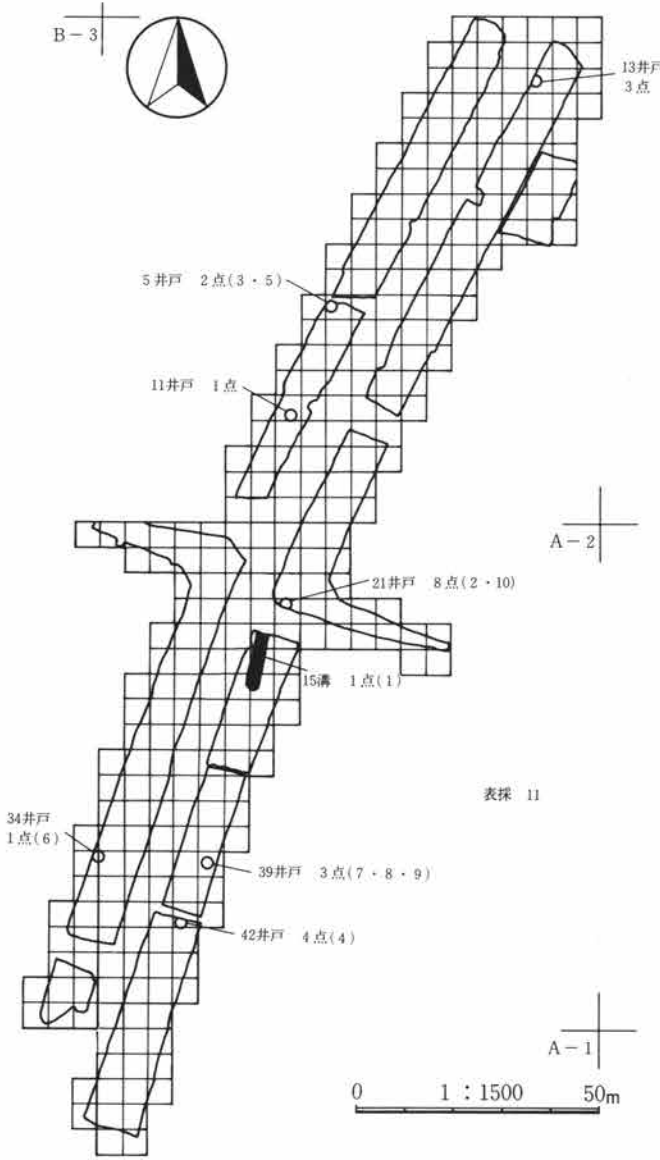
第187図 不明未製石製品実測図(1)





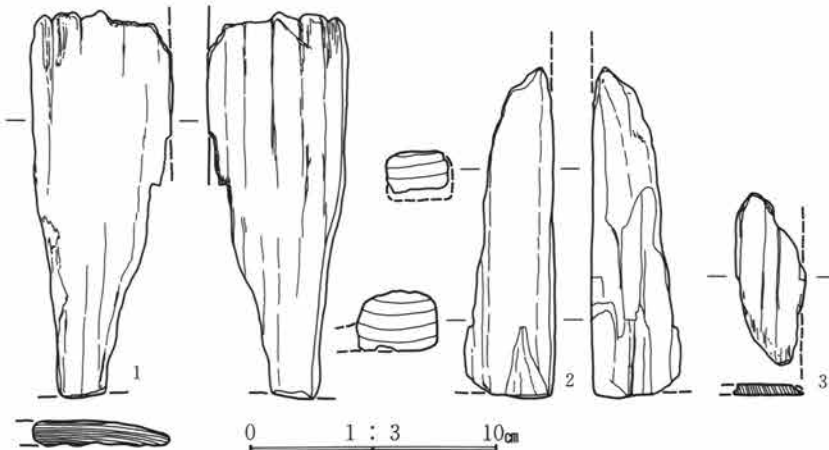
第188図 不明未製石製品実測図(2)

e. 木製品 (第190図・第191図)

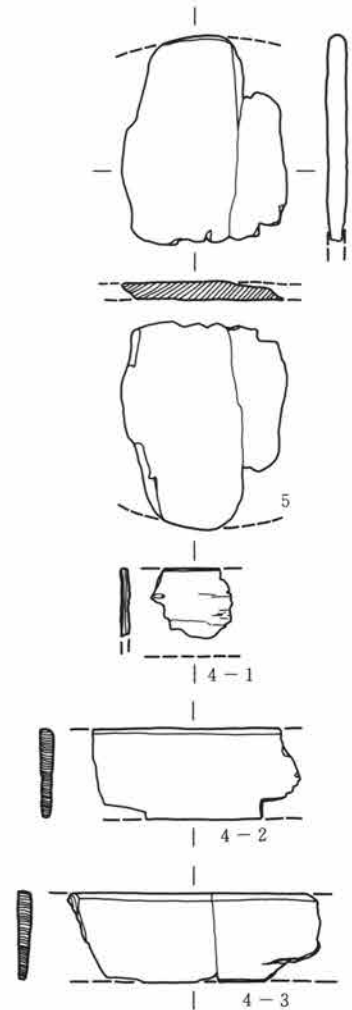


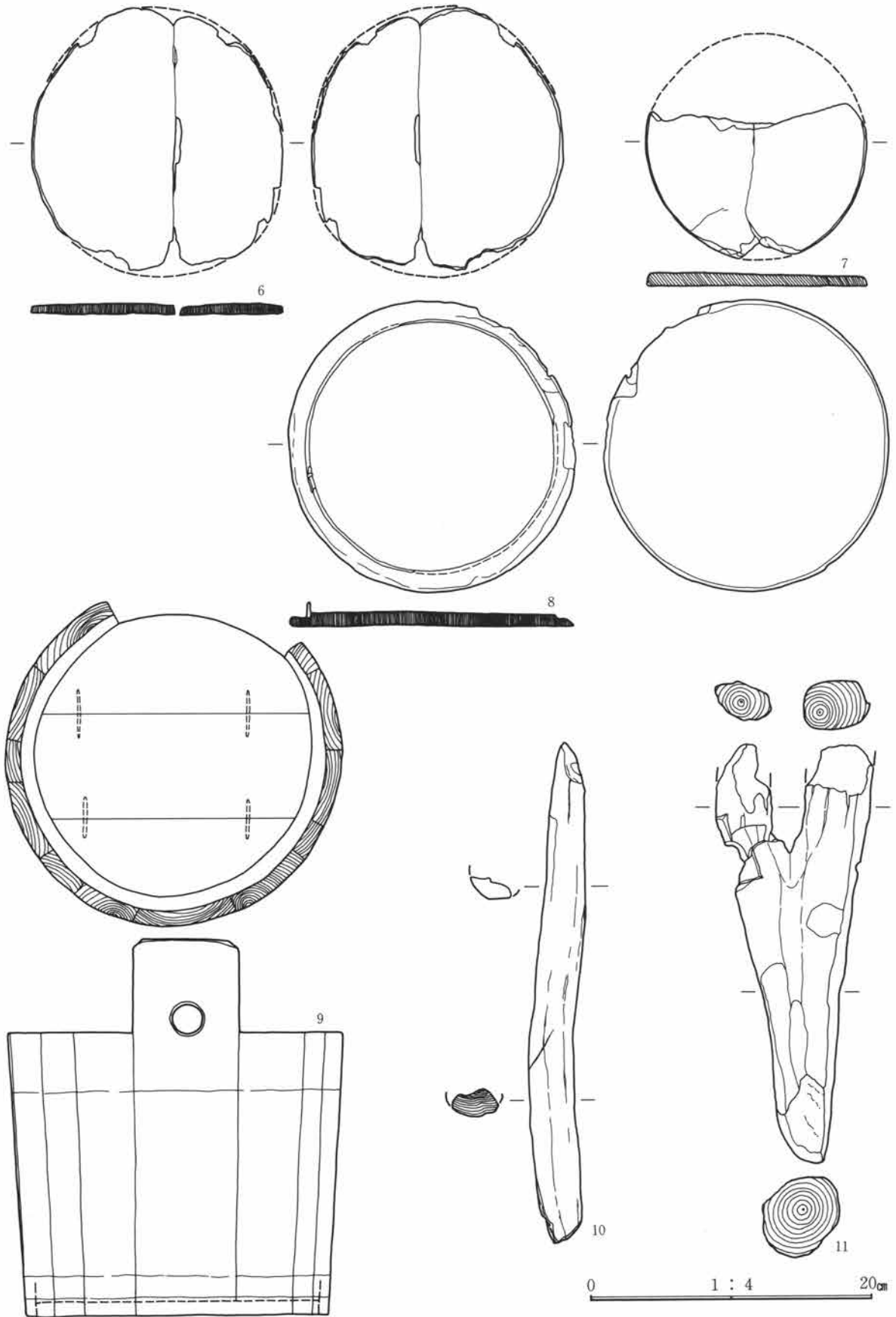
木製品関連遺物は26点出土しているが、図化したのは、11点である。曲物の蓋及び底板が4点出土している。特に39号井戸においては、曲物類部材2点と桶も出土している。板状の木片が2点、加工木が4点出土している。木製品は当遺跡では曲物類が多く、出土地点は南部地区でも、やや北西寄りの地域に多い。全体的に木製品の出土はごく少なくしかも製品としては曲物と桶のみであるが、特に桶に関しては極めて良好な依存状況を示しており、時期的には共伴遺物からみて近世のものとして良いだろう。

第189図 木製品出土分布図



第190図 木製品実測図(1)





第191図 木製品実測図 (2)

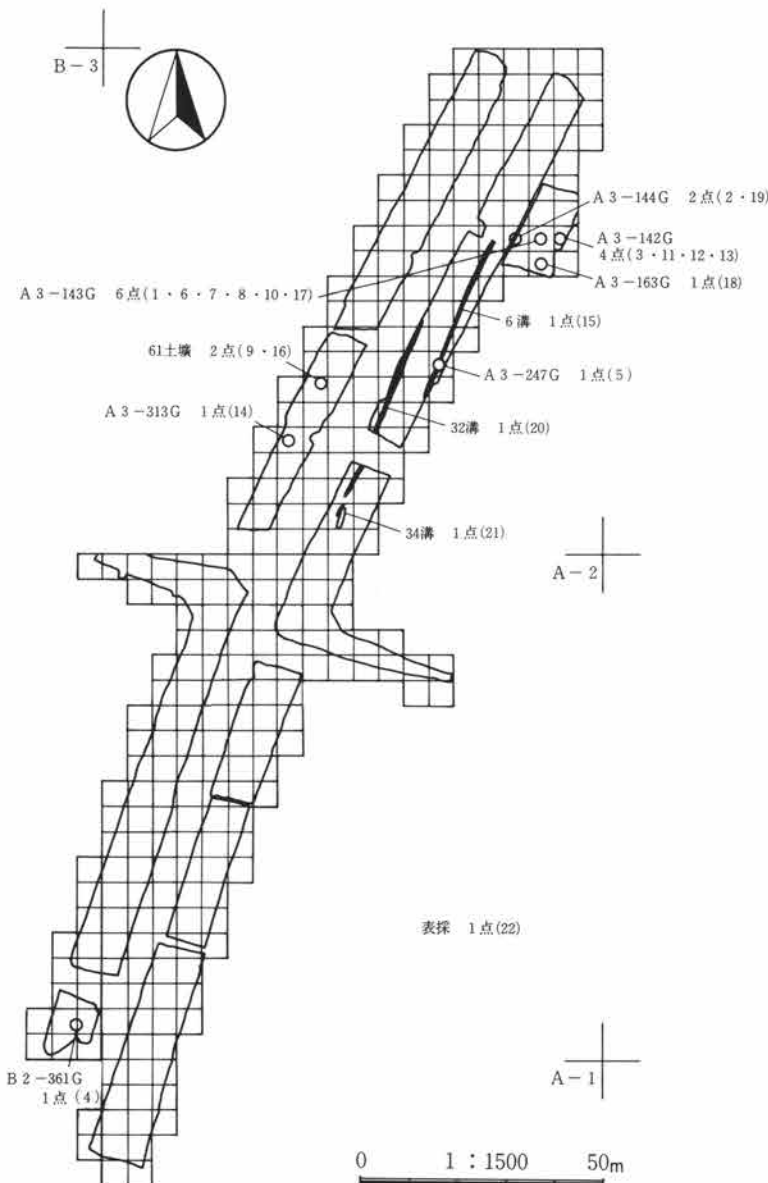
f. 鉄製品 (第193図)

鉄製品は北東区より集中して出土しており、本来の用途が不明のものが多い。釘の破片と考えられる資料(1・2・3)、刀子・刀の小破片(11・12・13・16)が出土している。刀子は茎部が殆どであり、11・13はやや大形の茎と思われる。12は通有の大きさの茎と考えられる。輪状金具は細めの鉄板を屈曲させ、輪状にして先端を鉤状に曲げたもの(4)である。何らかの留金具と考えられる。板状品が3点(6・7・10)ある。板状品の用途に関しては不明である。台カンナの刃が1点(15) 鎌が3点(17・18・19)出土している。鎌は小形ではほぼ同じ形態の鎌(17・18)と屈曲が緩やかな鎌(19)がある。屈曲部を有し何かを挟み込んでいたと考えられる製品(8・9)がある。本来の形態用途については不明。以上、鉄製品は機能・用途の不明なものが多く、良好な資料とは言えないが、中近世の鉄製品として貴重であり、小片まで測図した次第である。ただし、

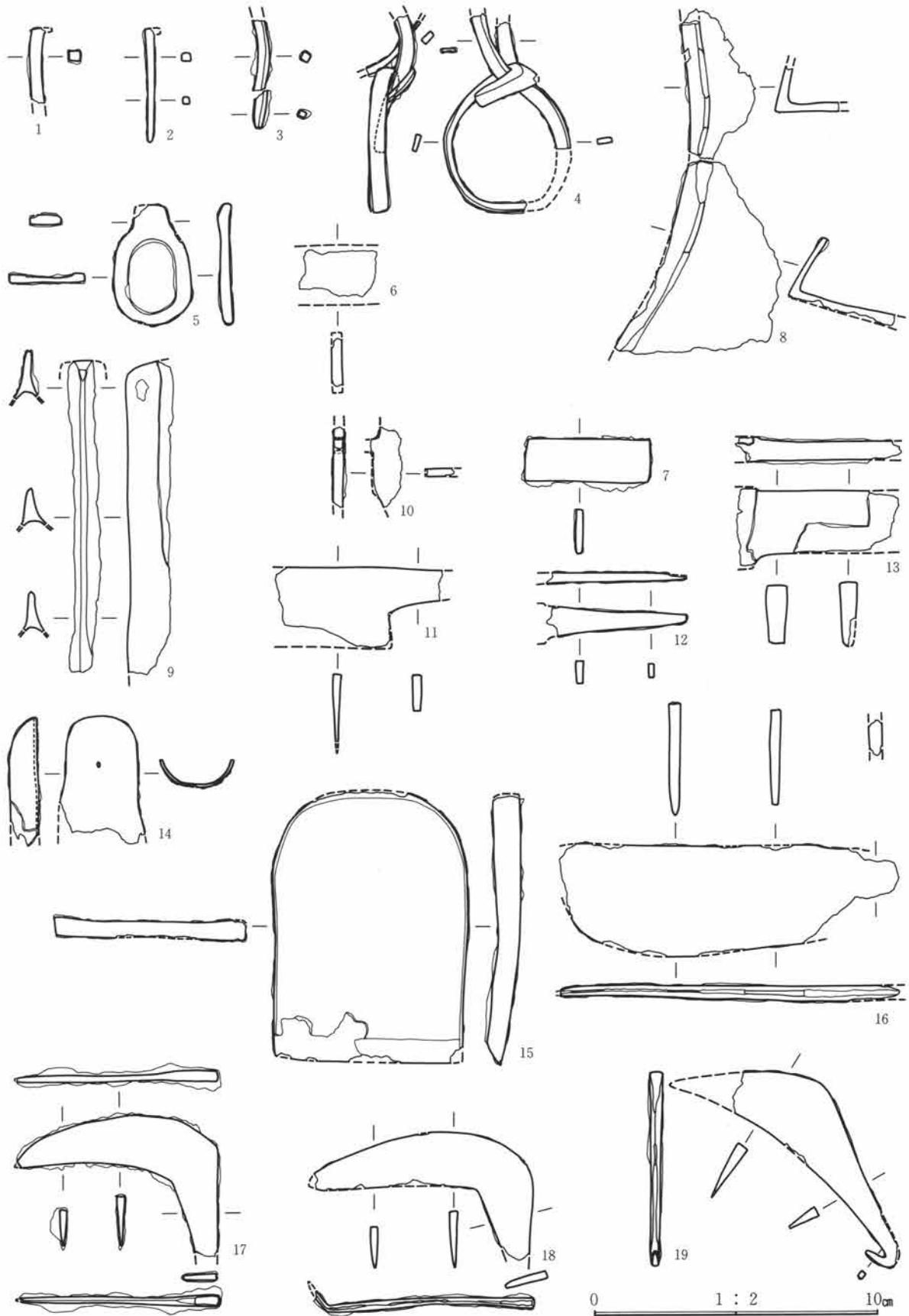
北東区拡張区において出土した鉄製品については、古墳時代の製品である可能性が高く、刀子類に関してはあるいは古墳の副葬品として考えたほうが良いと思われる。

これは近辺の埴輪・須恵器の出土状況及び、鉄製品の錆の状況などから推定したものである。刀子に関しては古代の堅穴住居からも良く出てくるが、当遺跡に関してはまず、古代の土器の出土が極めて少ないことはもちろん、当該時期の遺構も無いことから古墳時代それも埴輪の散布状況からして古墳の副葬品の一部として考えたほうが良いものとする。鎌に関しては年代的な比定はかなり困難であるが、古墳時代の鎌の形態からは外れるもので、古代以降であり、古代の遺物・遺構が圧倒的に少ない現状からすれば、中・近世の時期のものとして考えたほうが良いものとする。

なお、鉄滓が32・34号溝より出土しているが、所属時期は不明である。



第192図 鉄製品出土分布図



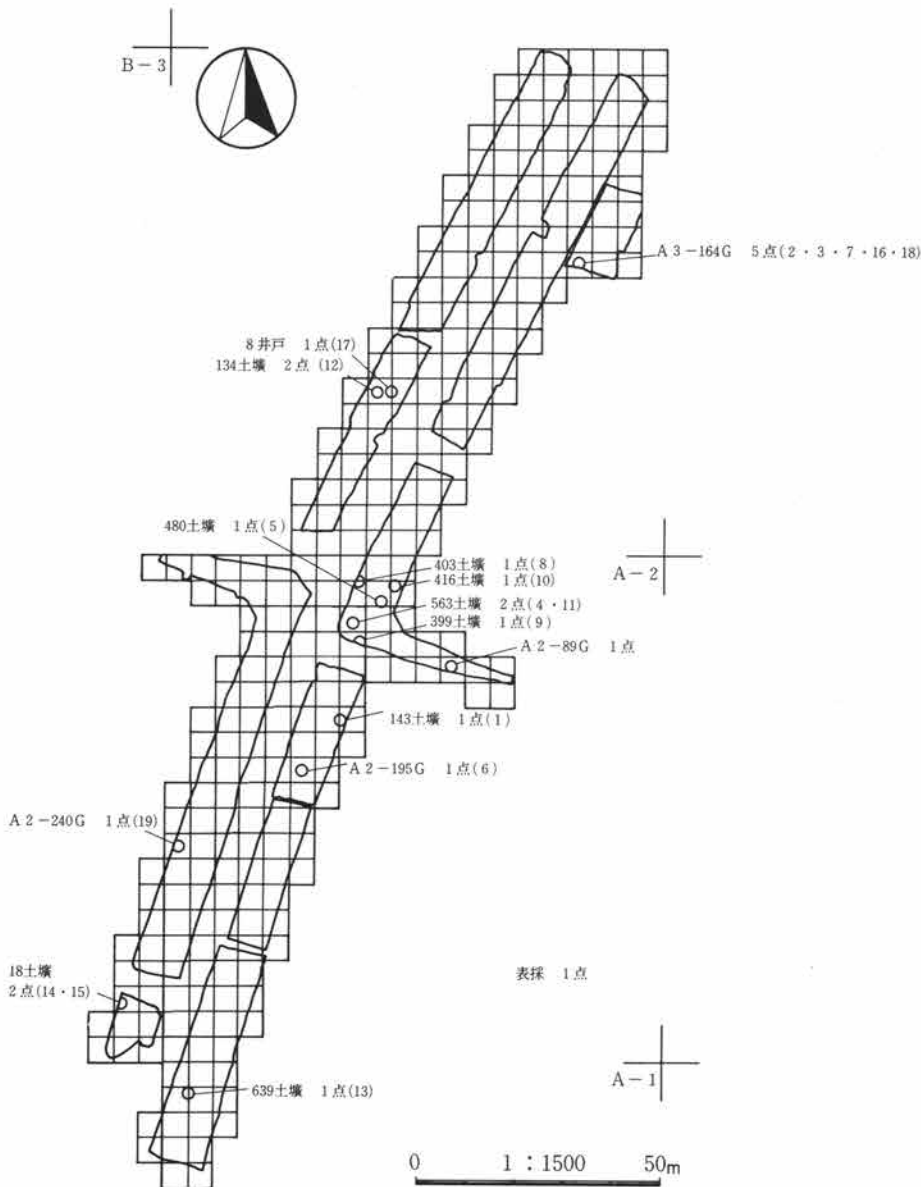
第193図 鉄製品実測図

9. 古 銭 (第195図)

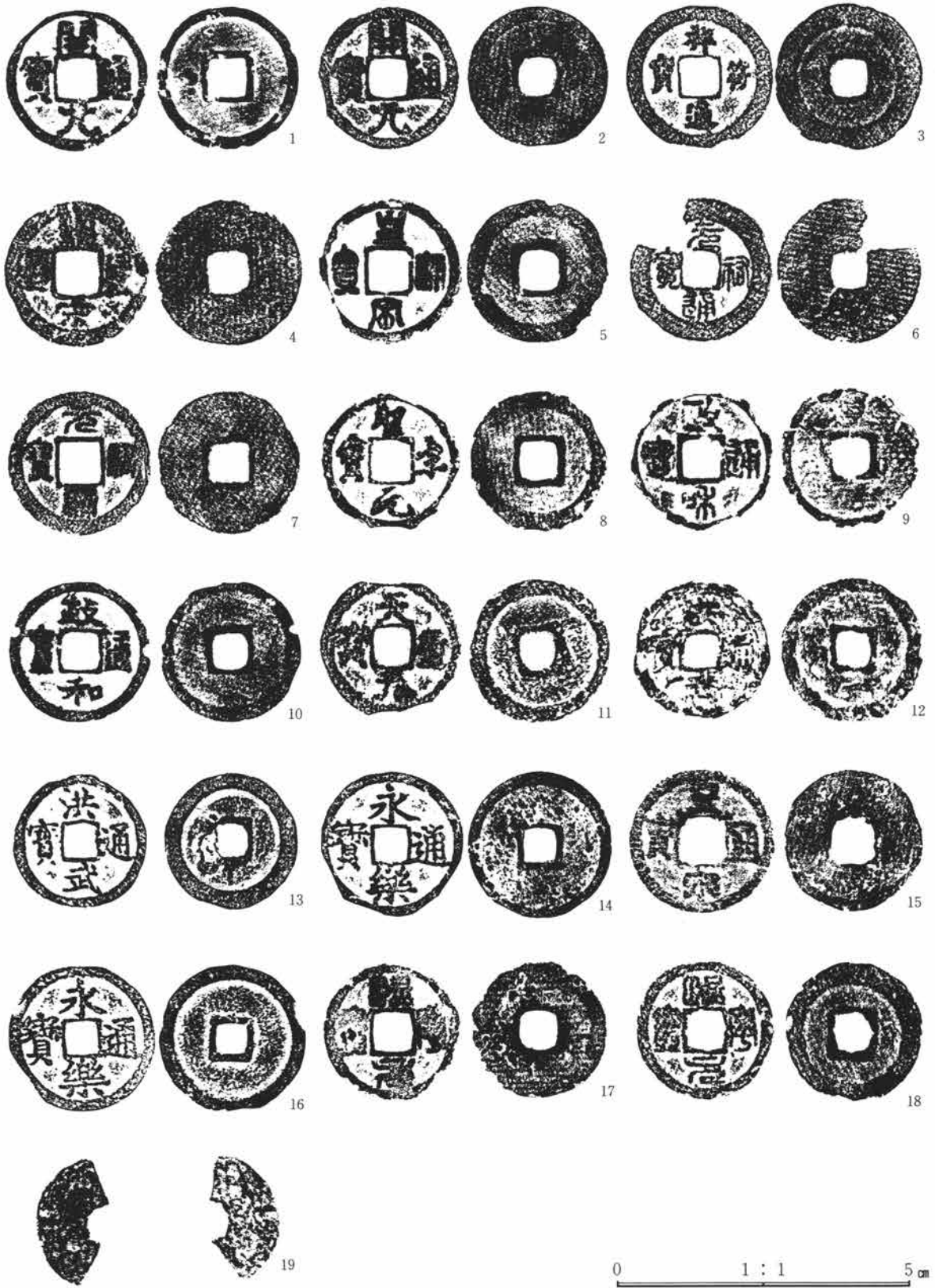
本遺跡出土の古銭の総数は19枚を数え、うち16枚が渡来銭である。渡来銭の内訳は、唐銭2枚（開元通宝2枚）、北宋銭8枚（祥符通宝1枚、皇宋通宝真書1枚、同篆書1枚、元祐通宝篆書2枚、聖宋元宝真書1枚、政和通宝真書1枚、同篆書1枚）、西夏銭1枚（天盛元宝1枚）、明銭5枚（洪武通宝2枚、永楽通宝3枚）であり、北宋銭の比率がやや多い。

初鑄年代は開元通宝の西暦621年から永楽通宝の西暦1408年となり、渡来銭の年代をほぼ網羅している。また、邦銭（治平通宝）2枚の出土も見られる。

古銭の出土場所は土坑跡及び遺構確認面採取、表面採取であり、地点も広域であることから、備蓄銭ではなく、墓坑に副葬されたものの可能性が高い。しかしながら、下掲図の示すように古銭出土土坑（墓坑）は密集しておらず、同一の墓域とは断定できないが、出土古銭よりの年代ではおよそ13世紀から17世紀に至る墓域の存在が想定される。



第194図 古銭出土分布図

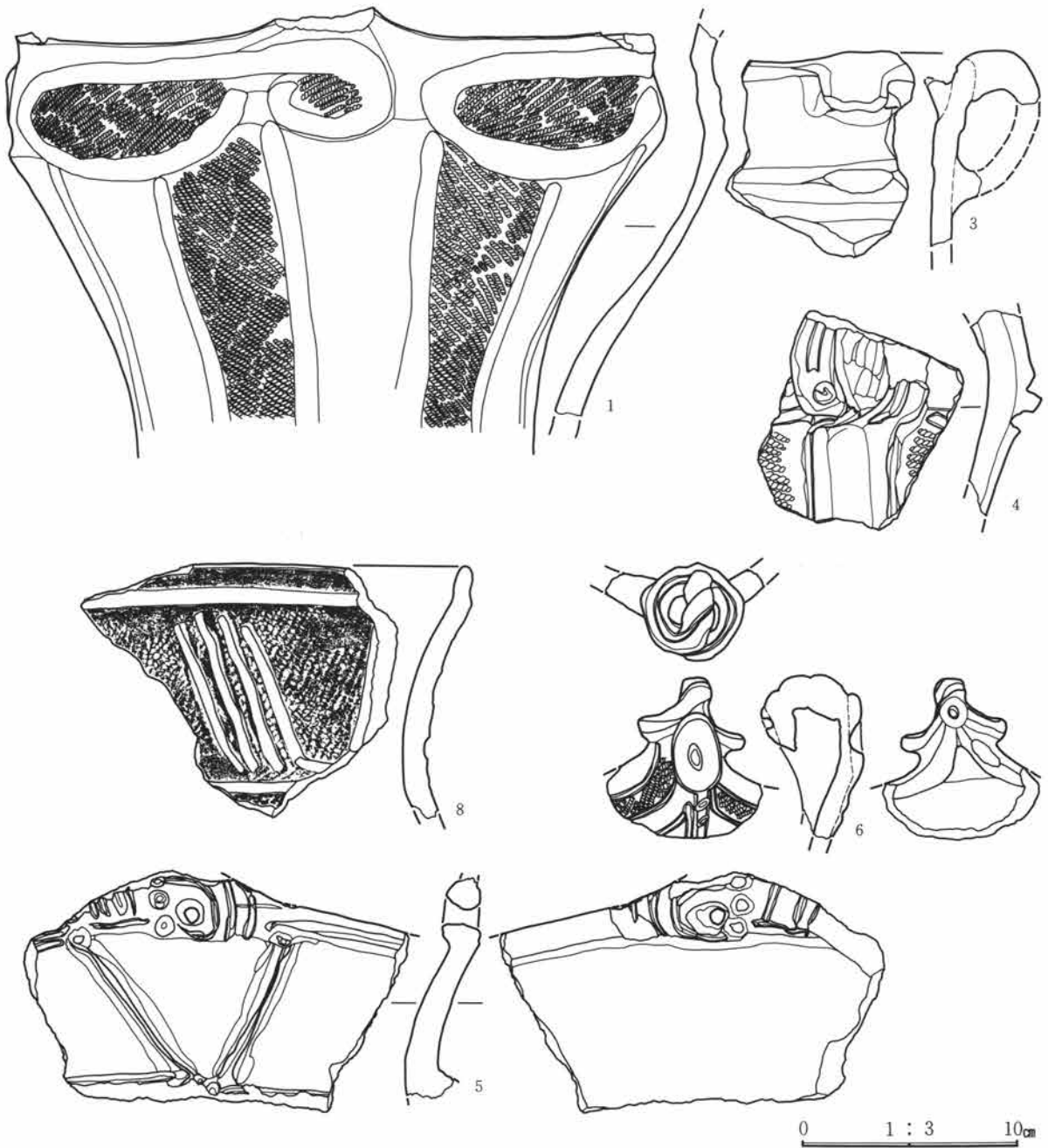


第195圖 古錢拓本

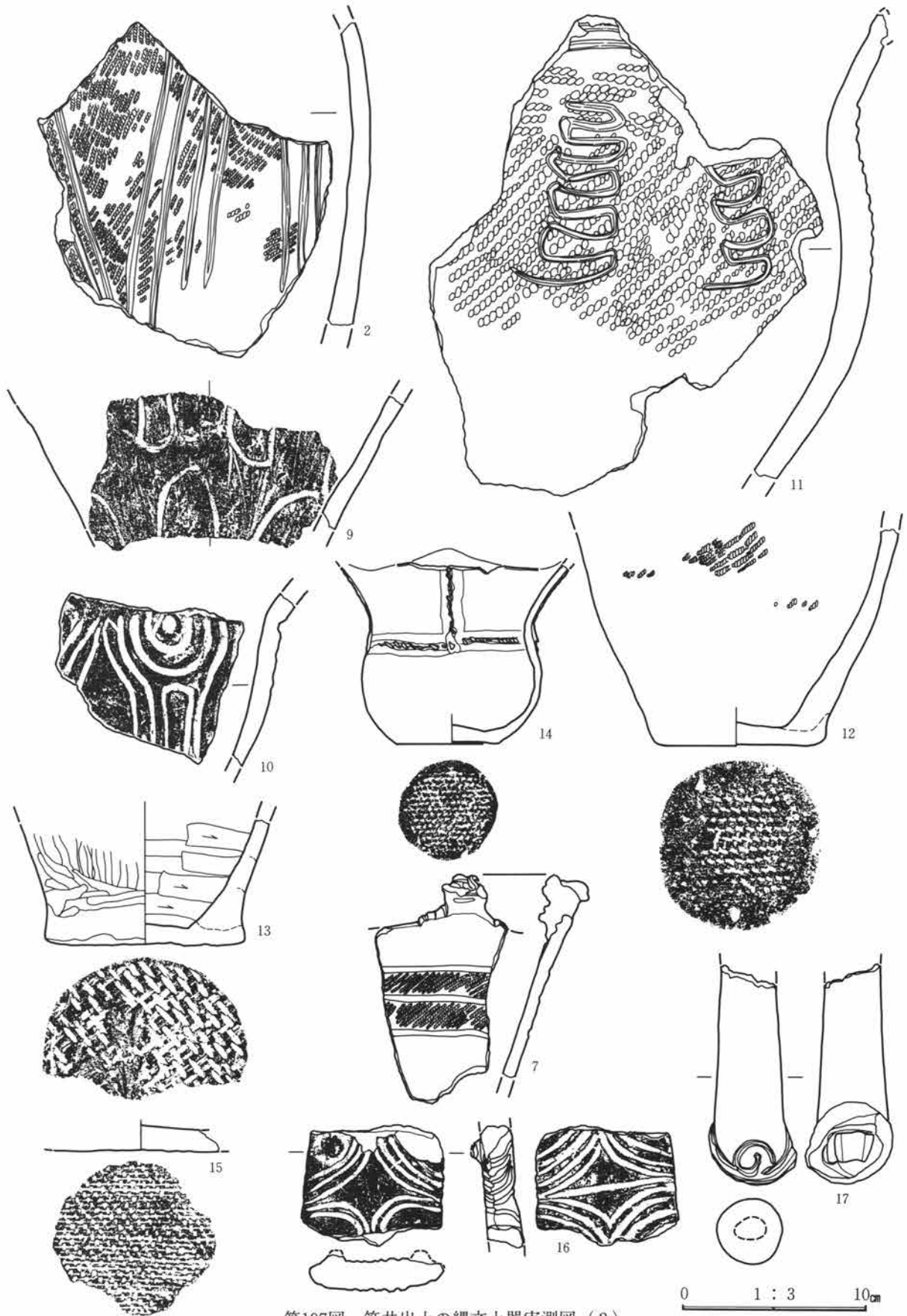
第5章 付 篇

第1節 筑井八日市出土縄文土器について

柴田常恵等が調査した筑井八日市遺跡南の敷石住居及び、筑井八日市遺跡から、中期後半から後期前半の遺物が出土しており、この付近では表採や個人所蔵の当該時期の遺物が認められる。以下に図示する資料も個人所蔵の遺物を借り受けたもので、参考資料として実測図を掲載した。



第196図 筑井出土の縄文土器実測図（1）



第197図 笄井出土の縄文土器実測図(2)

第2節 木瀬古墳群について

この古墳群は古墳総覧では13基あまりの古墳が登録されている。現況でその所在を確認できるのは半数近くである。現実に発掘調査されたものは今の所今回の調査で検出した古墳以外に無く資料に極めて乏しいのが現状である。ここでは、小島田支群・女屋支群・東上野支群の3支群に分けて述べる。

小島田支群は、総覧記載の9基の他に、記載漏れ1基と今回1基調査で確認し、合計11基である。何れも崖線状に連なる形で分布しているのが特徴である。特に十字路西角のものが古墳とすれば崖線下にも古墳が存在したものと考えられる。崖線状に連なる古墳は、東南に下っていくと今井神社古墳に連なるものである。古墳群の中には前方後円墳も1基含まれておりこの古墳群の盟主的存在と考えて良いだろう。また、埴輪を持つ古墳と持たない古墳が混じりあっており時期的には6世紀後半から7世紀代にいたるものと考えて良い。

この小島田支群から北西に上がると現在は1基も残っていないが埴輪の存在などから女屋支群とでも言うべき古墳集中区がある。合計9基がここに集中し、埴輪を有する古墳が多い。時期的には小島田支群より少し遡り6世紀代を中心にした古墳群と考えている。古墳総覧では全く未記載であるが、古墳総覧作成時には現存していた古墳が多い。

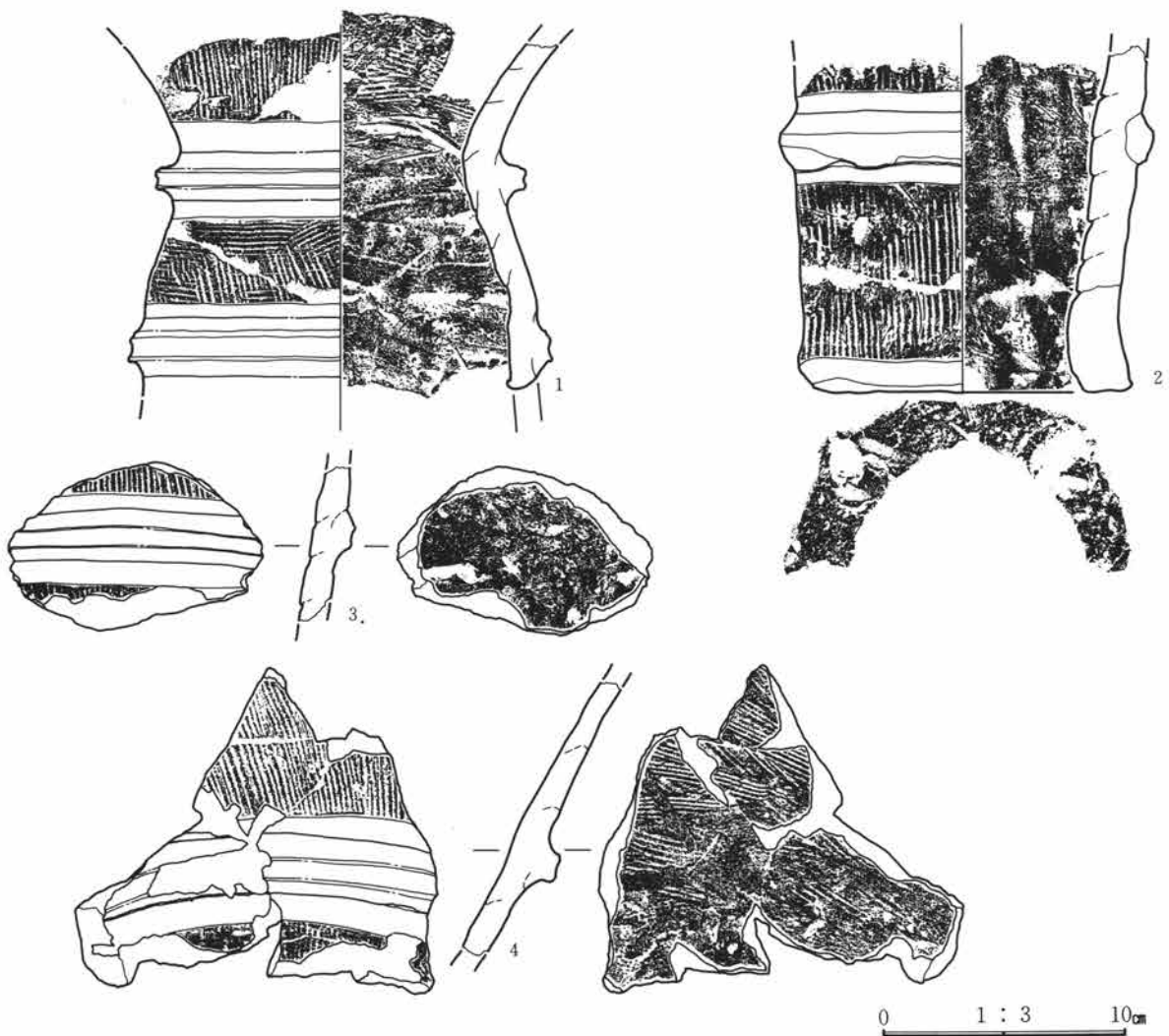
この女屋支群の更に北西部には東上野に前方後円墳1基と円墳2基が確認される。いずれも埴輪の存在が少量ながら確認でき、また前方後円墳の主体部はごく一部が面取りされた角閃石安山岩を使用しているのが確認出来たので6世紀後半段階の古墳と考えられる。

この3つの古墳群について、特にその年代については基本的に6世紀後半から7世紀代に入るものと考えられる。その根拠は前述したが、まず埴輪が古墳群中の約半数の古墳から出土し、その埴輪はタテ一次ハケメのみの円筒埴輪が圧倒的に多いこと、そして、円墳がほとんどで、5面削りした角閃石安山岩を使用した横穴式石室のものが分布調査によると多いことなどからである。また、これに遡る古墳も小島田八日市遺跡の中の埴輪の中から横刷毛調整のものがごく一部出ている事から5世紀後半から6世紀初頭に遡る古墳が存在するものと思われるがいずれにしても基数は少ないだろう。

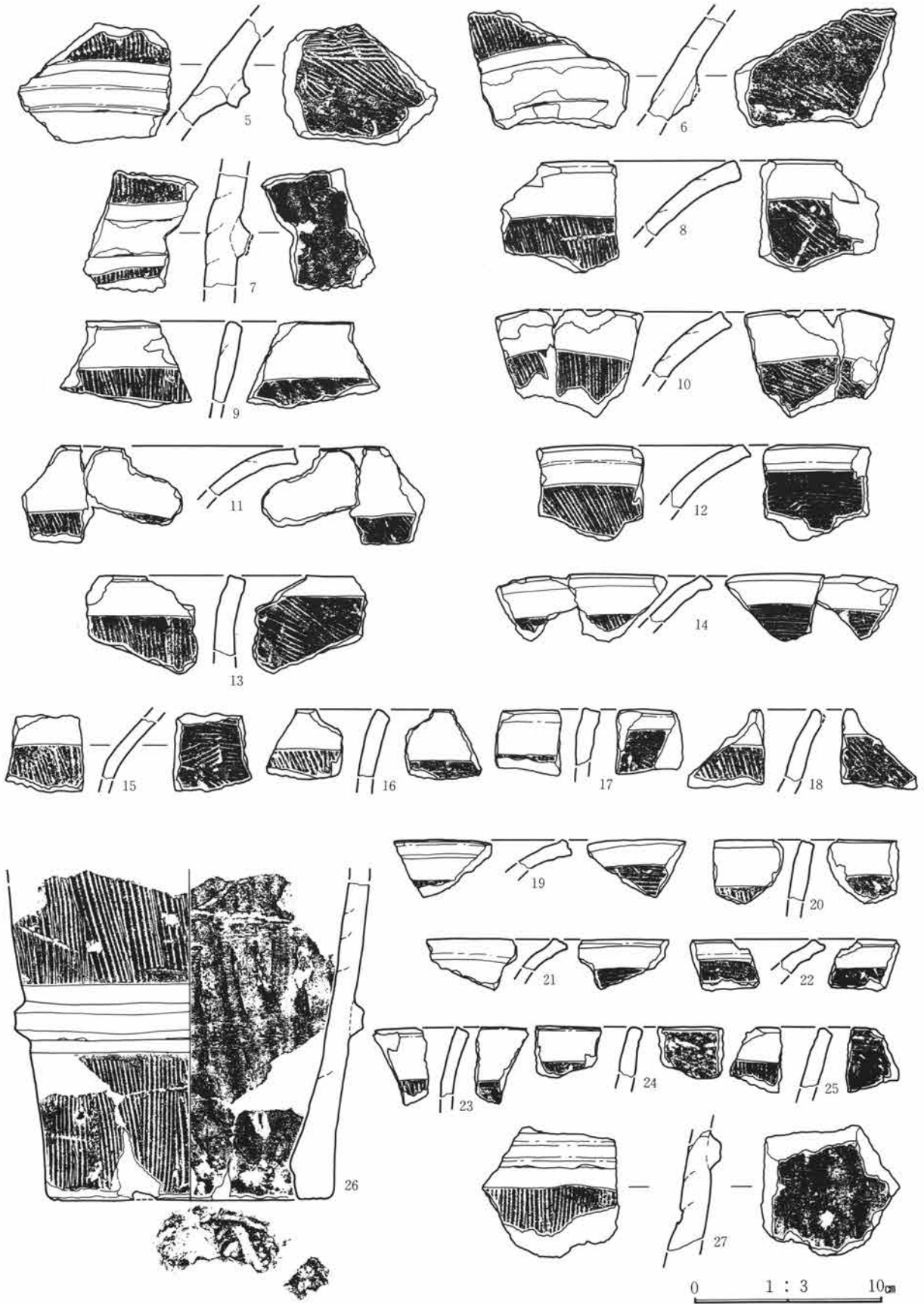
木瀬古墳群一覧表

小島田支群	
1	(旧木瀬村10号) 消滅 復元長21m+ 前円墳 付近に角安五面削石あり。埴輪(人物・鳥)出土。
2	(旧木瀬村11号) 消滅 円墳 檜出土。
3	(旧木瀬村13号) 消滅 円墳 金環・切子玉・勾玉出土。
4	(旧木瀬村12号) 消滅 円墳 金環・人歯出土。
5	(今回調査古墳) 直径?15m 円墳?埴輪出土 6世紀後半
6	(旧木瀬村9号墳) 消滅 円墳 若干の高まり。切石1つと小石集積。馬具・刀・鏃出土。
7	やや高まりあり。角安五面削石あり。
8	(旧木瀬村8号墳) 消滅 復元長21m 円墳 昭和40年前橋市調査。昭和55~56年石仏4体掘り崩した時には何も出ず。(前橋市史1巻)
9	(旧木瀬村7号墳) 残存長8m 復元長6m 円墳墳丘の廻り削減。鏡出土。
10	(旧木瀬村6号墳) 残存長10m 復元長15m 円墳 墳丘残り良好
11	(旧木瀬村5号墳) 残存長5m 復元長9m 円墳 墳丘西半分残る

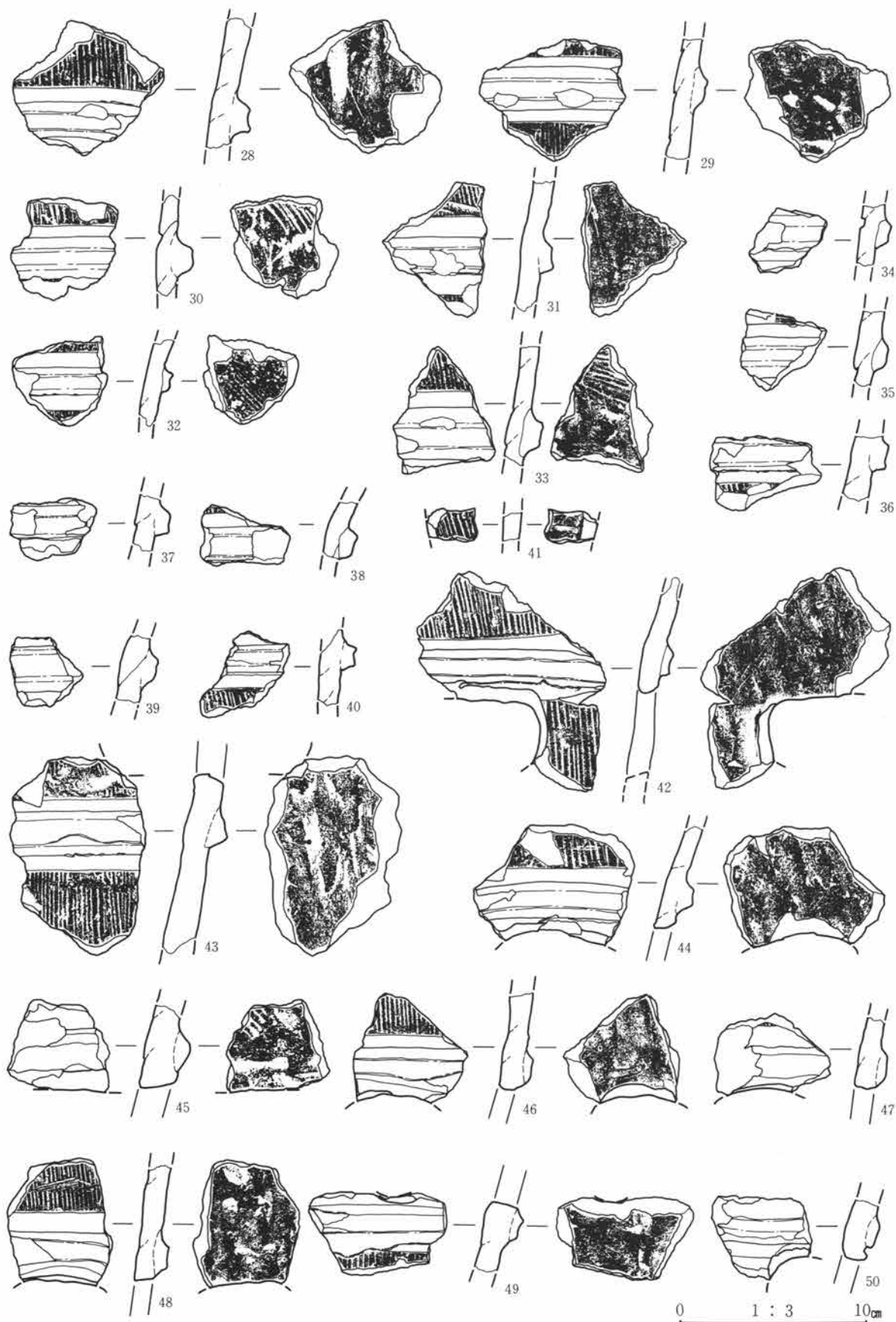
女屋支群（情報のほとんどは女屋和志雄氏による）	
1	消滅角安五面削石が列をなして出土。現在も6個あり。
2	現存径15m 高2m 円墳角安五面削石、列状に残る。墓地のため上部削平。
3	消滅角安五面削石が10~20個あり。今回の女屋古墳の埴輪採集資料はすべてここから表採。
4	消滅 奥壁輝石安山岩・河原石積の石室
5	消滅 須恵器出土 昭和45年土地改良事業により削平。
6	消滅 昭和45年土地改良事業により削平。
7	消滅 昭和45年土地改良事業により削平。右側壁の石列出土。
8	消滅 周堀状に窪みあり。
9	消滅 埴輪かって表採。直刀・勾玉出土。
東上野支群	
1	（旧木瀬村1号墳）現長20m 復元長60m 前円墳 角安五面削石出土。直刀・鐵出土。
2	（旧木瀬村2号墳）現径10m 復元長18m 円墳 埴輪出土。
3	（旧木瀬村3号墳）消滅 復元長18m 円墳 角安が石垣として使用。直刀・鐵・須恵器出土。



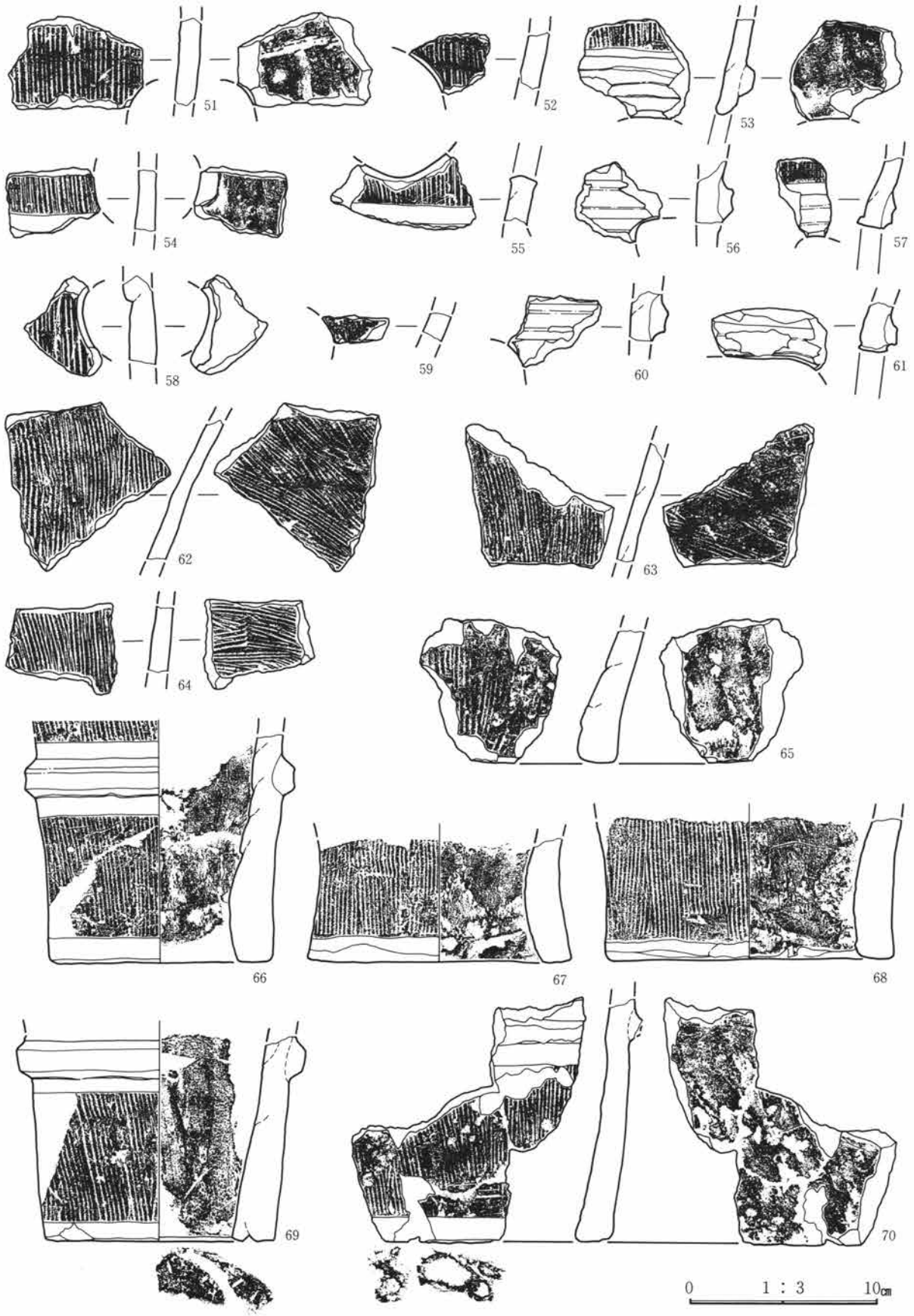
第198図 女屋3号墳出土の埴輪実測図（1）



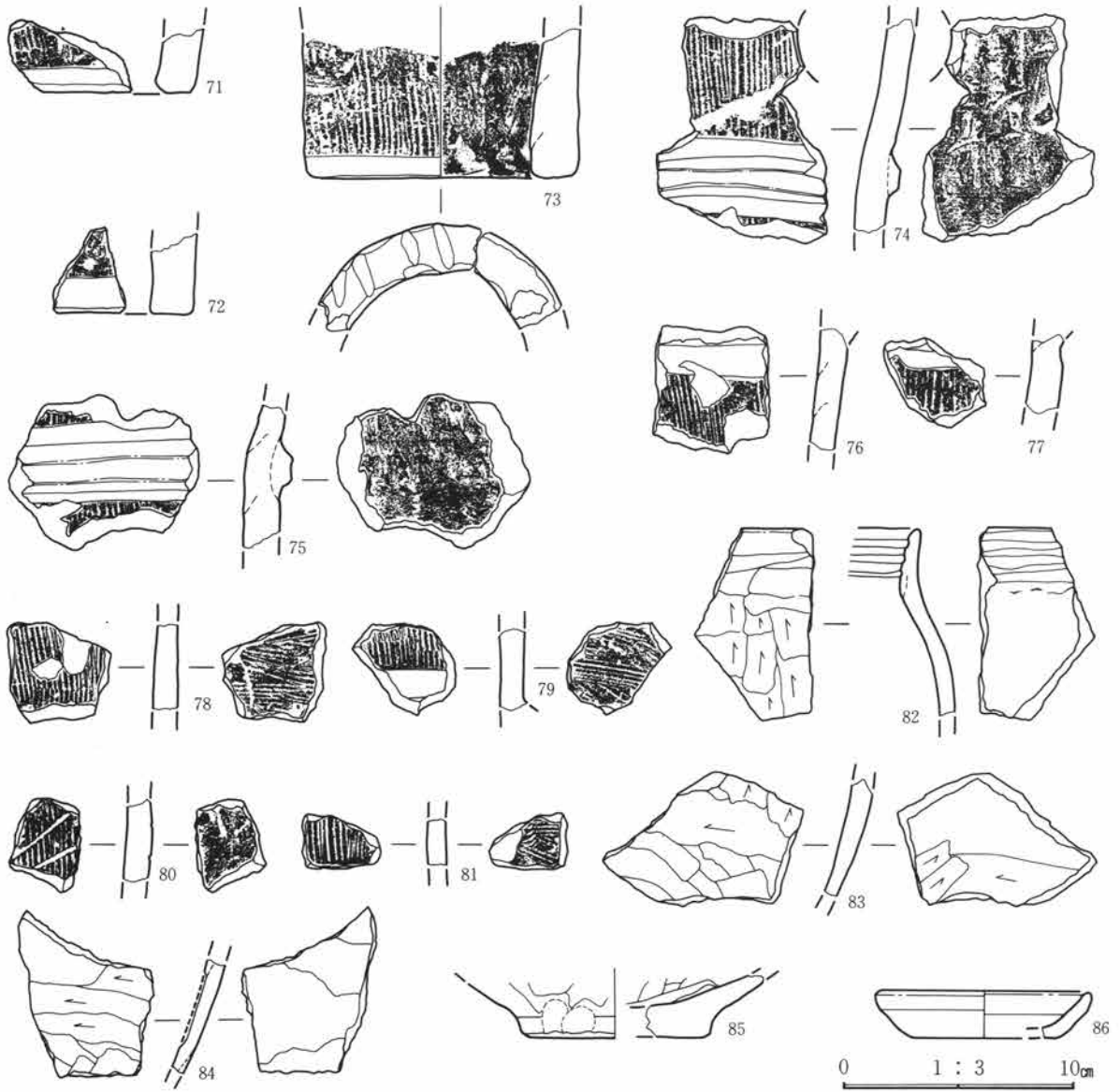
第199図 女屋3号墳出土の埴輪実測図(2)



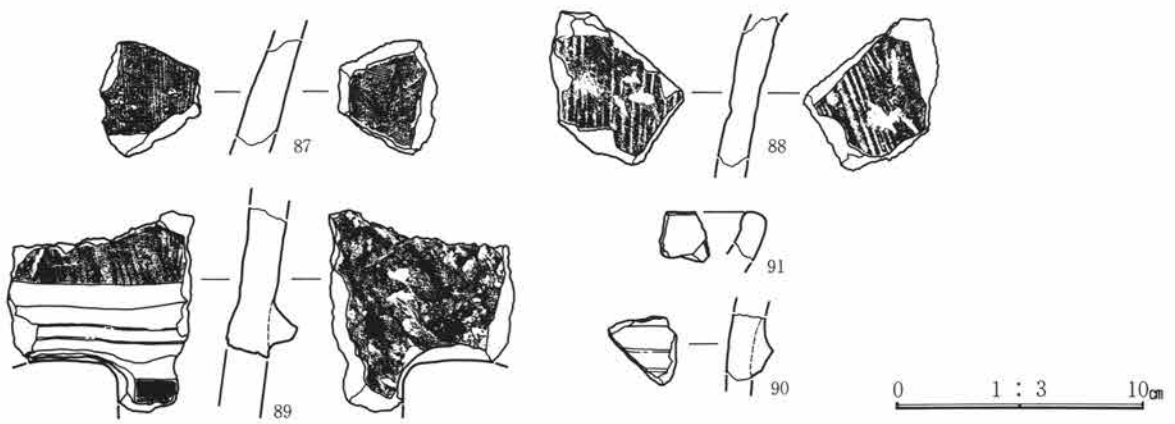
第200図 女屋3号墳出土の埴輪実測図(3)



第201図 女屋3号墳出土の埴輪実測図(4)



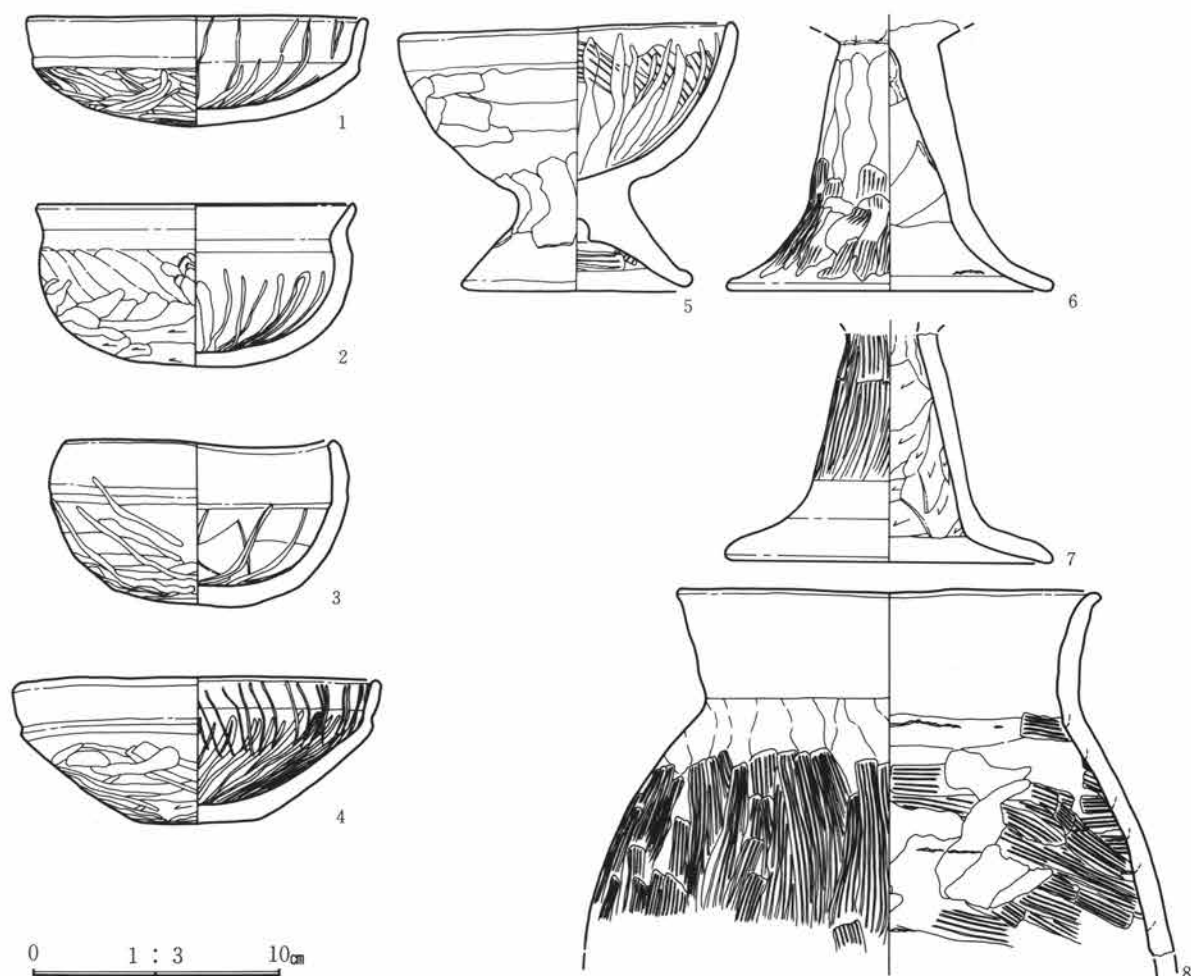
第202図 女屋3号墳出土の埴輪・土器実測図(5)



第203図 木瀬出土の埴輪・土器実測図

第3節 笄井出土の土師器について

この土師器は小島田八日市遺跡からは少し離れた地点から出土したものである。いずれも、遺跡調査中に借りて実測をさせていただいたものである。土師器資料は坏が2点、碗が2点、台付碗が1点、高坏脚部が2点、甕が1点である。坏（1・4）はいずれも丁寧な造りで内外面に磨きが施されており時的にも6世紀前半に比定されるものである。碗（2・3）のうち2は内斜口縁のもので、3は単純に内湾する口縁のものでこれは5世紀後半頃に比定できるものであろう。5の台付碗は非常に珍しいものであまり類例を知らない。特に台の内面に穿孔を意識したような深い窪みを有しており仮器を意識した造形である。碗の造り自体は3の碗に近いもので時的にも近いものと考えられる。高坏の脚部（6・7）はいずれも造りや土質も近似しており、時的にも5世紀後半段階と考えて良いだろう。甕の胴上半部8は丁寧な刷毛調整が施されており時的には5世紀後半でも少し早い段階のものと考えて良いだろう。全体的にこの土師器群をみると時的には5世紀中頃から6世紀前半のなかで納まる時期のものと考えられる。



第204図 笄井出土の土師器実測図

第6章 自然科学分析

第1節 地質・火山灰同定

古環境研究所

1. はじめに

赤城火山南麓の台地上に位置する小島田八日市遺跡の発掘調査では、縄文時代草創期、早期、前期などの土器を中心とする遺物が多く検出された。それらの層位を明らかにするために野外地質調査を行って地質層序を記載するとともに、テフラ検出分析を行い示標テフラ層の同定、検出を試みた。

2. 地質層序

(1) 拡張区

ここでは縄文時代草創期および縄文時代早期ならびに前期の土器の包含層とその上下の地層が良く観察できた(図1)。ここでは成層した砂礫層(層厚110cm以上)の上位に、とくに砂に富む暗褐色土(4層, 層厚15cm)、暗褐色砂質土(3層, 層厚18cm)、暗褐色砂質土(2層, 層厚13cm)、暗褐色作土(1層, 層厚10cm)の連続が観察できた。成層した砂礫層には、上流域に厚く堆積する大胡火砕流堆積物に由来すると考えられる最大径88mmの円磨された軽石などが含まれている。3層からは縄文時代早期と縄文時代前期の土器が検出された。また縄文時代草創期の土器も少量認められた。4層からは縄文時代草創期の土器が多く検出された。人為的に攪乱を受けた作土を除く土壌について、示標テフラを検出するためにテフラ検出分析を行った。

(2) 深掘第2地点

縄文時代草創期の遺物包含層の層位を確定するために2カ所で深掘調査が行われた。より南に位置する深掘第2地点では、下位より暗灰色泥流堆積物(層厚60cm以上)、褐灰色砂質シルト層(層厚23cm)、灰色砂質シルト層(層厚8cm)、暗灰色腐植質シルト層(層厚12cm)、黒褐色泥炭層(層厚4cm)、成層したテフラ層(層厚38cm)、黄灰色シルト層(層厚5cm)、成層した黄灰色砂礫層(層厚210cm)、暗褐色作土(層厚31cm)の連続が認められた。成層した黄灰色砂礫層は、縄文時代草創期の遺物包含層の下位の砂礫層と同一地層で、最大径88mmの亜円礫が含まれている。

泥流堆積物には、最大径260mmの亜円礫や亜角礫が含まれている。さらに成層したテフラ層は、下部の遊離結晶に富む黄色細粒軽石層(層厚21cm)と、上部の成層した桃色がかった灰色の細粒火山灰層(層厚17cm)から構成されている。下部のテフラについてテフラ検出分析を試みた。

(3) 深掘第1地点

深掘第1地点では、下位より暗灰色泥流堆積物(層厚80cm以上)、暗灰色腐植質シルト層(層厚48cm)、暗褐色泥炭層(層厚3cm)、成層したテフラ層(層厚33cm)、成層した青灰色砂層(層厚38cm)、黄灰色シルト層(層厚59cm)、成層した黄灰色砂礫層(層厚152cm)、暗褐色作土(層厚23cm)の連続が認められた。成層した黄灰色砂礫層は縄文時代草創期の遺物包含層の下位の砂礫層と同一地層で、最大径118mmの亜円礫が含まれている。

泥流堆積物には、最大径260mmの亜円礫や亜角礫が含まれている。成層したテフラ層は、下部の遊離結晶に富む黄色細粒軽石層（層厚16cm）と上部の成層した桃色がかった灰色の細粒火山灰層（層厚17cm）から構成されている。青灰色砂層中には白色軽石の濃集部（層厚5cm）が認められた。この濃集部についてテフラ検出分析を試みた。

3. テフラ検出分析

(1) 分析の目的と方法

縄文時代の土器の包含層とその上下の土層について示標テフラを検出することを目的にして、また遺物包含層の下位に認められた軽石層および軽石の濃集層について示標テフラとの同定を行うためにテフラ検出分析を試みた。拡張区では基本的に5cm連続で採取された試料のうち、5cmおきの5試料を分析対象とした。分析対象とした試料は、合計7点である。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析結果を表1に示す。拡張区では、いずれの試料にも火山ガラスが比較的多く認められた。火山ガラスの形態はスポンジ状または繊維束状に発泡した軽石型ガラスに富み、平板状のいわゆるバブル型ガラスも少量認められる。

大部分のガラスは透明であるが、試料番号3および5に褐色のバブル型ガラスがごく少量認められた。

深掘第2地点試料番号1には、白色軽石が多く含まれている。軽石はスポンジ状または繊維束状によく発泡しており、最大径は31mmである。斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。深掘第1地点試料番号1にも、白色軽石が多く含まれている。軽石はスポンジ状または繊維束状によく発泡しており、最大径は46mmである。斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。深掘第2地点試料番号1および深掘第1地点試料番号1に含まれる軽石は同じ特徴をもつ。深掘第1地点試料番号1に含まれる軽石は、下位の成層したテフラから水流により二次的に堆積したものと考えられる。

4. 考 察

拡張区の試料番号3および5にごく少量含まれる褐色のバブル型ガラスは、その特徴や層位などから約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 町田・新井, 1978）に由来すると考えられる。攪乱作用や再堆積作用などによるテフラ粒子の移動は、一般に下方より上方への移動が大きいと考えられることから、K-Ahの降灰層準は試料番号5により近いものと考えられる。ここではK-Ahの降灰層準を3層中と考えておく。

深掘第2地点の成層したテフラは、下部が軽石層で上部が成層した細粒の火山灰層からなる層相、および軽石の斑晶として斜方輝石や単斜輝石が認められることなどから、約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石層（As-YP, 新井, 1962, 町田ほか, 1984）に同定される。また深掘第1地点の成層したテフラも層相からAs-YPに同定される。なお最下位の泥流堆積物については、すでに筑井八日市遺跡における

第6章 自然科学分析

地質調査の結果より、約2万年前に浅間火山で発生した山体崩壊とそれに伴う岩屑なだれに由来する前橋泥流堆積物と推定されている（群馬県埋蔵文化財調査事業団，未公表資料）。

以上の層位関係から、縄文時代草創期の遺物包含層（4層）はAs-YPの上位でK-Ahの下位にあると考えられる。また縄文時代早期および縄文時代前期の遺物包含層（3層）は、K-Ahの降灰層準付近にあると推定される。とくに示標テフラとの層位関係が明瞭な4層の堆積年代については、約1.3-1.4万年前より新しいと言える。なお前橋台地周辺では、約1.1万年前に浅間火山から噴出した浅間-総社軽石（As-Sj，早田，1990，1991）の存在が最近確かめられている。今後、このテフラ層と縄文時代草創期の遺物包含層との層位関係の解明が課題となる。

5. 小 結

小島田八日市遺跡において、野外地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った。その結果、下位より前橋泥流堆積物（約2万年前）、浅間-板鼻黄色軽石層（As-YP：約1.3-1.4万年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah：約6,300年前）の3層のテフラが認められた。示標テフラ層との層位関係から、縄文時代草創期の遺物包含層（4層）はAs-YPの上位でK-Ahの下位にあると考えられる。また縄文時代早期および縄文時代前期の遺物包含層（3層）は、K-Ahの降灰層準付近にあると推定された。

文 献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
町田洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p.143-163.
町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ-．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928.
早田勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，p.35-129.
早田勉（1991）浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.53，p.2-7.

表1 小島田八日市遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
拡張区	1	-	-	-	++	pm>bw	透明
	3	-	-	-	++	pm>bw	透明, 褐
	5	-	-	-	++	pm>bw	透明, 褐
	7	-	-	-	++	pm>bw	透明
	9	-	-	-	++	pm>bw	透明
深掘第2地点	1	++++	白	3.1	++++	pm	透明
深掘第1地点	1	++++	白	4.6	++++	pm	透明

++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm. pm: 軽石型ガラス, bw: パブル型ガラス.

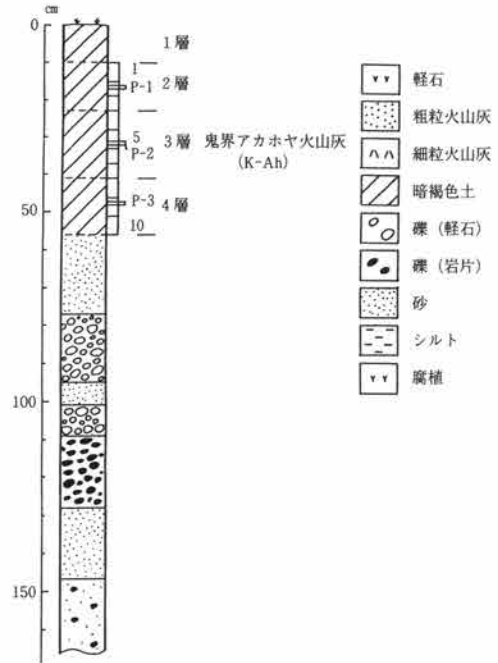


図1 小島田八日市遺跡拡張区の地質柱状図
数字はテフラ検出分析、P-数字は植物珪酸体分析の試料番号。

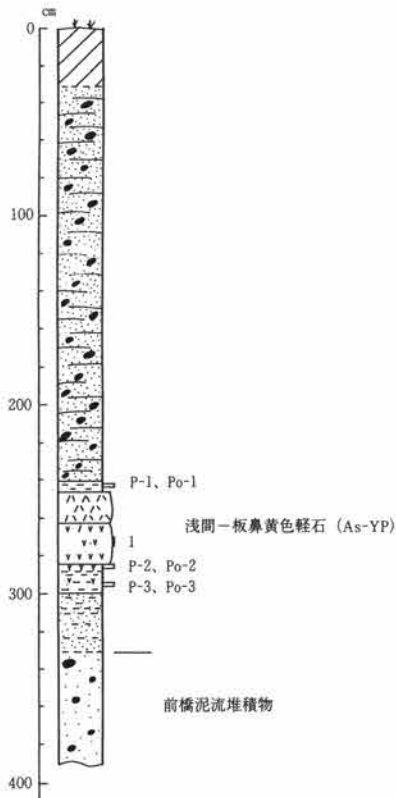


図2 小島田八日市遺跡深掘第2地点の地質柱状図
数字はテフラ検出分析、P-数字は植物珪酸体分析、Po-数字は花粉分析の試料番号。

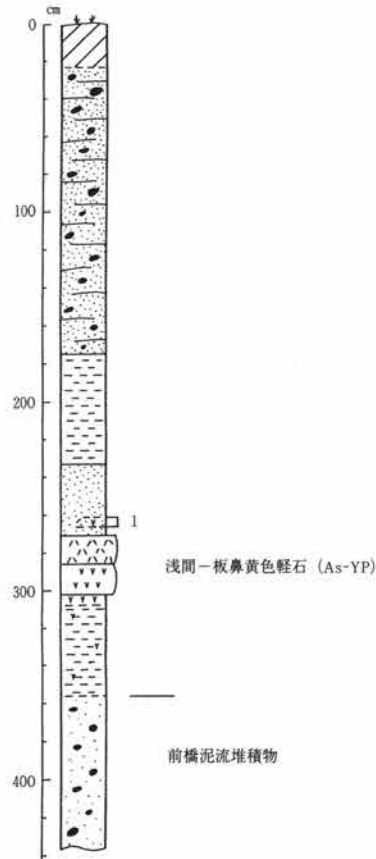


図3 小島田八日市遺跡深掘第1地点の地質柱状図
数字はテフラ検出分析の試料番号。

第2節 植物珪酸体分析

古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

本章では、同分析を用いて、小島田八日市遺跡における古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試料

試料は、拡張区、深掘第2地点、397号土壌、688号土壌、および124グリッドから採取された計14点である。採取層準の詳細については第1章を参照されたい。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料の絶乾（105℃・24時間）
- (2) 試料約1gを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40 μ m，約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20 μ m以下）除去，乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

4. 結果および考察

(1) 拡張区

2層から4層までの層準について分析を行った。その結果、4層（試料3、縄文時代草創期の遺物包含層）では、ウシクサ族（ススキ属など）やイネ科Bタイプ（ウシクサ族類似）、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）、棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも比較的低い密度である。このことから、同層の堆積当時は、ススキ属やクマザサ属が少量見られるものの、イネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったものと推定される。

3層（試料2、縄文時代早期および縄文時代前期の遺物包含層、K-Ah混り）では、ウシクサ族（ススキ属

など)やイネ科Bタイプ(ウシクサ族類似)などが増加しており、タケ亜科A1aタイプ(ネザサ節など)も少量検出された。2層(試料1)ではこれらの分類群がさらに増加している。これらのことから、3層および2層の堆積当時は、ススキ属を主体とし、クマザサ属やネザサ節なども見られるイネ科植生であったものと考えられる。これらの植物は、比較的乾燥したところに生育していることから、当時は比較的乾いた土壌条件で推移したものと推定される。また、ススキ属やネザサ節は林床では生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったものと推定される。

(2) 深堀第2地点

浅間一板鼻黄色軽石層(As-YP:約1.3-1.4万年前)の上下層について分析を行った。

その結果、As-YPより下位の砂質シルト層(試料4)では棒状珪酸体が多量に検出され、ヨシ属やカヤツリグサ科なども見られた。このことから、当時はヨシ属やカヤツリグサ科などが生育する湿地的な環境であったものと推定される。

As-YP直下層(試料2,3)では、棒状珪酸体やヨシ属は減少傾向を示し、かわってイネ科Cタイプ(サヤヌカグサ属類似)や同Dタイプ(サヤヌカグサ属類似、細型)が急激に増加している。また、ウシクサ族(ススキ属など)や樹木起源(針葉樹、マツ属?)も検出された。イネ科CタイプやDタイプについては、現時点では給源植物が不明であるが、草本質の泥炭層などからしばしば多量に検出されていることから、湿地性の植物に由来するものと考えられる。これらのことから、同層準の堆積当時は湿地的な環境で推移したものと考えられるが、その周辺ではススキ属や針葉樹(マツ属?)も生育していたものと推定される。

As-YP直上層(試料1)では、イネ科CタイプやDタイプが多量に検出され、タケ亜科B1タイプ(クマザサ属など)も多く見られた。その他の分類群はほとんど検出されないか、検出されても少量である。これらのことから、As-YPの堆積によって一時的に植生が破壊されたが、イネ科CタイプやDタイプおよびクマザサ属などは比較的早い時期に再生したものと推定される。なお、クマザサ属は比較的寒冷なところに生育していることから、当時は比較的寒冷な気候条件であったものと推定される。

(3) 縄文時代草創期の古環境

縄文時代草創期とされる397号土壌と688号土壌の内部の土壌について分析を行った。また、124グリッドでは縄文時代草創期の遺物包含層および隆起線文土器直下層について分析を行った。これらの結果は、縄文時代草創期の土層(拡張区の4層)とほぼ同様であり、ウシクサ族(ススキ属など)やイネ科Bタイプ、タケ亜科B1タイプ(クマザサ属など)、棒状珪酸体などが少量検出された。ただし、隆起線文土器直下層では、植物珪酸体総量がかなり低い値であり、タケ亜科B1タイプ(クマザサ属など)は検出されなかった。

これらの結果から、縄文時代草創期の遺跡周辺はススキ属やクマザサ属などが少量見られるものの、イネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったものと推定される。なお、クマザサ属は比較的寒冷なところに生育していることから、当時は比較的寒冷な気候条件であった可能性が考えられる。

参考文献

- 杉山真二. 1987. 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号: 27-37
 杉山真二. 1987. タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号: 70-83.
 藤原宏志. 1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9: 15-29.

第6章 自然科学分析

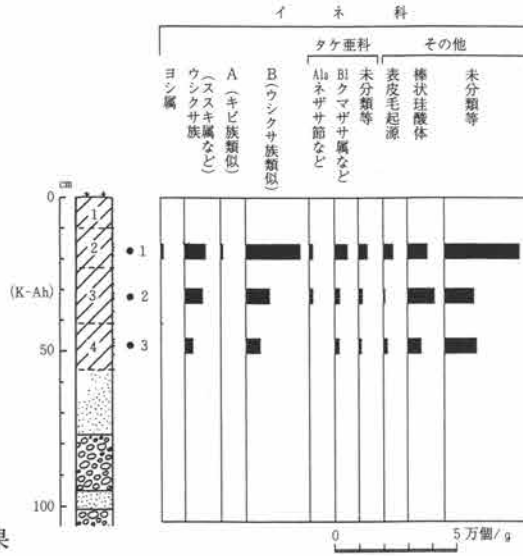


図1 拡張区の植物珪酸体分析結果

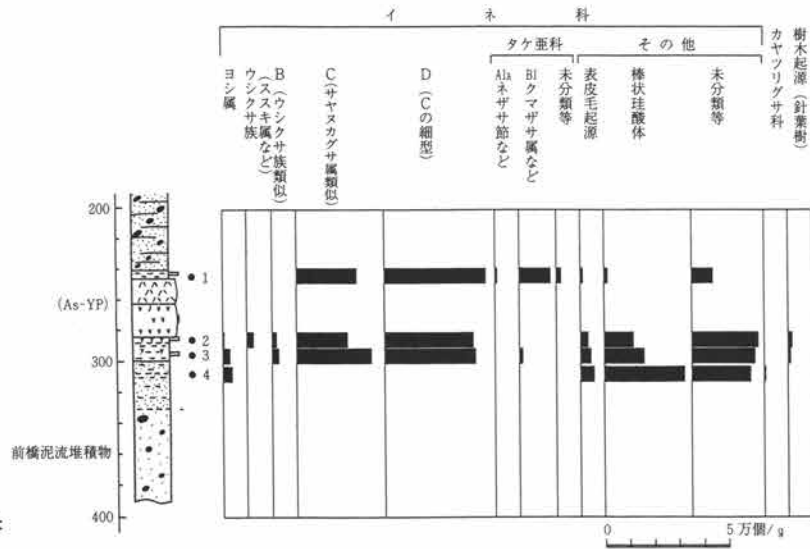
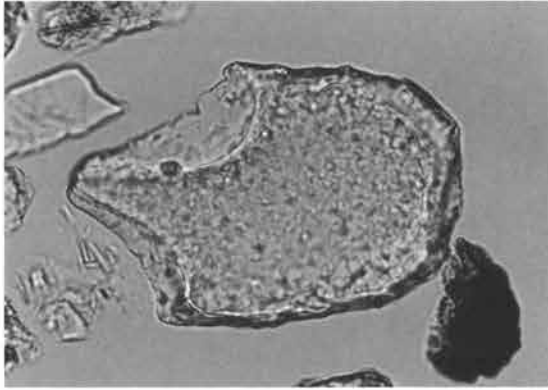


図2 深掘第2地点の植物珪酸体分析結果

植物珪酸体分析結果

(単位: ×100個/g)

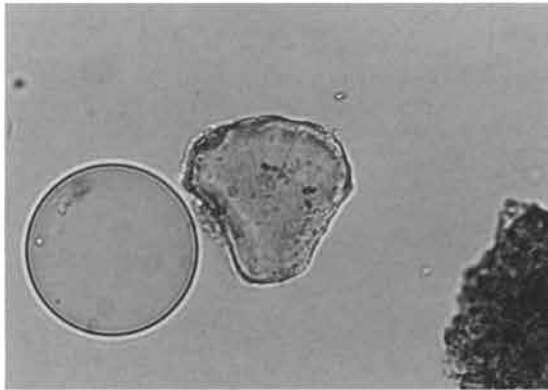
分類群	拡張区			深掘第2地点				397号土壌		688号土壌			124グリッド	
	1層	2層	3層	1層	2層	3層	4層	1層	2層	1層	2層	3層	隆起線文	草創期
	2層	3層	4層	YP直上	YP直下			底部	基部			底部	土器直下	包含層
イネ科														
ヨシ属	7				7	34	43							
ウシクサ族(ススキ属など)	81	75	27		22			23		14		15	30	27
Aタイプ(キビ族類似)	7													
Bタイプ(ウシクサ族類似)	213	96	55		14	27		79	8	51	27	30	37	86
Cタイプ(サヤカサカサ属類似)				248	209	301								
Dタイプ(Cタイプの細型)				412	367	376								
Eタイプ(くさび型)												15		
タケ亜科														
Alaタイプ(ネザサ節など)	15	14		5										
B1タイプ(クマザサ属など)	59	21	20	127		14		68	31	29	47	22		20
未分類等	44	14	7	16				23		7	20	7	7	13
その他のイネ科														
表皮毛起源	37	7	14	5	36	48	57	6		14	53	7	7	13
棒状珪酸体	88	110	55	11	115	164	326	34	23	43	53	45	7	73
茎部起源									15					
未分類等	308	123	143	90	274	253	248	135	61	116	160	45	15	186
カヤツリグサ科							7							
樹木起源(針葉樹)					14	7		6						
植物珪酸体総数	858	459	321	913	1058	1224	680	371	138	275	360	187	105	418



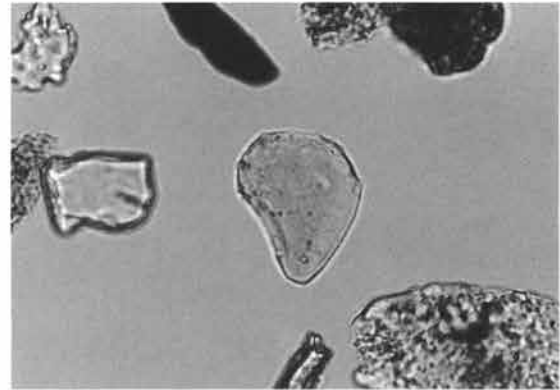
1 ヨシ属 深堀第2地点-3



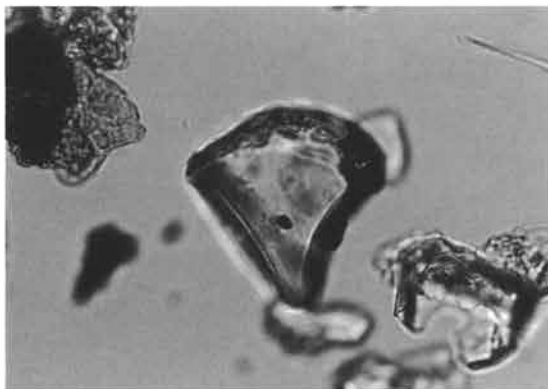
2 ウシクサ族 (ススキ属など) 拡張区-1



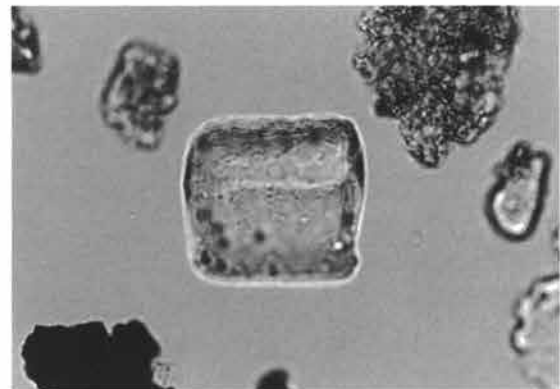
3 ウシクサ族 (ススキ属など) 拡張区-2



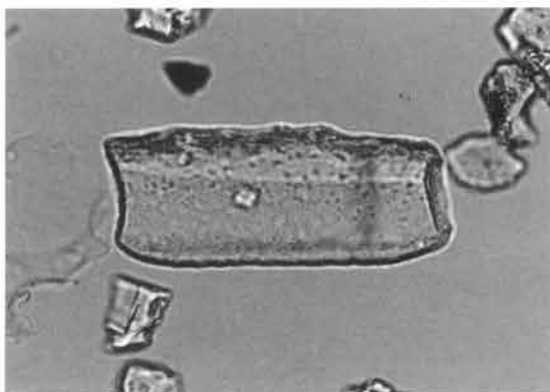
4 イネ科Bタイプ (ウシクサ族類似) 397号土坑-1



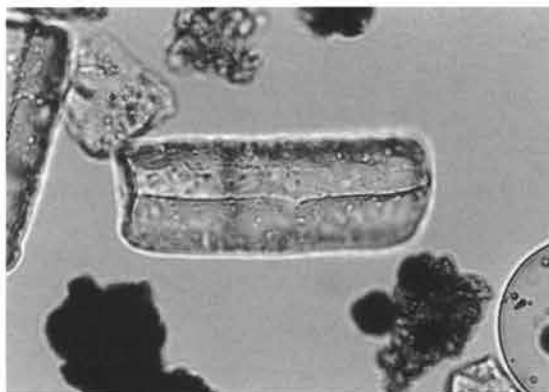
5 イネ科Cタイプ (サヤヌカグサ属類似) 深堀第2地点-2



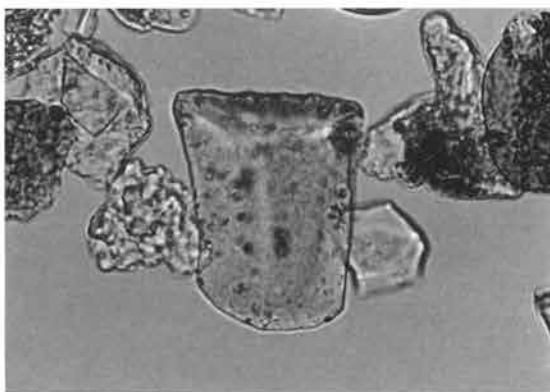
6 イネ科Cタイプ (サヤヌカグサ属類似) 深堀第2地点-2



7 イネ科Dタイプ (サヤヌカグサ属類似, 細型)
深堀第2地点-3



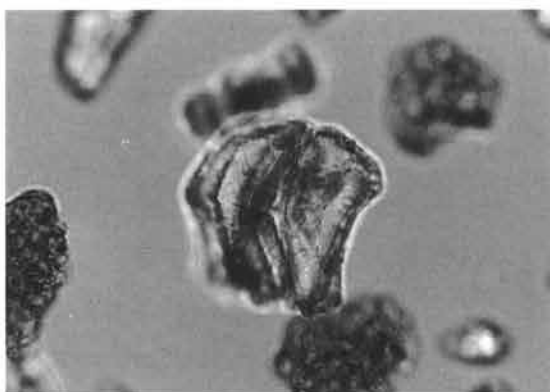
8 イネ科Dタイプ (サヤヌカグサ属類似, 細型)
深堀第2地点-2



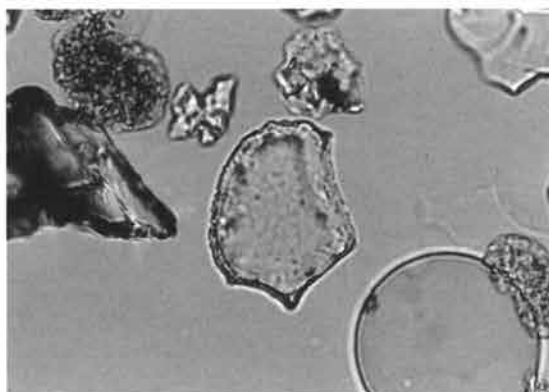
9 イネ科Eタイプ (くさび型) 124グリッド-3



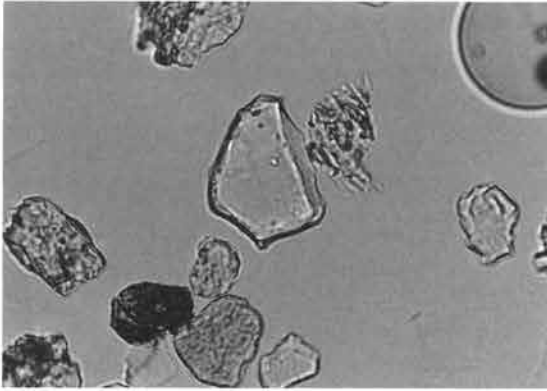
10 タケ亜科Alaタイプ (ネザサ節など) 拡張区-1



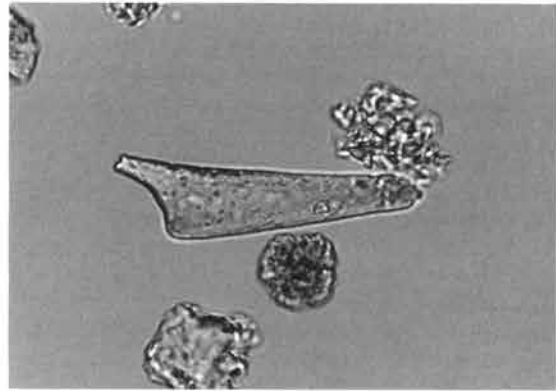
11 タケ亜科Alaタイプ (ネザサ節など) 拡張区-1



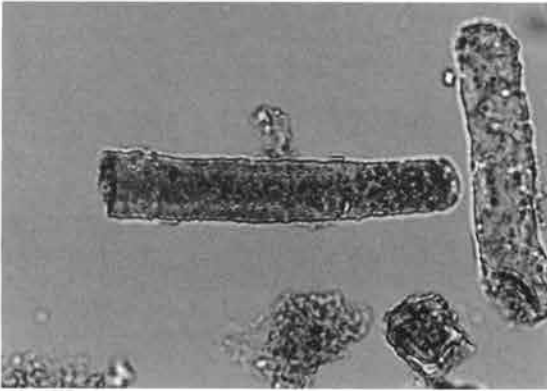
12 タケ亜科B1タイプ (クマザサ属) 397号土坑-1



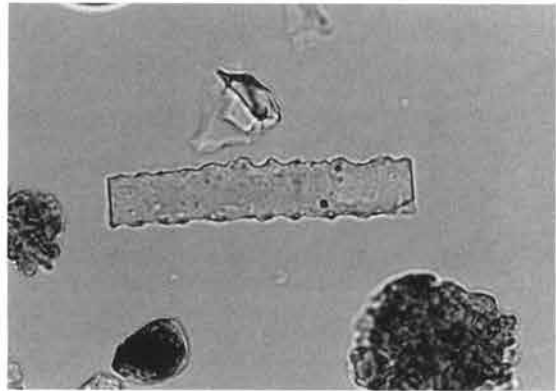
13 タケ亜科B1タイプ (クマザサ属) 深堀第2地点-1



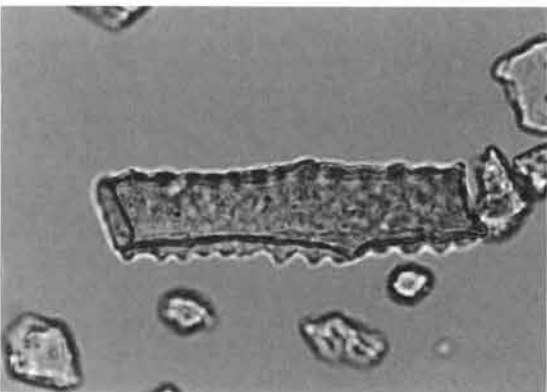
14 表皮毛起源 深堀第2地点-3



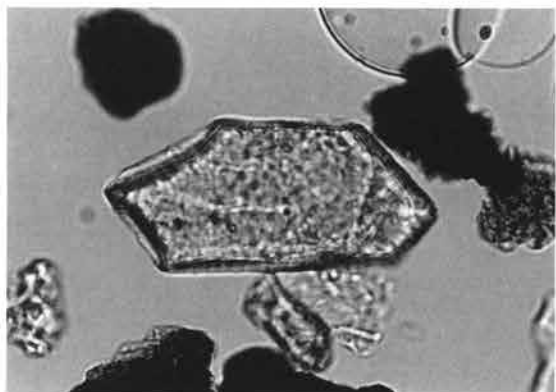
15 棒状珪酸体 拡張区-2



16 棒状珪酸体 397号土坑-1



17 カヤツリグサ科 深堀第2地点-4



18 樹木起源 (針葉樹) 深堀第2地点-2

第3節 花粉分析

古環境研究所

1. 試料

試料は、深掘第2地点の浅間一板鼻黄色軽石の直上のシルト層 (Po-1) と直下の腐植 (Po-2) である。

2. 方法

- 1) 試料を遠沈管に取り、5%水酸化カリウム溶液を加えてかき混ぜ、15分間湯煎する。
- 2) 0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除く。
- 3) 水洗し、25%フッ化水素酸溶液を加えて湯煎した後、30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 残渣に石炭酸フクシンを加え染色を行い、水洗をする。
- 7) 水量を調整した後、適量のグリセリンゼリーを加え暖めて、プレパラートを作製する。
以上の操作で、水洗は水を加え攪拌し1500rpmで2分遠心分離し上澄を捨てる。これを3・4回繰り返す。
- 8) 作成したプレパラートを200倍から900倍で鏡検。

3. 結果

分析の結果、Po-1はわずかし花粉・孢子粒が含まれておらず、Po-2からはやや豊産した。出現状況は別表に一覧する。なお、花粉粒が壊れたものが多く、As-YPの影響によって分解したとみられる。

Po-2では、樹木花粉が16と草本花粉が6の計22の分類群が出現した。比較的分類群数が少ないのは分解を受けていることと、著しく優占する分類群があるからである。Po-2の花粉群集は、マツ属（多くが単維管束亜属）とトウヒ属の高率で特徴づけられる。他にモミ属・ツガ属・カラマツ属の針葉樹とカバノキ属・コナラ属コナラ亜属・ハンノキ属の広葉樹が出現する。草本花粉は著しく低率であり、キク亜科・ヨモギ属・カヤツリグサ科などがわずかに出現するのみである。

4. 植生の推定

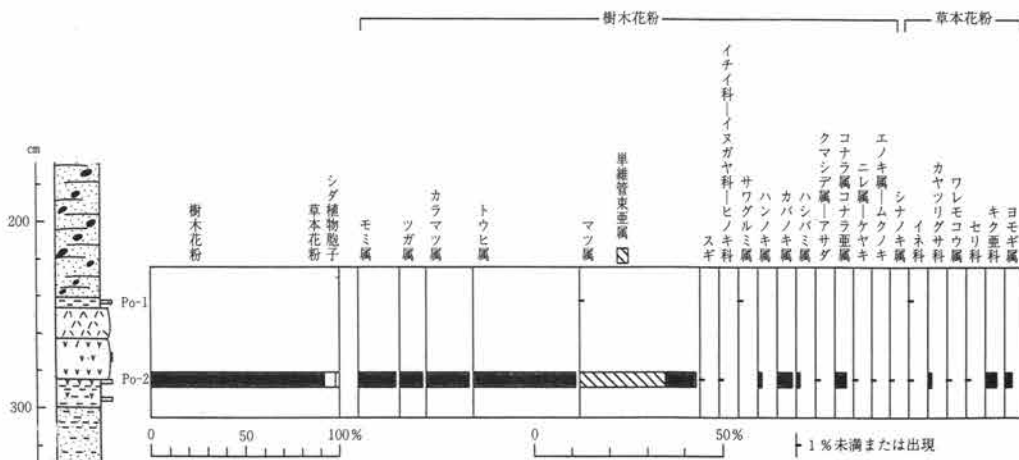
花粉の産出したPo-2の花粉群集は、マツ属（多くが単維管束亜属）・トウヒ属・モミ属・ツガ属・カラマツ属の針葉樹が主で、カバノキ属・コナラ属コナラ亜属・ハンノキ属がともなわれるのが特徴である。これは関東平野のこの時期に一般に認められる特徴である。たとえば辻ほか（1985）によって報告された前橋台地の同時期の花粉化石群集も同じ特徴をもつ。本遺跡のPo-2の花粉群集はより針葉樹が多い傾向があり出現する分類群もより単調である。同時期の植物化石群集は、辻ほか（1985）報告の前橋台地・東京都尾崎遺跡（関東第四紀研究会、1983）・栃木県二宮町（辻ほか）などに報告されており、いずれもチョウセンゴヨウ・バラモミ節・カラマツ属を主要素としている。このことはAs-YP直前の約1万4千年前に関東平野の平野部にこれらの森林が分布していたことを示している。小島田八日市遺跡周辺もマツ属（多くが単維管束亜属）・トウヒ属・モミ属・ツガ属・カラマツ属を主要素とする森林が分布していたとみられる。これらは、当時寒冷な気候であったことを示している。

文 献

辻誠一郎・吉川昌伸・吉川純子・能城修一 (1985) 前橋台地における更新世末期から完新世初期の植物化石群集と植生. 第四紀研究, 23.
 関東第四紀研究会 (1983) 尾崎遺跡における自然環境の変遷. 尾崎遺跡 (練馬区遺跡調査会・練馬区教育委員会).
 辻誠一郎・南木睦彦・鈴木三男 (1984) 栃木県南部、二宮町における立川期の植物遺体群集. 第四紀研究, 23.

小島田八日市遺跡花粉一覧

分 類		群	試	料
学 名	和 名		Po-1	Po-2
Arborcal pollen	樹木粉			
Abies	モミ属			41
Tsuga	ツガ属			25
Larix	カラマツ属			43
Picea	トウヒ属			121
Pinus subgen. Hnploxylon	マツ属複雑管束亜属			91
Pinus	マツ属		1	33
Cryptomeria	スギ			1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			1
Pterocarya	サワグルミ属			2
Alnus	ハンノキ属			4
Betula	カバノキ属			15
Corylus	ハシバミ属			4
Carpinus-Ostya	クマシデ属-アサダ			1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属			11
Ulmus-Zelkova	ニレ属-ケヤキ			2
Celtis-Aphananthd	エノキ属-ムクノキ			2
Tilia	シナノキ属			1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科		3	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科			5
Sanguisorba	ワレモコウ属			1
Umbelliferae	セリ科			2
Asterioideae	キク亜科			15
Artemisia	ヨモギ属			9
Fem spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子		1	6
Arboreal pollen	樹木粉			398
Nonarboreal pollen	草本花粉			33
Totat pollen	花粉総数			431
Unknown pollen	未同定花粉		1	1
Fern spore	シダ植物胞子		1	6



小島田八日市遺跡の花粉組成図

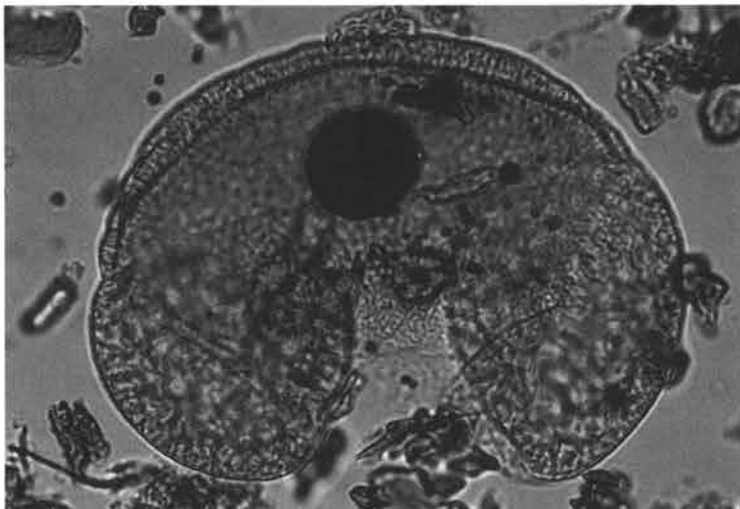
樹木花粉は樹木花粉数が基本数で、草本花粉とシダ植物胞子は花粉総数とシダ植物の総数が基本数



1 トウヒ属

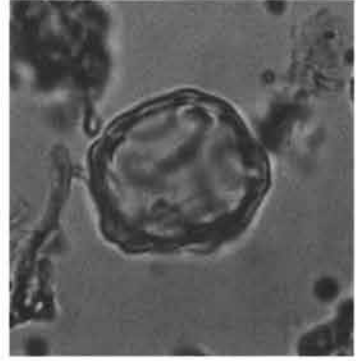


2 トウヒ属

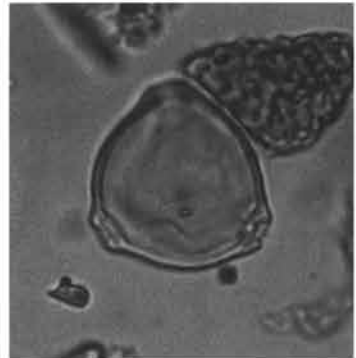


3 モミ属

45 μ

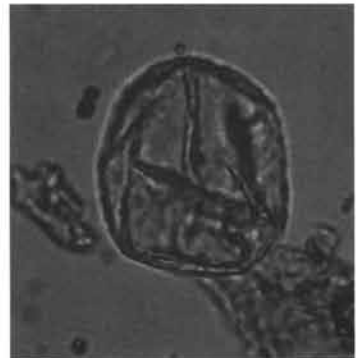


4 ハンノキ属

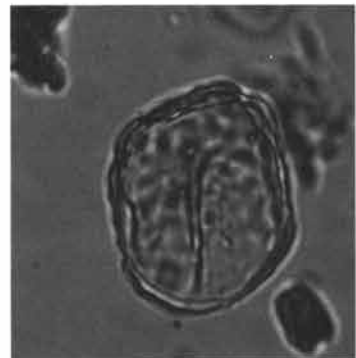


5 カバノキ属

30 μ



6 コナラ属コナラ亜属



7 ニレ属-ケヤキ属



8 カラマツ属

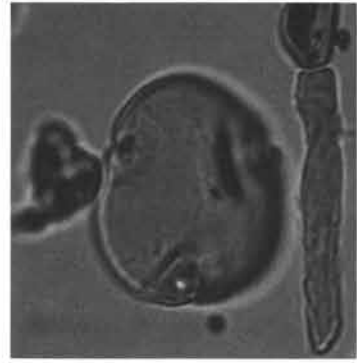
45 μ



9 マツ属単維管束亜属



10 マツ属維管束亜属

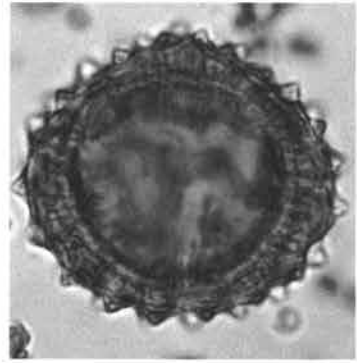


11 シナノギ属

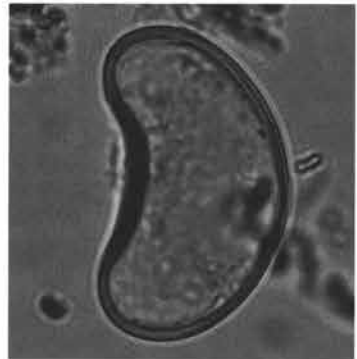


12 カヤツリグサ科

30 μ



13 キク亜属



14 シダ植物単条溝胞子

第4節 樹種同定

藤根久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

小島田八日市遺跡からは、中近世の木製品類が出土している。ここでは、これら木製品の樹種について検討した。

2. 樹種の記載と結果

樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40~400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載及び同定の根拠を述べ、表1にその結果を示す。なお、プレバートは、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。以下に、同定された各分類群の代表的な標本についての記載あるいは同定根拠について述べる。

表1. 出土木材の樹種同定

試料No	製品名	樹種	試料No	製品名	樹種
1	曲物底板	ネズコ	26	曲物底板	カラマツ属
3	長方形板状品	アスナロ	11	炭化材	ク　　リ
5	炭化材	アカマツ	14	板　　材	アカマツ
6	炭化材	ク　　リ	15	竹　　材	カラマツ属?
13	鎌　　柄	コナラ節	16	板　　材	アカマツ?
18	板　　材	ネズコ	17	板　　材	カラマツ属?
20	加工板	ク	21	自然木	カラマツ属
22	加工木	カラマツ属	23-①	細片木	ク
24	桶	ヒノキ属	23-②	細片木	ク
25	曲物底板	ク			

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図版1a~1c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である(横断面)。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状に著しく突出している(放射断面)。放射組織は、エピセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2~12細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マツ科マツ属複雑管束亜属のアカマツの材と同定される。アカマツは、暖帯および温帯下部に分布する樹高30~35m、幹径60~80cmに達する常緑針葉樹である。

カラマツ属 *Larix* マツ属 図版2a~2c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭である（横断面）。早材部仮道管の放射壁には有縁壁孔が2列に並ぶ（放射断面）。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め2~20細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科のカラマツ属の材と同定される。カラマツ属の樹木には、本州の亜高山帯に分布するカラマツ (*L. leptolepis*)、グイマツ (*L. gmelinii*) がある。いずれも樹高30m、幹径1mに達する落葉針葉樹である。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版3a~3c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は、ヒノキ型で、1分野に1~2個見られる（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり、2~12細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキ属の材と同定される。ヒノキ属の樹木には、ヒノキ (*C. Obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) があり、ヒノキは本州、四国、九州の温帯に分布する樹高40m、幹径2mに達する常緑針葉樹で、サワラは、本州、九州の温帯に分布する樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

アスナロ *Thuja japonica* (Linn. fil.) Sieb. et Zucc. 図版4a~4c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、樹脂細胞は晩材部に遍在する（横断面）。分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2~4個見られる（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり、1~12細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ヒノキ科アスナロ属のアスナロの材と同定される。アスナロは温帯を中心に分布する樹高30m、幹径80cmに達する常緑針葉樹である。

ネズコ *Thuja standishii* (Gord.) Carr. ヒノキ科 図版5a~5c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかで、柔細胞は年輪と平行して散在する（横断面）。分野壁孔は、小型のスギ型で1分野に2~6個見られる（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり、1~17細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ヒノキ科ネズコ属のネズコの材と同定される。ネズコは、温帯に分布する樹高30m、幹径1mの常緑針葉樹である。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版6a~6c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である（横断面）。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ (*Q. serrata*) やミズナラ (*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、カシワ (*Q. dentata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*) などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

第6章 自然科学分析

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版7a~7c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~15細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ここで検討した木製品には、その用途が明確な曲物底板や桶あるいは桶や鎌柄が出土している。曲物底板にはネズコやヒノキ属あるいはカラマツ属、鎌柄にはコナラ節、桶にはヒノキ属がそれぞれ利用されている。これ以外では、板材や自然木において亜高山帯に見られるカラマツ属が検出されるが、これらは用材として持ち込まれていることが推定される。

引用文献

環境庁(1981):群馬県現存植生図

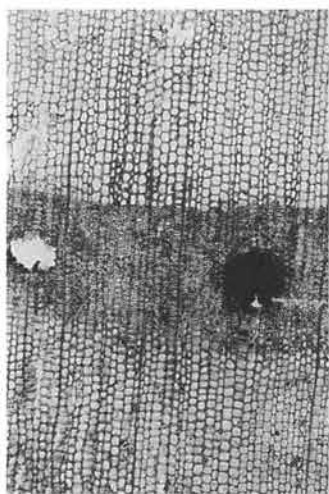
環境庁(1987):群馬県現存植生図

鈴木三男・能城修一(1988):新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古環境復元. 群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団. 「新保遺跡Ⅱ・弥生、古墳時代集落編-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集-」, p.435-453.

辻誠一郎・南木睦彦・小杉正人(1986):茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第2集館林の池沼群と環境の変遷史. 館林市教育委員会, 110P.

徳永重元(1982):日高遺跡の花粉分析. 日高遺跡-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集-, 群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, p.349-356.

図版1. 小島田八日市遺跡出土木材の樹種顕微鏡写真



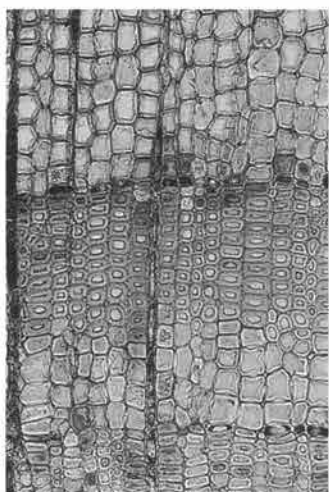
1a. アカマツ(横断面) No14 bar : 0.5mm



1b. 同(接線断面) bar : 0.2mm



1c. 同(放射断面) bar : 0.05mm



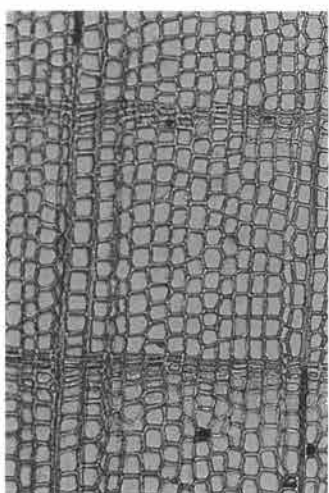
2a. カラマツ属(横断面) No22 bar : 0.2mm



2b. 同(接線断面) bar : 0.2mm



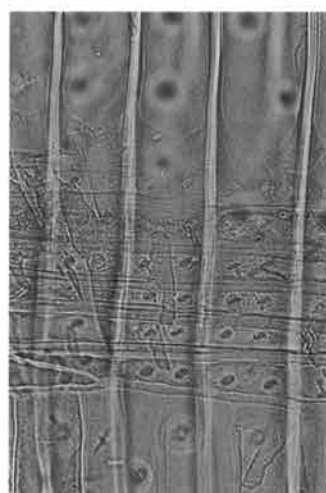
2c. 同(放射断面) bar : 0.05mm



3a. ヒノキ属(横断面) No24 bar : 0.2mm



3b. 同(接線断面) bar : 0.2mm

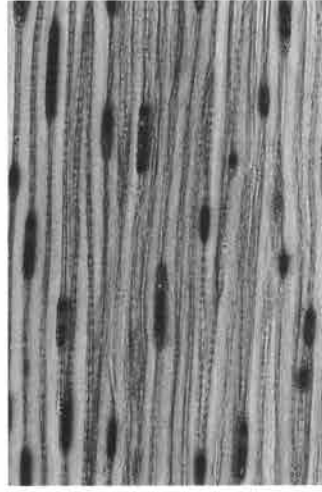


3c. 同(放射断面) bar : 0.05mm

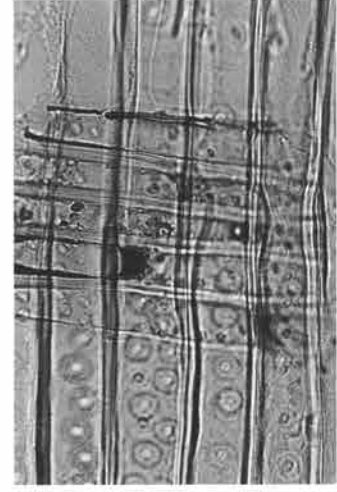
図版2. 小島田八日市遺跡出土木材の樹種顕微鏡写真



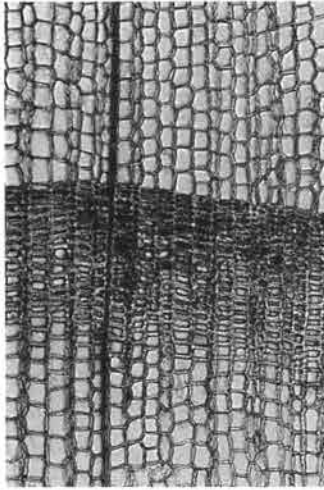
4a. アスナロ(横断面) No20 bar : 0.2mm



4b. 同(接線断面) bar : 0.2mm



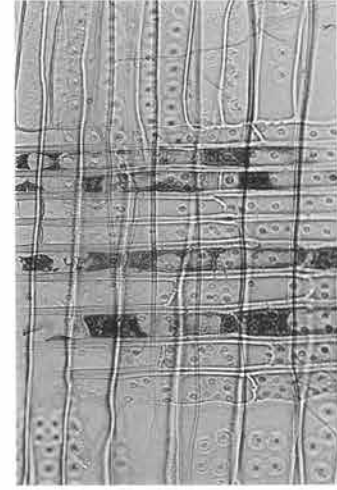
4c. 同(放射断面) bar : 0.05mm



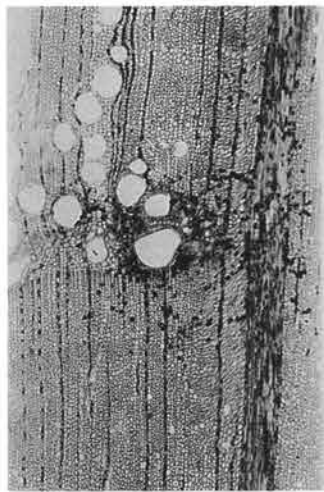
5a. ネズコ(横断面) No1 bar : 0.2mm



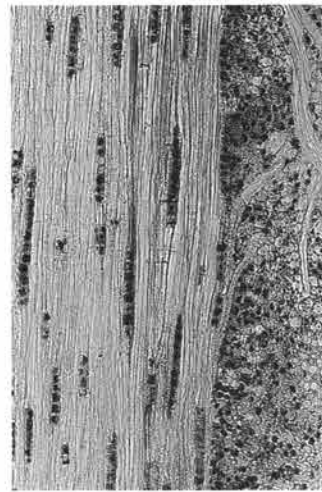
5b. 同(接線断面) bar : 0.2mm



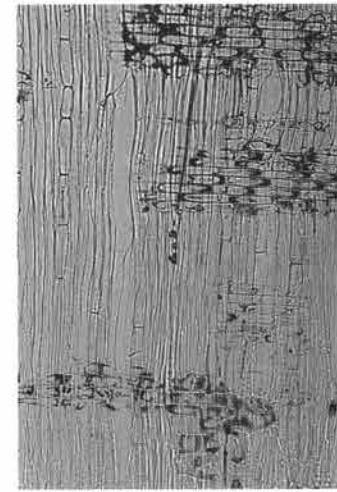
5c. 同(放射断面) bar : 0.1mm



6a. コナラ節(横断面) No13 bar : 0.5mm

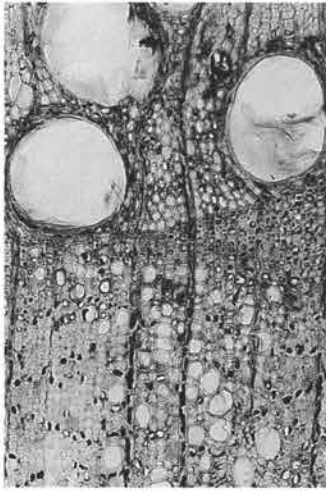


6b. 同(接線断面) bar : 0.2mm



6c. 同(放射断面) bar : 0.2mm

図版3. 小島田八日市遺跡出土木材の樹種顕微鏡写真



7a. クリ(横断面) No6 bar : 0.2mm



7b. 同(接線断面) bar : 0.5mm



7c. 同(放射断面) bar : 0.5mm

第7章 調査成果

本遺跡の調査によって得られた調査成果は大きく5つある。以下、列挙していく。

1つめは、県内でも有数の縄文草創期の資料がまとまって出土したことであろう。今までは、乾田Ⅱ遺跡の32点以外は数点の出土例しかなかったが、今回は計100点以上の出土が認められており、同時期に調査された、北群馬郡子持村の白井北中道遺跡における隆線文系土器群の出土と共に大量出土例として注目されるものである。その文様構成を見ると白井北中道遺跡出土の隆線が、本遺跡より太い状態にある所から、隆起線文土器群に近く、本遺跡の土器は、乾田Ⅱ遺跡に近い微隆線を示しているもので、微隆起線文土器の中に含まれるものであるが、遺物に関する評価は時期的な問題を中心に未だ定まっていないものがあるため、今後の類例の増加を待って判断を下すべきものと思われる。残念なのは、草創期に伴う遺構で明瞭なものをはっきりと検出できなかったことと、また、共伴する石器群の検討からも分かるように、単一時期とは言えないような資料が含まれており、土層・土器群・石器群の3者で1セットの良好な資料を得られたものではないということである。この点が今回の調査のみでは明らかにできないことで、今後の調査に期待する所である。

2つめは、局部磨製石斧の出土である。出土場所は残念ながら中近世の井戸からということで、出土層位と出土状況は不明なのだが、その遺物の形式からすると長者久保・神子柴文化の局部磨製円鑿に比定されるものである。県内の発見資料は過去11例あり、その中では最も古く位置付けられるものであり、貴重な資料と考えられるものである。ただし、別場所で出土した隆起線文土器とは残念ながら時期的に異なるもので、良好な共伴資料には今回恵まれなかった。

3つめは、弥生時代の遺物が全く確認できなかったことである。今回の調査では、すべての土器片にいたるまで、その所属時期の確認作業を行っており、弥生時代に入る遺物は全く検出出来なかった。古墳時代前期に比定される土器は少量ながら確認できており、縄文時代晩期から弥生時代に至る期間においてこの地点には生活痕跡が認められないということになる。

4つめは、古墳時代の遺物は埴輪を中心に出土しており、遺構としては、1基の古墳と思われる遺構を確認できたことであろう。埴輪は6世紀後半段階のものが中心であるが、一部、5世紀後半に入るようなものも含まれる。この台地が5世紀後半から一部7世紀代に至るまでの円墳を中心とした古墳群が旧利根川沿いに並ぶようにして崖面に沿って分布しており、そのうちの1基がこの遺跡内で確認されたということである。分布調査によりこの付近は合計23基の古墳が確認されており、その中に前方後円墳が2基含まれるなど、古墳群としては前方後円墳を中に含むということで中位に位置づけられるものであろう。この遺跡のすぐ横に居館跡と考えられる遺構も想定されており、その遺構も含めてこの遺跡の位置づけを行う必要がある。

5つめは、中近世の遺物の中で特に石製品の制作に関する遺物が大量に出土したことである。中近世の石製品の中には、石臼・茶臼・石鉢といった日常用具の他に、五輪塔・板碑といった宗教上の製品も混じっており、このような機能上は区別されるような製品でも、同一の場所で製作されていた可能性が高い事が分かった。しかし、具体的な石製品製作場所の限定は無理なので細かな状況は不明である。しかし、いずれにしても、旧利根川の水運の近くで、しかも東山道のルートに近い場所から水陸両交通上の要衝として小島田八日市遺跡は当時から重要な地点であったことが想定され、そういったことではこのような石製品群が交通・貿易のルート上での商場としてこの地点が機能していたことを示す一要素と考えられる。

遺 物 觀 察 表

縄文草創期

番号 PL-	出土位置	部位 器厚mm	胎土 焼成	表面色調 内面色調	形態・特徴
第10図- 1 PL-38-7	A3-103G	口縁部片 6	雲母・灰色小砂粒 不良	5YR6/6 5YR5/4	内面には横位と縦位の擦痕あり。口端表裏面とも粘土紐の貼付け。表面は直角方向より篋状工具による削り取りで波頭状隆線作出。内面は細い棒状工具による押圧で波状隆線となる。器表面には断面三角形の隆線3条。条間隔7mm。
第10図- 2 PL-38-9	A3-123G	口縁部片 7	雲母・長石 良	5YR6/4 5YR6/4	内面ナデ良好。口縁に並行し、断面三角形の隆線3条。条間隔7~8mm。口縁部断面は肥厚し、やや外反する。
第10図- 3 PL-38-10	A3-163G	口縁部片 7	雲母・軽石 不良	7.5YR4/1~6/4 7.5YR6/4	内面凹凸あり。口唇上部からの押圧、ないしは削りと、直交する位置で押圧・刺突風の削りにより、波状隆線を形成する。内面の屈曲部に丸棒状工具による削り、その間に爪形刺突を施し波状隆線を作成。器表面には断面三角形の隆線4条。条間隔7mm。口唇部内面はそげて、断面三角形を呈する。口縁部は小波状となる。
第10図- 4 PL-38-11	A3-103G	口縁部片 6	雲母・長石 不良	2.5YR5/6 2.5YR3/1	口唇上と直交する位置での削り取りで、不規則な小波状を呈する。内面の屈曲部の上段と下段に丸棒状工具による削り取りで波状隆線を形成。器表面には断面三角形の隆線4条。条間隔6~7mm。内面から表面の一部にかけて炭化物の付着。口縁部断面形態はNo.3に類似。
第11図- 5 PL-38-6	北東区	口縁部片 6	雲母・軽石・赤褐色 粒子 不良	5YR6/4 7.5YR6/4	内面には輪積み痕と凹凸あり。口端表裏面に粘土紐を貼付け、その上より押圧し波状隆線を形成している。内面も同様な手法により波状隆線を作成。器表面は断面三角形の隆線4条。条間隔6~7mm。口縁部断面は肥厚し、丸みを呈する。
第10図- 6 PL-38-4	A3-103G	口縁部片 5	雲母・灰色小砂礫 不良	7.5YR6/4 7.5YR4/1	内面には凹凸と擦痕あり。口唇部上には明瞭ではないが、棒状工具での押圧と口端に直交する位置での押圧痕あり。器表面には断面波状の隆線4条。条間隔4~6mm。口縁部断面は三角形を呈する。
第11図- 7 PL-40-9	A3-103G	胴部片 5	雲母・軽石・灰色小 砂礫 不良	5YR~7.5YR6/4 7.5YR6/4~6/2	内面斜位方向の擦痕顕著。断面山形を呈する隆線8条。条間隔5~8mm。条間隔の狭い部分では断面が波状となる。
第11図- 8 PL-40-4	A3-103G	胴部片 5~6	軽石・長石・灰色小 砂礫 不良	5YR6/4 7.5YR5/3	内面に横位方向の擦痕あり。断面山形を呈する隆線7条。条間隔6~8mm。No.7と同一個体?
第11図- 9 PL-40-11	A3-103G	胴部片 6	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	2.5YR5/4 7.5YR6/4	内面には凹凸と微細な擦痕あり。断面山形を呈する隆線5条。条間隔6~10mm。隆線の太さ、条間隔とも不規則。
第11図 10 PL-39-22	A3-103G	胴部片 6	長石・灰色小砂礫 不良	10YR6/4 10YR6/3	内面には横位方向の擦痕あり。断面山形を呈する隆線5条。条間隔4~7mm。上端と2段目の間隔が狭い。
第11図- 11 PL-40-1	A3-103G	胴部片 4~5	軽石・長石・赤褐色 粒子 不良	5YR5/4 7.5YR5/4	内面には凹凸あり。断面山形を呈する隆線2条。条間隔8mmと広い。
第11図- 12 PL-40-13	A3-123G	胴部片 6	雲母・長石・灰色小 砂礫 良	2.5YR5/6 5YR5/4	内面の凹凸あり、ナデ良好。断面三角形を呈する隆線3条。条間隔7mmとやや広い。
第11図- 13 PL-40-18	A3-104G	胴部片 5	雲母・軽石・灰色小 砂礫 不良	2.5YR5/4 7.5YR5/3	内面には横位方向擦痕あり。断面山形を呈する隆線3条。条間隔6~7mm。上端部輪積み痕で剥離。
第11図- 14 PL-40-7	A3-103G	胴部片 6~7	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	7.5YR6/4 7.5YR5/3	内面には凹凸と輪積み痕の屈曲あり。断面波状を呈する隆線2条。条間隔6mm。表面の剝落部分多い。
第11図- 15 PL-40-6	A3-123G	胴部片 5	軽石・灰色小砂礫・ 赤褐色粒子 不良	5YR6/4 7.5YR4/2	内面ナデ良好。断面山形を呈する隆線4条。条間隔5~6mm。
第11図- 16 PL-40-8	A3-103G	胴部片 5~6	軽石・長石・灰色小 砂礫 不良	7.5YR6/6 7.5YR6/4	内面ナデ良好。断面山形を呈する隆線3条で以下無文部となる。条間隔6~7mm。
第12図- 17 PL-38-3	A3-122G	口縁部片 4	雲母・長石 不良	7.5YR5/4 7.5YR3/1	内面には凹凸と斜位の微細な擦痕あり。口縁に直交する位置で上方からの押圧と、口端に篋状工具による刺突で波状を形成している。断面三角形を呈する隆線1条。以下無文となるか不明。内面には炭化物の付着あり。
第12図- 18 PL-38-5	A3-103G	口縁部片 6	長石 不良	7.5YR6/4 7.5YR5/2	内面には凹凸あり。口端表面には剝落のため明瞭ではないが、棒状工具による押圧痕が認められる。内面は粘土紐貼付け後、同様の押圧を施している。器表面には断面三角形を呈する隆線3条。条間隔8mm。口唇上は剝落。
第12図- 19 PL-38-8	北東区	口縁部片 6	灰色小砂礫 良好	5YR6/4 5YR6/6	内面には凹凸あり。口唇部に粘土紐を貼付け、その上から削り取りと横方向からの押圧で、波頭状を形成している。器表面には断面三角形を呈する隆線が1条あり。口唇部肥厚し、やや外反する。
第12図- 20 PL-39-20	A3-103G	胴部片 5	長石・灰色小砂礫 不良	5YR5/6 7.5YR6/6	内面のナデ良好。断面やや山形に近い隆線1条の残存で、以下無文部となる。

遺物観察表

番号 PL-	出土位置	部位 器厚mm	胎土 焼成	表面色調 内面色調	形態・特徴
第12図-21 PL-39-1	A3-123G	胴部片 4	雲母・軽石・灰色小 砂礫 良好	5YR5/6 7.5YR6/6	内面には凹凸あり。断面三角形を呈する隆線2条。条間隔6mm。天地逆になる可能性あり。
第12図-22 PL-39-5	A3-104G	胴部片 4	雲母・長石 不良	5YR5/4 7.5YR5/6	内面のナデ良好。断面やや山形に近い隆線1条。横断面は湾曲し、底部に近い部位の可能性あり。
第12図-23 PL-39-17	A3-103G	胴部片 5	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	7.5YR6/4 7.5YR6/3	内面のナデ良好。断面三角形を呈する隆線1条。以下、無文部となる。
第12図-24 PL-39-19	A3-103G	胴部片 5	雲母・軽石 不良	5YR6/6 7.5YR6/6	内面のナデ良好。上部に断面三角形を呈する隆線1条。以下、無文部となる。
第12図-25 PL-40-2	A3-102G	胴部片 6	軽石・灰色小砂礫 不良	7.5YR6/6 7.5YR6/4	内面には横位方向の擦痕顕著。剝落した隆線2条。条間隔8mm。
第12図-26 PL-40-3	A3-103G	胴部片 5	雲母・灰色小砂礫 不良	7.5YR6/4 7.5YR4/2	内面のナデ良好。断面やや山形に近い隆線3条。条間隔6mm。
第12図-27 PL-40-5	A3-103G	胴部片 3	雲母・灰色小砂礫 不良	5YR6/4 7.5YR5/4	内面のナデ良好。断面やや山形に近い隆線1条。条間隔は不明。
第11図-28 PL-40-12	A3-123G	胴部片 4～5	雲母・軽石・灰色小 砂礫 不良	7.5YR6/5 7.5YR6/3	内面のナデ良好。断面三角形を呈する隆線4条。条間隔7mm。
第11図-29 PL-40-10	A3-063G	胴部片 5	雲母・軽石 良	5YR6/4 7.5YR5/1	内面には横位方向の擦痕あり。断面三角形を呈する隆線2条。条間隔5～6mm。
第11図-30 PL-40-15	A3-063G	胴部片 5	雲母・長石・軽石 不良	2.5YR5/4 7.5YR6/4	内面には横位と斜位の擦痕あり。断面三角形を呈する隆線3条。ただし、上段の2条は、半截竹管状工具により、2本となった。条間隔3～9mm。
第12図-31 PL-40-14	A3-083G	胴部片 7	雲母・軽石 不良	5YR5/4 5YR3/2	断面三角形を呈する隆線2条。条間隔6～7mm。内面には炭化物付着。
第12図-32 PL-39-18	A3-102G	胴部片 5～7	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	7.5YR6/4 7.5YR5/3	内面は凹凸と屈曲が明瞭。断面三角形を呈する隆線1条。条間隔は不明。
第12図-33 PL-39-6	A3-123G	胴部片 3	雲母・灰色小砂礫 不良	10YR6/4 5YR4/1	内面のナデ良好。上部部に隆線状の盛り上がり、1条あり。以下無文部となる。他の土器破片とは胎土・色調等異なる。要検討。
第12図-34 PL-38-23	A3-145G	胴部片 4	雲母・軽石・灰色小 砂礫 良好	5YR5/8 7.5YR6/4	内面のナデ良好。断面やや山形を呈する隆線1条。条間隔は不明。
第12図-35 PL-38-24	A3-145G	胴部片 3	雲母・軽石 良好	2.5YR5/6 5YR5/6	表面にはスサ状の擦痕あり。断面やや山形を呈する隆線2条。条間隔9mmと幅広である。
第12図-36 PL-38-2	A3-104G	口縁部片 6	雲母・長石 良	7.5YR6/4 7.5YR6/4	内面には凹凸あり。口縁部に斜位方向から押圧するとともに、口端表面に爪形状の刺突を加えることにより、波状隆線を作出している。断面三角形を呈する隆線3条。条間隔7～9mm。内面には炭化物の付着あり。
第12図-37 PL-39-2	A3-124G	胴部片 3	雲母・灰色小砂礫 不良	5YR6/6 7.5YR4/2	内面のナデ良好。断面三角形を呈する隆線2条。隆線上には篋状工具により斜位の刺突あり。条間隔11mm。上部部は輪積み痕で剝落。
第12図-38 PL-39-3	A3-104G	胴部片 4	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	7.5YR5/4 7.5YR5/3	内面のナデ良好。横位と縦位(斜位)の隆線により方形の文様を形成している。縦位の隆線は粘土紐上を押し引き2条となっている。内面に斑点状の炭化物の付着あり。
第12図-39 PL-39-4	A3-124G	胴部片 5～7	雲母・長石 不良	5YR5/4 7.5YR6/4	横位と斜位の擦痕あり。断面三角形の微細な隆線2条。横位と山形状の文様を形成している。
第12図-40 PL-39-8	A3-143G	胴部片 4	雲母・軽石・灰色小 砂礫 良	5YR5/6 7.5YR6/4	内面には凹凸あり。断面三角形の微細な隆線3条。条間隔7～11mmと不規則。下部には斜位の整形痕が認められるので、横位と斜位の隆線の組み合わせを形成していた可能性あり。
第12図-41 PL-39-13	A3-143G	胴部片 4～5	雲母・長石 不良	5YR5/4 7.5YR6/4	内面に凹凸と擦痕あり。断面三角形を呈する横位3条の隆線と、斜位の可能性のある隆線1条。条間隔6～10mmと不規則。
第13図-42 PL-39-16	A3-143G	胴部片 4～5	雲母・軽石・赤褐色 粒子 不良	7.5YR5/4 7.5YR6/4	内面に凹凸、横位と斜位の擦痕あり。断面三角形の隆線6条。条間隔7～10mm。大きな波状を呈する部分もあり。
第13図-43 PL-40-17	A3-124G	胴部片 5	灰色小砂礫 不良	2.5YR5/5 7.5YR5/4	内面には凹凸と擦痕あり。断面三角形の横位3条と、縦位1条の隆線により幾何学系文様を形成する。
第13図-44 PL-38-21	A3-103G	胴部片 5	雲母・長石 不良	5YR5/4 5YR5/6	内面には横位と斜位の擦痕あり。断面三角形を呈する隆線3条。条間隔7～8mm。下段の隆線はやや斜位。内面にわずかな炭化物の付着あり。
第13図-45 PL-38-17	A3-103G	胴部片 5	雲母・軽石 良好	2.5YR5/6～4/3 2.5YR4/4	内面には横位の擦痕あり。断面三角形を呈する隆線2条。条間隔6～8mm。
第13図-46 PL-38-20	A3-122G	胴部片 5	雲母・赤褐色粒子 不良	5YR4/3 5YR5/4	内面には横位の擦痕あり。断面三角形を呈する隆線3条。条間隔7～8mm。

遺物観察表

番号 PL-	出土位置	部 位 器 厚mm	胎 土 焼 成	表面色調 内面色調	形 態 ・ 特 徴
第13図- 47 PL-39-7	A3-124G	胴部片 4	長石・灰色小砂礫 不良	7.5YR6/6 7.5YR5/4	内面のナデ良好。断面三角形の隆線2条。条間隔は不明。表面の剥落著しい。
第13図- 48 PL-39-10	A3-063G	胴部片 6	雲母・軽石・長石 良好	7.5YR6/6 7.5YR6/6	内面のナデ良好。断面三角形の隆線1条。条間隔は不明。
第13図- 49 PL-39-9	A3-123G	胴部片 5	雲母・灰色小砂礫 良好	5YR5/6 5YR3/2	内面には凹凸あり。断面三角形の隆線1条。条間隔は不明。
第13図- 50 PL-39-21	A3-122G	胴部片 6	雲母・軽石・長石 不良	7.5YR6/4 10YR7/4	内面に横位方向の擦痕あり。断面三角形を呈する隆線4条。条間隔7～9mm。
第13図- 51 PL-40-19	A3-143G	胴部片 4	灰色小砂礫・赤褐色 粒子 不良	2.5YR5/5 7.5YR5/4	内面に横位方向の擦痕あり。剥落し不明瞭であるが1条の隆線。条間隔は不明。
第13図- 52 PL-39-12	A3-124G	胴部片 6	雲母・軽石・長石 不良	2.5YR5/4 7.5YR6/4	内面剥落あり。断面やや山形に近い隆線1条。以下、無文部となる。
第13図- 53 PL-39-14	A3-143G	胴部片 4	雲母・灰色小砂礫 不良	7.5YR5/4 7.5YR5/3	内面には凹凸あり。断面三角形を呈する隆線3条。条間隔7～9mmとやや不規則であるが、隆線の作出は良好である。
第13図- 54 PL-39-15	A3-143G	胴部片 5	雲母・灰色小砂礫 不良	5YR6/4 7.5YR6/4	断面三角形を呈する隆線2条。条間隔5～6mm。
第13図- 55 PL-39-11	北東区	胴部片 6	雲母・軽石 不良	5YR6/4 7.5YR6/4	内面のナデ良好。断面三角形を呈する隆線3条。条間隔9～10mmと幅広い。
第13図- 56 PL-38-1	A3-143G	口縁部片 4	雲母・軽石 良好	2.5YR5/8 7.5YR6/4	内面は凹凸と横位方向の擦痕あり。口端に並行して粘土紐を貼り付け、斜位からの押圧により波状隆線を作成している。下端部には斜位の整形痕が認められるので、器表面の隆線は斜位に施文されていた可能性がある。
第13図- 57 PL-38-12	A3-123G	胴部片 5	雲母・軽石 不良	2.5YR5/6 2.5YR5/6～ 5YR3/2	内面には擦痕あり。断面三角形の微細な隆線2条。条間隔6mm。
第13図- 58 PL-38-13	A3-063G	胴部片 不明	雲母・軽石 不良	2.5YR5/4 不明	断面三角形の微細な隆線3条。条間隔4～5mm。内面は剥落。
第13図- 59 PL-38-14	A3-084G	胴部片 3～4	雲母・軽石 不良	2.5YR5/4 5YR2/2	内面のナデ良好。断面三角形の微細な隆線4条。条間隔5～6mm。胴下半部の屈曲部破片の可能性あり。
第13図- 60 PL-38-15	A3-123G	胴部片 4	雲母・軽石 不良	2.5YR5/4 2.5YR2/2	内面のナデ良好。断面波頭状を呈する隆線3条。条間隔6～7mm。
第13図- 61 PL-38-16	A3-103G	胴部片 5	雲母・軽石 不良	2.5YR5/6 2.5YR3/1	内面には凹凸あり。断面三角形の微細な隆線1条。条間隔は不明。
第13図- 62 PL-38-18	A3-104G	胴部片 4	軽石 不良	5YR5/4 5YR3/1	内面に凹凸あり。断面三角形の微細な隆線4条。条間隔5mm。内面に炭化物の付着あり。
第13図- 63 PL-38-19	A3-123G	胴部片 6	軽石・灰色小砂礫 不良	5YR5/4 5YR4/2	内面のナデ良好。断面三角形の微細な隆線2条。以下、無文部となる。条間隔6mm。
第13図- 64 PL-38-22	A3-123G	胴部片 5	雲母・軽石 不良	2.5YR5/6 5YR4/1	内面のナデ良好。断面三角形の微細な隆線5条。やや波状を呈する部分あり。条間隔5～6mm。
第13図- 65 PL-40-16	A3-083G	胴部片 4～6	長石・灰色小砂礫 不良	2.5YR5/4 5YR3/1	内面のナデ良好。断面三角形の微細な隆線3条。条間隔6～8mm。内面には斑点状の炭化物の付着あり。
第14図- 66 PL-40-20	A3-083G	胴部片 3	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	5YR5/6 5YR5/2	内面には横位の擦痕あり。無文部。
第14図- 67 PL-40-21	A3-124G	胴下部片 5	雲母・軽石・灰色小 砂礫 不良	5YR6/4 5YR5/2	内面のナデ良好。無文部。
第14図- 68 PL-40-22	A3-123G	胴下部片 5	雲母・軽石 良	5YR5/4 2.5YR5/6	内面には凹凸あり。無文部。
第14図- 69 PL-40-23	A3-083G	胴部片 5	灰色小砂礫 不良	7.5YR6/4 7.5YR5/3	表裏面ともに良好。無文部。内面には剥落あり。
第14図- 70 PL-41-1	A3-084G	胴部片 5～6	雲母・軽石・赤褐色 粒子 不良	7.5YR5/3 7.5YR5/1	内面には凹凸と輪積み痕の屈曲あり。無文部。
第14図- 71 PL-41-2	A3-142G	胴部片 4	長石・赤褐色粒子 良	7.5YR6/4 7.5YR6/3	表裏面ともに良好。無文部。
第14図- 72 PL-41-3	A3-163G	胴部片 4	灰色小砂礫 良	7.5YR6/4 7.5YR6/4	表裏面ともに良好。無文部。輪積み部分で破損。
第14図- 73 PL-41-4	A3-103G	胴下部片 6	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	5YR6/4 7.5YR6/3	内面には不規則な擦痕あり。無文部。横断面はやや湾曲あり。
第14図- 74 PL-41-5	A3-103G	胴部片 5	長石・灰色小砂礫 不良	5YR5/4 7.5YR6/3	内面には凹凸と不規則な擦痕あり。無文部。

遺物観察表

番 号 PL-	出土位置	部 位 器 厚mm	胎 土 焼 成	表面色調 内面色調	形 態 ・ 特 徴
第14図- 75 PL-41-6	A3-103G	胴部片 6	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	5YR5/4 5YR6/6~ 7.5YR6/4	内面には凹凸と輪積み痕あり。無文部。表裏面ともに円形の剥落あり。
第14図- 76 PL-41-10	A3-103G	胴部片 6	雲母・灰色小砂礫 不良	5YR5/4 7.5YR6/4	無文部。表裏面ともに剥落。
第14図- 77 PL-41-8	A3-103G	胴部片 5	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	5YR6/4 5YR6/6	内面の整形良好。無文部。
第14図- 78 PL-41-7	A3-103G	胴部片 6	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	5YR5/4 7.5YR6/4	表裏面ともに凹凸あり。無文部。
第14図- 79 PL-41-11	A3-103G	胴部片 5	軽石・長石・灰色小砂 礫・赤褐色粒子 不良	5YR6/4 5YR6/6	内面擦痕、表面に輪積み痕あり。無文部。
第14図- 80 PL-41-9	A3-103G	胴部片 6	軽石・灰色小砂礫・ 赤褐色粒子 不良	5YR6/4 7.5YR6/3	表面に凹凸あり。無文部。内面の剥落著しい。
第14図- 81 PL-41-12	A3-103G	胴部片 6	雲母・灰色小砂礫・ 赤褐色粒子 不良	5YR5/4 7.5YR6/4	表面の整形良好。無文部。内面の剥落著しい。
第14図- 82 PL-41-16	A3-103G	胴部片 5~6	雲母・灰色小砂礫 不良	5YR5/4~6/4 7.5YR6/4	表裏面とも整形良好。無文部。
第14図- 83 PL-41-15	A3-103G	胴部片 6	軽石・灰色小砂礫・ 赤褐色粒子 不良	5YR6/4 7.5YR5/3	内面には凹凸あり。無文部。
第14図- 84 PL-41-13	A3-103G	胴部片 5	長石・灰色小砂礫 不良	5YR6/4 5YR5/6	内面にはやや屈曲部あり。無文部。
第15図- 85 PL-41-14	A3-103G	胴部片 6	雲母・長石・灰色小 砂礫 不良	2.5YR5/6 7.5YR5/4	内面には不規則な擦痕あり。無文部。
第15図- 86 PL-41-17	A3-103G	胴部片 6	灰色小砂礫 不良	7.5YR6/4 7.5YR6/6	内面には擦痕あり。無文部。
第15図- 87 PL-41-18	A3-103G	胴部片 4	灰色小砂礫 不良	7.5YR6/4 7.5YR6/4	内面には擦痕あり。無文部。
第15図- 88 PL-41-19	A3-103G	胴部片 不明	灰色小砂礫 不良	5YR6/4 不明	表面に横位方向の擦痕あり。無文部。内面は剥落。表裏面が逆の可能性もあり。
第15図- 89 PL-41-20	A3-102G	胴部片 5	灰色小砂礫 不良	5YR6/4 7.5YR6/3	内面に擦痕あり。無文部。
第15図- 90 PL-42-1	A3-103G	胴部片 5	長石・灰色小砂礫・ 赤褐色粒子 良	2.5YR5/6 2.5YR5/4	表裏面とも整形良好。無文部。
第15図- 91 PL-42-2	A3-103G	胴部片 6	長石 良	2.5YR5/6 5YR5/4	内面に擦痕あり。無文部。
第15図- 92 PL-42-3	A3-103G	胴部片 5	長石・灰色小砂礫 良	5YR5/6 7.5YR6/4	表面の整形良好。無文部。
第15図- 93 PL-42-4	A3-123G	胴部片 5	軽石・灰色小砂礫 不良	2.5YR5/4 2.5YR4/6	表面の整形良好。内面に凹凸あり。無文部。
第15図- 94 PL-42-5	A3-123G	胴部片 不明	長石・赤褐色粒子 不良	7.5YR6/4 不明	表面の整形良好。無文部。内面は剥落。
第15図- 95 PL-42-6	A3-103G	胴部片 不明	灰色小砂礫・赤褐色 粒子 不良	不明 7.5YR5/3	内面に凹凸あり。無文部。表面は剥落。
第15図- 96 PL-42-7	A3-103G	胴部片 不明	雲母・灰色小砂礫 不良	不明 7.5YR5/3	内面に横位方向の擦痕あり。無文部。表面は剥落。
第15図- 97 PL-42-8	A3-123G	胴部片 6	軽石・長石・灰色小 砂礫 良好	5YR6/6 7.5YR6/4	内面に横位方向の擦痕あり。無文部。表面の剥落著しい。
第15図- 98 PL-42-10	A3-124G	胴部片 5	雲母・灰色小砂礫 良好	2.5YR5/6 5YR7/4	無文部。2次焼成により胎土は脆くなっている。
第15図- 99 PL-42-9	A3-103G	胴部片 6	灰色小砂礫 良好	2.5YR5/6 2.5YR4/4	表面の整形良好。無文部。2次焼成により胎土は脆くなっている。
第15図-100 PL-42-11	A3-123G	胴部片 5	軽石・長石 良	5YR6/6 7.5YR6/4	表面に凹凸、内面には横位方向の擦痕あり。無文部。
第15図-101 PL-42-12	A3-103G	胴部片 6	灰色小砂礫 良好	2.5YR5/6 2.5YR4/4	表面の整形良好。無文部。
第15図-102 PL-42-13	A3-144G	胴部片 5	灰色小砂礫 良	5YR6/6 5YR2/1	無文部。表裏面とも剥落。
第15図-103 PL-42-14	A3-123G	胴部片 6	軽石・灰色小砂礫・ 赤褐色粒子 不良	2.5YR5/6 5YR3/1	無文部。内面に炭化物の付着あり。
第15図-104 PL-42-15	A3-104G	胴部片 6	雲母・灰色小砂礫 不良	2.5YR5/6 7.5YR6/4	表面に凹凸あり。無文部。内面に炭化物の付着あり。

遺物観察表

番号 PL-	出土位置	部位 器厚mm	胎土 焼成	表面色調 内面色調	形態・特徴
第15図-105 PL-42-16	A3-104G	胴部片 不明	灰色小砂礫 不良	不明 7.5YR6/4	無文部。表面は剥落。
第15図-106 PL-42-17	A3-104G	胴下部片 5	軽石・灰色小砂礫 不良	2.5YR5/6 7.5YR6/4	内面に横位方向の擦痕あり。無文部。
第15図-107 PL-42-18	A3-104G	胴部片 5～6	灰色小砂礫 不良	2.5YR5/6 7.5YR6/4	内面に横位方向の擦痕あり。無文部。内面に炭化物の付着あり。
第15図-108 PL-42-19	A3-123G	胴部片 6	雲母・軽石 良好	5YR5/4 7.5YR6/4	表裏面とも整形良好。無文部。燃糸文土器の底部付近の可能性もあり。
第15図-109 PL-42-20	A3-103G	胴部片 5	灰色小砂礫 不良	5YR5/6 5YR5/6	表面に凹凸、内面に擦痕あり。無文部。
第15図-110 PL-42-21	A3-123G	胴部片 4	軽石・灰色小砂礫 不良	5YR5/4 7.5YR6/4	無文部。表裏面とも剥落著しい。
第15図-111 PL-42-23	A3-125G	胴部片 3	軽石・灰色小砂礫 良好	2.5YR5/6 2.5YR5/6	内面に凹凸あり。無文部。表面に炭化物の付着顕著。
第15図-112 PL-42-22	A3-145G	胴部片 4	長石 不良	2.5YR5/1 5YR4/1	表面に凹凸、内面に擦痕あり。無文部。
第15図-113 PL-42-25	A3-124G	胴部片 5	灰色小砂礫 良	2.5YR5/6 2.5YR4/6	表裏面に凹凸有り。無文部。表面全体に炭化物の付着あり。
第15図-114 PL-42-24	A3-124G	胴部片 4	軽石・灰色小砂礫 良好	5YR5/6 2.5YR4/6	表裏面に凹凸あり。無文部。

縄文前期 燃糸文

番号	出土位置	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第17図-1 PL-43-1	A3- 108G	胴部片	①細粒の石を混入 ②良	器厚6mm。内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は浅黄色。内面は黄褐色。	単軸絡条体I類を縦位回転するもので、巻かれる条はr。

縄文前期 野島式

番号	出土位置	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第20図-1 PL-43-5	A3- 124G	胴部片	①繊維を含む砂粒の砂を混入 ②良	器厚9mm。内面は横方向の条痕が施されている。 内外面の色調は赤褐色。	
第20図-2 PL43-6	A3- 123G	口縁部	①繊維を含む細粒の砂を混入 ②良	器厚5～7mm。口唇部に刻目。内面は丁寧な調整が施されている。 内外面の色調は赤褐色。	

縄文前期 条痕文

番号	出土位置	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第23図-1 PL-43-7	A3- 142G	胴部片	①繊維を含む細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 外面の色調は灰褐色。内面は明黄褐色。	内外面は斜位・横位の条痕が施されている。
第23図-2 PL-43-8	A3- 144G	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内外面の色調は浅黄褐色。	外面に斜位の条痕が施されている。内面は荒れていて不明。
第23図-3 PL-43-9	A3- 164G	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 外面の色調は褐灰色。内面はにぶい黄褐色。	内外面に斜位の条痕が施されている。

縄文前期 黒浜式

番号	出土位置	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第26図-1 PL-43-3	A3- 143G	口縁部片	①繊維を含む細粒の砂を混入 ②良	甕形土器の口縁部片。口唇部は平坦。器厚6～8mm。内面は横方向の調整。繊維痕が認められる。 内外面の色調は鈍い黄褐色。	半截竹管による文様。沈線内を同工具による刺突が施されている。

遺物観察表

番号	出土位置	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第26図-2 PL-43-4	A3-128G	胴部片	①繊維を含む 細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色。内面は褐灰色。	縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。
第26図-3 PL-43-2	33号井戸 覆土	胴部片	①繊維を含む 細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は鈍い橙色。内面は黒色。	縄文施文。原体は前々段反燃Rか?

縄文前期 諸磯式

番号	出土位置	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第29図-1 PL-43-17	45号土壇 覆土	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。	4本を単位とする条線で波状・円形竹管文が施されている。 諸磯a式土器。
第29図-2 PL-43-21	A3-122G	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚5~7mm。口唇部は丸味をもつ。内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色。内面はにぶい赤褐色。	口縁部に沿って4条の平行沈線内にC字爪形文の充填。以下縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。諸磯式。
第29図-3 PL-43-22	A3-088G	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	半截竹管による平行沈線内にD字爪形文の充填。以下縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。諸磯式。
第29図-4 PL-43-23	A3-149G	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄橙色。	4本一単位による横位・斜位の条線。以下縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。諸磯式。
第29図-5 PL-43-24	1号井戸	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色。内面は褐灰色。	3本一単位とする波状・横位の条線。以下縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。諸磯式。
第29図-6 PL-43-11	A3-122G	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。前期後半。
第29図-7 PL-43-12	A3-107G	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。前期後半。
第29図-8 PL-43-13	A3-108G	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。	縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。前期後半。
第29図-9 PL-43-14	2号井戸	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面は荒れている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ 。前期後半。
第29図-10 PL-43-15	北西区 表採	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は灰黄色。	縄文施文。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ 。前期後半。
第29図-11 PL-43-16	A3-142G	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。	縄文施文。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ 。前期後半。
第29図-12 PL-43-10	A3-122G	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色。内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。内面に煤が付着している。前期後半。

縄文中期 前半

番号	出土位置	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第32図-1 PL-43-18	A3-122G	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6~8mm。内面は荒れている。 外面の色調はにぶい橙色。内面は褐灰色。	斜位の細沈線が施されている。 五領ケ台式。

遺物観察表

縄文中期 後半

番号	出土位置	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第35図-1 PL-43-19	2号溝	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚1~1.3cm。内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は灰白色。	幅広い口縁部下に微隆帯をめぐらし、縄文施文。原体はRⅠ式。微隆帯は低い。加曽利E4式。
第35図-2 PL-43-20	1号土壙	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明黄褐色。	沈線を垂下させている。 加曽利E4式。
第35図-3 PL-43-25	7号井戸	把手	①細粒の砂を混入 ②良	橋状把手。把手の厚さは1.5cm。内面は貼付の痕跡が明瞭に残る。 内外面の色調は灰白色。	無文。 加曽利E4式。

縄文 無文

番号	出土位置	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第40図-1 PL-43-26	6号溝	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	器厚5~6mm。口唇部は肥厚する。 内外面の色調はにぶい褐色。	無文。
第40図-2 PL-43-27	A3-102G	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	器厚5mm。内外面はよく調整されている。 内外面の色調はにぶい褐色。	無文。

縄文 石器

番号	出土遺構器種	石材	計測値 cm g ①長さ②巾③厚さ④重さ	形態・特徴
第44図-1 PL-45-7	A3-123G 有舌尖頭器	流紋岩様石	①2.0 ②1.3 ③0.5 ④0.8	基部と先端を欠くため、全体の形状は不明。しかし、一側縁がやや内側にえぐれることや、かえし状の突起が残ることなどから、有舌尖頭器の破損品の可能性もあり。
第44図-2 PL-43-28	A3-125G 有舌尖頭器	黒色頁岩	①2.6 ②1.5 ③0.5 ④1.4	両面全面を押し剥離によって整形。両側はやや内側にえぐれ、基部にかえしを持つ。舌部は細く作り出すが下半を欠く。先端も欠損。
第44図-3 PL-43-33	A3-123G ポイント	黒色頁岩	①2.9 ②3.2 ③1.3 ④10.4	両面加工のポイント。上下両端を欠損。
第44図-4 PL-43-34	A3-123G ポイント	黒色頁岩	①3.8 ②3.8 ③1.3 ④22.6	両面加工のポイント。上下両端を欠損。
第44図-5 PL-43-31	A3-123G ポイント	黒色頁岩	①5.3 ②3.6 ③2.2 ④163.2	両面全面に粗い調整が加えられる。尖頭器の未製品。上半を欠損。
第44図-6 PL-43-30	A3-123G ポイント	黒色安山岩	①9.5 ②3.3 ③0.9 ④26.0	両面加工のポイント。全面に調整が加えられる。表面の左側縁の上1/2程が、器体の軸に対して、かなり斜めになる。破損後の再調整が行われたためと思われる。
第44図-7 PL-43-32	A3-122G ポイント	黒色頁岩	①7.6 ②2.2 ③0.8 ④12.9	両面加工のポイント。細かな調整によって丁寧に仕上げられている。平面形は、一側がほぼ直線状の半月形。先端をわずかに欠損。
第44図-8 PL-43-29	A3-103G ポイント	黒色頁岩	①3.9 ②2.7 ③0.7 ④9.1	剥片素材のポイント。両面のほぼ全周に調整が加えられるが、一部に素材剥片の面を残す。
第44図-9 PL-43-35	A3-123G ポイント	黒色頁岩	①9.9 ②5.9 ③1.7 ④84.2	両面加工のポイント。下端を欠損。比較的幅広で薄身・大形。
第46図-10 PL-45-6	不明 石鎌	チャート	①1.8 ②1.2 ③0.4 ④0.5	凹基無茎鎌。細かな押し剥離によって両面全面を調整。一方の脚の先端をわずかに欠く。
第46図-11 PL-45-4	A3-143G 石鎌	チャート	①2.4 ②1.8 ③0.4 ④1.1	平基無茎鎌。細かな押し剥離によって両面全面を調整。下縁はやや内側にえぐれる。
第46図-12 PL-45-2	A3-103G 石鎌	黒色頁岩	①1.4 ②1.6 ③0.4 ④0.7	平基無茎鎌。細かな押し剥離によって両面全面を調整。下縁はやや外側に張り出す。先端を欠損。
第46図-13 PL-45-3	A3-123G 石鎌	黒色頁岩	①1.2 ②1.8 ③0.4 ④0.8	平縁無茎鎌。細かな押し剥離によって調整される。上半を欠損。
第46図-14 PL-45-1	A3-103G 石鎌	黒色頁岩	①1.5 ②1.5 ③0.4 ④0.6	平基無茎鎌。細かな押し剥離によって両面全面を調整。下縁はやや外側に張り出す。先端を欠損。
第46図-15 PL-45-8	A3-123G 石鎌	黒色頁岩	①1.6 ②1.5 ③0.3 ④0.6	平基無茎鎌。幅に比べて長さが短くずまりの形態。調整は比較的粗い。

遺物観察表

番号	出土遺構 器種	石材	計測値 cm g ①長さ②巾③厚さ④重さ	形態・特徴
第46図-16 PL-45-5	A3-104G 石鏃	黒色頁岩	①1.3 ②1.5 ③0.3 ④0.6	平縁無茎鏃。両面に調整及ぶが、一部に素材の面が残る。幅に対し長さ短くすずまりの形態。
第46図-17 PL-46-1	不明 スクレイパー	黒色頁岩	①7.2 ②3.7 ③1.2 ④34.6	両面全面に丁寧な調整を加えて整形。下端が幅広く厚いヘラ状を呈する。
第46図-18 PL-45-20	北東区 スクレイパー	チャート	①3.0 ②3.3 ③1.0 ④6.3	小型の剥片の先端の両面に平坦剝離加える。また、打面からの剝離によってバルブを除去している。両側ともに折れにより欠損。
第46図-19 PL-45-21	北東区 スクレイパー	珪質頁岩	①2.3 ②3.1 ③0.6 ④4.8	素材剥片の腹面側の全周に調整加える。折れにより上半を欠損。
第46図-20 PL-45-16	A3-104G スクレイパー	チャート	①4.7 ②2.8 ③1.1 ④14.1	素材剥片の背面ほぼ全面と、腹面全周に調整加える。表面は、器体の厚さを減らそうと意図した調整が見られるが、ステップフレイキングとなり、コブ状の高まりが残っている。尖頭器の未製品の可能性あり。
第46図-21 PL-46-3	北東区 スクレイパー	黒色頁岩	①3.2 ②2.7 ③0.5 ④6.6	素材剥片の背面ほぼ全面と、腹面の全周に調整加える。上半を欠損。尖頭器の破損品の可能性あり。
第46図-22 PL-45-18	A3-123G スクレイパー	黒色頁岩	①5.2 ②3.8 ③1.8 ④25.8	素材剥片の上下両端を打断した後に、片側の背面に急角度の調整加える。
第47図-23 PL-45-19	A3-143G スクレイパー	黒色頁岩	①4.2 ②3.8 ③0.7 ④17.0	素材剥片の約1/2程の周縁に調整加える。
第47図-24 PL-45-12	A3-123G スクレイパー	黒色安山岩	①4.0 ②5.6 ③1.0 ④23.8	素材剥片の先端の腹面に調整加える。
第47図-25 PL-45-11	A3-104G スクレイパー	黒色頁岩	①8.7 ②5.3 ③2.0 ④86.6	縦長の剥片の背面左側縁に調整加える。
第47図-26 PL-45-15	A3-103G スクレイパー	珪質頁岩	①6.2 ②2.7 ③1.1 ④20.4	横長の剥片の腹面先端に調整。全体にかなり摩耗している。
第47図-27 PL-45-9	A3-022G スクレイパー	黒色頁岩	①6.5 ②4.1 ③1.6 ④46.3	素材剥片の右側縁に、不規則な調整加える。刃部の形状はやや鋸歯状。上半を欠損。
第47図-28 PL-45-17	A3-123G スクレイパー	黒色頁岩	①5.7 ②5.0 ③1.0 ④31.9	両側縁の両面に細かな調整が加えられる。また器体上部では端部を打断した後に、細かな調整を施す。
第46図-29 PL-45-14	A3-142G スクレイパー	黒色頁岩	①5.1 ②7.5 ③0.8 ④41.1	素材剥片の背面右側縁及び、腹面の左側縁と先端に浅い調整。先端の調整はやや急角度で、ノッチ状の部分も見られる。
第48図-30 PL-46-4	北東区 スクレイパー	黒色頁岩	①5.3 ②6.7 ③1.2 ④29.3	横長の剥片の腹面右側縁に浅い調整加える。器体右側を欠損。
第48図-31 PL-45-10	A3-103G スクレイパー	黒色頁岩	①5.1 ②5.1 ③1.9 ④50.0	剥片素材。左側縁から先端にかけて、両面に調整見られるが、背面側により集中する。
第48図-32 PL-45-13	A3-104G スクレイパー	黒色頁岩	①6.9 ②9.5 ③2.2 ④99.5	横長の剥片の先端両面に調整見られる。腹面側の左側縁の打面部近くには、ノッチ状の調整あり。
第48図-33 PL-46-7	A3-144G ビエスエスキュー	黒色頁岩	①5.3 ②4.4 ③1.2 ④26.6	剥片の上下両端に調整加える。また側面にも一部調整加え、スクレイパー状の刃部を作り出す。
第48図-34 PL-46-2	A3-143G ドリル	チャート	①4.6 ②3.5 ③0.7 ④13.1	素材剥片の先端両面に調整加え刃部作出。
第48図-35 PL-46-6	A3-103G ドリル	黒色頁岩	①3.8 ②2.0 ③0.8 ④5.0	素材剥片の先端両面に調整加え、やや厚みのある刃部を作り出す。
第48図-36 PL-46-5	A3-102G ドリル	黒色頁岩	①4.1 ②1.9 ③0.5 ④3.1	素材剥片の全周に調整加え整形。調整はかなり急角度で、剥片の縁部を折り取るように施される。先端は細く尖る。
第49図-37 PL-46-8	10号溝 ノッチ	黒色安山岩	①7.2 ②7.5 ③2.7 ④148.4	厚手の剥片の腹面右側縁に調整加える。一部えぐりを入れて刃部作出。また先端背面側にも調整加え、スクレイパー状の刃部を作り出している。
第49図-38 PL-49-3	2号溝 二次加工剥片	黒色頁岩	①9.7 ②7.1 ③2.0 ④127.8	大型の剥片の背面ほぼ全周に粗い調整加える。腹面側は一部に見られるのみ。下半を欠損。打製石斧の未製品の可能性あり。
第49図-39 PL-48-8	A3-163G 二次加工剥片	黒色頁岩	①6.8 ②5.1 ③2.0 ④57.8	剥片の腹面右側縁に比較的粗い調整加える。先端部では、背面にも調整見られる。
第49図-40 PL-47-17	A3-124G 二次加工剥片	黒色頁岩	①4.8 ②4.9 ③1.6 ④40.3	剥片の両側縁に調整加える。剝離はやや不規則であるが、腹面左側縁には連続した調整が集中する。
第50図-41 PL-48-9	北東区 二次加工剥片	黒色頁岩	①10.7 ②5.0 ③1.6 ④104.5	剥片の下端の平坦面を打面として、両面に不規則な調整加える。
第50図-42 PL-47-2	A3-123G 二次加工剥片	黒色頁岩	①4.1 ②3.3 ③0.6 ④5.6	剥片の一部両面に調整加え、尖頭部を作出。石鏃もしくは尖頭器の未製品の可能性あり。
第50図-43 PL-46-16	A3-103G 二次加工剥片	黒色頁岩	①3.3 ②2.5 ③0.9 ④6.9	小型の剥片の背面右側に平坦剝離。下半を欠損。
第50図-44 PL-46-14	A3-103G 二次加工剥片	黒色頁岩	①1.7 ②1.9 ③0.7 ④1.9	器体右側の裏面（素材剥片の腹部先端部）に調整。上半及び左側を欠損。

遺物観察表

番号	出土遺構 器種	石材	計測値 cm g ①長さ②巾③厚さ④重さ	形態・特徴
第50図- 45 PL-47-6	A3-124G 二次加工剥片	黒色頁岩	①1.7 ②2.3 ③0.6 ④2.3	剥片の背面側の側面に調整加える。小剥片のため全体形状は不明。
第50図- 46 PL-46-15	A3-103G 二次加工剥片	チャート	①2.8 ②2.2 ③0.7 ④4.0	剥片素材。ほぼ全周の両面に調整加工。器体左側を欠損。
第50図- 47 PL-47-4	A3-124G 二次加工剥片	黒色頁岩	①0.9 ②2.3 ③0.2 ④0.8	剥片の腹面側面に調整。小破片のため全体形状は不明。
第50図- 48 PL-47-11	A3-123G 二次加工剥片	黒色頁岩	①4.3 ②4.6 ③0.9 ④13.6	剥片の腹面右側面に不規則な調整。
第50図- 49 PL-48-7	A3-163G 二次加工剥片	黒色頁岩	①6.0 ②4.2 ③1.4 ④29.8	剥片の腹面右側辺の下2/3程に調整加える。先端部では、やや厚みのある刃部となっている。
第50図- 50 PL-49-8	32号溝 二次加工剥片	黒色頁岩	①6.9 ②7.8 ③1.7 ④89.5	剥片の背面右側面に調整。刃部は鋸歯状を呈する。また、腹面先端にも調整加える。
第51図- 51 PL-49-2	1号溝 二次加工剥片	黒色頁岩	①5.7 ②8.1 ③1.4 ④66.7	剥片の腹面はほぼ全周に調整加える。調整は連続して加えられるが、大きさはやや不ぞろい。
第51図- 52 PL-49-6	3号溝 二次加工剥片	黒色頁岩	①11.4 ②6.8 ③1.4 ④71.3	剥片の腹面右側辺の下1/2程に調整加える。下部を欠損。
第51図- 53 PL-47-9	A3-123G 二次加工剥片	黒色頁岩	①4.6 ②2.1 ③1.0 ④8.7	剥片の背面右側面に調整加える。刃部は鋸歯状を呈する。左側は折れにより欠損。
第51図- 54 PL-46-10	A3-102G 二次加工剥片	黒色頁岩	①4.4 ②5.9 ③1.3 ④30.6	素材剥片の腹面右側に平坦剥離見られる。背面側にも一部調整あり。
第51図- 55 PL-46-13	A3-088G 二次加工剥片	黒色頁岩	①5.4 ②3.1 ③0.5 ④7.8	素材剥片の背面に調整。器体の左側中央部には、ノッチ状に調整。また右側の上1/2程は平坦剥離によって薄い刃部作出。
第51図- 56 PL-49-4	48号土壌 二次加工剥片	黒色頁岩	①4.8 ②5.6 ③1.5 ④29.3	剥片の腹面右側面に不規則な調整加える。調整は右側辺から先端にまで及ぶものと思われるが、欠損が激しいため不明確。
第51図- 57 PL-48-3	A3-164G 二次加工剥片	黒色頁岩	①3.6 ②3.5 ③1.0 ④10.3	剥片の背面左側面に調整加える。腹面左側辺にも調整見られるが、打面近くが残るのみで、下2/3程は欠損。
第52図- 58 PL-47-10	A3-124G 二次加工剥片	黒色頁岩	①6.5 ②3.7 ③1.6 ④33.2	剥片の背面側打面近くの右側辺に粗い調整加える。その下部には微細剥離痕見られる。
第52図- 59 PL-49-7	5号溝 二次加工剥片	黒色頁岩	①5.2 ②5.1 ③1.1 ④22.4	剥片の先端腹面側に不規則な調整見られる。また、背面右側辺のえぐれ部には、連続した微細剥離痕あり。
第52図- 60 PL-47-12	A3-123G 二次加工剥片	黒色頁岩	①4.3 ②5.2 ③0.6 ④10.2	剥片の先端腹面側に、浅い小さな調整加える。刃部はやや鋸歯状となる。
第52図- 61 PL-46-17	A3-104G 二次加工剥片	黒色頁岩	①2.7 ②3.8 ③1.2 ④6.6	素材剥片の背面右側辺の一部に調整有り。
第52図- 62 PL-48-4	A3-164G 二次加工剥片	黒色頁岩	①3.8 ②4.6 ③1.1 ④12.7	剥片の打面付近の両面に粗い調整加える。下半を大きく欠くため、全体の形状不明。
第52図- 63 PL-46-11	A3-102G 二次加工剥片	黒色頁岩	①6.7 ②6.4 ③2.1 ④123.9	厚手の剥片の背面先端に鋸歯状の調整加工見られる。右半分を欠損。
第52図- 64 PL-47-1	A3-122G 二次加工剥片	黒色頁岩	①2.9 ②2.7 ③0.7 ④4.9	素材剥片の腹面右側面に微細剥離痕。下部には調整も有り。
第52図- 65 PL-47-8	A3-123G 二次加工剥片	黒色頁岩	①4.3 ②4.1 ③0.7 ④14.2	剥片の腹面側の打面近くの左側辺に、わずかに調整加える。
第52図- 66 PL-48-5	A3-164G 二次加工剥片	黒色頁岩	①7.5 ②6.0 ③1.7 ④71.5	剥片の背面右側辺の一部に不規則な調整見られる。
第52図- 67 PL-47-13	A3-123G 二次加工剥片	黒色頁岩	①3.0 ②5.2 ③0.5 ④3.1	小型の剥片の先端腹面側に調整加える。
第53図- 68 PL-46-9	A3-088G 微細調整剥片	珪質頁岩	①5.7 ②6.9 ③2.0 ④42.7	剥片の主に腹面右側縁に微細剥離痕あり。下半を欠損。
第53図- 69 PL-48-6	A3-143G 二次加工剥片	黒色頁岩	①9.1 ②6.8 ③1.3 ④83.6	剥片の背面側の主に右側辺に、浅く小さな調整加える。調整の大きさはやや不規則。
第53図- 70 PL-49-1	366号土壌 二次加工剥片	黒色頁岩	①5.9 ②10.0 ③1.3 ④94.4	横長剥片の腹面両面に、一部平坦剥離加える。
第53図- 71 PL-48-10	34号井戸 二次加工剥片	黒色頁岩	①6.0 ②11.4 ③1.7 ④127.1	剥片の腹面右側辺のほぼ中央部(図の下端)に、調整加える。
第54図- 72 PL-50-1	637号土壌 二次加工剥片	黒色頁岩	①8.2 ②13.5 ③2.9 ④329.6	大型の横長剥片の腹面先端に、一部調整見られる。また、打面近くを折り取った後、折断面を打面として数回剥離加えている。
第54図- 73 PL-48-1	表採 微細調整剥片	黒色頁岩	①4.7 ②4.8 ③1.6 ④20.7	剥片の両側の一部に微細剥離痕有り。
第54図- 74 PL-48-2	A3-143G 微細調整剥片	黒色頁岩	①6.1 ②4.1 ③1.0 ④20.5	剥片の腹面側の右側辺に微細剥離痕有り。大きさは不ぞろいで、連続性に乏しい。

遺物観察表

番号	出土遺構 器種	石材	計測値 cm g ①長さ②巾③厚さ④重さ	形態・特徴
第54図-75 PL-47-16	A3-124G 微細調整剥片	黒色頁岩	①6.4 ②5.1 ③1.1 ④28.5	剥片の腹面左側辺に微細剥離痕有り。剥離痕の大きさは不ぞろいだが、連続して見られる。
第54図-76 PL-49-5	1号溝 微細調整剥片	黒色安山岩	①6.4 ②5.2 ③2.5 ④67.9	剥片の両側に微細剥離痕有り。剥離の大きさはやや不ぞろいだが、器体の左側辺にはほぼ連続して見られる。
第55図-77 PL-46-12	A3-083G 微細調整剥片	黒色頁岩	①4.0 ②2.3 ③0.6 ④6.0	小型の縦長剥片の左側縁の両面に不規則な微細剥離痕見られる。
第55図-78 PL-47-5	A3-124G 微細調整剥片	黒色頁岩	①2.6 ②3.0 ③0.7 ④3.9	剥片の腹面先端に微細な剥離痕有り。
第55図-79 PL-47-15	A3-123G 微細調整剥片	黒色頁岩	①7.3 ②4.9 ③1.8 ④39.8	剥片の両側辺に微細剥離痕有り。剥離痕は大きさが不ぞろい連続に乏しい。
第55図-80 PL-47-3	A3-123G 微細調整剥片	硬質頁岩	①3.1 ②3.3 ③0.9 ④7.0	小型の剥片の先端背面側に連続して微細な剥離痕見られる。
第55図-81 PL-47-7	A3-123G 微細調整剥片	黒色頁岩	①5.1 ②3.6 ③1.2 ④19.7	剥片の先端の主に腹面側に微細剥離痕有り。
第55図-82 PL-47-14	A3-123G 微細調整剥片	黒色頁岩	①5.0 ②5.2 ③1.0 ④21.8	剥片の主に背面側の右側辺に微細剥離痕あり。剥離痕はほぼ連続して見られるが、大きさは不規則。
第55図-83 PL-47-18	A3-124G 微細調整剥片	黒色頁岩	①11.3 ②6.6 ③2.1 ④132.9	大型の剥片の両側縁の一部に微細剥離痕有り。
第56図-84 PL-50-5	10号溝 打斧	黒色頁岩	①11.8 ②7.5 ③2.3 ④179.7	基部をやや細身に作り出し、刃部が広がる撥形。表面に素材の自然面を大きく残す。全体に使用によると思われる摩耗が見られるが、表面刃部に著しい。
第56図-85 PL-50-7	A3-128G 打斧	変質玄武岩	①11.0 ②6.2 ③2.3 ④177.2	剥片を素材とする。調整加工は、主に両側の両面に加えられ、刃部に素材の縁辺が残る。表面右側の刃部は、節理から折れて一部欠損。
第56図-86 PL-50-4	28号井戸 打斧	黒色頁岩	①10.5 ②7.3 ③2.0 ④130.1	薄手の剥片の主に背面に粗い剥離を加える。上半は節理面で折れる。打製石斧の未製品か。
第56図-87 PL-50-9	表採 打斧	黒色頁岩	①12.2 ②4.9 ③2.2 ④122.5	剥片を素材とする。刃部は比較的薄手に作られている。刃部には使用によると思われる摩耗が見られる。特に、裏面の右側縁の下2cm程の範囲は非常に強い摩耗有り。
第56図-88 PL-50-8	15号溝 打斧	珪質頁岩	①12.8 ②6.3 ③2.0 ④164.3	縦長の剥片の腹面に調整加える。背面側には調整加えられず、素材の自然面がそのまま残る。
第57図-89 PL-50-2	A3-163G 打斧	黒色頁岩	①8.8 ②8.4 ③2.9 ④187.3	裏面の全周に調整が加えられるが、表面は右側辺に浅い調整が見られるのみ。下半を欠損。
第57図-90 PL-50-3	A3-122G 打斧	細粒安山岩	①6.1 ②8.6 ③2.7 ④146.7	厚手の剥片を素材とし、上側と右側辺に粗い調整が加えられる。表面の調整はステップ状となっている。下半を欠損。打製石斧の未製品か。
第57図-91 PL-50-6	17号井戸 打斧	黒色頁岩	①10.2 ②9.1 ③3.1 ④286.5	剥片を素材とする。素材剥片の主に腹面側に調整加える。上半を欠損。
第57図-92 PL-51-1	A3-143G 礫器	ひん岩	①8.6 ②11.1 ③5.4 ④561.0	原石の平坦面から剥離を加えて刃部形成。大きく割り取った後に、刃部に小さな剥離加えて整形。
第58図-93 PL-51-2	A3-143G 礫器	珪質頁岩	①9.1 ②10.5 ③4.3 ④701.0	節理面から分割した礫の先端に、一部浅い交互剥離を加える。
第58図-94 PL-51-4	A3-104G 石核	黒色頁岩	①7.4 ②5.2 ③3.5 ④37.1	やや厚みのある素材の両面及び両側面で剥片を剥離。側面での剥離は裏面側を打面としている。
第58図-95 PL-52-5	12号井戸 石核	黒色頁岩	①5.7 ②8.0 ③3.1 ④158.3	両面の全周において、求心的に小型の剥片を剥離。上半は折れによって欠損。
第58図-96 PL-51-3	A3-123G 石核	黒色頁岩	①4.1 ②5.3 ③3.0 ④67.5	打面と作業面を転移しながら剥片を剥離。最終的には上面を打面として小さな剥片を剥離し、横広の角錐状の形態を呈する。
第58図-97 PL-52-1	A3-124G 石核	黒色頁岩	①5.3 ②8.6 ③5.2 ④144.6	小型の原石の平坦面を打面として2カ所で剥片を剥離。各々で剥離面を打面もしくは作業面として小さな剥片を剥離している。
第59図-98 PL-51-8	A3-124G 石核	黒色頁岩	①6.6 ②7.0 ③3.3 ④49.0	原石の平坦面を打面として剥片を剥離。打面・作業面の転移は見られない。
第59図-99 PL-51-6	A3-123G 石核	黒色頁岩	①5.1 ②4.7 ③2.2 ④49.0	原石、もしくは厚手の剥片の自然面を打面とし、石核表面において求心的に小さな剥片を剥離。
第59図-100 PL-51-7	A3-124G 石核	黒色頁岩	①3.3 ②6.0 ③1.6 ④32.3	剥片を素材とし、剥片の主に腹面側で小型の剥片を剥離。下半は折れて欠損。
第59図-101 PL-52-4	A3-144G 石核	黒色頁岩	①4.2 ②7.7 ③1.9 ④76.0	原石、もしくは剥片の自然面を打面として剥片を剥離。
第59図-102 PL-52-2	A3-143G 石核	黒色頁岩	①10.9 ②6.2 ③4.5 ④387.6	厚みのある素材で、打面・作業面を転移しながら比較的大きな剥片を剥離。その後、上下両端で小さな剥片を剥離。断面形は凸レンズ状。
第59図-103 PL-52-3	A3-143G 石核	黒色頁岩	①4.2 ②3.7 ③1.5 ④28.4	小型の剥片の自然面を打面として、腹面側で小さな剥片を求心的に剥離。
第59図-104 PL-52-6	1号集石 石核	黒色頁岩	①7.1 ②12.8 ③7.8 ④653.0	原石の平坦面を打面として、表裏2カ所で剥片を剥離。

遺物観察表

番号	出土遺構器種	石材	計測値 cm g ①長さ②巾③厚さ④重さ	形態・特徴
第60図-105 PL-51-5	A3-122G 石核	黒色頁岩	①10.1 ②9.2 ③5.2 ④55.4	原石の平坦面を打面としてランダムに剥片を剥離。その後、先の剥離面を打面として石核正面で数枚の剥片を剥離している。
第61図-106 PL-53-1	A3-102G 敲石	粗粒安山岩	①9.9 ②8.9 ③8.1 ④768.0	亜円盤の稜の部分が摩滅。敲打によるつぶれと思われる。
第61図-107 PL-53-4	A3-108G 敲石	粗粒安山岩	①8.7 ②9.4 ③4.2 ④366.9	裏面中央部に敲打痕有り。一部側縁にも見られる。上半欠損。
第61図-108 PL-53-5	A3-123G 敲石	粗粒安山岩	①9.4 ②8.7 ③4.4 ④394.8	側面のほぼ全周に弱い敲打痕有り。
第61図-109 PL-53-2	A3-104G 敲石	粗粒安山岩	①11.5 ②8.1 ③5.8 ④567.2	右側面に敲打痕有り。特に中央部に集中する。
第61図-110 PL-53-6	A3-122G 磨石	輝緑岩	①15.7 ②11.2 ③5.6 ④1187.0	表裏両面の平坦面に磨耗見られるが、より表面が強い。
第61図-111 PL-53-7	A3-124G 磨石	粗粒安山岩	①6.3 ②9.3 ③5.6 ④336.0	表裏両面に磨耗が見られるが、裏面がより強い。下半を欠損。
第61図-112 PL-53-3	A3-143G 磨石	粗粒安山岩	①16.1 ②9.4 ③3.5 ④723.0	表裏両面のほぼ全面に磨耗見られる。また側面はほぼ全周に弱い敲打痕有り。
第61図-113 PL-53-30	A3-164G 扶状耳飾	流紋岩	①2.8 ②1.8 ③0.7 ④3.7	全体に丁寧に研磨してある。表裏両面の上部、内側のへり近くに縦方向の強い線状痕見られる。約半分を欠損。

古墳 埴輪

番号	器形 残存状態	出土遺構	胎土	焼成	色調	形態・特徴
第64図- 1 PL-54-21	円筒 口縁部破片	A3-123G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	折り返しを有する。あるいは形象ハニワの破片か。内面ハケ。
第64図- 2 PL-54-22	形象 破片	A3-123G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR7/6	大刀ハニワ端部破片と考えられる。裏面ハクリ痕あり、表面ハケ調整。
第64図- 3 PL-54-23	円筒 胴部破片	A3-123G	雲母・長石 砂粒若干含む	やや甘い	明赤褐色 2.5YR5/6	タガ弱い突出度台形状を呈す。タテハケ粗。内面ケズリ後ナデ。
第64図- 4 PL-54-24	円筒 口縁部破片	A3-142G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	口縁部、口唇部ナデ。タテ1次ハケ。
第64図- 5 PL-54-25	円筒 破片	A3-142G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR6/6	口辺部タテハケ粗。内面ヨコハケ。
第64図- 6 PL-54-25	円筒 胴部破片	A3-142G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タガ突出度高めM字台形状を呈する。タテハケ。内面ヨコハケ。
第64図- 7 PL-54-26	円筒 胴部破片	A3-142G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 2.5YR6/6	タガ突出度低く、だれているタテハケやや粗。内面タテハケ。
第64図- 8 PL-54-27	円筒 底部破片	A3-142G	雲母・長石 砂粒若干含む	やや甘い	橙色 5YR6/6	タテハケ粗。内面ケズリ後ナデ。
第64図- 9 PL-54-28	形象 破片	A3-143-144G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	靴形ハニワ結細部破片。
第64図- 10 PL-54-29	形象 破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR6/6	表裏面共にハケメやや粗。形象ハニワの付属品かと考えられる。
第64図- 11 PL-54-30	形象 破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR7/6	大刀形ハニワ。柄部破片、一部接合する。タテハケやや粗。内外面調整。
第64図- 12 PL-54-32	円筒 破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	やや甘い	橙色 7.5YR6/6	厚手円筒ハニワ胴部破片。タテハケやや粗。内面ナデ。
第64図- 13 PL-54-33	形象 破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR7/6	大刀形ハニワ。柄部破片。タテハケやや粗。内面ハクリ、ハケ痕跡残る。
第64図- 14 PL-54-34	朝顔 口辺部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 2.5YR6/6	口辺部と考えられる。タテハケやや粗。内面ヨコハケ。
第64図- 15 PL-54-35	円筒 口縁部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 2.5YR7/6	タテハケやや粗。内面ナデ。
第64図- 16 PL-54-36	円筒 口縁部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 2.5YR7/6	タテハケやや粗。内面ナデ。
第64図- 17 PL-54-37	円筒 口縁部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR7/6	タテハケやや粗。口唇部ナデ。内面ナデ。
第64図- 18 PL-54-38	円筒 胴部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 7.5YR7/6	タテハケ粗。内面ナデ。

遺物観察表

番号	器形 残存状態	出土遺構	胎土	焼成	色調	形態・特徴
第64図-19 PL-54-39	形象 柄部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR7/6	大刀形ハニワ。ハケやや粗。直角に延びる接合部残る。裏面ハクリ痕あり。
第64図-20 PL-54-40	形象 破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR7/6	形象ハニワの一部破片。スカシ部の一部残存。
第64図-21 PL-54-42	円筒 胴部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR6/6	刻線部の一部残る。タテハケ粗。内面ハケ。
第64図-22 PL-54-41	形象 破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR6/6	家形ハニワ破片か？スカシ部あり。下部部に巾広いタガ状にまわる。
第64図-23 PL-54-43	円筒 胴部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。線刻あり。内面ヨコハケ。
第65図-24 PL-54-44	形象 破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR7/6	不明形象ハニワ。内外面共にハケやや粗。
第65図-25 PL-54-47	円筒 破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	甘い	にぶい黄橙色 10YR7/4	
第65図-26 PL-54-46	円筒 口縁部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR6/6	表面タテハケ口唇部ナデ。内面ハケ口唇部ナデ。
第65図-27 PL-54-48	円筒 タガ片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 5YR6/8	タガやや低く、低台形状。
第65図-28 PL-54-49	円筒 胴部破片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タガ低くだれている。ハケメ粗。
第65図-29 PL-54-45	形象 端部片	A3-143G	雲母・長石 砂粒若干含む	良好	橙色 7.5YR7/6	大刀形ハニワ。表面タテハケやや粗。内面ナデ。
第65図-30 PL-54-50	円筒 口縁部破片	A3-144G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	口縁端部ナデ。ハケメやや精。
第65図-31 PL-54-51	円筒 口辺部破片	A3-144G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。
第65図-32 PL-54-52	円筒 胴部破片	A3-144G	雲母・長石 砂粒若干含む	甘い	橙色 5YR6/6	タガ突出度やや高く台形状。
第65図-33 PL-55-1	円筒 胴部破片	A3-147G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR6/6	タガの突出度低くM字台形状を呈する。
第65図-34 PL-55-2	円筒 胴部破片	A3-148G	雲母・長石 砂粒若干含む	甘い	橙色 7.5YR7/6	ハケメ粗。
第65図-35 PL-55-3	円筒 底部破片	A3-163G	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 7.5YR7/6	ハケメ粗。
第65図-36 PL-55-4	円筒 口縁部破片	A3-164G	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	口縁端部ナデ。ハケメやや粗。内面ヨコナデ。
第65図-37 PL-55-5	円筒 胴部破片	15号井戸	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	スカシ部破片。ハケメやや精。
第65図-38 PL-55-6	円筒 底部破片	30号井戸	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR7/6	ハケメやや精。内面明瞭に粘土の積み上げ痕残る。
第65図-39 PL-55-7	円筒 底部破片	43号井戸	雲母・長石 砂粒若干含む	甘い	にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケメやや粗。内面ナデ。
第65図-40 PL-55-9	円筒 底部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケメやや粗。内面ナデ。底部に圧痕残る。
第65図-41 PL-55-8	円筒 底部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケメやや粗。内面ナデ。底部に圧痕残る。
第65図-42 PL-55-13	円筒 底部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケメ粗。内面ナデ。底部に圧痕残る。
第65図-43 PL-55-14	円筒 底部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	ハケメやや精。内面ナデ。底部に圧痕残る。
第65図-44 PL-55-10	円筒 底部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケメやや粗。内面ナデ。底部に圧痕残る。
第65図-45 PL-55-16	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/8	ハケメやや粗。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第65図-46 PL-55-15	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/8	ハケメやや粗。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第65図-47 PL-55-11	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/8	ハケメやや精。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第66図-48 PL-55-12	朝顔 頸部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	ハケメ粗。内面もハケメ粗。赤色塗彩の可能性あり。

遺物観察表

番号	器形 残存状態	出土遺構	胎土	焼成	色調	形態・特徴
第66図-49 PL-55-17	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR6/4	タテハケメ粗。内面ナデ。
第66図-50 PL-55-19	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/3	タテハケ後2次ヨコハケやや精。内面ハケメ。
第66図-51 PL-55-18	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	タテハケメやや精。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第66図-52 PL-55-20	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	タテハケやや粗。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第66図-53 PL-55-21	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	浅黄橙色 7.5YR8/3	タテハケやや粗。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第66図-54 PL-55-22	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	タテハケやや粗。内面粘土紐の積み上げ明瞭に残る。赤色塗彩の可能性あり。
第66図-55 PL-55-23	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	にぶい橙色 7.5YR6/4	タテハケ粗。タガ突出度やや高い台形状呈する。スカシ穴半円スカシ?内面ナデ。
第66図-56 PL-55-28	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	タテハケやや精。タガ突出度やや高めで巾広いM字台形状呈する。内面ナデ。
第66図-57 PL-55-31	円筒 口縁部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR7/3	タテハケやや精。内面ヨコハケやや精。口唇上面にもハケ。赤色塗彩の可能性あり。
第66図-58 PL-55-24	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	にぶい橙色 7.5YR6/4	タテハケ粗。タガ突出度高くM字台形状。内面ナデ。
第66図-59 PL-55-25	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	浅黄橙色 10YR8/3	タテハケ粗。タガ突出度やや高めでM字台形状。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第66図-60 PL-55-26	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 7.5YR7/4	タテハケやや粗。タガ突出度やや高く台形状呈する。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第67図-61 PL-55-27	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 7.5YR7/3	タガ突出度やや高めで巾広いM字台形状を呈する。内面ナデ。
第67図-62 PL-55-29	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR7/3	タガ突出度高く巾広い台形状を呈する。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第67図-63 PL-55-30	円筒 胴部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	にぶい黄橙色 10YR7/4	タテハケ粗。タガハクリ。
第67図-64 PL-55-32	円筒 口縁部破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR7/3	タテハケ後ヨコハケ。内面ヨコハケ。赤色塗彩の可能性あり。
第67図-65 PL-55-33	形象 破片	637号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/3	器材ハニワ。器種不明。斜め方向の沈線をタガ状の細い突起を境に鋸歯状に施す。
第67図-66 PL-55-45	円筒 底部破片	640号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	タガ突出度やや高めM字台形状呈する。タテハケやや粗。
第67図-67 PL-55-34	円筒 胴部破片	640号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	2次調整B種ヨコハケ精。
第67図-68 PL-55-35	円筒 胴部破片	656号土壌	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	タテハケ精。
第67図-69 PL-55-36	形象 胴部破片	2号溝	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	器材ハニワ。器種不明。線刻が1条斜め方向に施される。
第67図-70 PL-55-37	円筒 胴部破片	3号溝	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 2.5YR6/6	タガ突出度低く低台形状呈する。
第67図-71 PL-55-38	円筒 口縁部破片	5号溝	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	緩く、くの字状に屈曲する。タテハケ粗。
第67図-72 PL-55-39	円筒 口縁部破片	5号溝	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 2.5YR6/6	タテハケやや粗。内面ヨコハケ粗。
第67図-73 PL-55-40	円筒 口縁部破片	6号溝	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	口縁端部内外面ナデ。
第67図-74 PL-55-41	形象 胴部破片	32号溝	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	器材ハニワ。器種不明。タガ低平で巾広(2.6cm)めぐる。内面ナデ。
第67図-75 PL-55-43	円筒 胴部破片	北東区	雲母・長石 砂粒若干含む	良	明赤褐色 5YR6/6	タガ突出度ややあり低台形状呈する。タテハケ粗。内面ナデ。
第67図-76 PL-55-42	朝顔 頸部破片	北東区	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タガ突出度高く細い台形状呈する。タテハケ精。内面ナデ。
第67図-77 PL-55-44	円筒 口縁部破片	南東区	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR7/4	タテハケ後2次B種ヨコハケやや精。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。

遺物観察表

古墳 土師器

番号	器種 器形	出土位置 残存状態	法量 cm ①口径②底径③器高	胎土 焼成	色調	形態・特徴
第70図-1 PL-53-11	土師器 壺	485号土壙 胴部破片	①- ②- ③-	砂粒若干含む 良	橙色 7.5YR7/6	赤色塗彩を行なう。表裏面共にナデ。
第70図-2 PL-53-13	土師器 台付甕	43号井戸 胴部破片	①- ②- ③-	精良 普通	にぶい黄橙色 10YR7/3	器壁0.4cm、外面ハケメ内面もハケメ調整行なう。
第70図-3 PL-53-12	土師器 高坏	43号井戸 口縁部破片	①- ②- ③-	砂粒若干含む 良	にぶい黄橙色 10YR6/4	ほぼ直線状に外反する。内外面ナデ。
第70図-4 PL-53-15	土師器 坏	656号土壙 口縁部破片	①- ②- ③-	精良 良	橙色 5YR7/6	口辺部にて屈曲して直立する。内外面ナデ。
第70図-5 PL-53-18	土師器 坏	A3-123G 口縁部破片	①- ②- ③-	良 良	にぶい橙色 5YR7/4	須恵器模倣坏。内外面ナデ。
第70図-6 PL-53-8	土師器 坏	22号井戸 口縁部破片	①14.2 ②- ③-	良 良	にぶい橙色 7.5YR6/4	口辺部にて屈曲して直立する。内外面ナデ。
第70図-7 PL-53-19	土師器 坏	A3-143G 口辺部破片	①11.6 ②- ③-	良砂粒若干含む 良	橙色 5YR7/6	須恵器模倣坏。内外面ナデ。
第70図-8 PL-53-25	土師器 坏	A3-164G 口辺部破片	①12.0 ②- ③-	良砂粒若干含む 良	橙色 5YR6/6	須恵器模倣坏。内外面ナデ。
第70図-9 PL-53-29	土師器 坏	南東区 口~底部片	①12.4 ②- ③-	砂粒若干含む 普通	にぶい橙色 7.5YR7/4	須恵器模倣坏。坏部ケズリ、口辺部内外面ナデ。
第70図-10 PL-53-27	土師器 坏	A3-164G 口~底部片	①12.1 ②- ③-	精良 良	橙色 5YR7/6	須恵器模倣坏。内外面ナデ。
第70図-11 PL-53-26	土師器 坏	A3-164G 口辺部破片	①12.0 ②- ③-	良砂粒若干含む 普通	にぶい橙色 7.5YR6/4	有稜タイプ。内外面ナデ。口唇部内面に沈線状にめぐる。
第70図-12 PL-53-21	土師器 坏	A3-163G 口辺部破片	①10.4 ②- ③-	砂粒若干含む 普通	橙色 5YR6/6	埴に近い形態をとる。内外面ナデ。
第70図-13 PL-53-28	土師器 高坏	北東区表採 坏部破片	①16.5 ②- ③-	砂粒若干含む 普通	にぶい橙色 10YR7/3	口縁部片。内外面ナデ。
第70図-14 PL-53-17	土師器 坏	22号溝 底部破片	①- ②- ③-	砂粒若干含む 普通	にぶい橙色 5YR6/4	外面ケズリ痕有する。内面ナデ。
第70図-15 PL-53-24	土師器 高坏	A3-164G 脚端部片	①- ②8.0 ③-	砂粒若干含む 普通	橙色 5YR6/6	端部ナデ調整。内面ナデ。
第70図-16 PL-53-20	土師器 高坏	A3-142-143G 頸部片	①- ②- ③-	砂粒若干含む 普通	橙色 5YR6/6	しほり込みによる成形を行なう。脚部外面ケズリ。
第70図-17 PL-53-9	土師器 壺	96号土壙 底部破片	①- ②4.5 ③-	砂粒若干含む 普通	にぶい橙色 5YR6/4	やや凹み底である。外面ケズリ内面ナデ。
第70図-18 PL-53-14	土師器 壺	637号土壙 底部破片	①- ②6.8 ③-	砂粒若干含む 普通	橙色 5YR6/6	平底。外面ケズリ。内面ナデ。
第70図-19 PL-53-16	土師器 壺	3号溝 底部破片	①- ②5.8 ③-	砂粒若干含む 普通	橙色 5YR6/6	平底。外面ケズリ。内面ナデ。
第70図-20 PL-53-10	土師器 壺	20号井戸 底部破片	①- ②- ③-	砂粒若干含む 普通	橙色 5YR6/6	平底か。外面ケズリ。内面ナデ。
第70図-21 PL-53-22	土師器 壺	A3-163G 底部破片	①- ②7.4 ③-	砂粒若干含む やや悪い	にぶい黄橙色 10YR7/3	平底。外面ケズリ。内面ナデ。
第70図-22 PL-53-23	土師器 壺	A3-164G 底部破片	①- ②5.1 ③-	砂粒若干含む 普通	にぶい橙色 7.5YR6/4	やや凹み底である。外面ケズリ。内面ナデ。

古墳 須恵器

番号	器種 器形	出土位置 残存状態	法量 cm ①口径②底径③器高	胎土 焼成	色調	形態・特徴
第70図-23 PL-54-3	須恵器 甕	6号溝 胴部破片	胴径<10.4> ②- ③-	精良 良	緑灰色 7.5GY6/1	一条の沈線あり。
第70図-24 PL-54-4	須恵器 長頸壺	12号溝 頸部破片	①- ②- ③-	精良 良	灰色 N6	自然釉かかる。
第70図-25 PL-54-9	須恵器 壺	A3-164G 口縁部破片	①<16.2> ②- ③-	砂粒若干含む 普通	灰色 10Y6/1	波状文施す。
第70図-26 PL-54-10	須恵器 平瓶	A3-103G他 胴部破片1/3	胴径<14.5> ②- ③-	精良 良好	暗灰色 N3	粘土紐積み上げ体部成形後、ケズリにより調整する。肩部は緩やかだが底部は直角に屈曲する。
第70図-27 PL-54-1	須恵器 甕	34号井戸 胴部破片	①- ②- ③-	精良 甘い	褐灰色 7.5YR4/1	擬格子タタキ、内面同心円。
第70図-28 PL-54-5	須恵器 甕	A3-103G 胴部破片	①- ②- ③-	砂粒若干含む 普通	灰色 5Y5/1	平行タタキ、内面同心円。

遺物観察表

番号	器種 器形	出土位置 残存状態	法 量 cm ①口径②底径③器高	胎 土 焼 成	色 調	形 態 ・ 特 徴
第70図- 29 PL-54-2	須恵器 提瓶	3号溝 胴部破片	①— ②— ③—	砂粒若干含む 普通	黒色 N2	外面カキ目調整、内面ケズリ後ナデ。
第70図- 30 PL-54-6	須恵器 甕	A3-143G 胴部破片	①— ②— ③—	砂粒若干含む 普通	灰色 10Y4/1	平行タタキ、内面青海波文。
第70図- 31 PL-54-7	須恵器 甕	A3-143G 胴部破片	①— ②— ③—	砂粒若干含む 普通	灰色 10Y4/1	平行タタキ、内面同心円。
第70図- 32 PL-54-8	須恵器 甕	A3-143G 胴部破片	①— ②— ③—	砂粒若干含む 普通	灰色 7.5Y4/1	平行タタキ、弱くほとんど見えない。内面青海波文。

古代

番号	器種 器形	出土位置 残存状態	法 量 cm ①口径②底径③器高	胎 土 焼 成	色 調	形 態 ・ 特 徴
第72図- 1 PL-54-11	土師器 坏	52号土壙 口縁部破片	①(13.0) ②— ③—	砂粒若干含む 良好	にぶい褐色 7.5YR5/4	口唇部やや外方に開く形態を有する。内外面ナデ。
第72図- 2 PL-54-12	土師器 坏	16号井戸 口縁部破片	①(10.7) ②— ③—	雲母・砂粒若干含む 良好	にぶい橙色 7.5YR6/4	口唇部内側に向け、くの字状にほんの少し曲げる。内外面ナデ。
第72図- 3 PL-54-13	土師器 坏	485号土壙 口縁部破片	①(14.0) ②— ③—	雲母・砂粒若干含む 良好	橙色 5YR6/6	口唇部やや屈曲し、立ち上がり気味である。内外面ナデ。
第72図- 4 PL-54-14	土師器 甕	2号溝 口縁部破片	①— ②— ③—	雲母・砂粒若干含む 良好	にぶい橙色 5YR6/4	口辺部垂直に立ち上がった後外方に向けてやや傾斜するもの。内外面ナデ。
第72図- 5 PL-54-15	須恵器 甕	11号溝 頸部破片	①— ②— ③—	砂粒若干含む 良好	にぶい橙色 5YR7/4	頸部が屈曲し始める所で欠損。内外面共にナデ。
第72図- 6 PL-54-16	須恵器 坏蓋	6号溝 口縁部破片	①— ②— ③—	精良 良好	灰白色 2.5Y8/2	口唇端部にのみ自然釉がかかる。内外面共にナデ。
第72図- 7 PL-54-18	須恵器 坏	A3-026G 口縁部破片	①— ②— ③—	砂粒若干含む 良好	灰色 5Y6/1	口唇部ごくわずかに内側に向け屈曲。内外面ナデ。
第72図- 8 PL-54-17	須恵器 埴	32号溝 底部破片	①— ②— ③—	砂粒若干含む 良好	灰白色 N7	高台部一部欠損。底部内外面ナデ有り、外面ナデやや粗い。
第72図- 9 PL-54-20	須恵器 坏	A2-090G 口唇部破片	①(12.0) ②— ③—	砂粒若干含む 良好	灰色 7.5Y6/1	口唇部。ごく弱く外方に開く。内外面ナデ。
第72図-10 PL-54-19	須恵器 長頸壺	A2-089G 頸部破片	頸部径(8.4)②— ③—	砂粒若干含む 良好	灰色 10Y6/1	頸部立ち上がり屈曲激しい補強の粘土帯外面よりつける。

中世

番号	器種 器形	出土位置 残存状態	法 量 cm ①口径②底径③器高	特 徴	備 考
第139図- 1 PL-56-3	青磁 碗	A3-248G 破片	①— ②— ③—	内面底部周縁に片影りによる圏線。竜泉窯系。	14世紀
第139図- 2 PL-56-1	磁器 碗	22号溝 底部破片	①— ②5.5 ③—	中国製磁器。白磁。外面高台脇以下無釉。	
第139図- 3 PL-56-2	青磁 香炉か	27号溝 底部破片	①— ②(8.1) ③—	中国製。青磁香炉か。青磁釉は厚く、貫入は認められない。	中世
第139図- 4	灰釉陶器 壺	29号土壙 底部破片	①— ②(8.4) ③—	ロクロ成形、回転伴うヨコナデ調整。外面自然釉かかる。	
第139図- 5	陶器 向付か	A3-251G 底部破片	①— ②5.0 ③—	美濃窯。大窯製品。削り出し高台で外底無釉。内外面灰釉。釉の発色良くない。	16世紀
第139図- 6 PL-56-7	灰釉陶器 皿	50号土壙 1/4欠損	①10.6 ②6.2 ③2.4	口縁部は歪み、楕円を呈す。内面底部に3カ所トチン（重ね焼き痕）あり。	
第139図- 7	焼締陶器 甕	攪乱 破片	①— ②— ③—	知多窯系。内面使用により摩滅。底部付近の破片。	
第139図- 8	焼締陶器 甕	23号土壙 底部破片	①— ②(15.6) ③—	知多窯系。胴部に歪みあり。	
第139図- 9	焼締陶器 甕	31号井戸 口縁部破片	①— ②— ③—	知多窯系。	13世紀中頃
第139図- 10	焼締陶器 甕	26号井戸 口縁部破片	①— ②— ③—	知多窯系。	13世紀前半
第139図- 11	焼締陶器 甕	22号井戸 破片	①— ②— ③—	知多窯系スタンプ紋あり。	
第139図- 12	焼締陶器 鉢	1号溝 底部破片	①— ②(14.8) ③—	知多窯。内面は使用により摩滅。	

遺物観察表

番 号	器 種 器 形	出土位置 残存状態	法 量 cm		特 徴	備 考
			①口径②底径③器高			
第139図- 13 PL-56-12	焼締陶器 甕	20号井戸 口縁部破片	①— ③—	②—	知多窯。	16世紀
第139図- 14	焼締陶器 甕	表採 体部下位片	①— ③—	②—	知多窯。	13～14世紀
第139図- 15	焼締陶器 甕	5号溝 破片	①— ③—	②—	知多窯。	
第139図- 16 PL-56-11	焼締陶器 鉢	637号土壙 口縁部破片	①— ③—	②—	内面自然釉付着。	13世紀後半
第139図- 17	焼締陶器 甕	北東区 破片	①— ③—	②—	外面叩き目。知多窯。	12～14世紀
第140図- 18	焼締陶器 鉢	637号土壙 底部片	①— ③—	②11.1	知多窯。内面使用により摩滅する。	13世紀
第140図- 19	焼締陶器 甕	327号土壙 底部破片	①— ③—	②(15.7)	知多窯。内面、自然釉がかかる。	
第140図- 20	焼締陶器 甕か壺	36号溝 底部破片	①— ③—	②—	知多窯。内面、自然釉かかる。	
第140図- 21	焼締陶器 甕	34号溝 破片	①— ③—	②—		製作地不詳
第140図- 22	焼締陶器 壺	A3-142G 口縁部破片	①— ③—	②—	製作地不詳。口縁部内面ゆるい段をなす。	14世紀前半～ 中頃か
第140図- 23	焼締陶器 甕	493号土壙 破片	①— ③—	②—	知多窯。頸部直下の破片で頸部は接合部から剥がれる。	13～14世紀
第140図- 24	焼締陶器 甕	66号土壙 破片	①— ③—	②—	知多窯か。体部下位の破片であろう。	14～15世紀
第140図- 25	焼締陶器 甕	18号井戸 体部破片	①— ③—	②—	渥美窯。外面帯状の叩き目。	12世紀
第140図- 26	軟質陶器 内耳鍋	A3-163G 口縁部破片	①— ③—	②—	器表青灰色。外面煤付着。	14世紀後半～ 15世紀前半
第140図- 27	軟質陶器 内耳鍋	32号溝 口縁部破片	①— ③—	②—		14世紀
第140図- 28	軟質陶器 内耳鍋	31号井戸 口縁部破片	①— ③—	②—	小ぶりな内耳。	14世紀後半
第140図- 29 PL-56-14	焼締陶器 甕	2号溝 口縁部破片	①(46.5) ③—	②—	知多窯。	13世紀前半
第140図- 30	軟質陶器 内耳鍋	22号井戸 口縁部破片	①(31.2) ③—	②—		15世紀 在地製品
第140図- 31	軟質陶器 内耳鍋	10号溝 口縁部破片	①(34.9) ③—	②—		16世紀
第141図- 32	軟質陶器 内耳鍋	32号溝 口縁部破片	①— ③—	②—	焼成後に被熱する。	
第141図- 33	軟質陶器 内耳鍋	北東区 口縁部破片	①— ③—	②—	器壁厚。断面青灰色。丸底であろう。外面煤状の黒色付着。	14世紀後半～ 15世紀前半
第141図- 34	軟質陶器 片口鉢	33号井戸 口縁部破片	①— ③—	②—	オロシ目がヘラでつけられた片口部一部残存。	
第141図- 35	軟質陶器 搦鉢	637号土壙 胴部破片	①— ③—	②—	内面下位に8本+aのすり目を入れる。内面使用により摩滅。	15～16世紀
第141図- 36	軟質陶器 搦鉢	10号溝 口縁部破片	①(30.0) ③—	②—	内面使用により摩滅。	
第141図- 37	軟質陶器 搦鉢	32号溝 口縁部破片	①(29.7) ③—	②—	内面下位使用により摩滅。	
第141図- 38	軟質陶器 内耳鍋	21号井戸 底部破片	①— ③—	②(23.2)		
第141図- 39	軟質陶器 内耳鍋	22号井戸 底部破片	①— ③—	②(27.9)	回転を伴うヨコナデ調整。在地製品。	15世紀後半～ 16世紀
第141図- 40 PL56-13	軟質陶器 内耳鍋	91号土壙 1/6底部欠損	①(33.9) ③(17.1)	②(25.1)	外面粘土紐作りの後ロクロによるナデ調整。外面胴部下半部に、手持ちヘラ削り、ヘラナデを施す。内面ナデ調整。外面の一部には煤状の黒色物質付着。	15世紀後半 在地製品
第141図- 41 PL-56-8	軟質陶器 内耳鍋	91号土壙 1/3残存	①(32.0) ③(17.8)	②(20.7)	口縁部内外面ヨコナデ。粘土紐作り胴部内面ヘラ状工具による、回転伴うヨコナデ調整。胴部外面指おさえ、ナデ、手持ちヘラ削り調整。35とはほぼ同様の形状を示す。把手付きの痕わずかに残る。	15世紀 在地製品

遺物観察表

番 号	器 種 器 形	出土位置 残存状態	法 量 cm		特 徴	備 考
			①口径②底径③器高			
第141図- 42 PL-56-15	軟質陶器 内耳鍋	南東区 口縁部破片	①(34.0) ③-	②-	器壁やや薄い。内面口縁部下の段は低く不明瞭。	15世紀後半
第141図- 43 PL-56-10	軟質陶器 内耳鍋	637号土壌 口縁部破片	①(31.0) ③-	②-		15世紀 在地製品
第141図- 44	軟質陶器 内耳鍋	10号溝 胴~体部片	①- ③-	②(25.1)	内面全体いぶし状黒色。外面指押えナデ調整。	16世紀
第141図- 45	軟質陶器 内耳鍋	20号井戸 底部破片	①- ③-	②(33.0)	外面横方向ヘラ削り。内面ヘラ状工具による、回転伴うヨコナデ調整。	15世紀
第142図- 46	軟質陶器 搦鉢	11号溝 底部破片	①- ③-	②(13.2)	全体にローリングを受ける。	
第142図- 47	軟質陶器 搦鉢	39号井戸 底部破片	①- ③-	②(10.7)	底部外面左回転糸切り無調整。内面底部中央と体部下位使用により摩滅する。	在地製品
第142図- 48	軟質陶器 搦鉢	35号溝 底部破片	①- ③-	②(12.6)	内面特に摩滅。	
第142図- 49	軟質陶器 搦鉢	2号溝 底部破片	①- ③-	②(11.0)	底部外面回転糸切り。内面体部下端と底部周縁摩滅。	
第142図- 50 PL-56-9	軟質陶器 搦鉢	637号土壌 口縁部破片	①(29.9) ③-	②-	外面、器面ハクリ。口縁部ヘラ状工具による回転を伴うヨコナデ。胴部指押え、手持ちヘラ削り。内面使用により摩滅。	
第142図- 51	軟質陶器 搦鉢	10号井戸 口縁部破片	①(29.4) ③-	②-		在地製品
第142図- 52	軟質陶器 搦鉢	32号井戸 口~胴部片	①(31.9) ③-	②-	粘土紐作り。内面ヘラによる横方向のナデ整形。胴部中位~底部にかけて使用によるすり面あり。	
第142図- 53	軟質陶器 搦鉢	8号井戸 口縁部破片	①- ③-	②-	内面使用により摩滅。	14~15世紀
第142図- 54	軟質陶器 壺	637号土壌 破片	①- ③-	②-		
第142図- 55	中世瓦 平瓦	43号井戸 破片	①- ③-	②-	外面叩き目。	13~14世紀
第142図- 56	軟質陶器 不詳	A3-370G 破片	①- ③-	②(5.4)		
第142図- 57	カワラケ	43号井戸 口縁部破片	①(7.2) ③(1.6)	②(5.0)	口縁端部油煙付着。	
第142図- 58	カワラケ	15号溝 底部片	①- ③-	②5.0	左回転糸切り無調整。	
第142図- 59 PL-56-5	カワラケ	639号土壌 3/4残存	①12.3 ③2.6	②6.7	底部外面左回転糸切り後に圧痕。底部内面ナデ。	
第142図- 60 PL-56-4	カワラケ	639号土壌 1/2残存	①12.4 ③3.0	②6.8	底部外面左回転糸切り後に圧痕。底部内面ナデ。	
第142図- 61	カワラケ	27号井戸 底部片	①- ③-	②(5.8)	外底の板状圧痕と内面ナデの強弱は相関関係(正)がある。	
第142図- 62 PL-57-6	カワラケ	南東区 ほぼ完形	①7.6 ③1.9	②5.6	器壁厚い。ロクロ左回転糸切り無調整。	中世
第142図- 63 PL-57-6	カワラケ	33号井戸 1/2残存	①(8.9) ③2.6	②5.6	ロクロ成形。外面1本の浅い沈線が巡る。底部回転糸切り。	中世

江戸

番 号	器 種 器 形	出土位置 残存状態	法 量 cm		特 徴	備 考
			①口径②底径③器高			
第144図- 1 PL-57-7	陶器 染付碗	61号土壌 1/8残存	①13.0 ③7.0	②4.9	肥前。陶胎染付碗。高台端部のみ無軸。口縁部外面簡略化した四方禱を染付する。	18世紀前半
第144図- 2	磁器 染付皿	48号溝 底部破片	①- ③-	②5.6	肥前。口縁部から体部を花形に形押しする。	19世紀前半~ 中頃
第144図- 3 PL-57-8	磁器 小型碗	39号井戸 5/6残存	①8.0 ③4.5	②2.9	肥前。口縁部外面雨降文。	18世紀前半
第144図- 4	磁器 染付丸碗	B2-361G 底部片	①- ③-	②3.0	肥前。外面は「孟宗譚」。内面簡略化された「五弁花」。	18世紀後半~ 19世紀初頭
第144図- 5 PL-57-13	磁器 皿	39号井戸 完形	①13.5 ③3.3	②7.2	肥前。見込み五弁花コンニャク印判か? 体部内面三方にコンニャク印判による施文。外面簡略化した唐草文。	18世紀前半~ 中頃
第144図- 6 PL-57-10	磁器 染付皿	49号溝 1/2残存	①14.0 ③4.3	②8.4	肥前。見込み簡略化した五弁花。外底は「渦福」であろう。	18世紀中頃~ 末

遺物観察表

番号	器種 器形	出土位置 残存状態	法 量 cm ①口径②底径③器高	特 徴	備 考
第144図- 7 PL-57-1	陶器 片口鉢	33号井戸 1/3残存	①17.6 ②10.0 ③10.4注口長さ(5.1) 注口径(2.1)	瀬戸・美濃。外面ロクロ成形。回転糸切りにより切り離した後、 周辺回転伴うヘラ削り調整。内面2カ所に目痕あり。付け高台。	18世紀前半～ 中頃
第144図- 8	灰釉陶器 皿	33号井戸 4/5残存	①12.8 ②6.1 ③3.9	瀬戸・美濃。内外面灰釉。内面重ね焼き痕あり。付け高台。	18世紀か
第144図- 9	灰釉陶器 碗	61号土壙 口縁部破片	①(9.2) ②— ③—	瀬戸・美濃系。	18世紀
第144図- 10	陶器 染付碗	31号溝 胴～底部片	①— ②5.2 ③—	肥前。陶胎染付碗。	18世紀前半
第144図- 11	陶器 碗	B2-361G 1/4残存	①8.2 ②4.4 ③3.6	瀬戸・美濃。内外面餡釉。内面にワラ灰系の灰釉かかる。底 部糸切り痕。回転ヘラ削り調整。	
第144図- 12	灰釉陶器 碗	B2-361G 底部片	①— ②3.3 ③—	瀬戸・美濃。内外面灰釉施釉。外底無釉。	
第144図- 13	陶器 碗	33号井戸 底部1/2残存	①— ②5.5 ③—	瀬戸・美濃。内外面餡釉。外面釉拭い取る。内面ワラ灰系の 灰釉がかかる。	18世紀
第144図- 14	陶器 碗	表採 底部片	①— ②4.6 ③—	肥前。呉器手碗。	17世紀後半
第144図- 15 PL-57-11	陶器 碗	33号井戸 1/3残存	①(13.2) ②6.4 ③7.1	瀬戸・美濃。内外面餡釉。ワラ灰系の灰釉を口縁に掛ける。	18世紀中頃
第144図- 16 PL-57-14	陶器 碗	39号井戸 一部欠損	①11.0 ②5.0 ③7.3	瀬戸・美濃。高台脇以下無釉。餡釉、口縁部のみワラ灰系の 灰釉を施す。いわゆる尾呂茶碗。	18世紀前半～ 中頃
第144図- 17	陶器 碗	33号井戸 口縁部破片	①(13.4) ②— ③—	瀬戸・美濃。内外面鉄釉。口縁部灰釉附着。	17世紀?
第144図- 18	陶器 片口鉢か	表採 底部残存	①— ②7.0 ③—	瀬戸・美濃。内面目痕3カ所あり。内面～高台脇餡釉。	18～19世紀前 半
第144図- 19	陶器 碗	31号溝 1/8残存	①11.0 ②5.1 ③5.5	瀬戸・美濃。錆釉、灰釉かけ分け碗。	18世紀後半
第144図- 20	陶器 丸碗	656号土壙 1/5残存	①(12.0) ②— ③—	瀬戸・美濃系。高台脇以下を除き、餡釉を施す。口縁部のみ ワラ灰系の灰釉を施す。	18世紀前半～ 中頃
第144図- 21	灰釉陶器 片口鉢	表採 1/4残存	①(13.8) ②6.0 ③6.9	瀬戸・美濃。内面から高台脇灰釉。内底目痕2カ所あり。外 底「ユ」墨書。	19世紀前半
第144図- 22	陶器 丸碗	5号溝 口縁部破片	①(13.0) ②— ③—	瀬戸・美濃。餡釉の後口縁部にワラ灰系の灰釉を施す。	18世紀
第144図- 23	陶器 片口鉢	33号井戸 底部残存	①— ②7.9 ③—	瀬戸・美濃。鉄釉。器肉が厚く、底部、高台も厚みがある。 高台部の1/2ほどはすれ、摩滅して短い。	
第145図- 24 PL-56-16	陶器 菊皿	14号井戸 完形	①13.5 ②7.0 ③3.6	瀬戸・美濃系。高台脇以下を除き灰釉を施す。口縁部のみ銅 緑釉を施す。	17世紀
第145図- 25 PL-56-17	陶器 菊皿	14号井戸 完形	①13.8 ②7.3 ③3.9	瀬戸・美濃系。高台脇以下を除き灰釉を施す。口縁部のみ銅 緑釉を施す。	17世紀
第145図- 26 PL-56-2	陶器 半胴甕	表採 1/2残存	①14.4 ②9.9 ③13.8	瀬戸・美濃。口縁部外面2条の浅い沈線。口縁部に団子ト ン痕1カ所あり。高台端部は使用により摩滅。錆釉に近い鉄 釉。	18世紀中頃
第145図- 27	灰釉陶器 鉢	61号土壙 口縁部破片	①20.6 ②— ③—	瀬戸・美濃系陶器、灰釉鉄絵鉢。外面体部下位以下無釉。	17世紀
第145図- 28	灰釉陶器 鉢	表採 底部破片	①— ②14.6 ③—	瀬戸・美濃。鉄絵、一部に銅緑釉。	17～18世紀
第145図- 29	陶器 耳壺	39号井戸 破片	①12.6 ②— ③—	瀬戸・美濃。口縁部と体部小片で接合しないが同一個体。口 縁部内面～外面に鉄釉を施す。口縁端部のみ無釉。耳部は残 存しないが耳壺であろう。	18世紀
第145図- 30	陶器 土瓶?	北東区 底部破片	①— ②6.5 ③—	瀬戸・美濃。器壁厚い。内面から外面体部下位柿釉。内底目 痕3カ所あり。外底被熱か。	
第145図- 31 PL-57-15	陶器 鉢	33号井戸 破片	①— ②17.8 ③—	製作地不詳。内面灰釉、鉄泥による文様。目痕5カ所あり。	17世紀か
第145図- 32	陶器 鉢	656号土壙 口縁部破片	①(25.2) ②— ③—	肥前(唐津)。外面白土の刷毛塗り。外面に鉄釉による横線が 1条認められる。	
第146図- 33	陶器 播鉢	39号井戸 破片	①(32.0) ②(11.0) ③(13.4)	瀬戸・美濃。接合しないが2点は同一個体。口縁部は内面に 折り返す。全面錆釉を施し、底部外面のみ拭い取る。底部外 面右回転糸切り無調整。	18世紀前半
第146図- 34 PL-57-9	焼締陶器 播鉢	39号井戸 胴～底部1/2	①— ②(14.0) ③—	信楽系。細く鋭いすり目を施す。体部外面上位ロクロ目あり。 同下位は指頭痕残る。	18世紀か

遺物観察表

番 号	器 種 器 形	出土位置 残存状態	法 量 cm ①口径②底径③器高	特 徴	備 考
第146図- 35	陶器 播鉢	61号土壙 胴～底部片	①— ②(15.2) ③—	瀬戸・美濃系。錆釉を施し、底部外面の釉は拭い取る。	
第146図- 36	焼締陶器 播鉢	33号井戸 体部下位片	①— ②(15.1) ③—	製作地不詳。内底すり目摩滅する。外底砂底。すり目6本1単位。	
第146図- 37	陶器 播鉢	39号井戸 胴～底部片	①— ②13.8 ③—	瀬戸・美濃。内外面錆釉。底部内外面器表摩滅する。すり目19本1単位。	18世紀か
第146図- 38	軟質陶器 鍋	39号井戸 口縁部破片	①(33.0) ②— ③—	在地製。口縁部外傾する。器壁厚い。外面煤付着。	17～18世紀前半
第146図- 39	軟質陶器 内耳焙烙	A3-143G 破片	①(34.2) ②(32.2) ③5.2	体部中位外面接合痕。体部外面煤付着。	18世紀
第146図- 40	軟質陶器 内耳焙烙	39号井戸 破片	①(37.0) ②(39.8) ③5.2	在地製。耳は1カ所のみ残存する。内面ヘラミガキ。底部外面砂底。体部外面煤付着。	18～19世紀前半
第146図- 41	軟質陶器 PL-57-4 内耳焙烙	33号井戸 1/4残存	①(36.6) ②(34.0) ③6.2		
第146図- 42	軟質陶器 PL-57-3 焙烙	南東区表採 1/6残存	①(37.8) ②(32.2) ③5.9	口縁部平坦。外面体部下端ヘラ削り後ナデ。口縁～体部外面煤付着。	17～18世紀
第146図- 43	軟質陶器 焙烙	北東区 1/8残存	①(38.0) ②(35.0) ③5.5	体部外面下半ヘラ削り。底部補修孔1個残る。体部外面煤付着。	18世紀
第146図- 44	軟質陶器 蓋	396号土壙 摘み部欠損		天井部外面丁寧なヘラ削り後ナデ。	時期不明
第146図- 45	陶器 碗	33号井戸 底部片	①— ②5.9 ③—	製作地不詳。高台の内外面及び外底に鉄釉施す。	
第146図- 46	カワラケ PL-57-5	396号土壙 1/2残存	①(16.3) ②(7.5) ③3.9	ロクロ左回転。1カ所口縁が内側に折れるような大きな歪みあり。内外面一部に煤状の黒色付着。	
第147図- 49	軟質陶器 香炉	A3-102G 口縁部破片	①— ②— ③—	在地製。外底砂底。低く丸い脚を貼付。	
第147図- 50	軟質陶器 香炉?	A3-143G 破片	①— ②— ③—	外面回転施文具?による施文。	
第147図- 51	軟質陶器 火鉢	表採 口縁部破片	①— ②— ③—	口縁部内側に折れる。	
第147図- 52	瓦 丸瓦	33号井戸 破片	①— ②— ③—		

近代

番 号	器 種 器 形	出土位置 残存状態	法 量 cm ①口径②底径③器高	特 徴	備 考
第149図- 1	磁器 皿	北東区表採 1/2残存	①11.1 ②6.3 ③2.1	瀬戸・美濃。銅版プリント。口錆。	明治～大正
第149図- 2	磁器 碗	A3-144G 底部破片	①— ②3.5 ③—	瀬戸・美濃。人造呉須による染付。	明治
第149図- 3	磁器 皿	A3-144G 1/3残存	①(14.0) ②(7.4) ③2.9	型紙摺。	明治
第149図- 4	磁器 湯飲	A3-144G 1/2残存	①7.1 ②3.3 ③4.6	銅版による松竹梅文。	明治～大正
第149図- 5	陶器 壺	396号土壙 口縁部破片	①(23.1) ②— ③—	瀬戸・美濃系。鉄釉。	
第149図- 6	陶器 土瓶蓋	A3-123G 1/2残存	内径7.8 外径10.2 ③3.4	製作地不詳。外面2本1単位の鉄絵と白土筒描きによる波状文。外面透明釉。	明治～大正
第149図- 7	陶器 こね鉢	12号溝 底部破片	①— ②(13.1) ③—	益子・笠間系。灰釉を施す。内面に銅釉が流れる。内面と高台に円形の目痕。	明治以降
第149図- 8	軟質陶器 火消壺か	43号井戸 口縁部破片	①— ②— ③—		
第149図- 9	軟質陶器 鍋	A3-143G 破片	①— ②(17.0) ③—	内面浅い沈線。外底砂底。	明治～大正
第149図- 10	軟質陶器 鍋	A3-144G 胴～底部片	①— ②(18.0) ③—	体部内面浅い沈線。断面灰白色。	明治～大正
第149図- 11	軟質陶器 器形不詳 PL-57-16	A3-144G 1/5残存	①(36.8) ②(14.5) ③16.6	焜炉の内側に入れる部分であろうか。体部下位内面被熱により白く変色する。外部との接合痕ない。	江戸～明治

遺物観察表

番 号	器 種 器 形	出土位置 残存状態	法 量 cm ①口径②底径③器高	特 徴	備 考
第149図- 12	軟質陶器 焙烙	北東区表採 口縁部破片	①(29.2) ②(27.9) ③2.8	底部器壁薄い。器高低い。	明治~大正
第149図- 13	軟質陶器 焙烙	A3-144G 口縁部破片	①(30.3) ②(29.2) ③2.1	口縁部肥厚。器高低い。口縁部外面のみ煤附着。	明治~大正
第149図- 14	軟質陶器 焙烙	A3-144G 口縁部破片	①(31.4) ②(31.4) ③2.5	口縁部器壁厚い。口縁部外面丸味を帯びる。	明治~大正
第149図- 15	軟質陶器 内耳焙烙	A3-144G 口縁部破片	①(34.9) ②(34.2) ③3.0	体部器壁厚い。内外面部分により煤附着。耳は1カ所のみ残存する。	明治~大正
第149図- 16	軟質陶器 焙烙	A3-144G 口縁部破片	①(40.9) ②(41.0) ③2.8	器高低い。口縁部外面丸味を帯びる。	明治~大正
第149図- 17	軟質陶器 焙烙	A3-144G 口縁部破片	①(33.9) ②(32.8) ③2.8	体部低く、口縁部丸い。	明治~大正

遺物観察表

粉挽き白 上白

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値				形 態 ・ 特 徴
			①上面径	②高さ	③上縁巾	④上縁高	
第152図-1 PL-58-1	10号溝	粗粒安山岩	①29.1 ⑤0.4	②(12.9) ⑥-	③(6.3) ⑦-	④2.0 ⑧15.1	側面は仕上がり済、下面は目を刻まず、上面は工具痕を残し製作途上。軸芯穴、供給口及び挽き手穴は未穿孔。
第152図-2 PL-58-3	15号溝	粗粒安山岩	①(30.5) ⑤0.2	②15.5 ⑥-	③3.9 ⑦-	④2.6 ⑧18.0	側面は仕上がり済。下面は目を刻まず、上面は工具痕を残し製作途上。軸芯穴、供給口及び挽き手穴は未穿孔。
第152図-3 PL-58-5	43号井戸	粗粒安山岩	①28.7 ⑤0.4	②9.8 ③3.5	③2.6 ⑦4.1	④1.8 ⑧12.0	上面及び側面は丁寧な磨き仕上げ。側面に挽き手穴を有し、下面はやや荒い目の6分割、やや摩耗する。
第152図-4 PL-58-6	15号溝	粗粒安山岩	①(30.5) ⑤0.4	②11.9 ③(3.5)	③3.5 ⑦4.3	④1.6 ⑧6.9	上面及び側面は丁寧な成形だが石打は粗。下面は目が荒い6分割か、摩耗著しい。
第153図-5 PL-58-4	表探	粗粒安山岩	①26.0 ⑤0.7	②11.0 ③4.2	③1.4 ⑦4.8	④2.1 ⑧9.8	上面及び側面は丁寧な磨き仕上げ。下面は細かい目の6分割やや摩耗する。又、下面に供給口部を同様のえぐりがもう1ヵ所有り。側面の挽き手穴は上面縁部よりの堅穴だが、タガの痕跡はなし。
第153図-6 PL-59-4	39号井戸	粗粒安山岩	①<17.0> ⑤1.0	②8.5 ⑥-	③5.0 ⑦-	④2.0 ⑧3.0	上面・側面は丁寧な仕上げ。下面の目は摩滅。やや偏減りする。
第153図-7 PL-59-1	41号井戸	粗粒安山岩	①30.8 ⑤0.8	②8.5 ③4.0	③-	④- ⑧7.2	上縁部及び側面は剥落。側面に挽き手穴を有し、下面は目がやや荒い6分割、やや摩耗。
第153図-8 PL-58-2	29号井戸	粗粒安山岩	①(32.6) ⑤3.8	②15.9 ③-	③3.6 ⑦4.5	④3.5 ⑧15.9	上面及び側面は丁寧な仕上げ。側面に挽き手穴を有し、下面は目が荒く6分割深く残るが、剥落著しい。
第154図-9 PL-59-2	39号井戸	粗粒安山岩	①34.0 ⑤0.9	②<17.1> ③(3.0)	③-	④- ⑧4.4	下面は目が摩滅。側面に挽き手部と思われる凸部を持つが欠損のため形状不明。
第154図-10 PL-59-8	41号井戸	粗粒安山岩	①45.0 ⑤1.0	②13.9 ③4.9	③4.5 ⑦5.8	④3.8 ⑧30.8	大型の上白。上面及び側面は丁寧な仕上げ。側面に挽き手穴を有し、その右脇に上縁部よりの堅孔を有す。下面は目がやや荒い8分割か、摩耗著しい。
第154図-11 PL-59-5	39号井戸	粗粒安山岩	①<13.1> ⑤1.2	②10.8 ⑥-	③5.5 ⑦-	④2.8 ⑧2.34	上面・側面は稜及び面が摩滅。下面は目が摩滅する。
第154図-12 PL-60-3	39号井戸	粗粒安山岩	①7.9 ⑤-	②10.4 ③-	③(2.2) ⑦-	④- ⑧1.03	側面～供給口の一部分が残る。下面は摩滅。
第154図-13 PL-59-6	15号溝	粗粒安山岩	①<17.5> ⑤-	②13.1 ③-	③-	④- ⑧-	上面縁部を欠損、軸芯穴より上白か。目は荒く、6分割か摩耗著しい。

粉挽き白 下白

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値				形 態 ・ 特 徴
			①上面径	②高さ	③ふくみ	④えぐり高	
第155図-14 PL-59-9	43号井戸	粗粒安山岩	①30.1 ④3.0	②7.4 ⑤3.3	③1.2 ⑥9.5		目は荒い6分割、摩耗著しくやや偏減りする。
第155図-15 PL-58-7	15号溝	粗粒安山岩	①31.1 ④2.5	②12.2 ⑤3.9	③2.4 ⑥14.1		側面部は丁寧な仕上げ。目はやや細かい6分割、摩耗少ない。
第155図-16 PL-59-10	15号溝	粗粒安山岩	①32.2 ④2.6	②15.5 ⑤(4.4)	③2.2 ⑥16.2		側面部はやや粗雑な仕上げ。目はやや荒い6分割やや偏摩耗する。
第155図-17 PL-59-7	35号溝	粗粒安山岩	①<20.8> ④1.0	②11.1 ⑤3.2	③0.7 ⑥4.4		側面部は丁寧な仕上げ。目は荒い6分割か。摩耗著しい。

茶白 上白

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値				形 態 ・ 特 徴
			①上面径	②高さ	③上縁巾	④上縁高	
第158図-1 PL-60-2	39号井戸	粗粒安山岩	①<8.6> ⑤0.5	②7.0 ⑥-	③<1.0> ⑦-	④1.0 ⑧-	上面及び側面は丁寧な水磨き仕上げ。側面部に座の一部を残す。
第158図-2 PL-60-1	31号井戸	粗粒安山岩	①<10.6> ⑤-	②<9.5> ③(3.0)	③3.2 ⑦-	④1.4 ⑧1.95	残存する表面は丁寧な水磨き仕上げ。側面部円形座は無文。
第158図-3 PL-60-7	15号溝	粗粒安山岩	①<13.0> ⑤-	②<12.5> ③(3.5)	③<4.0> ⑦2.4	④- ⑧2.47	上面縁部及び側面が剥落する。残存する上面及び側面は丁寧な水磨き仕上げ。目は摩滅し、わずかに残る。

遺物観察表

茶白 下白

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm kg				形 態 ・ 特 徴
			①径	②上面径	③高台巾	④受皿部巾	
第158図- 4 PL-60- 4	表採	粗粒安山岩	①<15.7)	②-	③-	④6.1	側面及び受皿部は丁寧な水磨き仕上げ。上面は摩耗。
			⑤2.0	⑥13.2	⑦11.4	⑧2.52	
第158図- 5 PL-60-10	34号井戸	粗粒安山岩	①36.0	②21.6	③27.2	④4.9	加工は比較的丁寧だが、石材が粗。茶葉を挽くことは不可。
			⑤2.0	⑥10.4	⑦8.3	⑧5.2	
第158図- 6 PL-60- 8	15号溝	粗粒安山岩	①(36.2)	②19.1	③19.6	④4.3	側面には荒い工具痕を残し、受皿部も細かい工具痕を残す。剥落、欠損が著しいが残存部の稜が鋭く、摺り合せ部にも細かい工具痕が見られ、未製品の可能性有り。
			⑤4.9	⑥10.5	⑦9.0	⑧11.1	
第159図- 7 PL-60-11	15号溝	粗粒安山岩	①39.0	②(20.8)	③25.7	④5.0	全面を荒く打ち欠き、ほぼ下白の形状を呈するに至る。下面のえぐり部も加工済。未製品。
			⑤2.1	⑥13.3	⑦5.9	⑧17.8	
第159図- 8 PL-61- 1	31号溝	粗粒安山岩	①29.0	②12.8	③8.9		全面を荒く打ち欠き、ほぼ下白の形状を呈するに至る。下面えぐり部は未加工。未製品。

白未製品

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm kg				形 態 ・ 特 徴
			①長さ	②巾	③厚さ	④重さ	
第156図-18 PL-59- 3	15号溝	粗粒安山岩	①30.0	②-			上白か下白かは不明。上下面は荒く打ち欠かれた状態で軸芯穴は未穿孔。石材は粗。
			③15.2	④15.5			
第156図-19	11号溝	粗粒安山岩	①22.9	②-			荒削りで円柱状を呈し、上面は荒削りを残しつつ、細い工具で調整途上、下面は研磨され平坦。石臼の未製品又は石臼の再加工（再利用）途上か。
			③17.6	④13.6			
第156図-20 PL-60- 5	33号井戸	粗粒安山岩	①21.0	②-			荒削りで円柱状を呈し、上面はやや斜面で浅く巾広の溝状の窪みを有す。下面は、細い工具による成形で平坦面を造る。石臼の未製品又は石臼の再加工（再利用）途上か。
			③15.4	④9.5			
第156図-21 PL-60- 6	34号井戸	粗粒安山岩	①20.5	②-			荒削りで円柱状を呈し、上面は研磨され平坦、下面は荒削りのまま面を造る。石臼の未製品又は石臼の再加工（再利用）途上か。
			③14.7	④9.5			
第156図-22 PL-60- 9	15号溝	粗粒安山岩	①22.8	②16.0			上面はほぼ平坦で、研磨され、側面下方は円柱状を呈す。側面上方は剥離するが人為的な加工か否か不明。形状と上面の状態から旧態は石臼の下白か。
			③13.6	④5.6			
第156図-23	23号井戸	粗粒安山岩	①31.5	②-			各面を荒く打ち欠き、円筒形を成形する。
			③16.8	④22.7			

石搗鉢

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm kg						形 態 ・ 特 徴
			①全径	②体径	③底径	④高さ	⑤内高	⑥重さ	
第161図- 1 PL-61- 3	34号井戸	粗粒安山岩	①(38.1)	②(34.2)	③(16.8)				欠損品4/5残存。胴・底部外面はノミによる斜め方向に平行する調整痕が認められる。上面縁部、内面には細かな調整痕が認められるが、スリ面は認められず、おそらく製作途中にて破損し、放棄したものと考えられる。片口部を有する。
			④(16.8)	⑤(10.0)	⑥5.4				
第161図- 2 PL-61- 5	34号井戸	粗粒安山岩	①26.8	②24.9	③10.7				欠損品2/3残存。ノミによる加工が胴・底部外面に斜め方向に平行に調整する痕跡がある。上面縁部にもノミ痕が一部認められる。内面のスリ面は明瞭な摩滅が認められ使用頻度の多さを示す。片口部を有す。
			④12.5	⑤8.7	⑥3.03				
第161図- 3 PL-61- 6	387号土壙	二ツ岳軽石	①<12.7)	②<14.9)	③-				欠損品1/8残存。胴部外面は非常に粗いノミによる調整痕を有し、上面縁部は丁寧な調整を施し、内面にもノミによる調整痕が認められ、未使用段階での欠損品と考えられる。片口部は流し部の細加工がされていない。
			④<9.0)	⑤<7.5)	⑥0.72				
第161図- 4 PL-61- 7	632号土壙	粗粒安山岩	①<13.6)	②-	③-				欠損品1/6残存。胴部外面はノミにより粗い横方向の平行に調整した痕跡ある。上面縁部は丁寧な調整を施し、内面には中央に近い部分にはスリ面が認められるが、一部のみスリ面であり使用頻度は高くはない。片口部を有する。
			④<12.4)	⑤<7.1)	⑥1.08				
第161図- 5 PL-61- 2	31号溝	粗粒安山岩	①26.4	②(26.4)	③12.9				欠損品4/5残存。胴・底部外面一面に斜め方向のノミ調整痕が認められる。内面はスリ面が中央付近にのみ認められ、摩滅はあまり強くない。使用期間は短かったものと考えられる。片口の有無不明。
			④11.0	⑤8.5	⑥3.17				
第161図- 6 PL-61- 4	34号井戸	粗粒安山岩	①31.7	②29.5	③15.0				欠損品約1/2残存。底部は完全に欠落、胴部側面にはノミによる加工痕が明瞭に認められ、上面縁部には磨き調整が施される。体部内面はスリ面認められ、あまり使用頻度は高くはないものと考えられる。片口鉢。
			④12.5	⑤8.8	⑥5.5				

遺物観察表

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm kg			形 態 ・ 特 徴
			①全径 ④高さ	②体径 ⑤内高	③底径 ⑥重さ	
第161図-7	15号溝	粗粒安山岩	①<16.0 ④<14.7	②— ⑤<7.0	③— ⑥2.21	欠損品1/8残存。胴部内外面に共に、ノミによる粗い調整痕がそのまま残り、上面縁部のみやや丁寧な調整をなす。片口部の流し部の細工もなされておらず、製作時の欠損品と考えられる。

窪み石

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm kg			形 態 ・ 特 徴
			①長さ②巾③厚さ④重さ			
第163図-1 PL-61-10	32号井戸	粗粒安山岩	①<11.0 ③5.4	②9.8 ④460		欠損品。平面長方形で、両面に窪み面が認められる。表面は面いっばいに窪み面があり、裏面はごく一部のみ認められる。共に敲打痕が認められるもスレはほとんど認められない。座りは両面共に安定している。
第163図-2 PL-62-8	31号井戸	粗粒安山岩	①9.2 ③4.2	②7.8 ④300		平面不整形で片面にのみ窪み面を有する。窪み面には、敲打痕を有すもスレはほとんど認められない。裏面には、2ヶ所ほど小さな敲打痕が認められる。安定した座りである。
第163図-3 PL-62-11	31号井戸	粗粒安山岩	①<10.2 ④<4.5	②— ④195		欠損品。窪みが深く貫通している可能性が高い。窪み部には敲打痕残り、スレはほとんど認められない。
第163図-4 PL-62-14	34号井戸	粗粒安山岩	①<11.6 ③7.5	②<6.3 ④342		欠損品。片面にのみ窪み面が認められるもので、窪み面全面に明瞭な敲打痕が認められ、スレはほとんど認められない。
第163図-5 PL-61-8	22号井戸	粗粒安山岩	①12.2 ③5.7	②12.2 ④737		平面不整形で表面に窪み面、裏面にスリ面があるものである。表面のスレ面は中央付近にのみスグレが認められる。裏面には何面かにわたりスレ面が認められ使用頻度は高い。座りは安定している。
第163図-6 PL-62-3	43号井戸	粗粒安山岩	①7.1 ③3.5	②6.8 ④138		平面不整形の小礫の両面に窪み面が認められ、表面は面いっばいに窪み面があり、明瞭な敲打痕を残す。裏面にも小さな窪み面があり、敲打痕が残る。共に座りは安定している。
第163図-7 PL-61-11	33号井戸	粗粒安山岩	①13.9 ③6.8	②10.5 ④690		平面不整形楕円形の表裏に窪み部、及び側面に敲打痕が残る。表面の窪み部は深く、敲打痕明瞭に残る。裏面も2ヶ所に窪み部あり敲打痕及び一部スレが認められる右側面には2ヶ所ほど敲打痕残り。座りはやや不安定である。
第163図-8 PL-62-7	19号井戸	粗粒安山岩	①11.8 ③3.7	②<8.5 ④414		欠損品。片面にのみ窪み面を有し、敲打痕残るがスレは認められない。窪み面も半分欠失している。
第163図-9 PL-62-6	43号井戸	粗粒安山岩	①8.7 ③3.9	②7.2 ④241		平面不整形で、片面にのみ深い窪み面が認められ窪み全面にわたりスレを有する。座りはやや不安定である。
第164図-10 PL-61-13	32号井戸	粗粒安山岩	①15.2 ③6.2	②11.0 ④977		平面不整形で、片面にのみ窪み面が認められる。敲打した後はほぼ全面にわたりスレが認められる。座りはやや不安定である。
第164図-11 PL-62-4	34号溝	粗粒安山岩	①— ③3.7	②— ④55		欠損品で、片面にのみ窪み面を有し、全面にわたりスレが認められる。安定した座りである。
第164図-12 PL-62-13	32号井戸	粗粒安山岩	①10.9 ③6.3	②8.8 ④462		平面不整形楕円形で、片面にのみ中央よりややズレて窪み面がある。敲打痕が明瞭に残るも、スレはほとんど認められない。座りはよいが窪み面は傾斜する。
第164図-13 PL-62-1	15号溝	粗粒安山岩	①8.2 ③4.6	②7.4 ④350		平面不整形で、片面にのみ窪み面を有する。敲打痕は明瞭に残るもスレは認められない。
第164図-14 PL-62-15	32号溝	粗粒安山岩	①10.4 ③4.6	②<7.1 ④256		欠損品。平面不整形で片面にのみ窪み面を持つ。全面にスレが認められる。残存状態1/2。
第164図-15 PL-61-12	31号井戸	粗粒安山岩	①13.0 ③5.1	②11.6 ④862		平面円形で片面にのみ窪み面を有するもので敲打痕が認められるがスレはほとんど認められない。裏面の一部にも敲打痕が認められる安定した座りである。
第164図-16 PL-62-12	31号溝	粗粒安山岩	①10.9 ③4.6	②7.8 ④356		平面不整形楕円形で両面に窪み面が認められる。表面に窪み面以外に敲打した痕跡面がつながる。両方の窪み面共に一部スレが認められる安定した座りである。
第165図-17 PL-62-10	34号井戸	粗粒安山岩	①<10.3 ③4.6	②6.4 ④275		欠損品。片面のみ窪み面が認められ敲打痕が認められる。左側面には明瞭なスリ面が認められる。座りはやや不安定特にスリ面を上にした場合不安定である。
第165図-18 PL-61-14	17号井戸	粗粒安山岩	①<15.1 ③5.6	②10.0 ④1143		平面不整形長方形で、片面にのみ窪み面が認められ、敲打痕残るがスレはほとんど認められない。右側面にはスレがわずかながら認められるが、使用回数は少ないであろう。裏面には、ハツリ痕が残る。安定した座りである。
第165図-19 PL-61-16	35号井戸	粗粒安山岩	①12.0 ③6.6	②11.4 ④1268		平面不整形円形で、片面にのみ窪み面を有し、全面にわたりスレを有する。安定した座りである。
第165図-20 PL-61-9	10号溝	二ツ岳軽石	①12.9 ③4.8	②8.4 ④318		平面不整形楕円形で、片面にのみ窪み面を有する。敲打痕が残るもスレはあまり認められない。安定した座りである。
第165図-21 PL-61-18	29号井戸	粗粒安山岩	①11.6 ③5.2	②10.4 ④476		平面不整形円形で、片面にのみ窪み面を有する。窪み面全面にわたりスレが認められる。側面・裏面の一部に敲打痕らしき跡が残る。座りはやや不安定である。

遺物観察表

番号	出土遺構	石 材	計測値 cm kg ①長さ②巾③厚さ④重さ	形 態 ・ 特 徴
第166図-22 PL-62-2	不明	軽石	①8.3 ②<6.2> ③5.1 ④212	欠損品である。片面にのみ窪み面を有し、敲打痕が認められるもスレはほとんど認められない。安定した座りである。残存状態1/2程である。
第166図-23 PL-61-17	21号井戸	粗粒安山岩	①<11.1> ②<10.6> ③3.5 ④724	一部欠損。平面不整形で片面にのみ窪み面が認められ、面全体にわり強いスレが認められる。石材が硬質な為、スリ面として相当使用したにもかかわらず一部に敲打痕が残る。安定した座りである。
第166図-24 PL-61-15	31号溝	粗粒安山岩	①13.3 ②8.2 ③4.4 ④552	平面長楕円形の片面にのみ深い窪み面を有するものである。スレは窪み面の中央部にのみ認められ、周辺には敲打痕が残る。
第166図-25 PL-62-5	637号土壇	角閃石安山岩	①9.2 ②7.3 ③5.4 ④337	平面台形で片面に深い窪み面を有する。全面にスレが認められ一部スレが延長している。座りは不安定である。
第166図-26 PL-62-9	表採	粗粒安山岩	①8.7 ②<8.6> ③5.1 ④163	欠損品。片面にのみ深い窪み面を有する。敲打痕が認められるがスレ面はほとんど認められない。
第166図-27 PL-62-21	41号井戸	二ツ岳軽石	①<14.2> ②12.4 ③8.5 ④610	欠損品平面楕円形と推定される。片面にのみ深い窪み面を有し、中央部には明瞭な敲打痕残り、窪み面全体にわり強いスレが認められ、座りはやや不安定である。
第167図-28 PL-62-20	39号井戸	粗粒安山岩	①14.0 ②12.2 ③6.5 ④850	平面楕円形で片面にのみ窪み面が認められるもので、中央部広い範囲で窪み面を有する。スレはほとんど認められない。窪み部の周辺にも数カ所の小さな敲打痕が認められる。座りは安定している。
第167図-29 PL-62-19	39号井戸	角閃石安山岩	①14.6 ②14.1 ③8.1 ④1950	平面不整形で、片面にのみ窪み面を有する。窪み面全面に明瞭なスレを有する。周辺に敲打痕を有する。裏面には、ハツリ痕が認められる。座り安定している。
第167図-30 PL-62-17	39号井戸	粗粒安山岩	①14.4 ②13.6 ③11.3 ④2370	一部欠損品。平面不整形で片面中央に小さな窪み面を有する。窪み面全面にわり強いスレを有する。窪み面周辺に数カ所の小さな敲打痕を有する。座りは底部が小さい割りに安定がよい。
第167図-31 PL-62-16	39号井戸	粗粒安山岩	①24.0 ②15.5 ③7.7 ④2910	側面が円弧状を呈すること及び、裏面が平坦面を呈することなどから、石臼の未製品の欠損品を転用したものと考えられる。片面にのみ窪み面を有し、敲打痕が残り、スレはほとんど認められない。安定した座りである。
第167図-32 PL-62-18	39号井戸	角閃石安山岩	①21.4 ②18.8 ③12.0 ④3470	平面楕円形の大型の礫の中央に小さな深い窪み面を有し、一部その範囲より外に敲打面を有する。スレはほとんど認められない。座りは安定している。

磨き石

番号	出土遺構	石 材	計測値 cm g ①長さ②巾③厚さ④重さ	形 態 ・ 特 徴
第169図-1 PL-62-22	22号井戸	粗粒安山岩	①8.6 ②7.3 ③3.4 ④162	表裏側面に磨き面を有する。表面は平滑な磨き面であり、右側面もかなり使い込んだ痕跡がある。
第169図-2 PL-62-23	31号井戸	粗粒安山岩	①11.4 ②9.1 ③3.1 ④239	片面にのみ面いっぱいを使った磨き面を有する大形品。裏面はワレ面のままである。
第169図-3 PL-62-24	31号井戸	粗粒安山岩	①8.1 ②6.0 ③2.5 ④124	表面及び四側面すべて磨き面として使用し、裏面も一部磨き面として使用するもの。
第169図-4 PL-62-25	31号井戸	粗粒安山岩	①9.2 ②6.2 ③3.0 ④120	表裏四側面すべて磨き面として利用している。側面は巾は狭いが、磨き面はかなり使い込んだ痕跡あり。
第169図-5 PL-62-26	31号井戸	粗粒安山岩	①7.2 ②5.8 ③1.6 ④44	表裏両面に磨き面を有し共に平滑で使い込んだ跡あり。
第169図-6 PL-62-27	31号井戸	粗粒安山岩	①7.8 ②7.5 ③2.3 ④142	表面以外、裏面は多面であるが各面を磨き面として利用している。側面も磨き面として利用しており一部の欠損部を除き全面磨き面を有する。
第169図-7 PL-62-28	34号井戸	粗粒安山岩	①9.1 ②6.4 ③2.6 ④140	表面は平滑ではなく多面であるが各面を磨き面を有し、側面も一面のみ磨き面として使用。裏面はワレ面のままである。
第169図-8 PL-62-29	34号井戸	粗粒安山岩	①11.0 ②6.8 ③3.1 ④184	表面は二面体であるが、各面に磨き面を有する。側面は1面のみ磨き面を有するもやや粗い磨きで、あるいは転用前の加工面の可能性もある。
第169図-9 PL-62-30	34号井戸	粗粒安山岩	①10.4 ②7.2 ③2.5 ④164	表裏両面に平滑な磨き面を有し、側面も一部磨き面として利用している。
第169図-10 PL-62-32	29号井戸	粗粒安山岩	①9.1 ②8.6 ③3.3 ④234	表面及び裏面の一部を磨き面として使用、側面も一部を磨き面として利用している。
第169図-11 PL-62-31	34号井戸	粗粒安山岩	①13.3 ②8.5 ③3.8 ④401	表面のみ、やや内湾する磨き面を有する。裏面にはハツリの後の巾0.8mmほどに連続しての加工痕が施されている。転用前の加工に伴うものかと思われる。
第170図-12 PL-62-33	29号井戸	粗粒安山岩	①9.6 ②7.0 ③2.0 ④136	表裏両長側面を磨き面として使用、いずれも平滑な磨き面である。
第170図-13 PL-62-36	29号井戸	粗粒安山岩	①9.2 ②5.7 ③1.1 ④83	表裏四側面すべて磨き面として使用し、表裏両面に平滑な面をなす。
第170図-14 PL-62-34	29号井戸	粗粒安山岩	①7.8 ②5.8 ③1.6 ④84	表裏長側面を磨き面として使用。裏面はやや内湾する面となる。

遺物観察表

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm g ①長さ②巾③厚さ④重さ	形 態 ・ 特 徴
第170図-15 PL-62-37	29号井戸	粗粒安山岩	①9.1 ②6.0 ③2.7 ④141	表面及び、裏面の一部を一側面を磨き面として使用。表面は先端に向かいやや弧状の曲線をなす。
第170図-16 PL-62-35	29号井戸	粗粒安山岩	①9.8 ②7.8 ③3.4 ④262	表面は平滑な磨き面、裏面及び側面に敲打痕あり。転用前のものかどうか不明である。
第170図-17 PL-62-38	124号土壌	粗粒安山岩	①7.6 ②6.2 ③1.7 ④106	表裏四側面すべてに磨き面を有する。表裏面共にやや曲線状を呈する面である。
第170図-18 PL-63- 6	21号井戸	粗粒安山岩	①9.9 ②7.4 ③3.0 ④207	表裏面に磨き面を有し、裏面は曲線を呈し、その一部に磨き面を有する。
第170図-19 PL-62-40	19号井戸	粗粒安山岩	①7.5 ②7.5 ③2.1 ④120	表面及び、裏面の1部を磨き面として使用。裏面は多面であるが各面の平坦面を磨き面として利用している。
第170図-20 PL-63- 3	19号井戸	粗粒安山岩	①8.6 ②5.5 ③2.5 ④102	表裏三側面を磨き面として使用。表面やや内湾する。側面は一部のみ使用。
第170図-21 PL-63- 4	21号井戸	粗粒安山岩	①10.6 ②9.1 ③4.7 ④372	表裏一長側面に磨き面を有する。表面は巾広の平滑面だが、裏面は多面でその一部にのみ磨き面を有する。裏面中央右に一条の刻線が認められ、転用前の加工に伴うものか。
第170図-22 PL-62-39	19号井戸	粗粒安山岩	①12.1 ②7.5 ③3.3 ④254	表裏一長側面を磨き面として使用。表裏面共に磨き面として使用した面は半分程である。
第170図-23 PL-63- 7	42号井戸	二ツ岳軽石	①6.4 ②6.2 ③2.7 ④66	平面円形、表裏側面に磨き面を有する。曲面を呈する側面は一部のみ磨き面を有する。
第170図-24 PL-63- 5	21号井戸	粗粒安山岩	①10.7 ②8.4 ③3.0 ④302	表裏一長側面を磨き面として使用。表面は特に巾広い平滑面を有しており裏面は多面であるが各々の面を磨き面として使用する。
第171図-25 PL-63- 8	43号井戸	粗粒安山岩	①8.4 ②6.4 ③2.0 ④97	磨き面は一面のみ、裏面はワレ面のままである。
第171図-26 PL-63-10	632号土壌	粗粒安山岩	①8.0 ②6.4 ③2.6 ④95	表裏両面に磨き面を有する。裏面は多面であり一部にのみ磨き面を有する。
第171図-27 PL-63-14	15号溝	粗粒安山岩	①7.9 ②5.1 ③2.5 ④96	表裏一長側面に磨き面を有する。裏面は、多面のうち一面のみ磨き面として使用。
第171図-28 PL-63-11	632号土壌	粗粒安山岩	①7.8 ②5.1 ③2.6 ④84	磨き面は一面のみで、しかも1部のみである。裏面はワレ面のままである。
第171図-29 PL-63-18	A2-020G	粗粒安山岩	①8.3 ②7.4 ③2.7 ④166	表及び一長側面のごく一部にのみ磨き面を有する。裏面はワレ面のままである。
第171図-30 PL-63-17	48号溝	粗粒安山岩	①8.8 ②6.8 ③2.2 ④127	一面のみ磨きを有する。平滑な面を呈するが、ワレが激しく磨き面は一部である。
第171図-31 PL-63-19	表採	粗粒安山岩	①12.7 ②11.2 ③3.3 ④391	表裏に磨き面を有する。表面はやや内湾する曲面を呈し、裏面は多面であるがその一部にのみ磨き面を有する。
第171図-32 PL-63- 9	632号土壌	粗粒安山岩	①10.2 ②6.9 ③2.4 ④146	磨き面は一面のみ、裏面は曲面を呈し、粗い磨きを施されるが転用前の加工痕跡の可能性高い。
第171図-33 PL-63-12	637号土壌	二ツ岳軽石	①9.4 ②8.8 ③4.1 ④270	円礫の一面には、中心部に浅い敲打面を有し、裏面は平滑な磨き面を有する。
第171図-34 PL-63-15	15号溝	粗粒安山岩	①10.2 ②8.2 ③2.3 ④161	一面のみ磨き面を有する。平滑な磨き面であるが、粗磨きである。
第171図-35 PL-63-16	15号溝	粗粒安山岩	①9.9 ②8.4 ③2.4 ④243	表裏両長側面の一部に磨き面を有する。両長側面はほんの一部のみ磨き面として使用。裏面はゆるい曲面を有する。
第171図-36 PL-63-13	10号溝	粗粒安山岩	①7.3 ②6.9 ③2.2 ④123	表裏三側面に磨き面を有する。表裏共に平滑面を呈している。

砥石

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm g ①長さ②巾③厚さ④重さ	形 態 ・ 特 徴
第173図- 1	9号土壌	頁岩	①<6.7> ②2.7 ③<0.6> ④17	表裏面共に剥離しており、両側面は研磨面として使用されている。両短側面共に欠損しており、本来の長さは不明、厚みも不明である。残存状態1/2。
第173図- 2 PL-63-25	31号井戸	粗粒安山岩	①<10.2> ②6.0 ③<3.6> ④219	裏面が剥離・欠損しており厚みは不明。両端部は欠損しているが、下短側面は面が一部生きており、下端部としてよい。両側面は研磨面がよく残るが表面は凹凸が激しく、研磨も多面で行っている。残存状態1/2。
第173図- 3 PL-63-30	33号井戸	粗粒安山岩	①<9.8> ②3.6 ③2.6 ④98	表裏面に研磨面があり、刃ならし痕がかなりある。両側面は、砥石の形を考える為の削り痕があるが、研磨は行わなかった模様である。中央が凸状になる形態を有する。残存状態ほぼ完存。

遺物観察表

番 号	出土遺構	石 材	計測値 cm g ①長さ②巾③厚さ④重さ	形 態 ・ 特 徴
第173図- 4 PL-63-29	9号井戸	砥沢石	①<9.7> ②4.7 ③3.0 ④196	小口面は自然面を残し、表裏・左側面は研磨面を残す。表面の研磨面は巾広く平滑で、刃ならし痕が一部残る。左側面にも刃ならし痕残る。右側面及び、裏面小口部近くの面は凹凸で明瞭な研磨痕跡は認められない。残存状態1/2。
第173図- 5 PL-63-42	34号井戸	粗粒安山岩	①<10.6> ②5.7 ③3.8 ④191	両短側面は欠損し、長さは不明。表面は剥離されており一部に擦痕を有する。研磨面が残る。左側面は平滑な研磨面だが刃ならし痕がある。右側面は自然面を残している。裏面は大部分欠損により剥離しており一部のみ残っている。研磨痕及び刃ならし痕を有する。残存状態1/2。
第173図- 6 PL-63-37	21号井戸	砥沢石	①<4.2> ②4.2 ③3.2 ④76	表裏面及び、右側面に研磨痕残す。表裏面共に刃ならし痕跡あり。右側面はやや研磨面が荒れているが、刃ならし痕も一部残り研磨面と考えてよい。小口面はカット面が平滑な面としてあり、一部研磨した可能性もある。
第173図- 7 PL-63-49	南東区表探	頁岩	①<4.7> ②4.1 ③0.9 ④22	表面は平滑な研磨面である。右側面も研磨面だが、擦痕が明瞭に認められる。裏面は剥離面である。
第173図- 8 PL-63-35	31号井戸	砥沢石	①<7.8> ②3.8 ③2.4 ④99	小口面は自然面。下端小口は欠損しており長さは不明。表裏両側面共に研磨面であるが、左側面は欠損著しく研磨面はほんの一部である。表面には刃ならしの条痕が残り、中凹みの状態となっている。残存状態1/2。
第173図- 9 PL-63-31	440号土壙	砥沢石	①<8.1> ②3.5 ③3.5 ④117	小口面はカット面をそのまま残し、表裏・両側面は研磨面である。表裏面及び、左側面に刃ならし痕が一部残る。中凹み状を呈する。残存状態1/2。
第173図-10 PL-63-52	不明	砥沢石	①<4.6> ②2.1 ③1.7 ④30	表裏・両側面に研磨痕を残す。表裏・右側面に刃ならし痕を残す。
第173図-11 PL-63-38	637号土壙	砥沢石	①<4.9> ②3.7 ③2.1 ④54	表面は欠損が2/3程で、研磨面残る。裏面は剥離している。両側面は研磨面で刃ならし痕跡がある。小口面はカット面に一部擦痕が残るものである。
第174図-12 PL-63-44	2号溝	ホルンフェルス	①<13.7> ②4.9 ③3.8 ④331	ほんの一部小口面が残りカット面をなし平滑である。表裏面は剥離面を呈し、研磨痕は全く認められない。両側面は研磨面を呈し、刃ならし痕跡がある。
第174図-13 PL-63-22	39号井戸	粗粒安山岩	①<11.5> ②3.1 ③2.3 ④180	未使用の3面にクシ菌状タガネ痕。
第174図-14 PL-63-34	48号溝	砥沢石	①<8.6> ②<3.5> ③2.3 ④77	表面は研磨面で刃ならし痕跡あり。左側面は欠損部多く、研磨面は認められない。
第174図-15 PL-63-43	15号溝	粗粒安山岩	①<15.3> ②8.6 ③7.0 ④639	表裏・両側面に研磨面あり。刃ならし痕跡が各面にかなり明瞭に残る。小口面は欠損部が半分程占め調整痕が残る。残存状態ほぼ完存。
第174図-16 PL-63-24	南東区表探	砥沢石	①<9.6> ②3.4 ③3.1 ④107	表裏面共に平滑な研磨面が残る。右側面にも研磨面が残るが、左側面は調整痕が明瞭に残るもので一部刃ならし痕に近いものもある。中央部が凸状をなしている。残存状態ほぼ完存。
第174図-17	3号溝	砥沢石	①<7.5> ②3.4 ③2.1 ④79	下端小口部欠損し長さ不明。表裏面に研磨面を有し裏面に刃ならし痕がある。中央部が凸状になる。左側面は粗い研磨面が残り、刃ならし痕あり。1/2残存。
第174図-18	A3-144G	流紋岩	①<14.4> ②3.5 ③3.3 ④203	表裏面に研磨面を残す。両側面はカット面の痕跡かと思われる。縦方向の条線が数条あるが刃ならし痕かも知れない。表裏面の一部には刃ならし痕が残っている。
第174図-19 PL-63-32	22号井戸	砥沢石	①<7.0> ②3.8 ③3.7 ④145	表裏・両側面共に、研磨面として使用。表面は擦痕が斜め方向に残り、左右側面共に一部剥離するが、右側面・研磨面が凹凸を呈し、一部のみ研磨面として使用しているものである。残存状態1/2。
第174図-20 PL-63- 1	不明	粗粒安山岩	①<10.1> ②6.0 ③3.3 ④184	表面・右側面共に調整痕が明瞭で、明らかな研磨痕跡は認めがたく、あるいは砥石でなく他の石製品の未製品の可能性が高い。

板碑

番 号	出土遺構	石 材	計測値 cm kg ①高さ②巾③厚さ④重さ	形 態 ・ 特 徴
第176図- 1 PL-64- 1	20号井戸	石英閃緑岩	①<46.5> ②<28.0> ③2.4 ④3.82	主尊は浅い葉研彫りの阿弥陀種子(キリーク)紀年銘は欠損、種子の形態より14世紀代の造立か。残存状態上部破片。
第177図- 2 PL-64- 2	20号井戸	石英閃緑岩	①<44.8> ②<28.2> ③3.9 ④9.6	主尊は浅い葉研彫りの阿弥陀三尊種子、キリークのみに浅い葉研彫りの蓮座。他に碑面左右端に線刻の枠線が残るのみで、紀年銘部は判読不可。14世紀代の造立か。裏面に巾1.2cm程のノミ痕が端部に数条残る。
第177図- 3 PL-64- 5	不明	石英閃緑岩	①<15.8> ②19.0 ③3.0 ④1.32	碑面は摩滅著しく、種子等認められず。
第177図- 4 PL-64- 3	20号井戸	石英閃緑岩	①<47.8> ②21.0 ③1.9 ④3.51	碑面は摩滅が著しく、種子らしきものが見えるが、判読不可。15世紀代の造立か。残存状態下部欠損4/5残存。
第178図- 5 PL-64- 4	20号井戸	石英閃緑岩	①49.5 ②16.3 ③2.1 ④3.5	主尊は浅く粗い葉研彫りの阿弥陀一尊種子(キリーク)、小型板碑。上部に浅く二条線が残る。紀年銘は「貞治三年」。
第178図- 6 PL-64- 6	20号井戸	石英閃緑岩	①63.6 ②20.7 ③3.7 ④9.7	碑面の摩滅が著しく、かろうじて主尊の阿弥陀種子(キリーク)のみが残る。15世紀代の造立か。

遺物観察表

番号	出土遺構	石材	計測値 cm kg				形態・特徴
			①高さ	②巾	③厚さ	④重さ	
第178図-7 PL-64-7	試掘	石英閃緑岩	①<53.1> ③2.7	②23.2	④5.9		主尊は浅く粗い葉研影りの阿弥陀三尊種子キリークは欠損、脇侍のサ、サク(勢至・観音)種子のみ残る。紀年銘は摩滅のため判読不可。15世紀代の造立か。

五輪塔 空風輪

番号	出土遺構	石材	計測値 cm kg						形態・特徴
			①高さ	②上最大巾	③下最大巾	④軸巾	⑤軸長	⑥重さ	
第180図-1 PL-65-5	31号井戸	粗粒安山岩	①27.7 ④—	②17.0 ⑤—	③10.9 ⑥7.5				未製品。上・下面は荒削りの状態で、側面のみ磨き整形。下面に突起部造り出しの痕跡が見え、細工中の欠損により製作を中止したか。
第180図-2 PL-65-7	35号井戸	粗粒安山岩	①25.6 ④—	②17.8 ⑤—	③17.5 ⑥6.1				未製品。全体に自然面を残す。若干加工痕らしき部分も見られるが、空風輪としては厚み不足か。
第180図-3 PL-65-8	15号溝	粗粒安山岩	①23.7 ④—	②16.1 ⑤—	③16.5 ⑥5.0				未製品。全体に荒削り、荒削りの状態で、側面は細い工具による細成形の痕が見られる。
第180図-4 PL-65-13	15号溝	粗粒安山岩	①27.6 ④—	②20.1 ⑤—	③(12.0) ⑥10.7				未製品。全体に荒削り、荒削りの状態で、側面は一部に細い工具による細成形の痕跡が見られる。
第180図-5 PL-65-6	15号溝	粗粒安山岩	①26.3 ④—	②16.2 ⑤—	③(11.5) ⑥7.1				未製品。上面荒削り、側面は原石の自然面を残す。空輪と風輪との境に溝を掘り始めた状態で、下半部を大きく欠損し、製作中止か。
第180図-6 PL-65-4	15号溝	粗粒安山岩	①28.2 ④5.5	②18.6 ⑤4.1	③11.4 ⑥8.3				未製品。側面は細かく削られ、磨く手前、下部突起は造り出し済みの状態。空輪部上面を大きく欠損し、この為に製作を中止か。
第181図-7 PL-65-1	15号溝	粗粒安山岩	①(24.0) ④(5.8)	②14.7 ⑤4.3	③11.7 ⑥3.94				全体に摩滅は少なく、空輪上部部の突起を欠損するのみ。空輪下半から風輪部にかけては直線的。成形はややいびつであるが整形は丁寧。
第181図-8 PL-65-2	表採	粗粒安山岩	①(25.2) ④(5.0)	②15.0 ⑤3.8	③10.0 ⑥4.8				全体に摩滅は少なく、空輪上部部の突起及び風輪下部突起の一部を欠損するのみ空輪部は全体に丸みをおび、風輪部は直線的。成形はややいびつ。
第181図-9 PL-65-3	南東区	粗粒安山岩	①<24.6> ④5.0	②14.2 ⑤5.3	③15.0 ⑥4.6				宝塔又は宝篋印塔相輪部。

五輪塔 火輪

番号	出土遺構	石材	計測値 cm kg						形態・特徴
			①上部巾	②下部巾	③高さ	④下部高	⑤軸受巾	⑥重さ	
第181図-10 PL-65-12	10号溝	粗粒安山岩	①11.6 ④7.5	②23.2	③11.9				未製品。全体に荒削りの状態だが、ほぼ火輪の形状を呈し、面の作り出しに至る。上面の空風輪受けのほぞ穴も穿ち始める。
第181図-11	39号溝	粗粒安山岩	①15.6 ④6.3	②22.3	③20.0				未製品。全体に荒削りの状態だが、ほぼ火輪の形状を呈すが各面の作り出しには至らず、上面の空風輪受けのほぞ穴も未穿孔。
第181図-12 PL-65-11	14号溝	粗粒安山岩	①14.3 ④—	②23.7	③(14.6)				未製品。全体に荒削り、荒削りの状態で、一部原石の自然面を残すが、ほぼ火輪の形状を呈し、上面の空風輪受けのほぞ穴もほぼ穿孔済み。
第182図-13 PL-65-10	15号溝	粗粒安山岩	①(13.9) ④4.9	②22.3	③12.6				全体にやや摩滅し、上方を欠損する。高さは低く偏平で、四端は湾曲し開く。表面は磨かれ丁寧な整形。
第182図-14 PL-65-9	39号井戸	粗粒安山岩	①12.0 ④6.0	②22.2	③15.0				全体に摩滅は極めて少ない。底面は平坦で研磨され、上面からの穴が貫通するが、この穴は上面と下面では径が異なり、下面付近の穴は研磨される。底面の研磨及び貫通する穴から、石臼よりの転用と考えられる。

五輪塔 水輪

番号	出土遺構	石材	計測値 cm kg				形態・特徴
			①最大径	②上部径	③高さ	④重さ	
第182図-15 PL-65-15	15号溝	粗粒安山岩	①30.4 ③17.2	②20.7	④16.6		未製品。全体に荒削りの状態だが、ほぼ水輪の形状を呈し、下面は皿状に窪ませ細かい工具による細成形に至る。
第182図-16 PL-66-1	15号溝	粗粒安山岩	①30.0 ③19.0	②1.4	④14.2		未製品。全体に荒削りの状態だが、ほぼ水輪の形状を呈する。細部加工には至らず。
第183図-17	32号井戸	粗粒安山岩	①<13.9> ③18.5	②<23.2>	④17.7		1/2強を欠失するが、上・下面の剝離は人為的な加工か。外面はやや摩滅し、火を受けたらしく変色する。

遺物観察表

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm kg		形 態 ・ 特 徴
			①最大径②上部径③高さ④重さ		
第183図-18 PL-66-3	33号井戸	粗粒安山岩	①30.7 ③19.5	②24.2 ④17.4	石鉢として転用。全体に摩滅は少なく、成形は均質で表面は研磨仕上げ。底面は磨かず浅く皿状に窪む。中心を深く穿ち、内面及び口縁は丁寧な研磨仕上げ。この穴は五輪塔水輪としてのものか、転用加工されたものか不明だが、口縁部にも若干の摩滅が認められる。
第183図-19	39号井戸	粗粒安山岩	①28.6 ③18.3	②20.9 ④13.0	全体にやや摩滅し、所々剥落する。成形はややいびつ。上面に底が平坦な浅い穴を穿つが、比較的新しい工具痕を残すことから、五輪塔水輪の再利用再加工途上のものと考えられる。

五輪塔 地輪

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm kg		形 態 ・ 特 徴
			①巾 ②高さ ③重さ		
第184図-20 PL-66-4	15号溝	粗粒安山岩	①26.9 ③22.5	②20.1	未製品。全ての面は造り出されるが、全体に荒削りの状態。側面角部を一部欠失。
第184図-21 PL-66-9	15号溝	粗粒安山岩	①26.3 ③12.8	②18.0	未製品。全ての面は造り出されるが、全体に荒削りの状態。
第184図-22 PL-66-5	31号溝	粗粒安山岩	①36.7 ③21.8	②11.6	ほぼ製品に近く、全体に成形を終え、下面を除き研磨整形済み。五輪塔地輪としては高さ不足か。
第185図-23 PL-66-11	15号溝	粗粒安山岩	①19.1 ③10.2	②15.1	未製品。上半の一部欠損、摩滅は少ない。ほぼ製品に近く、全体に成形を終えるが、側面に横方向の細かい工具痕を残す。下面は荒削りのまま中央部をすり鉢状に窪ませる。
第185図-24 PL-66-2	15号溝	粗粒安山岩	①23.6 ③8.7	②12.2	未製品。全ての面は造り出され、荒削りの状態を残しつつ、上面は整形される。
第185図-25 PL-66-7	15号溝	粗粒安山岩	①34.3 ③20.2	②11.0	未製品。ほぼ製品に近く、全体の成形を終え、下面の荒削りを残し、上・側面は細い工具により成形を行う。五輪塔地輪としては高さ不足か。
第185図-26 PL-66-8	15号溝	粗粒安山岩	①25.0 ③12.5	②10.8	全ての面は造り出され、荒削りの状態を残しつつ、側面の一面のみ磨かれ整形済み。五輪塔地輪としては高さ不足か。

不明未製石製品

番 号	出土遺構	石 材	計 測 値 cm kg		形 態 ・ 特 徴
			①高さ②巾③厚さ④重さ		
第187図-1	34号井戸	粗粒安山岩	①(9.0) ③4.5	②4.7 ④0.74	内外面共にノミによる加工痕あり、内側は弧状に加工する。石臼の把手になる可能性あり。
第187図-2 PL-66-10	33号溝	粗粒安山岩	①67.8 ③18.5	②26.0 ④58.5	方柱状を呈し、各面は不定方向の荒削り。石材の可能性が大きい。
第188図-3 PL-66-12	15号溝	粗粒安山岩	①36.2 ③7.1	②33.7 ④12.5	円盤状を呈し、上・下面の高い部分に研磨された部分を残し、剥離。剥離した面が人為的なものか否か不明。
第188図-4 PL-66-6	15号溝	粗粒安山岩	①22.7 ③15.0	②15.2 ④10.1	側面に平坦な面と丸味をおびた面を持ち、上面は荒削りの平坦、下面は研磨された平坦面。上面に浅く四状を呈す円形の窪み有り。
第188図-5	43号井戸	粗粒安山岩	①33.5 ③21.6	②27.2 ④25.0	側面は荒削りの平坦面二面と、部分的に研磨された面2面より成り、上面は部分的に研磨、下面は全面研磨し、中央部が浅く四条に窪む。
第188図-6	15号溝	粗粒安山岩	①11.6 ③4.4	②6.9 ④0.64	内外面共にノミによる加工痕あり、内側は弧状に加工する。あるいは、石臼の把手になる可能性あり。

木製品

番 号	出土遺構 種 類	計 測 値 cm kg		形 態 ・ 特 徴
		①長さ②巾③厚さ		
第190図-1 PL-67-3	15号溝 板材	①15.2 ③0.9	②5.6	板材の一部と考えられる。短側面及び長側面の一部残っている。磨耗激しく、加工痕調整痕共に、判別できない。板目材。
第190図-2 PL-67-2	21号井戸 板材	①13.1 ③2.4	②3.5	方材状をなしているが、欠損部の状況からみて、厚さ1cm板状品に把手のように直方体状の凸部を造り出したものと考えられる。裏側面には一部焼痕がある。加工木。
第190図-3 PL-67-5	5号井戸 板材	①6.8 ③0.4	②2.7	長側面の一部のみ外側線である。直線状を呈するものと思われる。表面は磨耗激しく、加工痕・調整痕共に不明である。柁目材。
第190図-4 PL-67-8	42号井戸 板材	①(12.3) ③0.5	②4.6	厚さ0.3~0.5cmでいずれも板状の部材の一部で同一品と考えられる。両長側面共に、きれいに切断されている。平面には加工後、丁寧に調整していると思われるが、磨耗が進みはつきりとは分からない。柁目材。

遺物観察表

番号	出土遺構種類	計測値 cm kg ①長さ②巾③厚さ	形態・特徴
第190図-5 PL-67-4	5号井戸 曲物	①8.2 ②6.2 ③0.8	やや斜め方向に木取りをしている。端部はゆるやかな円弧状を呈している。やや厚みがあるが、これも曲物の一部と考えられる。柾目材。
第191図-6 PL-67-1	34号井戸 曲物	径18.5 ③0.7	曲物の底板と考えられる。円板状を呈し、中央付近で2つに割れており、中央部及び、縁部数カ所に欠損部分がある。表面は、磨耗しており、加工痕等の確認はできない。年輪界の間隔は0.5mm程度であり、非常に細かい針葉樹と考えられる。
第191図-7 PL-67-9	39号井戸 曲物	径15.5 ③0.9	曲物の底板と思われる。内外面共に平滑に仕上げられており、厚さ0.7~1cmであり、上部の方に行くにしたがい厚くなる。
第191図-8 PL-67-11	39号井戸 曲物	径20.5 ③0.9	内外面全体に漆塗りを施してある。受け部には高0.3cmの段差を有しており、側板を受ける部分には漆が施されている。内外面共に平滑に仕上げられている。側板は巾1.3cm、厚み0.15cmの板材に穴を開けて、桜の皮で綴じ合わせてつくっている。側板も内外面共に漆を塗っている。
第191図-9 PL-67-10	39号井戸 桶	把手高26.4 側板高19.9 最大径23.7 最小径21.4 側板厚1.2	側板は全周せず、全体の1/5が欠失している。側板の巾は2~7cmとバラツキがあり、計11枚を有する。各板は内湾しており、下部巾が狭く、上部にいくにしたがい広くなる。タガが底部より1cmの所に巾1.5cmの竹でしめられた痕跡がある。また、上記より4cmの所に巾0.2cmの細い竹でしめられた痕跡がある。把手のつく板は相対する板が出土しなかった。把手板は上より4.5cmの所に径2.5cmの穴が開いており、おそらく相対してあった把手板との間に棒がわたしてあったものと思われる。また、把手板の上端の隅を落として形を整えている。底板は、柾目板で3分割される。2本の木釘により各々の板が接合される。
第191図-10 PL-67-6	21号井戸 加工木	①35.2 ②3.3 ③1.7	自然木の枝木を払ったもの。半裁された状態で、切断面が焼けて炭化している。割材。
第191図-11 PL-67-7	不明 自然木	①29.3 ②11.1 ③5.3	二又に分かれた枝木を利用した材である。二又部及び主木が、カットされる。向かって左側の枝木は、カット面が明瞭に残っている。

鉄製品

番号	写真	器種	出土位置	法量 cm ①長さ ②巾 ③厚さ	形態・特徴
第193図-1	PL-68-22	釘	A3-143G	①<2.5> ②0.4 ③0.4	小形釘の上部の破片。釘頭は欠損する。木質付着なし。1/2残存。
第193図-2	PL-68-23	釘	A3-144G	①3.9 ②0.3 ③0.3	小形釘。釘頭のみ一部欠損。他は、ほぼ完存。木質付着なし。
第193図-3		釘	A3-142G	①<3.7> ②0.3 ③0.3	小形釘。釘頭欠損。木質付着なし。
第193図-4	PL-68-25	輪状金具	B2-361G	①<6.9> ②4.3 ③0.2	一本の鉄細板を屈曲させ輪を形造り、輪よりとび出した部分をフック状にからめておさえている。別の鉄細板が一本付着する。
第193図-5	PL-68-20	板状品	A3-247G	①4.2 ②2.6 ③0.4	楕円形状の板状品。中央部は外形に相対した楕円形の凹み部あり一方の短側に舌状にのびる突出部あり。
第193図-6	PL-68-24	板状品	A3-143G	①<2.6> ②<1.5> ③0.3	破片。長さ、巾共に欠損している。用途不明。
第193図-7		板状品	A3-143G	①4.4 ②2.5 ③0.25	完存。長方形板状のもの用途不明。
第193図-8	PL-68-26-27		A3-143G	①<12.1> ②<4.2> ③0.3	縁部が内湾する板状品で、縁部沿いに強く内側に屈曲し何かをはさみ込む用をなしている。
第193図-9	PL-68-29		61号土壌	①<10.7> ②<0.9> ③<1.6>	中央に何かをはさみ込むもの。用途不明。
第193図-10			A3-143G	①<2.8> ②<1.0> ③0.3	側縁はやや内湾するもので、突起が側縁部より出ている。
第193図-11	PL-68-32	刀子	A3-142G	①<5.7> ②<2.8> ③0.3	関部付近刃部は欠損。茎は先端が欠損する。
第193図-12	PL-68-31	刀子	A3-142G	①<4.9> ②1.0 ③0.2	茎。茎端部に向けて細くなる。刃部は全て欠損し、不明。
第193図-13	PL-68-33	刀子	A3-142G	①<5.6> ②2.1 ③0.6	刀子あるいは刀の茎。刃部は欠損し不明。大形の刀子である。
第193図-14	PL-68-21		A3-313G	①<4.4> ②<2.7> ③0.1	薄鉄板を内湾させ、小孔を中央に開ける。用途不明。
第193図-15	PL-68-30	カンナ	6号溝	①(9.4) ②6.8 ③1.0	台カンナの刃部と考えられる。刃の先端が一部欠損。
第193図-16	PL-68-28	刀子	61号土壌	①<11.8> ②<3.8> ③0.5	大形刀子の刃部片。一部茎が欠損して残る。
第193図-17	PL-68-34	鎌	A3-143G	①7.0 ②2.0 ③0.3	小形の鎌で柄部は直に屈曲するもの。
第193図-18	PL-68-35	鎌	A3-163G	①<7.5> ②1.9 ③0.3	小形の鎌で柄部は鈍角に屈曲するもの。刃部の欠損あり。
第193図-19	PL-68-36	鎌	A3-144G	①<5.7> ②2.4 ③0.4	小形の鎌で刃部から柄部にかけて、内湾状に緩やかに移行し、茎端部にて、くの字状に屈曲する。
20	PL-68-37	鉄滓	32号溝	①5.6 厚さ1.3 重さ89g	
21	PL-68-38	鉄滓	34号溝	①5.5 厚さ1.6 重さ74g	
22	PL-68-39	鉄滓	表探	①4.1 厚さ2.2 重さ111g	

遺物観察表

古銭

番号	写真	銭名	時代	初鑄年代	西暦	出土位置	備考
第195図-1	PL-68-1	開元通宝	唐	唐武徳4年	621	143号土壙	
第195図-2	PL-68-2	開元通宝	唐	唐武徳4年	621	A3-164G	
第195図-3	PL-68-3	祥符通宝	北宋	大中祥符2年	1009	A3-164G	
第195図-4	PL-68-4	皇宋通宝	北宋		1034	563号土壙	真書
第195図-5	PL-68-5	皇宋通宝	北宋	宝元2年	1039	480号土壙	篆書
第195図-6	PL-68-6	元祐通宝	北宋	元祐元年	1086	A2-195G	篆書
第195図-7	PL-68-7	元祐通宝	北宋	元祐元年	1086	A3-164G	篆書
第195図-8	PL-68-8	聖宋元宝	北宋	建中靖国元年	1101	403号土壙	真書
第195図-9	PL-68-9	政和通宝	北宋	政和元年	1111	399号土壙	篆書
第195図-10	PL-68-10	政和通宝	北宋	政和元年	1111	416号土壙	真書
第195図-11	PL-68-11	元盛元宝	西夏	天盛10年	1158	563号土壙	
第195図-12	PL-68-12	洪武通宝	明	洪武元年	1358	134号土壙	
第195図-13	PL-68-13	洪武通宝	明	洪武元年	1358	639号土壙	
第195図-14	PL-68-14	永楽通宝	明	永楽6年	1408	18号土壙	
第195図-15	PL-68-15	永楽通宝	明	永楽6年	1408	18号土壙	
第195図-16	PL-68-16	永楽通宝	明	永楽6年	1408	A3-164G	
第195図-17	PL-68-17	治平通宝		天正～元禄期	1580～	8号井戸	
第195図-18	PL-68-18	治平通宝				A3-164G	
第195図-19	PL-68-19	?				A2-240G	

筑井八日市出土縄文土器

番号	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第196図-1 PL-69-1	胴上半部	①細粒の砂を混入 ②良	キャリバー形を呈する深鉢形土器の胴上半部。器厚1.2cm。口縁部に4個の舌状突起が付けられる。胴下半部は意図的欠損。内面は横方向の調整が行われる。内外面の色調は淡黄色。	口縁部を渦巻文と楕円区画文を連結4単位に構成。胴部に幅広の無文帯を垂下。縄文原体はL。口縁内面に煤付着。
第197図-2 PL-69-2	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	橋状把手。内面は横方向の調整が行われている。内外面の色調は灰白色。	
第196図-3 PL-69-3	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚1～1.3cm。内面は横方向の調整が行われている。内外面の色調は灰白色。	
第196図-4 PL-69-4	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	口縁部が外反し、頸部でくびれ、胴部が張り出す深鉢形土器の口縁部片。器厚1.1cm。内面は横方向のミガキが行われる。内外面の色調はにぶい橙色。	口唇部と頸部に沈線を巡らせ区画内を縄文Lと斜位の沈線を垂下させる。外面煤付着。
第196図-5 PL-69-5	口縁部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の波状口縁部片。波頂部に把手。器厚7mm。内面は丁寧な調整が行われている。内外面の色調はにぶい橙色。	波頂部に楕円形の張り付け、隆帯を垂下させ刺突。沈線による区画内に縄文L。
第196図-6 PL-69-6	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	口縁部が外反し頸部がくの字に折れて、胴部が張り出す深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm～1.7cm。内外ともよくミガキが行われている。	
第197図-7 PL-69-7	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面は横方向の調整が行われている。外面の色調はにぶい橙色。内面は淡黄色。	地文に縄文施文。原体はL。4本一単位の沈線を垂下させる。外面に煤付着。
第196図-8 PL-70-1	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～1cm。内面は縦方向のミガキが行われている。内外面の色調は褐灰色。	条線が施され、沈線による文様が施されている。
第197図-9 PL-70-2	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	口縁部が外反し、頸部でくびれ、胴部が張り出す深鉢形土器の頸部から胴部片。器厚1.2～1.8cm。内面は胴上半は横方向、胴下半は縦方向の調整。内外面の色調はにぶい黄橙。	頸部に沈線を巡らせ胴部に縄文施文。原体はL。蛇行沈線を垂下。下半部縦方向のミガキ
第197図-10 PL-70-3	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	頸部でくびれる深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は横方向の調整が行われている。内外面の色調は淡黄色。	2本を単位とする平行沈線によるY字状の文様が構成される。
第197図-11 PL-69-8	小型土器	①細粒の砂を混入 ②非常に良	小型土器の半完形品。器高10cm。底径5cm。器厚4～5mm。口縁部外反し頸部でくびれ、胴部が張る。口縁は小波状を呈する。内外面横方向のミガキ。色調は褐灰色。	口唇部内側一条の沈線。波頂部から垂下する刻みを施した隆線で頸部も同様。底部に網代。
第197図-12 PL-70-5	底部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。器厚9mm～1.5cm。底径8.3cm。内面は粗い調整が行われている。内外面の色調は黄灰色。	縄文施文。原体はL。底面に網代。

遺物観察表

番号	部位	①胎土 ②焼成(遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)
第197図-13 PL-70-6	底部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。器厚9mm～2cm。底径10.5cm。内面は丁寧な横方向の調整が行われている。内外面の色調はにぶい橙色。	網代底。内面に煤が付着。
第197図-14 PL-70-4	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。口唇部に楕円形の突起が付けられている。器厚5mm。内面は徹底したミガキが行われている。内外面の色調はにぶい褐色。	3重の平行沈線による充填縄文。原体はL。無文部にはミガキが行われている。
第197図-15 PL-70-7	底部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径9cm。内面は丁寧な調整が行われている。内外面の色調は明赤褐色。	網代底部。
第197図-16 PL-70-8	注口部	①細粒の砂を混入 ②非常に良	器面を研磨している。外面の色調は赤色。	沈線による文様が施されている。
第197図-17 PL-70-9	土偶	①細粒の砂を混入 ②良	胸部を主とする胴部で片側の乳房のみ。色調はにぶい黄褐色。	沈線による菱形状の文様が施されている。

女屋・木瀬出土埴輪・土師器

番号	器形 残存状態	胎土	焼成	色調	形態・特徴
第198図-1 PL-71-6	朝顔 頸部片1/3	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タガくびれ部突出度高め台形状、胴部のタガやや弱くなだらかな台形を呈する。頸部はタテハケ、くびれ部下の胴部はタテハケやや粗。後2次ヨコハケやや粗。内面、頸部はヨコハケやや粗。くびれ部胴部はナデ、頸部のみ赤色塗彩の可能性あり。胴部径17.2cm。
第198図-2 PL-71-31	円筒 底部破片4/5	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タガ突出度弱く、低台形状を呈す。タテハケメ粗、内面ナデ、底端部ナデ、底部にて接合痕明瞭に残る。底部径13.3cm。
第198図-3 PL-71-1	朝顔 頸部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タガ突出度低めで断面ならかな台形状呈する。タテハケやや粗。内面ナデ。
第198図-4 PL-71-5	朝顔 頸部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/4	タガ突出度やや高く、断面弱い台形を呈する。タテハケやや粗。内面斜めハケ、やや粗ナデ。
第199図-5 PL-71-2	朝顔 頸部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タガ突出度高く、断面台形、タテハケやや粗。内面斜めハケ。
第199図-6 PL-71-3	朝顔 頸部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タガ欠失し形状不明。タテハケやや粗。内面斜めハケ。
第199図-7 PL-71-4	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タガやや高めで断面台形状を呈す。タテハケやや粗。内面ナデ。
第199図-8 PL-71-8	朝顔 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面斜めハケ、口縁端部ナデ。
第199図-9 PL-71-9	円筒 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面ナデ。
第199図-10 PL-71-10	朝顔 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR7/1	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面斜めハケ、口縁端部ナデ。
第199図-11 PL-71-11	朝顔 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面斜めハケ、口縁端部ナデ。
第199図-12 PL-71-12	朝顔 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面ナデ。
第199図-13 PL-71-13	円筒 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR5/4	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面斜めハケ後ナデ。
第199図-14 PL-71-14	朝顔 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面ヨコハケ後ナデ。
第199図-15 PL-71-15	朝顔 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面斜めハケ。
第199図-16 PL-71-16	円筒 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/6	タテハケやや粗。内面ナデ。
第199図-17 PL-71-17	円筒 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR6/6	内外面共にナデ。
第199図-18 PL-71-19	円筒 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR5/4	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面ハケ後ナデ。
第199図-19 PL-71-18	朝顔 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR6/6	内外面共にナデ。一部ハケメ。
第199図-20 PL-71-20	円筒 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR5/4	タテハケやや粗。口縁端部ナデ。内面ナデ。

遺物観察表

番号	器形 残存状態	胎土	焼成	色調	形態・特徴
第199図-21 PL-71-21	朝顔 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗、後ナデ。内面斜めハケ後ナデ。
第199図-22 PL-71-23	朝顔 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR6/6	内外面共にナデ。
第199図-23 PL-71-22	円筒 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗、後口縁端部ナデ。内面ナデ。
第199図-24 PL-71-24	円筒 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ（やや粗）後ナデ。内面ナデ。
第199図-25 PL-71-25	円筒 口縁部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ（やや粗）後ナデ。内面斜めハケ後ナデ。
第199図-26 PL-72-23	円筒 底部	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。内面ナデ。タガ突出度強く、M字台形状を呈する。
第199図-27 PL-71-32	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。内面ナデ。タガ突出度弱め、緩い台形状を呈する。
第200図-28 PL-71-33	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。タガ突出度弱めM字形に近い形。
第200図-29 PL-71-34	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。突出度弱。くだけている。
第200図-30 PL-71-35	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	タテハケ粗、内面ナデ後ハケ。突出度やや高く台形状を呈する。
第200図-31 PL-71-36	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。突出度弱め緩いM字状を呈する。
第200図-32 PL-71-40	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	やや甘い	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗、内面斜めハケ。タガ突出度弱く緩いM字状呈する。
第200図-33 PL-71-37	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ハケ後ナデ。タガ突出度弱く台形状呈する。
第200図-34 PL-71-45	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	ナデ、内面ナデ。タガ突出度弱く緩い台形状を呈する。
第200図-35 PL-71-38	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR7/6	ナデ、内面ナデ。タガ突出度弱く緩い台形状を呈する。
第200図-36 PL-71-39	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 7.5YR6/6	タテハケ粗、ナデ。タガやや緩い突出度台形状。
第200図-37 PL-71-43	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	橙色 5YR6/6	ナデ、内面ナデ。タガ突出度やや緩い台形状。
第200図-38 PL-71-42	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。タガ突出度やや緩い台形状。
第200図-39 PL-71-44	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR7/6	ナデ、内面ナデ。タガ突出度やや低く緩い台形状呈する。
第200図-40 PL-71-41	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。タガ突出度高めM字台形状を呈する。
第200図-41 PL-72- 1	形象 破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR6/4	器種不明。板状品、左側欠損。タテハケ粗、内面ナデ。
第200図-42 PL-72- 2	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。スカシ穴半円スカシ。タガ突出度やや低く緩い台形状を呈する。
第200図-43 PL-72- 3	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。内面ナデ。タガ突出度やや低く、緩い台形状を呈する。
第200図-44 PL-72- 4	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	普通	にぶい橙色 7.5YR7/4	タテハケ粗、内面ナデ。半円スカシを有する。タガ突出度やや低く、緩い台形状を呈する。
第200図-45 PL-72- 9	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	タテハケ粗、内面ナデ。半円スカシを有する。タガ突出度やや低く、緩い台形状を呈する。
第200図-46 PL-72- 6	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。半円スカシを有する。タガ突出度やや低くM字台形状を呈する。
第200図-47 PL-72-10	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	ナデ、内面ナデ。半円スカシを有する。タガ巾広く、突出度低く低台形状を呈する。
第200図-48 PL-72- 5	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケやや粗、内面ナデ。小円孔状のスカシを有すると思われる。タガ突出度やや低く、M字台形状を呈する。
第200図-49 PL-72-7	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR6/4	ナデ、内面ナデ。ハケ調整。半円スカシを有する。タガ巾広いが、突出度やや低い、くずれた台形状を呈する。
第200図-50 PL-72-12	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	ナデ、内面ナデ。半円スカシを有する。タガ突出度やや低くM字低台形状を呈する。

遺物観察表

番号	器形 残存状態	胎土	焼成	色調	形態・特徴
第201図-51 PL-71-29	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。スカシ穴の一部残る。
第201図-52 PL-72-19	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケ粗。内面ナデ。スカシ穴の一部残る。
第201図-53 PL-72-8	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。スカシ穴の一部残る。タガ突出度高めで台形状を呈する。
第201図-54 PL-72-14	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR7/4	タテハケやや粗、内面ナデ。スカシ穴一部残る。
第201図-55 PL-72-11	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケやや粗、内面ナデ。スカシ穴下辺部残る。
第201図-56 PL-72-16	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	ナデ、内面ナデ。半円スカシ穴有する。タガ突出度やや低くM字台形状を呈する。
第201図-57 PL-72-18	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	タテハケやや粗、内面ナデ。半円スカシ穴の一部有する。タガ突出度やや低くM字台形状を呈する。
第201図-58 PL-72-13	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケ粗、内面ナデ。スカシ穴側辺一部残る。
第201図-59 PL-72-20	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケやや粗、内面ナデ。スカシ穴側辺一部残る。
第201図-60 PL-72-17	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	ナデ、内面ナデ。スカシ穴一部残る。タガ突出度やや低くM字低台形状を呈する。
第201図-61 PL-72-15	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR6/6	ナデ、内面ナデ。スカシ穴半円スカシ。タガ突出度やや低く、低台形状を呈する。
第201図-62 PL-71-27	円筒 胴上部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。内面斜めハケ。
第201図-63 PL-71-28	円筒 胴上部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗、内面斜めハケ。
第201図-64 PL-71-30	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケやや粗。内面斜めハケ。
第201図-65 PL-72-24	円筒 底部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	タテハケ粗。内面ナデ。
第201図-66 PL-72-27	円筒 底部1/3	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケやや粗。内面ナデ。タガ突出度やや高めで、M字台形状を呈する。底端部に横ナデ。底部径(11.9)cm。
第201図-67 PL-72-29	円筒 底部1/3	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケやや粗。内面ナデ。底端部に横ナデ。底部径(14.0)cm。
第201図-68 PL-72-28	円筒 底部1/4	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケやや粗。内面ナデ。底端部に横ナデ。底部径(15.1)cm。
第201図-69 PL-72-22	円筒 底部1/4	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケ粗。内面ナデ。底端部に横ナデ。タガ突出度やや高めで台形状を呈する。底部径(12.1)cm。
第201図-70 PL-72-26	円筒 底部1/4	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 7.5YR7/6	タテハケ粗。内面ナデ。底部横ナデ。タガ突出度やや高めで台形状を呈する。
第202図-71 PL-72-25	円筒 底部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 5YR6/4	タテハケ粗。内面ナデ。底端部横ナデ。
第202図-72 PL-72-35	円筒 底部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	灰白色 2.5Y8/2	タテハケ粗。内面ナデ。底端部横ナデ。
第202図-73 PL-72-21	円筒 底部1/3	雲母・長石 砂粒若干含む	良	浅黄色 2.5Y7/3	タテハケ粗。内面ナデ。底端部横ナデ。底部径(11.6)cm。
第202図-74 PL-72-30	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	浅黄色 2.5Y7/3	タテハケ粗。内面ナデ。タガ突出度やや低めで低台形状を呈する。
第202図-75 PL-72-31	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	浅黄色 2.5Y7/3	タテハケ粗。内面ナデ。タガ突出度やや高く台形状を呈する。
第202図-76 PL-72-34	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR6/3	タテハケやや粗。内面ナデ。赤色塗彩の可能性あり。
第202図-77 PL-72-36	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	浅黄色 2.5Y7/3	タテハケ粗。内面ナデ。
第202図-78 PL-72-32	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。内面斜めハケ。赤色塗彩あり。
第202図-79 PL-72-33	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。内面斜めハケ。赤色塗彩あり。
第202図-80 PL-72-38	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。内面ナデ。二条の刻線斜め方向に入る。

遺物観察表

番 号	器 形 残存状態	胎 土	焼 成	色 調	形 態 ・ 特 徴
第202図-81 PL-72-37	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	タテハケやや粗。内面斜めハケ。赤色塗彩あり。
第202図-82 PL-72-39	土師器甕 口辺部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	緩いくの字状を呈する口辺。口辺部横ナデ頸部から胴部にかけてケズリ後ナデ。内面ナデ。
第202図-83 PL-72-40	土師器甕 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR6/4	ケズリ。内面ケズリ後ナデ。
第202図-84 PL-72-41	土師器甕 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR6/4	ケズリ。内面ケズリ後ナデ。
第202図-85 PL-72-42	土師器甕 底部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR6/4	ケズリ。内面ケズリ後ナデ。
第202図-86 PL-72-43	土師器坏 破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁は緩やかに立ち上がり、口唇部は短く、内側に向けて屈曲する。内外面ナデ。
第203図-87	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	ハケメ精。内面ハケメ。
第203図-88	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	橙色 5YR6/6	ハケメ粗。内面ハケメ。 スカシ穴半円形。
第203図-89	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR6/4	ハケメやや粗。内面ナデ。タガ突出度高く、台形状を呈する。スカシ穴半円形。
第203図-90	円筒 胴部破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	タガ突出度やや高めで緩い台形状を呈する。
第203図-91	土師器 破片	雲母・長石 砂粒若干含む	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ。

筑井出土の土師器

番号	器種 器形	残存状態	法量 cm ①口径②底径③器高	胎土 焼成	色調	形態・特徴
第204図-1 PL-73-5	土師器 坏	7/8残存	①13.4 ③3.7	雲母・長石・砂粒 若干含む 良好	にぶい橙色 7.5YR6/4	須恵器模倣坏。坏底部ヘラケズリ後ミガキ口辺部ナデ。内面全面ナデの後、口辺部まで伸びる放射状の暗文あり器壁は底部で0.7cmと厚めである。
第204図-2 PL-73-2	土師器 埴	3/4残存	①12.8 ③6.1	雲母・長石・砂粒 若干含む	明赤褐色 2.5YR5/6	口唇部がくの字状に短く屈曲するもの。体部は全体にケズリあり、口辺部はナデ。内面は全面ナデの後、放射状の暗文が口辺部屈曲部手前まで間隔をあけて施される。
第204図-3 PL-73-1	土師器 埴	完形	①10.8 ③6.3	雲母・長石・砂粒 若干含む 良好	にぶい橙色 5YR6/4	体部から緩やかに内向してそのまま口唇部に至る形態を有する。体部ケズリ後一部ミガキ。口辺部は2cmほどの中で、ナデ調整。内面は全面ナデの後3cmほどの中で特に横方向のナデを施す。かなり乱れた放射状の暗文が間隔をあけて施される。
第204図-4 PL-73-3	土師器 坏	完形	①14.5 ③5.2	雲母・長石・砂粒 若干含む 良好	橙色 5YR6/6	底部は径4cmの平底を有する。外方に直線状に開いた後、稜を有して屈曲し、垂直に立ち上がる口縁部を有する。体部ケズリ後一部ミガキ稜を造り出すため沈線状呈する。口辺部ナデ。内面全面ナデの後、密な間隔で放射状の暗文を施し、それは口辺部立ち上がり部まで及ぶ。
第204図-5 PL-73-4	土師器 台付埴	完形	①13.7 ②9.5 高6.5 脚高3.4	雲母多く・長石・ 砂粒若干含む 普通	にぶい橙色 7.5YR6/4	底平な短脚が付く、埴。脚部ケズリ後ナデ。内面はナデ。底部内面中央に径1.5cm、深さ0.8cmの小孔が穿たれるが開通しない。埴部はケズリ後ナデ。口辺部はナデ。埴内面ケズリ後、ハケ状の工具によるかと思われるナデによりハケメ様の調整痕跡残る。その上にさらに間隔の細かい放射状の暗文を口辺部いっぱいまで施す。
第204図-6 PL-73-6	土師器 高坏	脚部残存	①— ②12.9 脚高10.8	雲母・長石・砂粒 若干含む 良好	にぶい橙色 2.5YR6/4	やや太めの柱状脚部で、外側に緩やかに開く、外面ケズリ後ハケメ施す。内面ケズリ後全面ナデ。坏部は欠損する。
第204図-7 PL-73-7	土師器 高坏	脚部残存	①— ②12.9 脚高9.0	雲母・長石・砂粒 若干含む 良好	にぶい橙色 7.5YR6/4	やや太めの柱状脚部で強く屈曲して外方に開いて脚端部に至る。柱状部ケズリ後ハケメ調整を施し、内面はケズリ後全面ナデ。
第204図-8 PL-73-8	土師器 甕	胴部上半 1/2	①16.9 ②— 胴部径23.4 現存高14.4	雲母・長石・砂粒 若干含む 普通	にぶい赤褐色 5YR5/4	胴部のふくらみは弱く、口辺部の屈曲も緩やかで、外方にやや開きぎみに5cmほど立ち上がる口辺部を有する。口唇部は外につまみ上げるように短く屈曲させる。胴部外面ハケ口辺部及び頸部付近はナデ、胴部内面ケズリ後ハケメ、口辺部ナデ。

報 告 書 抄 録

フリガナ	コジマダヨウカイチ
書名	小島田八日市遺跡
副書名	主要地方道藤岡大胡線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第175集
編著者名	杉山秀宏
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年	西暦1994年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
コジマダヨウカイチ 小島田八日市	マエバシシ コジマダマチ 前橋市小島田町 アザヨウカイチ 字八日市 マエバシシ クツボイマチ 前橋市笄井町 アザヨウカイチ 字八日市	102016	000358	36°22'06"	139°8'30"	19920615	6500平方m	道路建設
						19921201		
						19931117		
						19931207		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
小島田八日市	土 壙	縄文時代	土壙	9基	縄文土器・石器	縄文草創期の土器群
	墳 墓	古墳時代	古墳	1基		
	土 壙	中近世	土壙	588基	中近世陶磁器・石製品	
	住 居		竪穴住居	2軒		
	井 戸		井戸	44基		
溝	溝	57条				

写 真 图 版



1. 調査区全景 (北西より)



2. 調査区全景 (南西より)



1. 拡張区東壁セクション



2. 深掘第1地点セクション



3. 深掘第2地点セクション



4. 拡張区南壁セクション



5. 北西区風倒木完掘



6. 北西区風倒木セクション



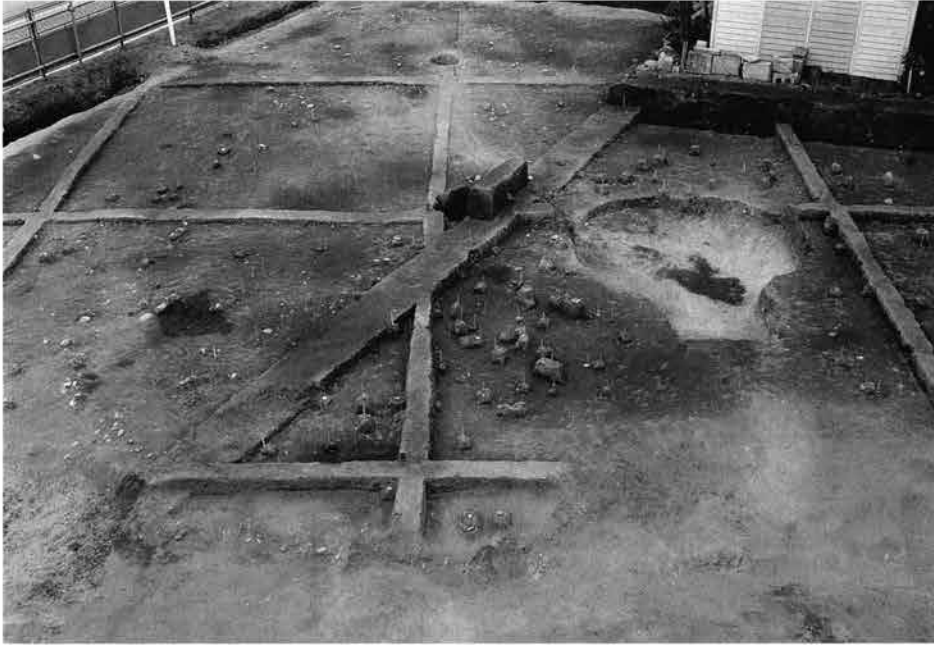
7. 北西区風倒木セクション



1. 北東区縄文期包含層 (南より)



2. 北東区縄文草創期遺物出土状況 (南より)



1. 北東区本線部縄文草創期遺物
出土状況 (南より)



2. 北東区拡張区縄文草創期遺物
出土状況 (南より)



3. 北東区本線部縄文草創期遺物
出土状況 (南より)



1. 83G 遺物出土状況 (南より)



2. 84G 遺物出土状況 (南より)



3. 84G 草創期土器出土状況 (南東より)



4. 102G 遺物出土状況 (南より)



5. 103G 遺物出土状況 (南より)



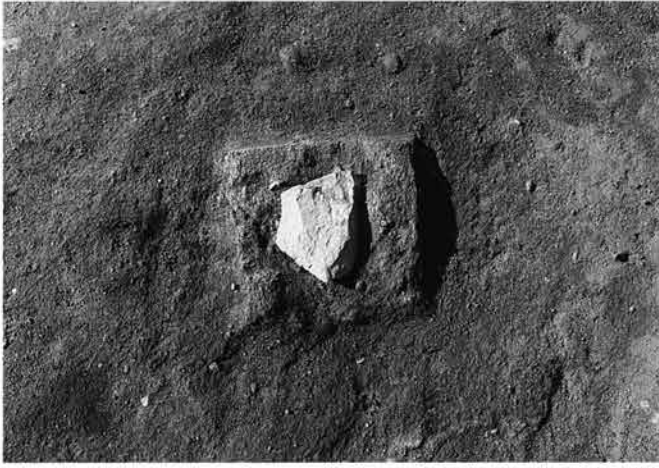
6. 103G 遺物出土状況 (南より)



7. 104G 遺物出土状況 (南より)



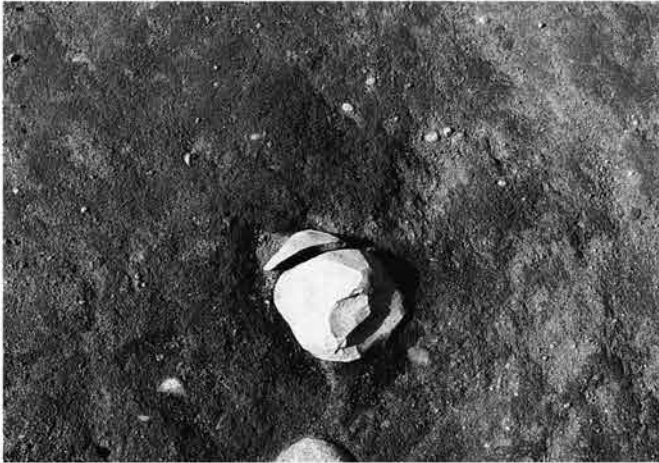
8. 102・122G 遺物出土状況 (南より)



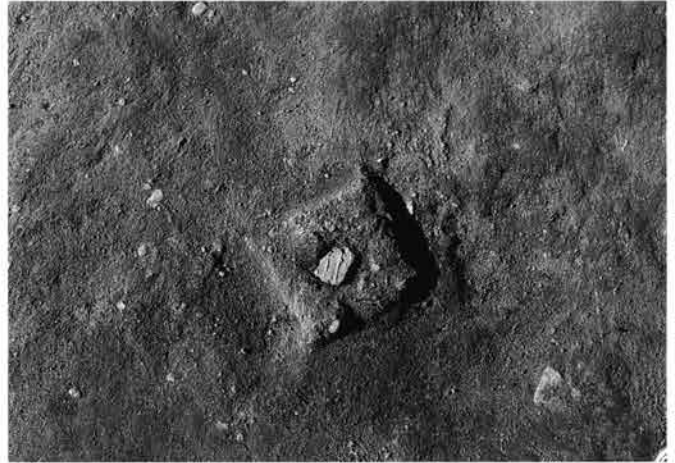
1. 122G石器出土状況 (東より)



2. 122G遺物出土状況中景 (南より)



3. 122G石核 (105) 出土状況 (東より)



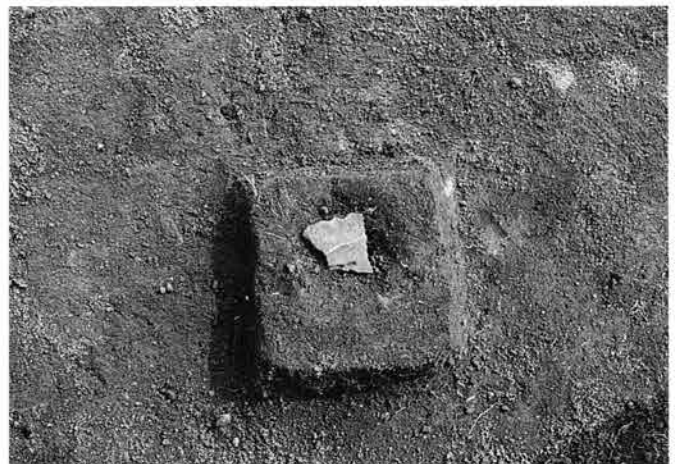
4. 123G遺物出土状況 (南より)



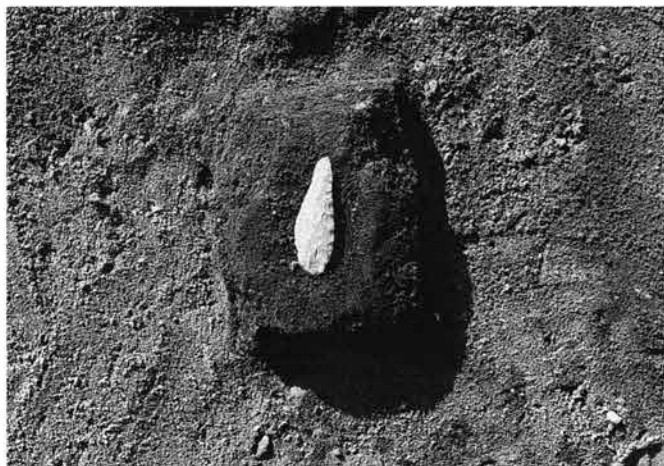
5. 122Gポイント (7) 出土状況 (東より)



6. 123G草創期土器出土状況 (南より)



7. 123G草創期土器出土状況



1. 123Gポイント(6)出土状況(北より)



2. 123Gポイント(9)出土状況(東より)



3. 123Gポイント(8)出土状況(東より)



4. 123G有舌尖頭器(1)出土状況(東より)



5. 123G草創期土器出土状況(東より)



6. 123G草創期土器出土状況(東より)



7. 123G草創期土器出土状況(東より)



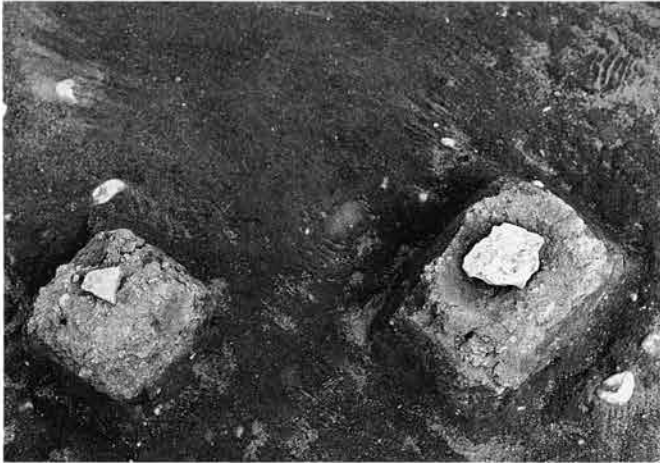
8. 123G草創期土器出土状況(東より)



1. 123G草創期土器出土状況 (東より)



2. 123G草創期土器出土状況 (東より)



3. 123G草創期土器出土状況 (東より)



4. 124G草創期土器出土状況 (南より)



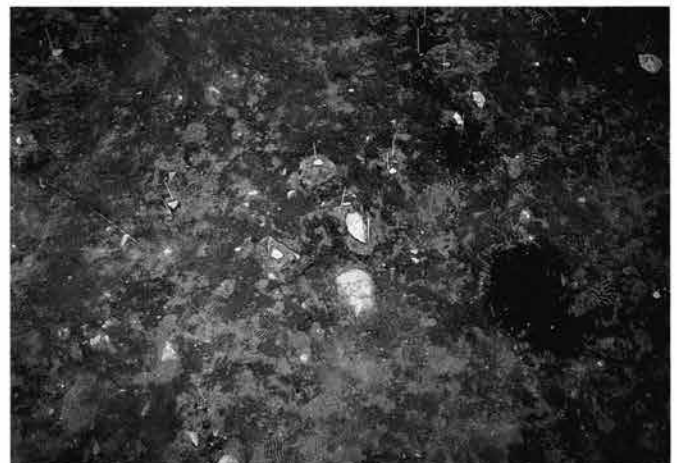
5. 123・124G遺物出土状況 (南より)



6. 123・124G遺物出土状況 (東より)



7. 124G遺物出土状況 (南より)



8. 124G遺物出土状況 (南より)



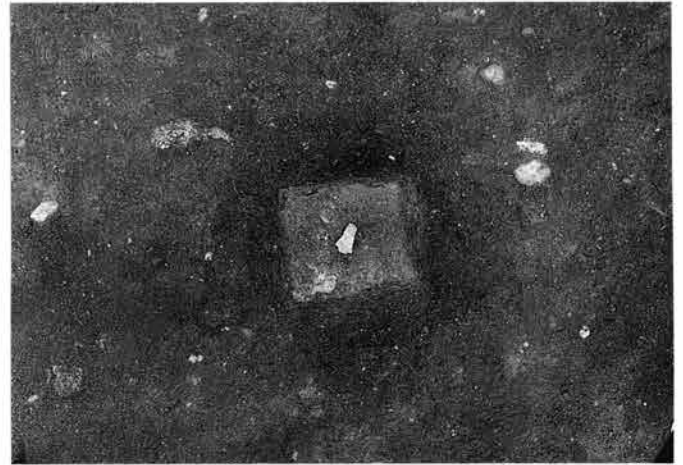
1. 124G石器集中出土状況 (南より)



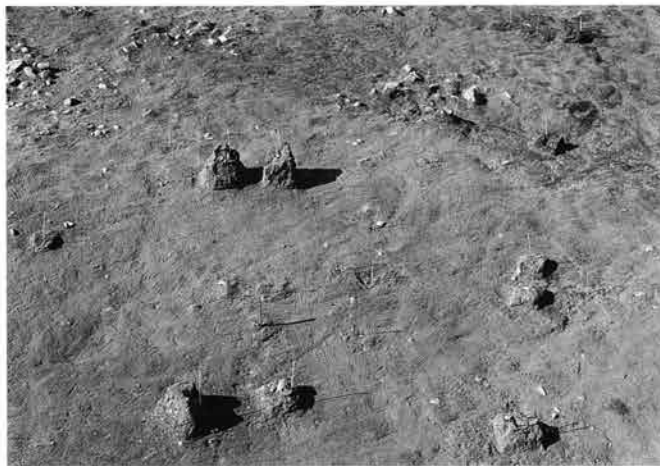
2. 124G石器集中出土状況 (南より)



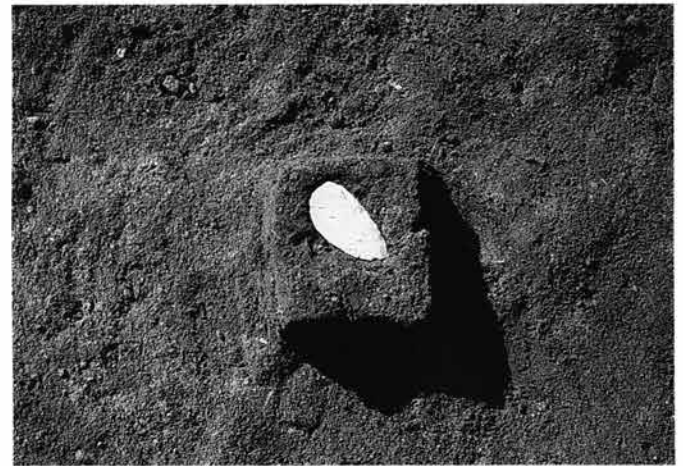
3. 125G遺物出土状況 (南より)



4. 125G有舌尖頭器(2)出土状況 (南より)



5. 125G遺物出土状況 (東より)



6. 163Gスクレーパー(17)出土状況



7. 北西区縄文包含層調査 (南より)



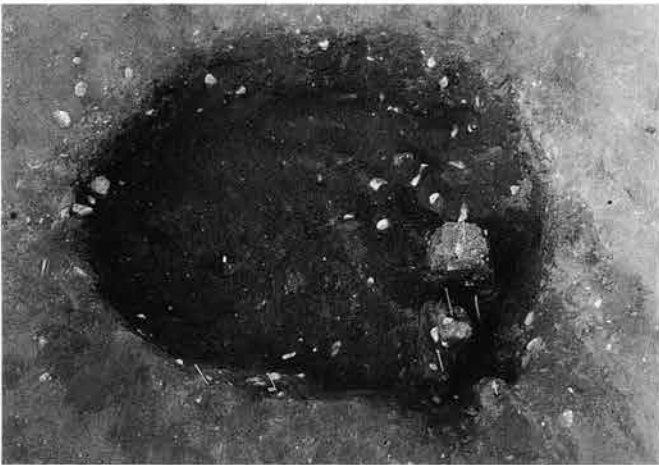
8. 北東区北端縄文包含層調査 (南より)



1. 682号土壙完掘状況 (東より)



2. 683号土壙完掘状況 (東より)



3. 684号土壙遺物出土状況 (東より)



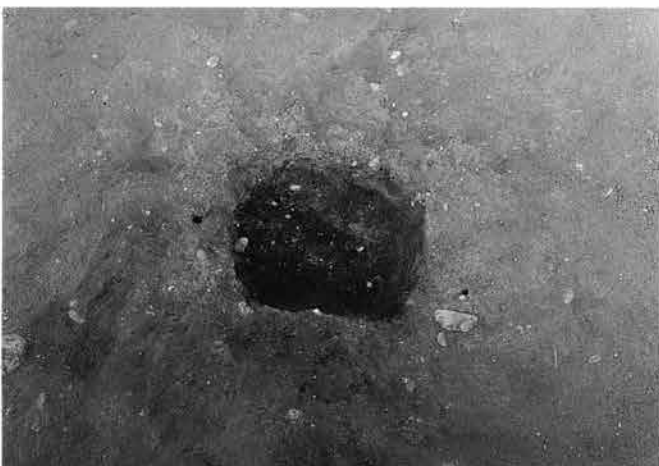
4. 684号土壙完掘状況 (東より)



5. 685号土壙完掘状況 (東より)



6. 686号土壙完掘状況 (南より)



7. 687号土壙完掘状況 (南より)



8. 688号土壙完掘状況 (北より)



1. 1号墳磔出土状況 (南より)



2. 1号墳主体部盗掘坑東西セクション (南より)



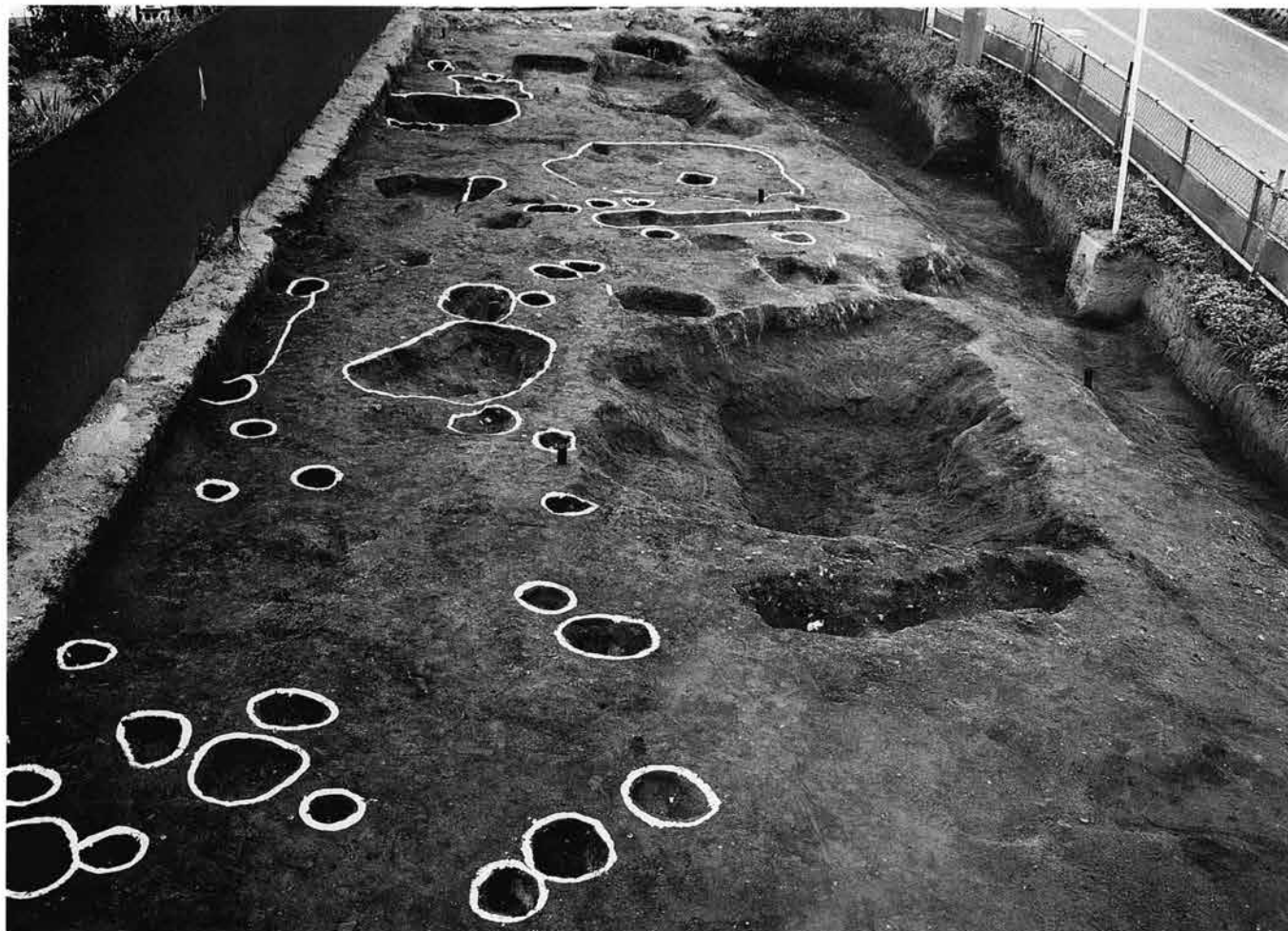
3. 1号墳主体部盗掘坑南北セクション (東より)



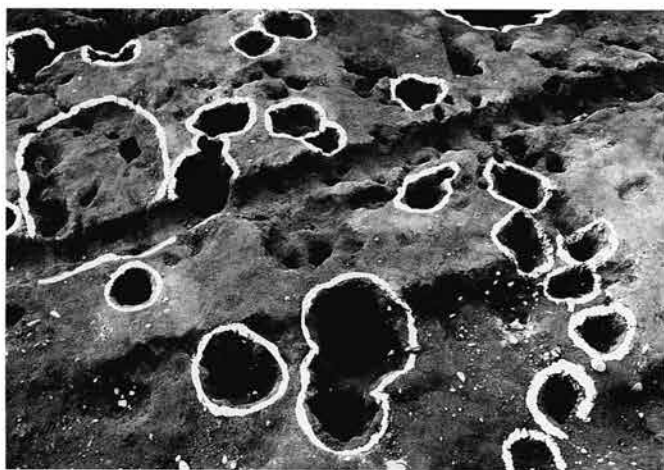
4. 5号溝完掘状況 (南より)



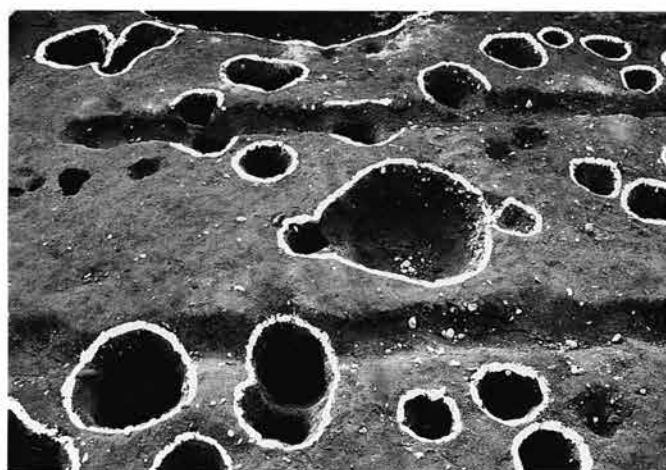
5. 5号溝セクション (西より)



1. 北西区北端部遺構完掘状況



2. 272G周辺完掘状況 (西より)



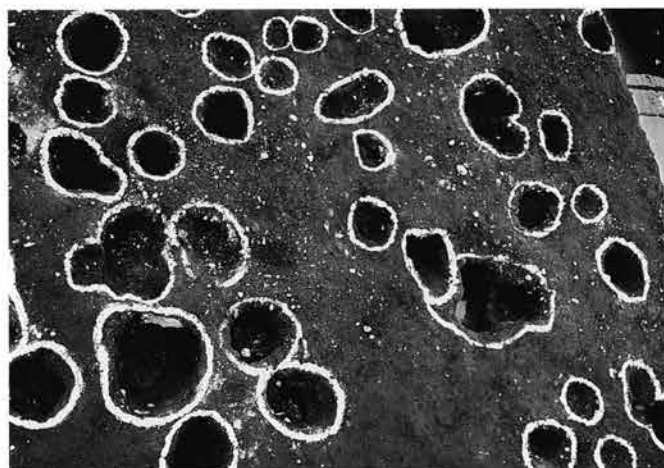
3. 292・293G完掘状況 (西より)



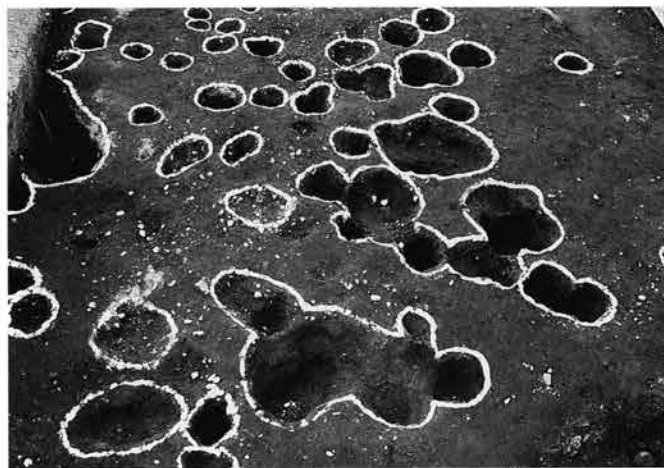
4. 313G完掘状況 (北より)



5. 312・333G完掘状況 (北より)



1. 332・333・352・353G完掘状況 (西より)



2. 333・334・353・354G完掘状況 (北より)



3. 50号土壙完掘状況 (南西より)



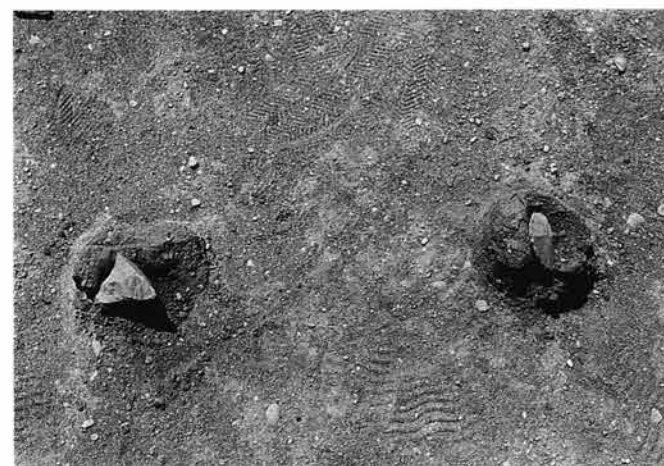
4. 75号土壙完掘状況 (北より)



5. 76号土壙セクション (東より)



6. A3-26G 78・79・85・86号土壙 (北より)



7. 48号土壙遺物出土状況 (北より)



8. 48号土壙完掘状況 (南西より)



1. 81・82号土壙完掘状況 (南より)



2. 83号土壙完掘状況 (北より)



3. 88・89・90・96号土壙完掘状況 (北より)



4. 47号土壙完掘状況 (南西より)



5. 47・97-103号土壙完掘状況 (南より)



6. 106-114号土壙完掘状況 (東より)



7. 104・105・107・108・114-117号土壙完掘状況 (南より)



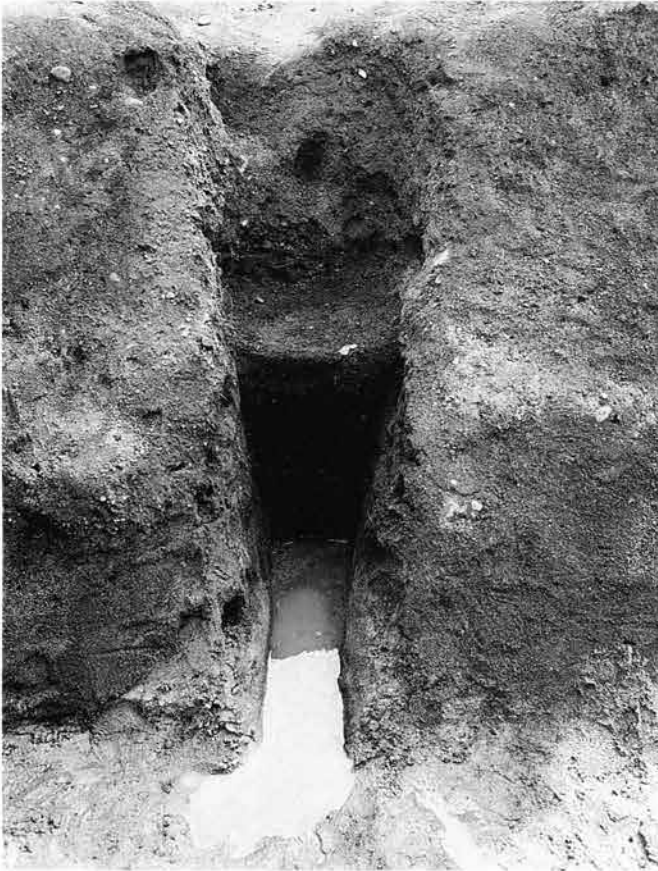
8. 43-45号土壙完掘状況 (南西より)



1. 43-45・118-120号土坑完掘状況 (東より)



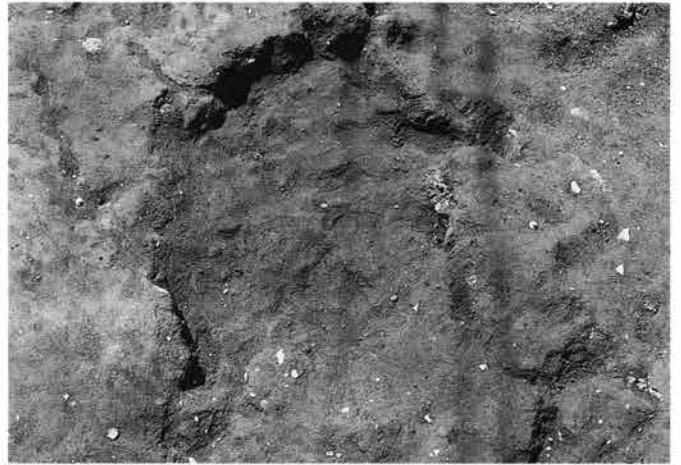
2. 44・45・123・124号土坑完掘状況 (東より)



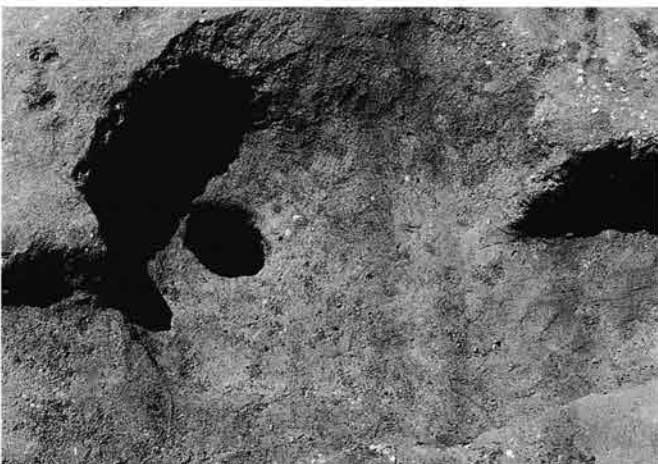
3. 126号土坑セクション (北より)



4. 233・234号土坑完掘状況 (北より)



5. 232号土坑完掘状況 (北より)



6. 142・253号土坑完掘状況 (北より)



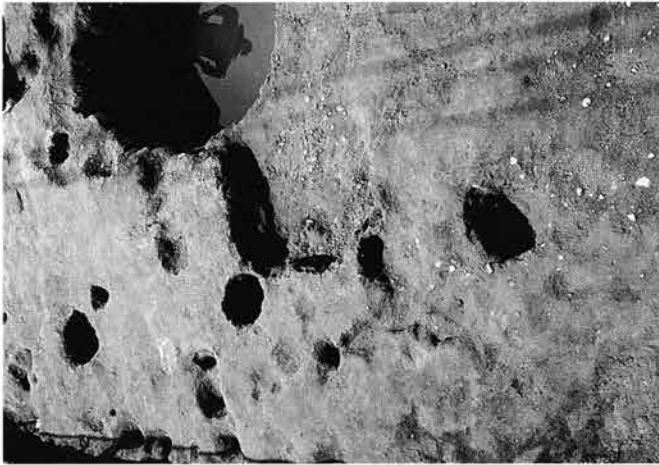
7. 65・66号土坑、6・7号井戸完掘状況 (北西より)



1. 376号土壙完掘状況 (南から)



2. 67号土壙完掘状況 (北東から)



3. 131・132、225-227、8号井戸完掘状況 (北から)



4. 61・62・132・229・228号土壙、8号井戸完掘状況 (東から)



5. 374号土壙完掘状況 (東から)



6. 375号土壙完掘状況 (東から)



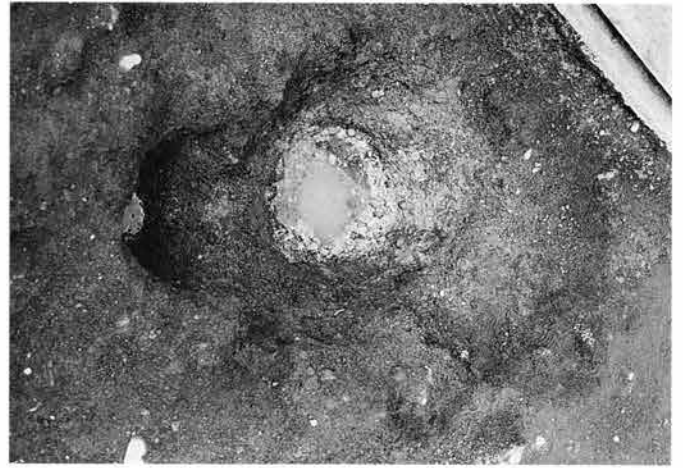
7. 132・190・193-196、220-224号土壙、9号井戸完掘状況 (北から)



8. 168-173、175-180、181・182・192号土壙、10号井戸、29溝完掘状況 (北から)



1. 173・179-182・184・186-189・192号土坑、10号井戸、29溝完掘状況



2. 344号土坑完掘状況 (南から)



3. 1号井戸セクション (南から)



4. 1号井戸完掘状況 (西から)



5. 1・2号井戸完掘状況 (西から)



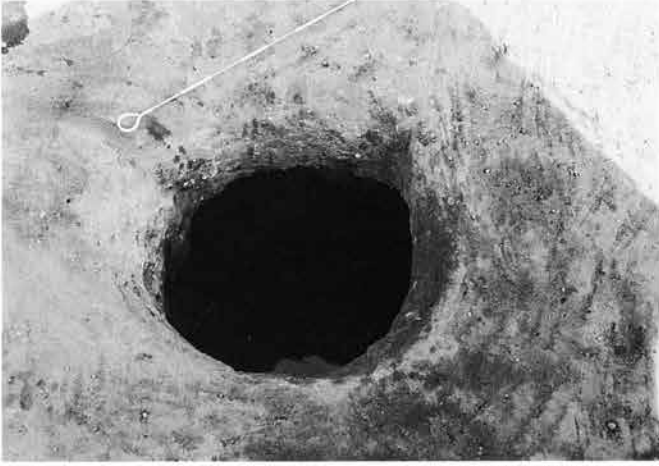
6. 2号井戸セクション (西から)



7. 2号井戸完掘状況 (西から)



8. 2・3号井戸完掘状況 (西から)



1. 3号井戸完掘状況 (東から)



2. 4号井戸セクション (南から)



3. 4号井戸完掘状況 (東から)



4. 5号井戸完掘状況 (南から)



5. 6・7号井戸完掘状況 (東から)



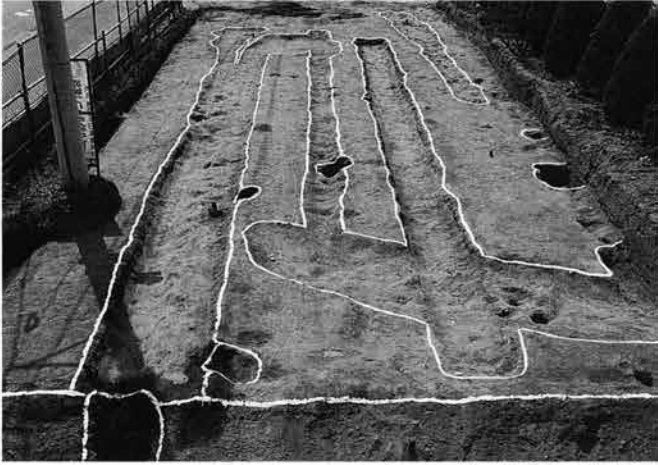
6. 8号井戸完掘状況 (北から)



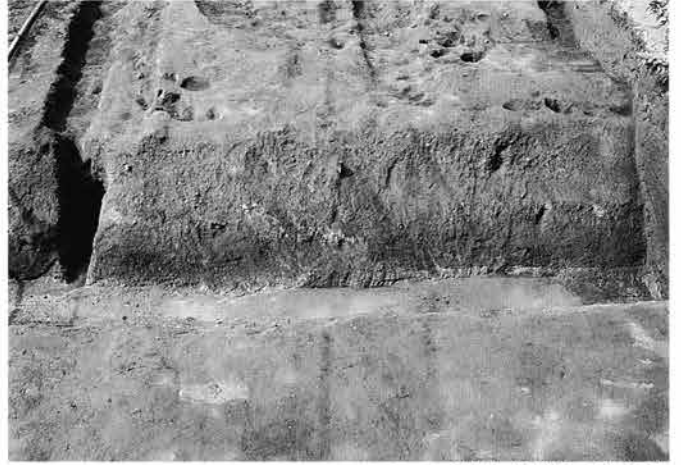
7. 9号井戸遺物出土状況 (西から)



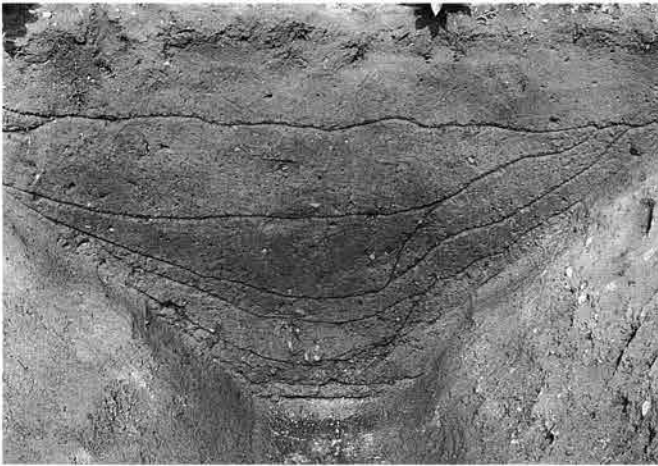
8. 11号井戸完掘状況 (北から)



1. 18・19・20・22・23・31溝完掘状況 (北より)



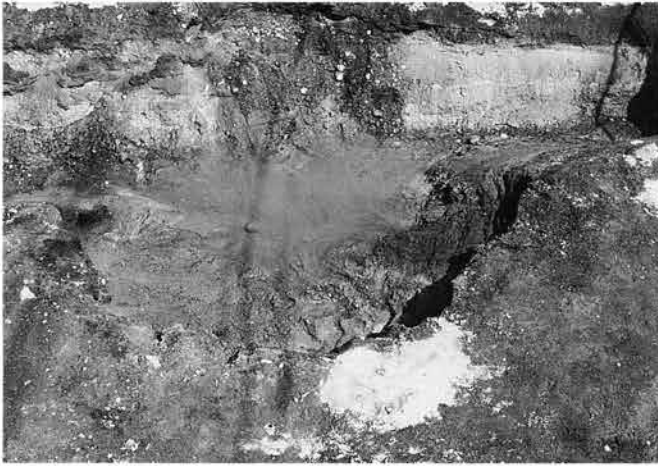
2. 2号溝完掘状況 (北より)



3. 2号溝セクション (東より)



4. 2号溝セクション (西より)



5. 24号溝完掘状況 (南より)



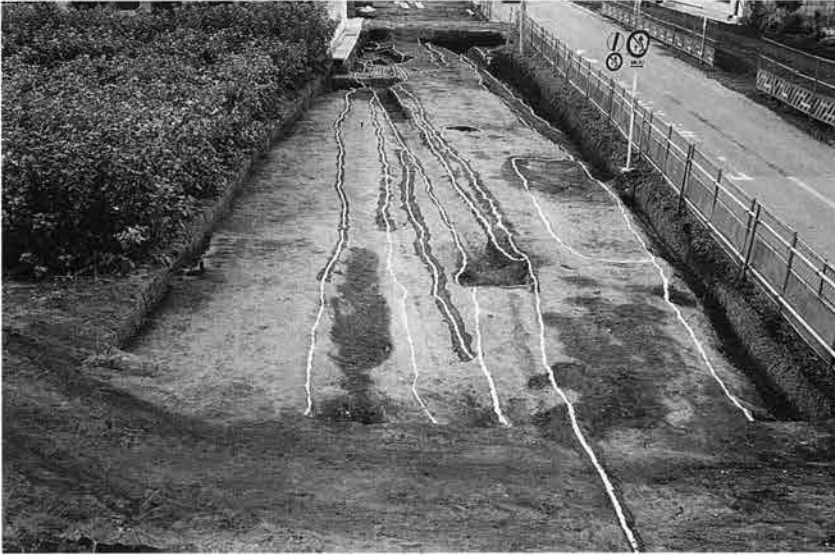
6. 24-26号溝、344-346土壙完掘状況 (南より)



7. 1号溝セクション (南より)



8. 31号溝完掘状況 (北より)



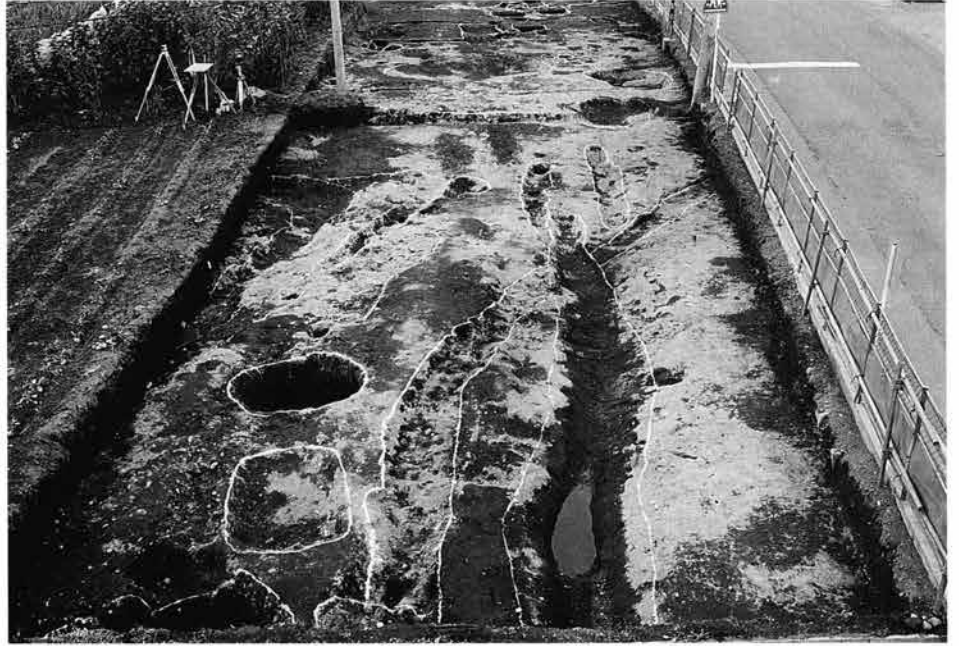
1. 北東区中央部完掘状況 (4・6・13・14号溝) (北より)



2. 北東区中央部完掘状況 (3・4・6・13・14・32・33号溝) (南より)



3. 北東区中央部完掘状況 (3・32・33号溝) (南より)



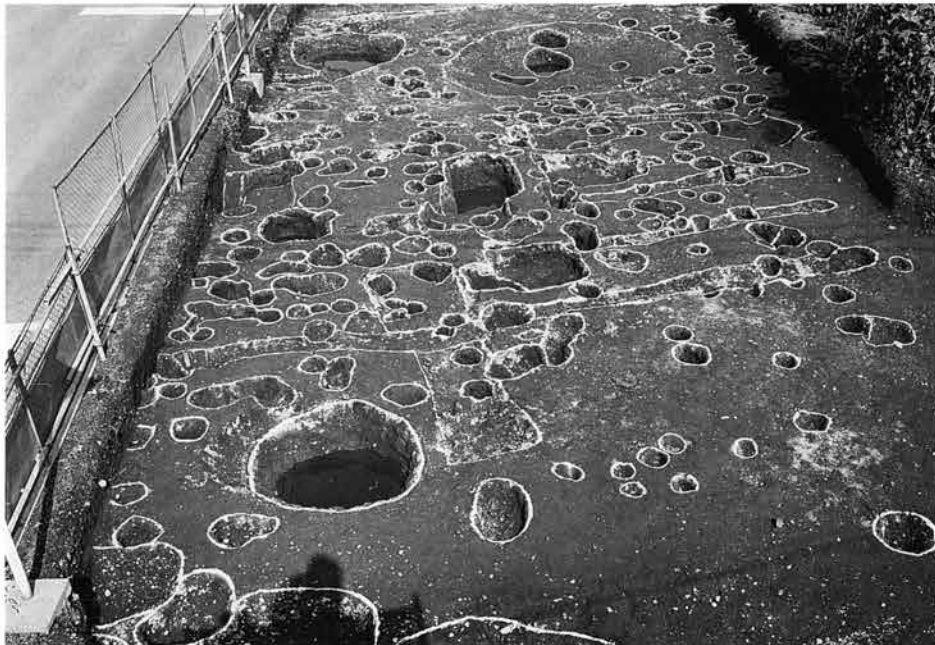
1. 北東区南部完掘状況 (32・34-37・39・45・46号溝) (北より)



2. 北東区南部完掘状況 (32・34-46号溝) (南より)



3. 北東区南部完掘状況 (38-41号溝) (北より)



1. 北東区南端部完掘状況 (42-44号溝)
(南より)



2. 北東区南端東張り出し部完掘状況
(北西より)



3. 北東区南端東張り出し部完掘状況
(北西より)



1. 13号土坑完掘状況 (西より)



2. 15号井戸完掘状況 (西より)



3. 13号完掘状況 (東より)



4. 13号井戸セクション (西より)



5. 14号井戸完掘状況 (西より)



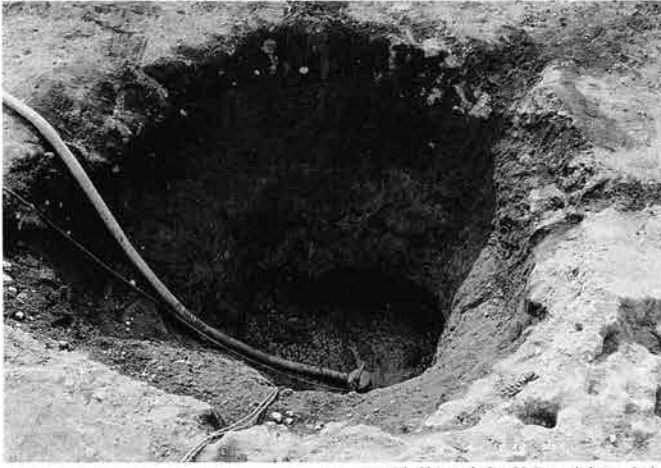
6. 14号井戸セクション (東より)



7. 17号井戸セクション (南より)



8. 18号井戸完掘状況 (南より)



1. 22号井戸完掘状況 (東より)



2. 11号土壌・23号井戸完掘状況 (北西より)



3. 1号道セクション (東より)



4. 24号井戸完掘状況 (西より)



5. 1号道完掘状況 (東より)



7. 6・13・14号溝完掘状況 (北より)

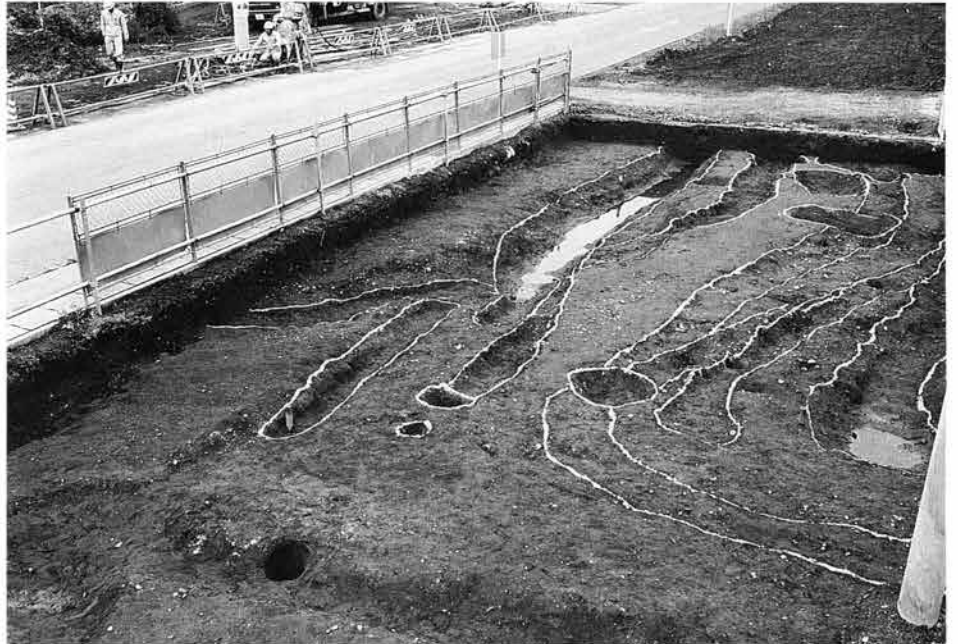


6. 13号溝セクション (南より)

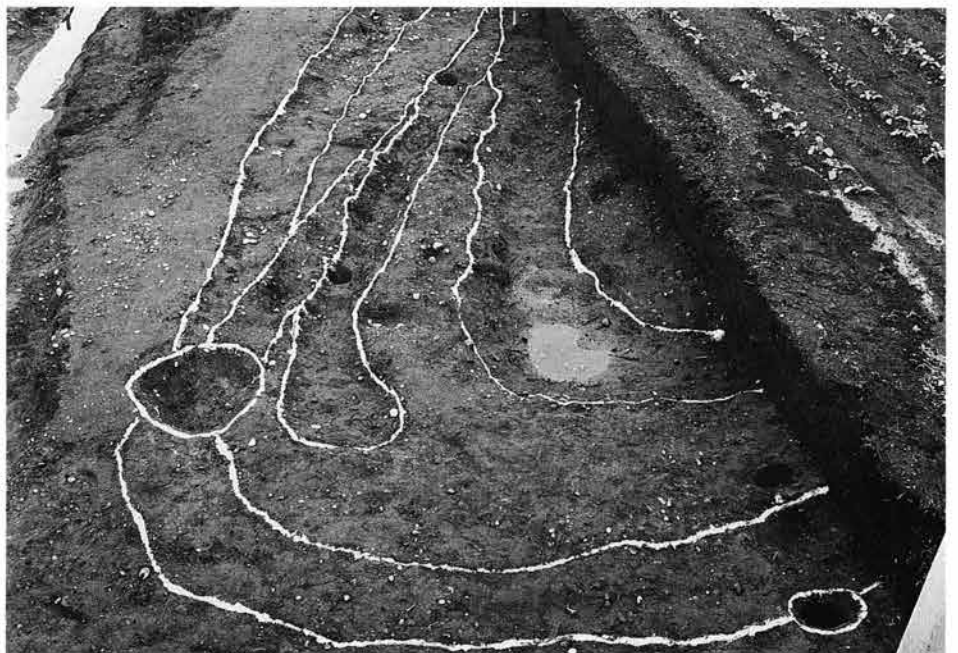
1. 3・32・33号溝完掘状況 (南より)



2. 3・32・33号溝セクション (南より)



3. 32・34-37・39・45・46号溝完掘状況 (南東より)



4. 35・36・45号溝完掘状況 (南より)



1. 南西区北端西張り出し部完掘状況 (西より)



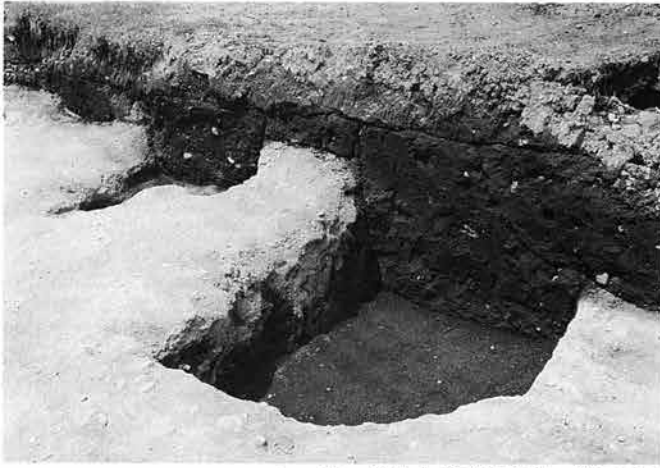
2. 南西区南部完掘状況 (南より)



1. 南西区中央部完掘状況 (北より)



2. 南西区中央部完掘状況 (北より)



1. 18・19号土坑完掘状況 (東より)



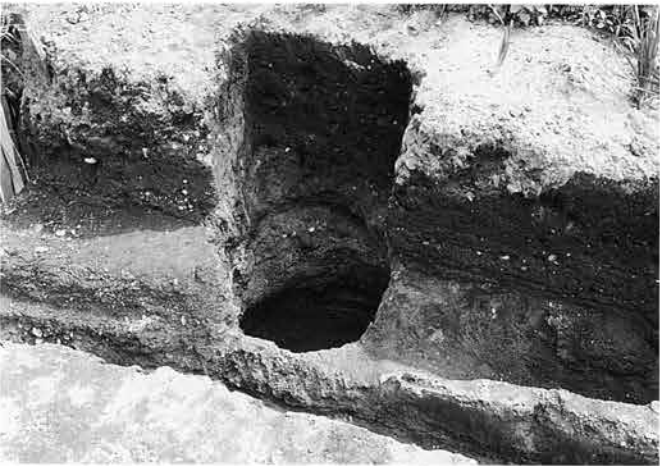
2. 20号土坑完掘状況 (北より)



3. 23号土坑完掘状況 (南東より)



4. 24号土坑完掘状況 (南より)



5. 32号井戸完掘状況 (北より)



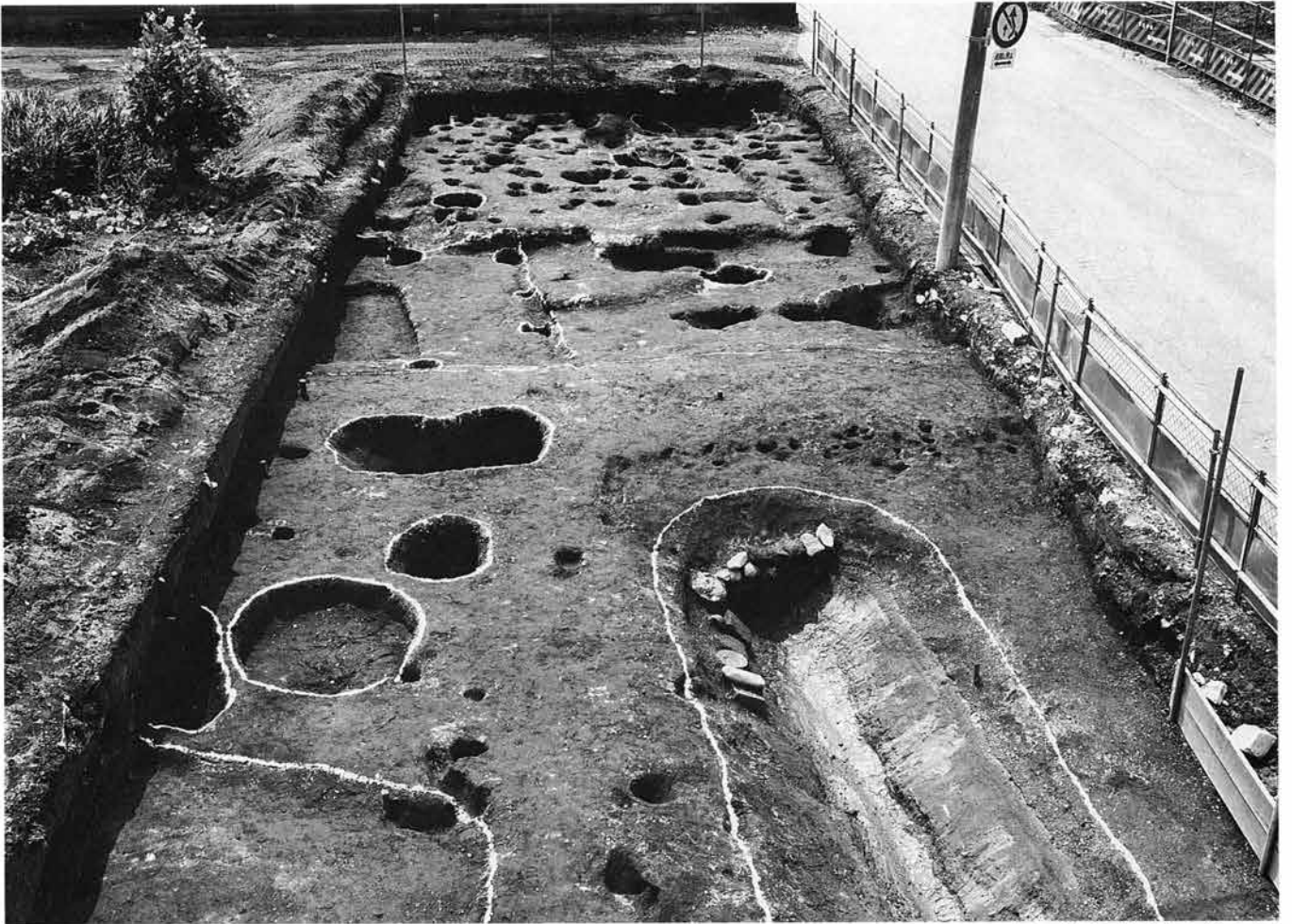
6. 33号井戸完掘状況 (東より)



7. 34号井戸完掘状況 (北より)



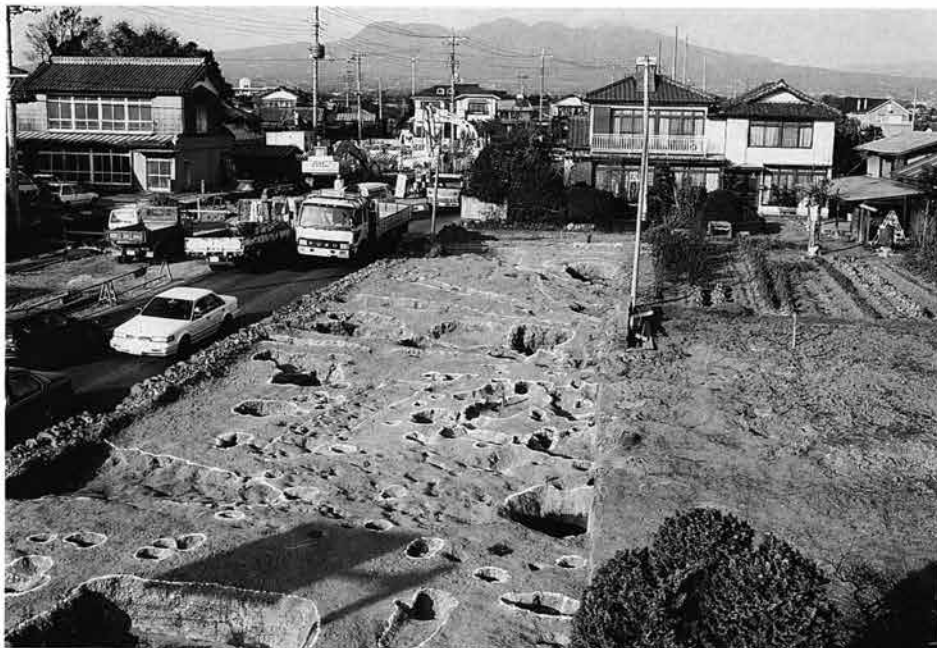
8. 35号井戸完掘状況 (北より)



1. 南東区北部完掘状況 (北より)



2. 南東区北部完掘状況 (南より)



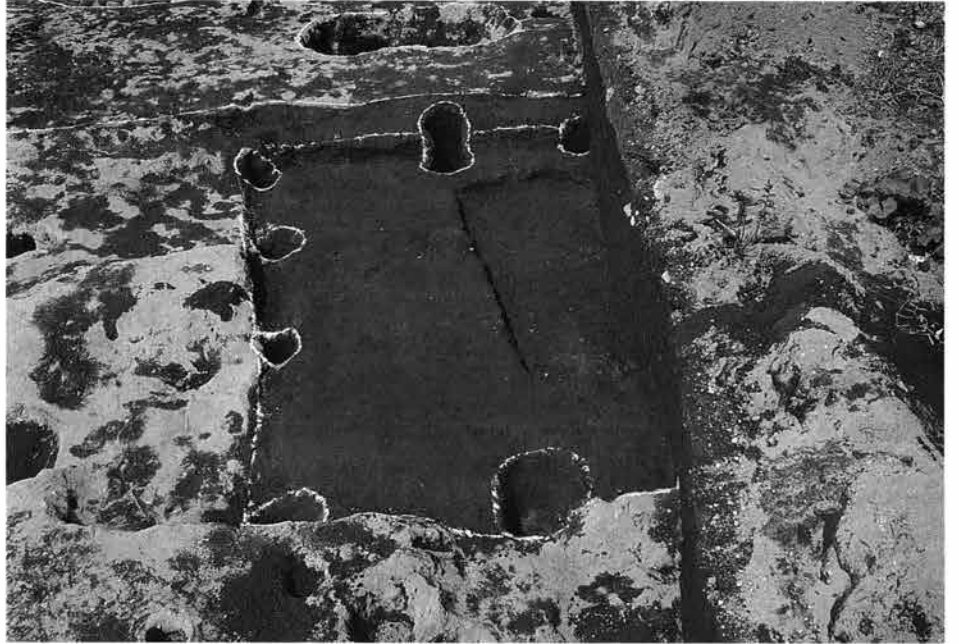
1. 南東区南部完掘状況 (南より)



2. 南東区南部完掘状況 (南東より)



3. 南東区南部完掘状況 (北西より)



1. 1号住居完掘状況 (南より)



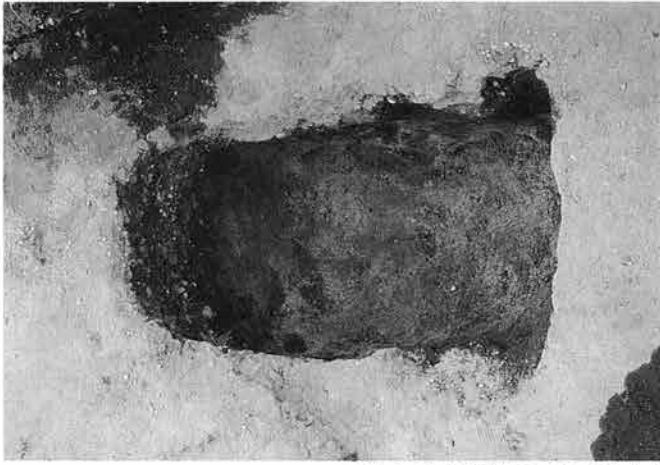
2. 1号住居柱復元状況 (南西より)



3. 1号住居7号ピット遺物出土状況



4. 2号住居完掘状況 (北より)



1. 2号土壙完掘状況 (北東より)



2. 4号土壙完掘状況 (南東より)



3. 56号土壙完掘状況 (東より)



4. 91号土壙遺物出土状況 (南東より)



5. A1-059・060G完掘状況 (東より)



6. A1-039・059G完掘状況 (東より)



7. 637号土壙他完掘状況 (東より)



8. 27号井戸完掘状況 (南より)



1. 28号井戸完掘状況 (南より)



2. 29号井戸完掘状況 (南より)



3. 30号井戸完掘状況 (西より)



4. 42号井戸完掘状況 (南西より)



5. 43号井戸完掘状況 (西より)



6. 43号井戸完掘状況 (南西より)



7. 44号井戸完掘状況 (西より)



8. 45号井戸他完掘状況 (南より)



1. 15号溝石製品石垣状遺構検出状況
(北より)



2. 15号溝石製品石垣状遺構検出状況
(北東より)



3. 15号溝石製品石垣状遺構検出状況
(北西より)



4. 15号溝セクション (南より)



1. 49-54号溝完掘状況 (南西より)



2. 51・52・54号溝、630号土塙他完掘状況 (南西より)



1. 51・52号溝、627・630号土壙他完掘状況 (東より)



2. 47・48号溝完掘状況 (南より)



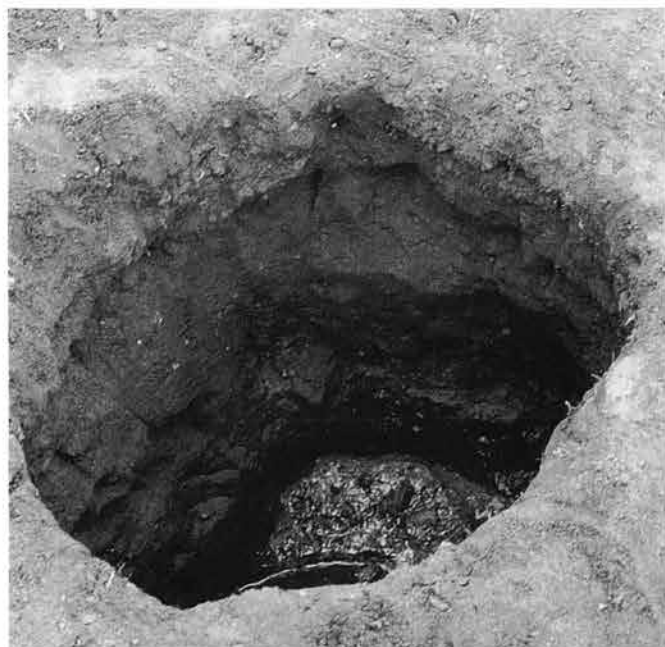
3. 49・50・54号溝、43号井戸完掘状況 (南西より)



1. 36号井戸完掘状況



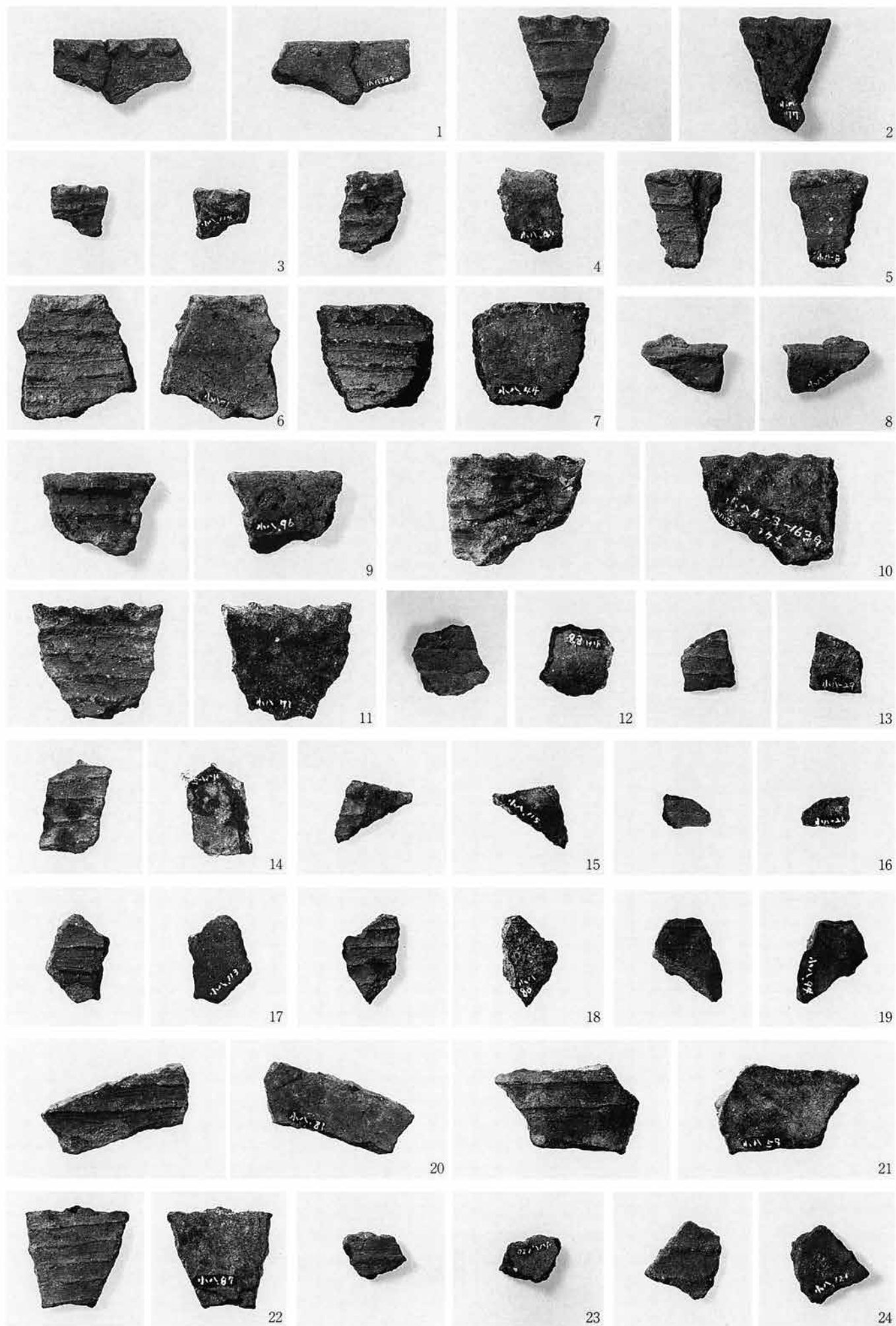
2. 37号井戸完掘状況

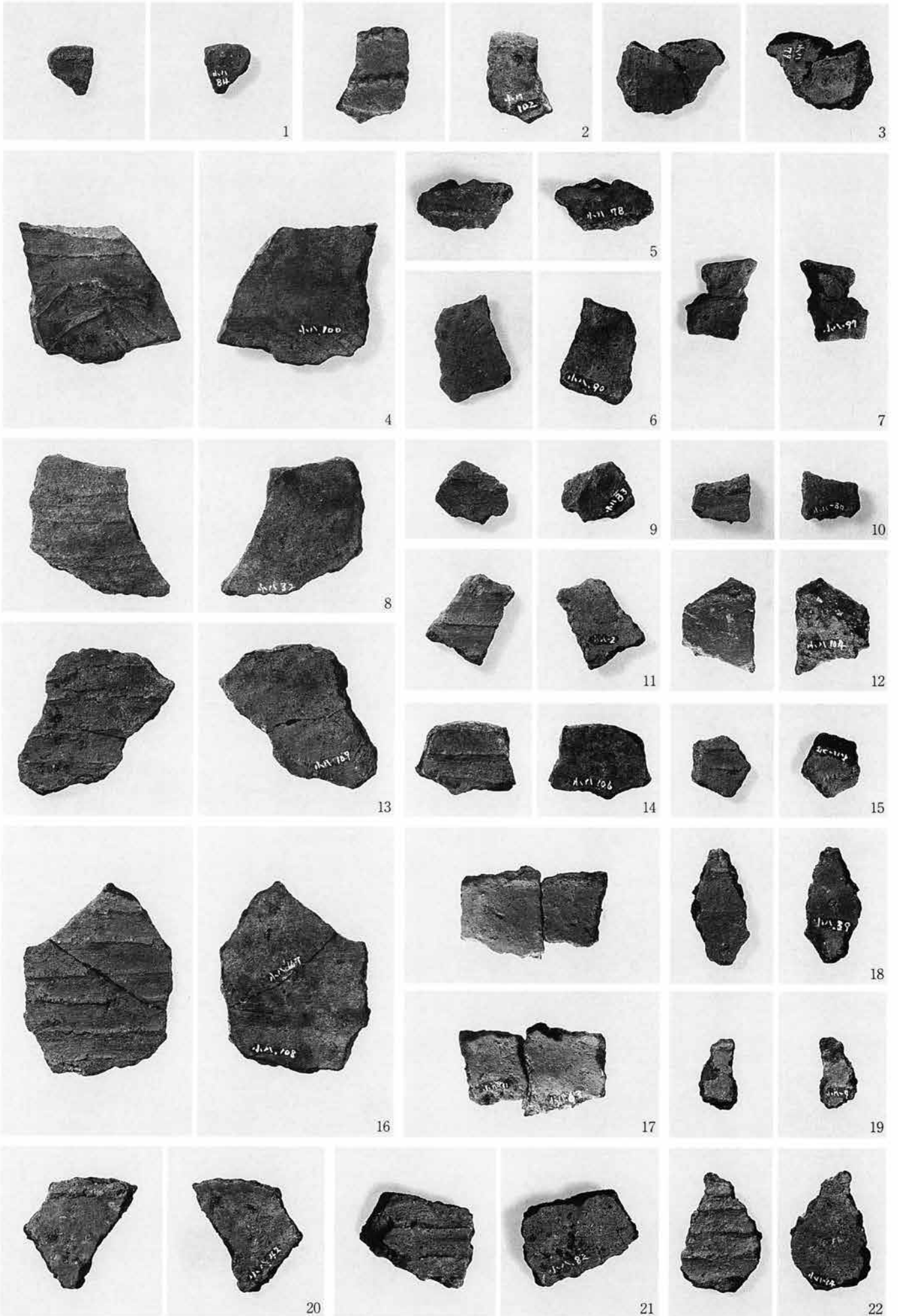


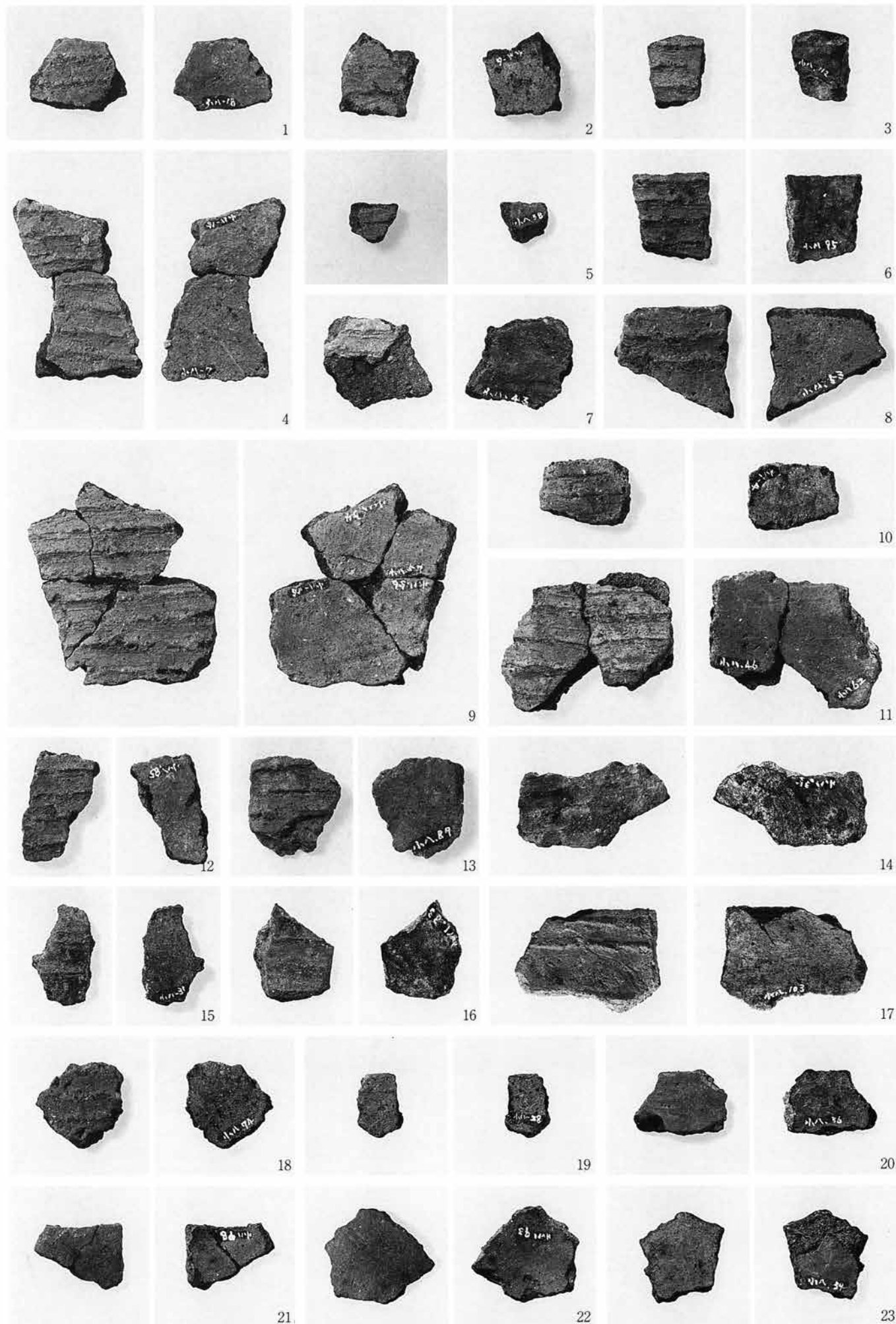
3. 38号井戸完掘状況

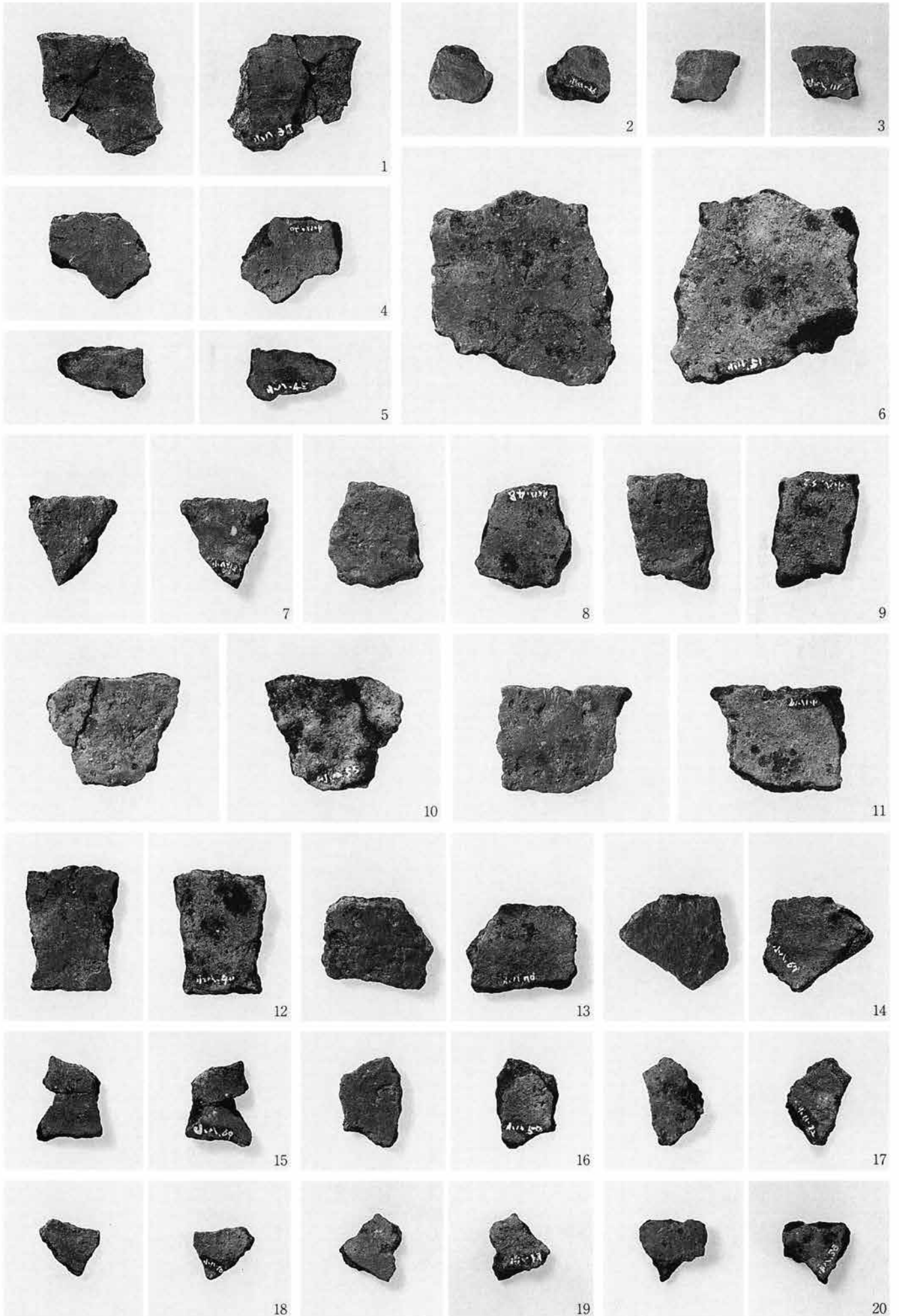


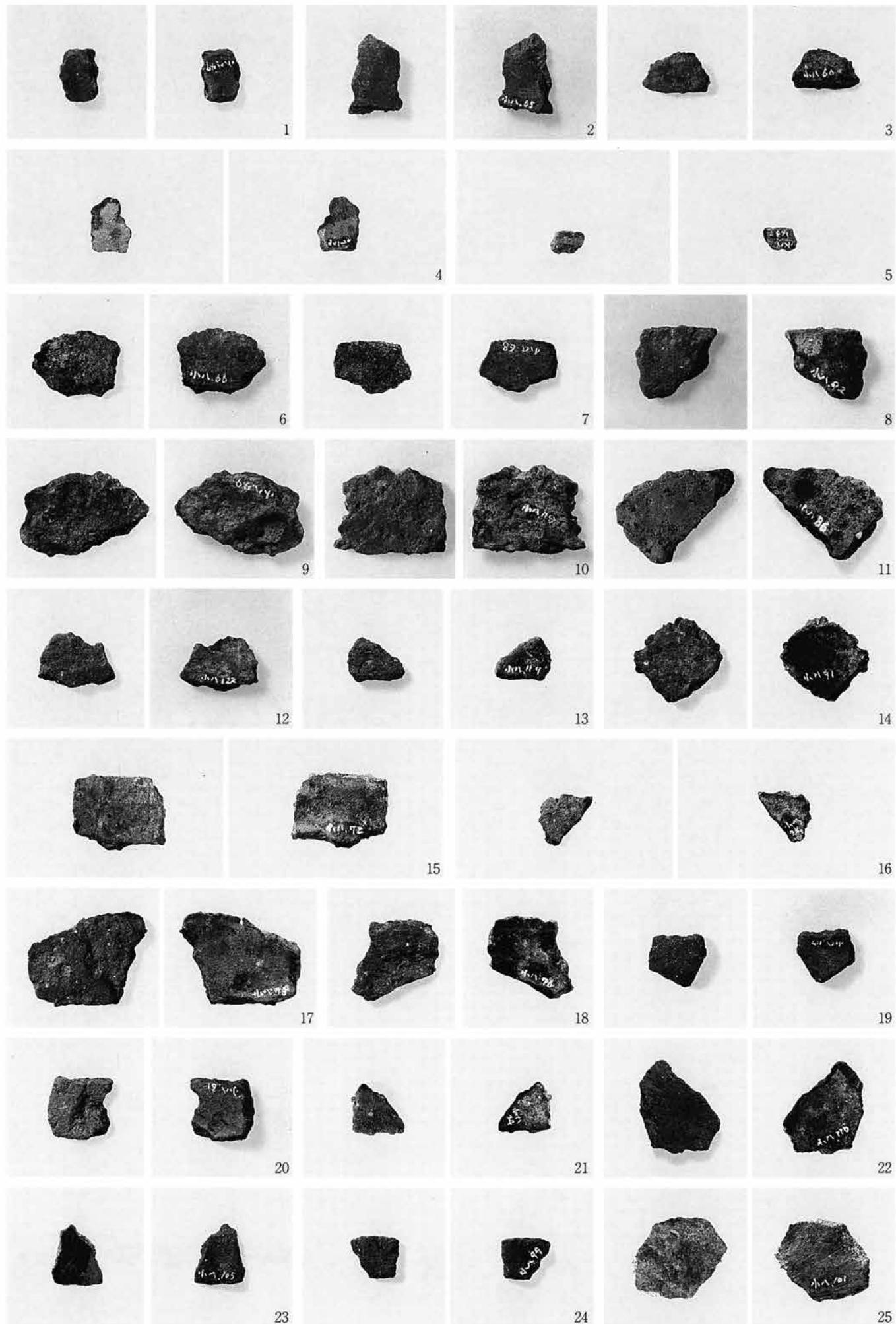
4. 41号井戸完掘状況

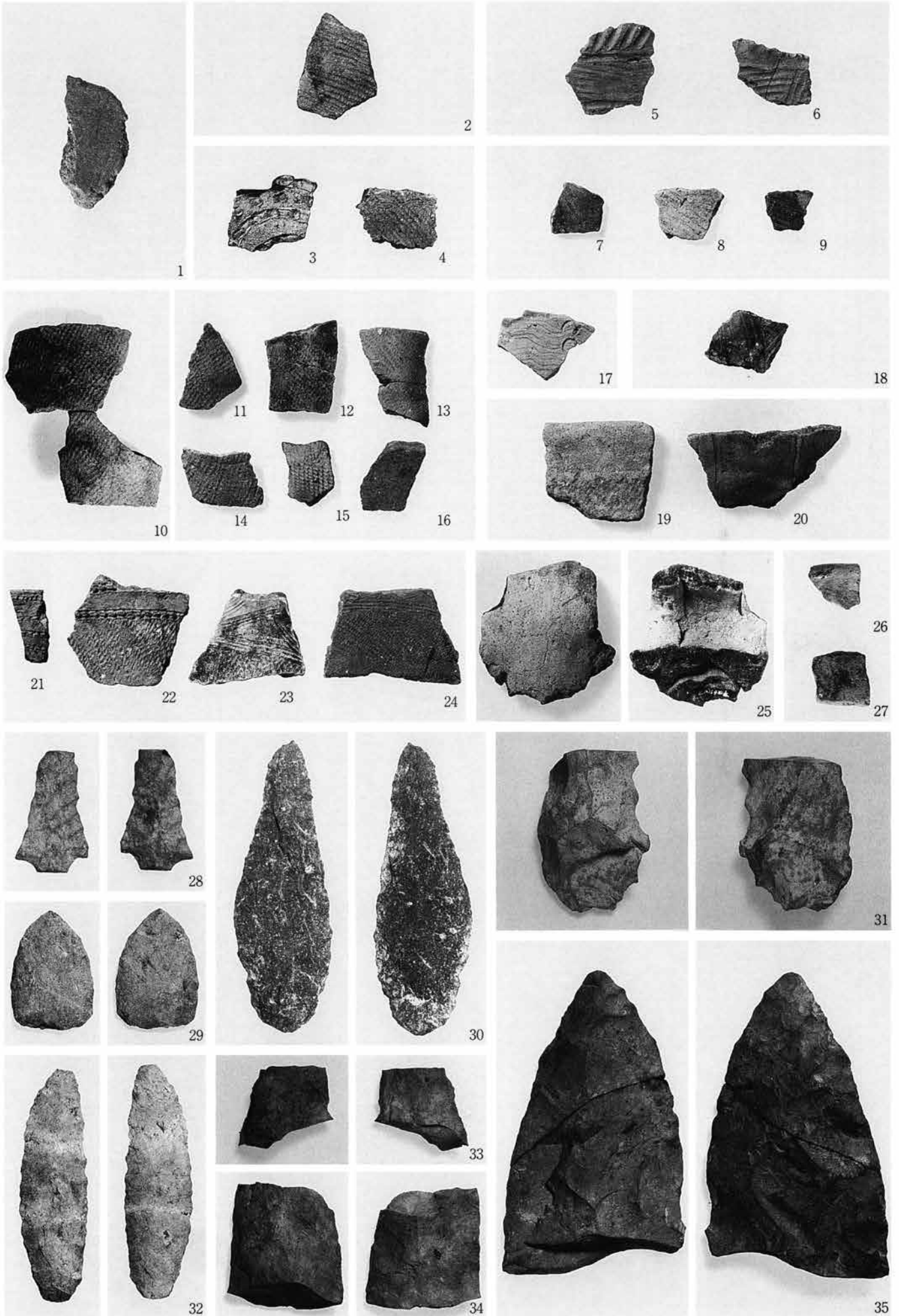


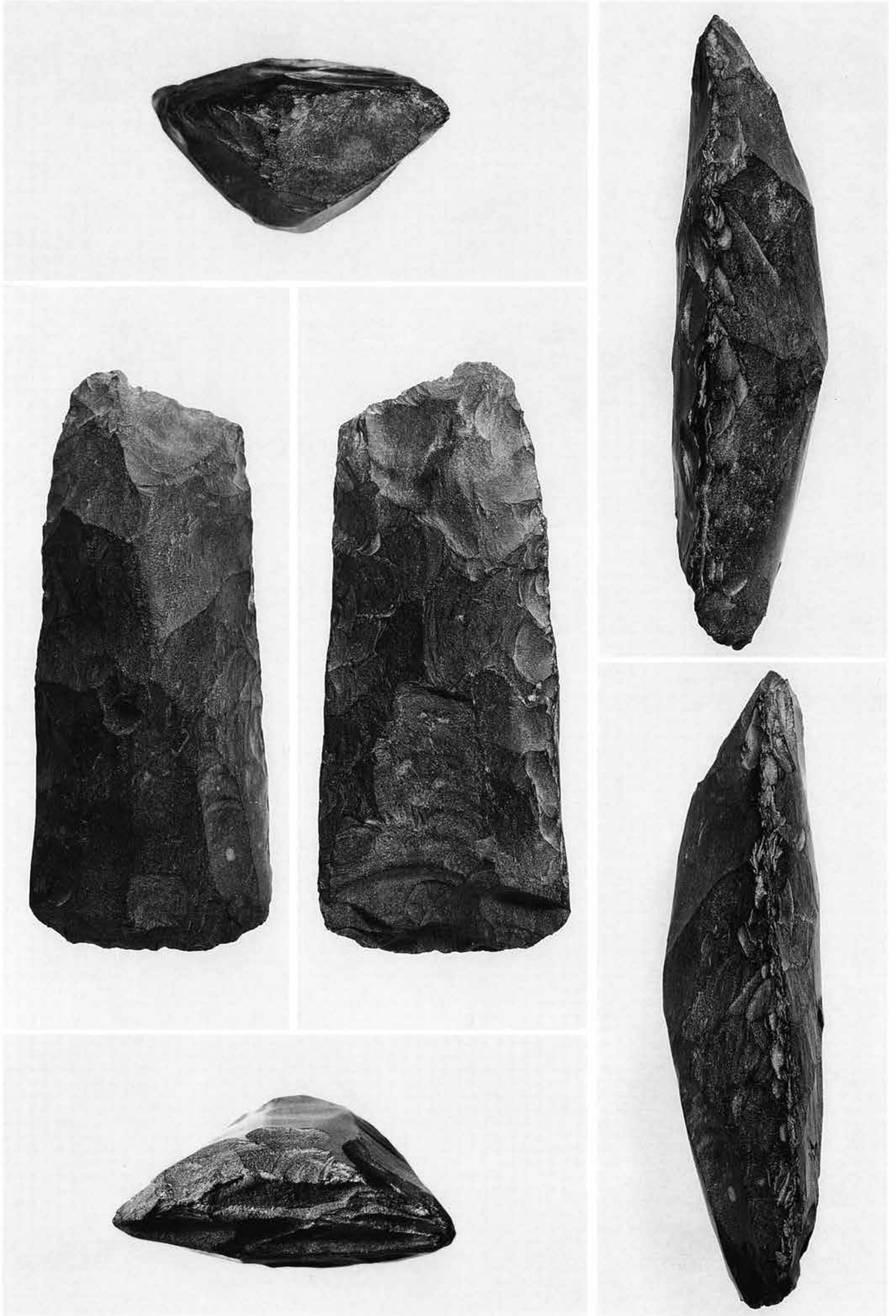


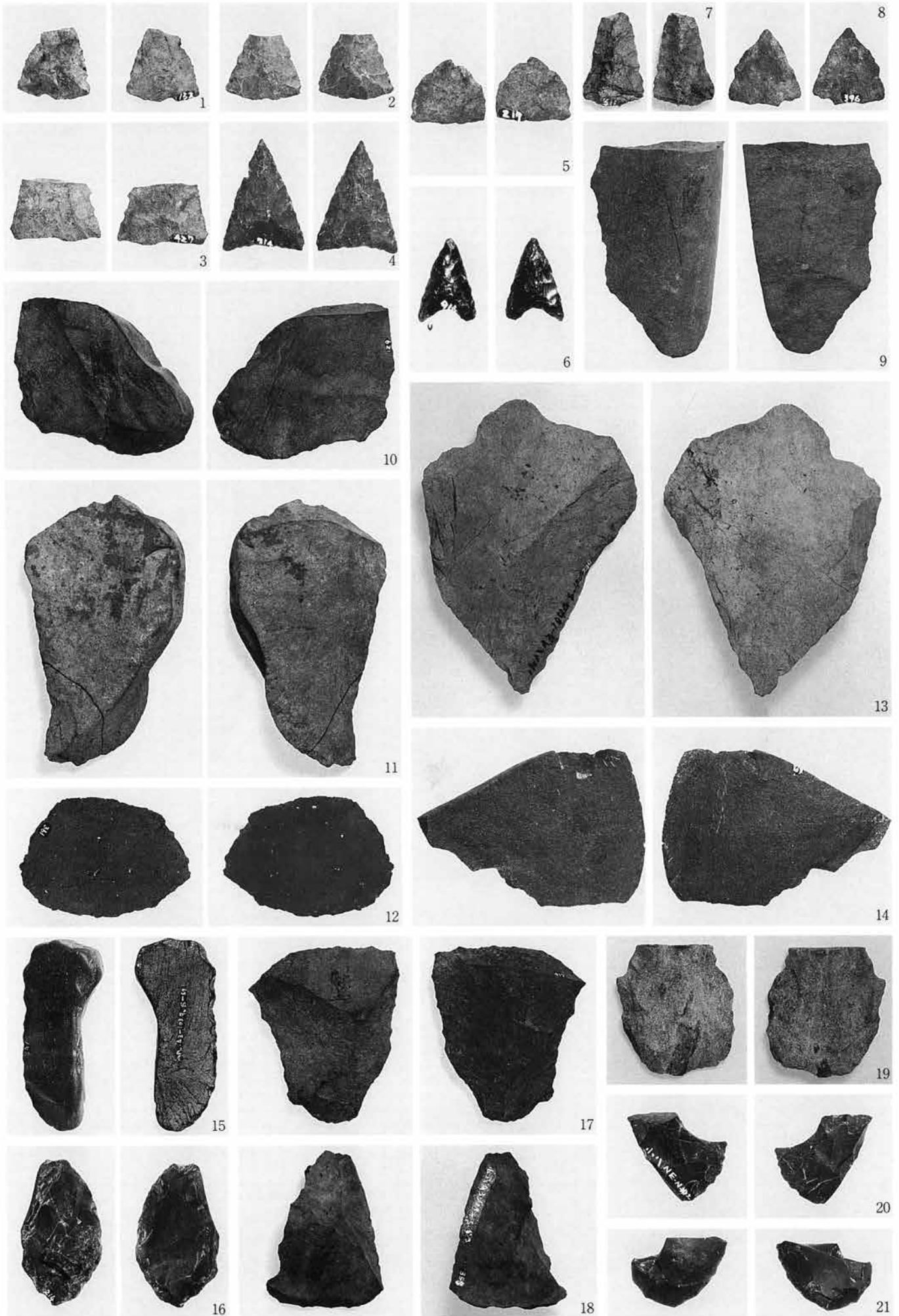


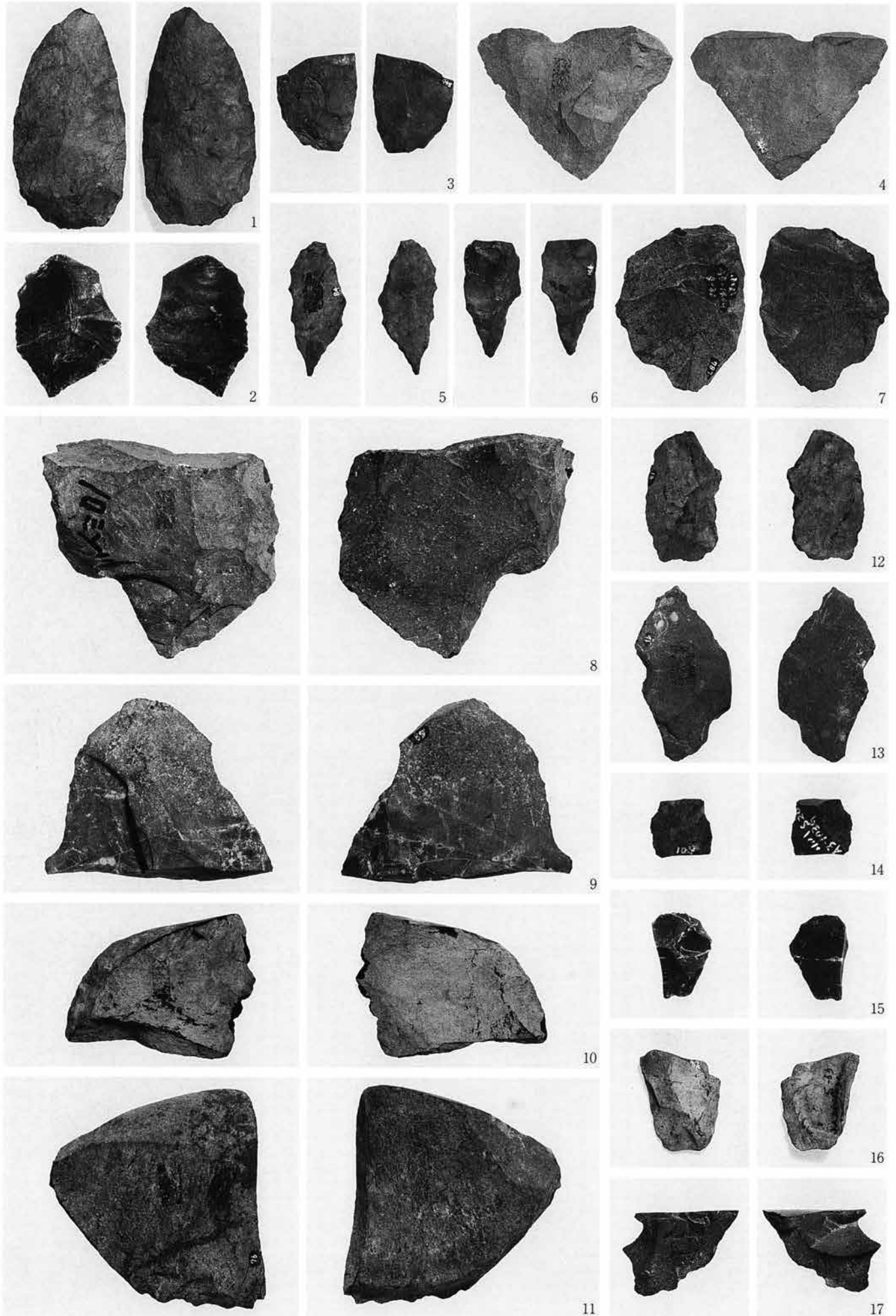


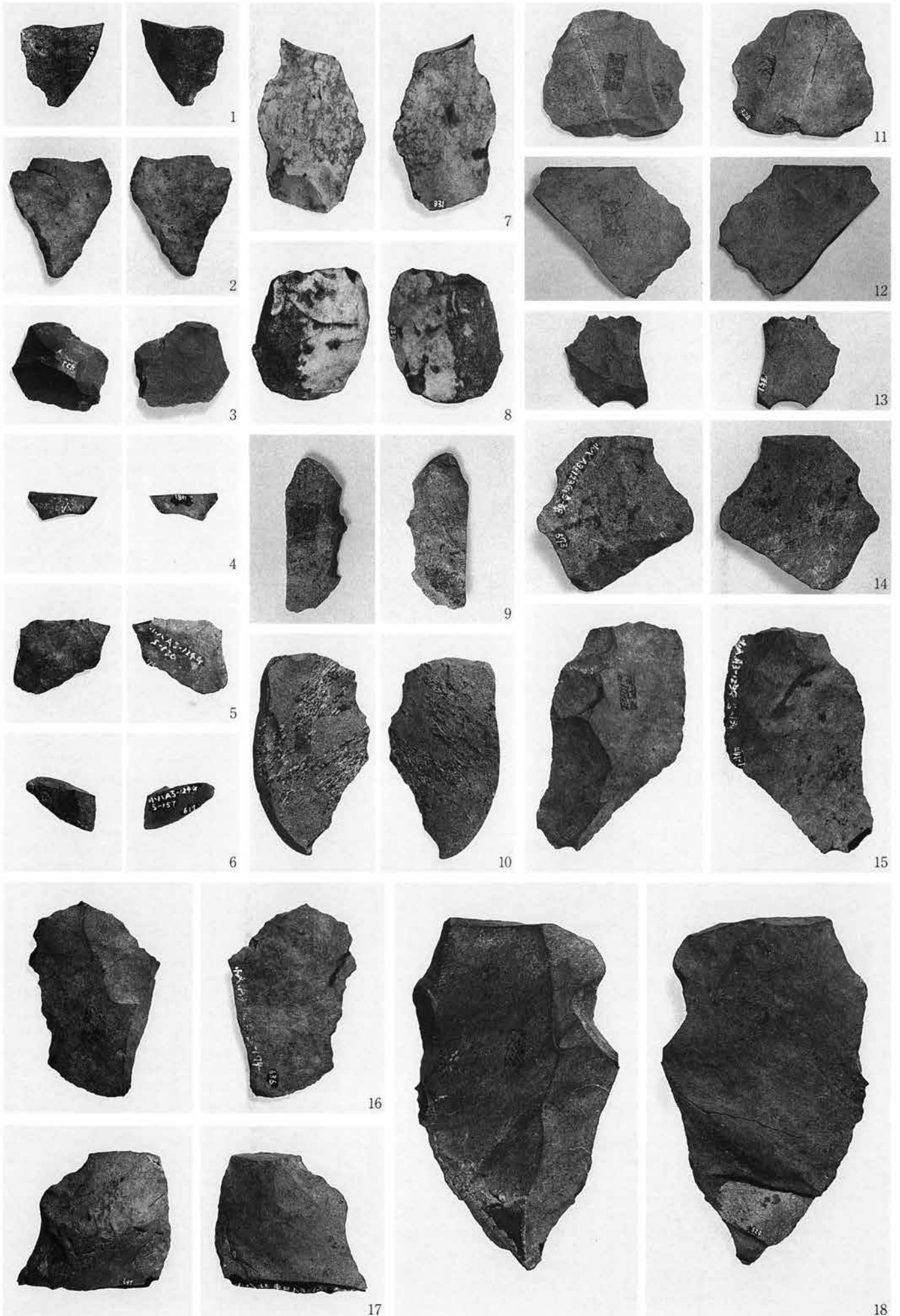


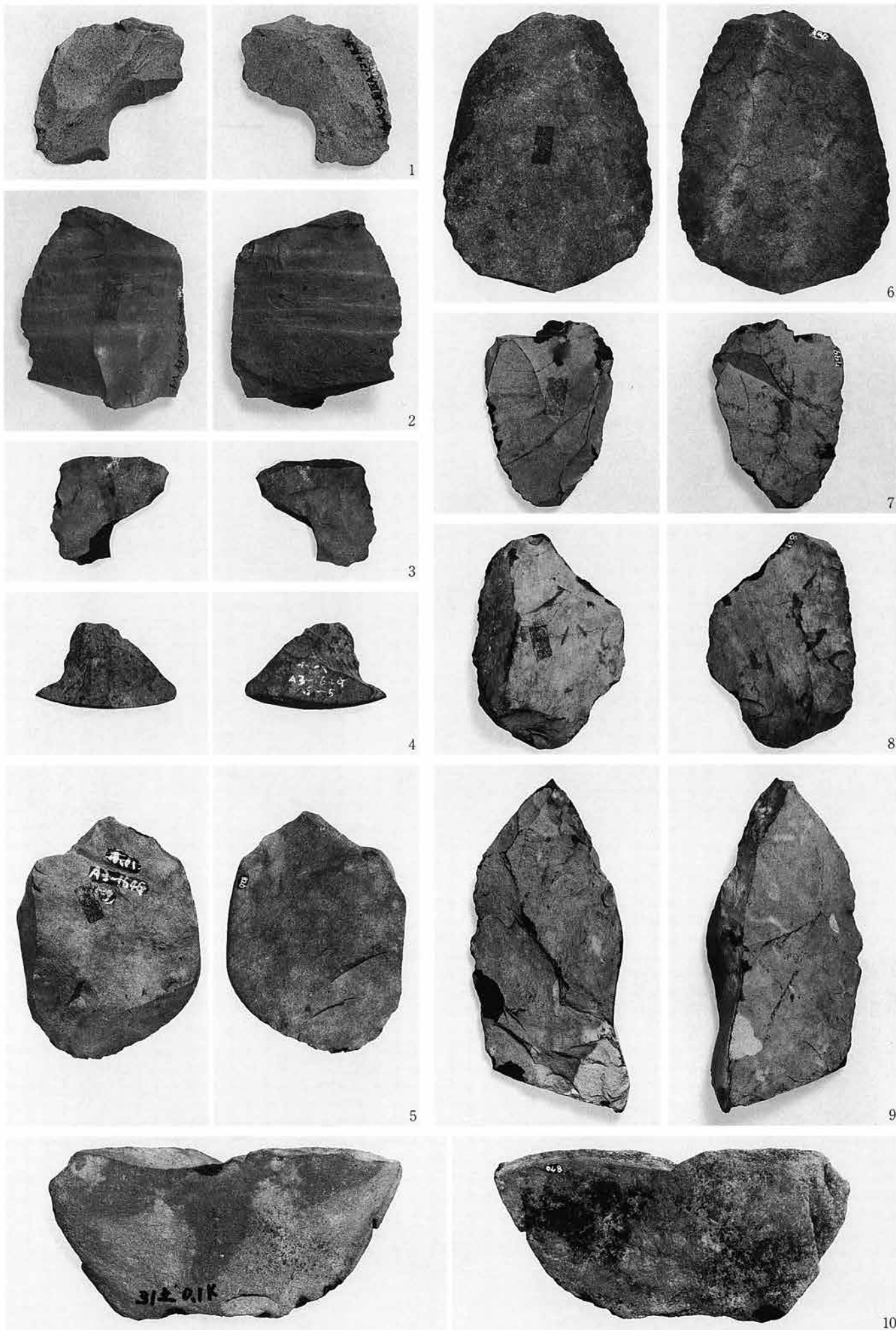


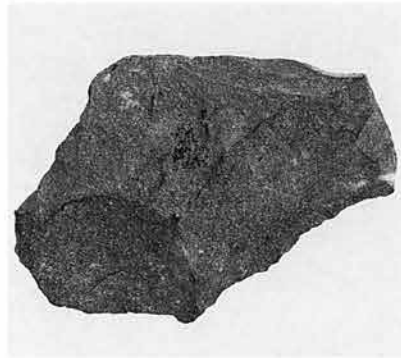




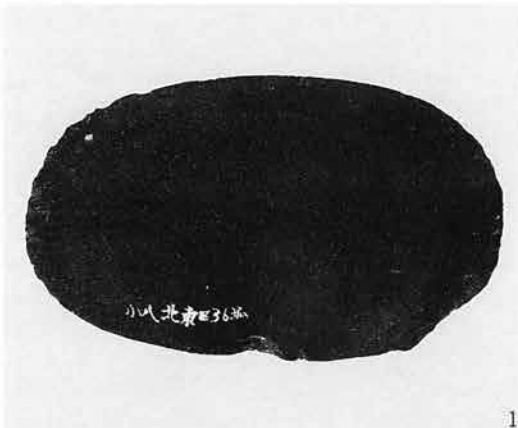








2



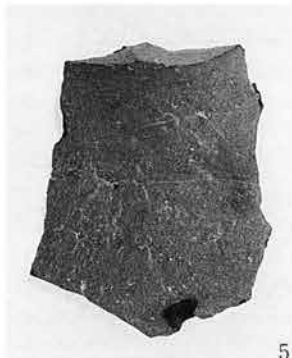
1



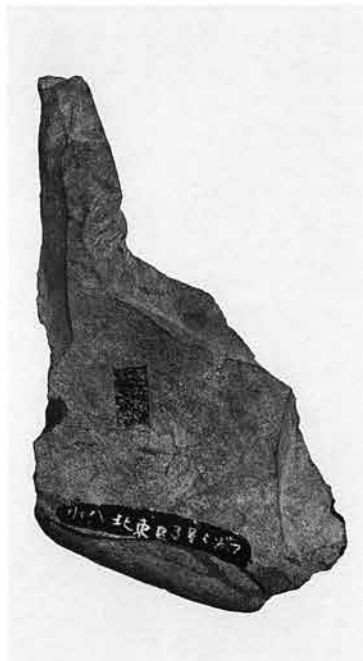
3



4



5



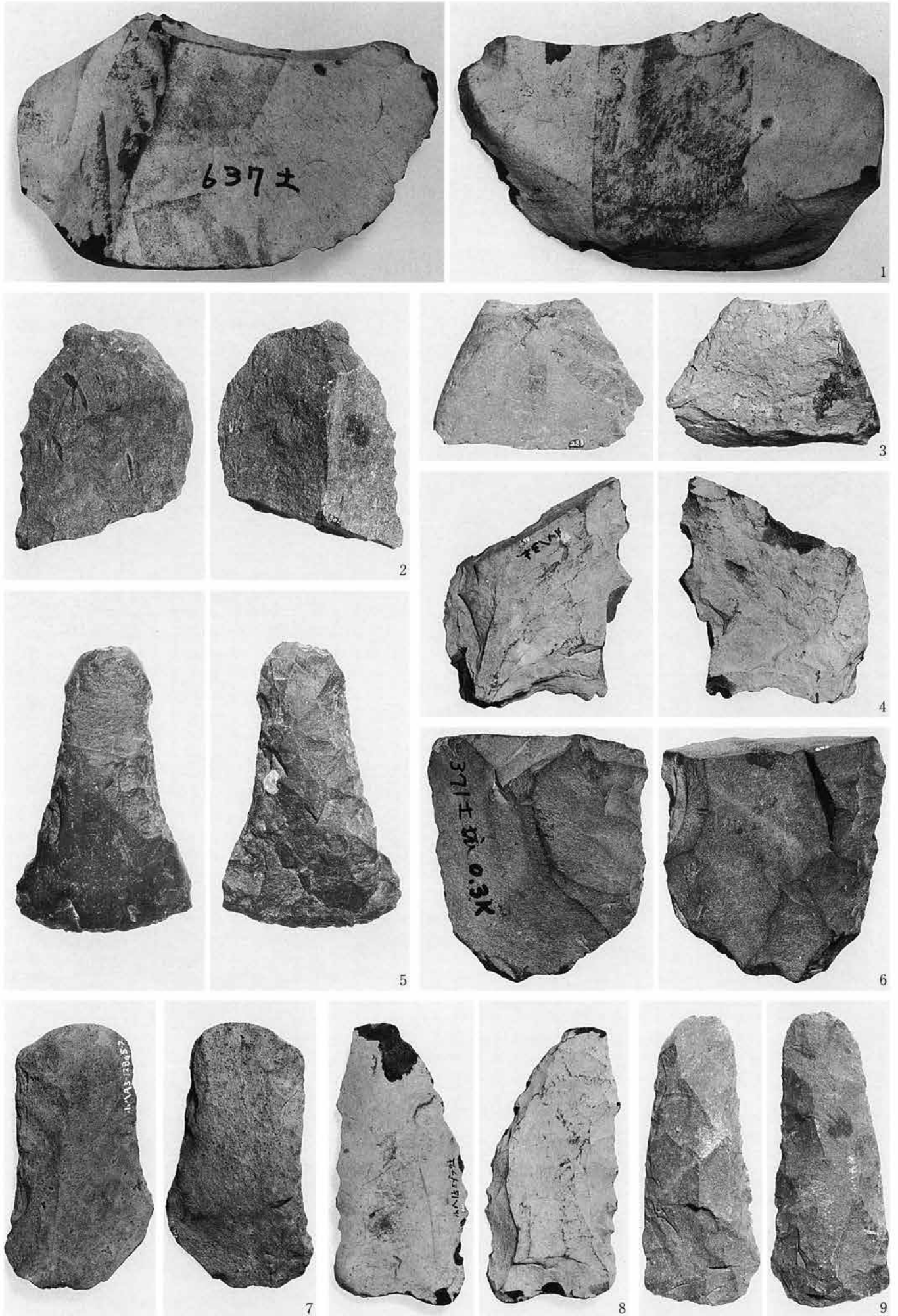
6

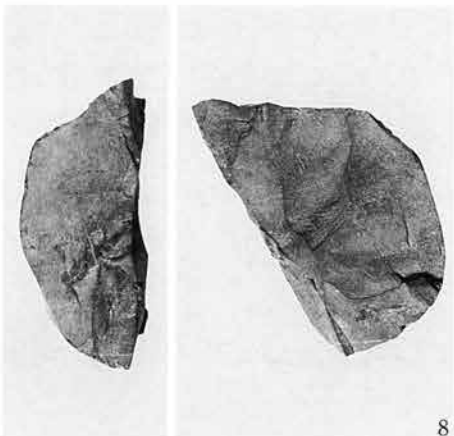
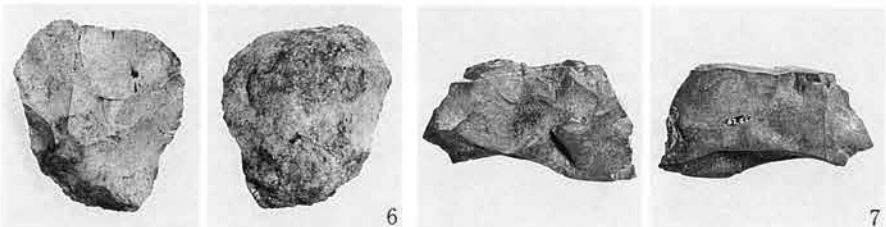
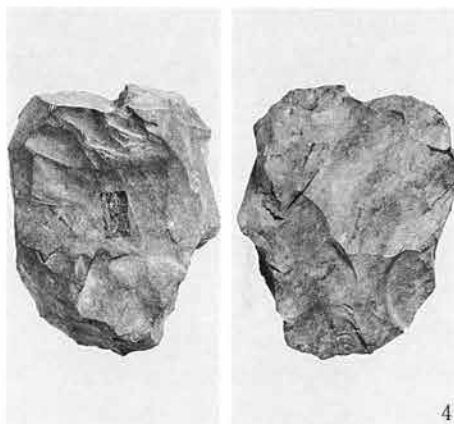
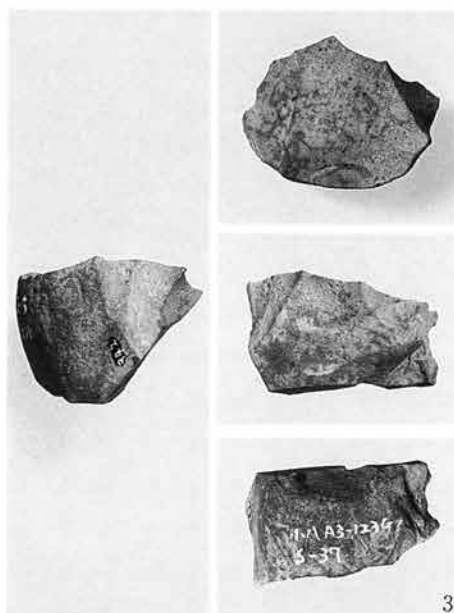
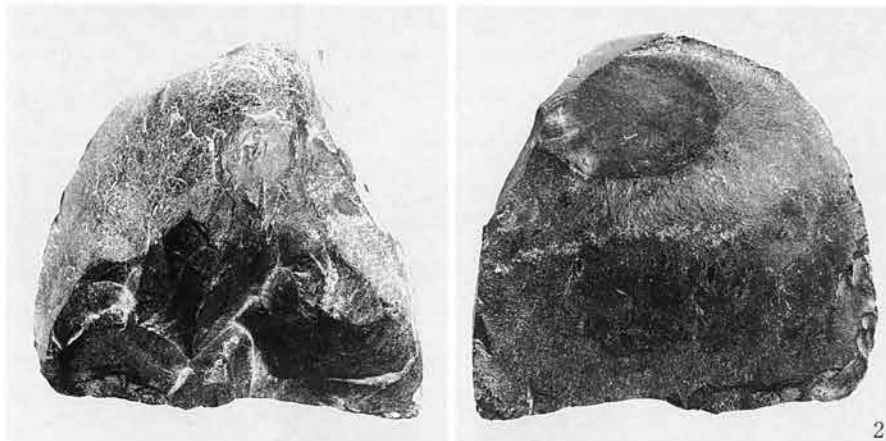
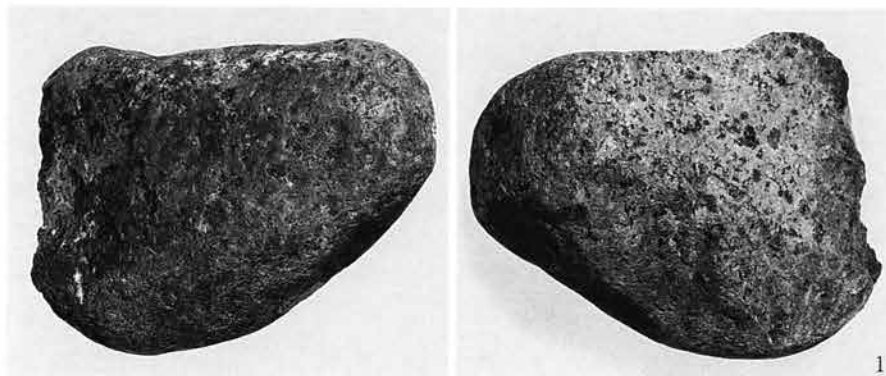


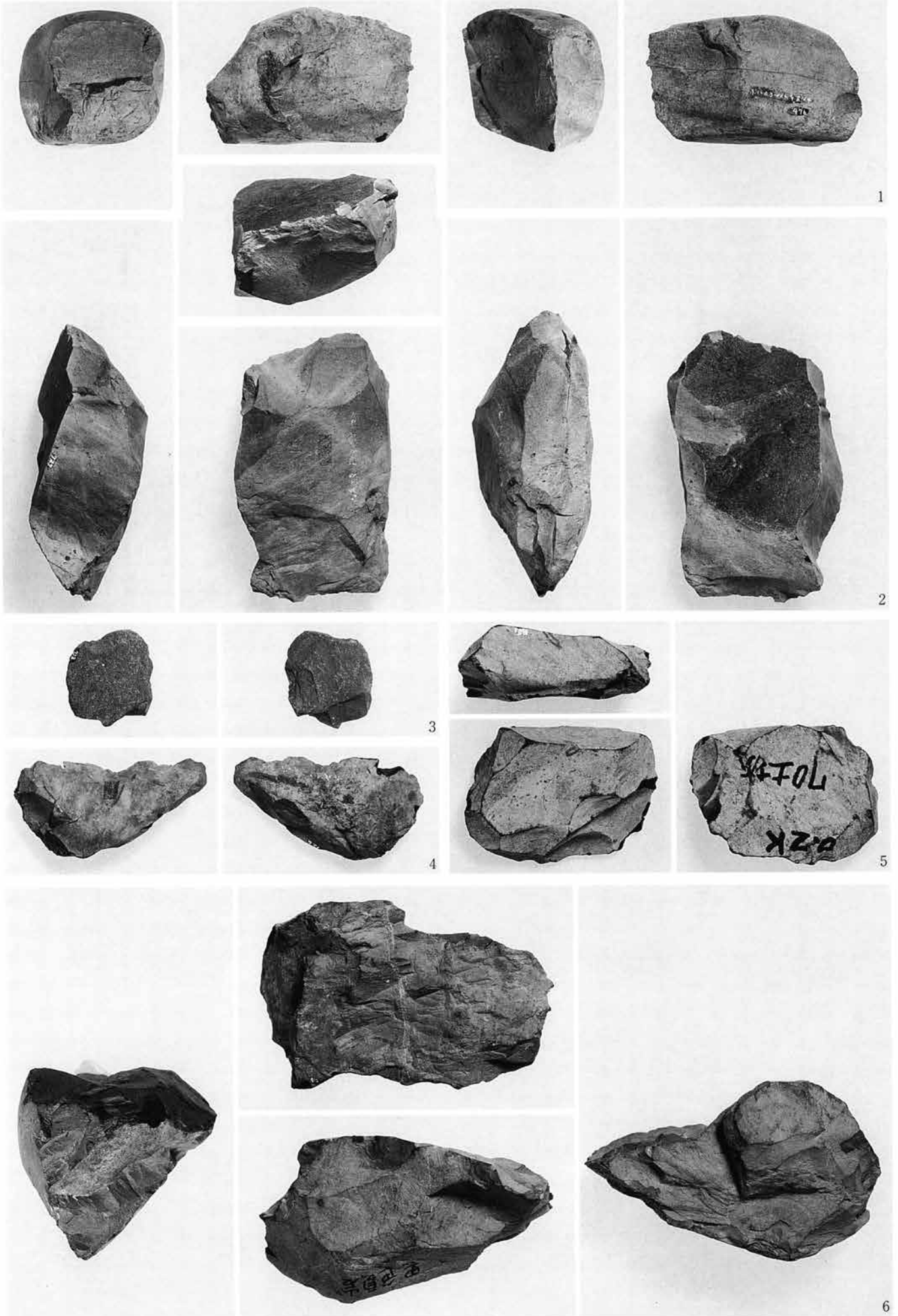
7

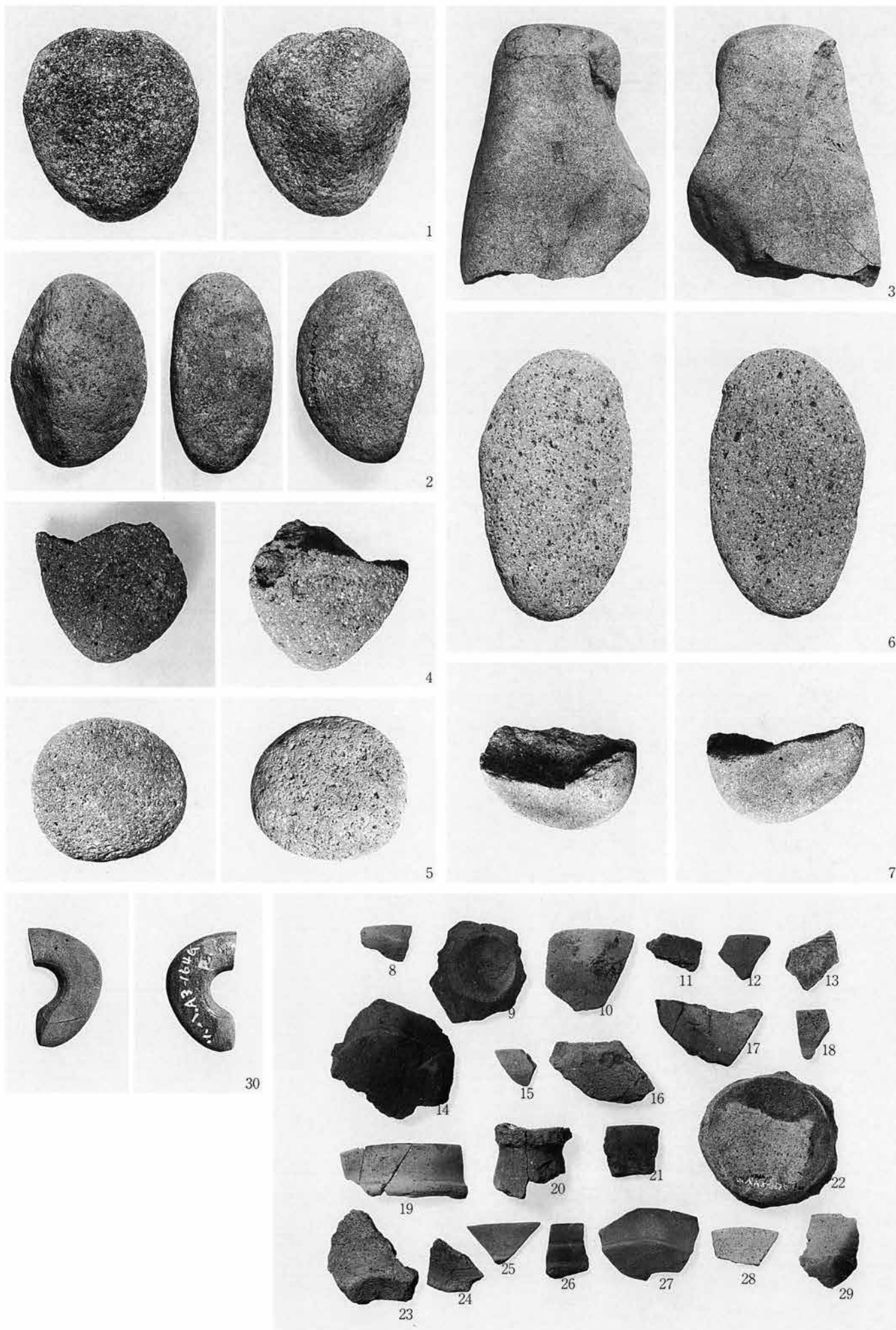


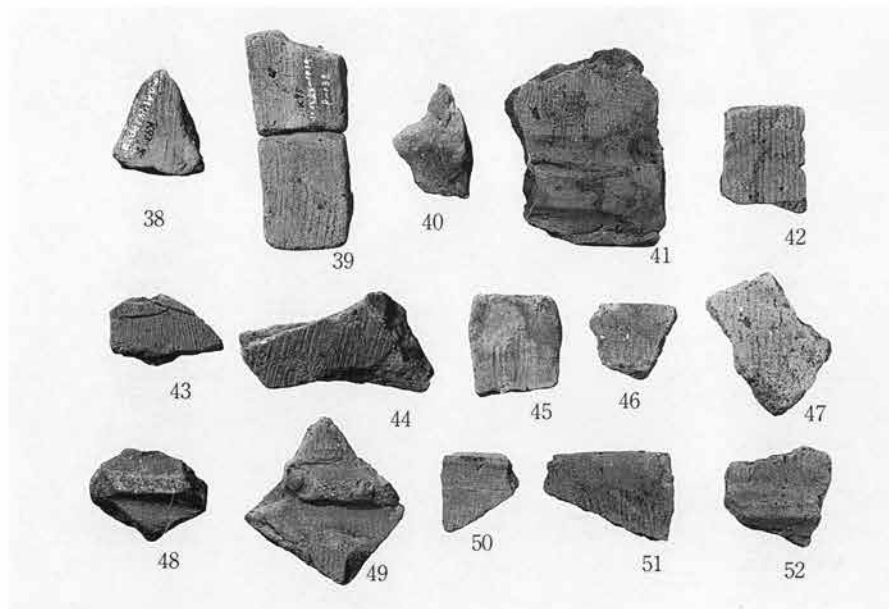
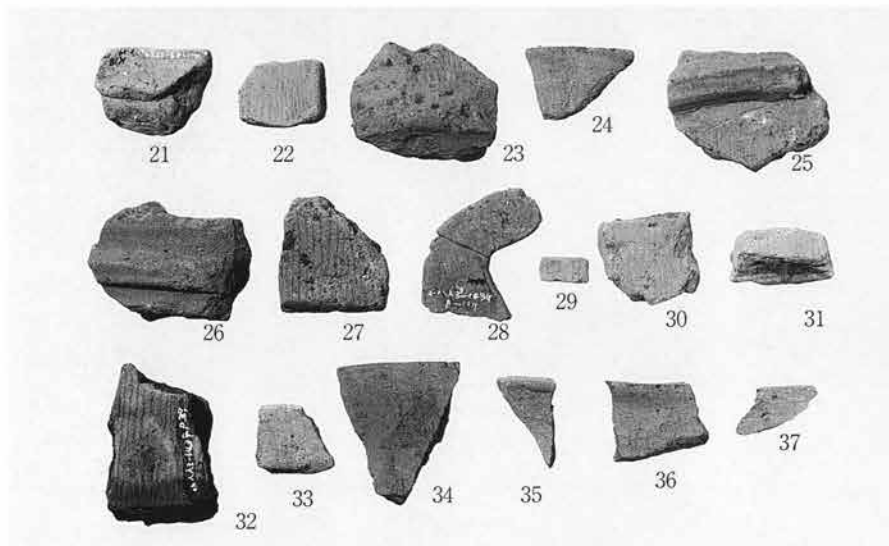
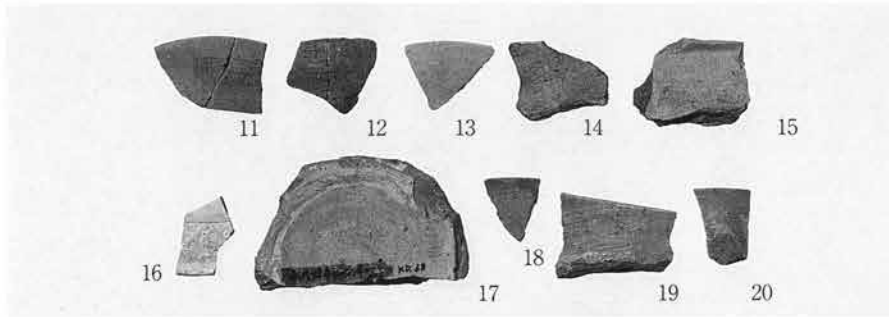
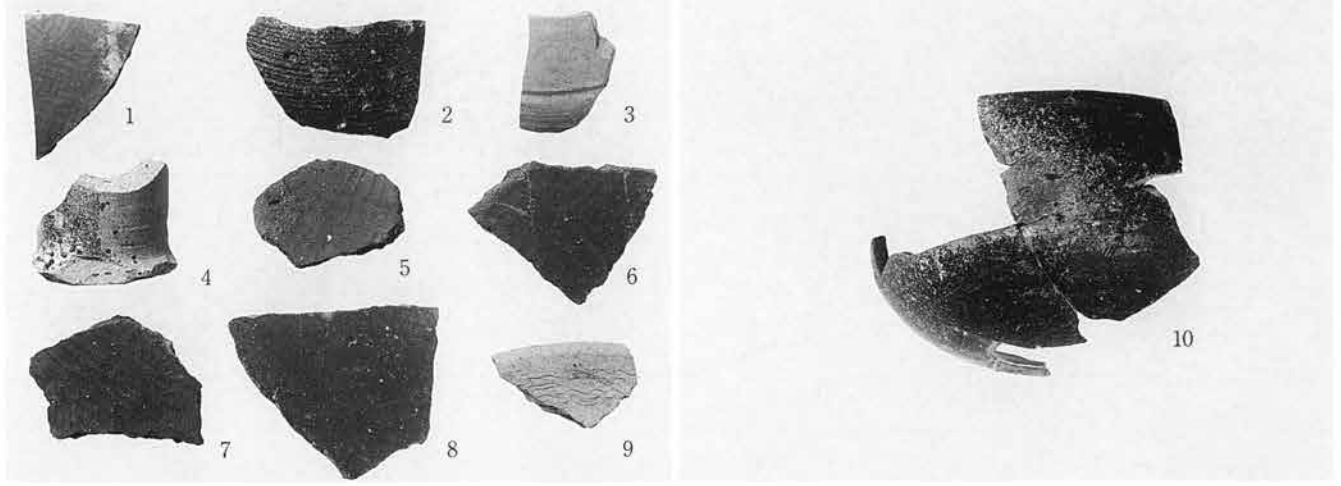
8

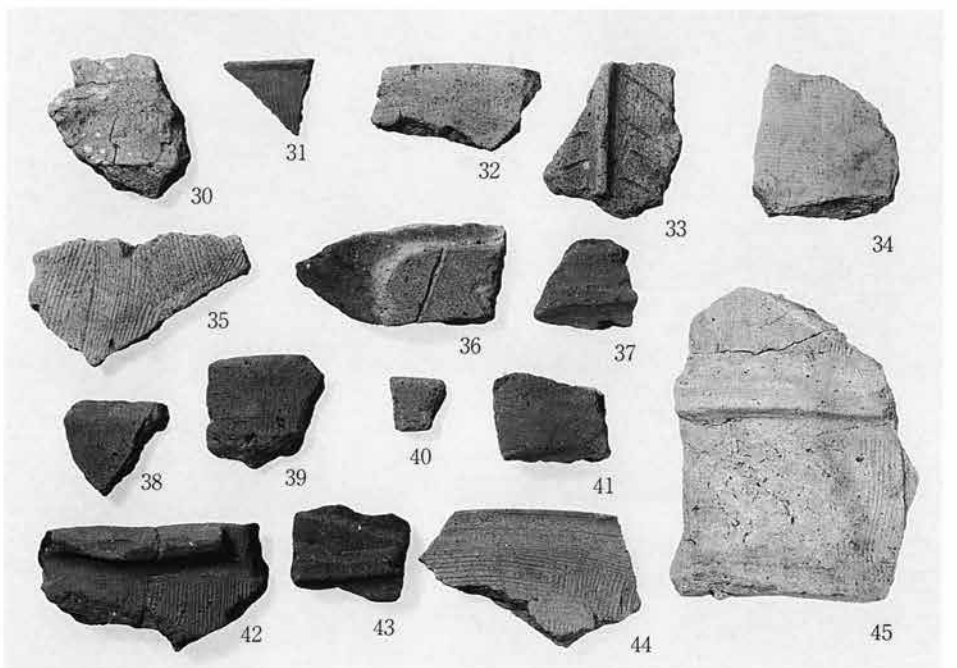
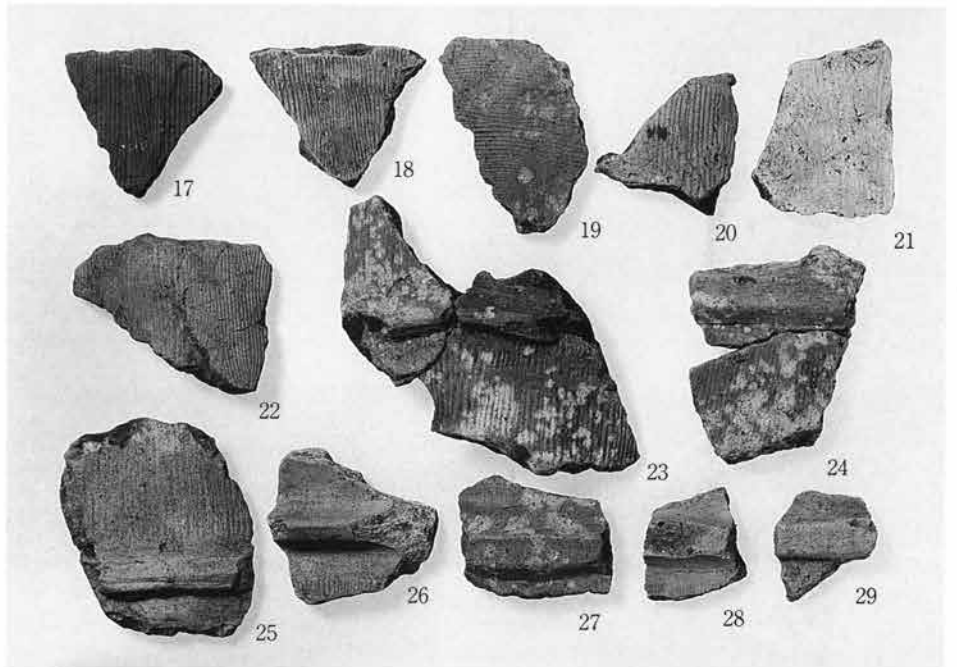
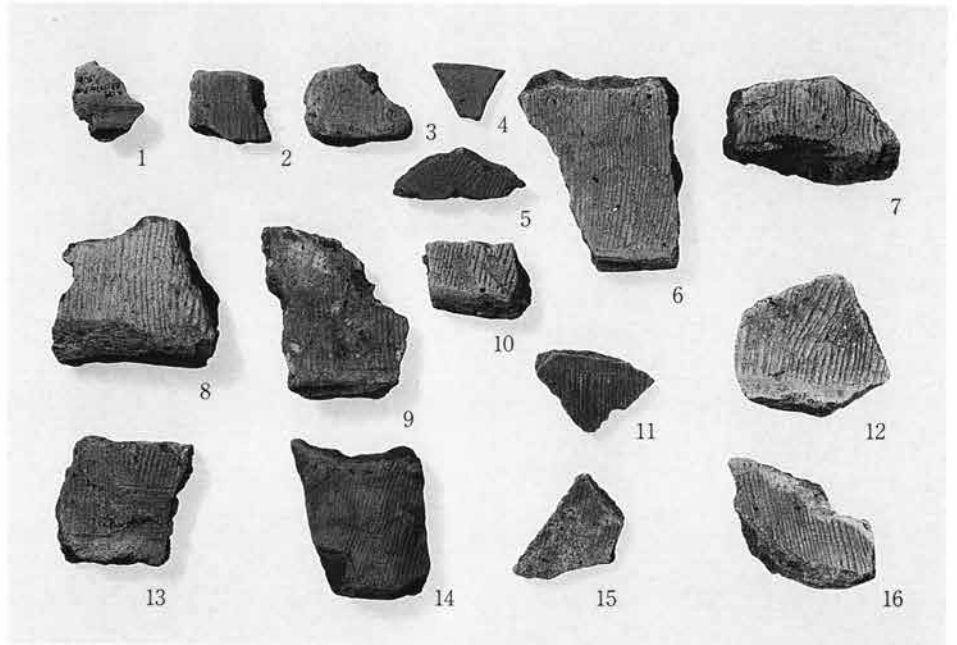


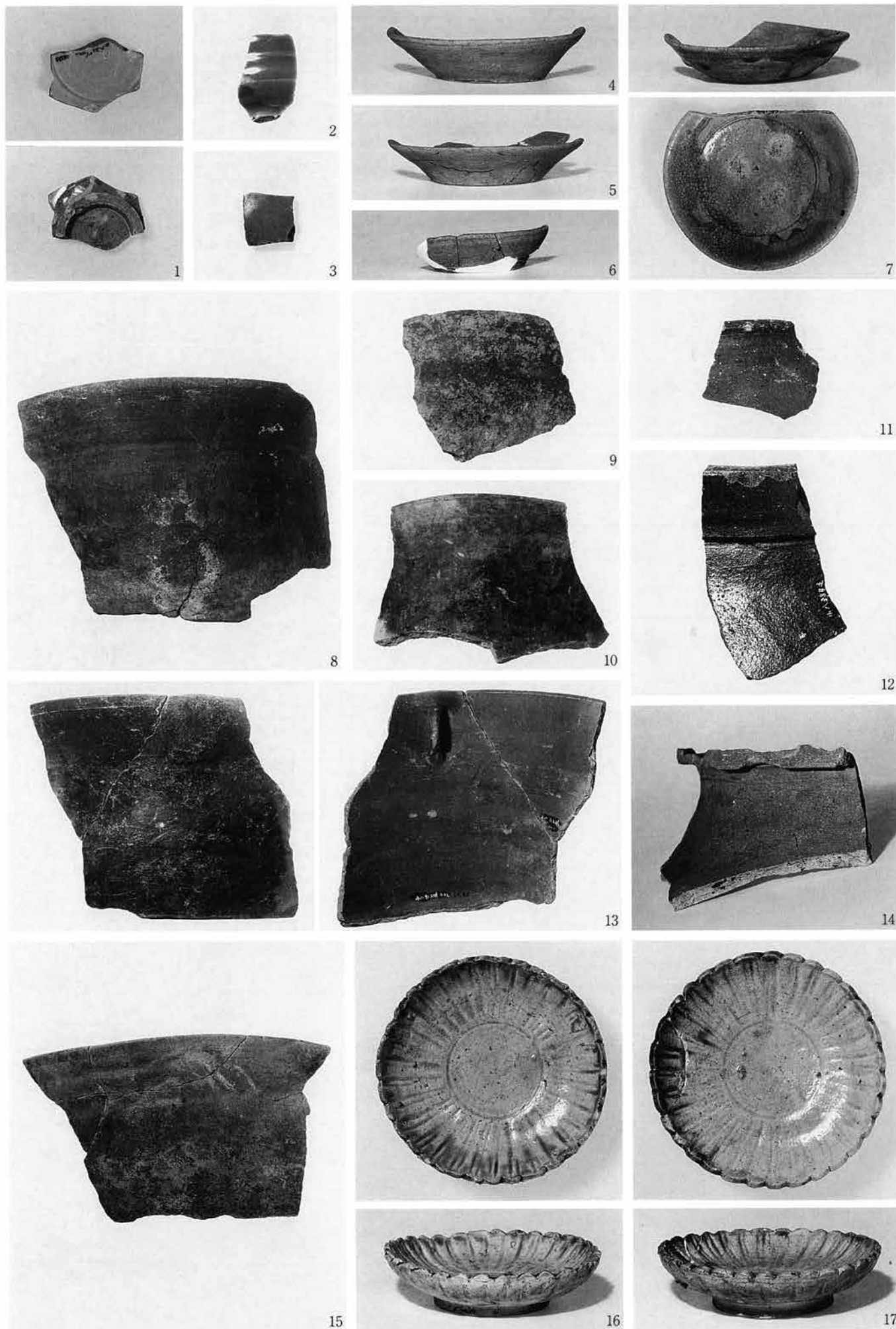


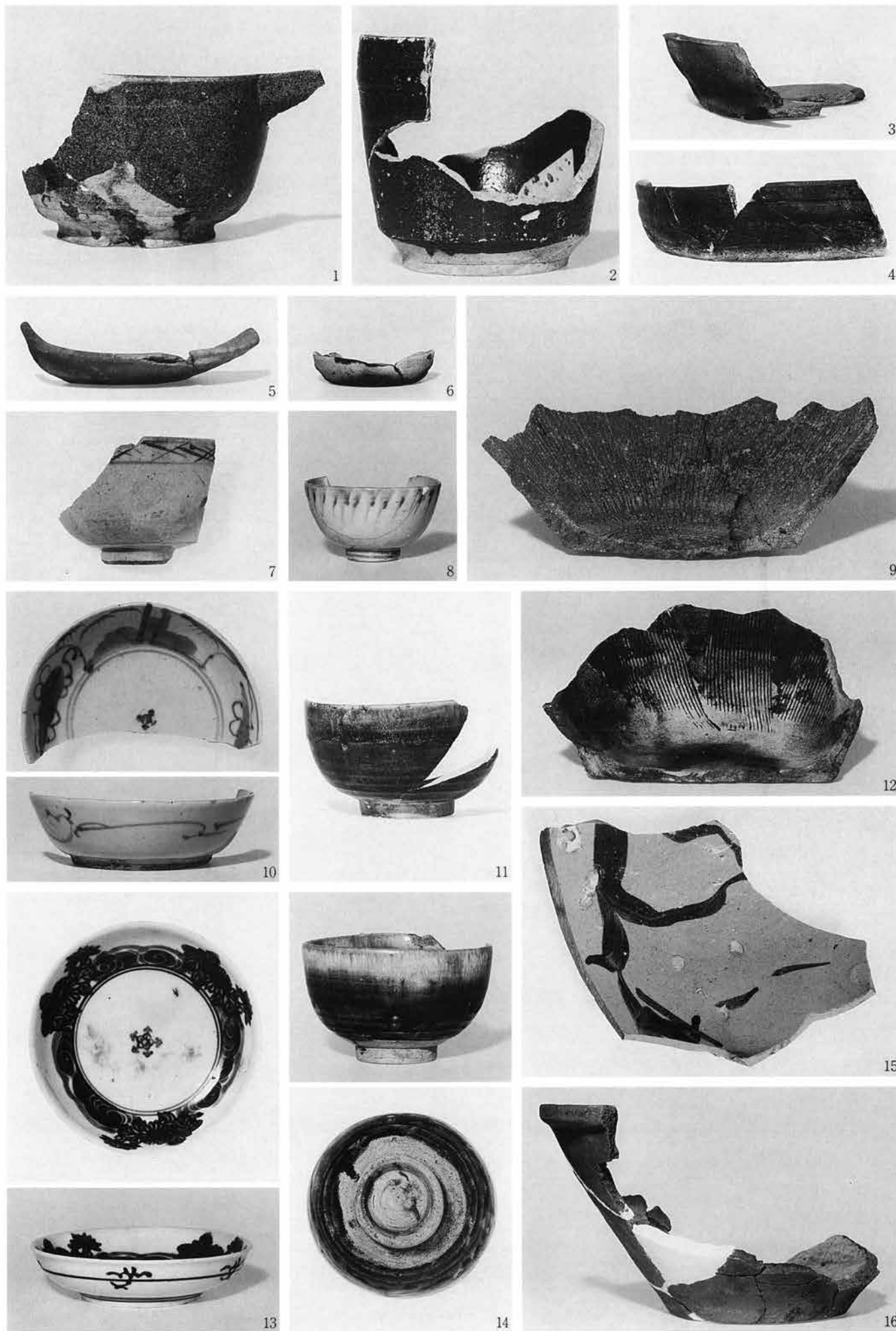


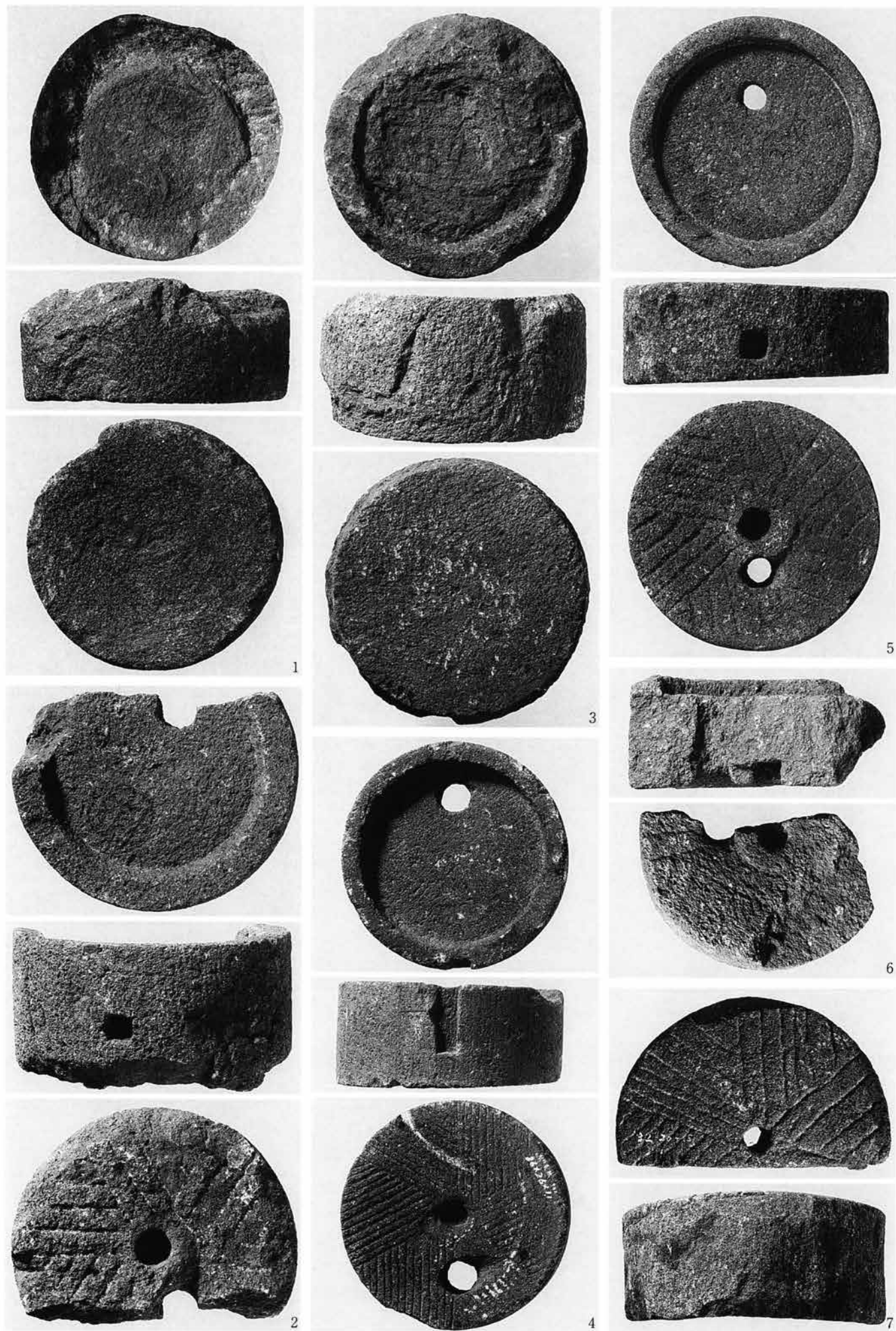


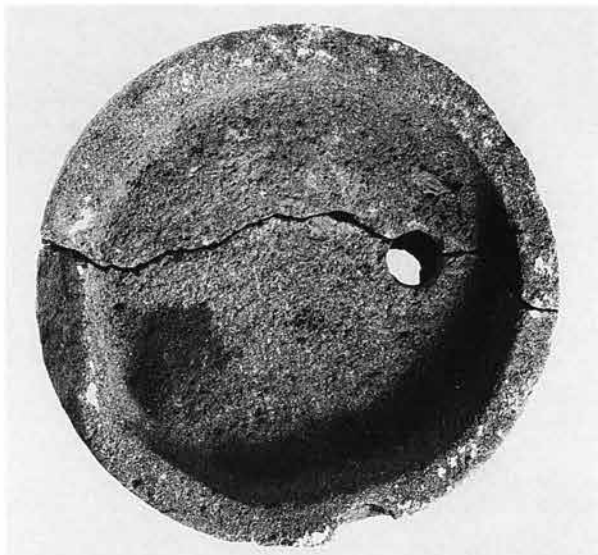
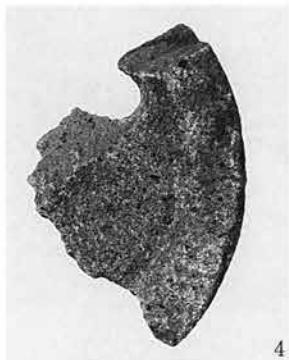












1

4

5

6

7

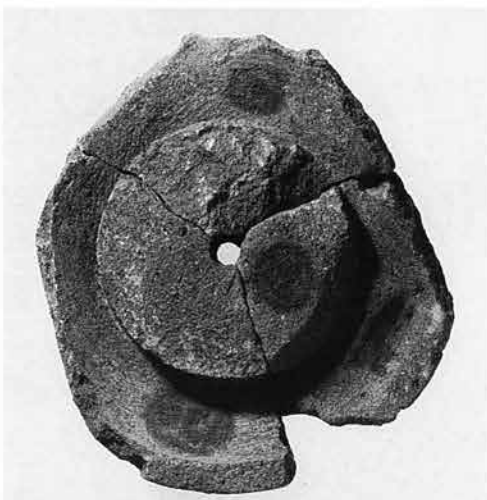
8

2

3

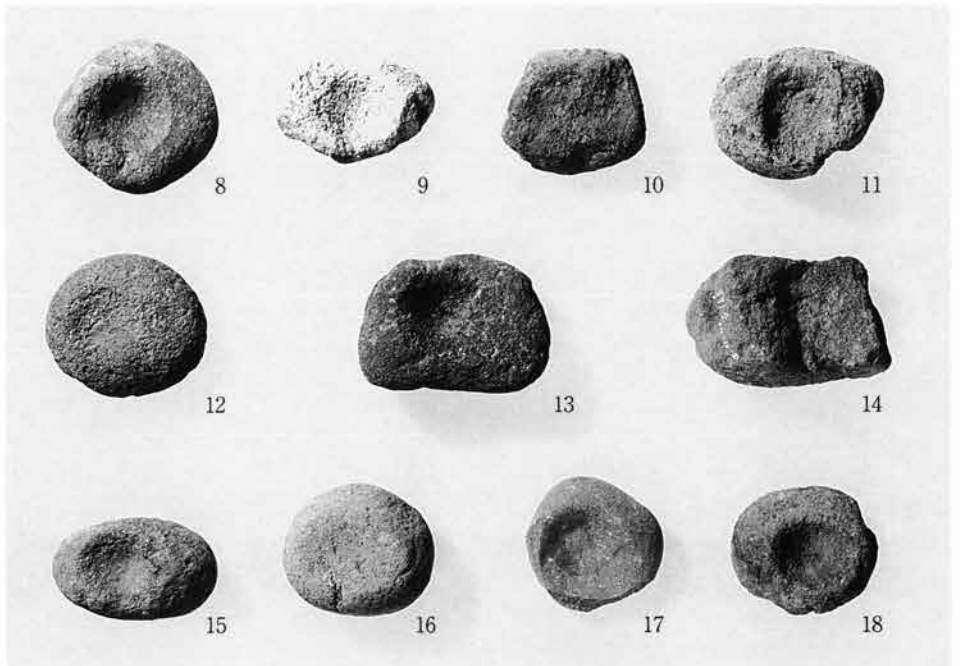
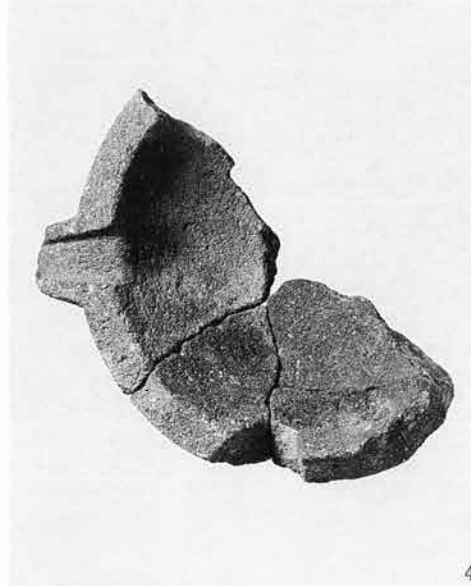
9

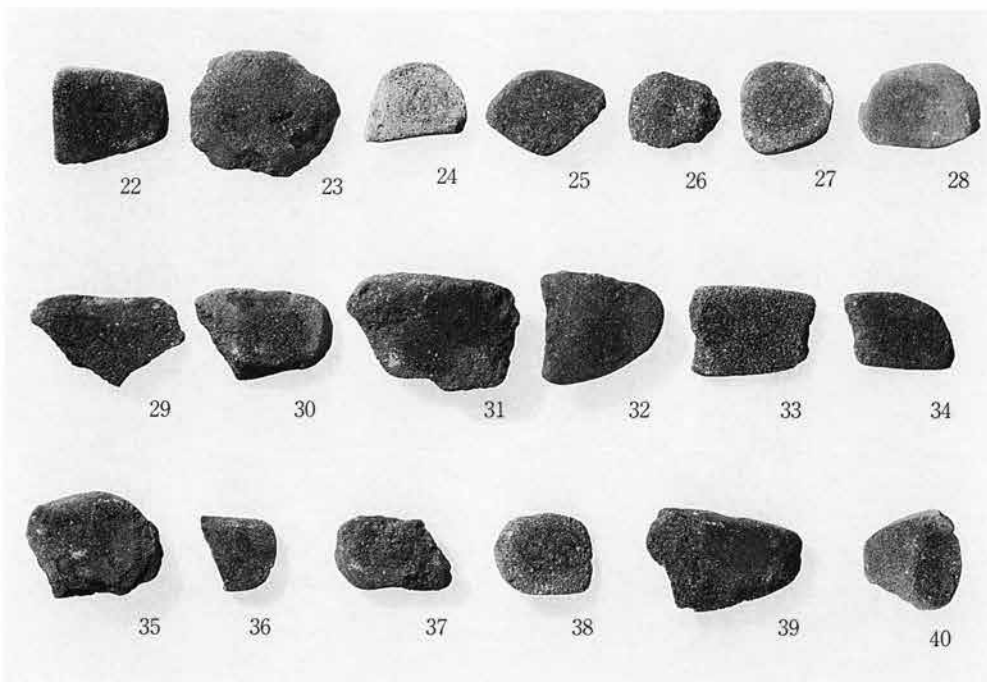
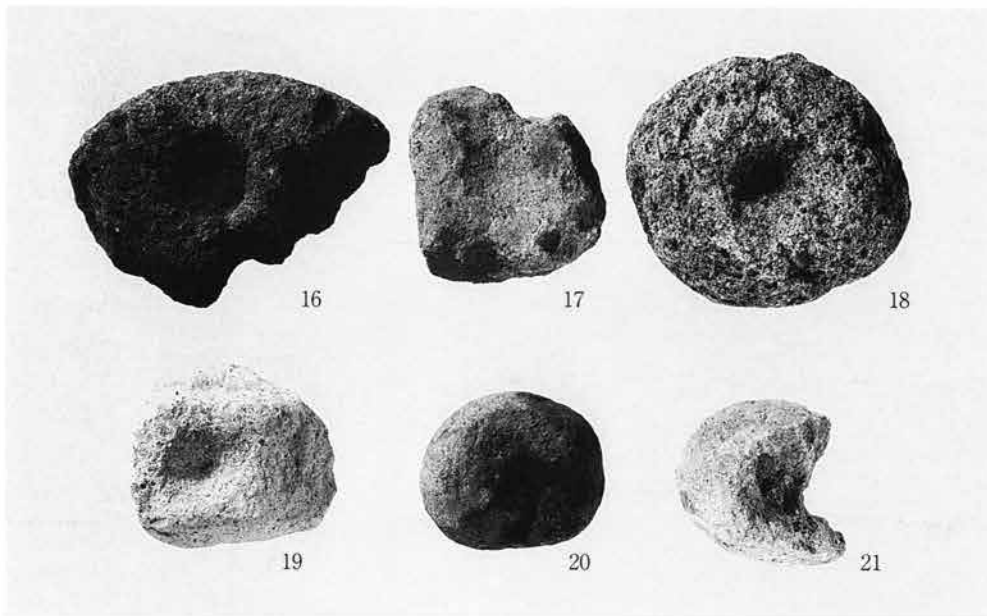
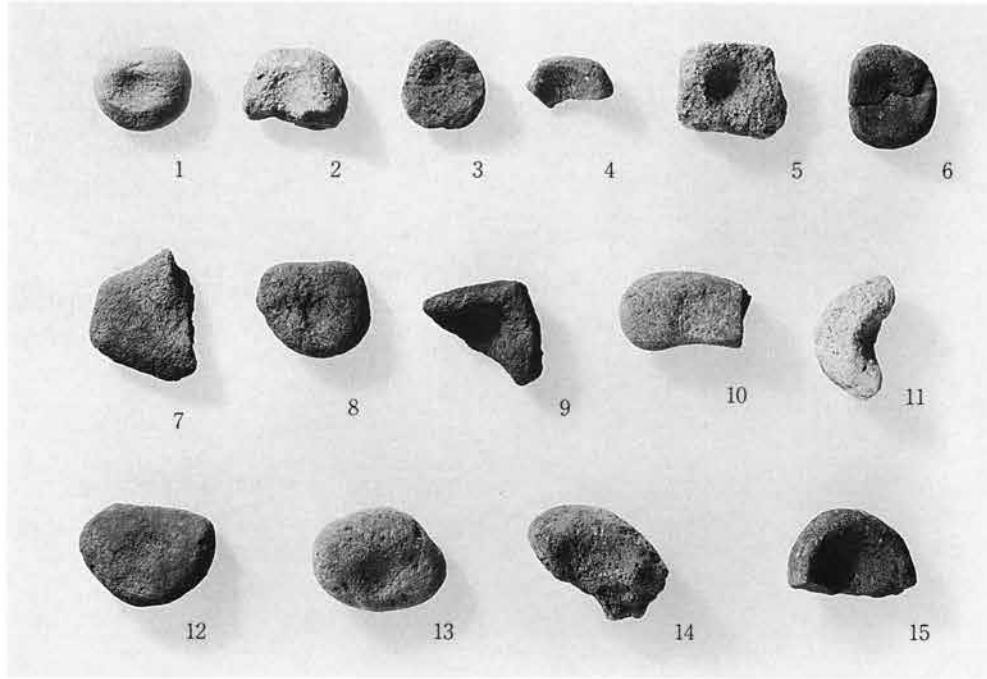
10

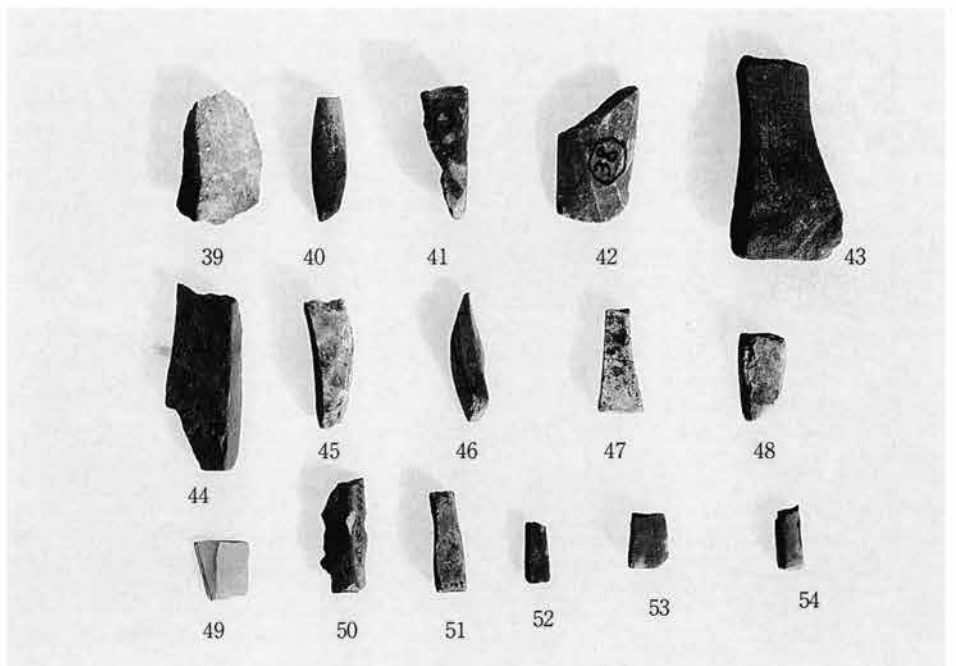
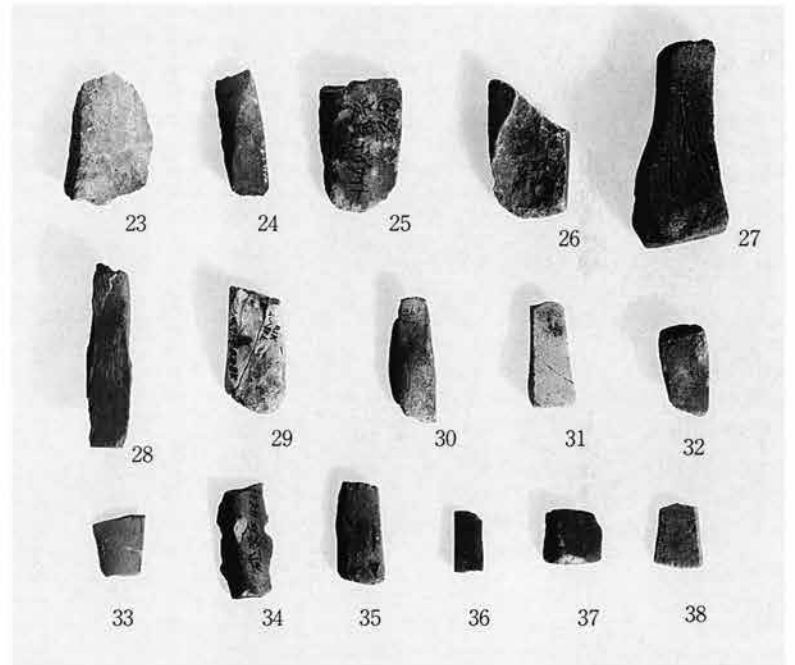
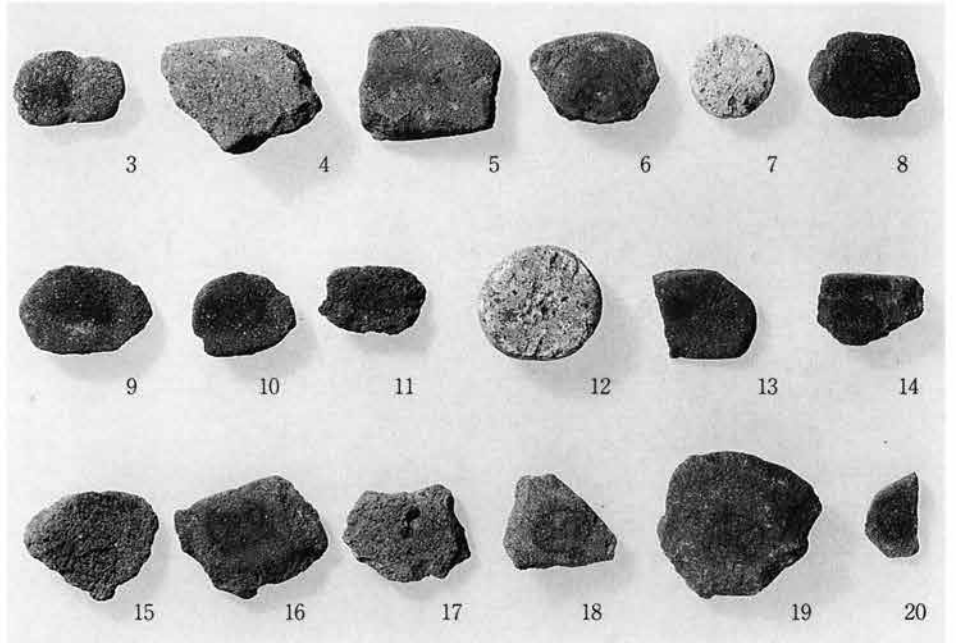
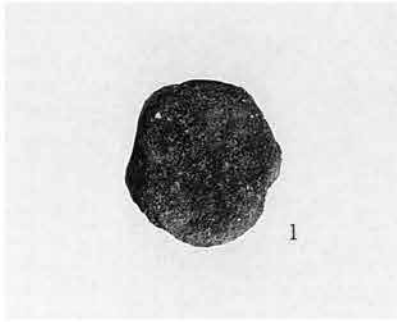


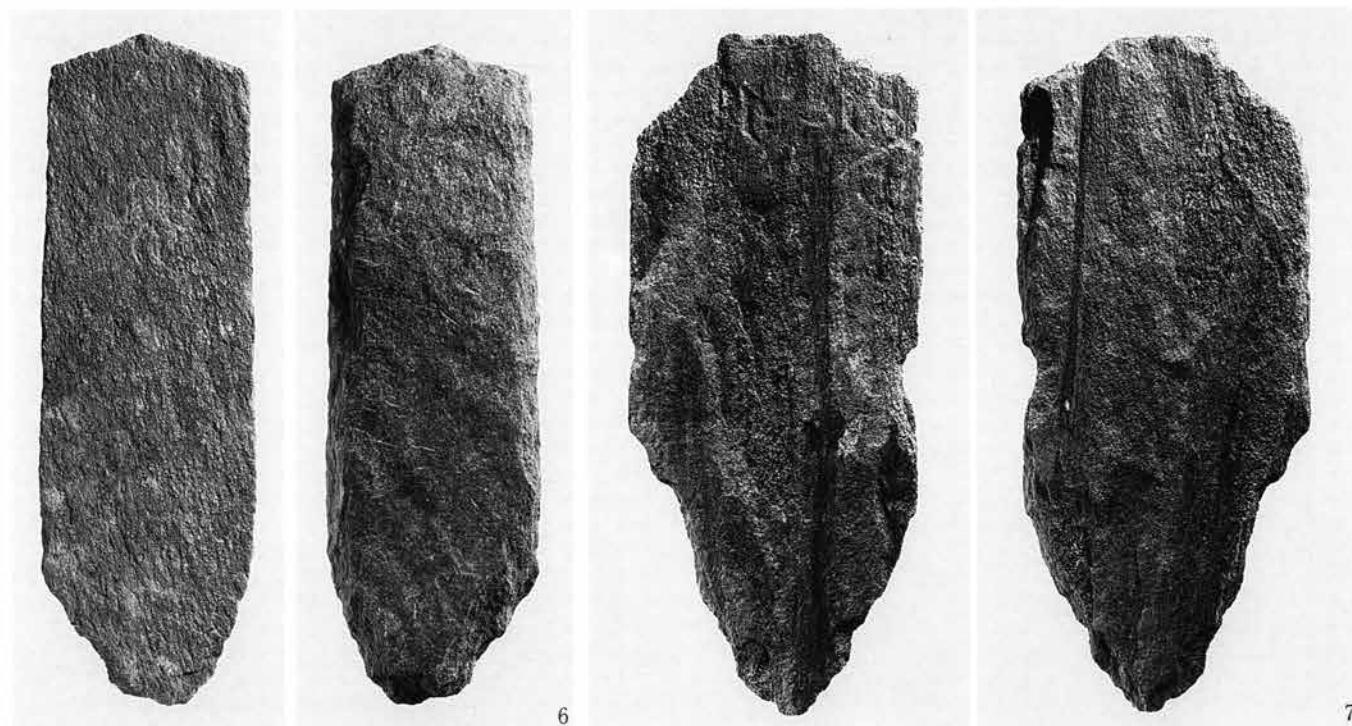
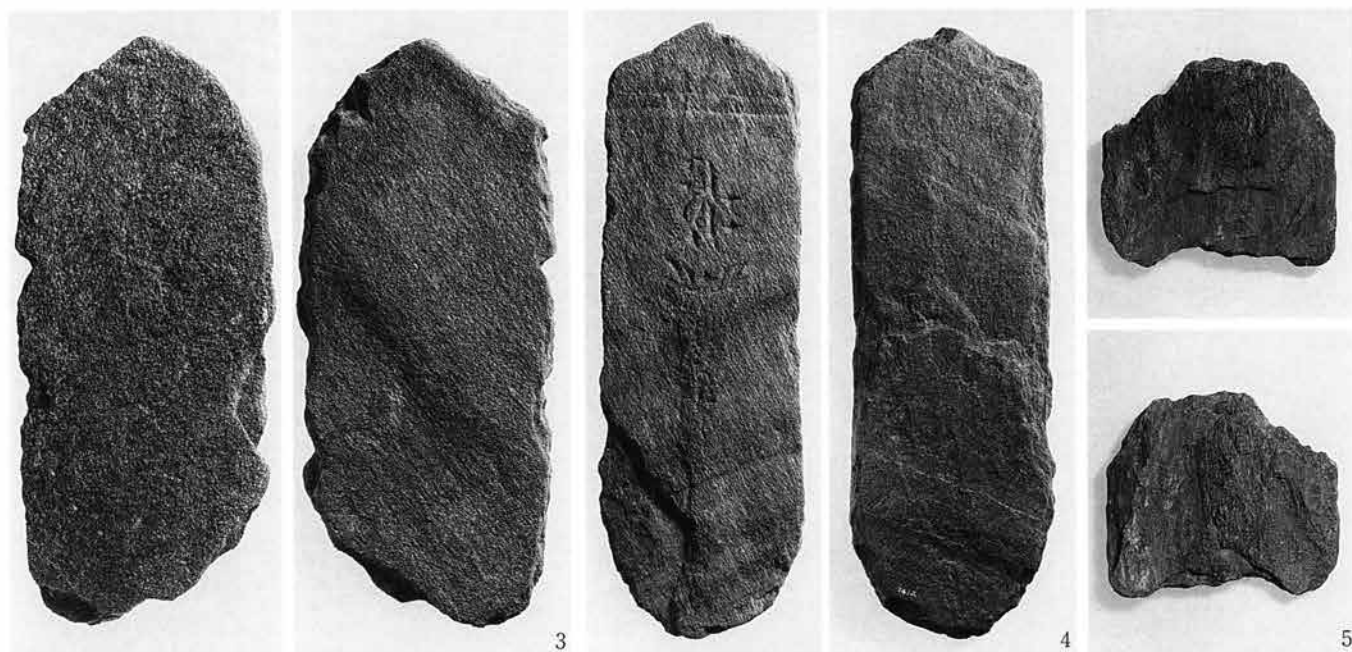
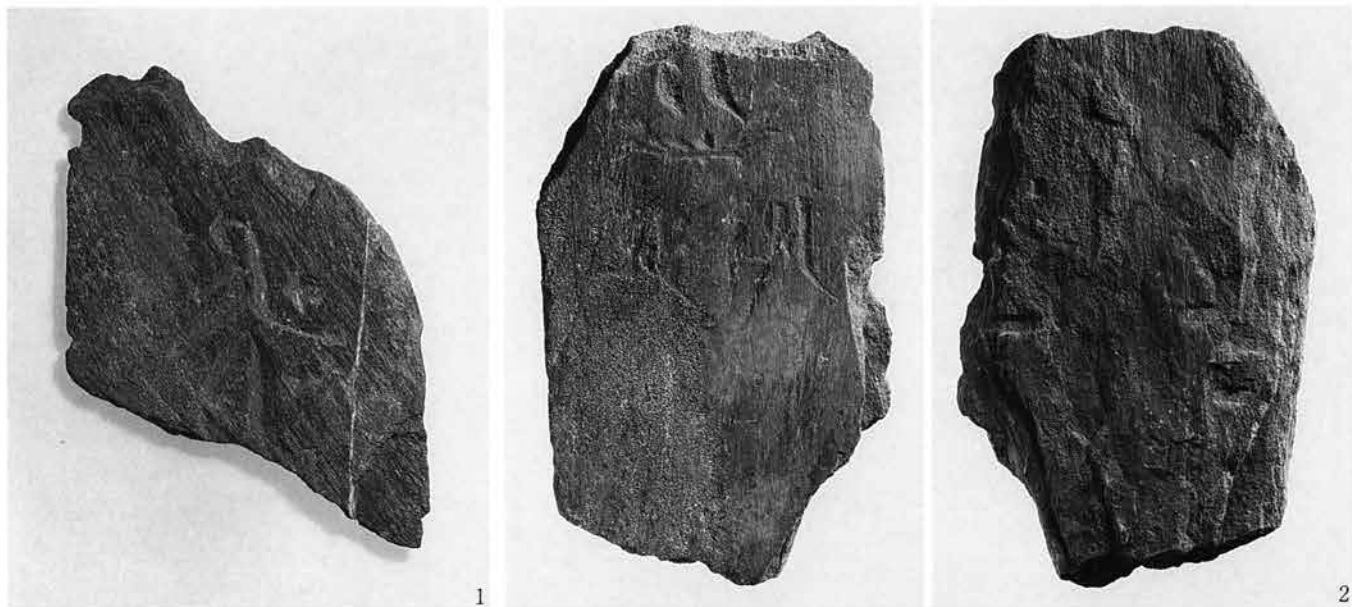
10

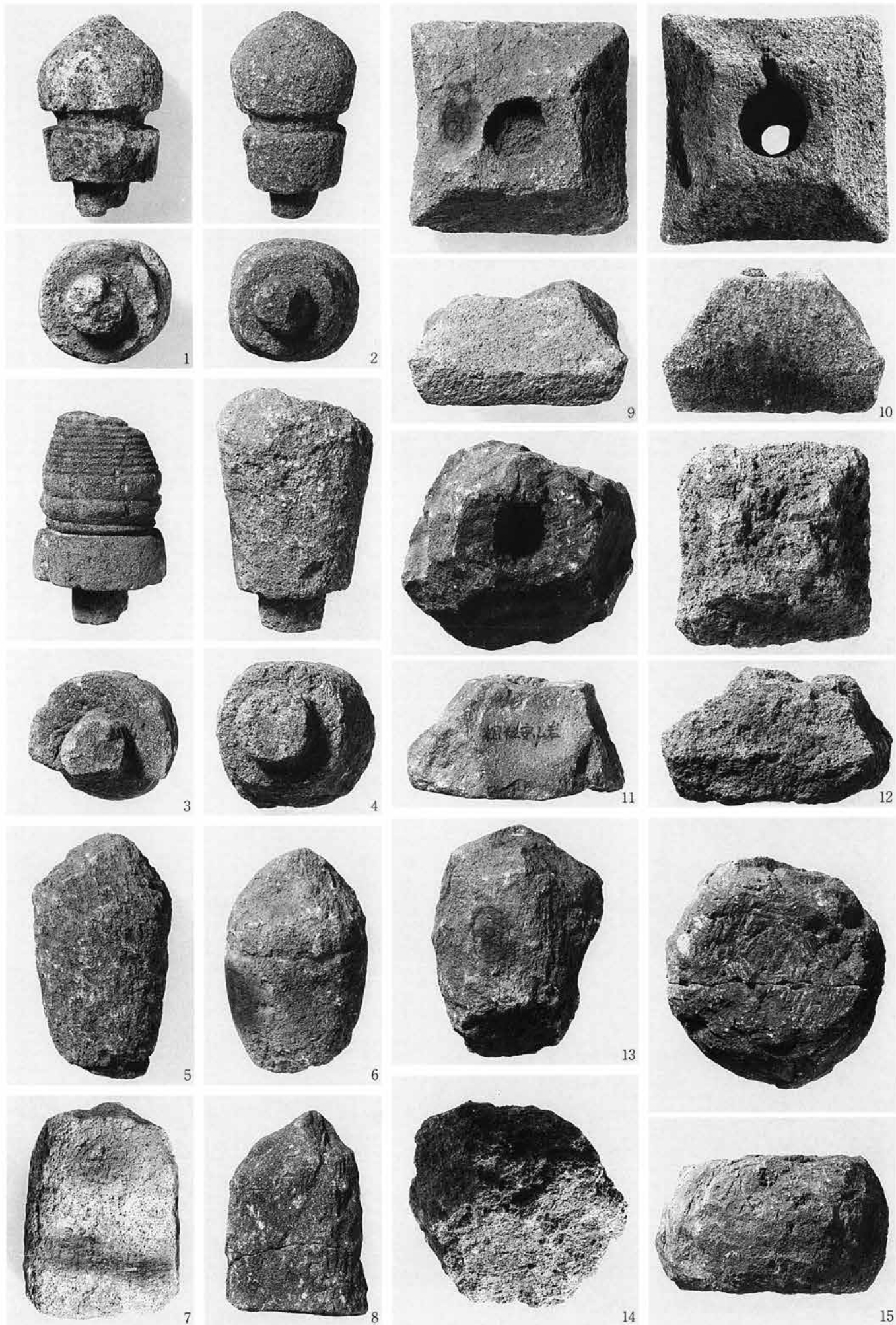
11

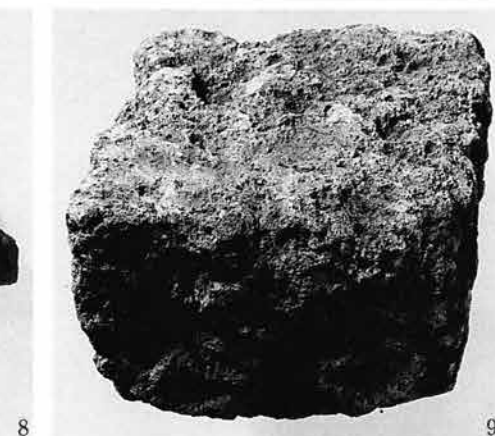
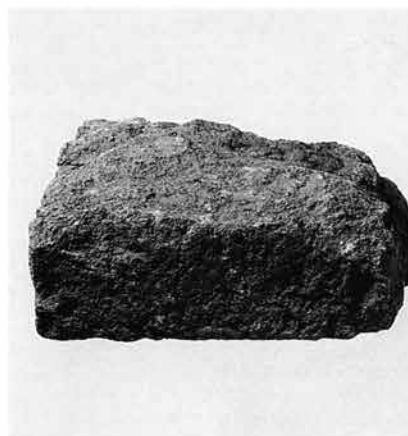
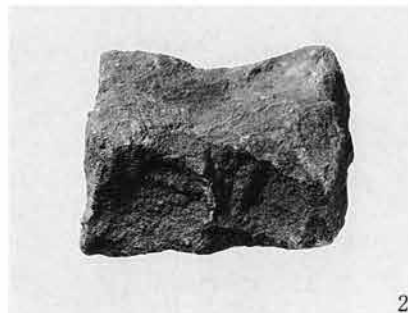


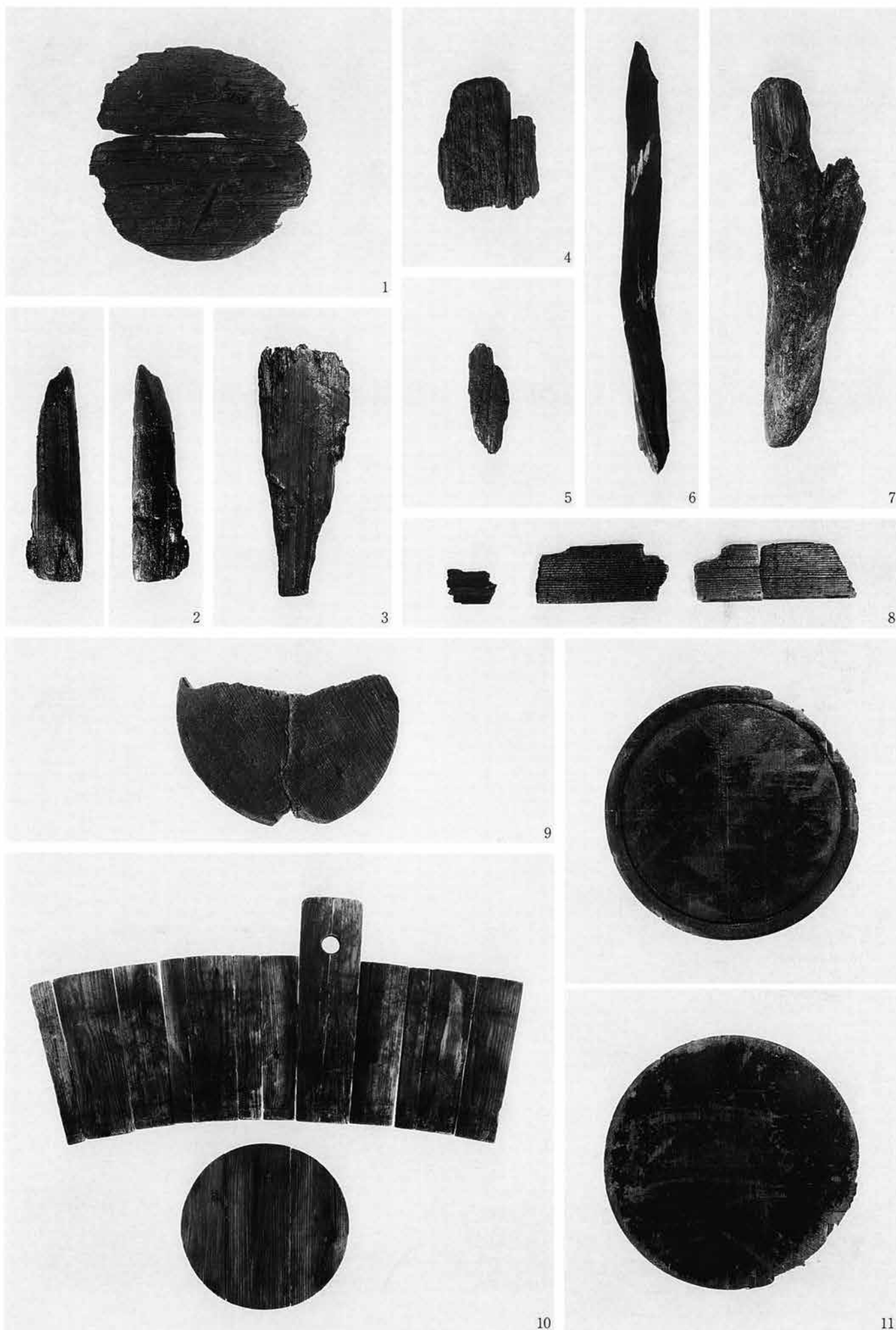


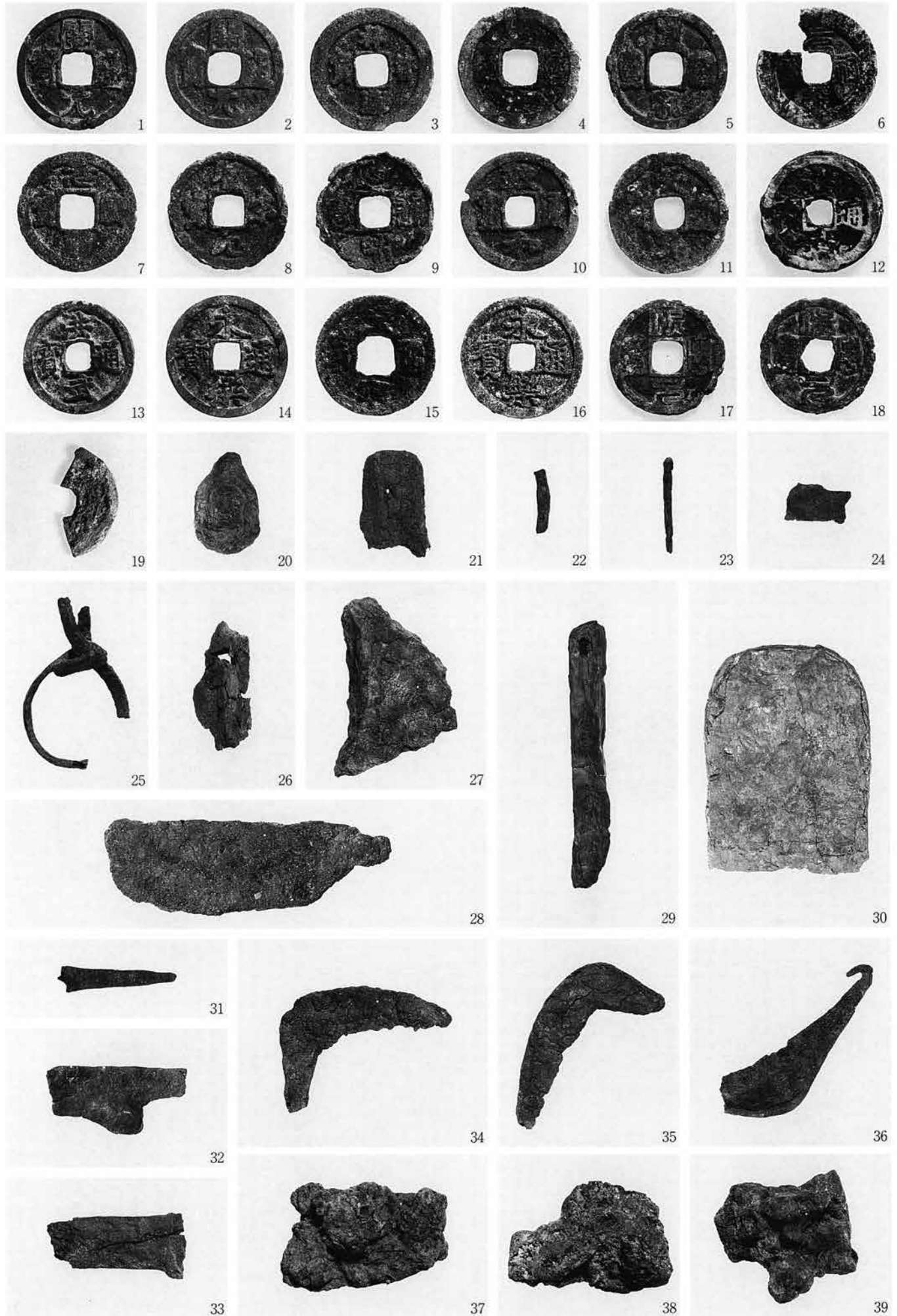














1



2



3



4



5



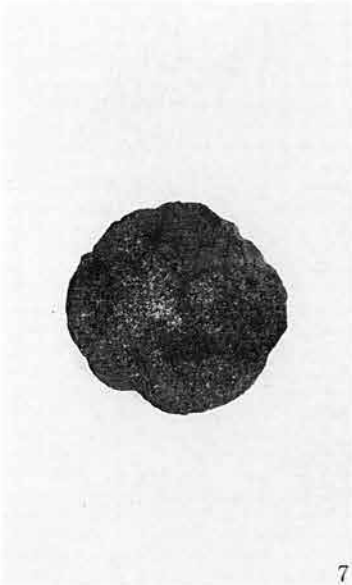
6

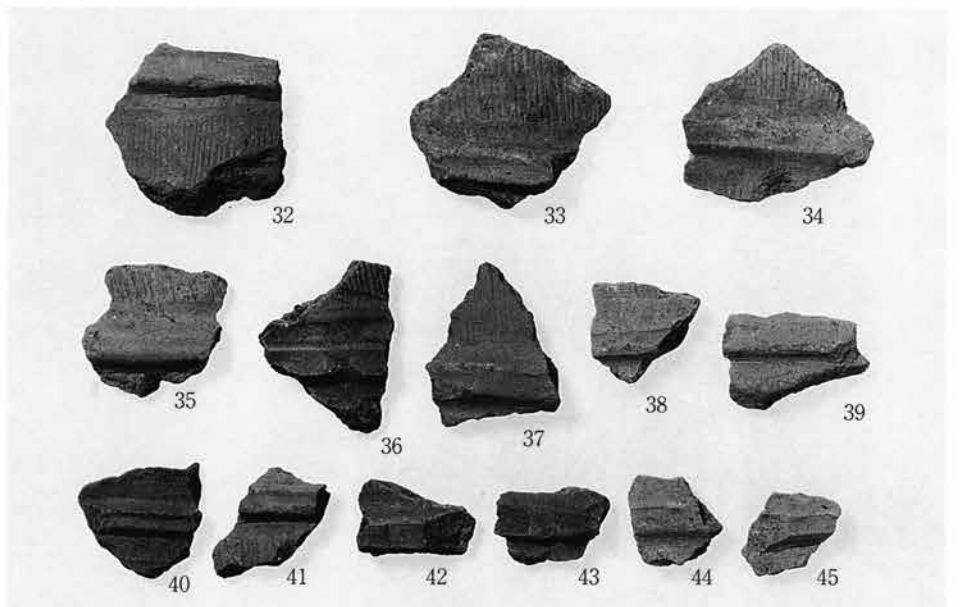
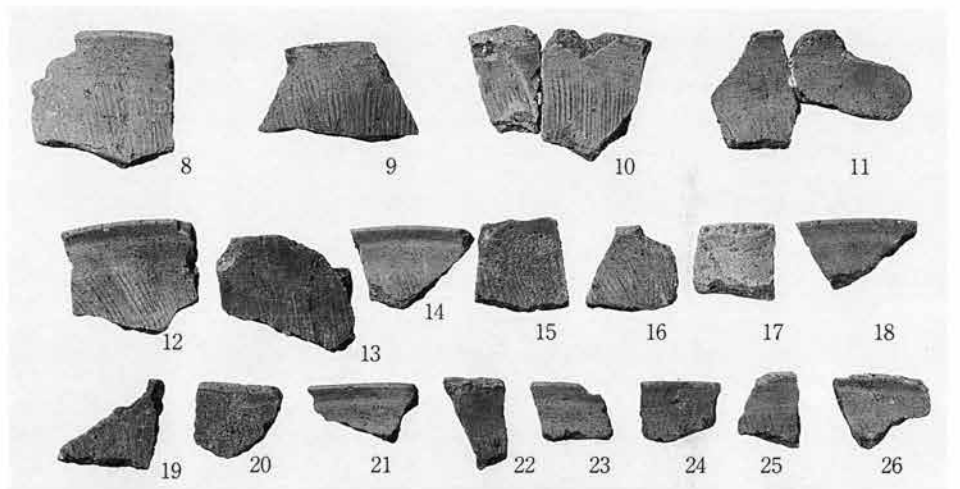
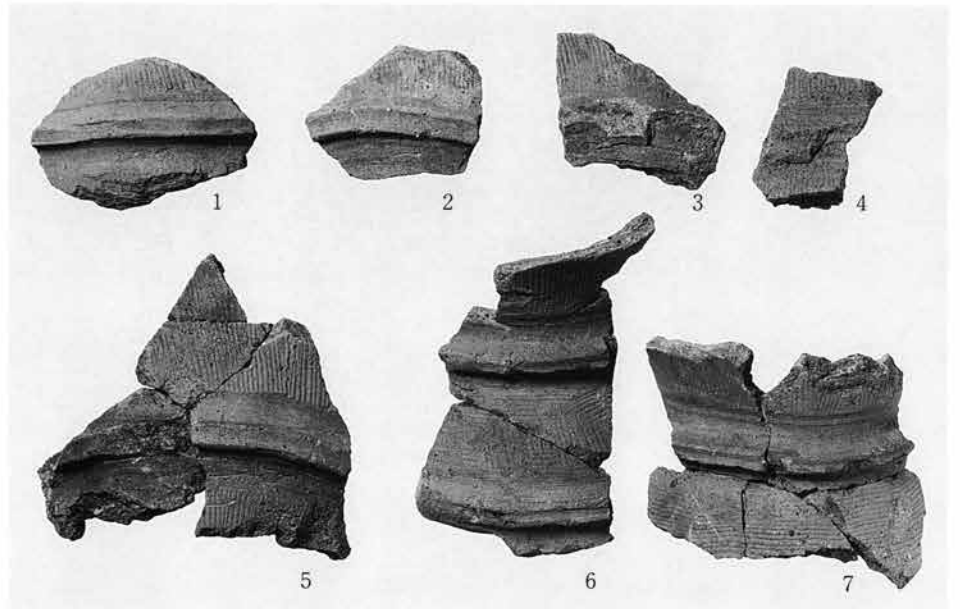


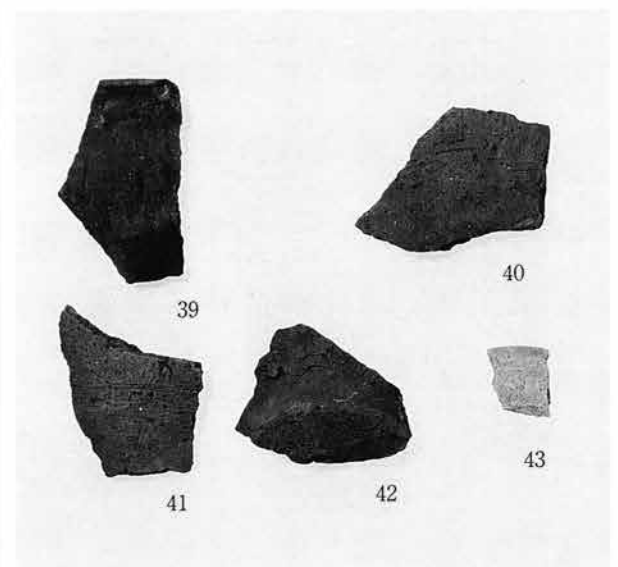
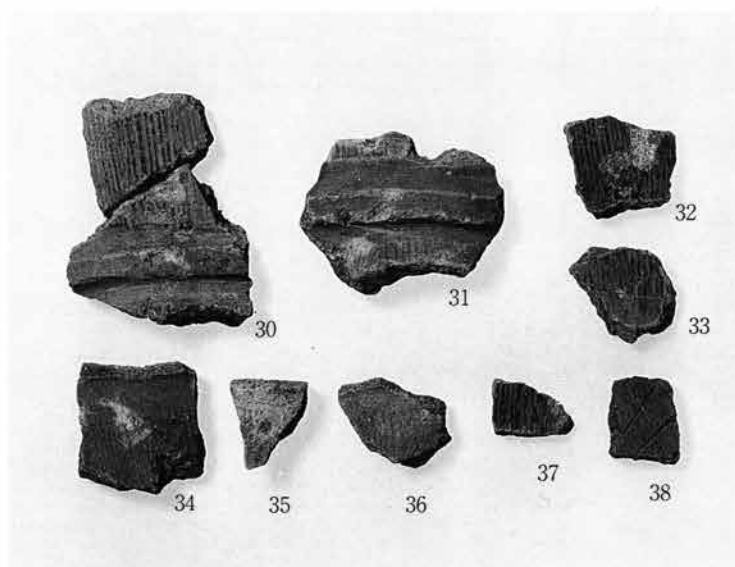
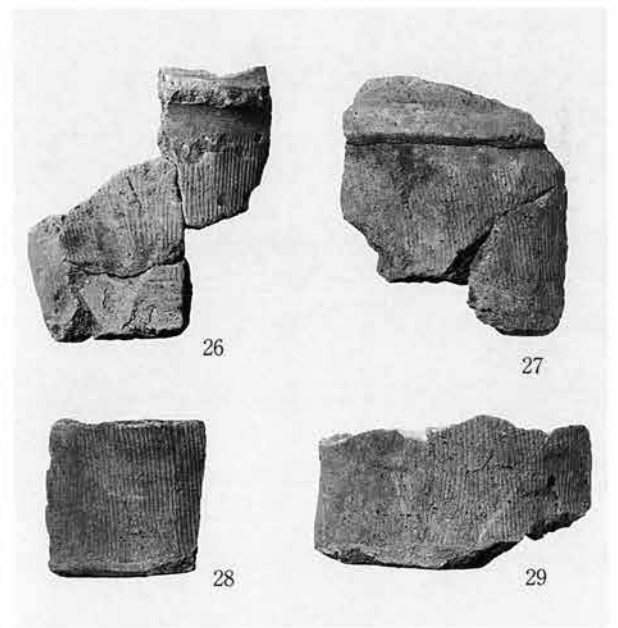
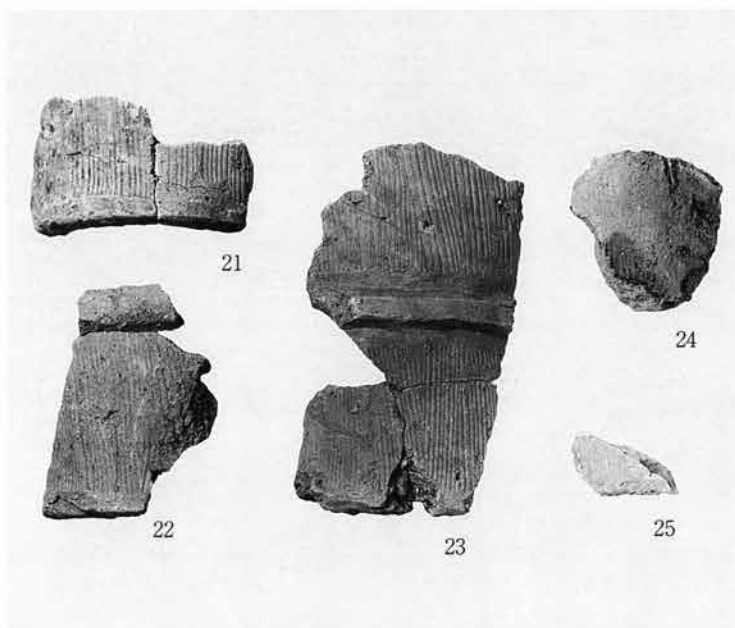
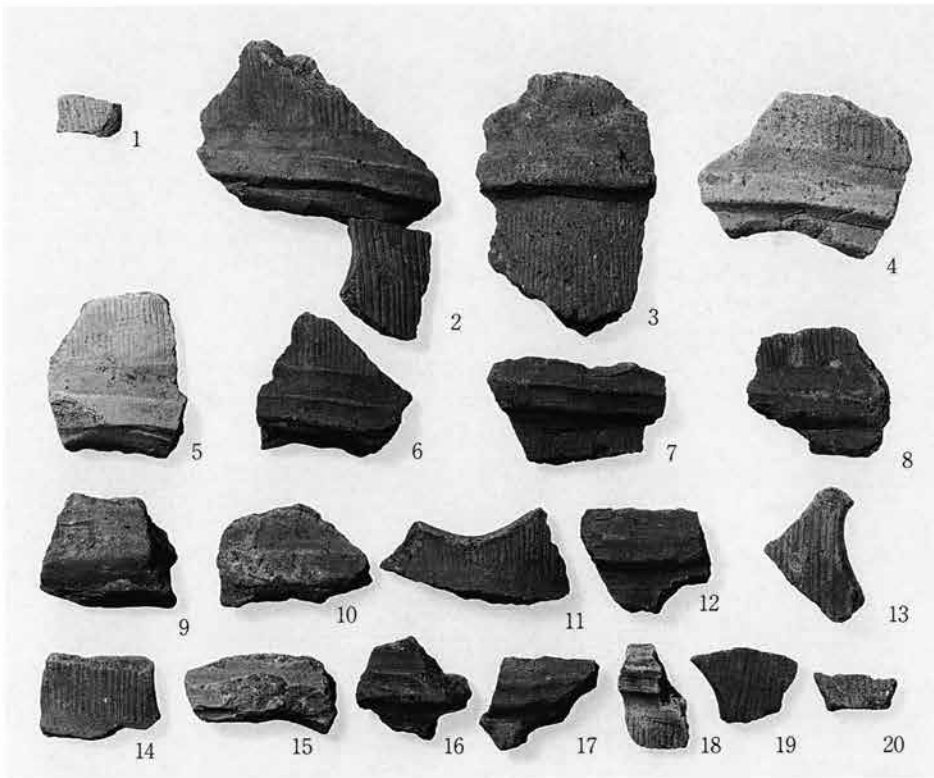
7



8









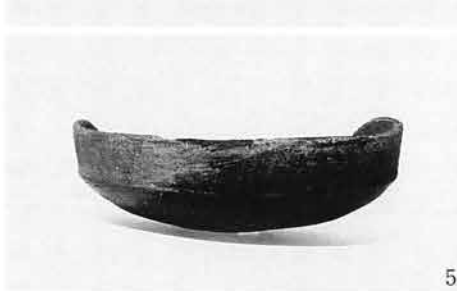
1

2

3



6



7



4

8

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告 第175集

小島田八日市遺跡 主要地方道藤岡大胡線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

平成6年3月15日 印刷
平成6年3月25日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局



A 3-008

A 3-006

A 3-004

A 3-003

A 3-001

A 3-109

A 3-106

A 3-102

A 3-212

A 3-209

A 3-205

A 3-314

A 3-312

A 3-311

A 3-308

A 2-016

A 2-014

A 2-010

A 2-112

A 2-110

0 1 : 200 20m

付図1 小島田八日市遺跡 北東・北西区全体図

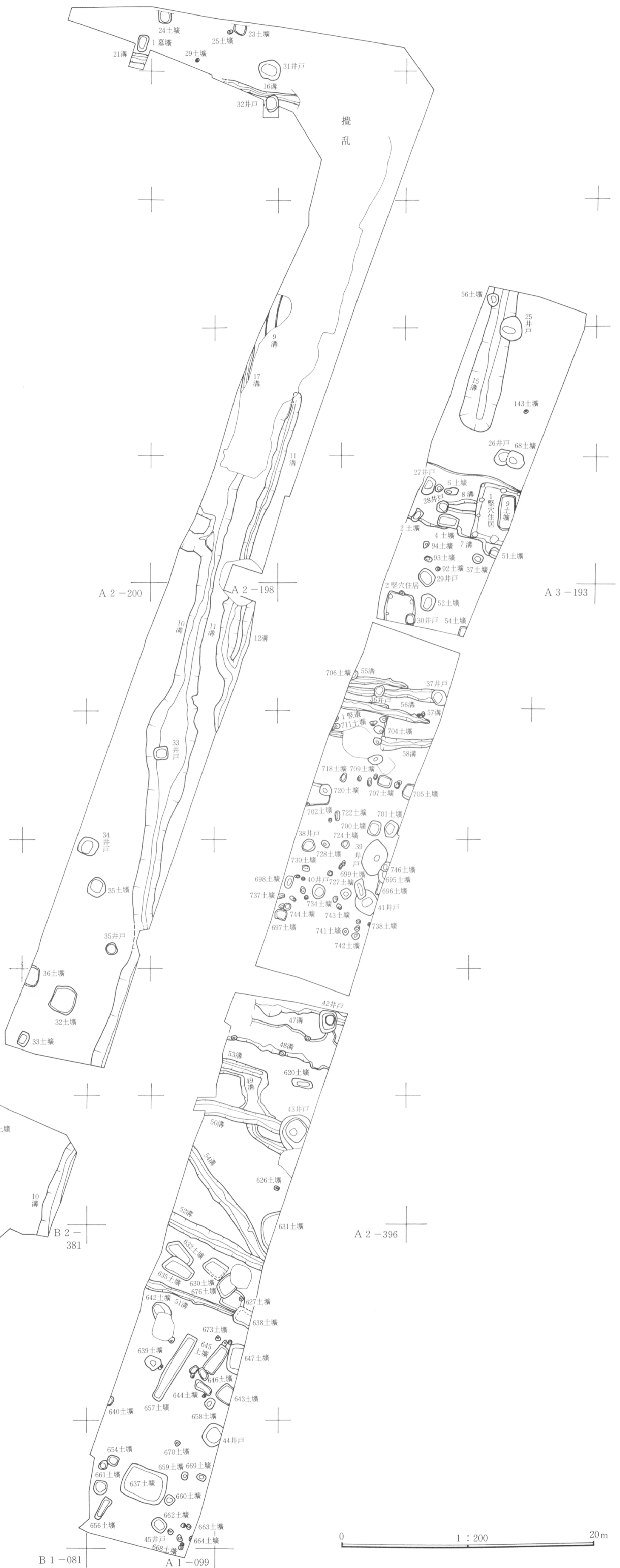


A 3-400

A 3-398

A 3-396

A 3-394



付図2 小島田八日市遺跡 南東・南西区全体図



東上野支群

女屋支群

小島田支群

1 : 5000

km

付図3 木瀬古墳群